



BL                    Tripitaka. Japanese. 1929  
1411                 Showa shinshu kokuyaku  
T8J3                 Daizokyo  
1929  
v.30

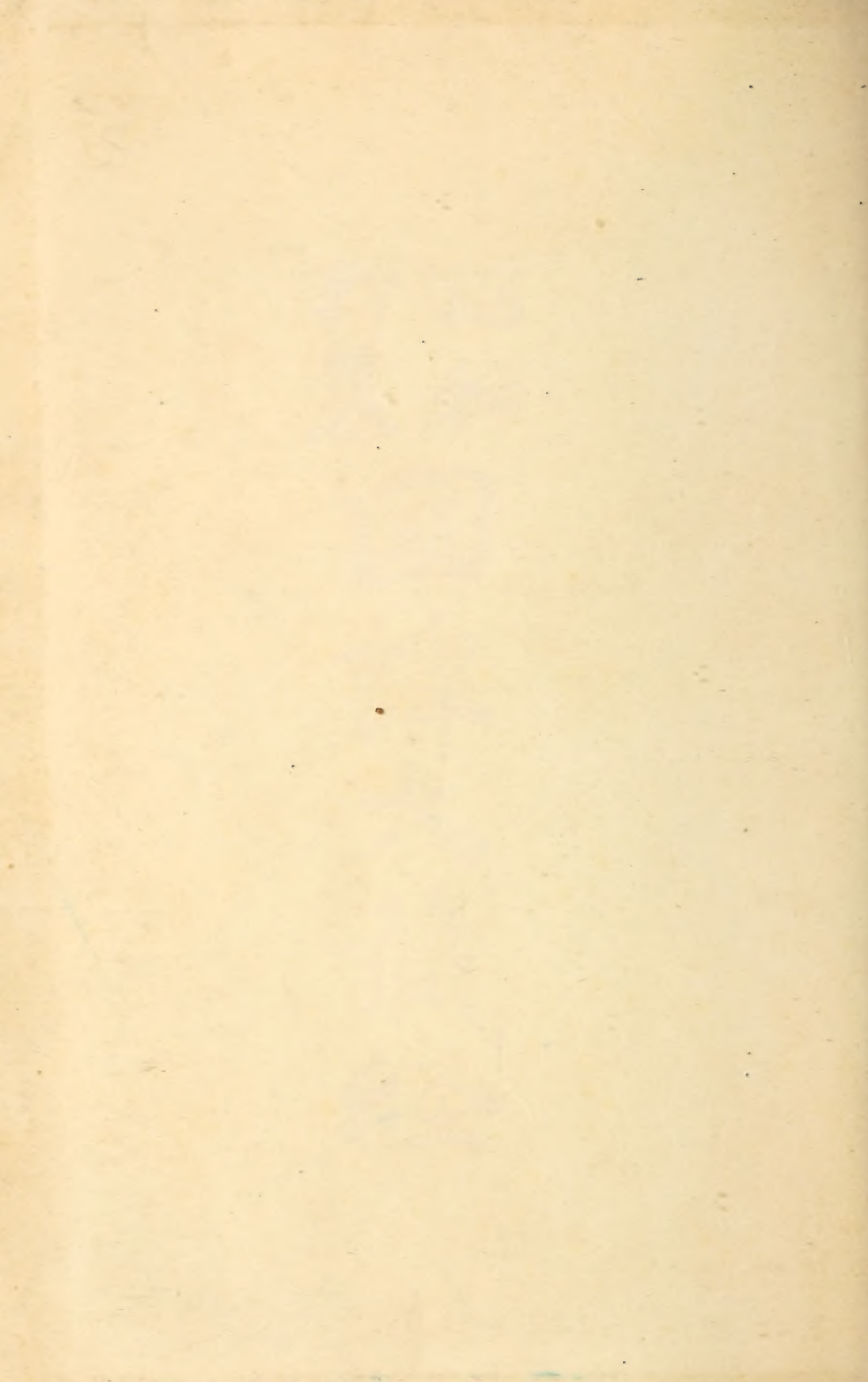
East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE  
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

---

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

---





昭和新  
和黨

國譯大藏經



臨濟宗聖典

宗典部
第六卷





臨  
濟  
錄



【馬防】宋末の人  
元略に参す。  
【黄雲云云】以下  
二句は臨濟の體に  
入るを明す。黄雲  
は臨州と黄州にあ  
り、之は漢州の黄  
雲。

【大愚の云云】以  
下二句は臨濟大悟  
して機用を呈する  
を示す。  
【鏡舌の云云】以  
下二句は其等大愚  
の錯謬密なるを  
叙す。老婆は黄藥  
屎床菓子は大愚を  
指す。屎床菓子と  
は床の上に小便す  
る小僧也と云ふ  
意。

【這箇問答の云云】  
以下二句は臨濟大  
機大用を呈するを  
示す。度類とは黄  
藥を指す。  
【鏡舌の云云】以下  
二句は黄藥屎床菓  
子と云ふ意を明す。  
打すは打つてを  
て指す。火鉢は火  
我這裏は一問二活  
埋すと云ふ。

【鏡舌の云云】以下  
二句は黄藥屎床菓  
子と云ふ意を明す。  
打すは打つてを  
て指す。火鉢は火  
我這裏は一問二活  
埋すと云ふ。

# 鎮州臨濟慧照禪師語錄序

延康殿の學士金紫光祿大夫眞定府路の安撫使  
兼馬步軍の都總管兼知成德軍の府事馬防撰す

黄藥山頭に、曾て痛棒に遇ひ、大愚の勅下に、方に築拳を解す。鏡舌の老婆、屎床の鬼子、這箇問答。再び虎鬚を拵づ。岩谷に松を栽う、後人の標榜、瓊瑣地を劃る。幾ど活埋せらる、箇の後生を背つて、藩口に自擱す、辭して几案を焚いて、舌頭を塞斷す。是れ河南にあらざんば、便ち河北に歸せん。陸舌渡に臨んで、往來を誹濟し、要津を把定して、壁立萬仞、毒人無地、仙踪を陶鑄し、三妻三妾、衲子を錯亂す。常に家舍に在つて、途中を離れず、無位の真人、面門より出入す。兩堂齊しく喝す、賓主歴然。照用同時、木前後なし。菱花像に對し、虚空聲を傳ふ。慧照無方にして、朕迹を留めず、大を拂つて南遊して、大名に斥止す。興化師承して、東堂に迎へ侍す。銅瓶鉢鉢、空を掲げ詞を吐づ。松老い雲間にして、曠然として自適す。面壁未だ幾たらざるに、密付前に懸へんとす。正法誰にか傳ふ、轉轉邊に滅す。圓覺の老演、分流通を爲す。點檢し自ら來ら、故に差舛なし。唯一喝を餘して、尙商量せんことを要す。具眼の禪流、素はく慧照して學することなかれ。宣和庚子中秋の日臘んで序す。



# 鎮州臨濟慧照禪師語錄

三聖に住する闍法小師慧然集す

此録は臨濟慧照禪師一代の機縁を弟子慧然の編集したるものにして禪師還化後二百五十四年北宋徽宗皇帝宣和二年に宗演重ねて刊行するに馬防之が序を製したるものなり。

【府主】 河南府の知事王氏、常侍は官なり、名は敬初、嵩山に嗣ぐ。

【綱宗】 佛法の大意、一千七百則の公案、今は上堂呈綱、索話など。

【作家】 宗門にては法戦場の第一人、作は作興、門風を興起する人。

【這箇】 これは此に同じ、箇は助字。

【持論】 對論。

【曲】 世上の曲調にあらず、宗門の那一曲。

【座主】 衆衆の法師なり。

【荒草】 荒草は無明、當體直指。

【一大事】 禪にて

府主王常侍、諸官と師を請じて陞座せしむ。師、上堂云はく、山僧今日事已むことを變ず、曲げて人情に順つて、方に此座に登る。若し祖宗門下に約して大事を稱揚せば、直に是れ開口不得、僧が足を指く處無けん。山僧此日、常侍の堅く請するを以て、即そ綱宗を隠さん。還つて作家の戰勝、直下に陣を展べ、旗を開くこと有りや、衆に對して證據せよ、看ん、僧問ふ、「如何なるか是れ佛法の大意」、師便ち喝す、僧禮拜す。師云はく、「這箇の師僧却つて持論するに堪へたり」、問ふ、「何誰が家の曲をか唱へ、宗風阿誰にか唱へ」、師云はく、「我費費の處に在つて、三度問を發して、三度打たる一僧疑議す、師便ち喝して、後に隨つて打して云はく、「虚空裡に向つて釘概し去るべからず」、虚空あり、問ふ、「三乘十二分教、豈是れ佛性を明すにあらずや」、師云はく、「荒草曾て翳かす」、主云はく、「佛豈人を賺さんや」、師云はく、「佛性處の處に在る」、主無言、師云はく、「常侍の前に對して、老僧を騙せん」と稱す、連退連還、他の別人の請問を妨ぐ、復云はく、「此日法筵、一大事の爲の故なり、更に問話の者ありや、遠かに問を致し來り、備獲に口を開かば、早く勿交法、也何を以てか此の如くなる、見ずや、釋尊云はく、「法は文字を離れて、因にも觸せず、縁に

【勿文流】 不待要

【法は文を離れ】 大長門云ふ。

【久し】 御苦勞

【又は陪】 分御事高の意。

【第一世は】 馬祖に

【赤肉】 赤肉陀

【乾利陀】 耶、家言といふ

【托用】 入糞を

【無用】 無用の義

【兩堂】 前堂

【後堂】 後堂

【一類】 一次なり

も罵せざるが故なり一節が信不及なるが爲の所以に、今日尊嚴す。恐らくは常侍と諸官員とを濫して、他の律儀を學すことを、何かず且く退かんには、嗚一喝して云はく、少信根の人、終に了日無けん、久立珍重。

師因に一日河府に到る。府主王常侍、經を請じて毘座せしむ。時に麻谷出でて問ふ、大悲千手眼、那箇が是れ正眼、師云はく、大悲千手眼、那箇が是れ正眼、速かに道へ速かに道へ、麻谷、師を携いて座を下らしめて、麻谷却つて坐す。何近前して云はく、不審、麻谷、擬請す。師も亦麻谷を携いて座を下らしめて、却つて坐す。麻谷便ち出で去る。師便ち下座す。

上堂云はく、赤肉團上に一氣位の人あり、常に汝等諸人の高門より出入す、未だ證據せざる者は看よ看よ、時に傍あり出でて問ふ、如何なるは是れ無位の真人、師、師床を下つて把住して云はく、道へ道へ、其旨擬請す。師托附して云はく、無位の真人、是れ什麼の乾屎糞ぞ、といつて、便ち方丈に歸る。

上堂、情あり、出でて禮拜す。師便ち喝す。僧云はく、老和尚探頭なることを羨くんば好し。師云はく、何道へ、計量の處に落在す。僧便ち喝す。又僧有り問ふ、如何なるか是れ佛法の大意、師便ち喝す、僧擬請す。師云はく、佛道へ、好喝なりや也無や。僧云はく、草賊大敗、師云はく、過什麼の處に在る。僧云はく、再犯容さす。師便ち喝す。是日兩堂首座相見、同時に喝を下す。僧、師に問ふ、還つて賓主ありや、也無や。師云はく、

く、一箇は第一劍なり、一箇は見解會を裁斷す」と。

【石室行著】石室善道和尙、青原行思の三世曹昌の沙汰に遭ひて、後更に復僧とならず。

【深泉に没溺】臨濟は墮せり」と。

【來者】四方より來る參禪の學者を云ふ。

【與麼】會して來しばの意。

【無來見】上座下座にては、二つ俱にこる。

【斬】是非の義向背なし。十字街頭には前後向背なく、平等なり。

【箇】一人と云ふに付いていふ。【無摩訶云云】維摩は佛在世なれば、傳大士は梁の武帝の時なれば後人なり。【動を論じ】堅固不動の義に取る。劫は梵語劫波、譯

「賓主歷然。」師云はく、「大衆、臨濟が賓主の句を會せんとせば、堂中の二首座に問取せよ。」といつて便ち下座す。

上堂、僧問ふ、「如何なるか是れ佛法の大意。」師拂子を堅起す、僧便ち喝す。師便ち打す。又僧問ふ、「如何なるか是れ佛法の大意。」師本拂子を堅起す、僧便ち喝す、師亦喝す、僧擬議す。師便ち打す、師乃ち云はく、「大衆、夫れ法の爲にする者は喪身失命を避けず、我二十年、黃髮先師の處に在つて、三度佛法の大意を問うて、三度他の杖を賜ふことを蒙る。蒿枝の拂著するが如くに類似たり。如今更に一頓の棒を得て喫せんことを思ふ、誰人か我爲に行じ得ん。」時に僧あり、衆を出でて云はく、「某甲行じ得ん。」師、棒を拈じて他に與ふ。其僧拈せんと擬す。師便ち打す。

上堂、僧問ふ、「如何なるか是れ佛法上の事。」師云はく、「無事禍事。」僧擬議す、師便ち打す。問ふ、「石室行著の確を踏んで、脚を移すことを忘却するが如きんば、什麼の處に向つてか去らん。」師云はく、「深泉に没溺す。」僧乃ち云はく、「但來者あれば伊を罵欠せず、總に伊が來處を罵る。若し與麼に來れば、情も失却するに似たり、下與麼に來れば、無繩自縛。」一時中觀りに斟酌すること莫れ、會と不會と、都天是れ錯。分明に與麼に道ふ、天下の人の正法するに一任す。久立珍重。

上堂云はく、「一人は孤峯頂上に在つて、出身の跡無く、一人は十字街頭に在つて亦向背なし、那箇か前に在り、那箇か後へにある。維摩詰と作さざれ、傳大士と作さざれ。珍

重。

重。

重。

重。

して分別、時第一  
【途中云云】 途中  
は世尊、家合は佛  
法、通一切なり  
途中家合手裏にし  
て一つなり。

【家合云云】 佛法  
世法共に塵却し、  
掃蕩せりと。

【那箇云云】 那箇  
とは一人一人に付  
いて云ふ、葛直に  
爲入處なり。

【第一句】 掃蕩門  
なり、此上堂は臨  
濟の三句と云ふ。

【三要印問】 三要  
の問とは、凡そ捺  
印は三つ重ねてつ  
くなり、之を三要  
の印といふ。

【朱點問つ】 朱點  
は用立たぬなり  
點畫があらはれた  
るなり。

【無利】 此に方便  
と云ふ。

【佛流の】 衆流  
【負】 向上の  
【捕す】 絲を行け

重なり

上堂云はく、「一人あり、劫を論じて途中に在つて家合を離れ、一人あり、家合を離れ  
て途中に在らず。那箇か人天の供養を受くべき」といつて便ち下座す。

上堂、僧問、「如何なるか是れ第一句、師曰はく、「三要印問して朱點問つ、未だ議論を  
容れざるに三賓分の二問六、如何なるか是れ第二句、師云はく、「妙解豈無者の問を容れ  
んや、渾和爭か葛流の債を負はん」と問ふ、如何なるか是れ第三句、師云はく、「棚頭に傀儡  
を弄することを看取せよ、抽率都來裏に人あり、師又云はく、「一句語に須らく三玄門を具  
すべし。一玄門に須らく三要を具すべし」と權あり用あり、汝等諸人作麼生か會せん」とい  
つて下座す。

師、晩參衆に示して云はく、「有る時は奪人不奪境、有る時は奪境不奪人、有る時は人境  
俱奪、有る時は人境俱不奪」と時に僧有り問、「如何なるか是れ奪人不奪境、師云はく、「照  
日發生して地に舖く錦、櫻桃髪を垂れて白きこと絲の如し、僧云はく、「如何なるか是れ奪  
境不奪人、師云はく、「王令はに行はれて天下に覆し、將軍塞外に煙をたふす」と問ふ、師云はく、「  
如何なるか是れ人境俱奪、師云はく、「並汚絶信、獨處一方、僧云はく、「如何なるか  
是れ人境俱不奪、師云はく、「王、寶殿に登れば野老無言す、師乃ち云はく、「今時佛法を擧  
する者は、且く眞正の見解を求めんことを要す、若し眞正の見解を得ば、生死に染まらず、  
去住自由なり、殊勝を求むることを要せされども、殊勝自ら來る、道流祇古よりの先







【名言】 名身なり  
名ばかりと云ふ  
どの意。

【古人】 護法菩薩  
及び慈恩法師等を  
指す。

【光影を云ふ】 無  
位の真人即道人な  
り。

【道流歸舍】 一切  
處は細には色相等  
色には山河等を指  
す、これ道流が教  
身命の處。

【歷歷底云云】 分  
明なり、此は人人  
の本性を指す、狐  
明とは之には心を  
指していふ。故に  
説法藥法を解す。

【一精問云云】 一  
精明は本分、六和  
合は六根を云ふ。

【機境】 機は内、  
境は外なり。

【有方人】 有方人  
を把握して階下に  
安在するの謂なり。

【寄作兒】 下賤の  
もの。

【無用】 無用の  
つなぐ杖、無用の  
長物の義。

と。大徳時光惜むべし、祇傍家波波地に、禪を學し道を學し、名を認め句を認め、佛を求め、祖を求め、善知識を求めんと擬して意度す、錯ること莫れ。道流、備祇一箇の父母あり、更に何物をか求めん、爾自ら返照して看よ。古人云はく、「演若達多頭を失却す、求心歇む處、即ち無事」と。大徳日く平常ならんことを要せば、模倣を作すこと莫れ、一般の好悪を識らざる禿奴有つて、便即神を見鬼を見、東を指し西を劃し、嚙を好み雨を好む。是の如きの流、盡く須らく債を抵して、閻老の前に向つて鐵丸を呑む日あるべし。好人家の男女、這一箇の野狐の精魅の所著を被つて、即便捏怪す。瞎屢生、飯錢を索るる日有ること存らん。」

師、衆に示して云はく、「道流切に眞正の見解を求取して天下に向つて積行して、這一般の精魅に惑亂せらるることを免れんことを要す。無事並に貴人、但造作すること莫れ、祇是れ平常なり。備外に向つて傍家に求通して、両手を管さんと爲す、指り了れり。祇佛を求めんと擬す、佛は是れ名句なり、備流つて馳求する能を離るや。世に於て佛祖出で來り、世法を求めんが爲なり、自今の參學の道流も、也世法を求めんが爲なり。法を得て始めて了す、未だ得ざれば、依前として五道に輪廻す。云何なるか是れ法、法といつて是れ心法、心法形無うして十方に通貫す、目前に現用す。人信不疑にして、便乃名を認め句を認め、文字の中に向つて佛法を意度せんことを求む。天地懸に殊なり、道流山僧が世法、什麼の法をか爲く、心地の法を爲く、便ち能く凡に入り、墮に入り、淨に入り、穢に



【捏怪】 妖怪を造作す。

【諸屢生】 屢は婁に作るべし、愚なり、邪弟子をさす。

【傍家云々】 傍家は他家、求道は走過、脚手は手段。

【差求する處】 修行すといふが如し。

【備】 無依の道人を指す。

【山僧】 師の自稱。

【外凡客を云々】 心外無相なるが故に内も亦不可得なり。大徹大悟して眞實にして臥なきが故に不覺也。

【古人】 南岳の明瑣。

【處處に主】 頭頂の物、他物に準ず境に轉せしめ義。

【立處】 緣起の諸法なり。

【習氣五無間】 習氣は微細の煩惱なり、無間は覺悟阿鼻、第八の地獄なり。此一段は無功用底の業報、即ち大解脱なるを示す。

【習氣五無間】 習氣は微細の煩惱なり、無間は覺悟阿鼻、第八の地獄なり。此一段は無功用底の業報、即ち大解脱なるを示す。

紙如今一箇の佛魔あり、同體にして分たす。水乳の合するが如し。鷄王は乳を喫す、明眼の道流の如きんば、魔佛俱に打す、倘若し聖を愛し凡を憎まば、生死海裏に浮沈せん。問ふ、如何なるか是れ佛魔、師云はく、一佛一念心の疑處是れ箇の魔。倘若し萬法無生に注得せば、心、幻化の如くにして更に一塵一法無うして、處處清淨なる是れ佛。然も佛と魔とは是れ染淨の二境なり。山僧が見處に約せば、無佛無業生、無古無今、得る者は便ち得、時節を歴す、無修無證、無得無失、一切時中更に別法無し。設ひ一法の此に過ぎたる者有るも、我は説かん如夢如化と。山僧の所説皆是なり。道流即今、目前孤明歷歷地に聽く者、此人處處潛らす。十方に通貫し三界に自在なり。一切境の差別あるに、入れども回換すること能はず。一刹那の間に法界に透入して、佛に逢うては佛を説き、祖に逢うては祖を説き、羅漢に逢うては羅漢を説き、餓鬼に逢うては餓鬼を説く。一切處に向つて國土に游履して衆生を教化すれども、未だ曾て一念を離れず。處處清淨にして光十方に透つて萬法一如なり。道流大丈夫兒は今日方に知る、本來無事なることを。祇佛が信不及なるが爲に、念念馳求して、頭を擡てて頭を覓む、自ら歌むこと能はず、回頭の菩薩の如きんば、法界に入つて身を現じ、淨土の中に向つて凡を厭ひ聖を忻ふ。此の如きの流、取捨未だ忘ぜず、染淨の心在り、禪宗の見解の如きんば、又且つ然らず、直に是れ現今なり。更に時節なし。山僧が説く處は皆是れ一期の藥病相治す、總に實法無し。若し是の如く見得せば是れ眞の出家、日に萬兩の黄金を消せん。道流取次に諸方の老師に面門を印破せら

【總に】法に正法  
 萬法等あり  
 故に總にと云ふ。  
 【佛土】淨土  
 にては物を辨せず  
 鼻に觸るれば即ち  
 之を食す。

【佛土】 明眼の漢  
 【染淨二境】 差別  
 の境、廣く染境、  
 佛は淨境、  
 【得る者は得】 一  
 超直入如來地の意  
 根本のしには得べ  
 き法もなく感べき  
 時節もなくし。

【一馬中】 趙州  
 の十二時を便ひ習  
 たりと云ふ意。  
 【一法云云】 此  
 とは無修無證など  
 の本分をさす。由  
 僧所說皆是の皆是  
 の二字は總結。自

【孤明孤覺】 自  
 在十方に遍照す  
 摩羅地に蔽くもの  
 とは無始以來倒閉  
 の機なきが故に滯  
 らずして通貫す。

【大丈夫兒】 丈夫  
 は佛子號の一なり

れて、我神を解し道を解すと道ふこと莫れ。辯應河に似たるも皆是れ遺地獄の業、若し是れ眞正の學道人ならば、世間の過を求めず、切急に眞正の見解を求めんことを要す。若し眞正の見解に達せば、圓明にして方に始めて了畢せん。

問云、如何なるか是れ眞正の見解。師云はく、備但一切凡に入り聖に入り、染に入り淨に入り、諸佛國土に入り、勤勒樓閣に入り、毘盧遮那法界に入り、處處に皆國土を現じて成住壞空す。佛世に出てて大法輪を轉じて、却つて涅槃に入つて去來の相貌有ることを見ず、其生死を求むるに了に不可得なり。便ち無生法界に入り、處處國土に游履し、華藏世界に入つて、盡く見る、諸法の空相にして皆實法無きことを。唯聽法無依の道人のみ有り、是れ諸佛の母なり。所以に佛は無依より生ず、若し無依を悟れば佛も亦無得なり、若し是の如く見得せば、是れ眞正の見解なり。學人了せずして若句に替するが爲に、他の凡聖の名に礙へらる。所以に其道眼を障へて、分明なることを得ず、經十二分教の如きんば、皆是れ表顯の詞なり。學者會せずして、便ち表顯各句の上に向つて解を生ず、皆是れ依倚して因果に落在す。未だ三界の生死を免れず。總若し生死去住、睡著自由なることを得んと欲せば、即今聽法底の人を識取せよ。無形無相、無根無本無住處にして、活潑潑地たり。是萬種に應じて施設す、用處祇是れ無處なり。所以に覺著すれば轉た遠く、之を求むれば轉た乖く、之を疑して秘密となす。道流備箇の夢幻の伴子を認著すること莫れ、遲晚中間便ち無常に歸す。備此世界の中に向つて箇の什麼物を覺めてか解脱と作さん。一

茲には吾人を指す  
 智慧の剣を乗り、  
 煩惱の網を破り、  
 生死の境界を出づ  
 【方】……なるこ  
 とを、所謂無修無  
 證無得無失、云云  
 【頭を捨て云云】  
 演若達多のこと。  
 【時節なし】三祇  
 附教を論ぜず。  
 【取次】順次。  
 【一切】一切時一  
 切處。  
 【觸動機關】根本  
 差別智の理行上の  
 無作の果をさす。  
 【毘盧遮那】遍一  
 切處、則ち盡虚空  
 遍法界なり。  
 【諸佛の母】上に  
 は彌陀佛、此には  
 道人又母、總には  
 同稱。  
 【十二分教】一代  
 藏經。  
 【表顯の意】表相  
 を以て説きしもの  
 にて眞實の説にあ  
 らざるを云ふ。  
 【活潑震地】本分  
 上の自由三昧を云  
 ぶ。

口の飯を覺取して喫し、毫を補ひ時を過して、且く知識を訪尋せんことを要す。因循とし  
 て樂を逐ふこと莫れ、光陰惜むべし、念念無常なり。羅なる時は則ち地水火風を破り、細  
 なる時は則ち生住異滅の四相の所逼を被る。道流今時且く四種無相の境を識取して、境に  
 擺撲せらるることを免れんことを要す。  
 問ふ、如何なるか是れ四種無相の境。師云はく、一、備が一念心の疑、地に來り礙へらる、  
 備が一念心の愛、水に來り溺らさる、備が一念心の瞋、火に來り燒かる、備が一念心の喜、  
 風に來り飄へさる。若し能く是の如く辨得せば、境に轉せられず、處處境を用ひ、東涌西  
 沒、南涌北沒、中涌邊沒、邊涌中沒、水を履むこと地の如く、地を履むこと水の如くなら  
 ん。何に縁つてか此の如くなる、四大の如夢如幻に達するが爲の故なり。道流、備祇今聽  
 法の者、是れ備が四大にあらずして、能く備が四大を用ふ、若し能く是の如く見得せば、  
 便乃去住自由ならん。山僧が見處に約せば、難多岐の法勿し、備若し聖を愛せば、聖とい  
 つば聖の名なり。一般の學人有つて、五臺山裏に向つて文殊を求む、早く錯り了れり。五  
 臺山に文殊無し、備、文殊を識らんと欲するや、祇備が目前の用處始終異ならず、處處疑  
 はざる、此箇、是れ活文殊。備が一念心の無差別光、處處總に是れ眞の普賢。備が一念心  
 自ら能く縛を解して隨處に解脫す、此は是れ觀音三昧の法なり。互に主伴と爲つて、出づ  
 る時は一時に出づ。一即ち三、三即ち一、是の如く解得して、始めて好し看教するに。  
 師、衆に示して云はく、如今の學道人、且く自信を要す。外に向つて覺むること莫れ、





風とは動氣輕利なるが故に、喜べば心も輕し。動き働くは風火の業、此四種は元來相にあらずと辨得せば境界を受けず。

【東涌云云】自由自在の義、六種震動中の四種。

【文殊】妙智を指す。森羅萬象、若に非ざる象、何ぞ一處として殊に非ざらん。

【無差別光】本分なり、差別が本分では無し。普賢は妙行を指して云ふ。

無差別より起す所の差別即ち自門の差別に即して無差別。光は智、人人の一念心上に具在す。

【觀音三昧の法】耳根より聲に隨るを觀音と爲す。三は正、味は定なり。正智現前するを云ふ。

【一節三三節一】佛相用の三が互に

無し、備一念心三界に生じて、緣に隨つて境に分たれて、六塵と爲る。備如今の應用の處、什麼をか欠少する。一刹那の間に、便ち淨に入り穢に入り、斷續樓閣に入り、三眼國土に入りつて、處處に遷履して唯空名のみを見る。

問ふ、如何なるか是れ三眼國土と。師云はく、「我備と共に淨妙國土の中に入つて、清淨衣を著けて法身佛を説き、又無差別國土の中に入つて、無差別衣を著けて報身佛を説き、又解脫國土の中に入つて、光明衣を著けて化身佛を説く。此三眼國土は皆是れ依體なり。經論家に約せば、法身を取つて根本と爲し、報化の二身を用と爲す。由縁が見處は、法身は即ち說法を解せず、所以に古人云はく、「一身は義に依つて立し、土は體に據つて論す」と。

法性の身、法性の土、明かに知んぬ、是れ建立の法、依體の國土なることを。空拳黃葉、用て小兒を誑かす、藥麩を糞、枯骨上に什蜜の汁をか重ぬ。心外に法無し、内も亦不可得なり、什蜜物をか求めぬ。備諸方に言ふ、道に修あり證ありと、證ること莫れ。説ひ修し得る者有るも、皆是れ生生死の業なり。備言ふ、六度萬行齊しく修すと。我見るに是れ造業、佛を求め法を求む、即ち是れ造業の業、菩薩を求むるも亦是れ造業、石經看取も亦是れ造業。佛と祖師とは是れ無事の人なり。所以に有漏有爲、無漏無爲は清淨の業たり。

一般の瞎子有つて飽くまで飯を喫し了つて、便ち棄擲行し、念滿を把握して今故起せしめず、喧を喚び聲を求む、是れ外道の法なり。祖師云はく、「佛若し心を住し二節を看、心を擧して外に照し、心を攝して内に澄ましめ、心を凝して定に入る。是の如きの流、皆

主と爲り伴と爲りて、色相心と法性とも一致す  
 【看教】看經のこ  
 と看教は文に隨つて解を生じて佛意を失するを遮る、直指人心、不立文字、即心即佛なれば心を宗となし無門を法門と爲す  
 【西菴】西菴藤の音句、或は六藤の地、一大叢經千七百則の公案を編葛藤といふ  
 【教】教は四十九年の説を、是は祖師の言説をいふ  
 【主主人なり、誠は納僧の用ふる誠に非ず】  
 【聲名文句】非眞實の義  
 【清淨地】佛境界なり  
 【人は明ち】人とは無依の道人、本分又心法をさす  
 【委委隨隨】委は委に作る、物に隨つて委曲なるを

是れ造作なり。是れ備如今與麼に聽法する底の人、作麼生か他を修し他を證し、他を莊嚴せんと凝す。且く是れ修する底の物にあらず、是れ莊嚴し得る底の物にあらず、若し他をして莊嚴せしめば、一切の物即ち莊嚴し得ん、備且く錯ること莫れ」道流、備這一般の老師の口裏の語を取つて、是れ眞なりと爲して道ふ、是れ善知識不思議なり。我は是れ凡夫心、敢て他の老宿を測度せず」と。慧屢生、備一生前這箇の見解を作して、這一隻眼に辜負す、冷喙喋地なること、棟梁上の驢駒の如くに相値たり。我敢て善知識を毀りて、口業を生ぜんことを怖れず、道流、夫れ大善知識にして、始めて敢て佛を毀り祖を毀り、天下を是非し、三藏教を排斥し、諸小兒を罵辱して、道順の中に向つて人を覓む。所以に我十二年の中に、一箇の業性を求むるに、芥子許りの如きも不可得なり。若し新婦子の禪師に似たらば、便即陀を趁ひ出して、飯を與へて喫せしめず、不安不樂ならんことを怖れん。古よりの先輩、到る處に人信せず、遅ひ出されて、始めて知る、是れ貴きことを。若し到る處に、人盡く背はば、什麼を作すにか堪へん。所以に、師子一吼すれば、野干鬚裂す。道流諸方に、道の修すべきあり、法の證すべき有り」と説く。備、何の法を證し、何の道を修せんとかを説く。備が今の用處、什麼物をか欠少し、何れの處をか修補せん。後生の小阿彌、會せずして便即道般の野狐の精魅を信じて、他の事を説き、他人を繫縛して、道は現行相應し、三業を謹慎して、始めて成佛を得と、言ふことを許す。此の如く説く者は、春の細雨の如し、古人云はく、「路に達道の人に逢はば、第一に、道に向

【瓦器の破れたる聲】  
瓦器の破れたる聲、  
これは小器淺劣を  
指す。

【人惑】  
一切不善  
知識の教養をさす

【三眼圖上】  
智照  
(化身法眼(法身)  
慧眼(淨身))

【清淨衣】  
菩提涅  
槃、無相無形の名  
言を指す。法身佛  
の上をいふ。

【無差別衣】  
自他  
一致、凡聖一如等  
平等の名言を指す

【光明衣】  
神用放  
光等の名言を指す  
化身佛の上を指す  
【依變】  
身に依つ  
て變ず、實法に非  
ず。

【疾藜菱刺】  
すじ  
なきことを云ふ  
あざみは三角あり  
人を刺す。

【修あり證あり】  
大道本來久もなく  
缺もなし、更に什  
麼事をか修せん。

ふこと莫れ」と。所以に言ふ、若し人、道を修せば道、行ぜず、萬般の雜境、頭を競うて生ず。智劍出で來つて、一物無し、明頭未だ顯はれざるに、暗頭明かなり。所以に古人云はく、「平常心是れ道」と。大徳、什麼物をか重めん、現今目前聽法無依の道人、歷歴地に分明にして、未だ曾て欠少せず。偏、若し祖師と別ならざることを得んと欲せば、但是の如く見て、疑誤することを用ひず、偏、心心不異なる、之を活祖と名く。心若し異あれば即ち性相別なり、心不異なるが故に、即ち性と相と別ならず。

問ふ、如何なるか是れ心心不異の處。師云はく、偏祖はんと擬す、早く異にし了れり。性相各分る、道流錯ること莫れ。世出世の諸法、皆自性無く亦生性なし。但空名のみあり、名字も亦空なり、偏祖に世の諸名を認めて實となす、大いに錯り了れり。設ひ有なるも、皆是れ依變の境なり。箇の菩提依、涅槃依、解脱依、三身依、境智依、菩薩依、佛依あり。偏祖變國土の中に向つて、什麼物をか覓めん。乃至三乘十二分教は、皆是れ不淨を拭ふの故紙なり。佛は是れ幻化の身、祖は是れ老比丘、偏祖つて是れ娘生にしじるや否や。偏若し佛を求めば、即ち佛體に攝せられん、偏若し祖を求めば、即ち祖體に攝せられん。偏若し求むることあれ、皆苦なり、如かじ無事ならんには、一觀の禿比丘有つて、

衆人に向つて道ふ、佛は是れ究竟なり、三大阿僧祇劫に於て修行畢滿して、方に始めて成道すと。道流偏若し佛は是れ究竟なりと道はば、什麼に縁つてか八十年後、拘尸羅城雙林樹の間に向つて側臥して死し去る。佛今何くにか在る、明かに知んぬ、我が生死と別なら

【有漏無漏】有漏は煩惱、無漏は菩提。

【附禿子】無眼子念漏を提提し念をとるへてあらざるなり。

【附屢生】惡知識をこす、どめくらめがの意。

【辜負】辜は法を犯す、負は背くなり。

【冷嗜禁地】禁は閉なり、惡知識を信じて、をぢつまつたる貌。

【小兒】學者を指す。

【新婦子の禪師】惡知識の柔弱なるをいふ。

【師子一乳】師子は師自身、野干は惡知識。

【小阿師】後生の學者。

【智劍出て来つて】衲僧の智を以て斷するなり。

【明頭未曉】夜半正明、天曉不曉の義。一切なき境界

ざることを。備言ふ、三十二相八十種好は佛なりと、轉輪聖王も實に是れ如來なるべしや。明かに知んぬ、是れ幻化なることを。古人云はく、如來奉心の相は世間の情に懸せんが爲なり。人の眞見を生せんことを恐れて、權に目く虚名を立す。假りに三十二と言ふ、八十も也空聲なり。有身は量體にあらず、夢相は乃ち眞形。一蓮道六通に六通あり、是れ不可思議なりと。一切の諸天神仙、阿修羅、大力の輩も亦神通あり、實に是れ神なるべしや否や。道法結ること莫れ、祇阿修羅と天帝釋と實ふが如きんに、敗れて、八萬四千の眷族を領して、佛鉢孔中に入つて暮ら、是れ神なること莫しや否や。山僧が集する所の如きんば、皆是れ常通依通なり。夫れ佛の六通の如きんば然らず、色界に入つて色感を被らず、聲界に入つて聲感を被らず、香界に入つて香感を被らず、味界に入つて味感を被らず、觸界に入つて觸感を被らず、法界に入つて法感を被らず。所以に、六種の色、百味の觸法、皆是れ空相なるに違すれば、此無依の道人を繫縛すること能はず。是れ五種の漏貫なりと雖も、便ち是れ地行の神通なり。道流眞體無形、眞法無相、佛菩薩に幻化上頭に覆を作し作を作す。設ひ求め得る者も、皆是れ野狐の精麁、並に是れ眞佛にあらず、是れ外道の見解なり。夫れ眞の學道人の如きんば、並に佛を取らず、菩薩、羅漢を取らず、三界の殊勝を取らず、迥然獨脱にして物と拘らず、乾坤倒覆すとも我更に疑はじ、十方の諸佛、現前すとも、一念心の喜無く、三塗地獄、頓に現すとも、一念心の怖無けん。何に縁つてか此の如くなる、我諸法の空相なるを見るに、變ずれば即ち有、變ぜざれば即ち無、三界

なり。

【古人】 古人は趙州と南泉。

【世出世】 世は佛法、出世は佛法。

【菩提衣等】 菩提菩薩と云ふも、依倚菩提が吞れ菩提とは名からず。

【境智】 境は理上の名言の境、智は理上の名言の智、即ち心智なり。

【依愛國土】 之は三聖をさす。

【不淨を拭ふの教】 三乘十二分教を云ふ。

【備懸つて是れ境】 生れて其儘生き地生にしては居らぬの意、娘は母の義母の所生のままと云ふ義。

【禿比丘】 無知識修行果證、四十二圓縁六度行を修して五十二位を滿す。

【物戸】 耶、此に角縁、その城三角なり。

【雙林樹】 此には

唯心萬法唯識、所以に夢幻空華、何ぞ把握を勞せん。唯道流目前、現今聽法底の人のみ有つて、火に入つても焼けず、水に入つても溺れず、三塗地獄に入りても、餓鬼畜生に入りても而も糧を受けず。何に縁つてか此の如くなる、嫌ふ底の法無ければなり。倘若し聖を愛し凡を憎まば生死海裏に浮沈せん。煩惱は心に由るが故に有なり。無心ならば煩惱何ぞ拘らん。分別取相に勞せずんば、自然に得道須臾なり。倘若家波波地に學得せんと擬せば、三祇劫の中に於てすとも終に生死に歸せん。如かじ、無事にして叢林の中に向つて、床角頭に脚を交へて坐せんに、道流諸法より學人有つて來るが如きんば、主客相見し了つて、便ち一句子の語有つて、前頭の善知識を尋ず。學人に箇の機權の語路を拈出して、善知識の口角頭に向つて躡過して、佛あるや尋らずやと看らる。倘若し是れ境なることを識得すれば、把得して便ち坑子裏に抛向す、學人即ち尋常なり。然して後に便ち善知識の語を索む、依前として之を尋ふ。學人云はく、「上智なる哉、是れ大善知識」と。即ち云はく、「備大いに好悪を識らず」と。善知識の如きんば、箇の境、坑子を把出して、學人の面前に向つて弄す。前人解得して、下下に主と作つて境惑を受けず。善知識便ち半身を現す、學人便ち喝す。善知識、又一切差別語路の中に入つて懸察す。學人云はく、「好悪を識らざる老禿」と。善知識數じて曰はく、「眞正の道流」と。諸方の善知識の如きんば邪正を辨せず學人來つて菩提涅槃三身の境智を問へば、善知識便ち他の真に解説す。他の學人に罵著せられて便ち棒を把つて他を打つて言ふ、「度なし」と。自ら是れ

堅固。佛滅變の處

【古人云は、】此

【四十字は傳大士頌

【六通】六通は神

地通、天耳通、他

心通、宿住通、天

眼通、神足通、諸天

とは二十八天、神

仙は十種の箇道

【幻化上頭云、】

夢幻空華の上に内

つて、種種の標

を成す。

【衆が求め、】有爲

の形相を承の得る

なり。

【迦然顯麗、】物に

備善知識眼無し、他を瞋ることを得ざれ。一般の好悪を識らざる禿奴有つて、即ち東を

指し西を指し、晴を好み雨を好み、燈籠露柱を好む。爾看よ、眉毛幾莖かある。這箇機縁

を具す、學人會せずして便向ち心死す。是の如きの流。總に是れ野狐の精魅題題、他の好

學の人。隨微笑して、瞎老禿奴、他の天下の人を惑亂すと言はる。道流出家兒、且く學道

を要す。氣山僧が如きんば、往日曾て毘尼の中に向つて心を留め、亦曾て經論に於て辯討

す。後方に是れ濟世の業、表顯の說なることを知つて、遂に乃ち一時に抛却して、即ち道

を訪ひ禪に參す。後大善知識に遇うて、方に乃ち這眼分明にして、始めて天下の老和尚を

識得して、其邪正を知る。是れ曠生下にして便ち會するにあらず、測つて是れ體究練磨

して、一朝に自ら省す。道法他如法の見解を得んと欲せば、但人惑を受くること莫れ。

裏に向ひ外に向つて逢着せば便ち殺せ、佛に逢うては佛を殺し、祖に逢うては祖を殺し、

羅漢に逢うては羅漢を殺し、父母に逢うては父母を殺し、親眷に逢うては親眷を殺して、

始めて解脫を得ん。物と拘らず透脫自在なり。諸方の學道流の如きんば、未だ物に依らず

して出で來る處あらず。山僧此間に向つて頭より打す。手上に出で來れば、手上に打し、

口裏に出で來れば、口裏に打し、眼裏に出で來れば眼裏に打す。未だ一箇も獨脱して出で

來る處あらず、皆是れ他の古人の閑機境に上る。山僧一法の人に與ふる無し、祇是れ病を

治し縛を解す。爾諸方の道流、試みに物に依らずして出で來れ、我爾と共に商量せんこ

とを要す。十年五歲、並に一人もなし。皆是れ依師附葉、竹木の精葉、野狐の精魅なり。

【機縁の語、】

【一句子の語、】

【善知識、】

【床角頭、】

【前頭、】

【如心に由る、】

【萬法を指す、】

【夢幻空華、】

【迦然顯麗、】

【衆が求め、】

【幻化上頭云、】

【諸天、】

【神足通、】

【宿住通、】

【天耳通、】

【地通、】

【堅固、】

【口角頭】 蕪面の義。  
 【擲地】 擲出。  
 【擲地子】 機檻等の一句子の言句。  
 【前人云云】 前人は前來の學人、下下直下の義。  
 【境】 言句をさす。  
 【差別語路】 一切佛祖の語句等。  
 【權撰】 作略、鍛練。  
 【諸老師】 邪正を辨せざる邪師を罵る語。  
 【他】 來問底の學者。  
 【這箇】 惡知識を指す。  
 【精進齋】 精怪を治む。  
 【嗔癡】 嗔癡は瞋癡、俗に「うふふ」の笑聲。  
 【毘尼】 律儀。  
 【是れ頓生】 黃蘗をさす。  
 【殺】 内外中間一物を立せざる義。  
 【佛を殺し】 佛の執着を思ひ除く義は除の義。

一切の糞塊上に向つて亂咬す。慧漢、枉げて他の十方の信施を消して、我は是れ出家兒と道つて、是の如きの見解を作す。偏に向つて無佛無法、無修無證と道ふ。紙與麩に傍家に什頭物をか求めんと擬す。慧漢、頭上に頭を安んず、是れ爾什麼をか欠少する。道流是れ偏が目前に用ふる破祖佛と別ならず、穢密に信ぜずして便ち外に向つて求む、錯ること莫れ。外に向つて法無く、内も亦不可得なり。偏山僧が口裏の語を取らんよりは、如かじ休歇して無事にし去らんには。已起の者は纏ぐこと莫れ、未起の者は放起せんことを要せざれ、便ち偏が十年の行脚に懸らん。山僧が見處に約せば、知許多事無し。紙是れ平常著衣喫飯、無事にして時を過す。偏諸方より來る者、皆是れ有心にして佛を求め法を求め、解脫を求め三界を出離せんことを求む。癡人偏三界を出でて、什處の處に去らんと專す。佛祖は是れ實鑿底の名句なり、偏三界を纏ぐんと欲する者。佛が今の毘法座の心地を離れず、偏が一念心の負、是れ欲界、偏が一念心の噴、是れ色界、偏が一念心の癡、是れ無色界、是れ偏が裏の家具子なり。三界自ら我は是れ三界なりと道はず、道つて是れ過渡目前、靈靈地にして萬般を照燭し、世界を前度する處の人、其の異に名を安んず。大徳四大色身は是れ無常なり、乃至脾胃肝膽腎毛爪齒、唯諸法の空相を見る。偏が一念心歇得する處、喚んで菩提樹と作す、偏が一念心歇得すること疑はざる處、喚んで無明窟と作す。無明に住處なく、無明に始終なし、偏若し念念心歇不得ならば、便ち他の無明窟に上り、便ち六道四生に入つて被毛戴角せん。偏若し歇得せば、便ち是れ清淨の身界なり。偏一念

【口裡に出て来れば】言句を以て是となして出て来る底の者。

【眼裏に出る来れば】或は男婦の目を思めて是となし或は境致を認めて是となして出て来る底の者。

【古人の言】古明公案を指す。

【點滴云々】めく字は用ふるの義。滴の信疑を受くるなり。

【已起の著】念の起りたる者。

【佛祖は是れ云々】佛なり且爾なりと名をつくるは、賞観し、贊するものなり。

【歌得まで】思ふ歌むを究む。清淨法身の佛も半分を云ふ。

【意生身】意なるを云ふ。【意なるを云ふ】意なるを云ふ。【意なるを云ふ】意なるを云ふ。

【古入云はく】第一

不生なれば、便ち是れ善持處に上つて三界に神通變化し、意生化身して法喜禪悅し、身光自ら照さん。衣を思へば羅縠千重、食を思へば百味具足す、更に横韻無し。菩提に住處無し、是故に得る者無し。道法大丈夫の漢、更に箇の什物をか疑はん。目前の用處更に是れ何誰ぞ把得し。便ち用ひて一字に言す。こゝに其まを、寔して玄旨と爲す。與麼に見得せば嫌ふ底の法なし。古人云く、「心は萬境に動つて轉ず、世間實に能く固たり。流に隨つて性を得ずれば、喜も無く亦憂も無し。道流、禪宗の只解の如きんば、死活循然たり、參學の人大いに須らく仔細にすべし。主客相見するが如きんば、便ち言論往來あり。或は物に應じて形を現じ、或は全體作用し、或は權權を把つて喜怒し、或は半身を現じ、或は歸子に乗り、或は國王に乘る。眞正の學人有るが如きんば、便ち喝して先づ一箇の膠盆子を拈出す。善知識是れ坑なることを辨せず、便ち他の坑上の上つて撥を作し様を作す。學人便ち喝す、前人肯て放たず、且れは是膏育の病、醫するに堪へず、喚んで客、主を看ると作す。或は是れ善知識物を拈出せず、學人の問處に隨つて即ち奪ふ、學人奪はれて死に振るまで放たず、此は是れ主、客を看る。或は學人有つて、一箇清淨の境に應じて善知識の前に出づ、善知識、是れ坑なることを辨得し把得して坑裏に抛向す。學人言はく、「大好の善知識即ち云はく、咄哉、好惡を識らず」と。學人便ち禮拜す。此を喚んで主、主を看ると作す。或は學人有つて枷を披し鎖を帯びて善知識の前に出づ。善知識更に輿に一重の枷鎖を安ず。學人歡喜して彼此辨せず、呼んで客、客を看ると爲す。大徳、山僧是の如く



二十二祖摩拏羅尊者の對。

【隨處】 萬物萬境

【死活相然】 死中に活あり、活中に死あり。

【善哉往來】 往は高、來は答。

【金剛作則】 掃地、轉之自在の義。

【後漢】 機は未發後許、推は常に反して遣に合ふ。

【師子云云】 師子は正位、本分。象は正位、現成。

【參盆子】 難問の句中を指す。にかはを溶解したる盆に頰を突き入れたる如きを云ふ。

【膏肓の病】 これ惡知識の癡癡病を指す。

【密主を見る】 賓中主、主人が國家を勤舞す。

【拈出きす】 黙して學人を如何とみる底。

【奪はれて死に拈

擧する所、皆是れ處を辨じ異を擇んで、其邪正を知らしむ。道流定情大難、佛法斷妄なり、解得すれば可何地なり。山僧竟日他の爲に説教す、學者總に意に在かず、千端萬端、脚底に踏過すれども黒淺地なり、一箇の形段無うして解脫發明なり。學人信不及にして、便ち名向上に向つて解を生ず、年半百に登とするまで、無管に傍家に死屍を負つて行き、擔子に捨却して天下に走る、草鞋錢を索はるること日あること在らん。大徳、山僧外に向つて法無しと説かば、學人會せずして便即裏に向つて解を作し、便即壁に倚つて坐し、舌、上の吻を柱へて湛然として動せず、此を取つて、是れ祖門の佛法と爲す、大いに錯れり。是れ倘若し不動清淨の境を取つて、是と爲さば、備即ち他の無明を認めて、郎主と爲す。古人云はく、溝溝たる黑窟の深坑定に情異すべしと、此之是れなり。倘若し他の動する者是と認めば、一切の草木皆動を解す、蓋に是れ道なるべしや。所以に動は是れ風大、不動は是れ地大、動と不動と俱に自性なし。倘若し動處に向つて他を捉へば、他は不動處に向つて立せん、倘若し不動處に向つて他を捉へば、他は動處に向つて立せん。譬へば泉に漚む魚の浪を鼓して自ら躍るが如し。大徳動と不動と是れ二種の境なり、違つて是れ無依の道人、動を用ひ不動を用ふ。諸方の學人來るが如きんば、山僧が此間には三種の根器を作して置く。中下根器の來るが如きんば、我便ち其境を奪つて其法を奪かず。蓋は中下根器來れば、我便ち境法俱に奪ふ。上上根器の來るが如きんば、我便ち境法人俱に奪はず。出格見解の人有つて來る如きんば、山僧が此間には便ち全體作用して根器を奪はず。

【主客を見る】主客を決定せずして不意に思ふ。

【主客を見る】主客を見る。

【主客を見る】主客を見る。

【主客を見る】主客を見る。

【主客を見る】主客を見る。

【主客を見る】主客を見る。

【主客を見る】主客を見る。

【主客を見る】主客を見る。

【主客を見る】主客を見る。

【主客を見る】主客を見る。

【主客を見る】主客を見る。

【主客を見る】主客を見る。

【主客を見る】主客を見る。

【主客を見る】主客を見る。

【主客を見る】主客を見る。

【主客を見る】主客を見る。

【主客を見る】主客を見る。

【主客を見る】主客を見る。

【主客を見る】主客を見る。

【主客を見る】主客を見る。

大徳這裏に到つて、學人苦力の處風を通ぜず、石火電光も即ち過ぎ了れり。學人若し眼

定動せば、即ち没交渉、心を擬すれば、即ち差ひ、念を動すれば、即ち乖く、人有つて

解せば口前を離れず。大徳、備鉢、糞擔子を擔つて傍家に走つて佛を求め法を求む。即今

奥塵に馳求する底、備邊つて渠を驚るや。活潑潑地にして、祇是れ根株勿し。擔すれども

聚らず、換へども散せず、衆著すれば即ち轉た速く、求めざれば還つて口前にあり。靈音

耳に屬す、若し人信せば徒に百年を勞せん。道滄一刹那の間に、偈や華嚴世界に入り毘

盧遮那國土に入り、解脫國土に入り、神通國土に入り、清淨國土に入り、法界に入り、

穢に入り淨に入り、凡に入り聖に入り、餓鬼畜生に入つて、處處に討覓尋するに、皆生あ

り死あることを見ず、唯空名のみなり。玄化空花、把握を勞せず、得失是非、一時に放

却す。道滄、山僧が佛法的的相承して、麻谷和尚、丹霞和尚、道一和尚、盧山と石鞏和尚

と従り、一路に行じて天下に徧し、人の信得する無し、甚く皆謗を起す。道一和尚の用處

の如きんば、純一無雜なり、學人三百五百、盡く皆他の意を見ず。盧山和尚の如きんば、

自在眞正なり。順道の用處、學人涯際を測らず、悉く皆忙然たり。丹霞和尚の如きんば、

菴珠隱顯、學人來る者皆悉く罵らる。麻谷の用處の如きんば、苦きこと黃蘗の如し、近

づくこと皆得ず。石鞏の用處の如きんば、筍頭上に向つて人を覓む、來る者皆懼る。山僧

が今日の用處の如きんば、眞正成壞、神變を籠弄して、一切の境に入つて隨處に無事な

り。境も換ふること能はず、但來りて求むる者有ば、我使即出でて渠を見る、渠我を識

し。

【草鞋錢を云云】

【郎主】主人の義

とは超佛越祖の作略あり。【合體作用】無語低頭して、方丈に歸るの類。【根器を懸す】直下に接得して根器を論ぜず。【活潑機地】本分を活處に用ひて云ふ。衲僧の方にも用ふることもあり。【漂流……放却】那一人種種の境界に入りて形段なきを明す。【道流……盧過】臨濟佛法的的相承し來ることを明す。【麻谷云云】麻谷山の實徹、廬山歸宗寺の慧常、撫州石叢の慧廣は伊に馬祖道一禪師に嗣ぐ。郭周丹説天然は石頭希遷禪師に嗣ぐ。故に一路に行ずといふ。【黃葉】兩州の黃葉、味苦く人服すれば神氣に通ず。【我便ち敷教】言句をさす、塵機接

らず、我便ち敷教の衣を著くれば、學人解を生じて、一向に我が言句に入る。苦なる哉。瞎禿子、無限の人、我が著くる底の衣を把つて、青黃赤白を認む。我脱却して清淨境中に入れば、學人一見して便ち忻欲を生ず。我又脱却すれば、學人失心忙然として、狂走して言ふ、我に衣なしと。我即ち渠に向つて、爾、我が衣を著る底の人を識ることありや否やと道へば、忽爾として頭を回して、我を認められり。大徳、爾衣を認むること莫れ、衣は動ずること能はず、人能く衣を著る。箇の清淨衣あり、箇の無生衣、善觀衣、涅槃衣あり、祖衣あり佛衣あり、大徳俱聲名文句のみあり、皆悉く是れ衣變なり。膺輪大氣海の中より鼓激し、牙齒敲磬して其句義を成す。明かに知んぬ、是れ幻化なることを。徳、外に聲語の業を發し、内に心所の法を表して、思を以て念を有す、皆悉く是れ衣なり。爾、祇麼に他の著る底の衣を認めて定解と爲さば、縦ひ塵劫を経るとも、祇是れ衣通なり。三界に循環して生死に輪廻す、如かじ無事ならんには。相逢うて、相識らず、共に語つて名を知らず、今時の學人得ざることは、蓋し名字を認めて解を爲すが爲なり。大策子上に死老漢の語を抄し、三重五重、褰子に裏んで人をして見しめず、是れ玄旨なりと道つて、以て保重を爲す、大いに錯れり。瞎屢生、爾、枯骨上に向つて什麼の汗をか覓めん。一般の好惡を識らざるあつて、教中に向つて、取つて意度商量して句義を成す。屎塊子を把つて、口裏に向つて含み了つて、吐いて別人に過與するが如し。猶俗人の傳口令を打するが如くに相似たり。一生虚しく過して、也道ふ、我は出家と。他に佛法を問著せら

物、表裏の神表を云ふ。  
【脱却】 音句を離れて、佛法の境界を以て示す。

【清淨衣】 清淨衣は法衣を轉ずる生衣は有念の相を轉ず、菩提衣は煩悩を轉ず、涅槃衣は生死を轉ず、出家衣は凡夫衆生を轉ずるの語。

【葛藤】 息の中脈よりきしり出づるを云ふ。  
【牙齒】 いき水牙歯にふれて聲となる。

【大弟子上】 重册册の字、共に簡册部を書籍を音ふ。

【死老黨】 死老黨、三衣等の笑なり、これ漢方行脚の具。  
【屎塊子】 乾屎の類。

【傳口合】 他人の言を我言の如く裝

れて、便即口を杜ぢて詞なし、眼は漆塗に似、口は磁罏の如し。此の如きの類、彌勒の出世に逢ふとも、他方世界に移置せられて、地獄に寄つて苦を受けん。大徳、傳渡波地に諸方に往いて、什麼物を覓めてか汝が脚板を踏んで漕からしむる。佛の来むべき無く、道の成すべき無し、法の得べき無し、外に有相の佛を求めば汝と相似かず。汝が本心を離らんと欲せば、合に非ず亦離に非ず。道流、眞佛無形、眞道無相、眞法無相、三法混融して一處に和合す。辨すること既に得ざるを、喚んで忙忙たる業識の衆生と作す。

問ふ、如何なるか是れ眞佛眞法眞道。乞ふ開示を垂れたまへ。師云はく、佛といつば、心清淨是なり、法といつば、心光明是なり、道といつば、處所無生淨光是なり。即ち一、皆是れ空名にして而も定有無し。眞正の道人と作すが如きんば、念念心聞聞せず。達磨大師、西土より來つてより、祇是れ箇の人惑を受けざる底の人を覓む。後に二祖に遇うて、一言に便了して、何の從前事しく功夫を用ふることを知る。由偈がへ、日の見處、祖佛と別ならず。若し第一句の中に得れば、祖佛の奥に師と爲る、若し第二句の中に得れば、人天の奥に師となる、若し第三句の中に得れば、自救不了。

問ふ、如何なるか是れ西來意。師云はく、若し意有らば自救不了。云はく、既に意無くんば云何が二祖法を得る。師云はく、得といふは是れ不得なり。云はく、既に苦し不得ならば、云何が是れ不得底の意。師云はく、爾が一切處に向つて、馳求の心歇むこと能はざるが爲の所以に。一祖師言はく、一咄哉丈夫、頭を將て頭を覓む。一補言下に自ら回光返照し

うて傳ふ。

【眼は漆突】 眼睛突出して黒きを云ふ。

【圓擔】 口天秤棒のたはみたるが如くにて物も言ふを得ず。

【薄板】 脚底。

【汝が本心云云】 此四句は第八祖佛陀難提尊者の偈。

【眞佛無形云云】 無形は形段、無體は定體、無相は色相、三法混融は佛道法の三法和合するを一無位の眞人或は無依の道人と云ふ。

【若し第一句】 眞佛言前の妙旨。

【若し第二句】 眞法究竟の直說。

【若し第三句】 眞道方便顯行。

【回光返照】 われと立ち回りで悟す。

【不才淨】 不淨の義。

【莊嚴門】 化儀なり。六度萬行を修

て、更に別に求めず、身心と祖師と別ならざることを知つて、當下に無事なるを方に得法と名く。大徳、山僧今時事已むを獲ず、話度して許多の不才淨を説き出す。爾且く請ること莫れ、我が見處に據らば、寔に許多般の道理無し。用ひんと要せば便ち用ふ、用ひざれば便ち休す。祇諸方六度萬行を説いて、以て佛法と爲すが如きんば、我は道ふ、是れ莊嚴門、佛事なり、此れ佛法に非すと。乃至持齋持戒、油を擧げて洒さざるも、道眼明かならずんば、盡く須らく債を抵して、飯錢を索はるること目あることあるべし。何が故に此の如くなる、道に入つて、理に通ぜずんば、身を復うして信施を還す。長者八十一、其樹、耳を生せず。乃至孤零獨宿、一食卯齋、長坐不臥、六時行道皆是れ造業底の人なり。乃至頭目體腦、國城妻子、象馬七珍、盡く皆捨施す。是の如き等の見、皆是れ身心を苦むるが故に、還つて苦果を招く、如かじ無事にして純一無雜ならんには。乃至十地滿心の菩薩も、皆此道流の蹤跡を求むるに、了に不可得なり。所以に諸天歡喜し、地神足を捧げ、十方の諸佛も蒙稱せずといふことなし。何に緣つてか此の如くなる、今の聽法の道人の用處、蹤跡無きが爲なり。

問ふ、大通智勝佛、十劫坐道場、佛法不現前、不得成佛道と。未審し、此意如何、と云、師指示せよ。師云はく、大通といつば是れ自己、處處に於て其萬法の無性無相に達するを名けて大通となす。智勝といつば、一切處に於て疑はず、一法を得ざるを名けて智勝と爲す。佛といふは、心、清淨光明、法界に透徹するを名けて佛となすことを得たり。十

行して、無明煩惱のあかを莊嚴するの義。

【佛事門】 化法。

經をよみ佛を作禮するを云ふ。

【債】 閻羅王宮にて信施をかへすべきを云ふ。

【長者八十一】 第十五祖迦那提婆尊者の偈。

【一食卯齋】 日中一食。

【此道流の蹤迹】 無事にして純一無雜なる人を云ふ。

【無明是れ父】 無明とは過去の煩惱無明によつて三界に生を受く、故に父と云ふ。

【無事なるを云ふ】 無明を元來無とみる時は、殺父【母を害す】 貪愛にひかれて生を受くを母と爲す。

劫牢道場といつば、十波羅蜜是なり。佛法不現前といつば、佛本不生、法本不滅、云何ぞ更に現前すること有らん。不得成佛道といつば、佛更に作佛すべからず。古人云はく、佛常に世間に在つて、而も世間の法に染ます一と。道流、備作佛を得んと欲せば、萬物に隨ふこと莫れ。心生ずれば種種の法生ず、心滅すれば種種の法滅す。一心生ぜざれば萬法に答なし、世と出世と無佛無法、亦現前せず、亦嘗て失せず。設ひ有る者も、皆是れ名言章句、小兒を接引する施設の藥劑、表裏の名句なり。且つ名句自ら名句なるにあらず、還つて是れ備が目前、昭昭靈靈として覺覺聞知、照燭する底、一切の名句を安す。大徳、五無間の業を造つて方に解脱を得ん。

問ふ、如何なるか是れ五無間の業。師云はく、父を殺し母を害し、佛身血を出し、和合僧を破り、經像を焚燒する等、此れは是れ五無間の業なり。云はく、如何なるか是れ父。師云はく、無明是れ父、備が一念心、起滅の處を求むるに得ず、響の空に應ずるが如く、隨處に無事なるを名けて父を殺すと爲す。云はく、如何なるか是れ母。師云はく、貪愛を母と爲す、備が一念心、欲界の中に入つて、其貪愛を求むるに、唯諸法の空相を見て、處處無著なるを、名けて母を害すと爲す。云はく、如何なるか是れ出佛身血。師云はく、備清淨法界の中に向つて、一念心の解を生ずること無く、便ち處處黑暗なる、是れ出佛身血。云はく、如何なるか是れ破和合僧。師云はく、備が一念心、正に煩惱の結使、空の所依無きが如くなるに達す、是れ破和合僧。云はく、如何なるか是れ焚燒經像。師云はく、

依無きが如くなるに達す、是れ破和合僧。云はく、如何なるか是れ焚燒經像。師云はく、

依無きが如くなるに達す、是れ破和合僧。云はく、如何なるか是れ焚燒經像。師云はく、

依無きが如くなるに達す、是れ破和合僧。云はく、如何なるか是れ焚燒經像。師云はく、

依無きが如くなるに達す、是れ破和合僧。云はく、如何なるか是れ焚燒經像。師云はく、

依無きが如くなるに達す、是れ破和合僧。云はく、如何なるか是れ焚燒經像。師云はく、

依無きが如くなるに達す、是れ破和合僧。云はく、如何なるか是れ焚燒經像。師云はく、

【迦然】ぬきんづる貌。

【指上】指月。

【根境法】六根六塵を云ふ。

【虚しく捏怪す】惑亂倒する義。

【无婁生】僧を罵る言。

【野干】梵には悉伽羅。其色青黄にして狗の如し、群聚して夜鳴くこと狼の如し。

【瞿曇、釋氏】俱に釋迦を指す。

【梵相】具には佛攝摩羅、指臂と紐す、人を殺して指を取り、首に冠して鬘と爲す。

【五性】定性二乘大悲闍提菩薩、斷善闍提、無性有情佛。

【圖頌】圖教、頌教。天台の教判に依る。

【裏許】文字等の裏許なり。

【百本】百部。

一因縁空、心空、法空を見て、一念決定斷じて迦然として無事なる、便ち是れ焚燒經像なり。大徳、若し是の如く達得せば、他の凡聖の名に礙へらるることを免る。備一念心、祇空拳指上に向つて寔解を生じ、根境法の中に虚しく捏怪す。自ら慳んじて退屈して言ふ、

我は是れ凡夫、他は是れ聖人と。无婁生甚の死急がある、他の獅子皮を披て、却つて野干鳴を作す。大丈夫の漢、丈夫の氣息を作さず、自家屋裏の物背て信ぜず。祇塵に外に向つて覓めて、他の古人の閑名句に上り、險に倚り陽に博つて、特達すること能はず。境に逢うては便ち縁じ、塵に逢うては便ち執し、觸處に惑起りて自ら准定無し。道流山僧が説く處を取ること莫れ、何が故ぞ、誠に惡慧なし、一期の間虚空に圖畫す、經書像等の喩の如し。道流、佛を將て究竟と爲ること莫れ、我見るに、瞿曇孔の如し、菩薩羅漢は、

盡く是れ攝鎖、人を縛する底の物なり。所以に文殊は劍に仗つて瞿曇を殺さんとし、意掘は刀を執して釋氏を害せんとす。道流、佛の得べきなし、乃至三乘五性、圖頌の教迹、皆是れ一期の藥病相治す、並に實法無し。設ひ有なるも皆是れ相似の表顯、路布の文字の差排なり、且く是の如く説く。道流、一般の禿子有つて、便ち裏許に向つて功を著けて、

出世の法を求めんことを擬す、錯り了れり。若し人、佛を求めば是人體を失す、若し人、道を求めば是人道を失す、若し人、祖を求めば是人祖を失す。大徳信ること莫れ、我且く備が經論を解することを取らず、我亦備が國王大臣なることを取らず、我亦備が辯、懸河に似たることを取らず。我亦備が聰明智慧を取らず、唯備が眞正の見解を要す。道流設ひ

【冷氣】文字音句を並くを云ふ。

【權學】新發意の學問。

【黑漫漫】無分曉「まつくららみ」未悟の時。

【惘然】心亂れて黑暗の貌。

【龍象の象】龍の白象。

【脚を指し】學人をさすの貌。

【脚を點す】自高の貌。

【兩片皮云云】上下唇下唇を扣いて口がましく物を云ふ。

【激揚】聲を上げまして物を云ふ。

【化機】漸漸秘密不定。

百本の經論を解得するも、一箇無事處の阿蘭には如かじ、備解得すれば即ち他人を輕蔑す。勝負の修羅、人長の無明、地獄の業を授す。薄星比丘の如き人は、十二分教を解するも、生身地獄に陥る、大地も容れず、如かじ無事にして休歇し去らんには、飢ゑ來れば飯を喫し、睡り來れば眼を合す、鼻入は我を笑ふ、智は乃ち焉を知る。道流文字の中に向つて求むること莫れ、心動すれば疲勞す、冷氣を吸うと益無し。如かじ、一念緣起無生にして、三界權學の菩薩を超出せんには、大徳因循として日を過すこと莫れ、山僧往日未だ見處有らざる時、黑漫漫地なり。光陰密しく過すべからず、腹熱し心忙じて、奔波して道を訪ふ。後に還つて力を得て、始めて今日に到つて道流と共に是の如く話度す。諸の道流に勸む、衣食の爲にすること莫れ、看と、世界は過ぎ易し、善知識には遇ひ難し、優曇華の、時に一たび現するが如くなるのみ。備諸方に節の臨濟老漢ありと道ふことを聞いて、出で來つて便ち困難して、語をなし得ざらしめんと擬す。山僧に全體作用せられて、學

人空しく眼を閉き得て口總に動くこと得ず、惘然として何を以てか我に答へんといふことを知らず、我、伊に向つて道ふ、龍象の蹠踏は驢の堪ふる所に非ず。爾諸處に龍象を指し、脚を點じて道ふ、我禪を解し道を解すと。箇兩箇、這裏に到つて奈何ともせず。咄哉、備這箇の身心を將て、到る處兩片皮を篋いて問閣を誑譚す、鐵棒を喫すること日有ること

と在らん。出家兒に非ず、盡く阿修羅界に向つて擲せられん。夫れ至理の道の如きんば、諍論して激揚を求め、鏗鏘として以て外道を推くに非ず、佛祖の相承に至つては更に別意

と在らん。出家兒に非ず、盡く阿修羅界に向つて擲せられん。夫れ至理の道の如きんば、諍論して激揚を求め、鏗鏘として以て外道を推くに非ず、佛祖の相承に至つては更に別意

と在らん。出家兒に非ず、盡く阿修羅界に向つて擲せられん。夫れ至理の道の如きんば、諍論して激揚を求め、鏗鏘として以て外道を推くに非ず、佛祖の相承に至つては更に別意

と在らん。出家兒に非ず、盡く阿修羅界に向つて擲せられん。夫れ至理の道の如きんば、諍論して激揚を求め、鏗鏘として以て外道を推くに非ず、佛祖の相承に至つては更に別意

と在らん。出家兒に非ず、盡く阿修羅界に向つて擲せられん。夫れ至理の道の如きんば、諍論して激揚を求め、鏗鏘として以て外道を推くに非ず、佛祖の相承に至つては更に別意

と在らん。出家兒に非ず、盡く阿修羅界に向つて擲せられん。夫れ至理の道の如きんば、諍論して激揚を求め、鏗鏘として以て外道を推くに非ず、佛祖の相承に至つては更に別意



【大海に死屍云】胸中に一物をも留めざるを云ふ。大海は佛法。死屍は言句。  
 【如去】大師が受用處。  
 【展ぶる】把住放行、大自在。  
 【古人】南岳讓和尚、祖師に嗣ぐ。  
 【各自に力を着けよ】自ら悟りて知れ。  
 【珍重】訣別の言なり。上來提唱の説を結ぶ。

【勘辨】入室の體試験の如し。此勘辨は惠然の撰。  
 【飯頭】典座。大衆の齋粥一切を掌る。  
 【一語】示すの意。  
 【一語】俗にいふ一言。  
 【一頓を喫せん】一餐の食、法に就いて云へば更に二十棒を喫せしめんの義。

無し、設ひ言教あるも化儀の三乘五性人天の因果に落在す。圓頓の教の如きんば、又且つ然らず。童子善財、皆求過せず、大徳歸つて用心すること莫れ、大海に死屍を停めざるが如し。戰慄に擔却して天下に走らんと擬す、自ら見障を起して以て心を廣ふ。日上に雲無ければ天に麗いて普く照す、眼中に翳無ければ空裏に花無し。道流、爾如法なることを得んと欲せば、但疑を生ずること莫れ、展ぶる則んば法界に彌綸し、收るる則んば絲髮も立せず。歴歴孤明にして未だ曾て欠少せず。眼見す耳聞かず、喚んで什麼物とか作さん。古人云はく、「説似一物即不中」と。爾但自家に看よ、更に什麼か有らん。豈も亦無盡、各自に力を著けよ、珍重。

勘 辨

黄檗因に厨に入る次、飯頭に問ふ、「什麼をか作す。」飯頭云はく、「衆僧の米を揀ぶ。」黄檗云はく、「一日に多少をか喫す。」飯頭云はく、「一日に五粒。」黄檗云はく、「太太多きこと莫しや。」飯頭云はく、「飯少きことを恐るるに在り。」黄檗便ち打す。飯頭却つて桶に舉似す。飯頭云はく、「我、汝が爲に遣老漢を勘せん。」籠に對つて侍立する女、黄檗別語を擧す。飯頭云はく、「飯頭不實、請ふ和尚一轉語を代れ。」師便ち問ふ、「太太多きこと莫しや。」黄檗云はく、「何ぞ道はざる、來日更に一頓を喫せんと。」飯頭云はく、「什麼の來日と云ふらん、即今便

【子を養つて六六】

黃檗已に臨濟を養出して、方に百丈の慈恵を知る。

【勾賊破家】 賊を養うて破家す。

【擬議】 ふきつまる。

【普化】 盤山寶積に嗣ぐ。

【師乃ち舌を吐く】 舌を出したる貌。

【河陽木塔】 河陽と木塔の傳は不詳。

【師便ち喝す】 凡聖格絶す。

【新婦子】 見解の軟弱を言ふ。

ち喉をよと這ひ了つて便ち掌す。黃檗云はく、這風飄、又這裏に來つて虎鬚を行づ。師便ち喝して出で去る。後に高山、仰山に問ふ、此二尊宿の意作麼生。仰山云はく、一和尚作麼生。高山云はく、子を養つて方に父の慈を知る。仰山云はく、一懸り。高山云はく、子又作麼生。仰山云はく、大いに勾賊破家に似たり。

師、俗に問ふ、作麼の處より來る。僧便ち喝す。師便ち拈して坐せしむ。僧擬議す、師便ち打す。

師、僧の來るを見て、便ち拂子を擊起す、僧釋す。師便ち打す。又僧の來るを見て、又拂子を擊起す。僧顧みず、師亦打す。

師一日、普化と同じく施主家の齋に赴く次、師問ふ、毛、巨海を呑み、芥須彌を納る、是れ神通妙用とやせん、本體如何然たるか。普化飯床を踏倒す、師云はく、大醫生、普化云はく、這裏是れ什麼の所在ぞ、誰と誰と細と説く。師、來日又普化と同じく齋に赴く。問ふ、今日の供養昨日に何似。普化依前として飯床を踏倒す。師云はく、得ることは即ち得たり、大醫生、普化云はく、隨漢、佛法什麼の體細とか説かん。師乃ち舌を吐く。

師一日、河陽木塔の長老と同じく僧堂地爐の内に在つて坐す、因に説く、普化毎日街市に在り、掣風掣顛す、知る他は是れ凡か聖か。言猶未だ了らざるに普化、衆に入り來る。

便ち問ふ、汝は是れ凡か是れ聖か。普化云はく、汝且く道へ、我は是れ凡か、是れ聖か。師便ち喝す。普化手を以て指して云はく、河陽は新婦子、木塔は老婆禪、臨濟は小厮

か。師便ち喝す。普化手を以て指して云はく、河陽は新婦子、木塔は老婆禪、臨濟は小厮

【老婆】親切太過を言ふ。  
【小僧兒】馬鹿野郎の意。

【明頭】出世有功の位。  
【暗頭】不出世無功の位。

【四方八面來】千差萬別の境界。

【旋風打】一切の境界を立せず。

【虚空來】没蹤跡にし來る。

【連架打】契は楯に作る。

【侍者】樂善元安

【賓家】老宿を指す。  
【主家】臨濟を指す。  
【南泉】南泉普願は馬祖道一に嗣

【官馬】龍馬なり、師と首座とを喻ふ。  
【露柱】大黒柱。  
【木樨】木の切れなり。

兒、却つて一隻眼を具す。師云はく、「這賊。」普化、「賊賊。」といつて便ち出で去る。

一日普化、僧堂前に在つて生菜を喫す。師見て云はく、「大いに一頭の驢に似たり。」普化便ち驢鳴をなす。師云はく、「這賊。」普化、「賊賊。」といつて便ち出で去る。

因に普化、常に街市に於て鈴を搖して云はく、「明頭來や明頭打、暗頭來や暗頭打、四方八面來や旋風打、虚空來や連架打。」師、侍者をして去つて纔に是の如く道ふを見て、便ち把住して云はしむ、「總に不與麼に來る時如何。」普化托開して云はく、「來日大悲院裏に齋あり。」侍者回つて師に舉似す、師云はく、「我從來這漢を疑著す。」

一老宿有つて師に參す、未だ會て人事せず、便ち問ふ、「禮拜せんか即ち是、禮拜せざらんか即ち是。」師便ち喝す、老宿便ち禮拜す。師云はく、「好箇の草賊。」老宿、「賊賊。」といつて便ち出で去る。師云はく、「道ふこと莫れ無事にして好しと。」首座侍立する次、師云は

く、「還つて過ありや也無や。」首座云はく、「有り。」師云はく、「賓家に過あるか、主家に過あるか。」首座云はく、「二俱に過あり。」師云はく、「過什麼の處にかある。」首座、便ち出で去る。師云はく、「道ふこと莫れ、無事にして好しと。」後に僧有つて南泉に舉似す、南泉云は

く、「官馬踏む。」師因に軍營に入つて着に赴く。門首に員僚を見て、師露柱を指して問ふ、「是れ凡か是れ

聖か。」員僚無語、師露柱を打して云はく、「直饒道ひ得るも也祇是れ箇の木樨。」と。便ち入

り去る。

【黃茶】 古茶

【畫一畫して】 前へ引き廻すこと

【樂普】 樂普元安、又洛浦と書く、爽山善會に嗣ぐ。

【第二代】 徳山第一代は三角總印、馬祖に嗣ぐ、第二代宣嘜師は龍潭信に嗣ぐ。

師、師上に問ふ、「什麼の處より来る。」主云はく、「州中に黄茶を籠り取り来る。」師云はく、「籠り得ますか。」主云はく、「籠り得ます。」師杖を以て面前に畫一畫して云はく、「還つて這箇を籠り得てんや。」主便ち打す、師便ち打す。典座坐る、師前話を舉す。典座云はく、「院主、和尚の意を會せず。」師云はく、「爾作麼生、典座便ち禮拜す、師亦打す。」

座主有り、來つて相看する次、師問ふ、「座主何の經論をか誦す。」師云はく、「某甲荒處にして、粗音法論を習ふ。」師云はく、「一人有り、三乘十二分教に於て明得、一人あり、三乘十二分教を明得ず、是れ同か是れ別か。」主云はく、「明得せば則ち同、明不得ならば即ち別。」樂普住持たり、師の後になつて立つて云はく、「座主這裏是れ什麼の所在ぞ、同と總き別と誰く。」師首を回して侍者に問ふ、「汝又作麼生、侍者便ち喝す、師座主を送り回りに來つて、遂に侍者に問ふ、「適來是れ汝老僧を喝するか。」侍者云はく、「是、師便ち打す。」

師、第二代徳山、垂示して、「道ひ得るも亦三十棒、道ひ得ざるも也三十棒。」と云ふを聞いて、師、樂普をして去つて、道ひ得ば什麼としてか也三十棒と問うて、伊が汝を打せんと待つて棒を撞住し、送一送して他を作麼生と看せしむ。普彼に到つて教の如く問ふに、徳山便ち打す。普撞取して送一送す、徳山便ち方丈に歸る。普回つて師に舉似す、師云はく、「我從來這漢を疑普す、然も是の如くなりと雖も、汝還つて徳山を見るや。」普擬議す、師便ち打す。

王常侍一日師を訪ふ、師と同じく僧堂前に於て、看て乃ち問ふ、「這一堂の僧、還看經す

【香山】 涿山香山の隘洪。雲巖巖最の法嗣。

【露地白牛】 平等齋一の義。露地は本地に同じ、白牛は清淨無垢の意。

【叫畔】 牛の鳴き聲。

【嘔する那】 嘔にたりし。

【大覺】 大覺は覺有の大覺、臨濟に嗣ぐ。興化の思入。

【趙州】 南泉普願に嗣ぐ。

るや。師云はく、「看經せず。侍云はく、「還つて禪を學するや。」師云はく、「禪を學せず。侍云はく、「經も又看せず。禪も又學せずんば、畢竟箇の什麼をか作す。」師云はく、「總に伊をして成佛作祖し去らしむ。侍云はく、「金屑貴しと雖も、眼に落ちて翳と成る、又作塵生。」師云はく、「將に爲へり、備は是れ箇の俗漢と。」

師、香山に問ふ、「如何なるか是れ露地の白牛。」山云はく、「叫畔。」師云はく、「嘔する那。」山云はく、「長老作塵生。」師云はく、「這畜生。」

師、樂普に問うて云はく、「從上來一人は杖を行じ、一人は曝を行す、阿那箇か親しき。普云はく、「總に親しからず。」師云はく、「親處作塵生。」普便ち答す、「師乃ち打す。」

師、俗の來るを見て兩手を展開す、僧無語、師云はく、「會するや。」云はく、「不會。」師云はく、「渾崙擗けども聞けず、汝に兩文錢を與へん。」

大覺到り參す、師拂子を擧起す。大覺坐具を敷く、師拂子を擲下す。大覺坐具を收めて僧堂に入る。衆僧云はく、「這僧是れ和尚の親故なること莫しや、禮拜せされども、又棒を喫せず。」師聞いて覺を喚ばしむ、覺出づ。師云はく、「大業道ふ、汝未だ長老に參ぜずと。」覺云はく、「不審。」といつて便ち自ら來に歸す。

趙州、行脚の時、師に參す、師の洗脚するに遇ふ來、州使ち問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」師云はく、「恰も老僧が洗脚するに値ふ。」州近前して地く勢を作す。師云はく、「更に第二枝の惡水澆がんことを要すること有り。」州便ち下り去る。

【定上座】 臨濟に副ぐ。

【攝住】 胸を捉へる。

【托閑】 つきはなす。

【佇立】 たぢくしたる貌。

【麻谷】 麻谷寶微は馬祖に副ぐ。

【相捉へて】 神通

【探筆影草】 筆先に草を着け水上に振りて魚の有無を試む。

【龍牙】 湖南の龍牙山居遁禪師は洞山价に副ぐ。

【祖師西來意】 達磨は何の爲に支那に來たりしか。

【禪取】 坐禪のとき用ふる脇息。

【過し來れ】 持ち來れの意。

定上座有つて到り參ず、問ふ、「如何なるか是れ佛法の大意。」師繩床を下つて擒住して、一掌を與へて便ち托閑す。定佇立す。傍僧云はく、「定上座何ぞ禮拜せざる。」定禮拜するに方つて忽然として大悟す。

麻谷到り參ず、坐具を敷いて問ふ、「十二面の觀音、阿那面が正。」師繩床を下つて一手は坐具を收め、一手は麻谷を擡へて云はく、「十二面の觀音、什雲の處に向つてか去る。」麻谷身を轉じて繩床に坐せんと擬す。師杖を拈じて打す。麻谷接却して相捉へて方丈に入る。

師、僧に問ふ、「有る時の一喝は、金剛王寶劍の如く、有る時の一喝は、踏地金毛の獅子の如く、有る時の一喝は、探筆影草の如く、有る時の一喝は、一喝の用を作さず。汝作麼生か會す。」僧擬議す、師便ち喝す。

師、一尼に問ふ、「善來か惡來か。」尼便ち喝す、師棒を拈じて云はく、「更に道へ更に道へ。」尼又喝す、師便ち打つ。

龍牙問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」師云はく、「我が與に禪版を過し來れ。」牙便ち禪版を過して師に與ふ。師接得して便ち打す。牙云はく、「打つことは則ち打つに任す、要且つ祖師意無し。」牙後に翠微に到つて問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」微云はく、「我が與に蒲團を過し來れ。」牙便ち蒲團を過して翠微に與ふ、翠微接得して便ち打つ。牙云はく、「打つことは則ち打つに任す、要且つ祖師意無し。」牙、住院して後、僧あり、室に入つて請

【要且つ祖師意無し】祖師西來意は飛び出さずと。

【丹震天然に嗣ぐ】徑山の開山國一は牛頭融の七世、唐の徳宗貞元八年十二月示寂。

【裝腰】行脚の僧の威儀を具せざる貌。

【普化】盤山寶積に嗣ぐ。

【直裰】法衣を云ふ。

【要せず】受けず。

【一具】一そろひ。

【城外】鎮州城北門外。

益す。云はく、『和尙行脚の時、二尊宿に參ず、因縁還つて他を肯ふや也無や。』牙云はく、

『肯ふことは則ち深く肯ふ、要且つ祖師意無し。』

徑山に五百の衆あり、人の參請する少し。黄檗、師をして徑山に到らしむ。乃ち師に謂

つて曰はく、『爾彼に到つて作麼生。』師云はく、『某甲彼に到つて自ら方便あり。師徑山

に到る、裝腰して法堂に上つて徑山に見ゆ、徑山頭を擧するに方つて、師便ち喝す。徑山

口を開かんと擬す。師便ち拂袖して便ち行く。尋いで僧あり、徑山に問ふ、『這僧適來什麼

の言句有つてか便ち和尙を喝す。徑山云はく、『這僧、黄檗の會裡より來る、爾知らんと要

するや、且く他に問取せよ。』徑山五百の衆、太半分散す。

普化、一日街市の中に於て、人に就いて直裰を乞ふ、人皆之を與ふ、普化俱に要せず。

師、院主をして槍一具を買はしむ、普化歸り來る。師云はく、『我汝が與に、箇の直裰を做

し得たり。』普化便ち自ら擔ひ去つて、街市を繞つて叫んで云はく、『臨濟我が與に直裰を

做し了れり、我東門に往いて遷化し去らん。』と。市人競ひ隨つて之を看る。普化云は

く、『我今日未だし、來日南門に往いて遷化し去らん。』と。是の如くすること三日、人皆信

ぜずして第四日に至つて人の隨ひ看る無し。獨り城外に出でて自ら棺内に入つて、路行

の人を倩つて之に釘うたしむ、即時に傳布す。市人競ひ往いて棺を聞くに、乃ち全身脱去

するを見る。祇空中に鈴の響の隱隱として去るを聞く。

【行録】臨濟の平生の作略を録す。

【首座】黃檗の法嗣。師。卅州。道鏡。尊宿。

【的的】實なり。的要の處なり。

行録

師初め黃檗の會下に在つて、行業純一なり。首座乃ち執じて曰はく、「是れ後生なりと雖も、衆と異なることあり。」「遂に問ふ、「上座此にあること多少の時ぞ。師云はく、「三年。」「首座云はく、「曾て參問するや也無や。」「師云はく、「曾て參問せず、知らず今の什麼をか問はん。」「首座云はく、「汝何ぞ去つて堂頭和尚に問はざる、如何なるか是れ佛法的の大意と。」「師便ち去つて問ふ、聲未だ絶えざるに、黃檗便ち打す。師下り來る。首座云はく、「問話作麼生。」「師云はく、「某甲、問聲未だ絶たざるに、和尚便ち打す、某甲會せず。」「首座云はく、「伊更に去つて問へ。」「師又去つて問ふ、黃檗又打す、是の如く、三度問を發して、三度打せらる。師來つて首座に白して云はく、「幸に慈悲を蒙りて、某甲をして和尚に問講せしむ。三度問を發して、三度打せらる。自ら恨む、障緣あつて深旨を領せざることを。今日く辭し去らん。首座云はく、「汝若し去らん時は、須らく和尚を辭して去るべし。」「師禮拜して退く、首座先づ和尚の處に到つて云はく、「問話座の後生、甚だ是れ如法なり。若し來つて辭せん時は、方便して他を接せよ。向後實學して一株の大樹と成さば、天下の人の興に蔭涼と作り去ること存らん。師去つて辭す。黃檗云はく、「別處に往き去ることを得ざれ、汝高安灘頭大愚の處に向つて去れ、必ず汝が爲に説かん。師大愚に到る、大愚問ふ、「什麼の處

【他】臨濟。  
 【穿鑿】鍛鍊。  
 【大樹】大宗師。  
 【蔭涼】諸人の熱惱を除く。



【微園】 丁寧深切なるを云ふ。  
 【多子無し】 さしたることなし。  
 【獨住】 とこへとむる意。  
 【過來】 さきには。

【人事了了つて】 雑話をして從。  
 【昨】 過ぎし方。  
 【道漢】 大愚をさす。  
 【一頓云云】 二十棒を與へん。

【虎頭】 大愚をさす。  
 【虎尾】 黄檗をさす。

よりか來る。師云はく、「黄檗の處より來る。」天愚云はく、「黄檗何の言句か有りし。」師云はく、「某甲、三度佛法的的大意を問うて三度打せらる、知らず某甲過ありや過無しや。」天愚云はく、「黄檗奥密に老婆なり、汝が爲に微園なることを得たり、更に道裏に來つて、有過か無過かと問へ。」師言下に大悟して云はく、「元來黄檗の佛法多子無し。」天愚獨住して云はく、「道屎尿の鬼子、過來は有過か無過かと道ふ。如今は却つて道ふ、黄檗の佛法、多子無しと、彌簡の什麼の道理をか見る、速かに道へ速かに道へ。」師大愚の脇下に於て築くと三拳、大愚托問して云はく、「汝が師は黄檗なり、我が事に干るに非ず。」師大愚を辭して黄檗に却回す。黄檗來るを見て便ち問ふ、「道漢、來來去去して什麼の了朝か有らん。師云はく、「祇老婆心切なるが爲なり。」便ち人事了了つて侍立す。黄檗問ふ、「什麼の處にか去來する。」師云はく、「昨、慈旨を奉じて大愚に參じて去來せしむ。」黄檗云はく、「大愚何の言句か有りし。」師遂に前話を擧す。黄檗云はく、「作麼生か道漢の來ることを得ん、待つて痛く一頓を與へん。」師云はく、「什麼の來るを待つとか説かん、即今即ち喫せよ。」といつて、後へ隨つて便ち掌す。黄檗云はく、「道風飄漢、却つて道裏に來つて虎鬚を拂づ。」師使ち喝す。黄檗云はく、「侍者、道風飄漢を引いて參堂し去らしめよ。」後に彌山、其話を奉して仰由に問ふ、「臨濟、當時大愚の力を得るか、黄檗の力を得るか。」師彌山云はく、「但虎頭に騎るのみに非ず、亦虎尾を把ることを解す。」

師松を裁うる次、黄檗問ふ、「深山裡に許多を裁きて什麼をか作ん。」師云はく、「一には山

【嘯嗑云云】人を嘯じたる指舞。

【一人南を指して】之は風穴和尚を識するなりと添注あるも妄注なり。

【止】至極。休歇。定るの義。

【今日困す】疲勞せり。

【這漢困する那】此前は疲勞したるかの意。

【一送込送倒】捕へて突倒す。

【維那】次第と翻す。僧衆又は知事。

【正賊】臨濟。維那。

門の與に境致と作し、二には、後人の與に標榜と作さん。と道了つて、鑿頭を將て地を打すること三下す。黄檗云はく、然も是の如くなりと雖も、子已に吾が三十棒を喫し了れり。師又鑿頭を以て地を打すること三下す、嘯嗑の聲を作す。黄檗云はく、「吾が衆、汝に到つて大いに世に興らん。後に雪山此語を擧して仰山に問ふ、黄檗當時、祇臨濟一人に囑するか、更に人の有る在るか。仰山云はく、「有り、祇是れ年代深遠なり、和尚に舉似せんことを欲せず。瀉山云はく、然も、是の如くなりと雖も、吾亦知らんことを要す。汝、但舉せよ看ん。」仰山云はく、「一人南を指して、吳越に令行せん。大風に遇はば、即ち止まん。」風穴和尚を

師、徳山に侍立する次、山云はく、「今日困す。」師云はく、「這老漢寐語して什麼か作ん。」山便ち打す、師、繩床を掀倒す、山便ち休す。

師、普請して地を鋤く次、黄檗の來るを見て、鑿を拄へて立つ。黄檗云はく、「這漢困する那。」師云はく、「鑿も也未だ擧せず、箇の什麼にか困せん。」黄檗便ち打す、師棒を接住して一送込送倒す。黄檗、維那維那、我を扶起せよと喚ぶ。維那近前して扶けて云はく、「和尚争か這風顛漢の無禮なるを容し得ん。」黄檗杖に起つて、便ち維那を打す、師地を鑿して云はく、諸方は火葬なり、我が這裏は一時に活埋せん。後に瀉山、仰山に問ふ、「黄檗

維那を打す、意作麼生。」仰山云はく、「正賊走却して、遷蹤の入棒を喫す。」

師一日、僧堂前に在つて坐す、黄檗の來るを見て、便ち目を閉却す。黄檗乃ち怖るる

【首座】 陸州。

【證據】 印可。

【板頭】 僧堂の床がまちの板。

【上間】 本堂の左邊則ち東廊。

【兩彩一雲】 首座と臨濟とが一つといふ義。

【一人有つて】 一人は事理の二を合む、理は則ち那一人。事は則ち黄檗。

勢いきほひを作して方丈ほうぢやうに歸る、師し隨つて方丈ほうぢやうに至つて禮謝らいしゃす。首座しゆざ、黄檗わうはくの處ところに在つて侍立じりつす、黄檗わうはく云はく、『此僧このそうはれ後生ごせいなりと雖も、却つて此事このじ有ることを知る。首座しゆざ云はく、『老和尚らうわうしやう脚跟地こつこんちに點てんぜず、却つて箇このの後生ごせいを證據しやうこす。黄檗わうはく自ら口上くちやうに於て打すること一擱いっくわくす。首座しゆざ云はく、『知らば即ち得てん。』

師し、堂中どうちゆうに在つて睡る。黄檗わうはく下り來つて見て、拄杖ちゆぢやうを以て板頭ばんとうを打すること一下いちげす。師し頭かうべを舉げて是れ黄檗わうはくなることを見て却つて睡る、黄檗わうはく又板頭ばんとうを打すること一下いちげす。却つて上間じやうかんに往いて首座しゆざの坐禪ざぜんするを見て、乃ち云はく、『下間げかんの後生ごせい却つて坐禪ざぜんす、汝なんぢ這裏こゝに妄想まうそうして什麼なにか作ん。』首座しゆざ云はく、『這老漢このらうかんな什麼なにをか作す。黄檗わうはく板頭ばんとうを打すること一下いちげして便ち出で去る。後に瀉山しゃせん、仰山やうせんに問ふ、『黄檗わうはく、僧堂そうどうに入る意い作麼生やませい。』仰山やうせん云はく、『兩彩りうさい一雲いちぐん。』

一日いちにち普請ふしんする次ついで、師し後に在つて行く、黄檗わうはく頭かうべを回かへして、師しの空手くうしゆなるを見て、乃ち問ふ、『鏝頭くわんとう什麼なにの處ところにか在る。』師し云はく、『二人有つて將まさち、去り了しやうり。』黄檗わうはく云はく、『近前きんぜん來、汝なんぢと共に箇このの事を商量じやうりやうせん。』師し便ち近前きんぜんす、黄檗わうはく、鏝頭くわんとうを堅起けんきして云はく、『祇ただ這箇このの天下てんかの人、拈ねん撥はく不起ふき。』師し手に就ついて掣せし得て堅起けんきして云はく、『什麼なにとしてか却つて某甲かつがが手裏てのうらに在る。』黄檗わうはく云はく、『今日こんにち大いに人有つて普請ふしんす。』といつて便ち院いんに歸る。後に瀉山しゃせん、仰山やうせんに問ふ、『鏝頭くわんとう、黄檗わうはくの手裏てのうらに在り、什麼なにとしてか却つて臨濟りんざいに奪うば却かへせらる。』仰山やうせん云はく、『賊ぞくは是れ小人せうじん、智ち、君子くんしに過ぎたり。』

【約佳】 手をむづとつかむこと。

【老兄】 麻濟を指す。

【適來云云】 さき二書を呈したる者が導首なりと。

【太多生】 澤山して云ふ。

【一人】 普化を指す。

【法相黑豆】 黑豆數ふる老和尚、或は文字に没るの義、畢竟看經を斥す。

【黃檗便ち打】 賞格なり。

【禪板几案云云】

師、黃檗の爲に書を題せて瀉山に去る、時に仰山知客と作る、書を接得して便ち問ふ、  
 「這箇は是れ黃檗底、那箇は是れ專使底。師便ち掌す。仰山約住して云はく、「老兄是れ般  
 の事を知らば便ち休せよ。」同じく去つて瀉山に見ゆ、瀉山便ち問ふ、黃檗師兄、多少の衆  
 ぞ。師云はく、「七百衆。瀉山云はく、「什麼人か導首たる。」師云はく、「適來已に書を達した  
 り。師却つて瀉山に問ふ、「和尚此間多少衆ぞ。」瀉山云はく、「一千五百衆。師云はく、「太  
 多生。瀉山云はく、「黃檗師兄も亦少からず。師瀉山を辭す、仰山送り出して云はく、「汝向  
 後北に去らば、箇の住處有らん。」師云はく、「豈與麼の事あらんや。」仰山云はく、「但去れ、  
 已後に一人有つて老兄を佐輔すること有らん。此人祇是れ頭有つて尾無く、始有つて終無  
 けん。」師後に鎮州に到る、普化已に彼中に在り、師出世すれば普化、師を伴贊す。師、住  
 すること未だ久しからざるに、普化全身脱去す。

師因に半夏、黃檗に上る。和尚の看經するを見て、師云はく、「我將に謂へり、是れ箇の  
 人、元來はれ指黑豆の老和尚と。住すること數日にして、乃ち辭し去る。黃檗云はく、「汝  
 夏を破つて來り。夏を終へずして去る。」師云はく、「某甲暫く來つて和尚を禮拜す。黃檗  
 に打つて趨うて去らしむ。師行くこと數里、此事を疑つて却回して夏を終ふ。師一日黃檗  
 を辭す。檗問ふ、「什麼の處にか去る。」師云はく、「是れ河南にあらずんば便ち河北に歸せ  
 ん。」黃檗使ち打す、師約住して一掌を與ふ。黃檗大笑して乃ち侍者を喚ふ、「百丈先師の  
 禪板几案を將ち來れ。」師云はく、「侍者火を將ち來れ。」黃檗云はく、「然も是の如くなり」と雖

百丈禪師より黃檗へ印可の支證に與へたる禪版几案を師に印可の支證に與へんと。  
 【火を將ち來れ】  
 之は燒索つべし。  
 【恩を知つては云云】  
 燒身之處が眞實の報恩處。

【達磨の塔頭】  
 無耳聾の少林寺。  
 【拂袖】  
 座敷を蹴立てて去る。

【龍光】  
 馬祖下の傍宿。  
 【據坐】  
 居なほりたる處。  
 【昏目】  
 目をみはる。  
 【暖】  
 幼兒のおびえて流く聲。  
 【峰平は師承未詳】。

も、汝但將ち上れ。已後、天下の人の舌頭を穿却し去ることならん。後に嵩山、仰山に問ふ。臨濟他の黃檗に事負すること無しや也無や。仰山云はく、然らず。嵩山云はく、子又作麼生。仰山云はく、恩を知つては方に恩を報ずることを誓す。嵩山云はく、從上の古人遇つて相似處ありや也無や。仰山云はく、有り、孰是れ年代深沈なり、和尚に樂似せんことを欲せず。嵩山云はく、然も是の如くなりと雖も、吾も亦知らんことを要す、子但學せよ看ん。仰山云はく、祇楞嚴會上に阿祖、佛を讚じて、此深心を解て摩訶に奉せん云ふが如きんば、是れ則ち名けて佛恩を報ずと爲すと、豈是れ報恩の事にあらずや。嵩山云はく、如是如是。見、師と齊しうして、師に半徳を減ず、見、師に過きて方に傳授するに堪へたり。

師、達磨の塔頭に到る。塔主云はく、長老先づ佛を禮せんか、先づ祖を禮せんか。師云はく、佛祖ともに禮せず。塔主云はく、佛祖と長老と是れ什麼の冤家ぞ。師便ち拂袖して出づ。

師行脚の時、龍光に到る。光上堂す、師出でて問ふ、鉢鉢を展べす、如何が勝つことを得ん。光據坐す。師云はく、善知識、何方便無からんや。光瞠目して云はく、暖。師手を以て指して云はく、這老漢、今日敗闕せり。

三峯に到る、平和尙問ふ、什麼の處よりか來る。師云はく、黃檗より來る。平云はく、黃檗何の言句がある。師云はく、金牛昨夜涅槃に遇ふ、直に如今に至るまで蹤を見ず。

【金風玉管】金風は秋の風、玉管は笙の管なり。

【萬重の關云】これは百濟の點胸なり。

【太高生】餘りたかぶる勿れ。

【龍金六云】師の自負を示す。碧琉璃は尺。

【且坐喫茶云】まづ茶にても喫せよ。

【近離甚れの處】近頃いづこに住するぞ。

【大慈】大慈山袈中は百丈の法嗣。

【華嚴】馬祖下の華嚴智度か。

【第三位】臨濟を賞讃して掛指をゆるす。三位は後堂の位。

【翠峰】師承未詳。

【象田】象田は師承未詳。

【禿子】慈知識めくら僧。

【什麼の梳云云】

平云はく、「金風玉管を吹く、那伽か是れ如音。師云はく、「直に萬重の關を透つて、雲霧の内に住らす。」平云はく、「予が這一問、太高生、師云はく、「龍金置子を生じて碧琉璃を破す。」平云はく、「且坐喫茶。」又問ふ、「近離甚れの處ぞ。」師云はく、「龍光。」平云はく、「龍光近日如何。」師便ち出で去る。

大慈に到る、慈、方丈の内に在つて坐す。師問ふ、「丈室に端居する時如何。」慈云はく、「寒松一色千年別なり、野老半枯萬葉の春。」師云はく、「今古永く超車圓智の體。」山鎮す萬重の關。」慈便ち喝す、師亦喝す。慈云はく、「作麼。」師拂袖して便ち去る。

襄州の華嚴に到る、嚴、拄杖に倚へて睡る勢を作す。師云はく、「老和尚、瞌睡して作麼かせん。」嚴云はく、「作家の禪客、宛爾として同じからず。」師云はく、「侍者、茶を點じ來つて、和尚に與へて喫せしめよ。」嚴乃ち鐘杵を喚ぶ、「第三位に這上座を安排せよ。」と。

翠峯に到る、峯問ふ、「甚れの處より來る。」師云はく、「黃檗より來る。」峯云はく、「黃檗何の言句有つてか人に指示する。」師云はく、「黃檗に言句無し。」峯云はく、「什麼としてか無き。」師云はく、「設し有るも亦舉する處なし。」峯云はく、「但舉せよ看ん。」師云はく、「一箇西天を過ぐ。」

象田に到る、師問ふ、「凡にあらず聖にあらず、請ふ師速かに道へ。」田云はく、「老僧祇與麼。」師便ち喝して云はく、「許多の禿子、這裏に在つて什麼の梳をか覓めん。」

明化に到る、化問ふ、「來來去去して什麼をか作す。」師云はく、「祇徒らに草鞋を踏破す。」

なんのへちまの皮をもとむるなどと云ふが如し。  
【明化】明化は師承未詳。  
【鳳林】鳳林は師承未詳。

【海月澄】これは臨濟が「明自負」を柳下す。  
【游魚云云】臨濟を柳下す。  
【蕪風如浪】臨濟を柳下す。

【無情云云】此二句とも師の我を托上して云へり。  
【路に劍客云云】鳳林を柳下するの意。

【金牛】金牛は鎮州金牛。馬祖に嗣ぐ。  
【第一位】前堂の位。

化云はく、「畢竟作麼生。」師云はく、「老漢話頭も也識らす。」

鳳林に往く、略に一婆に逢ふ。婆問ふ、「甚れの處にか去る。」師云はく、「鳳林に去る。」婆云はく、「恰も鳳林の在らざるに値ふ。」師云はく、「甚れの處にか去る。」婆便ち行く、師乃ち

「婆」と喚ぶ、婆頭を回す、師便ち打す。

鳳林に到る、林問ふ、「事有り、相借問し得てんや。」師云何ぞ肉を割つて瘡を作すことを得ん。」林云はく、「海月澄んで影無く、游魚獨り自ら迷ふ。」師云はく、「海月既に影無ければ、游魚何ぞ迷ふことを得ん。」鳳林云はく、「風を觀て浪の起るを知り、水を翫んで野帆

飄る。」師云はく、「孤輪獨り照して江山靜なり、自ら笑ふ一體天地驚く。」林云はく、「任ひ三寸を將て天地を踏すも、一句機に臨んで試に道へ、看ん。」師云はく、「路に劍客に逢

はば須らく劍を呈すべし、是れ詩人にあらんば、詩を獻ずること莫れ。」鳳林便ち休す。師乃ち頷あり、「正道師を絶す、西東に向ふに任す、石火も及ぶこと莫く、電光も通ずること

同し。」涌山、仰山に問ふ、「石火も及ぶこと莫く、電光も通ずること同くんば、從上の諸

聖什麼を將てか人の爲にせん。」仰山云はく、「和尚の意作麼生。」涌山云はく、「但言誦有つて都て寔義無し。」涌山云はく、「然らず。」涌山云はく、「子又作麼生。」仰山云はく、「官には計を

も容れず、私に車馬を通ず。」

金牛に到る、牛、師の來るを見て、横に拄杖を按じて、門に當つて坐す。師手を以て拄杖を敲くこと三下して、却つて堂中に歸して第一位に坐す。牛下り來つて、見て乃ち問

【坐上堂】三聖を  
【瞎臨濟】三聖を  
云ふ。臨濟は世尊  
より三十八世の正  
統、此漢却といふ  
語によりて、臨濟  
今に正宗あり。

【略傳】 保壽沼の  
誌す所。

【曹州】 楚の内、  
南華は縣。  
【講肆】 講學の學  
校。  
【衣を更へて】 律  
衣を禪衣にかへて

ふ。夫れ賓主の相見は各威儀を具す、上座何れより來つてか、太だ無禮生なる。師云はく、老和尚什麼と遣ふぞ。牛、口を開かんと擬す、師便ち打す。牛倒るる。勢を作す。師又打す。牛云はく、今日便を著す。遍山、仰山に問ふ、此二尊宿還つて勝負ありや也無や。仰山云はく、勝つときは即ち總に勝ち、負くるときは即ち總に負く。

師遷化に臨む時、坐上據つて云はく、吾滅後、吾正法眼藏を滅却することを得され。三聖出でて云はく、爭か敢て和尚の正法眼藏を滅却せん。師云はく、已後人有つて備に問はば、他に向つて什麼よか道はん。三聖便ち喝す。師云はく、誰か知る、吾正法眼藏、這際馳邊に向つて滅却することを。言ハ訖つて端然として寂を示す。

略傳

師、諱は義玄、曹州南華の人なり。俗姓は邢氏、幼にして穎異なり。長じて孝を以て聞ゆ。落髮を具するに及んで講肆に居り、精しく毘尼を究め、博く經論を隨る。俄に歎じて曰はく、此れ濟世の醫方なり、教外別傳の旨に非ず。といつて、即ち衣を更へて遊方す。首め黃檗に參じ、次に大愚に講す、其機縁語句、行録に載せたり。既に黃檗の印可を受け、尋いで河北に振る。鎮州城の東南の隅、潯沱河の側に臨んで小院に住持す。其臨濟は地に因つて名を得たり。時に普化、先づ彼に在つて、伴狂として衆に混ず、聖凡測ること莫



【太尉】 司馬なり  
【默君和】 或は墨  
君和。墨が正。

【河府】 河南府。

【孟陬】 正月、又  
四月の兩説あり、  
今の正月は秦漢の  
閏月。

【全身を以て】 捲  
土。

【勅諭】 唐の十八  
代懿宗帝より賜ふ

し。師し至いたれば即すなはち之これを佐たすく。師し、化けを託たくにするに正ただつて、普ふ化け全身ぜんしん脱だつ去こす、乃すなはち仰おほ山さん小せう釋しやく迦かの懸けん記きに符かなへり。適た兵へい革かくに丁おたつて、師し即すなはち棄すて去こる。太尉たいむ默もく君くん和わ、城じやう中ちゆうに於おて宅たくを捨すてて寺てらと爲なし、亦また臨りん濟ぎを以もちて額がくと爲なして、師しを迎むかへて焉なに居ゐらしむ。後のちに衣えを拂はらつて南なん適たつして河か府ふに至いたる。府ふ主しゆ王わう常じやう侍じ延えんくくに師しの轡しを以もちてす。住ぢゆうすること未いまだ幾いならざるに、即すなはち大名だいみやう府ふの興きやう化け寺てらに來きたつて東とう堂だうに居ゐす。師し疾まひ無なうして、忽いち一日いちじつ衣えを擲なめて據きよ坐ざし、三さん聖せいと問と答た畢ひつて寂じやく然ぜんとして逝せす。時ときに唐たうの咸かん通つう八はち年ねん丁てい亥がい五ご陳ちんの月つき十じゆ日にちなり。門もん人じん、師しの全ぜん身しんを以もちて塔たふの大名だいみやう府ふの西せい北ほくの隅ぐまに建たつ、勅たふして慧え照じやう禪ぜん圖とと謚さし、塔たふを證じやう靈れいと號ごうす。合がふ掌しやう稽き首しゆして師しの大たい略りやくを記きす。

鎮州ちんしゆうの保ほ壽じゆうに住すする嗣し法ぽうの小せう師し延えん沼ぢゆう謹きんんで書かす

大名だいみやう府ふの興きやう化けに住すする嗣し法ぽうの小せう師し存そん獎かう校かう勘かん  
鎮州ちんしゆう黃わう山さんに住すする眞ま覺かく心しん禪ぜん宗そう演えん重じゆう開かい

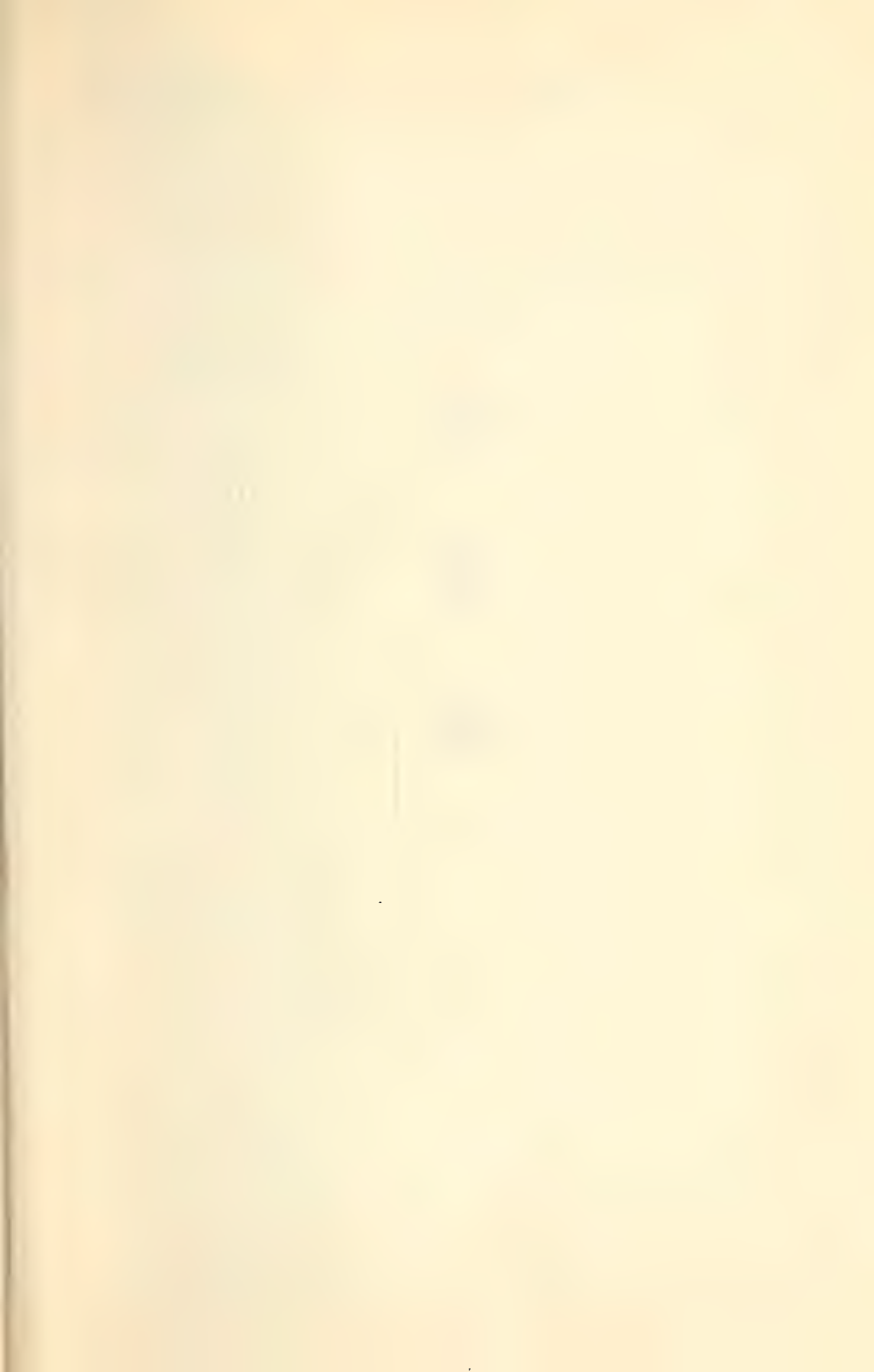
鎮州臨濟慧照禪師語錄終



碧

巖

錄



碧巖錄

第一則

垂示に云はく、山を隔てて烟を見て、早く是れ火なることを知り、角を隔てて角を見て、便ち是れ牛なることを知る。一學一明三、目機鉄兩、是れ納僧家尋常の茶飯、衆流を截斷するに至つては、東涌西沒、逆順縦横、與奪自在なり、正當恁麼の時、且く道へ、是れ什麼人の行履の處ぞ、雪竇の揭鉢を看取せよ。

【本期】學す、梁の武帝、達磨大師に問ふ。「這不禪師を聞くの漢。」「如何なるか是れ。」【第一義】「是れ甚の繫脚襪ぞ。」磨云はく、「廓然無聖。」【將に謂へり】多少の奇特と、磨新羅を過ぐ、可憐だ明白。帝曰はく、「朕に對する者は誰ぞ。」【滿面の慚惶】強ひて惶惶、果然として摸索不著。磨云はく、「不識。」【咄】再來小文錢に直らす。帝契はず。「可惜許、却つて些子に較り。」達磨遂に江を渡つて、魏に至す。「這野狐精、一場の懺悔を免れず、西より東に過ぎ、東より西に過ぐ。」【晝後に學して志公に問ふ。】「貧兒舊債を思ふ、傍人眼有り。」志公云はく、「陛下還つて此人を識や否や。」【志公に和して、國を趕ひ出して始めて得ん、好し二十棒を與ふるに、達磨來也。】帝云はく、「不識。」【却つて是れ武帝達磨の公案を承當得ず。】志公云はく、「此は是れ觀音大士、信心印を傳ふ。」【胡亂

【此錄は雪嶺重巖が會て撰びたる一書、百則、額古に關佛克勤が宋の徽宗皇帝和年間達磨東山の遺案にありて垂示、著明、詳明を加へ、後人の門人等之を傳はり、清機鐵兩と題り、別名は無し、靈泉院方丈の孤韻に因り。

【本則】又は公案

【學】宣揚して人に示す。又舉揚とも云ふ。

【武帝】梁の高祖武帝、姓は蕭字は叔達、日本の體天皇の頃。

【第一義】無上根元の道理。

【無量】凡聖高僧の相を超越するなり。

【不盡】ああるる意。

【志公印】寶誌律師の印可證契。

に指注す、臂膊外に向つて曲らす。帝悔いて、遂に使を遣はし去つて請ぜんとす。(梨然として把不住、向に道ふ不難と。)志公云はく、「道ふこと莫れ、陛下夜を發し去つて取らしめんこと。(東家の入死すれば、西家の入哀を助く、也好し一時に暈を起ひ出すに)闔國の人去るとも、佗亦同らじ。(志公也好し、三十棒を與ふるに、知らず脚跟下大光明を放つことを)」

【類】羣論廓然(情智識を過ぐ、曠)何ぞ當に的を對すへき。(河也、何の辨じ難きことか有らん。)朕に對する者は誰ぞ。「再來半文錢に直らず、又慈悲にし去れり」還つて云ふ不識と。(三個四個中れり、咄)慧に因つて暗に江を渡る。「人の鼻孔を穿つこと得ず、却つて別人に穿たる、蒼天蒼天、好し大丈夫にあらず」豈非棘を生ずることを免れんや。(脚跟下已に深きこと數丈。)闔國の人、追へども再來せし。(兩重の公案、追ふことを用て作麼かせん。什麼の處にか在る、大丈夫の志氣何にか在る)千古萬古空しく相憶ふ。(手を換へて智を植つ、空を望んで啓告す。)相憶ふことを休むも。(什麼と道ふぞ、鬼窟裏に向つて活計を作す)清風匝地何の極か有らん。(果然、し小の雪竇、草裏に向つて観ず。)師、左右を顧視して曰はく、「這裏還つて祖師有りや。(爾、翻款を得つ那、猶這去就を作す。)自ら云はく、「有り。」(塌薩阿勞。)喚び來せ、老僧が與に、洗脚せしめん。(更に三十棒を與へて、起ひ出すとも、未だ分外とせず。這去就を作す、幾些子に較れり。)

【第二則】宗旨の分ちは、夫れ臨濟は宗本と爲す所、雲門は宗の至る所、曹洞は宗の地體、沆仰は宗の法眼、は宗旨の爲人方便か、是れ皆趙州の棟樑に非ず、明白に非ざるの中に在るのみ。

【趙州】諱は從念、南泉に嗣ぐ、唐の昭宗乾寧四年十二月寂す、壽百二十一。

【至道】三祖の信心路にあり、向上宗乘即ち絶對的眞理。

【棟樑】差別的見解。

【明白】是非を超越。  
【護持】守護大切事を問ふ。理窟を云ふことはの意即ち得よくするの意。

第二則

垂示に云はく、乾坤窄く、日月星辰一時に黒し。直饒棒、雨點の如く、喝、雷奔に似たるも、也未だ向上宗乗中の事に當得せず。設使三世の諸佛も、只自知すべし。歷代の祖師も、全提不起。一大藏教も詮注し及ぼさず。明眼の衲僧も、自救不了、這裡に到つて作麼生か請益せん。箇の佛の字を道ふも、拖泥帶水。箇の禪の字を道ふも、滿面の備情。久參の上士は、之を言ふを待たず。後學の初期は、直に須らく究取すべし。

【本則】擧す、趙州、案に示して云はく、〔這老漢、什麼をか作す、這葛藤を打すること莫れ〕。至道無難、一難に非ず、易に非ず。唯嫌揀擇、一眼前是れ什麼ぞ、三祖猶在り。一纜に語言有れば、是れ揀擇、是れ明白。〔兩頭三面、少賣弄、魚行けば水濁り、鳥飛べば毛落つ〕。老僧は明白裏に在らず。〔賊身已に露る、這老漢、什麼の處に向つてか去る〕。是れ汝邊つて護惜するや也無や。〔敗也、也一個半筒有り〕。時に僧有り、問ふ、既に明白裏に在らずんば、箇の什麼をか護惜せん。〔也好し一拶を與ふるに、百上の喝を在せ、〕。州云はく、我も亦知らず。〔這老漢を拶殺す、倒退三千〕。僧云はく、一和尚、既に知らずんば、什麼としてか却つて明白裏に在らずと道ふ。〔看よ、走りて什麼の處に向つてか去らん、遂つて欄に上り去らしむ。〕州云はく、一事を問ふことは即ち得たり、輕釋し了つて退け。〔頼に這一著有り、這老賊。〕

【音聲】音も正しくも、声もよくも、

【に多種あり】多種あり、

【相】相、

【相殺】平等と差別、

【天際】現成なる、

【喜】喜、

【銷】老朽の意、

【第三期】宗行の

出づる所を明す。

【馬大師】凡そ

提婆宗の語に依る

此目而佛月面佛を

要と爲す。

【馬大師】馬祖諱

【不安】不快病氣

【院主】寺務主任

【頌】至道無難。(三重の公案滿口に霜を合む、什麼と道ふぞ) 言端語端。(魚行けば水濁る、七花八製、捺胡也) 一に多種有り (分聞せば好し、只一葉ならは、什麼の了明か有らん) 一に雨般無し。(何ぞ堪へん四五六七、葛藤を打して什麼か作ん) 天際日上り月下る (雲雨相呈す、頭上漫漫腹下漫漫、切に忌む頭を昂げ頭を低るることを) 一機前山深ければ水寒し。(一死更に再活せず、渡つて寒手車堅することを尋らるや) 一機盡きて喜何ぞ立せん (枯木裏に露眼す、修行者は是れを同參) 枯木龍吟して未だ乾かず。(唯、枯木再び花を生ず、注磨東上に遊ぶ) 一機 (邪法扶け難し、倒一説、道裏はれ什麼の所在ぞ、難と説き易と説く) 揀擇明白君 自ら看よ。(瞎、將に謂へり、別人に由ると、頼に自ら看るに値ふ、由僧が事に下らず)

第三 三期

垂示に云はく、一機一境、一言一句、日く箇の入處有らんことを圖る、好肉上に瘡を剋る、瘡を成し窟を成す。大用諱前、軌則を存せず。日く向上の事有るを知らしめんことを圖る。蓋天蓋地、又摸索不着。恁麼も也得たり、不恁麼も也得たり、太應識生、恁麼も也得ず、不恁麼も也得ず、太孤危生。二塗に涉らず、如何が即ち是ならん。請ふ試みに擧す看よ。

【本則】擧す、馬大師不安。(這漢、漏逗少からず。別人を帶出しまれり。) 院主問ふ(和



【日月面】佛名經に日月佛は、壽命一千八百歳、月面佛は、壽命一晝夜。

【菩薩】觀家の儘に投じて辛苦する意。

【風】冤罪。

【輕忽】うっかりとの意。

【第四期】宗旨を磨瑩する所を明す。徳山は是れ納子の基、溈山も亦師家の宗、この期は二老を以て手本と爲す。

【徳山】諱は宣鑒、徳澤信に嗣ぐ、唐の咸通六年十二月寂す、年八十六。【溈山】諱は靈祐、百丈海に嗣ぐ、唐の大中七年正月寂す、年八十三。

尙近日尊侯如何。」(四百四病一時に發す、三日の後亡僧を送らずんば、是れ好手、仁義道中。) 大師曰はく、「日月佛月面佛。」(可然だ新鮮、養子の教。)

【頌】日月佛月面佛。(口を開かば瞳を見る、兩面の鏡の、相照して中に於て影無きが如し。) 五帝三皇是れ何物ぞ。(大高生、能を漫すること莫くんば好し、貴ぶべく、賤むべし。) 二十年來曾て苦辛す。(自らはれ備落草す、山僧が事に干らず、唯苦瓜を喫す。) 君が爲に幾か蒼龍窟に下る。(何ぞ急密なることを消せん、結つて用心すること莫くんば好し、道ふこと莫れ奇特無しと。) 一人を懸殺す、愁人に向つて説くこと莫れ。速するに堪へたり。(阿誰に向つてか説かん、愁人に説與すれば人を懸殺す。) 明眼の納僧も輕忽すること莫れ。(更に須らく子続にすべし、唯、倒退三千し。)

### 第四期

垂示に云はく、青天白日、更に東を指し、西を劃すべからず、時節因縁、亦俱らく病に應じて、藥を與ふべし、且く道へ、放行するが好き、把定するが好き、試みに舉す、看よ。

【本則】舉す、徳山溈山に到る。(碧峯漢、野狐林。) 後子を撰んで法堂上に於て、「妨げず人をして疑著せしむることを、敗法を納む。」(東より西に過ぎ、西より東に過ぎ、可然だ輕有つて什麼か作ん。) 顧視して無無と云つて便ち出づ。(好し三十棒を與ふるに、)

【襪子】俗に云ふ  
フロンキ一又襪  
といふ、行李や荷  
物なり。

【法堂】七堂伽藍  
の中、法堂。

【無茶】何にもな  
いの意。

【著語】下語に同  
じ、公案、例項の短  
評。

【勘了】勘了した  
るの意。

【草草】あわてた  
る意。

【威儀】師家に相  
見する容儀を整へ  
る意。

【坐具】梵語に尼  
師壇、坐す所の又  
は禮拜する時の座  
物。

【拂子】僧の數拂  
ひ。

【撮取】とらまぬ  
ちよるの氣勢。

【拈却】叱吒の聲。  
【音却】うしろむ  
き。

【首座】大衆の上  
首。  
【適來】せん刻。

可驚だ氣入を衝く、眞の獅子兒善く獅子吼す。雪齋普請して云はく、一勘候了也。(一) (二) 果然、點。(三) 徳山門首に至つて、却つて云はく、也草草なることを得ず。(四) 曠去收來、與上太高生、末後は太既生、過を知りて必ず改む、曠く幾人が有らん。(五) 便ち威儀を具し、得て入つて相見す。(六) 依前として、過去更を作す。(七) 是れ第一の勘談、(八) 徳山坐する次、(九) 帝關にして遠志濃を見る、虎窟を看くること住、也(一〇) 宜しく是れ(一一) 般の人にして始めて得べし、(一二) 徳山坐具を捉持して云はく、(一三) 初南。(一四) 頰を改め面を撰ふ、風無きに浪を起す。(一五) 山拂子を取らんを撰す。(一六) 宜しく是れ單の漢にして、始めて得べし、(一七) 意を難纏の中に置了、(一八) 疑はて天下の人の舌頭を坐踏すること。(一九) 徳山便ち唱して、擧袖して出づ。(二〇) 野狐精の見解、這一唱、也(二一) 宜有り、也(二二) 照有り也(二三) 用有り、一等に是れ(二四) 雲を拈ひ(二五) 霧を撰む者、中に真いて奇特なり。(二六) 雪齋普請して云はく、一勘候了也。(二七) (一) 點、果然、點。(二) 徳山法堂を背却して、草鞋を擧げて便ち行く。(三) 風光愛しつべし、空桑未だ聞かならず、(四) 頭上の笠を贏ち得て、脚下の鞋を失却す、已に是れ喪身失命了了なり。(五) 瀑布曉に至つて首座に問ふ、(六) 適來の藉到、什麼の處にか在る。(七) 東邊に落節し西邊に抜本す、(八) 眼東南を觀て意西北に在り。(九) 首座云はく、(一〇) 當時法堂を背却し、草鞋を著けて出で去れり。(一一) 靈龜尾を曳く、好し三十棒を撰ふるに、(一二) 這般の漢(一三) 腦後に多少をか喫すべき。(一四) 瀑布云はく、(一五) 此子、(一六) 後孤峯頂上に向つて、(一七) 草庵を繫結して、(一八) 佛を呵し祖を罵り去ること有らん。(一九) 賦過ぎて後弓を張る、(二〇) 天下の衲僧跳不出。(二一) 雪齋普請して云はく、(二二) 雪上に霜を加ふ。(二三) (一) 錯、

【新到】新參の僧  
【孤峯】絶對の境  
【界】杭州の孤山か  
【雪上云々】い  
ぬ世話の意  
【險峻】危險なる  
所の意  
【飛騎】李將軍の  
故事にして、徳山  
に比す  
【走過】徳山の敏  
活  
【放過】ぼんやり  
【草裏】深山の藪

【第五則】雲門言  
句の根を爲すを明  
す、この五六則は  
一等と言句の根元  
たりと雖も、本末  
無きに非ず、雪峰  
雲門、師となり資  
となる、至れり。

【雪峰】師は義存  
徳山鑿に嗣ぐ、後  
梁太祖開平二年五  
月寂す、壽八十一

果然、點。

【頌】一勘破。〔言猶耳に在り、過。〕一勘破。〔兩重の公案。〕雪上に霜を加ふ、曾て險墮す。〔三段同じからず、什麼の處にか在る。〕飛騎將軍虜庭に入る。〔險、敗軍の將、再斬に勞すること無けん、喪身失命。〕再び完全を得る能く幾箇ぞ。〔死中に活を得たり。〕急に走過す。〔傍若無人、三十六策、備が神通を盡すも何の用をか作すに堪へん。〕放過せず。〔理能く豹を伏す、鼻孔を穿却す。〕孤峰頂上、草裏に坐す。〔果然、鼻孔を穿過するも也、未だ奇特と爲す、什麼と爲てか却つて草裏に在つて坐す。〕咄。〔會すず、兩刃相傷る、兩三三善路に行く、咄、拍案隨ふ、便ち打たん。〕

第五則

垂示に云はく、大凡宗教を扶成せんには、頂々く是れ英靈の漢たるべし。人を徴すに眼を起せざる底の手脚あつて、方に立地に成得すべし。所以に照用同時、密舒密しく唱へ、理事不二、權實並べ行ふ。一著を放過して、第二義門を建立す。直下に葛藤を截斷せば、後學初機は、溘泊を爲し難し。昨日も魚鱗、事は言ことを得ず、今日も又魚鱗、原湯沸天。若し是れ明眼の漢ならば、一點も他を謾すること得じ。其れ或は未だ然らずんば、虎口裏に身を横へて、喪身失命を免れじ。試みに舉す看す。

【本則】舉す、雪峰衆に示して云はく、〔二首卓首を引く、分外し爲さず〕盡大地舉し來

【擧】 指にてつまむこと

【擧】 逃げ出す

【擧】 無分地の漢

【擧】 竹節をす

【擧】 竹節をす

【擧】 神出鬼没

【擧】 南能北秀

【擧】 南能北秀の明鏡の偈の故事

【擧】 雲門、師と云り、

と爲るの語を問す

白隠云は雲門宗

の大事、最もこ

の五六則の中に在

りと。

【雲門】 師は文偃

雲存に稱ぐ、後

漢唐常苑二年寂

す、雲門宗の祖

【垂訓】 教訓教示

【十五日】 月の望の上堂なり。

るに、摩訶薩の大きさの如し、〔是れは什密の手段ぞ、由僧從來鬼眼請を看せず〕 面前に池面す。(只摩訶薩は擧不下たらんことを、什密の伎倆が有らん) 漆桶不賣(湯に俯つて人を賣く、自前出去、人を賣すること莫くんば好し) 鼓を打つて音請して看よ。(鼓、鼓を打つことは三軍の行なり)。

【擧】 牛頭没し、(閃電に相似たり、斷了也) 馬頭回る。(摩訶薩の如し) 賣漆桶(賣眼) 眼を絶す。(鼓を打破し來れ、桶が輿に相見せん、須らく是れ打破して得べし) 鼓を打つて看せし來るに君見ず。(桶が眼時を轉換す、輕易すること莫くんば好し、漆桶什密の伎倆が有らん) 百花在獨つて誰が鳥にか聞く。(法相鏡さす、一場の猿鶴、鹿鹿窟裏より川頭し來る)。

第六期

【本則】 擧す、雲門垂語して曰はく、十五日己前は汝に問はず、(空に河南半は河北、這裏舊曆日を攸心す) 十五日己後、一旬を過ぎ請ち來れ。(免れず朝より暮に至ることを、切に忌むことを、來日是れ十六、日月流るるが如し) 自ら代つて云はく、一日日

是れ好日。(一收、擧跳れとも斗を出でず、誰が家にか明月清風無からん) 擧つて知るや、海神貴きことを知つて價を知らず。

【擧】 一を上却し、(七穿六穴、什密の處に向つてか去ら。一著を放過す) 七を拈得す。

【汝】座下の釋僧  
【道ひ將ち】云う  
て見よ。

【自ら代】大衆に  
代りの意。

【日日】凶も吉も  
無く、毒も害も無  
しの意。

【一を去却】一は  
絶對、しは相對、

一は第一義門、し  
は第二義門あり。

【四維】宇宙間。

【徐に】無礙自在

【我我志の境界】

【茸茸】草がむち

【嚴整】むしり、

【空生】須菩提。

【露若多】虚空神

【動着】そこ

【第七則】爲人の

方便を明す、法眼

宗の臨機應變、敢

て別人の念及する

底に非ず。

〔拈不出、却つて放過せず。〕上下四維等匹無し。〔何似生、上は是れ天、下は是れ地、東

南西北と四維と、什麼の等匹か有らん。争奈せん、匡杖我手裏に在ることを。〕徐に行い

て踏斷す流水の聲。〔脚踏下を問ふこと莫れ、體究を爲し難し、勢難窟裏に打入し去り了

れり。〕續に覆て寫し出す飛禽の跡。〔世亦此消息無し、野狐精の見解、依前として只

舊窠窟裏に在り。〕草茸茸。〔腦後に箭を抜く、是れ什麼の消息ぞ、平實の處に墮在す。〕煙

霧霧。〔木下、窠窟を出でず、足下雲生す。〕空生巖畔花狼藉。〔什麼の處に在る、不物囀

の漢、衝破了也。〕彈指して悲むに堪へたり露若多。〔四方八面盡法界、露若多の鼻孔裏に

向つて、一句を道ひ將ち來れ、什麼の處に在る。〕動著すること莫れ。〔前言何に在る、

動著する時如何。〕動著せば三十棒。〔自願出去、便ち打たん。〕

第七則

垂示に云はく、驛前の一句、千理不備、未だ曾て初觀せざれば、大千を隔つるが如し。

設使驛前に向つて辨得して、天下人の舌頭を刺すも、亦未だ是れ性性の漢にあらず。

所以に道ふ、天も蓋ふこと能はず、地も載すること能はず、虚空も容ること能はず、日

月も照すること能はず、無情の塵刹り等と稱して、始て起りに被れり、其れ或は未だ然ら

ずんば、一毫頭上に於て透得して、大光明を放つて、七縱八横、法に於て自在自由なら

ば、手に信せて拈じ來るに、不足あること無し。且く道へ、箇の什麼を得てか、此の如く

奇特なる。後云はく、大業會すや、從前の汗馬人の驚る無し、只重ねて蓋代の功を論せんことを要す。即今の事に且く致く、事實の公案、又作麼生。下文を看取せよ。

【本則】擊す、佛、法眼に問ふ、(什麼と道ふぞ、搭背連、狀) 慧超、和尚に著す如何なるか是れ佛。(什麼と道ふぞ、眼睛突出す) 法眼云はく、汝は是れ慧超。(横に仗つて脱出す、鐵鉢、鉢身打劫。)

【頌】江國の春風吹き起たす。(盛大地那裏よりか這の消息を得たる、文彩已に彰る。) 鷓鴣啼いて蕤花裏に在り。(啼啼たること何ぞ用はん、又風に對調の中に吹かる。豈恁麼の事有らんや) 三級は高きして魚龍と化す。(這の一路を通ず、大衆を謾すること莫くんば好し、龍頭に踏者す) 道人踏むる在踏の水。(扶籠摸壁、門を挨し口に傍ふ、龍僧什麼の用處か有らん、柵を守りて鬼を待つ。)

【法眼】諱は文益  
地藏菩薩に嗣ぐ、後  
周世宗顯徳五年(七  
七月寂す、壽七十  
四、法眼の祖。  
【慧超】法眼下。  
【江國】楊子江沿  
岸一帶、法眼の住  
居清涼院の所在地  
【三級】龍門の故  
事、愚の至りの喻  
【屏】くみほすな  
り。

【第八則】宗師頭  
を樂めて互に祖庭  
の春色を成すを明  
す。

第八則

垂示に云はく、會するるときんば途中受用。龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たり。會せざるときんば世諦澆布、羶羊糞に備れ、柵を守つて鬼を待つ。有る時の一句は、金剛王寶劍の如く、有る時の一句は、天下の人の舌頭を坐斷し、有る時の一句は、隨波逐浪。若し也途中受用ならば、知音に遇うて機宜を分ち休咎を讀り、相共に證明せん。若し也世諦澆布ならば、一隻眼を具して、以て十方を坐斷して、壁立千仞なるべし。所以に道ふ、

大用現前、軌則を存せず、有る時は一莖草を蔭て、丈六の金身と作して用ひ、有る時は丈六の金身を蔭て、一莖草と作して用ふ。且く道へ、什麼の道理にか懸る、還つて委悉すや、試みに擧す看よ。

【翠巖】諱は令參保福從展、長慶慧稜、雲門文偃と、共に雪峰存に嗣ぐ三年後唐明宗天成【夏末】夏安居の終。【眉毛】眉鬚墮落の故事あり。【賊と作る云云】泥坊は不正直にして心虚なり。【生せり】のびてゐるの意。

【瀟】あぶないあぶないの意。【失錢】泣面に蜂。【潦倒】老老の意。【抑揚】賞讃と批難。

【白圭】完全圓滑。【勢】多言のこと。【諸】長慶は賞讃す。

【本則】擧す、翠巖夏末に案に示して云はく、「一夏以來、兄弟の爲に談話す。〔口を開かば焉ぞ恁麼なることを知らん。〕看よ翠巖が眉毛在りや。〔只眼睛も也地に落つることを贏ち得たり。鼻孔に和して也失し了り。地獄に入ること箭の射るが如し。〕保福云はく、「賊と作る人心虚はる。〔灼然、是れ賊賊を識る。〕長慶云はく、「生せり。〔舌頭地に落つ、錯を蔭て錯に就く、果然。〕空門云はく、「關。〔什麼の處にか走在し去る、天下の衲倫跳不出、敗也。〕

【頌】翠巖、徒に示す。〔這老賊、人家の男女を教壞す。〕千古對無し。〔千箇萬箇、也一箇半箇有り、分一箇。〕關字相觸り。〔道ふことを信せずや、妨げず奇特なることを、若し是れ恁麼の人ならば方に恁麼に道ふことを解せん。〕失錢遺罪。〔氣を飲み替を吞む、雪竇も也少からず、蜂に和して、便ち打たん。〕潦倒たる保福。〔同行道伴、猶遺去就を作す、兩箇三箇。〕抑揚得難し。〔放行把住、誰か是れ同生同死、他を誘すること莫くんば好し、且喜すらんは、沒交涉。〕所謂たる翠巖。〔這の野狐精、口を合取せば好し。〕分明に口を閉ぢ。〔道著するも也妨げず、捉敗了也。〕白圭玷無し。〔還つて辨得するや、天下の人間を知らず。〕誰か眞假を辨ぜん。〔多くは只是れ假、山僧從來眼無し、碧眼の胡僧。〕長慶却語ん

【第九則】 五家の大事を経て根本の大徹を以て、是れ基と爲すを明す、趙州平生尤も羨むべき作用あり。

【東門云云】 四方八方門だらけ、何れよりするも差支なしの意。

【機を呈し】 呈は現はす、ほのめかす、機は僧の機略。

【傍面】 まつしぐら。【機迦羅】 譯して金剛といふ、趙州の眼光の明をいふ。【輪鎖】 鐵圍山の如き鎖を輪す。

第九則

す。「言、門軸を識る、須らく是れ他始て爲べし、事だ一半を得ざることを在り。」眉毛生ぜり。「什麼の處にか在る、頭門上より脚眼下に至るまで一葉草も出ず。」

垂示に「はく、明鏡臺に當つて、無情自ら離す、鏡手に在つて、殺活時に應む。漢去り漢來り、胡來り漢去る。死中に活を得、活中に死を得。且く道へ、這裏に到つて又作麼生、若し透關底の眼、轉身の處無くんば、這裡に到つて灼然とし、奈何ともせず。且く道へ、如何なるか是れ透關底の眼、轉身の處、試みに擧す看よ。」

【本則】 寧す、僧、趙州に問ふ、「如何なるか是れ趙州。」(河北河南、經に説不言、膠泥裏に刺有、河南に在らずんば正に河北に在らん。) 別云はく、「東門西門、南門北門、一箇也、相罵ることは爾に僣す、勢を接げ、相罵すことは爾に僣す水を澆げ、且汝公案、還つて見るや、何ち打たん。」

【頌】 句に機を呈して傍面に來る。「魚行けば水濁る、趙州を誘する莫くんば好し。」機迦羅眼、織埃を絶す。「沙を撒し土を擧す、趙州を帶累すること莫れ、天を擧し地を換して、什麼か作ん。」東西南北門相對す。「門也、那裏にか許多の門有らん、趙州を背却して什麼の處に向つてか去る。」限無き輪鎖、掌てども聞けず。「自ら是れ備が輪鎖到らず、聞也。」



第十則

【第十則】 晴州の大機大明、是れ大道の根本たることを明す。

【註】 諱は道明、漢學に嗣ぐ、唐僖宗乾符四年寂す。【近世云云】 近ごろ何處に安居して居たかの意。

【機】 機は、機軸の意。

【活手段】 活手段は、機軸の意。

垂示に云はく、（一） 慈愍慈愍、不慈愍不慈愍。若し（二） 慈愍を論せば、箇箇佛處に立在す。所以に道よ、若し向上に轉じ去らば、直に得たり。釋迦摩訶、文殊普賢、千聖萬聖、天下の宗師、善く皆氣を飲み、香を呑むことす。若し向下に轉じ去らば、醜態醜態、蠢動蠢動、一一（三） 大光明を放つて、壁立萬仞ならん。佛し、或は下上下下ならん、又作家が商量せん。條自らは條條を學ぶ、條無ければ條條を學ぶ。試みに學ぶ。

【本則】 奉じ、註釋、管二則よ、近世の處を、【探筆】 書便、寫す。【作家の顧客】 且く許則頭なること草か、也（一） 任實にし去ることを解す。【別云はく】 老僧汝に一喝せらる。【所處の機、人をば】 して作家せん。【機、喝す】 【頭竹を看取せよ、飲た】 ことは明か飲たり、是なることは明か、是なること、只悉らくは龍頭蛇足ならんことを。【州云はく、一二喝喝の後作家】 【一】 蓮水の鼓、未だ言て一人の出持頭する有りて、那裏に人入り去る。【僧無語】 【果然として一段】 一段、【若し陸州をして】 命を盡して行せしめば、是れ蓮水の草末、著つて一段と爲す。【一】 一萬を算するれば第一に落存す。】

【道】 雨喝と、喝と、【雷聲】 雷大にして雨點なく無し、古より今に至るまで人の煩惱なる有ること等なり。【作者機變を】 【若し是れ作家に】 爲らば、人は筆が動し得ん。只想ら

【卷風】盲人に  
おぢぢの意

くは不憚ならんことを。」若し虎頭に對ると謂はば、「國、諸漢、虎頭如何が騎らん、多少の人、恁麼に尊す、也人有り、這見解を作す。」二俱に諸漢と成らんを、「觀言は觀口より出づ、何ぞ止兩續のみならん、自領出去。」誰か諸漢、「誰をして辨せしめん、頼に末後の句有り、泊乎ど人を羅殺す。」拍し來つて天下人に興へて看せしむ、「看んことは即ち無きにあらず、觀着せば即ち瞎す、問業若し眼を着けて看ば則ち兩手に空を捨る。恁麼に擧す且く道へ是れ箴幾機ぞ。」

第十一則

【第十一則】黃檗天性禪を會し、没量大の機格、最も依擧すべきに堪ふるを明す

垂示に云はく、佛祖の大機、全く掌握に歸し、人天の命脈、悉く指呼を受く。等閑の一句一言、群を驚し衆を動す。一機一境、鎖を打し枷を敲く。向上の機を接し、向上の事を提ぐ。且く道へ、什麼人か曾て恁麼にし來る。還つて落處を知るありや。試みに擧す看よ。

【黃檗】諺は希遷百丈海に嗣ぐ、唐の宣宗大中四年八月寂す、八十歳。  
【唾酒糟】一さかしほねぶり。唐宋の俗語。

【行脚】修行遍參。教育薰陶。

【本則】擧す、黃檗、衆に示して云はく、「水を打して盆に碍へらる、一口に吞盡す、天下の衲僧跳不出。」一汝等諸人、盡く是れ唾酒糟の漢。恁麼に行脚せば、「道着す、草鞋を踏破す、天を掀し地を掻す。」何の處にか今日あらん。「今日を用て什麼にか作ん、妨げず群を驚し衆を動すことを。」還つて大唐國裡に禪師無きことを知るや。「老僧不會、一口に吞盡す、也是れ雲居の羅漢。」時に僧あり、出でて云はく、「只諸方の徒を匡し衆を領する

【領】 統一總理。

【禪無し】 禪は宇宙に充滿してゐるが禪を教ふる師なし。

【瘴瘴】 黄檗の性格をいふ。

【孤風】 壁立萬仞の意。

【寰海】 宇宙の意。

【大中】 唐の玄宗常法を黄檗に問ふこと三度、斷際と賜ふ。

【輕觸】 ちよつとからかつての意。

【第十二則】 雲門宗は、香句、觸よ増すの意あり、參詳若し歳を睡ずんば夢にだも曾て見及すべからざるの大事を明す。

【洞山】 諱は守初、雲門偏に嗣ぐ、宋太宗淳化元年袁州麻三斤、湖麻を秤にかけての意。

【麻三斤】 湖麻を秤にかけての意。

【洞山】 諱は守初、雲門偏に嗣ぐ、宋太宗淳化元年袁州麻三斤、湖麻を秤にかけての意。

【麻三斤】 湖麻を秤にかけての意。

【洞山】 諱は守初、雲門偏に嗣ぐ、宋太宗淳化元年袁州麻三斤、湖麻を秤にかけての意。

【麻三斤】 湖麻を秤にかけての意。

【洞山】 諱は守初、雲門偏に嗣ぐ、宋太宗淳化元年袁州麻三斤、湖麻を秤にかけての意。

【麻三斤】 湖麻を秤にかけての意。

【洞山】 諱は守初、雲門偏に嗣ぐ、宋太宗淳化元年袁州麻三斤、湖麻を秤にかけての意。

【麻三斤】 湖麻を秤にかけての意。

【洞山】 諱は守初、雲門偏に嗣ぐ、宋太宗淳化元年袁州麻三斤、湖麻を秤にかけての意。

【麻三斤】 湖麻を秤にかけての意。

【洞山】 諱は守初、雲門偏に嗣ぐ、宋太宗淳化元年袁州麻三斤、湖麻を秤にかけての意。

【麻三斤】 湖麻を秤にかけての意。

【洞山】 諱は守初、雲門偏に嗣ぐ、宋太宗淳化元年袁州麻三斤、湖麻を秤にかけての意。

【麻三斤】 湖麻を秤にかけての意。

が如きんば、又作麼生。「也好し一撈を與ふるに、機に臨んで不怎麼たることを得ず。」槃云はく、「禪無しとは道はず、只是れ師無し。」直に得たり分疎不下なることを、瓦解氷消、龍頭蛇尾の漢。」

【頌】 瘴瘴たる孤風自ら誇らず。「猶自ら有ることを知らず、也是れ雲居の羅漢。」寰海に端居して龍蛇を定む。「也猶子を別たんことを要す、也白分明ならんことを要す。」大中天子曾て輕觸す。「什麼の大中天子とか説かん。任ひ大なるも、也須らく地より起るべし、更に高きも天有ることを争奈何せん。」三度親しく爪牙を弄するに遭ふ。「死蝦蟇多口にして什麼か作ん。未だ奇特と爲す、猶是れ小機巧、若し是れ大機大用現前せば、盡十方世界乃至山河大地、盡く黄檗の處に在りて命を乞はん。」

第十二則

垂示に云はく、殺人刀、活人劍、乃ち上古の風規、亦今時の樞要なり。若し殺を論せば、一毫を傷らず、若し活を論せば、喪身失命す。所以に道ふ、向上の一路、千聖不傳。學者形を勞すること、猿の影を捉ふるが如し。且く道へ、既に是れ不傳、什麼としてか得つて許多の葛藤公案ある。具眼の者は試みに説く看よ。

【本則】 擧す、僧、洞山に問ふ、「如何なるか是れ僧。」洞山答はく、「天下の僧皆跳不出。」山云はく、「麻三斤。」灼然被草鞋、槐樹を指して柳樹を罵つて秤と爲す。

【金鳥玉兔】 日と月。

【善應】 よき答へ。【展事】 事件を展開して機宜に投ずるなり。

【賊贖】 この倍を愚弄していふ。

【簇簇】 花だらけ。【南地】 南には竹北には木、佛身充滿。

【長慶】 諱は大安。【陸大夫】 直京に參ず。字は景信、號の人。

第十三期

【第十三期】 雲門宗の大事。馬大師是れ提婆宗と違ふより出づ。巴陵の三轉語も最も參詳すべきの本則なり。

【巴陵】 壽は頼鑿雲門僧に嗣ぐ。

【提婆宗】 第十五祖迦那提婆尊者なり。三巴陵宗の祖迦那は片目の義、提婆は天の義。

【銀椀】 二にて一。

【一】 金鳥玉兔に、〔左眼半斤、快鶴趕へども及ばず、火窟裏に身と情、一〕を曳洲かたり。

〔右眼八兩、姪妓官裏に菓煎を作す。〕 前何ぞ言て無事あらん。〔風の扣に在るが如く、谷の響を受くるが如し。〕 展事投機洞山を見れば、〔言つて定盤車を説く、自ら是れ團黎慈

家に見る。〕 跛鼈背龜空谷に入る。〔白頭出去、同坑に異土無し、阿婆が佛か鶴子を打つて死す。〕 花簇簇簇簇簇。〔兩重の公案一腔に頭過す、首に依つて一鼓二南地の竹北地の木

〔三重も也有り、四重の公案、頭上に頭を安す。〕 四つこと思ふ長慶と陸大夫。〔新見件を幸く、山僧も也恁麼、雪竇も也恁麼。〕 這ふことを言す。〔一〕し笑すべからず。〔阿呵、若夫

夜半に更に寤言を添ふ。〕 曉。〔一〕、是れ什麼ぞ、便ち打つ。〕

指示に云はく、雲天野に瀧つて、徂界嶺さす。雪盛花を覆うて、暎迹を分ち難し。冷處は氷雪よりも冷かに、細處は氷末よりも細かなり。深深たる處は佛眼も窺ひ難く、密密たる處は魔外も測ること莫し。舉一明三は即ち且く止く、天下の人の舌頭を坐説して、作麼生か道はん、且く道へ、是れ什麼人の分上の事ぞ。試みに舉す看よ。

【本則】 舉す、僧、巴陵に問ふ、如何なるか是れ提婆宗。〔白馬葛花に入る、什麼と道ふぞ、點。〕 巴陵云はく、一銀椀裏に雪を盛る。〔一〕佛が咽喉を塞斷す、七花八裂。〕

【頌】 老新聞、〔千兵は得易く一將は求め難し、多日の阿師。〕 端的別なり。〔是れ什麼の端

ず、點。〕 巴陵云はく、一銀椀裏に雪を盛る。〔一〕佛が咽喉を塞斷す、七花八裂。〕

【新制】巴陵那の  
 新開院に樂公の住  
 寺。  
 【錫的】見識齋  
 【九十六】九十六  
 歳の僧道普學者の  
 師。  
 【亦廣】聖利者の

【第十四則】佛一  
 代の時教、皆我が  
 自宗乘より出づ  
 ることを明す。  
 【一代】五時八教

【第一卷】對機一  
 説の略也。  
 【太玄無盡】奇抜  
 の意。  
 【重ねて楔を下す】  
 力任せにひどく楔  
 子をたたきこむの  
 意。  
 【世浮】宇宙の一

著 最 録

的ぞ、頂門上の一着、夢にも見るや也未しや。」道ふことを断す銀樓に雪を盛ると。(銀  
 跳れども斗を出でず、兩重の公案、多少の人喪身失命す。)九十六箇處に自知すべし。(身  
 を象て内に在り關黎還つて知るや、一坑に却せん。)知らずんば却つて天邊の月に問へ。  
 (遠うして遠し、自領出去、空に望んで尋書す)提婆宗提婆宗。(什麼と道ふて、山僧道  
 裏に在り、満口に霜を含む)赤庵の downstream 風を起す。(百雜碎、打つて云はく、已に着け了  
 れり。備且く去つて頭を斬り臂を截り來れ、備が異に一句を道はん)

第十四則

【本則】擧す、情、雲門に問ふ。如何なるか是れ一代時教。(直に如今に至るまで了せず、  
 座主會せず、莫、窟裏)雲門云はく、對一説。(一説、七花八裂、老風生、葉を吹  
 む)

【頌】對一説。(活鱖、言猶耳に在り、妨ばず孤峻なることをし)太だ孤絶。(包、分  
 有り、何ぞ止だ壁立千仞のみならん、豈に懸崖の事有らんや。)無しの鐵鎚重ね二機を下  
 す。(指つて名言を會す、雲門老漢也是れ泥裏に土塊を洗ふ、雪竇也是れ粧飾す)一聞浮  
 山下等阿。(四州八縣會て箇の漢を見ず、同道の者方に知る、能く人有りてか知らん)一  
 昨夜龍角を拗して折す。(止だ驪龍の表折するのみに非ず、誰れ有つてか見來り、還つて  
 證明する有りや、睡)別別。(讚歎するに今有り、須らく是れ雪竇にして始めて得べし、

【揚】 我等の世界。  
【揚】 ねむり。  
【別別】 自己の見  
【踏陽】 答へる語  
【踏陽】 雲門をい

【機】 くみ  
【第十五則】 前前  
の大事、是れ昔句  
の真義なることを  
明す。

【日前】 機は機會  
又は縁、場合の意  
能に於て、事は  
所應の境なり。  
【倒】 蘇倒せよと

【八萬】 無限の大  
【鳳毛】 鳳采秀美  
【三十】 西天の二  
十八祖、東土の二三  
【授授】 浮遊の貌

什麼の別處か有らん。詔也老人一機を得たり。〔什麼の處にか在る、更に一機有り、阿誰にか付せん。徳山臨濟も也須らく倒退三千すべし、那一機、又作麼生。價も打つ。〕

第十五則

垂示に云はく、殺人刀、活人鏡、乃ち上古の風規、是れ今時の樞要なり。且く道へ、如今耶箇か是れ殺人刀、活人鏡、試みに擧す看よ。

【本則】 擧す、併、雲門に問ふ、是れ日前の機にあらず、亦日前の機に非ざる時如何。〔躑躅して什麼か作ん、倒退三千里。〕門云はく。〔倒一説。〕〔平出、款は囚人の口より出づ、也放過することを得ず、荏草裏に身を横ふ。〕

【頭】 倒一説。〔真不下、七花八裂、須臾中碎盡す五千四十八。〕分一節。〔彌が邊に在り我が邊に在り、半は河南半は河北、手を把つて共に行く。〕同死同生君が爲に訣す。〔泥裏に上地を洗ふ、甚の來由をか着たる、彌に反すことを得ず。〕八萬四千鳳毛に非ず。〔羽毛相似たり、太煞だ人の威光を滅す、漆桶の如く粟の如し。〕三十三人虎穴に入る。〔唯我能く知る、一將は求め難し、野狐精の一隊。〕別別。〔什麼の別處か有らん、少賣弄、躑躅するに一任す。〕授授忽忽たり水裏の月。〔青天白日、頭に迷うて影を認む、着忙して什麼か作ん。〕

第十六則

【第十六則】 啐啄の機、死活の異あり、學者須らく知るべきを明す。

【示】云はく、道に横徑無し、立者孤危なり。法は見聞に非ず、言思迫絶す。若し能く荆棘林を透過し、佛祖の縛を解開して、箇の穩密の田地を得ば、諸天花を拵々ろに路無く、外道滯かに窺ふに門無けん。終日行じて未だ嘗て行せず、終日遊いて未だ嘗て説かず。便ち以て自由自在にして、啐啄の機を展べ、救活の綱を用ふべし。直健恁麼なるも、更に須らく建化門中、一手は擡げ一手は拵ふることあるを知つて、齧匙子に較るべし。若し是れ本分の事上ならば、且得没交涉。作麼生か是れ本分の事、試みに擧す看よ。

【啐啄】 擧人と師家との機授合せるに喩ふ。  
【啐笑】 をかしき名。  
【草裏】 たわけも

【本期】 擧す、僧、鏡海に問ふ。「摩人啐す、請ふ爾啄せよ。」(風無きに浪を起して什麼か作ん、爾許多の見解を用て什麼か作ん。) 清云はく、「遊つて活を得るや也無や。」(割、帽を買ふに頭を相す、錯を將て錯に就く、總に恁麼なるべからず。) 僧云はく、「若し活せずんば、人に怪笑せられん。」(相帶畢す、天を擡へ地を擡ふ、猶波漢) 清云はく、「也是れ草裏の漢。」(果然、自領出去、放過すは即ち不可)。  
【頌】 古傳家風有り、(言猶牙に在り、千古の榜棹、釋迦老子を誘すること莫くんば、好し。) 對揚剋剋に遺ふ、(鼻孔什麼としてか却つて山僧が手裏に在り、八棒十三に對す、備作麼生か一着を放過す、便ち打たん) 子母相知らず、(既に相知らず、什麼と爲てか却つて啐啄有る、天然) 是れ誰か同じく啐啄す。(百雜碎、老婆心切、且く錯つて認むること

【撲】まきやられ  
たの意。  
【名遊】名遊又境

【第十七則】九牛  
一毛、ただこゝろ  
子と稱へ、其人  
るべからざるを則

【香林】淨遠、雲  
門院に屬す。  
【祖師】麻大師  
【西來意】支那に  
來れる意味、則ち日  
的。  
【坐久】九牛一毛  
さぞ變なれてあひ  
うの意。  
【一箇】一人二人  
【總頭】馬の一角  
モカイ、角駄の負  
重として牛の荷物、  
身心を束縛し不自  
由にす、煩惱妄想  
の喻。

【何ぞ出頭し來らざる。】重  
ねて擧に置ふ。(錯、便ち打つ、兩重の公案、三重四重し了れり。)天下の衲僧徒に名遊  
す。一、名遊し了らば、擧起することを須ひき、還つて名遊し得る底有りや、若し名遊し得  
るも也是れ草裏の漢、千古萬古黑泐漢、潛に名遊し來らざる、人の會する無し。」

第十七則

【本宗に云はく、釘を斬り鐵を破つて、踏めて木分の宗師とせし。釘を擧げ刀に照れば、  
鐵を破る方の作者たるを、針を千入の處は則ち且く置く、白漢滔天の時如何。】はみに擧す  
看よ。

【本期】事す、佛、香林に問ふ、「如何なるが是れ重頭西來意。」云々に人の疑着する有り、  
【這箇の消息の在る有り。】林云はく、「坐久成癡。」(魚行けば水溢り、鳥飛べば毛を落す、  
釣口を合せせ、好し作家の題目、臨濟師の意)

【一箇兩箇千萬箇。】(何ぞ依つて之を行はざる、麻の如く、粟に似たり、群を以て隊を  
作して什處に作る) 籠頭を叱却し角駄を算す。(今日より去つて處に須らく、瀟灑落落たる  
べく、還つて休得するや、也まだしや。) 左轉右轉後に隨ひたる。(猶自ら放下、影影響  
響、便ち打たん) 葉胡劉錫胸を打たんことを要す。(山僧は鉢子を掲折して、更に此令を  
行はず、賊過ぎて後弓を張り、便ち打つ、論)



【左轉】 音句につ

【南泉類】 子湖利蹤は南泉類に嗣ぐこの舞臺麼の問答故事に基いていふ

【第十八則】 塔を廻つるの様、最も全提半提の大事あることを明す。

【肅宗】 唐玄宗の第三子、在位七年、この肅宗とあるは代宗皇帝の誤、代宗は肅宗の長子在位十七年。

【忠國師】 六祖慧能に嗣ぐ、唐代宗太暦十年十二月歿す白崖山に住す。

【百年後】 師滅度後。

【所須】 弟子等の記念とする物の意。

【無縫塔】 師塔のこと、無形無相の意。

【良久】 やや久しうしての意。

【付法】 嗣法の弟

【光源】 名は應真南陽忠に嗣ぐ。

第十八則

【本則】 擧す、肅宗皇帝忠國師に問ふ、「本是れ代宗、此には誤る。」百年後所須何物ぞ。」(豫め搔いて痒を待て、果然摸を起し様を書く。老老大火、這去就を作す、東を指して西と作すべからず。)國師云はく、「老僧の爲に箇の無縫塔を作れ。」(把不住)帝云はく、「請ふ師塔様。」(好し一割を與ふるに。)國師良久して云はく、「會すや。」(因に停めて智を長ず、直に得たり東を指し西を劃し南を將て北と作すことを、直に得たり口區楯に似たることを)帝云はく、「不會。」(頼に不會に値ふ、當時更に一移を與へて伊をして溝口に霜を含ましめば、却つて些子に較らん。)國師云はく、「吾に付法の弟子耽源といふものあり、却つて此事を隠んず、請ふ詔して之に問へ。」(頼に床を掀倒せざるに値ふ、何ぞ能に本分の草料を與へざる、人を探胡すること莫くんば好し、一着を放過す)國師遷化の後、「惜むべし、果然として錯て定器星を認む。」帝、耽源に問して、此意如何と問ふ。「子は父の業を承げ、去るや、也第二頭第三頭に落在す。」源云はく、「湘の南潭の北。」(也是れ把不住、兩兩三三、什麼をか作す、半開半合)雲笈著語して云はく、「獨掌浪りに鳴らす。」(一盲衆盲を引く、果然として語に隨つて解を生ず、邪に隨ひ惡を逐うて什麼か作ん)中に黄金有つて一圓に光つ。」(上は是れ天、下は是れ地、這箇の消息無し、是れ誰が分上の事ぞ)雲笈著語して云はく、「山形の拄杖子。」(拗折了也、也是れ

【遷化】示寂なり  
【湖の南云】此四句共に無雙塔を頌す湖も潭も川名【獨掌】知音は解す

【山形】山より切り出ししままの杖の意無雙塔に擬す【拈了也】もう耽源は塔塔を説明したの意

【澄潭若龍】澄みきつた淵、澄潭は忠國師に、若龍は野心凡情などに喩ふ  
【冒落】だんだん重るの意

【影團團】月影の如く、宇宙を光被す

【第十九則】一千七百則の公案、俱抵一指頭を出でざるを明す

【俱眠】天龍和尚

摸を起し様を書く。無影樹下の合同船。(祖師喪了れり、闍梨什麼と道ふぞ。)雪竇著語して云はく、「海晏河清」(洪波浩渺白浪滔天、猶些子に較より)瑠璃殿上に知識無し。』

〔咄〕雪竇著語して云はく、「拈了也。」(賊過ぎて後弓を張る、言猶耳に在り。)

〔頌〕無縫塔。(這一縫、大小大什麼と道ふぞ。)見ること難し。(眼の見るべきに非ず、瞎。)

澄潭には許さず、若龍の蟬ること難し。(見らば、洪波浩渺、蒼龍什の處に向つてか、蟬る、這裏直に得たり撲索不著なることを。)層落落。(眼花すること莫れ、眼花して什麼か作ん。)

影團團。(通身之れ眼、七に落ち八に落つ、兩雨三三舊路に行く、左轉右轉後に隨ひ來る。)千古萬古人に與へて看しむ。(見るや、瞎漢作麼生か看ん、闍梨覷得見するや。)

第十九則

垂示に云はく、一塵擧つて大地收り、一花開いて世界起る。只塵未だ擧らず、花未だ開かざる時の如きんば、如何が眼を著けん。所以に道ふ、一絛絲を斬るが如し、一斬一切斬。一絛絲を染るが如し、一染一切染。只如今便ち葛藤を將て截斷して、自己の家珍を運出せば、高低普く應じ、前後差ふこと無く、各各現成せん。儘し或は未だ然らずんば、下文を看取せよ。

【本則】擧す、俱眠和尚、凡之所問あれば、(什麼の消息が有らん、鈍根の阿師。)只一指

の嗣なり、馬祖四世寂年不詳。【所問有れば】問はるることあらばなり。

【對揚】この對揚は俱賦緊指を指すと。【滄溟】大海のこと。

【浮木】首龜。涅槃、維河合、法華、諸經に、譬喩として出づ。人身難受、佛法難聞、佛在世難逢等を示す。胎も首龜に對する浮木（一孔のあける板片）なり。

【夜渡】夜の火渡。【第二十則】古人行脚、みな悟後の大事を極むることを明す。

【龍牙】諱は居遁、湖山良倫に嗣ぐ、後唐莊宗同光元年歿す。【翠微】諱は無學、丹波然に嗣ぐ。

を堅つ。（這老漢、也天下の人の舌頭を坐斷せんことを要す、熟するときは則ち普天普地熱し、寒するときは則ち普天普地寒す、天下の人の舌頭を換却す。）

【癩】對揚深く愛す老俱賦。（癩兒伴を牽く、同道方に知る、是れ一機一境を免れざること【字面空し來るに更に兼か有らん】（兩箇三箇更に一箇有り、也須らく打殺すべし。）」

會て滄溟に向つて浮木を下す。（全く是れ這箇是なることは則ち是、太孤峻生、破草鞋、什麼の用處か有らん。）」夜渡用共に首龜を接す。（天を撈し地を摸す、什麼の了期か有らん、接得して何の用を作すにか堪へん、令に據つて行ず、無佛世界に趣向せん。團聚一箇の唐漢を接得す。）」

第二十則

垂示に云はく、堆山積鐵、撞牆撞壁、倚思停機せば、一場の苦屈。或は箇の漢あつて出で來つて、大海を掀翻し、須彌を歸倒し、白雲を喝散し、虚空を打破して、直下に一機一境に向つて、天下の人の舌頭を坐斷せば、爾が近傍の處無けん。且く道へ、從上來是れ什麼人が會て恁麼なる、試みに舉す看よ。

【本則】舉す、龍牙翠微に問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」（諸方の密話也擲過せんことを要す。）」微云はく、「我が與に擲板を過し來れ。」（禪板を用て什麼か作ん、消んと放過すべきに。驗。）」牙、擲板を過して翠微に與ふ。（是れ把不住、青龍に初更すれども騎るこ

【擧杖】 釋尊坐禪の時に、身を靠くるの具、杖を除く具。

【置し來れ】 ちよつとよつてくれの意。

【蒲團】 これも坐禪の時に使用する圓形の座蒲團。

【拈符】 受取るや否や直にうつなり。

【龍牙山】 湖南の龍牙山妙清院に住するに依る。

【死水】 たまり水。

【古風】 古人の風采。

【盧公】 魯賓自ら云ふ。

【勸絶】 やつつけてしまふの意。

【何ぞ懸らん】 しようがないの意。

【祖燈】 法燈以來の歴代の法燈をいふ。

【對するに云ふ】 この二句は宇宙の自然美が直に佛體

とを解せず、可惜許、當面に承當せず。」  
 微拈頭して便ち打つ。「着、面の死漢を打得して  
 其の事を講さん、也第二頭に落在し了り。」  
 牙云はく、「打つことは即ち打つに任す。要  
 且、祖師阿婆意無し。」  
 「這漢形、頭に請在す。賊過きて其、弓を張る。」  
 牙又臨濟に問ふ、「  
 如何なるが是れ祖師阿婆意。」  
 「諸方の善公案、再々問は問は來る、半文錢に値りず。」  
 濟云はく、「我が裏に蒲團を過し來る。」  
 「曹溪の波浪若し引倒らば、限り無き平人も陸沈せ  
 られん。一牀に領過す、一枕に堪却せん。」  
 牙、蒲團を叩つて臨濟に過與す。「依然として  
 把不住、依前として不伶俐、是頭に依稀として揚州に墜落たり。」  
 濟、拈得して便ち打つ。  
 「着、情むべし、這般の死漢を打つことを、一槓に脱出す。」  
 牙云はく、「打つことは即ち打  
 つに任す、要且つ祖師阿婆意無し。」  
 「灼然、鬼神裏に在りて活計を作す、禪に謂へり便宜  
 を得たりと、賊過きて後心を張る。」

【頌】 龍牙山觀龍に眼無し。〔賊、別人を殺すること、即ち得たり。泥裏に土地を洗ふ、天  
 下の人總に知る。〕  
 死水何ぞ曾て古風を振はん。〔忽然として活する時、奈何ともすること無  
 けん。〕  
 天下の人に及んで出頭することを得ず。〔一、被蒲團用ふることは能はず、〔阿婆を  
 してか、誰かしめん、備、蒲團被蒲團を要して什麼か作ん。是れ閑業に分付すること莫しや。〕  
 只應に分付して盧公に與ふべし。〔也、則ち分付することを當ず、法橋運取の見解を作すと  
 と莫れ。〕

【頌】 這老漢、未だ剽絶するを得ず、復一頌を成す。〔灼然、能く幾人有りてか知る、自ら

御身にしてまた  
西来意なり。

【第二十一則】

巖に頰出する所  
一節則、是れ雲霞  
の總作にして、木  
雲門宗より出づ、  
中に就いて、最も  
雲門臨濟を以て、  
所依の者と爲すこ  
とを明す。  
【智】 智は光輝  
香林遠に嗣ぎ、信  
實の師。  
【未だ水を云云】  
宇宙の本質より  
いふか。  
【水を出て後】  
宇宙の現象より  
いふか。  
【荷葉】 蓮の葉、  
【江北江南】 揚子

知る一平に較ることを。 巖に未後の句有り。 (盧公に付し了るも、奈何ぞ悪らん。(盡大  
地恁密の人を討ねるに、也得難し、世をして頓悟せしめん) 坐竹語て粗燈を繼ぐことを  
休めよ。(最裏の波、黒山下に打入してす、懸崖裏に落在し去れり) 對するに堪へたり  
暮雲の歸つて未だ合せざるに。(一箇半圓、舉着せば即ち錯らん、果然として出不得。) 遠  
山隈を無く岩層層。(一箇半圓を寫却し、俯首を寫却す、深坑に没落す、更に卷きよ三  
十年)

第二十一則

垂示に對はく、法幢を建て宗旨を立す、線上に花を舖く、龍頭を觀し角駄を騎す。太平  
の時節、兼は若し格外の句を辨得せば、舉一明三、其れ或は未だ然らずんば、舊に依つて  
伏して處分を二計。

【本則】 擧す、僧、智門に問ふ、「蓮花未だ水を出でざる時如何。」(不疑の地に跣在す、泥  
裏に土塊を洗ふ、那裏よりか這消息を得來る) 智門云はく、「蓮花。」(一二三四五六七、天  
下の人を疑殺す) 僧云はく、「水を出でて後如何。」(塵埃裏に向つて、泥計を作す又其、  
又任意にし去るを) 門云はく、「荷葉。」(雨則は踏自ら可たり、最も著しきは是れ江南、  
南頭三而、天下の人を疑殺す) 一  
【頌】 蓮花荷葉君に報じて知らしむ。(老婆心切、見成公案、文字はに乾) 出水は未出

江の南北地方。  
【王者】南宋時代の俗語、物知り爺の意。

【第二十二則】雲門宗は、もと馬大師に因りて、等閑玄沙の間に盛大なることを明す。

【懸鼻】懸に似たる以の毒地にして、コブツラのこと。雪峰山は懸崖省に在る時なるが故なり。  
【擧示】手まね足まね。  
【玄沙】諱は師備雪峰在に關し、後漢太祖開平二年没す、壽七十四。  
【殘見】長慶。

の時に何如。(泥裏に土地を洗ふ、分間せば也好し、穢し去るべからず) 江北江南王老に問はば、(主人公什麼の處に在る、王老に問うて什麼か作人、佛自ら草鞋を踏破す) 狐疑し了つて一狐疑せん。(一坑に埋却せん、自ら是れ備置し、疑情未だ息まざること) を免れず、打つて云はく、會すや。

第二十二則

示に云はく、大方外無く、細なること隙塵の若し。拈鐵棍に弄す、香射我に在り、必ず粘を解き縛を去らんと欲せば、直に須らく達を削り髭を呑むべし。人人要津を坐臥し、高僧立千叙ならん。且く道へ、是れ什麼人の境界ぞ。試みに攀す看よ。

【本則】擧す、雪峰衆に示して云はく、(南山に一葉の龍鼻あり、(怪を見て怪とせざれば其怪自ら壞す、大小大の怪事、易けず人をして疑着せしむ) 汝等諸人切に須らく好く看るべし) (因、一場の湯還し) 長慶云はく、(今日堂中、大に人有り喪身失命) (普州の人賊を逐る、已を以て人に方ふ) 僧、玄沙に擧示す。(同坑に異土無し、奴は婢を見て慙懣、同病相憐む) 玄沙云はく、須らく是れ破見にして始めて得べし。然も此の如くなりと雖も、我は即ち不恁麼。(野狐精の見解を作すことを免れず、是れ什麼の消息ぞ、毒氣人を傷る) 僧云はく、和尚作麼生。(也好し這老漢を拶拵するに) 玄沙云はく、南山を用ひて、什麼をか作さん。(釣魚船に上る。謝三郎。只這野狐精、些子に較れり。喪身失命

【擡向】 なげやり  
の意。

【拍】 びっくりす  
の意。

【象骨】 雪峰山。

【備前】 玄沙。

【韶陽】 雲門。

【剔起】 目の皮を  
張りあげける意。

【乳峰】 雪峯山  
の意。

【方便】 都合の意  
【脚膝下を看取せよ】 脚膝心をさ  
の意。

も也知らず。」雲門拄杖を以て雪峰の面前に擡向して、怕るる勢を作す。「他を怕れて什麼か作ん、一子親しみ得たり、一等に是れ精魂を弄す、諸人試みに辨じて看よ。」

【頌】 象骨麈高うして人到らず。「千箇萬箇撲索不着、公の境界に非ず。」到る者は須らく是れ蛇を弄するの手なるべし。「是れ精、精を弄り、是れ賊、賊を識る、誰を成し隊を作し什麼か作ん、也須らく是れ同火にして始めて得べし。」稜海備前奈何ともせず。「一狀に領過す、一着を放過す。」喪身失命多うか有る。「罪重ねて科せず、平人を帶累す。」韶陽知つて、「猶些子に較れり、這老漢、只一隻眼を具す。老漢伎倆を作すことを免れず。」重ねて草を撥ふ。「落草の漢、什麼の用處か有らん、果然として、什麼の處にか在る、便ち打つ。」南北東西討ぬるに處無し。「有りや有りや、闍黎誤賺す。」忽然として突出す拄杖頭。「看よ高く眼を着けよ、便ち打たん。」雪岸に擡討して大いに口を張る。「自在自愛、千箇萬箇を香却するも什麼の事をか濟さん、天下の人撲索不着。」大いに口を張る聲電に同じ。

【兩重の公案、果然、頌に末後の句有り。】眉毛を剔起すれば通つて見えす。「蹠通つ也、五湖四海恁麼の人を覓む也得難し、如今什麼の處にか在る。」如今敲して乳峯の前に在り。「什麼の處に向つてか去る、大小の雲霞も也這去著を作す、由信今日也一日に連ふ。」來る者は一一方便を看よ。「踏、脚膝下に向つて看ること莫れ、上座が脚膝下を看取せよ、一箇を着け了れり。」脚膝下に踏して云はく、「脚膝下を看よ。」一敲過して後弓を張る、第二頭第三頭、重言吃に當らず。」

【第二十三則】保

福、長慶、臨濟の三人、其旨を商略し、以てわ亦宗、五家、別に生誕あるの大事を立つることを明す。

【妙峰頂】

簾輪の山なり、善財童子が、徳雲比丘を尋ぬるの故事は、華嚴經の入法界品に出づ、宇宙の實體くらゐに解すべきか。

【可惜許】

まだなかなかの意。【百千年後】百年たつても、探し出す人は一人もないの意。

【孫公】

長慶の俗姓。【髑髏】假面の天狗。【畫繭】亂篋。

【端的】

目的。

第二十三則

垂示に云はく、玉は火を將て試み、金は石を將て試み、劍は毛を將て試み、水は杖を將て試む。禪僧門下に至つては、一言一句、一機一境、一出一入、一換一拶、深淺を見んことを要し、向背を見んことを要す、且く道へ、什麼を將てか試みん、請ふ擧す看よ。

【本則】擧す、保福長慶遊山する女。(「這兩箇落草の漢」) 爾、手を以て指して云はく、「只

這裏便ち是れ妙峯頂」(平地上に骨塚を起す、切に思む、道着することを。地を掘つて深く埋めん。) 慶云はく、「是は則ち是、可惜許」(若し是れ眞眼當時にあらずんば、幾んど

惑了せられん。同病相憐む、兩箇一坑に埋却せん。) 雲巖著語して云はく、「今日、這漢

と共に遊山す、箇の什麼をか圖る」(嬉げ、人の斤兩を減ずることを。猶此子に較れり、

傍ノ劍を按す。復云はく、「百千年後無しとは道はず、只是れ少し」(少賣弄、也是れ雲

居の羅淨) 後に鋤清に擧似す。(好有り惣有り) 清云はく、「若し是れ孫公にあらずん

ば、便ち鬻蕪野に通きことを見ん」(同道の音方に知る、大地茫茫として人を懸殺す、奴

は婢を見て懸勤、設使臨濟徳山出て來るとも、也須らく棒を喫すべし。)

【頰】妙峯孤頂草薺。【身に和して没却す、脚下已に深きこと】敷丈なり。【拈得分明誰に

か付與せん。(用て什麼か作ん、大地人の知る没し、乾屎橛、何の用を作すにか堪へん、鼻

孔を拈得して口を失却す) 是れ孫公の端的を辨するにあらずんば、(錯、箭を看よ、賊を



着けたるも也知らず。」欄被地に著く幾人か知る。「更に再活せず、麻の如く粟に似たり、  
閻黎鼻孔を拈得して口を失却す。」

### 第二十四則

【第二十四則】 涇  
仰の密作用、本、  
百丈獨坐大雄峰の  
大機用在りて、  
彼此交徹して、最  
も須らく參取すべ  
きを明す。

【劉鐵磨】 俗姓劉  
氏の婦、出家して  
尼となり、潭州高  
山の近傍に草庵を  
結びて之に居す。  
【老特牛】 老はれ  
たる牝牛。

【涇山】 湖南省の  
潭州長沙府にあり  
【臺山】 五臺山の  
こと、山西省の代  
州太原府五臺縣に  
あり、一百有餘の  
佛刹散在す。

【大會齋】 大法要  
【放】 大の字なり  
にの意。  
【曾て云云】 この  
一句は、鐵磨が涇  
山に來りしことを  
頌す。

垂示に云はく、高尙たる峯頂に立つ、魔外も能く知ること莫し。深深たる海底に行く、  
佛眼も戴れども見えず。直儼眼流星に似、機掣電の如くなるも、未だ免れず靈龜尾を曳く  
ことを。這裡に到つて、合に作麼生すべき、試みに擧す看よ。

【本則】 撃す、劉鐵磨涇山に到る。「妨げず湊泊し難し、這老婆、本分を守らす。」山云は  
く、老特牛、汝來也。「點、探竿影草、什麼の處に向つてか聲訛を見る。」磨云はく、「來  
口臺山に大會齋あり、和尚還つて去るや。」「箭虛りに發せず、大唐に鼓を打てば新羅に舞  
ふ、故去は太だ速かに、收來は太だ遅し。」涇山身を放つて臥す。「中れり、爾怎麼の處に  
向つてか涇山を見ん、誰か知る遠き煙浪に別に好思量有ることを。」磨便ち出で去る。「過  
也、機を見て作す。」

【頌】 曾て鐵馬に騎つて重城に入る。「戰に慣ふ作家、寒外は將軍、七事身に隨ふ。」勅  
下つて傳へ聞く六國の清きことを。「狗赦書を衞む、寰中は天子、爭奈せん海晏河清なる  
ことを。」猶金鞭を握つて歸客に問ふ。「是れ什麼の消息ぞ、一條の拄杖、兩人扶かる、相  
招いて同じく往き、又同じく來る。」夜深けて誰と共にか御街に行かん。「君は瀟湘に向ひ

我は氣に向ふ、且く道へ、行いて什麼か作る。

第一十五則

垂示に云はく、機、位を離れずんば、毒海に墮在す。語、群を驚さずんば、流俗に陥る。忽ち若し擊石火裏に鐵索を別ち、閃電光中に後活を辨せば、以て十方を坐斷して、壁立千仞なるべし。還つて恁麼の時節有ることを知るや、試みに擧す看よ。

【本則】擧す、蓮華峰庵主、拄杖を拈じて衆に示して云はく、「看よ頂門上に一隻眼を具す、也是れ時の人の窠窟。」古人這裡に到つて、什麼としてか背て住せざる。『虚空裏に向つて釘概すべからず、權に化城を立す。』衆無語。『千箇萬箇麻の如く粟に似たり、却つて些子に較れり、可惜許。一棚の俊鶴。』自ら代つて云はく、「他の途路に力を得ざるが爲なり。〔若し途中に向つて辨せば、猶半月程を争ふ、設使力を得るも、什麼を作すにか堪へん。豈なく一箇無かるべけんや。〕」復云はく、「畢竟如何。」〔千人萬人、只箇の裏に向つて坐却す。千人萬人の中、一箇兩箇會せん。〕又自ら代つて云はく、「榔椶横に擔うて人を顧みず。直に千峰萬峰に入り去る。〔也好し。十杯を與ふるに、只他の擔板なるが爲なり。〕」

腦後に腮を見れば與に往來すること莫れん。

【頌】眼裡の塵沙耳裡の土。〔懷塵二百擔、鶴鶴突突什麼の限りか有らん、更に恁麼の漢有り。〕千峰萬峰背て住せず。〔備什麼の處に向つてか去る、且く道へ、是れ什麼の消息ぞ。〕

【勅下つて】老特汝牛來を頌す、秦始皇か。

【六國】春秋戰國の燕趙韓魏齊楚。

【猶云云】泰山大會齋云云を頌す。

【夜云云】放身臥と磨便出去を頌す。

【第二十五則】蓮華峰菴、純ら雲門の機鋒を須ひて、隱法眼宗の語要に似たることを明す。

【蓮華峰】雲門三世の祥巖主か、秦先道深に嗣ぐ蓮華峰は、天台山上九峰中の一なりと

【古人】これまての人と云ふほどの意。

【判】於に同じ。

【他の途路】自信力なきをいふ。

【榔椶】杖杖のこと。

【千峰】奥深き山

【塵沙】社會狀態

【蕃花】自然美より字句麗をなす。  
【剔思】眉毛を舉げて看る。

【第二十六則】百丈獨坐底は、是れ五家の端の底の處なるを明す、溥仰宗は、所作體用、全くこの中の旨より出づ。

【奇特】珍らしい事。

【大吏】百丈山の事なり。

【祖域】支那全土。

【天馬駒】天馬天駒百丈を指して云ふ。

【舒卷】把住放行に同じ、宗師自在の手段をいふ。

【途】從上の佛祖や馬祖の途轍。

【持】ひつづる。

【第二十七則】百丈獨坐底は、是れ

落花流水太だ茫茫。(好箇の消息、閃電の機、徒に佇思するに勞す、左顧千生右顧萬劫。)  
眉毛を剔起して何の處にか去る。(脚跟下更に一對の眼を贈らん、元來只這裏に在り、還つて庵主の脚跟を截得するや、然も是の如しと雖も、也須らく是れ這田地に到つて始めて得べし、打つて云はく、什麼と爲てか只這裏に在る。)

第二十六則

【本則】擧す、僧、百丈に問ふ、「如何なるか是非奇特の事。」(言中に響行り、句裏に機を呈す、人を驚殺す、眼有つて會て見ず) 丈はく、「獨り大雄峰。」(凛凛たる威風四州、坐者立者二俱に敗缺。) 僧禮拜す。(俗僧の稍僧、也恁麼の人有りて恁麼の事を見んことを要す。) 丈便ち打つ。(作家の宗師何が故ぞ、未言豐ならざれば、令虛りに行ぜず。)  
【頌】祖域交馳す天馬駒。(五百年に一たび開生す、千人萬人の中一箇半箇有り、予は父の業を承ぐ。) 化門の舒卷途を同じうせず。(已に言前に在り、渠儂自由を得たり、他の作家の手段に還す) 電光石火機變を存す。(劈面來也、左轉右轉、還つて百丈爲人の處を見るや也無や。) 笑ふに堪へたり、人の來つて虎鬚を持つることを。(好し三十棒を與ふるに、重賞の下には必ず勇夫有り、喪身失命を免れず、闍黎一着を放過す。)

第二十七則

雲門の言句、彌々明了なることを聞す。

【雷】雷は精剛落は驚落、死の手に捕へられし時。

【金風】秋風金に屬す。

【有宗】向上の宗。

【三句】前蓋乾坤隨波逐流、截斷衆流の三句をいふ。

【大野】この二句は、大野金風の境界を放開す。

【風風】さよほし上座。

【少林】達磨大師少林寺は、河南省の嵩山にあり。

【蕪耳】達磨を葬す所。

【第二十八則】百

垂示に云はく、一を問へば十を答へ、一を擧すれば十を明む、電を見せ鷹を放ち、風に因つて火を吹く、眉毛を櫛まごることは明ら且く置く、只虎穴に入る時の如きれば如何。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、僧、雲門に問ふ、樹湖に葉落つる時如何。(是れ什麼の時節ぞ、家破れて人亡し、人亡して家破る) 雲門云はく、(體は金風) (天を浮へ地をばふ、斬釘截鐵、淨擧擧赤灘灘、青霄に平歩す)。

【頌】問既に宗有り。(深く來風をすす、箭虜りに發せし) 答も亦同じき依。(豈雨般有らんや、鐘の扣くを待つが如し、功淡りに盡す) 三句亦す可し。(上中下。如今、是れ第幾句ぞ、須らく是れ三句の外に向つて鷹取して始めて得べし) 一鏃空に遶る。(中れり、過也、塵着、霧着、箭鋒羅を過か、一々野分、驚風颯。(普天匝地、還つて骨毛卓撃することを覺ゆるや、放行し大れり) 長天分疎雨濛濛。(風浩浩、水漫漫、頭上漫漫、脚下漫漫) 君見すや少林久坐未歸の客。(要に不覺の漢有り、人を帶累殺す、黄河は頭上より瀉す將ち来る) 靜に依る蕪耳の一事。(開眼も也着、合眼も也着、鬼窟裏に活計を作す、眼瞠し耳聾す、誰か這境界に到らん、爾が版齒を打折することを免れず)。

第二十八則

【本則】擧す、南泉、百丈の涅槃和尚に參す。丈問、從上の諸聖、還つて、人の爲に

丈獨坐底の大機、能く大用を發することを明す。

【涅槃】本名は法政涅槃經を究明するに依つていふ。

【南泉】名は普願馬祖一に嗣ぐ唐の太和八年十二月寂す、世壽八十七。

【人の爲にせず】神祕玄妙にして、文字語言を以て、説き得ぬ眞理といふ意。

【不是心】形而上形而下の問題を超越。

【只恁麼】納智の見解前邊の如し。

【争か、云ふ】從來の理賢の説かざることを説くことが出来るか。

【大善知識】宗師の大導師。

【太婆】太婆に同じ一すてきに一の意か。

【人の爲にせず】一法の人に與ふるなしと。

【一一】百丈南泉

説かざる底の法ありや。」(和尚合に知るべし、豈立萬仞、還つて崗に落つることを覺ゆるや。) 泉云はく、「有り。」(落草し了れり、也孟八郎にして什麼か作ん、便ち恁麼の事有り。)

丈云はく、「作麼生か是れ人の爲に説かざる底の法。」(看よ他作麼生、看よ、他手忙しく脚亂るることを、錯を將て錯に就く、但試みに問うて看よ。) 泉云はく、「不是心、不是佛、不是物。」(果然として敗闕を納る、果然として漏返少からず。)

丈云はく、「説了也。」(他の與に説破すること莫れ、從他一平生を錯るることを、他の與に、恁麼に道ふべからず。)

泉云はく、「某甲は只恁麼、和尚は作麼生。」(頼に轉身の處有り、長に與すれば即ち長、短に與すれば即ち短、理長すれば則ち就く。)

丈云はく、「我又是れ大善知識にあらず、争か説不説あることを知らん。」(看よ他手忙しく脚亂るることを、身を説し、影を露す、去死十分漏涙裏に判有り、恁麼に罵ぞ我を賺す。)

泉云はく、「某甲不會。」(乍ちに恁麼なるべし、頼に不會に値ふ、會せば即ち偏が頭を打破せん、頼に這漢の只恁麼なるに値ふ。)

丈云はく、「我、太婆だ偏が爲に説き了れり。」(雪上に霜を加ふ、龍頭乾尾にして、什麼か作ん。)

【頤】祖佛從來人の爲にせず。(各自に鏡界を守る、縁有れば縁を繋ぐ、箇の元字脚を記得して、心に在かば、地獄に入ること箇の如くならん。)

衲僧今古頭を執うて走る。(草鞋を踏破し杖杖を拗折して高く鉢囊を掛けよ。)

明鏡臺に當つて列像殊なり。(墮也破也、鏡を打破し來れ、偏と與に相見せん。)

一一南に面つて北斗を看る。(還つて老僧が佛殿

共に自由自在をいふ。  
【斗柄】北斗星の劍先き。  
【拈得】討ぬるに處なし、鼻をつまんでわからぬ暗さの意。

【第二十九則】百丈獨坐の端的、自然に三祇と百劫の諸妄想とを超越するを明す。

【大隋】名は法真長慶安に嗣ぐ、臨濟と同時代か、傳記未詳。

【劫火】劫は劫波の略語、四億三千二百萬年を一劫波とす、無限大の時問と思へばよしこの劫火云は仁王般若經に出づ。  
【未審】はてなの意。  
【這箇】人間の靈

に騎つて山門を出づるを見るや、新羅國裏會て上堂、大唐國裏未だ鼓を打せず。斗柄垂る。(落處も也知らず、什麼の處にか在る)討ぬるに處無し。(瞎、可惜許、椀子地に落ちて椀子七八斤と成る)鼻孔を拈得して口を失脚す。(那裏よりか這消息を得來る、果然として怎麼、便ち打たん。)

第二十九則

垂示に云はく、魚行けば水濁り、鳥飛べば毛落つ。明かに主賓を辨じ、洞かに縑素を分つ。直に當臺の明鏡、掌内の明珠に似たり。漢現じ胡來り、聲に彰れ色に顯る。且く道へ、什麼としてか此の如くなる。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、僧、大隋に問ふ、劫火洞然として、大千俱に壞す。未審、這箇壞か不壞か。【這箇甚れ什麼物ぞ。這一句、天下の衲僧摸索不着。預め搔いて痒を待つ。】隋云はく、壞、無孔の鐵鏡當面に擲つ。鼻孔を沒却す、未だ口を聞かざる已前、斷破了也。】

僧云はく、怎麼ならば則ち他に隨ひ去るや。(沒量の大人語脈裏に轉却せらる、果然として錯りて認む)。隋云はく、他に隨ひ去る。(前箭は猶輕く後箭は深し、只這箇多少の人摸索不着、水長せば船高く、泥多ければ佛大なり。若し他に隨ひ去ると道はば什麼の處にか在る、若し他に隨ひ去らずと道はば、又作麼生、便ち打つ。)

【頌】劫火光中に問端を立つ。(什麼と道ふぞ、已に是れ錯り了れり。)衲僧猶滯る兩重

【去】消滅の意。  
【他】須彌山又大海。

【問端】疑惑を生ず。  
【雨重】靈魂滅不滅。

【區區】同然又等閑のこつこつ問ひ廻る。

【第三十則】百丈獨坐庭の端、自ら趙州登坐の地に歸するを明す。

【鎮州】河北の一方地方、趙州の北方大根の名所。

【羅藟】大根のこと。  
【頭】大の意を合む。

【則を振る】答話の興。【自古と云云】過現未三世。  
【賊賊】趙州を指す。

の關。「此人を坐斷して如何が救ひ得ん、百匝千重、也脚頭脚底有り。」憐むべし、一句他に隨ふの語。「天下の衲僧這般の計較を作す、千句萬句も也消得せず。什麼の他の脚跟を截斷し難き處が有らん。」萬里區區として獨り往還す。「業識茫茫既過するも也知らず、自ら是れ他草鞋を踏破す。」

### 第三十則

【本則】擧す、僧、趙州に問ふ、「承り聞く、和尚判しく南泉に見ゆと、是なりや否や。」  
〔千問一見に如かず、拶、眉八字に分る。〕州云はく、「鎮州に大蘿蔔頭を出す。」〔天を擗地を甚ふ、斬釘截鐵、箭新羅を過ぐ、彌後に腮を見れば、與に往來すること莫れ。〕

【頌】鎮州に大蘿蔔頭を出す。「天下の人知る、切に已む道着することをも、一回擧着すれば一回新なり。」天下の衲僧則を取る。「争奈せん、不恁麼なることを、誰か這閑言長語を用はん。」只知る自古と自今と。「半開半合、麻の如く粟に似たり、自古も也不恁麼、如今も也不恁麼。」争か辨ぜん鴉は白く鳥は黒きことを。「全機頓脱す、長者は自ら長、短者は自ら短、識得する者は貴し、也辨ずること消得せず。」賊賊、「咄、更に是れ別ならず、自ら是れ擔枷過狀。」衲僧の鼻孔曾て拈得す。「穿過了也、裏裏し。」

### 第三十一則

【第三十一】悟  
後、人二處の大事、  
谷を以て對し、  
永嘉を以て爲し、  
門の表準と爲すを  
明す。

【麻谷】名は麻敬  
馬祖一に嗣ぐ、蒲  
州の麻谷山に住す  
【章敬】名は麻敬  
馬祖一に嗣ぐ、京  
兆章敬寺に住す。  
【錫杖】錫杖、行  
喫葉羅といひ、行  
乞又理覺に用ふ。  
【卓然】ぬつと立  
つての意。  
【禪床】坐禪の轉  
子。

【是れ汝】この是  
は上の章敬即是の  
次に續むべきなり  
一章敬は即ち是れ  
汝は不是」が正し

示に云はく、動ずるときは則ち影現じ、息ずるときは則ち冰生ず。其れ或は不動不  
變なるも、野狐窟裡に入ることを通れず。通得徹し、信得及して、無毫の障翳無くば、  
龍の水を得るが如く、虎の山に靠るに似たり。放行するや瓦礫光を生じ、把定するや眞  
金色を失す。占人の公案、未だ觸題を免れず、且く道へ、什麼の事をか許論する。試み  
に舉す看よ。

【本則】舉す、麻谷、錫を持して章敬に到り、禪床を遶ること三匝、錫を振ふこと一下し  
て、卓然として立つ。(曹溪の椽子一椽に脱出す、直に得たり云を驚し地を動すことを。)  
敬云よく、是是。』(泥裏に土地を洗ふ、一船の人を賺殺す、是れ什麼の語話ぞ、繫驢橛子。)  
雪竈著語して云はく、『放過せば、則ち不可、猶一着を較くこと在り。』麻谷又南泉  
に到り、禪床を遶ること三匝、錫を振ふこと一下して、卓然として立つ。(依前として、泥  
裏に土地を洗ふ。再遶前來、毆跳れども斗を出です。』泉云はく、『不是不是。』(何ぞ承當  
せざる、人を殺すに眼を匿せず、是れ什麼の語話ぞ。』雪竈著語して云はく、『放過  
せば不可。』麻谷當時云はく、『章敬は是と道ひ、和尚は什麼としてか不是と道ふ。』(主人  
公什麼の處にか在る。遺漢、元來人の舌頭を取る。漏逗し了れり。』泉云はく、『章敬は即  
ち是、是れ汝は不是。』(也好し人を殺しては須らく血を見るべし、人の爲にせんには須ら  
く爲に徹せしむべし、多少の人を瞞却し來る。』此は是れ風力の所轉、遂に敗壞を成す。  
『果然として他に籠罩せらる、自己を争奈何せん。』



【風力】吾人の活動は、畢竟風元素の運動にあり。

【拍却】枯山の意

【四海六六】雨が降つても風が吹いても天下は大平なり。其理を常に悟れぬ意。

【古董】古人の秘策。

【十二門】十二部經。

【善案】まわり遠い意。

【第三十二則】臨濟、定上座を接するは、是れ祖師門下、人を接するの基範にして依行すべき古實を明す。

【定上座】臨濟下傳不詳。

【善住】ひつつかまへること。

【托閑】おしのける意。

【佇立】きよろんと立つ意。

【臨濟】黃檗希運

【頌】此錯彼錯。(眉毛を惜取せよ、令に操つて行す、天上天下唯我獨尊。) 切に忌む拍却すること。(雨筒無孔の鐵錘、直説千手大悲も、也是不起、或は若し拍却去らば、開鑿に三十棒を喫せしめん) 四海浪平かに。(天下の人皆て動若せず、東西南北一等の家風、近日雨水多し。) 百川潮落つ。(海味深淵深淵、且つ得たり自家安穩なることを、直に得たり海晏河清。) 古策風高し十二門。(遺簡に何盤ぞ、杖頭に眼無し、切に忌む拍却頭上に向つて活計を作すことを。) 門門踏あり空しく重案。(一物も也無し、爾が平生を賺す、鏡着すれば即ち瞎す) 善案に非ず。(果然、教に傳身の處有り、已に瞎し了れり、便ち打つ) 作者好し無情の道を求むるに。(一死更に再活せず、十二時中什麼としてか話す、天を掃り地を撲して什麼か作んし)

### 第三十二則

垂示に云はく、十方坐斷して、千眼類に開く。一句截流して、萬機截削。還つて同死同生處ありや。見成公案、打疊不下なれば、古人の葯藤。試に請ふ尋す看よ。

【本則】學す、定上座臨濟に問ふ、「如何なるか是れ佛法の大意。」(多少の人、此に對つて茫然たり、猶這箇の在る有り、尋常にして什麼か作ん) 濟、蒲床を下つて批住して、一掌を興へて便ち托閑す。(今日提敗す老婆心切、天下の拍却跳不出。) 定、佇立す。(已に鼻窟裡に落つ、踏過了也、未だ免れず鼻孔を失却することを) 傍僧云はく、「定上座何

の遷化後、唐宣宗から、勅諭の禪師號。

【持來】 濟の大機大用を持し來ることとは、容易ではな

【巨靈】 山神、臨濟に諭ふ。

【華山】 陝西省にあり、これに神話あり。

【八破】 定上座の疑詰を劈破するなり。

【多子無し】 なんのことではないの意

【第三十三則】 臨濟宗の大事、雲門旨を逼り、陳操尚書、機に發するの因縁、別に雲門宗の大事に徹す、恐るべし、慎むべし。

【陳操】 睦州刺史後に尚書となる睦州龍興寺の陳章宿に參す。

【資福】 名は如賣西塔移の三世、山寂の三世。

【看】 訪問。

ぞ禮拜せざる。〔冷地裏に人有つて塵役す、全く他の力を得たり、東家の人死すれば西家の人哀を助く。〕定、禮拜するに方つて、〔勤を將て拙を補ふ。〕忽然として大悟す。〔暗に燈を得るが如く、貧の寶を得るが如し。錯を將て錯に就く、且く道へ、定上座箇の什塵を見てか便ち禮拜する。〕

【頌】 斷際の全機後隱を繼ぐ。〔黃河源頭より濁り了れり、子は父の業を承ぐ。〕持し來つて何ぞ必ずしも從容に在らん。〔什塵の處にか在る、爭奈せん此の如き人有ることを。脚手無き人還つて他を得んや也無や。〕巨靈手を搦ぐるに多子無し。〔人を赫殺す、少賣弄、打つこと一拂子、更に再勘せじ。〕分破す華山の千萬重。〔乾坤大地一時に露出す、墮也。〕

第三十三則

垂示に云はく、東西辨せず、南北分たず、朝より暮に至り、暮より朝に至る。還つて伊臆睡すと道ふや。有る時は、眼流星に似たり。還つて伊惺惺と道ふや。有る時は、南を呼んで北と作す。且く道へ、是れ有心か是れ無心か。是れ道人か是れ常人か。若し箇裡に向つて透得して、始めて落處を知らば、方に古人の恁麼不恁麼なることを知らん。且く道へ、是れ什塵の時節ぞ。試みに舉す看よ。

【本則】 舉す、陳操尚書、資福を看る。福來るを見て便ち一回相を畫す。〔是れ精、精を識り、是れ賊、賊を識る。若し蘊藉ならずんば、争か這漢を識らん。還つて金剛圖を見る

【一圓相】完全圓満の義、宇宙萬象の本體は、圓明寂靜にして都ての形象を絶するを以て不着便。おちつかぬ、本分地上より見れば。

【掩却】閉ぢて終ふの意。

【一隻眼】活眼卓見。

【圓圓】圓相を玉に。

【珊瑚】玉のなる活。

【馬載】馬にも驢にも載して云云。

【分付】云ひつけゝるの意。

【無事客】世の中の人。

【一團雪】魚釣道具の一種、釣糸の垂續など。

【不出】この釣糸のおもりに、ひつかかつては云云。

【第三十四則】仰山の言句、大いに雲門に似たるの用處を明す。

【仰山】名は慧寂

や。操云はく、「弟子恁麼に來る、早く是れ便を著す。何に況んや更に一圓相を畫するをや。」(今日、箇の睡の漢に撞着す、這老賊) 福便ち方丈の門を掩却す。(賊は貧兒の家を打せず、已に它的圓積に入り了れり) 雪竇云はく、「陳操只一隻眼を具す。」(雪竇頂門に眼を具す、且く道へ、他の意行麼の處にか在る、也好し一圓相を與ふるに、灼然として龍頭蛇尾、當時好し一撈を與へて、伊をして進むにも亦門無く、退くにも亦路無からしめん。且く道へ、他に什麼の一撈を與へん。)

【頌】圓圓珠遠る玉珊瑚。(三尺の杖子黄河を攪く、須らく是れ碧眼の胡僧にして始めて得べし、生鐵釣就す) 馬載驢地鐵船上す。(許多を用て什麼か作ん、什麼の限りか有らん、且く闍黎に與へよ看ん。) 分布す海山無事の客。(人の要せざる有り、若し是れ無事の客ならば也消得せし、須らく是れ無事にして始めて得べし) 鼈を釣つて時に下す一團雪。(恁麼にし來り恁麼にし去る、一時に出不得、若し是れ蝦蟇ならば什麼を作すにか堪へん、蝦蟇螺蚌恁奈何せん、須らく此れ蟹を釣つて始めて得べし) 雪竇復云はく、「天下の智僧跳不出。」(身を兼ねて内に在り、一坑に埋却せん、闍黎還つて跳得出するや。)

第三十四則

【本則】學す、仰山、僧に問ふ、近灘菴の處ぞ。(天下の人一般也問過せんことを要す、風に因つて火を吹く、常の程を作さずんばあるべからず) 僧云はく、「廬山。」(寶頭の人

馮山直に嗣ぐ、廣  
の昭宗大元、寂  
す、壽七十七。  
【五老峰】 虛山に  
ありて其貌老人の  
相非する如きが故  
【開蒙】 又は開梨  
阿闍梨の略語、梵  
語の音譯なり、譯  
して執範師、正行  
など、敬稱。  
【落草】 下賤に落  
る。

【出草】 宗師の手  
段。

【白雲云云】 現成  
公案にて、五老峰  
の自然美を歌ふ。  
【果某】 あきしか  
なる某子。

【左頭云云】 取は  
非難、尚はつくづ  
くなぶあること。  
【君見や】 この  
句以下は五老峰頂  
の自然美に酔つて  
やるものは云云。

【寒山子】 故事を  
引く、行太早は、  
化度利生に赴きた  
るを云。

【十年】 永久にの  
意、山詩にある語

は得難し。』山云はく、曾て五老峯に遊ぶや。』(行に因つて妨げず、胃を掉ふことを。何ぞ曾て躑躅せん。』僧云はく、曾て到らず。』(一步を移せ、面の赤からんよりは、語の直からんには如かず、忘前失後するに似たり。』山云はく、開蒙曾て遊山せず。』(未だ多事生、眉毛を恨取せば好し、這老道、其の死急を看したる。』雲門云はく、此語皆慈悲の爲の故に、落草の談あり。』(殺人り活人劍、兩箇三箇、山下の路を知らんと要せば、頭はく是れ去來の人なるべし。』)

【頭】 出草入草。〔頭上漫漫、脚下漫漫、牛聞半句、他も也恁麼、我も也恁麼〕一語か尋討することゝを解せん。〔頂門に一隻眼を具す。開蒙尋討することゝを解せず。〕白雲重重。〔千

重百重、頭上に頭を安ず。〕紅日杲杲。〔破也、慧、眼を擧すれば即ち晴。〕左頭更下、

〔瞎漢、依前として無事、爾許多の伎倆を作して什麼か作ん。〕右時已に老いたり。〔一念萬年、過。〕君見すや寒山子。〔癡兒件を牽く。〕行くこと太だ早し。〔也早からず。〕十年歸

ること得ず。〔即今什麼の處にか在る、灼然。〕來時の道を忘却す。〔渠儂自由を得たり、一著を見過す、便ち打たん。忘前失後を做すこと莫くんば好し。〕

第三十五則

垂示に云はく、龍蛇を定め、玉石を分ち、縑素を別ち、簞箬を決す。若し是れ頂門上  
に眼あり、肘臂下に符あるにあらずんば、徃徃に當頭に躑躅せん。只如今見聞不昧、聲色

を引く、無始無終の境界。  
 【第三十五則】文殊菩薩大人の境界又、我が宗に同じく、五家の用を含むことを明す。  
 【無著】姓は董氏牛頭山の融禪師に嗣ぐ、或は云ふに無著文喜ならんと喜は仰山寂に嗣ぐ唐の昭宗光仁三年に寂す。  
 【文殊】理想の人如何 現勢はどうかと意。  
 【末法】正像末の三時代に區分す。  
 【比丘】譯して乞士、勤息。  
 【少】すこしは。  
 【三百】或は五百人。  
 【凡聖】上下同居人。  
 【前三】今日三人。  
 【後三】明日三人毎日出入つたりで、たまりませんと意。  
 【千峰之云】盤脚は、めぐりまがつ

純眞の目く道へ、是れ白か、是れ曲か、是れ直か。這裡に到つて什麼生か辨せん。  
 【本則】擧す、文殊無著に問ふ、「近繼什麼の處ぞ。」(征問せざるべからず、也這箇の消息有り)。「無著云はく、『南方。』」(草窠裏より出頭す、何ぞ必ずしも眉毛上に搭向せん。大方外無し、什麼と爲てか却つて南方有る)。「殊云はく、『南方の佛法、如何が住持す。』」(若し別人に問はば、禪生ぜん、猶唇齒に掛くると在り)。「著云はく、『末法の比丘、少しく戒律を奉ず。』」(實頭の人得難し)。「殊云はく、『多少の衆ぞ。』」(當時、便ち一喝を具へん、一擧に撈倒し了れり)。「著云はく、『或は三百、或は五百。』」(盡く是れ野狐精、果然として漏返す)。「無著文殊に問ふ、『此間如何が住持す。』」(擧着、便ち鎗頭を回轉し來れり)。「殊云はく、『凡聖同居、龍蛇混雜。』」(敗缺少からず、直に得たり脚忙しく手亂るることを)。「著云はく、『多少の衆ぞ。』」(我に話頭を還し來れ、也放過することを得じ)。「殊云はく、『前三三後三三。』」(顯言倒語、且く道へ、是れ多少ぞ、千手大悲も數へ足らず)。  
 【頌】千峰盤屈して色藍の如し。(還つて文殊を見るや)誰か謂ふ文殊是れ對談すと。(設使普賢なりとも也顧みず、蹉過了也)笑ふに堪へたり清凉多少の衆。(且く道へ什麼をか笑ふ、已に言前に在り)。「前三三と後三三と」。(試みに請ふ、脚下に辨じて看よ、爛泥裏に刺有り、碗子地に落ちて椽子七片と成る)。

第三十六則

ての意、自然美の裡に活実あり

【本則】擧す、長沙一日遊山して、歸つて門首に至る。〔今日一日、只管に落草、前頭も是れ落草、後頭も是れ落草〕首座問ふ、和尙什麼の處にか去來す。〔也這老漢を勘過せんことを要す、箭筈を過ぐ〕沙云はく、遊山し來る。〔草に落つべからず、敗缺少からず、草裏の漢〕首座云はく、什麼の處にか到り來る。〔擧、若し至る所有れば、未だ草に落つることを免れず、相牽いて火坑に入る〕沙云はく、始めは芳草に隨つて去り、又落花を逐うて回る。〔漏逗少からず、元來只荆棘林の裏に在つて坐す〕座云はく、大に春意に似たり。〔相隨來也、箭を將て錯に就く、一手擡一手拈〕沙云はく、也

【長沙】名は景峯南泉額に嗣ぐ。在りて洞庭湖の東岸、風光明媚。

秋露の芙蓉に滴るに勝れり。〔土上に泥を加ふ、前箭は編幅く後箭は深し、什麼の了期か有らん〕雪竇著語して云はく、答話を謝す。〔一火泥團を弄する漢、三箇一狀に領過す〕

【長沙】湖南省に在りて洞庭湖の東岸、風光明媚。

【大地】蓮の葉。長沙の境界。

【何人】一人も悟つぬ者はないとの意。

【始獲】この上に一點の佛法はないとの意。

【又落花を云云】處處を眞にて。

【又落花を云云】處處を眞にて。

【老衰又披】老衰又披

【老衰又披】老衰又披

【狂猿】病衰の猿

【狂猿】病衰の猿

【無限】無限の感  
懐みな自然美を詠  
美。

【第三十七則】盤  
山垂語、直に是れ  
向上の一句子、一  
代藏中説不著なる  
ことを明す。

【盤山】名は寶積  
馬祖一に嗣ぐ。

【三界】欲色無色  
【無法】あけつば  
なしの意、畢竟無  
に歸す。

【白雲】流泉。宇  
宙則ち三界には、  
何物もない、併し  
天に白雲、地に流  
泉あり。

とか道はん、一坑に埋却せん。鬼窟裏に墮在す。唱。〔草裏の漢、賊過ぎて後弓を張る、  
更に放過すべからず。〕

第三十七則

垂示に云はく、撃電の機、徒に佇思するに勞す。空に當る霹靂、耳を掩ふに諧ひ難し。  
腦門上に紅旗を播げ、耳背後に雙劍を輪す。若し是れ眼辨じ手親しきにあらずんば、争か  
能く構得せん。有殺の底は低頭佇思、意根下に卜度す、殊に知らず鬼を見る無數なること  
を。且く道へ、意根に落ちず、得失に拘らず、忽ち箇の恁麼に覺するあらば、作麼生か  
祇對せん。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、盤山垂語して云はく、「三界無法。〔前既に弦を離れて返回の勢無し、月明  
照し見る夜行の人、中れり、法を識る者は懼る、好し聲に和して便ち打たん。〕何れの處  
にか心を求めん。〕〔人を瞞すること莫くんば好し、重ねて擧するに勞せず、自ら點檢して  
看よ、便ち打つて云はく、是れ什麼ぞ。〕

【頌】三界無法、〔言猶耳に在り。〕何れの處にか心を求めん。〔重ねて擧するに勞せず、  
自ら點檢して看よ、打つて云はく、是れ什麼ぞ。〕白雲を蓋と爲し、〔頭上に頭を安ず、千  
重萬重〕流泉を琴と作す。〔聞くや、相隨來也、一たび聴いて一たび悲むに堪へたり。〕一  
曲兩曲人の會する無し。〔宮商に落ちず角徵に干るに非ず、路を借つて經過す、五音六

【一曲】この奏曲を流し得る底の者は少しと

【雨滴】自然の妙

【第三十八則】臨濟の上の受用、風穴をして拈弄せしむ、唐陵に見らし故に佛得し機きを明す

【風穴】名は延治南陽に、宋の太祖開禧六年八月夜す、六十七八

【箭内】政監の二年、漢帝乾祐二年、趙匡胤の帝事李君の爲に、管内に夏を過す、この時の上堂なり

【祖師】心印とは達磨の佛心印、鐵牛支那の漢州城外に黃河を守護する神として、鐵牛廟あり、頃は河市尾は河北にあり

【機】靈性

律盡く分明、自前出去、懸けば則ち歸す、雨過ぎて夜暗く水深し、迅雷耳を疑ふに及ばず、直に得たり拖泥帶水、什麼の處にか在る、便ち打

第三十八則

唯亦に云はく、若し漸を論せば、常に獲りて道に合す、開市裏に七縱八橫、若し樹を論せば、朕遠を留めず、千聖も亦埃索不著、儘し汝は頭漸を立てずんば、又作麼生、快人の一言、快馬の一鞭、正恁麼の時、誰か是れ作者、試みに擊す看よ

【本則】擊す、風穴鄂州の箭内に在つて上堂云はく、(公に倚つて禪を講く、什麼と道ふぞ)「祖師の心印、狀鐵牛の機に似たり。(千人萬人憑かせども動かず、諸節在什麼の處にか在る、三要即聞して鉢鉢を犯さず。)去れば即ち印住し、(正令當行、踏)住すれば即ち即做す。(再犯容さず、令行の時を看取せよ、拗、便ち打つ)只去らず任せざるが如きんば、(氣遣の處無きことを看よ、多少の語説)印するが即ち是か、印せざるが即ち是か」(天下の人の出頭するに分有り、文彩已に彰る、但請ふ禪床を掀倒し大衆を喝散せんことを)時に盧陂長老あり出でて問ふ、某甲に鐵牛の機あり。(一箇の雷曉得を釣り得たり、妨げず奇特なることを)請ふ師印を搯せされ、(好箇の話頭語説なることを爭奪せん)穴云はく、鐵籠を釣りて巨浸を濚ましむるに慣れて、却つて嗟す跼歩の泥沙に躓することを。(佛の鳩を捉ふるに似たり、賓籠空に漫たり、神駒千里)跛行思す、(可惜



【去れば】印紋が  
残る云云。

【住すれば云云】  
印紋はため云云。

【印を指せざれば】  
印を指せざるに及ば  
ず、指は指。

【巨浸】巨江大河  
【帳】まるぶ、不  
指印に喩ふ。

【擬義】何か云ひ  
たげに口を動かす  
の意。

【佛法】王法もそ  
の根本義に於ては  
同一なりと云云。

【牧主】知事の役

【擣得】擣住の意

【三玄】勝中玄、  
句中玄、玄中玄の  
三をいふ、臨済宗  
の術語。

【戈甲】干戈甲冑  
の略。

【楚王】鄂州を楚  
王城とも云ふ。

【朝宗】集注。

【倒流】風穴の一  
喝に逆流す。

【倒流】風穴の一  
喝に逆流す。

許、也出身の處有り、惜むべし放過することをも。穴喝して云はく、「長老何ぞ進語せざ  
る。」〔旗を擣き鼓を奪ふ、妙聞來也〕。破擬議す。〔三回死し了る、兩重の公案〕。穴打つ  
こと一拂子して云はく、「好し打つに、這箇の令須らく是れ恁麼の人にして行じて始めて  
得べし。」一還つて語頭を記得する幸、試みに擧せよ看ん。〔何ぞ必ずしもせん、雪上に霜  
を加ふ。〕。破口を開かんと擬す。〔一死、更に再活せず、遺漢、人を安置せず、他の毒手に  
遭ふ。〕。穴又打つこと一拂子。牧主云はく、「佛法と王法と一鏡。」〔灼然、却つて傍人に親  
破せらる。〕。穴云はく、「箇の什麼の道理をか見る。」〔也好し一撈を興ふるに、却つて鎗頭  
を回し來れり。〕。牧主云はく、「斷るべきに當つて斷らざれば、返つて其亂を招く。」〔似た  
ることは即ち似たり、是なることは則ち未だ是ならず、須らく知るべし、傍人眼有ること  
を、東家の人死すれば西家の人哀を賜く。〕。穴便下座す。〔錯を將て錯に就く、機を見て  
變ず、且く參學の事畢ることを得たり。〕  
【頌】盧陂を擣得して鐵牛に跨らしむ。〔千人萬人の中、也巧業を呈さんことを要す。敗  
軍の將は再び斬らず。〕。三玄の戈甲未だ轉しく酬いず。〔局に當る者は迷ふ、策を受けるは  
福を受くるが如く、降を受けるは敵を受くるが如し。〕。楚王城畔朝宗の水。〔什麼の朝宗の水  
とか説かん。浩浩として天地に充塞す、任は是れ四海なるも、也須らく倒流すべし。〕。喝  
下智て却つて倒流せしむ。〔立れ這一喝、爾が舌頭を敲却するのみにあらず、喝、陝府の  
鐵牛を驚走し、嘉州の大象を喝殺す。〕

【第三十九則】臨濟向上の機用、若し雲門の調へなくんば、又格外の旨を缺くことを明す

第三十九則

垂示に云はく、途中受用底は、虎の山に靠るに似たり。世諺流布底は、猿の體に在るが如し。佛性の義を知らんと欲せば、常に時節因縁を觀すべし。百鍊の精金を煅へんと欲せば、須らく是れ作家の爐鞴なるべし。且く道へ、大用現前底は、什麼を將てか試験せん。

【法身】無相なる佛陀の靈覺をいふ絶對的真理の實體【花藥欄】花畑の田

【本則】擧す、僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ清淨法身。」〔問處眞ならざれば、答へ來つて齒見る、斑斑駸駸、是れ什麼ぞ。〕門云はく、「花藥欄。」〔問處眞ならざれば、答へ來つて齒擧なり、壘著壘著、曲、直を藏さず。〕僧云はく、「便ち怎麼にし去る時如何。」〔薄崙に箇の棗を呑む、放憨にして作麼せん。〕門云はく、「金毛の獅子。」〔也喪也喪、兩平一賽、錯を將て錯に就く、是れ什麼の心行ぞ。〕

【金毛】現象即法身の妙理をこの二語に説示す、金製の獅子なり。

【頌】花藥欄。〔言猶耳に在り。〕顛預すること莫れ。〔麻の如く、粟に似たり、也此子有り、自領出去。〕星は秤に在つて盤に在らず。〔太だ葛藤、各自に衣單下に向つて返觀せよ、道理を説くことを免れず。〕即ち怎麼。〔薄崙に箇の棗を呑む。〕太だ端なし。〔自領出去、灼然、錯つて他の雲門を惟むこと莫くんば好し。〕金毛の獅子大家看よ。〔一箇半箇を放出す、也是れ箇の狗子、雲門也是れ普州の人賊を送る。〕

【頌】大面をして人を輕蔑する【懲嘆】前二句は雲門に、此句は僧の方に關係す【無端】わけもな【大家】諸君子

【第四十則】便ち我が宗向上の大事此公案に在り、須

第四十則

【第四十則】便ち我が宗向上の大事此公案に在り、須

らく參取すべきの要路を明すのみ。

【陸互】字は景山蘇州の人なり、南泉頤に嗣ぐ、御史大夫となる。

【肇】羅什の弟子四哲の一人、實藏論を著す、肇論と云ふ、三十歳頃寂す、刑に處せらる

【天地】萬物、計較分別するは實に非ずと。

【時人】現今の人

【如夢】理性判斷を缺如せるは丁憂夢中に、物を見る如しと。

【聞見】一は一の義、一は一の義。

【鏡中】形相が映ず、萬物一體に非ずの意。  
【照影】照は映の意、雪竇の自負我でなくてはの意。

垂示に云はく、休し去り歇し去る、鐵樹花を開く。有りや有りや、點兒落節、直儂七纏八横なるも、他に鼻孔を穿たるることを免れず。且く道へ、誦誦什麼の處にか在る。試みに據す看よ。

【本則】擧す、陸互大夫、南泉と語話する次、陸云はく、『肇法師道はく、一天地と我と同根、萬物と我と一體』と。也甚だ奇怪なり。『鬼窟裏に活計を作す、書餅餽に充つべからず、是れ草裏に商量す。』南泉庭前の花を指して、『什麼をか道はん、咄、經に經師有り、論に論師有り、山僧が事に干らさず、咄、大丈夫當時一轉語を下し得ば、唯南泉を截斷するのみにあらず、亦乃ち天下の衲僧の興に、氣を出さしめん』大夫を召して云はく、『時の人此一株の花を見ること、夢の如くに相似たり。』『鶯鶯を誘し了つて君が看るに従す、金針を把つて人に度與すること莫れ、寐語すること莫れ、黃鶯を引き得て御條を下らしむ。』  
【頌】聞見覺知一一に非ず。〔森羅萬象一法有ること無し、七花八裂、眼耳鼻舌身意、一時に是れ箇の無孔の鐵鏡。〕山河は鏡中に在つて觀す。〔我が這裏、這箇の消息無し、長者は自ら長、短者は自ら短、青は是れ青、黄は是れ黄、備什麼の處に向つてか觀ん。〕霜天月落ちて夜將に半ならんとす。〔備を引いて草に入れり、徧界管て藏さず、切に忌む鬼窟裏に向つて坐すること。〕誰と共に澄潭影を照して寒し。〔有りや有りや、若し同床に睡るにあらずんば、焉んぞ被底の穿たるることを知らん、愁人、愁人に向つて説くこと莫れ、愁人に説向すれば人を愁殺す。〕

【第四十一則】作家の相見、別に生涯あることを明す

【投子】名は大阿彌微學に嗣ぐ、後梁均王乾化四年四月寢す

【大死底人】肉體の死を云ふに非ず一切の見聞覺知を離れ、あらゆる思慮分別を絶したる無念無作の人

【却活】地獄にも極樂にもゆかず復活樂にもゆかず復活

【夜行云云】夜分行かず明けてから行けとの意

【樂忌】藥のさしあひ、俗語の食ひ合せに當る

【作家】これは趙州

第四十一則

垂示に云はく、是非交結の處、聖も亦知る能はず。逆順縦横の時、佛も亦辨すること能はず。絶世超倫の士の爲にして、遼群大士の能を顯す。水凌上に向へて行き、劍刃上に走る。直下に麒麟の頭角の如く、火裡の蓮華に似たり。宛も超方なるを見て、始めて同道なることを知る。誰か是れ好手の者ぞ、試みに擧す看上。

【本則】據す、趙州投子に問ふ、「大死底の人却つて活する時如何」と、「恁麼の事有り、賊は貧兒の家を打せず、會て客と作るに慣つて方に客を憐む」と、投子云はく、「夜行を立許さず、明に投じて須らく到るべし」と、「樓を看て樓を打す、是れ賊、賊を識る、若し同床に臥さずんば、焉んぞ被底の穿たるることを知らん。」

【頌】活中に眼あり還つて死に同じ、(兩ながら相知らず、翻來覆去、若し蘊藉ならずんば、争でか這漢の緇素を辨得せん) 樂忌何ぞ須ひん、作家を鑑みることを、(若し驗過せずんば、争でか端的を辨ぜん。遇著して試みに一際を與へよ、又且つ何ぞ妨げん、也問過せんことを要す) 古例尙言ふ會て未だ到らずと、(觀に是れ伴有り、千聖も也傳へず、山僧も亦知らず) 知らず唯か塵沙を撒することを解す、(即今也少かず、開眼も也着、合眼も也着、闍黎恁麼に擧す、什麼の處にか落在す)。

第四十二則

【塵沙云云】言句を付くことむつかしいの意。

垂示に云はく、單提獨弄、帶水拖泥、敲唱俱に行ず、銀山鐵壁、擬議すれば即ち獨前に鬼を見る。尋思すれば即ち黒山下に打坐す。明明たる杲日天に麗き、颯颯たる清風地を匝る。且く道へ、古人遺つて誦證の處ありや。試みに擧す看よ。

【塵】字は道玄馬祖一に嗣ぐ、野屠の人にして僧家。

【本則】擧す、野屠士、藥山を辭す。〔道老漢作怪也〕山、十人の禪客に命じ、相送つて門首に至らしむ。〔也他を顧せず、是れ什麼の境界ぞ、也領らく是れ境界を識る底の體僧にして始めて得べし〕屠士空の雲を指して云はく、〔好雪片片、別處に落ちず。〕〔風無きに浪を起す、指頭に眼有り。道老漢、言中に響有り。〕時に禪客ありて云はく、〔什麼の處にか落在する。〕〔中れり、相隨來也、果然として鈎に上り來る。〕士打つこと一掌す。

【藥山】一名は曹溪石菴遷に嗣ぐ、唐の徵宗太和八年十一月寂す壽八十四。

〔着、果然として鈎賊藏家〕至云はく、〔屠士也草草なることを得され。〕〔枯木裏に瞞眼す。〕士云はく、〔汝恁麼に禪客と稱す。閻老子未だ汝を放さざること存らん。〕〔第二鈎の惡水滾ぎ了る、何ぞ止閻老子のみならん、山僧が這裏も也放遣せじ。〕至云はく、〔屠士作應生。〕〔善心改めず、又是れ棒を咬せんことを要す、這僧、頭より尾に到るまで、便を看す。〕士又打つこと一掌して云はく、〔果然、雪上に霜を加ふ、棒を咬し了つて款を呈せよ。〕

【好雪云云】別別の處には落ちてゐたままぬの意。

〔更に斷絶の句有り、又他の典に判語を讀む。〕雪を別して云はく、〔初問の處に但雪院を擧つて便ち打せん。〕〔是は則ち是、賊遇きて後乃

【閻老子】閻魔大王。

雪を別して云はく、〔初問の處に但雪院を擧つて便ち打せん。〕〔是は則ち是、賊遇きて後乃

【草草】失敬なことをいふ。

雪を別して云はく、〔初問の處に但雪院を擧つて便ち打せん。〕〔是は則ち是、賊遇きて後乃

【別して云はく】今乃爲にあたる等閑 雪連塵。

雪を別して云はく、〔初問の處に但雪院を擧つて便ち打せん。〕〔是は則ち是、賊遇きて後乃

【機關】 活手隨。

【沒可把】 沒は又勿に作る。捕ふるところなきを云ふ。

【瀟灑絕】 さつぱりしたの意、絶は斷し。

【盲眼】 達磨大師

【第四十三則】 洞

山向上の宗旨、自ら雲門臨濟も、亦これより出づる有るを明す、曹洞の宗旨は、特に此期の中に在り。

【洞山】 名は良价

雲巖に嗣ぐ。曹洞宗の祖。唐の懿宗咸通十年三月寂す、壽六十三。

を張る、也漏逗少からず、然も是の如くなりと雖も、箭鋒相拄ふるを見んと要す、争奈せん鬼窟裏に落在し了ることを。」

【頌】 雪團打雪團打、(争奈せん第一機に著在することを、拈出するに勞せず、頭上漫漫脚下漫漫) 龐老の機關沒可把、(往往に人の知らざる有り、只恐らくは、不恁麼ならんことを) 天上人間自知せず。(是れ什麼の消息ぞ、雪雲還つて知るや。) 眼裏耳裏絶瀟灑。

【箭鋒相拄ふ、眼見て盲の如く、口説いて唾の如し】 瀟灑絶、(作麼生、什麼の處に向つてか、龐老と雪竇とを見ん。) 習眼の胡僧も差別し難し。(達磨出で來るとも、偏に向つて什麼とか、道はん、打して云はく、闍黎什麼と道ふぞ、一坑に埋却せん。)

第四十三則

垂示に云はく、乾坤を定むるの句、萬世共に遡ふ。虎兇を執ふるの機、千聖も辨すること莫し。直下更に纖翳なく、全機處に隨つて齊しく彰る。向上の錯鈍を明めんと要せば、須らく是れ作家の爐鑪なるべし。且く道へ、従上來還つて恁麼の家風ありや也無や、試みに擧す看よ。

【本則】 擧す、僧洞山に問ふ、寒暑到來、如何が廻避せん。(是れ這箇の時節にあらず、勞頭勞面、什麼の處にか在る。) 山云はく、何ぞ無寒暑の處に向つて去らざる。(天下の人尋ぬるに得ず、身を藏して影を露す、蕭何賣却す假銀城。) 僧云はく、如何なるか是れ

【闇黎】貴僧「あなた」梵語、阿連利耶。譯して執範師、又正行といふ。

【垂手】師家が學人を接化する爲に下門に下りて接引。

【正偏】正は絶對偏は相對、平等と差別、五位の説あり。

【安排】分類。

【忍俊】堅忍不拔韓猶。韓子虛の詞つてゐた夫が月影を捉へると云ふ故事。

【第四十四則】即ち宗向上の大事に禾山用ひ得て人過ぎるを明す。

【禾山】名は無股九峰處に嗣ぐ、宋太祖建隆元年歿す。

【習學云云】絶學眞過、唯法師の寶藏論、無空有品の語なり。習は學校教育、絶は無爲の閑

無寒暑の處。」「(一船の人を賺殺す、他に騎つて轉ず、也一釣に便り上る。)」山云はく、家  
の時には闇黎を寒殺し、熱の時には闇黎を熱殺す。」「眞僧を捕はす、曲直を藏さず、崖  
に臨んで虎兇を見る、特地一場の恐、大海を撼翻し、須臾を踢倒す、且く道へ洞山什麼の  
處にか在る。』

【頌】垂手還つて萬仞崖に同じ。〔是れ作家にあらすんば誰か能く辨得せん、何の處にか  
融せざらん、王勅嚔に行れて諸侯道を避く。〕正偏何で必ずしも安排に在らん。〔若し是  
れ安排せば、何の處にか今日有らん。作麼生か兩頭に注らざる、風行けば草偃し、水到れ  
ば渠成る。〕琉璃舌殿明月照す。〔圓陀陀地、切に忌む影を認むることを、且く當頭なるこ  
と莫れ。〕忍俊たる韓猶空しく階に上る。〔是れ這回のみにあらず、蹉過了也、塊を逐う  
て什麼にか作ん、打して云はく、偏道僧と同參。〕

### 第四十四則

【本則】舉す、禾山垂手して云はく、「習學之を聞と謂ひ、絶學之を隣と謂ふ。〔天下の納  
俗跳不出、無孔の鐵鎚一箇の鐵楔子。〕此一を過ぐる者、是を眞過と爲す。」「頂門上に一  
隻眼を具して什麼か作ん。』信出でて問ふ、「如何なるか是れ眞過。」「什麼と道ふぞ、一筆  
に勾下す、一箇の鐵楔子有り。』山云はく、「解打長し。」「鐵、眞黎、確確。』又問ふ、「如  
何なるか是れ眞諦。」「什麼と道ふぞ、兩重の公案、又一箇の鐵楔子有り。』山云はく、「解

道人、那は准大悟の意、眞過は正大悟佛の境界、眞諦を悟る。  
【解打鼓】太鼓を打つ稽古をせよとの意。

【擲石】石口をひく。

【般土】土を撒ぶ機を發す。

【矢を放つこと】機は弩に裝置せる機巧。

【千鈞】三萬斤。

【象骨】雪峰存禪師。

【莽鹵】うつかりの意。

【第四十五則】趙州平生受用、ただ是れ向上出身の一路を明す。

打鼓。「鐵槩、鐵藥黎、鐵錘。」又問、「即心即佛は問はず、如何なるか。」是れ非心非佛。「【什麼と道ふぞ、道箇の折取地、三段同じからず、又一箇の鐵槩子有り】」山云はく、「解打鼓。」【鐵槩、鐵藥黎、鐵錘】又問、「向上の人來る時、如何が接せん。」【什麼と道ふぞ、他の第四杓の黒水に漉ひ來れり。又一箇の鐵槩子有り】」山云はく、「打鼓。」【鐵槩、鐵藥黎、鐵錘、且く道へ什麼の處にか落在す、問に西天に到り、暮に東土に歸る。】

【頌】一擲石。「寰中は天子の勅、癡兒件を牽く、向上の人怎麼に來る。」二般土。「塞外は將軍の令、兩箇一壯に領過す、同病相憐む。」機を發することは須らく是れ千鈞の弩なるべし。「若し是れ千鈞ならんば、重なることを得ず、軽く嘲ゆべからず、豈死蟻蝶の爲にせんや。」象骨老師曾て巻を靴す。「也人有つて曾て怎麼に來る、箇の無孔の鐵錘有り、阿誰か知らざる。」爭か采山の解打鼓に似かん。「鐵槩子、須らく道老漢に還して始めて得べし、一子提み得たり。」君に報じて知らしむ。「雪竈も也未だ夢にだも見ざること有り、雪上に霜を加ふ、備還つて知るや。」莽鹵なること莫れ。「也些子有り、龍鱗も備。」甜き者は甜く苦き者は苦し。「答話を請す、錯つて注闕を下す、好し三十棒を與ふるに、棒を喫し得るや也未だしや、便ち打つ、舊に依つて黑漫漫。」

第四十五則

垂示に云はく、道はんと要すれば便ち道ふ、舉世變び無し。行すべきに當つて即ち行ず、



【萬法】宇宙の萬物を總稱して云ふ。

全機讓らず。擊石火の如く、閃電光に似たり。疾焰過風、奔流度刃。向上の銀鏡を拈起するも、未だ免れず鋒を亡じ舌を結ぶことを。一總道を放つて、試みに擧す看よ。

【布衫】麻布の法衣。

【本則】擧す、僧、趙州に問ふ、萬法一に歸す、一何れの處にか歸す。〔這老漢を撈着す、堆山積獄、切に忌む、鬼窟裏に向つて活計を作すことを。〕州云はく、我青州に在つて、一領の布衫を作る、重きこと七斤。〔果然としてし縦八横、漫天の網を抛却す、還つて趙州を見るや、衲僧の鼻孔管て拈得す、還つて趙州の落處を知るや、若し這裏に見得せば使乃天上天下唯我獨尊、水到れば渠成り、風行けば草偃す、苟し或は未だ然らずんば、老僧偏が脚跟下に在り。〕

【編辭】編辭に作るが正なり、禮記の「不備者其惟大聖乎」の意、俗語の記理なるなり。

【頌】編辭管て換す老古錘。〔何ぞ必ずしも這老漢を撈着せん、換撈して、什麼の處に向つてか去る。〕七斤料重し、幾人か知る。〔再來半文鏡に直らず、直に得たり口口擔に似たることを。又却つて他に一籌を贏ら得らる。〕如今拋却す西湖の體。〔雪竇の手髯に還つて拈めて得ん、山僧も也零せず。〕下載の清風誰にか付具せん。〔自古自今、且く道へ、雪竇他と酬唱するか他の奥に注脚を下すか、一子親み得たり。〕

【老古錘】老禪師と、機鋒の談利を云ふ餘裕なり。

第四十六則

【下載】順風の意、揚子江を下る船は西北風なり。上載は東南風なり。載は運、つむ。

垂示に云はく、一槌にして便ち成す、凡を超え事を遺ゆ。片言にして新むべし、縛を去り粘を解く。氷凌上に行き、無象上に走るが如し。聲色堪裏に坐し、聲色頭上に行

【第四十六則】返

關王夫、亦向上の大事あり。

【雨聲】雨のばはる轉る聲。

【華嚴】華嚴經より引用す。

【泊】暨のあて字にして、及の意なり。

【出身、脱體】上は人前に出づるなり下は具體的の意【塵】 答應、呼應

【虛堂】 空虚なる

【流を入す】 入は感受。流は物體そのもの。電流の如き關係。

【ガワ】 ゴワゴワ降つてゐる。轉はいやましにの意。

横妙用は則ち日く置く、刹那に便さざる時は如何。試みに擧げ看よ。

【本堂】擧す、僧に問ふ、「門外是れ什麼の聲ぞ。」(堂内に一僧を喚ぶ、聲を患へずんば什麼をか問はん)僧云はく、「雨滴聲。」(助けず實頭なることを、世好箇の消息。)清云はく、「衆生驚倒して已に迷うて物を逐ふ。」(事生ぜり、其便を得るに慣ふ、鏡鉢搭索、他の自分の手胸に逐す)僧云はく、「和尚作麼生。」(果然として驚駭を結ぶ、拍を擧じ來れり、助けず當り難きことを。却つて槍頭を把つて倒に人を刺す)清云はく、「泊んど已に迷はず。」(咄、直に得たり分疎不下なることを。)僧云はく、「泊んど已に迷はず。」(這老漢を抄著す、人を逼殺す、前箭は猶輕く後箭は深し)清云はく、「出身は猶易かるべし。觀體に違ふことは體に難かるべし。」(養子の縁、然も、是の如くたりと雖も、徳山臨濟、什麼の處に向つてか去る、喚んで雨滴聲と作さずんば、喚んで什麼の聲とか作ん。直に得たり、分疎不下なることを)

【頌】虚堂の雨滴聲。(從來聞然無し、大家這裏に在り) 作真實對し懸し。(果然として知らず、山僧從來是れ作者にあらず、權有り實有り、風有り收有り、後活拈來) 若し會て流を入すと謂はば、(頭を刺して脚盆に入る、喚んで雨滴聲と作さずんば、喚んで什麼の聲と作さん。) 依然として還つて不會し。(山僧幾くか會て僧に問ひ來る、這漆桶、我に無孔の鐵鑊を還し來れ。) 會不會。(兩頭坐斷す、兩處分れず、這兩邊に在らず。) 南山北山轉た汚需。(頭上脚下、若し喚んで雨聲と作さば則ち瞎、喚んで雨聲と作さずんば、喚んで什

雲の尊とか作さん。這裏に到つて須らく是れ歸實地を踏んで始めて得べし。」

### 第四十七則

【第四十七則】雲門の言句は、專ら向上の一事を導くことを明す。

垂示に云はく、天何をか言ふや、四時行はる。地何をか言ふや、萬物生ず。四時の行はるる處に向つて、以て龍を見るべし。萬物の生ずる處に於て、以て用を見るべし。且く道へ、什雲の處に向つてか納骨を見得せん。言語動用、行住坐臥を離却し、唯唯尊物を仰却して、還つて獲得するや。

【法身】佛の實體  
【六不收】六六不收、六根六塵六事は皆法身より生ず

【本則】奪す、僧、雲門に問ふ、「如何なるか是れ法身。」(多少の人疑著す、千華も跳行出漏速少からず。)門云はく、「六不收。」(斷釘鐵錐、八角の磨鏡空裏に走る、靈龜尾を曳く、膜光未分の時驚得するも、已に是れ第二頭、膜非已に生じて後驚得せば、又第三首に落つ、若し更に言語上に向つて獲得せば且喜すらくは沒交涉。)

【數へ足さず】一足は得。  
【少林】達磨大師  
【神光】二祖慧可

【類】一三三四五六。(周つて復始る、滴水滴凍、許多の工夫を賣して什雲を作ん。)「吾觀の胡僧も數へ足さず。(三生六十劫、達磨何ぞ曾て夢にたも見え、問答什雲としてか知つて故に犯す。)少林漫に道ふ神光に付すと。(一人虚を言ふれば萬人責を言ふ、徒頭來已に錯り了れり。)衣を卷いて又説く少林に歸ると。(一僧の人を離脱す、何んからず。)天竺茫茫として尋ぬるに空無し。(什雲の處にか在る、始めて是れ太平、如今什雲の處にか在る。)

【乳峯】雪竇山。

夜來却つて乳峰に對して宿す。(僧が眼睛を刺破す、也是れ風無きに浪を起す、且く

道へ、是れ法身か、是れ化身か、偏に二十棒を具す。」

第四十八則

【第四十八則】茶の湯亦上出身の作用あることを明す。  
 【王大傳】泉州の神史王德彰、太傳となる、長慶稜に嗣ぐ、この席の正。  
 【長慶稜】泉州にあり長慶稜の住する等。  
 【勅上座】報慈の律師、長慶稜に嗣ぐ。  
 【明招】名は德謙、羅山閣に嗣ぐ。  
 【鈍】日本の鈍子を深くけるが如き金房推の大急須。  
 【煎茶】茶席に列す。  
 【翻却】ひつくりかへすの意。  
 【林鐘】ミカミ火鉢、火鉢の里に曳の如き作をせる者。  
 【野云云】燒け残りの木を薪に集

【本則】專す、王大傳招慶に入つて煎茶す。「傳家相承る、賢らく奇行有るべし、等閑に無事たらんや、大家一隻眼を着く、」を意せ奉り一時に同上座、明招のたの腕を把る。「火湿團を弄する漢、煎茶を弄する、別人を希集す。」朗茶銚を翻却す。「一生せり、果然」と太傳見て上座に問ふ、「茶下是れ什麼ぞ。」「果然」として禍事。朗云はく、「捺爐乾。」「果然」として他の箇に申り了れり、嬉けず流るることを。」太傳云はく、「既にはれ捧爐、什麼としてか茶銚を翻却す。」「何ぞ偏に自分の草料を與へんや、事生せ。」朗云はく、「官に仕ふること十日、失一棒に在り。」「驚つて指注す、是れ什麼の高語ぞ、杜撰の神和藪の如く業に似たり。」太傳持論して便ち去る。「灼然として作家、他に着す一隻眼を具すること。」明招云はく、「同上座招慶の飯を翻却し了つて、却つて江外に去つて野を打す。」「更に三十棒を與ふるに、這獨眼漢、只一隻眼を具す、也頗らく是れ明眼の人點破して始めて得べし。」朗云はく、「和尚作麼生。」「抄著、也好し、一抄を與ふるに、終に這數の死郎當の具解を作さず。」招云はく、「非人具便を得たり。」「果然」として、只一隻眼を具す。「一半を道ひ得たり、一手一棒。」平養云はく、「當時但茶碗を踏倒せん。」「爭奈せん賊過ぎて後弓を張ることを、然も是の如くなり」と雖も、也未だ徳山門下の客と稱

【非人云云】 棒爐

【來問】 王太傳の

【風を成す】 は立

【應機】 王太傳の

【獨眼】 明招の諺

【牙爪雷】 仕官

【逆水】 苦情面倒

【第四十九則】 作

【三學】 名は慧然

【錫を透る】 大悟

【一千五百】 雲峰

【會下】

せす。一等に是れ濼即濼頼。中に就いて奇特なり。」

【頌】 來問風を成すが若し。〔箭虛に發せず、偶爾として文を成す、妨げず要妙なることを。〕應機善巧に非ず。〔泥團を弄する漢、什麼の限りか有らん、方木眞孔に逗す、妨げず

作家に撞着することを。〕悲むに堪へたり獨眼龍。〔只一隻眼を具す、只一概を得たり。〕曾て未だ牙爪を呈せず。〔也牙爪の呈すべき無し、什麼の牙爪とか説かん、也他を欺くことを得ず。〕牙爪開く。〔爾還つて見るや、雪竇却つて些子に長れり、若し怎麼の手脚有らば、

茶爐を踏倒せん。〕雲雷を生ず。〔盡大地の人一時に棒を喫し、天下の梢僧身を著くる處無し。〕早天の霹靂。〕逆水の波幾回をか經る。〔七十二棒、翻つて百五十と成る。〕

### 第四十九則

垂示に云はく、七穿八穴、眞を攪き旗を奪ふ。百重千重、前を瞻後を顧みる。虎頭に踏して虎尾を収むるも、未だ是れ作家ならず。牛頭没して馬頭回るも、亦未だ奇特と爲さず。且く道へ、過輩底の人來る時如何。試みに擧す看よ。

【本則】 擧す、三聖雪峰に問ふ。初を透る金鐘、未審し何を以てか食と爲ん。〔妨げず縦横自在なることを、此間太高生、偏合に只自知すべし、何ぞ必ずしも更に問はん。一峰云はく、〕汝が錫を出で來らんを得つて道はん。〔人の多少の聲價を減す、作家の宗師、天然自在。〕聖云はく、〔一千五百人の善知識、話頭たも也識らず。〕〔退宿宿可飲だ群を驚か

【話頭云云】話も出来ないてはなにかの意。  
【住持云云】お前とむだ話は出来ぬとの意。

【蕩】動かすこと

【鱈】魚のひげひれ

【颯】暴風の下より吹き上ぐるつじ風

【幾幾】幾人の意

【第五十則】便ち雲門の宗旨、別に著到すべきを明す。

【塵塵】華嚴經賢首品に依る、微

す、踏踏するに一任す。峰云はく、「老僧住持事繁し。一勝負に在らず、一言を放過す、此語最も毒なり。」

【頌】網を透る金。千兵は得易く、一將は求難し、何似生、千聖も奈何ともせず。云ふことを休めよ水に滯ると。(他の雲外に向つて立す、活潑潑地、且く鑿置すること莫くんば好し) 乾を搗し坤を蕩し、(作家作家、未だ是れ他の奇特の處にあらず、放出すること又何ぞ妨げん。) 鬚を振り星を擺ふ。(誰か敢て端倪を尋せん、箇の技倆を做し得たり、賣弄出し來る、妨げず群を驚すことを) 千尺鯨噴いて洪浪飛び、(那邊に轉過し去る、妨げず奇特なることを) 轟大地の人一口に吞盡す。一聲雷震うて清塵起る。(眼有り耳有り、聾の如く盲の如し、誰か悚然たらざらん) 清塵起る。(什麼の處にか在る、咄) 天上人間知んぬ幾幾ぞ。(雪峰は窄く陣頭を把り、三聖は窄く陣脚を把る、土を振し沙を撒して什麼か作ん、打つて云はく、備什麼の處にか在る。)

第五十則

垂示に云はく、階級を度越し、方便を超絶す。機機相應じ、句句相投す。儘し大解脫門に入り、大解脫の用を得るに非ずんば、何を以てか佛祖を權衡とし、宗乘に龜鑑たらん。且く道へ、當機直截、逆應縱横、如何が出身の句を道得せん。試みに請ふ擧す看よ。

【本則】擧す、僧、雲門に問ふ、如何なるか是れ塵塵三昧。(天下の衲僧盡く這裏に在

塵裏に去界を盡す  
即ち諸法無常無礙  
大小廣狹の別を絶  
したるをいふ、絶  
諸真理の露現。

【鉢裏飯桶裏】微  
塵も藏さず諸人の  
面前に自由なりの  
意。

【多口】おしやべ  
りの意。

【舌を下す】空喉  
【位津ならず】優  
劣なし。

【寝不潔止不止】  
キツつけようか、  
やめようかの俗語  
【舌筒】たまきか  
れ、まごころの意  
【無観】まる裸の  
意。

【長者子】長者窮  
子。空山拾得の如  
きをいふ。

【第五十一則】巖  
頭初め末後の巴尾  
を攝す、この川縁  
最も參詳すべきの  
大事を明す。

つて菓窟を作す、溝口に霜を含む、沙を撒し土を撒して什麼か作ん。門云はく、「鉢裏の飯、桶裏の水。」〔布袋裏に錐を盛る、金沙混雜す、錯を將て錯に就く、舍元殿裏に長安を問はず〕

【頰】鉢裏の飯、桶裏の水。(露也、沙を撒し土を撒して什麼か作ん、口を漱ぐこと三年にして始めて得べし。)多口の阿師考を下し難し。(舌頭を齧却す、法を識る者は懼る、什麼と爲てか却つて怎麼に擧する)北斗南星位殊ならず。(東を喚んで西と作して什麼か作ん、坐立儼然、長者は長法身、短者は短法身)白浪滔天平地に起る。(脚下深きこと數丈、賓主互換、蒸然として備が頭上に在り、備又作麼生か打たん。)擬不擬。(蒼天蒼天、嘯)止不止。(什麼をか誦く、更に怨苦を添ふ。)箇箇無計の長者子。(應當少からず、傍觀の者は晒ふ。)

第五十一則

垂示に云はく、纔に是非あれば、翫然として心を失す。階級に落ちざれば、又攀索すること無し。且く道へ、放行するが即ち是か、把住するが即ち是か。道裡に到つて、若し一毫の懸路あつて、語言法に滞り、肉體境に拘らば、盡く是れ依草附木、直饒ひ便ち觸脱の處に到るも、未だ免れず萬里に懸關を望むことを。還つて構得すや、若し未だ構得せずんば、且く只現成公案を理會せよ。試みに擧す看よ。

【托】托開。おし開く。意。

【巖頭】名は全競徳山に嗣ぐ、唐の偃光啓三年四月寂す、壽六十。

【嶺南】今の廣東廣西安南地方、雪峰は會昌の大迫害に逢うてこの地に逃亡し、巖頭は鄂州(漢口)邊に逃げて渡無夫に身を全うす。

【本則】擧す、雪峰住菴の時、兩僧あり、來つて禮拜す。「什麼をか作す、一狀に領過す」峯來るを見て、手を以て菴門を托し、身を放つて出でて云はく、「是れ什麼ぞ。」(鬼眼睛、無孔の笛子、頭を擧げ角を戴く。)僧亦云はく、「是れ什麼ぞ。」(泥彈子、氣拍板、筒鋒相拄ふ)峰低頭して菴に歸る。「爛泥裏に刺有り、龍の足無きが如く、蛇の角有るに似たり、中に就いて措置するに、難爲なり。」僧後に巖頭に到る。「也須らく是れ問過して始めて得べし、同道方に知る。」頭問ふ、「什麼の處より來る。」(也須らく是れ作家にして始めて得べく、這漢往往に敗闘を納る、若し是れ同參にあらずんば、洎乎ど放過せん。)僧云はく、「嶺南より來る。」(什麼の消息をか傳へ得來る、須らく是れ箇の消息を通すべく、這つて雪峰を見るや)頭云はく、「曾て到るや。」(勘破し了ること多時、到らずと道ふべからず)僧云はく、「曾て到る。」(實頭の人得難し、打つて兩極と作す)頭云はく、「何の言句かありし。」(便ち怎麼に去るや)僧前話を擧す。「便ち怎麼に去るや、重重敗闘を納る。」頭云はく、「他什麼とか道ひし。」(好し男口に便ち打たん、鼻孔を失却し了れり。)僧云はく、「他無語、低頭して菴に歸る。」(又敗闘を納る、爾且く道へ、他は是れ什麼ぞ。)頭云はく、「噫、我當初悔らくは、他に向つて、末後の句を道はざりしことを。」(洪波清渺、白浪滔天。)若し伊に向つて道はましかば、天下の人、雪老を奈れともせじ。「(癩兒件を牽く、必ずしもせず、須彌も也須らく粉碎すべし、且く道へ、他の團續什麼の處にか在る)僧夏末に至つて、再び前話を擧して請益す。「已に是れ惺惺ならず、正に賊去り了る多時、



賊過ぎて後弓を張る。」頭云はく、「何ぞ早くとはざる。」(好し與に禪床を撒倒するに、過也。)僧云はく、「未だ敢て容易にせず。」(這棒本、是れ這僧喫せん、鼻孔を穿却す、因に停めて智を長せしむ、已に是れ兩重の公案。)頭云はく、「雪峰我と同條に生ずとい雖も、我と同條に死せず。」(漫天網地。)末後の句を識らんと要せば、只這れ是れ。」(一船の人を賺殺す、我も也信せず、泊乎と分疎不下ならん。)

【末後の句】 佛道詠妙云云。迷と

【明暗云云】 迷と

【葛藤】 葛藤も付かぬ、差別無差別。

【底】 「一」の意。

【雙雙】 相並ぶ。

【殊絶】 絶美、

【黃頭】 釋迦傳。

【南北云云】 行き

【歸去來】 さあも

【千巖】 暗に象骨

山(雪降寺の山)を指す。

【頌】 末後の句、「已に言前に在り、將に謂へり、眞箇と。就着すれば則ち瞎す。」君が爲に説く。「舌頭落ちぬ、説不着、頭有りて尾無く、尾有りて頭無し。」明暗雙雙底の時節。「葛藤の老漢、牛の角無きが如く、虎の角有るに似たり、彼此是れ恁麼。」同條生也共に相知る。「是れ何の種族ぞ、彼此波交涉、君は瀟湘に向ひ、我は秦に向ふ。」不同條死還つて殊絶。「拄杖子我が手裏に在り、骨が山僧を怪み得ん、爾が鼻孔什麼と爲てか別人の手裏に在る。」還つて殊絶。「還つて棒を喫せんと要するや、什麼の摸索する處か有らん。」黃頭碧眼、須らく甄別すべし。「盡大地の人、鋒を亡じ舌を詰く、我も也恁麼、他人は却つて不恁麼、只老胡の知を許して老胡の會を許さす。」南北東西歸去來。「收、脚跟下猶五色の線を帯ぶることあり、爾に一條の拄杖子を乞へん。」夜深けて同じく看る千巖の雪。「猶牛月程に較れり、從他あれ大地雪漫漫たることを、溝に填ち壑に塞がる、人の會する無し、也只是れ箇の漢、還つて末後の句を識得するや、便ち打つ。」

第五十二則

【第五十二則】趙州有之石之、ただこの事を擧揚することを明す。  
 【石橋】李膺といふ人之を造る。  
 【傳】傳へ聞く。  
 【自然石に】自然石にて、石橋の配置をなし、徒渉に便せるもの、獨木橋は異。  
 【孤危】峻峻にして寄りつき難きこと。  
 【道方】一等に超る者。  
 【巨鼈】出格の學者。  
 【灌溪老】これも臨濟下の灌溪志閑和尚にして、同時代の人。  
 【劈箭】灌溪の急流を形容す。  
 【第五十三則】馬大師、傳ふる所、別に他事なし、初めの入處、終りの耳聲に至る、ただ是れ向上出身の一路を明すのみ。

【本則】擧す、僧、趙州に問ふ、「久しく趙州の石橋と響く。到り來れば、只略約を見らる。」(他人有つて、來つて虎鬚を捋づ、也是れ衲僧本分の事。) 州云はく、「汝只略約を見て、且、石橋を見ず。」(其便を得るに問へり、這老漢身を賣り去らる。) 僧云はく、「如何なるか是れ石橋。」(釣に上り來れり、果す。) 州云はく、「驢を渡し馬を渡す。」(一綱に打就す、直に得たり盡く地の人、氣を出す無きことを、死更に再活せず。)  
 【頌】孤危立せず道方に高し。(須らく是れ田地に到りて始めて得べし、言猶耳に在り、他に自分の草料を置さん。) 海に入つて、還つて須らく巨鼈を釣るべし。(要津を坐斷して凡聖を通ぜず、蝦蟇螺蚌問ふに足らず、大丈夫の漢、兩雨三三三なるべからず。) 笑ふに聲へたり同時の灌溪老。(也任麼の人の言つて、曾て恁麼に來る、自恁麼に機關を用ふる底の手裏有り。) 劈箭と云ふことを解するも亦徒らに勞す。(猛半月濕に濡れり、似たることは則ち似たり、是なることは則ち未だ是ならず。)

第五十三則

垂示に云はく、猥鼻藏さず、全機獨露、途に觸れて滯る無し。著著、出身の機あり。句下に私無し、頭頭殺人の意あり。且く道へ、古人畢竟什麼の處に向つてか休歇する。

【行く次】 行く時

【去】 ゆくの意。

【忍痛】 いたいと  
叫ぶ事。

【知んぬ何許】 こ  
の語は、第九十九  
回の際に、知んぬ  
幾幾とあるに同じ  
知るものは世の中  
に幾人あるか、津山  
はなれとの意。  
【見來】 見つける  
見出すなり。  
【山雲】 馬嶺再問  
の親切なるをいふ

試みに擧す看よ。

【本則】 擧す、馬大師百丈と行く次、野鴨子の飛び過ぐるを見る。(爾箇落草の漢、草裏に寝ず、暮ちに顔みて什麼にか作ん。) 大師云はく、「是れ什麼ぞ。」(和尚合に知るべし、這老漢鼻孔も也知らず。) 丈云はく、「野鴨子。」(鼻孔已に別人の手裏に在り、只管款を供す、第二杓の惡水、更に毒なり。) 大師云はく、「什麼の處にやる。」(前箇は猶驚く、後箇は深し、第二回昭嘆す、也合に自知すべし。) 丈云はく、「飛び過ぎ去れり。」(只管、他の後に隨つて轉ず、當面に躡過す。) 大師遂に百丈の鼻頭を握る。(父母所生の鼻孔、別人の手裏に在り、鉤頭を振轉す、鼻孔を震動し來れり。) 丈、忍痛の聲を作す。(只這裏に在り、還つて喚んで野鴨子と作し得んや、還つて猪洋を震るや。) 大師云はく、「何ぞ曾て飛び去らん。」(人を踏すること莫くんば好し、這老漢、元來只鬼實裏に在りて、活計を作す。)

【頷】 野鴨子。(群を成し隊を作す、又一隻有り。) 知んぬ何許ぞ。(用て什麼か作ん、塵の如く案に似たり。) 馬祖見來つて相共に語る。(野鴨を打せば什麼の了明か有らん、箇の什麼をか震く、獨り馬祖のみ有つて箇の俊成を震る。) 話り盡す山雲海月的情。(東家の杓柄は長く西家の杓柄は短し、知んぬ葛藤を打すること多かるぞ。) 依然として會せず還つて飛び去る。(因、道ふ莫れ他言ふことを會せずと、什麼の處にか飛び過ぎ去る。) 飛び去らんと欲す。(鼻孔別人の手裏に在り、已に是れ他の與に註脚を下し了れり。) 却つて把住す。

【道へ道へ】さう云つて見よ、鼻頭を置けられたまふ一つものを云つて見よの意。

【第五十則】便ちあに馬大師のみならん、從上の祖師、雲門、臨濟、亦た此事を舉揚することを明す。

【話在り】話中の意、いひわけする事があるとの意。

〔老婆心切、更に什麼と道はふ。〕道へ道へ。〔什麼と道はふ、也山僧をして道はしむべからず、野鴨子の鴨をを作すべからず、蒼天蒼天、脚踏下好し。〕十棒を興ふるに、知らず什麼の處に向つてかよふ。

第五十四則

垂示に云はく、生死を透出し、機關を懸轉す。等閑に截斷審訂、隨處に蓋天盖地。且く道へ、是れ什麼人の行履の處ぞ。試みに擧す看。

【本則】擧す、雲門、僧に問ふ。〔近離世の處ぞ。〕〔也西禪と道ふべからず、探手擧草、東西南北と道ふべからず。〕僧云はく、〔西禪近世何の言句かある。〕〔果然として可憐だ實頭、當時好し本分の草料を興ふるに。〕門云はく、〔西禪近日何の言句かある。〕〔擧せんと欲すれども、恐らくは和尙を驚さんことを。〕深く來風を擧す、也和尙に似て雜語するに相似たり。〕僧兩手を展ぶ。

〔取闕し了れり、勾賊破家、人をして疑著せしむるを妨げず。〕門打つこと一掌。〔令に擧つて行ず、好打、快便逢ひ難し。〕僧云はく、〔某甲話在り。〕〔備翻款を要することを待つ那却つて旗を擡き鼓を、一塵の手脚有るに似たり。〕門却つて兩手を展ぶ。〔嶮、青龍に駕興すれども騎ることを解せず。〕僧無語。〔惜むべし。〕門便ち打つし。〔放過すべからず、此杯合に是れ雲門喫すべし、何が故ぞ、斷るべきに當つて斷らざれば返つて其亂を招く、闍黎合に多少を喫すべし、一着を放過す、若し放過せずんば合に作麼生。〕

【虚威】雲門の機許の峻嚴高邁なるを類したるもの。【薄薄】四百州のみにならず、盡世界に於て。【却つて問】話在る所。【一著】一手ゆるすなり。

【第五十五則】即ち參禪は、本、生死到來の爲に、この事を用ひ得て、自身の一際あることを要するのみ、是を以て、須らく道吾漸源の一則を究むべく、今時の人、皆薄にして古人の業を失ふことを明す。【道吾】名は圓智。【漸源】名は圓智。【道吾】名は仲興。【石菴】名は慶諸。【道吾】名は慶諸。【太厚手】雪峰存に嗣。【中興】歸途の意。【執】さあ早くの意。

【頌】虎頭虎尾一時に收む。(殺人刀、活人劍) 須らく是れ這僧にして始めて得べし、千兵は得易く、一將は求め難し。凛凛たる威風四百州。(天下の人の舌頭を坐斷す、蓋天蓋地。) 却つて問ふ知らず何ぞ太だ峻なる。(盲柳驚棒すべからず、雪管元來未だ知らざること有り、鬮黎祖次治也。) 師云はく、『一著を放過す。』(若し放過せずんば又作慶生、盡大地の人一時に落籠す、禪床を撃つこと一下。)

第五十五則

垂示に云はく、釋密全眞、雷頭に取證し、涉涉轉物、直下に承當す。擊石火閃電光中に向つて、諸親を坐斷し、虎頭に據つて虎尾を收むる處に於て、單立千仞なることは則ち且く置く。一鎗道を放つて還つて爲人の處有りや也無や。試みに撃す看よ。

【本期】撃す、道吾漸源と一家に至つて弗思す。源棺を拍つて云はく、『生か死か。』(什麼と道ふぞ、好し惶惶ならず、這漢、翁兩頭に在り。) 吾云はく、『生とも也道はじ、死とも也道はじ。』(龍吟すれば霧起り、虎吼けば風生ず、帽を眞々に頭を相す、老婆心切。) 源云はく、『什麼としてか道はざる。』(鉢盂了也、果然として歸つて會す) 吾云はく、『道はじ、道はじ。』(思水、霧頭に清々、前簡は猶響く、後簡は淫し。) 回つて中路に至つて、(太だ惶惶) 源云はく、『和尚快かに某甲が真に道へ、若し道はずんば、和尙を打し去らん。』(却つて此子に較れり、寧耳の客に逢ふこと罕に、多くは身を刻むの人に遇ふ、這般

【山出】 かつつけ

【遷化】 死去。

【省あり】 少しく悟る。  
【鑑子】 子は接尾辭。

【蒼天】 ああ悲しやの意  
【力を着くるに】 力は功。正しと或抄に見ゆ。功績を顯し謝恩の誠を表すの意。

吾師の法に俱ば、地獄に入ると前の如し。吾云はく、打つことは即ち打つに任ず、道ふことは即ち道はじ。二再々、頼らく事を垂すべく、就身打助す、道は漢、前身泥水、初心改めず。二語便ち打つ、二好打、且く道へ、師を打つて什麼か作ん、頼漢元來、人の喫する有る在り。後に唐百遷化す。二南、石霜に到つて、前話を舉示す。二知つて、誰に犯す、知らざるが是が不見か、是ならばは太奇。二霜云はく、生とも道道はじ、死とも也道はじ。二可憫た師對、這般の美飯堪て元來人の喫する有り。二霜云はく、什麼としてか道はざる。二語一變なりと釋も其に添掛無し、且く道へ、梁木の問と見れ問か、是れ問を。二霜云はく、道は道はじ。二天上天下、曹溪の波浪野に相似たれば、飄り無き千人も降洗せられん。二源云下に於て省あり。二觀漢、且つ山僧を罵すること莫くんは好し。二源一日鑑子を將て涅槃上に於て、東より西に過ぎ、西より東に過ぐ。二也是は死中に活を得たり、好し先師の與に氣を出すに、他に問ふこと莫れ、且く道漢、一思の無するを言ふ。二霜云はく、什麼をか作す。二師後で着也。二源云はく、先師の靈骨を質す。二東車昔後に葉裝を懸く、悔ゆるは當初を憶まざりしことを。二師什麼と道ふぞ。二霜云はく、浪波浩渺、白浪滔天、什麼の先師の靈骨をか質めん。二也頼らく他の作家に遇して始めて得べし、群を成し隊を作して什麼か作ん。二著語して云はく、蒼天蒼天。二太遲生、賊漢きて後弓を張る、好し與に一坑に埋却するに。二源云はく、正に好し力を著くるに。二且く道へ、什麼の處にか落在す、先師曾て師に向つて什麼とか道ひし。道漢、頭より尾に到り、直に如

【猶在り】 在はい  
ますなり。

【兎馬に角あり云】 兎必ず生にあ  
らず、死必ずしも  
死にあらず。

【毫を絶し】 絶對  
の真理の上には一  
物をも立せずの意

【山の如く】 宇宙  
に充滿。

【何の處にか】 没  
蹤。

【尖却】 とりにが  
すの意。

【第五十六則】 古  
人送道の言句見難  
し。是を以て衲子  
能く言句に通ずる  
是れ第一と爲すこ  
とを明す。東嶺云  
はく、此一則見難  
く明め難し。

今に至るまで出身することを得ず。〔太原の乎云はく、〕「生師の靈骨、猶在り。」〔大業見るや、閃電相似たり、是れ什麼の破草鞋ぞ、猶些子に較れり。〕

【頰】 兎馬に角あり。〔斬、可驚だ奇特、可驚だ奇特〕 牛羊に角なし。〔斬、什麼の模様をか成す、別人を瞞ずることは即ち得たり。〕毫を絶し。〔天上天下唯我獨尊、備什

麼の處に向つてか摸索せん。〕山の如く嶽の如し。〔什麼の處にか在る、平地に波瀾を起す、備が鼻孔を噴着す。〕黄金の靈骨今猶在り。〔舌頭を截却し、咽喉を塞却す、一邊を拈向

す、只恐らくは、人の伊を瞞得すること無きことを。〕白浪滔天何の處にか着けん。〔一着を放過す、脚蹠下に蹠過す、眼裏耳裏着くること得ず。〕着くるに處無し。〔果然、却つて

些子に較れり、果然として、深處に没溺す。〕隻履獨に歸つて曾て却す。〔靈囀了せされば、果兒孫に及ぶ、打して云はく、什麼と爲てか却つて這裏に在る。〕

第五十六則

垂示に云はく、諸佛曾て出世せず、亦一法の人に與ふるなし。靈囀曾て問來せず、未だ曾て心を以て他授せず。自ら是れ時の人了せず、外に向つて尋求す。覺に知らず、自己脚蹠下、一段の大事因縁、千聖も亦摸索不着なることを。只如今、見不見、聞不聞、說不說、知不知、什麼の處よりか得來る。若し未だ没溺することばはずんば、且く菩薩窟裏に向つて會取せよ。試みに學す看よ。

【良禪客】 巨良は傳不詳なり、禪客は參禪者の意。

【飲山】 名は交遼洞山价に嗣ぐ。

【一箭】 一本の箭にて三つの關所を突破せる時。

【放出】 追出すの意。

【所在を著す】 むだであつたの意。

【且來】 ちよつと待て。

【且く聽す】 を見てをるがよい、聽はまつ之意。

【的的】 しつつかとの意。

【本則】 擧す、良禪客、飲山に問ふ、「一箭破三關の時如何。」(機、妨げず奇特なることを、妨げず量れぬの猛將なることを。) 山云はく、「箇中の主を放出せよ看ん。」(要商來也、也大家知らんことを要す、主山は高く擧出は既し) 良禪はく、「恁麼ならば即す。」(過を知つて必ず改めん。) (機を見て作す、已に第一關に著つ) 山云はく、「更に何の時をか待たん。」(擧有り縦有り、風行けば草偃す) 良禪はく、「好時候つて所在を著す。」と、便ち出づ。(果然、翻款を得たんとする那第一棒人を打すれども當からず。) 山云はく、「且來聞黎。」(呼ぶことは則ち易く難んことは則ち難し、喚び得て頭を回せば什麼を作すにか堪へん) 良首を回す。(果然として把不住、中ねり) 山把住して云はく、「一箭破三關は即ち且く且く、試みに飲山が耳に箭を發せよ看ん。」(虎口裏に身を横ふ、逆水の舟、義を見て爲さるは勇無きなり) 良禪叫す。(果然として箇索不著、打して云はく、可憐可) 山打つこと七棒して云はく、「且く聽す這漢、疑ふこと十年ならんことを。」(今合に恁麼なるべし、始有り終有り、即正しければ星正し、箇箇の棒、合に是れ飲山喫す。)

【頌】 君が耳に放出す箇中のみす。(中れり、常頃に就過す、退後退後。) 放箇の徒聲肉なること莫れ。(一死再活せず、大いに誦說、過ぎ了れり) 箇の眼を取れば耳、必ず聾す。(左眼半斤、一著を放過す、左邊前ます右邊後れず。) 箇の耳を拾つれば口變べ替す。(右眼八兩、只一路を得たり、進前する則んば坑に墮ち塵に落つ、退後する則んば猛虎脚を銜む) 憐むべし一箭破三關。(全機恁麼に來る時如何、什麼と道ふぞ、破也障也。) 的的分明なり



【天に先つて】天  
地開闢以前、心祖  
は佛とも神とも  
の意

【第五十七則】趙  
州自在の境界を明  
して、以て欽山良  
公の則を失し、知  
音底を錯り、道の  
公案を問にせざる  
の類に如かざるこ  
とを通ぜしむ。

【天上天下】釋尊  
の誕生の時、自ら  
宣言したまひ、語  
長、合釋に一從右  
方、隨地行七步  
、人扶持、遍觀四  
方、舉手而言、天  
上天下、唯我獨尊、  
とあるに基く、  
【田庫奴】中は合  
と爲す、文字にし  
て、「田舎」ほめ  
と輕侮す。

箭後の路。「死漢、咄、打つて云はく、還つて見るや。」君見ずや、(彌兒伴を率く、葛藤を打し去る。)玄沙言へることあり。(那箇か是れ玄沙にあらざる。)大丈夫天に先つて心の祖と爲ると。(一句截流、萬機寂削す、鼻孔我が手裏に在り、未だ天地世界有らざる已前、什麼の處に在つてか安身立命する。)

### 第五十七則

垂示に云はく、未だ通得せざる已前は、一に銀山鐵壁に似たり、通得し了るに及んでは、自己元來是れ鐵壁銀山。或は人あり、且つ作麼生と問はば、但彼に向つて道はん、若し這裡に向つて一機を露得し、一境を看得せば、要津を坐躡して、凡率を通せざるも、未だ分外と爲さず、苟し或は未だ然らずんば、吾人の様子を看取せよ。

【本期】擧す、僧、趙州に問ふ、「至道無難、唯嫌揀擇」と、如何なるか是れ不揀擇。州云は「業業、多少の人吞むことを得ず、大いに人の疑着する有る在り、一日に霜を言む。」州云はく、「天上天下、唯我獨尊。」(平地上に骨堆を起す、鼻孔の鼻孔、一時に穿貫す、金剛鐵壁を鑿る。)僧云はく、「其れ猶是れ揀擇。」果然として他に臨つて動じたり、泥洹漢を接着す。州云はく、「田庫奴、什麼の處か是れ揀擇。」(山崩れ石滾く)僧云はく、「湖に三十棒を放す、直に得たり日曬し日映すること。」  
【頌】海の深きに似たり。(是れ什麼の處、量ぞ、淵源測り難し、未だ一字を得ざることに在

【有のまきに云ふ】  
越州の地味を高く

【欽使、禮部】  
の禮部を以てす

【猛風、越州】  
越州に比す

【布袋】  
子の皮といふ處、布袋太

【第五十八則】  
又

越州の習用、大いに他國に異なることを用す

【時の人】  
世の中の人

【策窟】  
窟は鳥の巢、策は身藏の洞窟、理窟の根本を

【直に得たり】  
ほ

【分疎】  
疎は疏の字、相能なり、不可

【象王嚙子】  
越州に比す、僅の偉人

【呻】  
呻をしかめ、くさめ、あく

【富貴】  
人の口を賣いて物言はせざるの意

り、山の樹木が如し、一什人か捕得せむ、山中に在り、一賊と空軍の軍威を云ひ、「也

任邊直有り、甲兵として力を利らす、可憐な自ら量らす、蟻鐵柱を造す、同様に異土

無し、日得凌交後、國聖徳と同參、揮かり深たり、「水を得て河面に載る、什安と道ふ

ぞ、越州也、」言軒の帝哉、「已に言前に在り、一城に地、却す、國の如く粟に似たり、

打して云はく、細か則事を要す、」

第五十八則

【本則】  
擧す、僧、越州に問ふ、「至道無難、唯難持弊、」是れ時の人、策窟なりや否や

【兩重の公案】  
也是れ人を疑はしむる處、細細に踏みすれば、親きこと鐵に似たり、猶ほ

箇の有る在り、已を以て人を方ふること、是れ也、州云はく、「替て人有つて我に問ふ、直に

得たり五年分疎不下なることを、」(箇の末からんより謂の直からんには如かず、胡掃毛蟲

を喰す、蚊子鐵半を喰む、)

【象王嚙子】  
象王が子を喰む、(富貴の中の富貴、誰人か恃然たらざらん、好箇の消息、)獅子嚙子す。

【作家の中の作家】  
百獸腦裂す、好箇の入路、)無味の談、(相罵ることは能に能す、)秀を

接げ、鐵槌子に相似たり、什麼の咬嚼の處か有らん、分疎不下五年蟻、一葉舟中に大唐を

載す、渺渺兀然として波浪起る、誰か知る別に好思量有ることを、)人口を塞斷す、(相唾

す、)は能に能す水を漫げ、唳、閻黎甚麼をか道はん、)南北東西、(有りや有りや、天

【南北朝……鳥飛】至道無難の事實を頌す。

【第五十九則】前三則と同じく、共に趙州進靜の辯、後人驚くべし、常に勧め進めて益修すべきを明す。

【如何が人の云云】語言を以て人の爲に説法は出来ぬにせしむるの辯を弄するとかの意。

【引き書とさるる】首尾一貫して陳述すること。

【念ず】暗記の意的。

【這釋】念至の目的の水、風、轉脚の答話を頌す。

【鬼談】趙州の答話に對していふ。

【頭長き】頭長き命は百二十歳を保てり、頭長きは獨足にして立つといふ方成しからん。

上天下、蒼天蒼天、鳥飛を免走る。〔自古自今一時に活埋せん〕

### 第五十九則

垂示に云はく、天を該ね地を括り、率を越え凡を越ゆ。百草頭上に涅槃妙心を出し、干戈衰微に、僧僧の命脈を點定す。且く道へ、首の什麼人の恩力を承けてか、便ち任麼なることを得たる。試みに舉す看よ。

【本則】舉す、僧、趙州に問ふ、至道無難、唯嫌揀擇。〔再運前來、什麼と道ふぞ、三重の公案〕。纒かに語言あれば是れ揀擇。〔當日に霜を合言。〕和尙如何が人の爲にせん。〔道

老漢を移落す、因〕州云はく、何ぞ這語を引き書とさざる。〔賊は是れ小人。智、君子に

過きたり、白拈賊、賊馬に騎つて賊と遊ぶ。〕仁人はく、某甲、只念すること這裡に至

る。〔兩箇泥團を弄するは、箇の賊に違着す、椽根敵手し難し〕。州云はく、只這至道無

難、唯嫌揀擇。〔畢竟這漢に由る、他に眼翳を拂却せらる、捉敗了也。〕

【頭】水灑げども著かず、〔什麼とか説かん、太極速生、什麼の共に語處か有らん。〕風吹

けざも入らず。〔虚空のごとくに指針たり、雲刹剎場、空を望んで啓告す。〕虎のごとくに歩

み龍のごとくに行く、〔他家自在を得たり、觸着す事なることを。〕鬼號び神泣く。〔大衆

耳を掩はん、草偃せば風行く、團圓是れ他と同參なること莫しや。〕頭長きこと三尺短ん

ぬ是れ誰ぞ、〔怪底の物、何れの方の理者ぞ、見るぞ見るや。〕相對して無言獨足にして立

（「頭、頭を摘めて上る、一書を放過す、山籠致しければ即ち不可、便を打つ」）

第六十則

【第六十則】 便ち之を兼ね用ふるもの、舊の乾峰三種の、舊の、翠巖病の、舊の如き、臨機應變、企及すべからざるの知用、以て舊法と爲すに堪へたるのみ、是れ雲門大師を曰ふか。

【化して龍と爲り】 此語は華嚴學より來れる思想なり。

【桃花、燒尾】 支那の國誌に基いて、河南又は龍門河南省に在り、曝曬も同じ。

【在らず】 この二字は燒尾者在不在方是かと或説にあり。

示に云はく、諸位業生、本來異なることなし。山河自己、寧ぞ功業あらん、付雲としてか却つて薄て兩端となり上るや。若し聞く話頭を撥轉し、妄津を斷ずるも、真證せば即ち不可。習し放過せずんば、廣大地一抱を消せず。且く作雲生か是れ話頭を發轉する處。試みに舉す言よ。

【本則】 擧す、雲門律院を以て衆に示して云はく、（點化は時に臨むに在り、人刀活人備が眼時を換却し了なり。）「一は子化して龍と爲り、（何ぞ周遮することを用ひん、化することを付雲か作人）乾地を吞却し了れり。〔天下の衲僧性命存せず、還つて咽喉を礙するや、聞發付雲の處に向つてか安身立命せん。〕山河大地、甚の處よりか得來る。〔十方墮落無く、四面亦門無し。東西南北四維上下、這箇を爭奈何せん。〕

【筧】 杖子乾坤を吞む。〔付雲と道ふぞ、只用て狗を打たん。〕徒らに説く桃花の浪に奔ると。（向上の一竅を擧聞すれば、千聖齊しく下風に立つ。也雲を拳ひ、霧を攫む處に在らず、説得して千種萬種せんより、如かじ手脚羅籠一偏せんには）尾を擡く者は雲を拳へ霧を攫むに在らず。（左之右之、老僧只看看る、也只是れ一箇の乾柴片。）腮を曝す者は、何ぞ必ずしも腮を喪して魂を亡せん。（人人氣宇玉の如し、白ら是れ備が千里萬里、

【拈了】活能も死能もつてのけての意。【聞不開】微不微

【輕忽】輕くすると知するの二なり

【第六十一則】便上の機ありて、諸方を中擲す、而れども衆人に示す、故は之を知らず、故にたゞ其頃の會を作して、轉法宗と爲す、是に於て、別に欠之を尋ひ、別に一則の門縁を設けて以て後編を併れ、永く有力の兒孫を待つことを明す。【一摩を立すすば】人は國師の職、

争奈せん悚然たることを。拈了也。(慈悲を誦す、花婆心切) 聞不開。(草に落つること免れず、聞くことを用て什麼か作ん) 直に領らく、瀟灑落落たるべし。(唯、更、乾坤大地甚の處よりか得來る) 更に紛勢転転たることを休めよ。(令を拈す之言は先づ犯す、相次に舖が面上に到る、打つて云はく、放過せば聞か不可) 七十二、所且く輕忽す。(山僧曾て此令を行せず、令に據つて行す、報に由餘を得るに値ふ) 一百五十九、君を敬し、(正令當行、豈只慈悲に於るべけんや、直鶴は別打三千界打八百するも、什麼を作すにか堪へん) 師、鶴に其社を拈じて下座、大衆一時に走散す。(唯、龍頭無尾にして什麼か作ん)

第六十一則

【本則】擧す、風穴垂語して云はく、(雲を興し山を致す、也まと爲り賓と爲らんことを要す) (若し一摩を立すれば、(我法王と爲つて、法に於て自在なり、花叢裏、鐘鼓秋) 家獨興盛し、(是れ他の屋裏の事にあらす) 一摩を立せせんば、(眼を掃り、脚を濁す、眼睛を

試みに擧す行よ)

小は個人間の争、これが一塵一念なり。

【家國】 國家と一家。

【同生】 共鳴をいふ。

【野老】 田夫野人

【從教まね】 したまはまね

【風をしかむ】 風をしかむ

【清風】 神祕的意義

【第六十二則】 便ら臨濟の句中、自ら雲門の言句を藏し、世人と別なることを明す

【一寶】 人人具足のこの一物。

失却す、鼻先に和して失す。一、家國喪亡す。二、一切處光明、家國を用て什麼か作ん、全く是れ他家屋裏の事。三、雪竇拄杖を拈じて云はく、一須らく是れ摩立千位にして新めて得べし、達磨來也。二、選つて同生同死底の衲僧ありや。三、我に語頭を問ふれば、然も是の如くなりとも、不平の事を平げんと要せば、須らく雪竇に商量して結めて得べし。選つて知るや、若し知らば偏に許す自由自在なることを、若し知らずんば如打三千暮打八百。

【頌】 野老從教あれ眉を展べざることを。二、千里外蘭の人有り、美食飽人の喫に申らず。且く圓る家國爲基を立つることを。三、太平の一曲大家知る、行かんと要すれば即ち行き、住らんと要すれば即ち住る、盡乾坤大地是れ箇の解脱門、佛在塵生か立せん。四、雲臣は將今何にか在る、有りや有りや、土曠く人稀にして、相逢ふ者少し、且く黙行すること莫れ。五、萬里の清風只自知す。六、傍若無人誰をして掃地せしめん、也是れ雲居の羅漢。

第六十二則

垂示に云はく、無師の智を以て、無作の妙用を發し、無縁の慈を以て不請の勝友と作る。一句下に向つて、殺あり活あり。一機中に於て、縦あり横あり。且く道へ、什麼人が曾て恁麼にし來る。試みに擧す看よ、

【本則】 擧す、雲門案に示して云はく、乾坤の内、土曠く人稀にして、六合收むることを得ず。宇宙の間、鬼窟裏に向つて活計を作すことを休めよ、蹠過了也。中に一寶あ

【秘在】この公案は華法師の一寶藏論の文句を引用す。秘在は包含されてをるこの意。形山 七堂伽藍の佛殿 七堂伽藍の一にして法要を行ふ所。三門 山門とも云ふ。三解脱を表す。七堂伽藍の一にして大小三つの入口あり。拈詩 活作用なり。再冉 雲の行く貌。漫漫 水の漲る貌。明月 天地自然美。第六十三則 便ち古人ただ向上の一機を貴ぶ、事の上にて、全提正令の作用を明す。東堂西堂とも云ふ。當寺の住持の退隱せしものは東堂に、他山の前住を西堂に居らしむ。

り、(什麼の處)に在る、光生せり、切に思ひ患窟裏に向つて覓むることぞ。形山に秘在す。(擲、點)燈籠を拈じて佛殿裏に向ひ、(猶商量しつべし)三門を將て燈籠上に來す。(雲門大師是なることは則ち是、妨げず論議なることを、猶些子に較れり、若し子細に檢點し將ち來らば、未だ長鼻の氣を覺れず)

【頌】看よ看よ。(高く眼を背けよ、看ることを用て什麼か作ふ、彌龍珠を玩ぶ)古岸何人が釣竿を把る。(孤危は甚だ孤危、壁立は甚だ壁立、賊過きて後尾を張る、弱後に腮を見れば、輿に往來すること莫れ)雲冉冉。(打擲して始めて得ふ、百匝千重、炙脂帽子、鶻臭布衫)水漫漫。(左之右之、前に進り後に進す)明月曇花君自ら看よ。(看若すれば則ち瞎す、若し雲門の語を識得せば、便ち再冉後の句を見ん)

第六十三則

垂示に云はく、意路不到、正に好し提擲するに。言詮不及、宜しく急に眼を背くべし。若し也常轉じ星塵ばば、便ち無湫倒鼠すべし。衆中辨得する底のあることなしや。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、南泉一日、東西の兩堂結尼を争ふ、(是れ今日合圍なるのみにあらず、一場の漏逗)南泉見て遂に提起して云はく、(道は得ば即ち斬らず)正令當行、十方坐斷。這老漢、龍蛇を定むるの手脚有り)衆對なし。(惜むべし放過することを、一隊の漆

【道を得ば即ち】  
即は則のあて字、  
もとのまま次の句  
にかけて。

【兩段】 二片の意  
【杜禪和】 杜撰の  
禪僧、禪和は禪那  
のあて字。

【撥動】 争論の激  
烈なることを形容  
す。

【令を擧ぐ】 審判  
するの意。

【偏頗】 偏は不平  
頗は不正。

【第六十四則】 便  
ち古人受用、機中  
句を藏し、全く後  
賢の企及するとこ  
ろに非ず、虛堂門  
下別に道理あるは  
この事あるを以て  
なり、兒孫後人を  
して、知らしめざ  
る可からざること  
を明す。

【圓か來つて】  
そのままと云ふ、  
唐宋の俗語。

【長安】 趙州の境  
界。

桶什麼を作すにか堪へん、杜撰の禪和、麻の知く粟に似たり。」泉結兒を斬つて兩段と爲す。  
〔快哉 快哉、若し此の知くたらんば、盡く是れ泥團を弄するの漢、賊過ぎて後月を  
張る、已に是れ第三頭、未だ擧起せざる時好し打つに〕

【頌】 兩堂俱に是れ杜禪和。〔視言は視口より出づ、一句に道斷す、款に據つて案に結す。〕  
煙塵を撥動して奈何ともせず。〔看よ桶什麼の折合をか作さん、現成公案、也此子有り。〕  
頼に南泉の能く令を擧ぐることを得て、〔擲子を擧して云はく、一に這箇に似たり、王老  
師猶些子に較れり、好箇の金剛王寶劍、用て泥を切り去る。〕一刀兩段偏頗に任す。〔百雜  
碎、忽ち人有り刀を按住せば、看よ他什麼をか作ん、放過すべからず、便ち打つ。〕

### 第六十四則

【本則】 擧す、南泉後前話を擧して趙州に問ふ。〔也須らく是れ同心同意にして始めて得べ  
し、同道の者方に知る。〕州使ち草鞋を脱して、頭上に戴いて出づ。〔免れず前泥滯水なる  
ことを。〕南泉云はく、〔子若し在りしかば、恰も猫兒を救ひ得ん。〕唱拍相隨ふ、知音の  
者少し、錯を將て錯に就く。〕

【頌】 公案圓にし來つて趙州に問ふ。〔言察耳に在り、更に斬ることを消ひす、喪車の昔  
後に、業袋を懸く。〕長安城 禪閑遊に任す。〔恁麼に快活を得たり、恁麼に自在を得た  
り、手に信せて草鞋を拵じ來る、偏をして恁麼に去らしめずんばあるべからず。〕草鞋頭に



【即便ち休す】さつぎと故郷に歸つて休めの意。

【第六十五則】便

ち四大是れ萬病の倉、一大増損百一の病生ず、若し有と道は、則ち因果に落ち、無と道は、則ち惡見に墮す。この二途を離れて如何が身を保せん、若しこの受持を明めず、念念の間に、四威儀の中、慙にして、凡夫の行に失ふ、是故に外道佛前に請益して、佛に向つて決了し、れり、衲僧平生、知らざるべからざるの大事を明す。

【外道】佛敎以外の哲學者。

【有言】無言。上は常見下は斷見、實證と否定と。

【世尊】佛十號の一。

戴く人の會する無し。〔也〕箇半箇あり、別に是れ一家風、明頭も也合し暗頭も也合す。〕歸つて家山に到つて即便ち休す。〔脚跟下好し三十棒を與ふるに、且く道へ、過什麼の處にか在る、只備が風無きに浪を起すが爲なり、彼此放下す、只恐らくは不慙ならんことを、慙麼ならば也太奇。〕

第六十五則

垂示に云はく、無相にして形れ、十虚に充ちて方壘たり。無心にして塵す、刹海に徧うして煩しからず。擧一明三、日機鉢雨、直に得たり、棒、雨點の如く、喝、雷奔に似たるも、也未だ向上の人の行履に當得せざることをあり。且く道へ、作麼生か是れ向上の人の事。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、外道、佛に問ふ。有言を問はず、無言を問はず。〔然も是の如くなりと雖も、屋裏の人も些子の香氣有り、雙鏡空に倚つて葉ぶ、報に是れ問はず。〕世尊良久す。〔世尊を誘ふこと莫れ、其聲雷の如し、坐者立者皆他を動すことを得ず。〕外道讚歎して云はく、世尊大慈大悲、我が迷雲を開いて、我をして得入せしむ。〔徐倒の漢一撥すれば便ち轉ず、無裏の明珠。〕外道去つて後、阿難、佛に問ふ、外道何の所證あつてか得入と言ふ。〔助けず人をして疑著せしむることを、也大家知ることを要す、銅鑪生鐵と着く。〕佛云はく、世の良馬の鞭影を見て行くが如し。〔且く道へ什麼を喚んでか鞭影と作す、打

【得人】 護符をい

【河羅】 佛堂十大

弟子中多羅第一な

【良馬】 恰爾をや

つとふ

【曉】 暁

【法論】 理の事、思

【南風】 有とか無

【明鏡】 佛院の意

【慈門】 佛院の慈

【塵埃】 不成功。

【因て思】 され

【千里】 驥馬

【追風】 風を切つ

【指を鳴らす】 聾

【宗門向上の一便】

【第六十六則】

【第六十六則】

【第六十六則】

つこと一拂子、棒頭に眼有り、明かなること目の如し、眞金を識らんと要せば火裏に石よ、目を拾得して飯を喫せよ。】

【頌】 機輪會て未だ轉ぜず。〔這裏に在り、果然として一絲毫を動かさず。〕轉すれば必ず兩

頭に走る。〔右に落ちざれば必ず無に落ち、東に落ちざれば則ち西す、左眼半斤右眼八兩。〕

明鏡 忽ち臺に臨む。〔還つて釋迦老子を見るや、一撥すれば便ち轉ず、破也破也、敗也敗也。〕當下に妍醜を分つ。〔盡大地是れ箇の解脱門、好し三十棒を與ふるに、還つて釋迦

老子を見るや、〕妍醜分る迷雲開く。〔一銀道を放つ、備に許す箇の轉身の處有ることを。〕

爭奈せん只是れ箇の外道なることを。〔慈門何の處にか塵埃を生ぜん。〕徧界會て藏さず、

退後退後、達磨來也。〕因つて思ふ良馬の塵影を窺ふことを。〔我に拄杖子有り、備が我に

與ふることを清ひず、且く道へ、什麼の處か是れ鞭影の處、什麼の處か是れ良馬の處。〕千

里の追風喚び得て回す。〔佛殿に騎つて三門を出で去る、身を轉ぜば即ち錯る、放過せば即

ち不可なり、便ち打つ。〕喚び得て回らば指を鳴らすこと三下す。〔前、村に擣らず、後、店

に逃らす、拄杖子を抛折して、什麼の處に向つてか去る、雲雷聲甚大にして雨點全く無

し。〕

第六十六則

垂示に云はく、當機觀面、陷虎の機を捉げ、正按傍提、擒賊の略を布く。明合暗合、

の黄巢の一則、若し知善底の雪峰に非ざれば、巖頭に和して、一場の敗闘なり。

【西京】唐末には長安、即ち西安のこと。

【黄巢】唐の僖宗乾符元年、滑州の王仙芝と曹州の黄巢と結黨し、掠奪の十六年後、光啓三年四月八日、賊の爲に殺さる。頭を引きて、それなれぬの意を、力を出す時に、自づと發する聲、大悟の時を、一地一聲の節とも云ふ。

雙放雙收、死蛇を弄することを解するは、他の作者に還す。

【本則】擧す、巖頭、僧に問ふ、「什麼の處よりか来る。」「未だ口を開かざる時、敗缺を納れ了れり、襦袢を穿過す、來處を知らんと要するも也難からず。」僧云はく、「西京より来る。」

【果然として一箇の小賊。】頭云はく、「黄巢過ぎて後、還つて劍を收得するや。」【平生曾て草賊と徹らず、頭の落ちんことを懼れず、便ち怎麼に問ふ、好大膽。】僧云はく、「收得す。」

【敗也、未だ轉身の處を識らず、茅廬の漢麻の如く葉に似たり。】巖頭頭を引べて近前して云はく、「國。」【也須らく權宜を識りて始めて得べし、陷虎の機、是れ什麼の心行ぞ。】僧云はく、「師の頭落ちぬ。」【只錘頭の利を見て、鑿頭の方を見ず、甚の好惡をか識らん、着也。】

巖頭呵呵大笑す。【天下の衲僧奈何ともせじ、天下の人を欺殺す。這老漢の頭の落處を尋ぬるに、得ず。】僧後に雪峯に到る。【依前として顛頭懷憤、這僧、徃徃十分の敗缺を納れ去る。】

峰問ふ、「什麼の處よりか来る。」【來處を説かずんばあるべからず、也勘過せんことを要す。】僧云はく、「巖頭より来る。」【果然として敗缺を納るし。】雪云はく、「何の言句かありし。」

【擧し得て免れず棒を喫することを。】僧前話を擧す。【便ち好し趕ひ出たすに。】雪峰打つこと二十棒して趕ひ出す。【然も釘を斬り錢を截ると雖も、其に困つてか只打つこと三十棒、打杖子也未だ折るるに到らざること有り、且つ未だ是れ本分にあらず、何が故ぞ、雷打三千幕打八百、若し是れ同參にあらずんば爭か端的を講せん、然も是の如くなりと雖も、且く道へ、雪峯巖頭什麼の處にか落在す。】

【山藤】藤の幹にて作りし杖。  
【便宜】俗語、一度なめられた味は、二度なめられないとの意。

【第六十七期】便ち看經の眼、この大士に依つて別に消息を通じ、衲子の基と爲すを明す  
【傳人土】本名は傳翁、善慧居士と號す、北周武帝天統四年卒す。  
【金剛經】こは維摩經の譯しものか。  
【大士】菩薩に准り  
【】うごかすなり

【一休】傳翁が雲

【頌】黄巢過ぎて後曾て劍を收む。(孟八郎の漢、什麼の用處か有らん、只是れ鈍刀子一口) 大笑は遣つて後に作者知るべし。(一子親み得たり、能く幾箇か有る、是れ葉儀にあらずんば寧か自由を得ん) 三十山藤且く暫思す。(同條に生じ同條に死す、朝三千暮八百、東家の入死すれば西家の入哀を助く、却つて與に教ひ得て活せしむ) 便宜を得るは是れ便宜に落つ。(教に據つて家に結す、悔らくは當初を慎まざりしことを、也此子有り。)

第六十七期

【本期】擧す、梁の武帝、傳人土を請じて、金剛經を講せしむ。(達磨の兄弟來也、魚行酒肆は即ち無くんばあらず。衲僧門下は即ち不可、這老漢老老大大として、這般の去就を作す) 人土便ち座上に於て、案を揮ふこと一下して、便ち下座す。(直に得たり火屋進敷することを、似たることは則ち似たり、是なることは則ち未だ是ならず、葛藤を打することとを類はさす) 武帝愕然たり。(兩回三度人に隔せらる、也他をして摸索不着ならしむ) 誌公問ふ、陛下還つて會すや。(理に當して情に當せず、對牒外に向はず、也好し三十棒を與ふるに) 帝云はく、一不會(可情許) 誌公云はく、大士講經し竟んぬ(也須らく國を逐ひ出して始めて得べし、當時誌公に和して與に國を逐ひ出して始めて是れ作家、兩箇の漢、同坑の異土無し。)

【頌】雙林に向つて此身を寄せず。(只、他の把不住なるが爲なり、囊裏、豈錢を藏すべけ

黄山に居して手ら  
二樹を栽ゑて雙林  
といふ、自ら當來  
り菩薩大士と稱す  
【梁土】 梁都は金  
陵（南京）

【橋橋】 そわ／＼  
しての意

【第六十八則】 納  
子別に宗門向上の  
機に通じ、三聖、  
仰山、是れこの人  
にして、參詳すべ  
きことを明す。

【雙收雙放】 收は  
把法、放は放行の  
二つながら行ふと  
いふことにて、當  
首師也。

【若鳥が宗云云】  
なんと云ふえ、い  
先生かとの意。  
【由來】 もとから

んや。」却つて梁土に於て埃塵を惹く。「若し草に入らずんば争か端的を見ん、風流ならざる處也風流。」當時誌公老を得ずんば、「賊と作つて本を壞ひず、件を牽く底の癩兒有り。」是れ橋橋として國を去る人ならん。「正に好し、一服に領過するに、便ち打つ。」

### 第六十八則

垂示に云はく、天關を揆げ、地軸を翻し、虎兇を推へ、龍蛇を辨ずることは、須らく是れ尚の活潑の漢にして、始めて句句相投じ、機穢相應するを得べし。且く従上來什麼人か合に怎麼なるべき。請ふ舉す看よ。

【本則】 舉す、仰山、三聖に問ふ、「汝の名は何ぞ。」（名實相奪ふ、句賊破家。）聖云はく、「趙衰。」（舌頭を坐斷す、旗を捲き鼓を奪ふ。）仰山云はく、「慧實は是れ我。」（各自に封疆を守る。）聖云はく、「我が名は慧念。」（開市裏に奪ひ去る、彼此却つて本分を守る。）仰山呵呵大笑す。（謂つべし是れ箇の時節と、錦上に花を鋪く、天下の人落處を知らず、何が故ぞ、土庫く人輪にして相逢ふ者少し、一に巖巖の笑に似たり、又巖巖の笑に非ず、一等に是れ笑ふ什麼と爲てか却つて兩段と作る、具眼の者始めて定當して看よ。）

【續】 雙收雙放若鳥が宗とせん。（知ん孰他幾人か有る、八面玲瓏、將に請へり眞箇怎麼の事有り。）虎に對する由來絶功を要す。（若し是れ頂門上に眼有り時當下に符有るにあらずんば争か這裏に到ることを得ん。騎ることは則ち妨げず、只恐らくは欄下り得ざらんこ

【経功を夢す】  
是非凡巧は、  
非凡の活手筋を要す。

【悲風】  
落着の見難き筋をいふ、悲觀的零圍氣。

【第六十九則】  
家門は、  
外人知るべからざるを明す。

【七穿八穴】  
勇進の貌。

【歸家】  
名は智常馬祖一に制ぐ。

【同じく去】  
同道中路 途中。

【女人拜】  
頼る可憐なる拜の意。

【什麼の心行】  
心行は動機なり、そんなことを云ふの

とを、是れ什麼の人にあらずんば、  
（「盡く四百軍州什麼の人を覓るに、  
也得難し、言猶耳に在り、  
千古萬古清風有り」）  
只應に千古悲風を動すべし、  
（如令什麼の處にか在る、  
嗚、既に是れ大いに笑ふ、  
什麼と爲てか増つて悲風を動す、  
大地黒漫漫）

### 第六十九則

示に云はく、  
（「昭唵無き處、  
祖師の心印、  
狀鐵半の機に似たり、  
荆棘林を透るの衲僧家、  
紅蓮上一點の雪の如し、  
平地上に穿八穴なることは則ち且く止く、  
寅縁に落らざる、  
又作塵生、  
試みに擧す看よ。」）

【本則】  
擧す、南泉、歸宗、麻谷、  
同じく去つて忠國師を禮拜せんとす。  
中路に至つて、  
（「三人同じく行かば必らず我が師有り、  
什麼の奇特か有る、  
也端的を辨せんことを要す。」）  
南泉地上に於て、  
一圓相を書して云はく、  
（「道は得ば即ち去らん。」）  
（「瘋無きに浪を起す、  
也人の知らんことを要す、  
陸沈の船を擲却す、  
若し論道せずんば争か端的を辨せん。」）  
歸宗圓相の中に於て坐す、  
（「一人鐺を打てば同道方に知る。」）  
麻谷使ち女人拜を作す、  
（「二人鼓を打てば三箇也得。」）  
泉云はく、  
（「怎麼ならば則ち去らず。」）  
（「半路身を抽んづ是れ好人、  
好一場の曲調、  
作家作家。」）  
歸宗云はく、  
（「是れ什麼の心行ぞ。」）  
（「輒に識破することを得たり、  
當時好し一掌を與ふるに、  
孟八郎の漢。」）

【かの意】

【山基】楚の大夫

の名家、南泉得宗

麻谷を由基に擬す

【猿】宇宙の眞理

に擬す。

【真】甚の誤か。

何太甚に作れば可

ならん。

【登夢を休めよ】

三人が長安の忠國

師を遊弄するを止

めしをよぶ、曹溪

路上は南泉禪の意

なり。

【第七十則】

曹溪

【象孫を思ふ】

曹溪

【未だ公案を問に

せざるに、公案

に通じて、高麗

一宗を起し、

曹溪の旨と名くる

ことを問す。

【頰】由基が箭猿を射る。(當頭の一路誰か敢て向前せん。獨處を得たり、未だ發せざる

に先づ申る。) 樹を遶ること何ぞ太た直なる。(若し承當せずんば争か敢て恁麼ならん、東

西南北一家風、已に周遮すること多時) 千箇と萬箇と。(麻の如く粟に似たり、野狐精の

一隊、南泉を得ることを争奈何) 是れ誰か會て的に中つ。(一箇半箇、更に一箇没し、一

箇も也用ひ得ず。) 相呼び相喚んで歸去來。(一隊泥團を弄する漢、如かじ歸り去つて好か

らんには、却つて些子に較れり) 曹溪路上登降することを休めよ。(大學生、懸ひ解るに

是れ曹溪門下の客にあらず、低低の處之を平ぐるに餘有り、高高の處之を觀るに足らず)

復云はく、「曹溪路下、什麼としてか登降することを休む」(唯南泉半路に身を挿んづる

のみにあらず、雪竈も亦乃ち半路に身を挿んづ、好事も無きには如かず、雪竈也道終の病

瘡を患ふ。)

第七十則

垂示に云はく、快人の一言、怪問の一擧、萬年一念、一念萬念。直截を知らんと要せば

未だ擧せざる已前。且く道へ、未だ擧せざる已前、作麼生か摸索せん。請ふ擧す看よ。

【本則】擧す、高山、五峰、雲巖、同じく百丈に侍立す。(「阿呵、始終前後、君は西秦

に向ひ我は東魯に之く) 百丈、高山に問ふ、「何事特何を併却して、作麼生か道はん」

(「一將は求めし) 高山云はく、「却つて請ふ和尙道へ」(路を指つて經通す) 丈云はく

【五峰】 名は常觀百丈海に屬す。

【雲巖】 名は曇茂樂山巖に屬す。唐の武宗會昌元年十月崩す。

【併却】 併はのこらず去は除去。

【已後】 子孫則ち法系が斷絶するの意。

【虎巖】 馬山の答話の猛烈なるを形容。

【十洲】 十洲は想像的の十箇の島國則ち樂土。

【珊瑚樹林】 南洋の珊瑚島。

【杲杲】 光明遍照の君子、孫を思ふの中、未だ公案を圓にせざるを明す。

【斫額】 額に手ををかざして遠方を望見。

【龍蛇陣】 長蛇の陣を布くと同じき意。

【李將軍】 第四則意。

「我汝に向つて道ふことを辭せず、恐らくは已後我が兒孫を喪せんことを。」〔免れず老婆心切なることを。而皮厚きこと三寸、和泥合水、煎身打劫。〕

【頌】 却つて請ふ和尚道へ。〔函蓋乾坤、已に是れ鋒を傷り手を犯す。〕虎頭に角を生じて荒草を出づ。〔可憐だ群を驚す、助けず奇特なることを。〕十洲春盡きて花凋殘。〔觸處清涼、讚敷するに及ばず。〕珊瑚樹林日杲杲。〔千重百匝、宇奈せん百草頭。上に他を尋ぬるに得ざることを。答處蓋天蓋地。〕

第七十一則

【本則】 擧す、百丈復五峰に問ふ、「咽喉唇吻を併却して、作麼生か道はん。」〔呵呵呵、箭筈羅網を過ぐ。〕峰云はく、「和尚も也須らく併却すべし。」〔旗を擡き鼓を奪ふ、一句截流高機寢削す。〕丈云はく、「人無き處斫額して汝を望まん。」〔土曠く人稀にして相逢ふ者少し。〕

【頌】 和尚も也併却すべし。〔已に言前に在り了る、衆流を截斷す。〕龍蛇陣上に謀略を看る。〔須らく是れ金牙にして始めて七事身に隨ふことを解す、戰に慣ふ作家。〕人をして長に李將軍を憶はしむ。〔妙手多子無し、足馬單鎗、千里萬里、千人萬人。〕萬里の天邊一鶚を飛ばす。〔大衆見るや、且く道へ、什麼の處にか落在する、中れり。打して云はく、飛び過ぎ去る。〕



の頭に飛騎將車とする名々の李廣なり。五峰に比す。【萬】みさご、百丈を萬に比す、離に同じ。

【第七十二則】君子、孫を思ふの中公案則を失ふ、別に一刺を補うて、遠く普訓一案の旨に通ずることを明す。

【金毛獅子】雲巖に比す、踞地は人にかみつゝ如き姿勢。

【南南三三】五峰、雲巖の三人揃もそろつて萬式の形ばかりを造つて居るの意。

【穿し、彈指】百丈の許に雲巖は實に二十年も傳して覺せられて、未悟なりしをいふ。

【第七十三則】便ち佛前の上の一著知解の徒、及ぶべからざるを明す。

【智哉】馬祖一に嗣ぐ、西堂智藏。

第七十二則

【本則】擧す、百丈雲巖に問ふ、「咽喉唇吻を併却して、作麼生か道はん。」(蝦蟇筋裏より出で来る、什麼とか道はん) 巖云はく、「和尚有りや也未だしや。」(皮に粘じ骨に着く、抱泥瀟水、前村に溝らず後店に逃らす) 丈云はく、「我が兒孫を喪せん。」(灼然として此答へ得て牛前落後なる有り)。

【頌】和尚有りや也未だしや。(公案現成す、隨波逐浪、和泥合水) 金毛の獅子踞地せず。「灼然、什麼の用處か有らん、可惜許。」(南南三三) 普路に行く。「咽喉唇吻を併却して作麼生か道はん、身を轉じ氣を吐く、脚膝下踞過了れり。」(大雄山下空しく彈指す。「一死更に再活せず、悲むべし痛むべし、蒼天の中更に怨苦を添ふ」)

第七十三則

垂示に云はく、夫れ説法とは、無説無示。其れ聽法とは、無聞無得。説既に無説無示、争か説かざるに如かん。聽既に無聞無得、争か聽かざるに如かん。而も無説又無聽、却つて些子に較れり。只如今諸人、由僧が道裡に在つて説くことを聽く。作麼生か此邊を免れ得ん。透關の眼を具する者、試みに擧す看よ。

【本則】擧す、僧、馬大師に問ふ、「四句を離れ、百非を絶して、請ふ師某甲に西來意を直

【四句】有、無、亦有亦無、非有非無の四斷定。  
【百非】斷定を否定する斷定。  
【問取上】行つてきけの意。

【教へ來つて問】教は令久休に等しせしむの意。

【却】どうもの意

【藏頭白云六】俗語の「しろうと」にくらうと一と也。

【馬脚】この語は六祖慧能の豫言に應じて出世した馬祖大師との意。

【白拈賊】臨濟はひる盗人なりと、馬祖を賞讃して、

指せよ。(「什麼の處よりか話頭を得來る、那裏よりか道消息を得たる」)馬師云はく、「我今日勞得ず、汝が爲に説くこと罷はす、知識に問敷しよ」(「鹿身三斗、經過することも也知らず、身を説し、駝を露す、助けず、是れ道老漢、別人に推過し與ふることを」)僧、知識に問ふ。(也須らく他に一勢を興ふべし、經過するも、也知らず)藏云はく、「何ぞ和尚に問はざる」(「草裏より、狐狸の大蟲出て來る」也什麼と道ふぞ、直に得たり草繩自縛することぞ、死をよること十分)僧云はく、「和尚教へ來つて問はしむ、(人の處分を受く、前節は猶輕く後節は深し)藏云はく、「我今日頭痛す、汝が爲に説くこと罷はす、海見に問取し去れ」(妨げず、是れ八十圓員の善知識、一様に道教の病痛を患ふることを)僧、海見に問ふ。(別人に轉與す、職を置いて居と叫ぶ)法云はく、「我、何處に到つて、却つて不會」(楞嚴たることを用ひず、從教あれ千古萬古黑漫漫)僧、馬大師に擧示す。(這僧却つて此子の眼睛有り)馬師云はく、「藏頭白海頭黑」(裏中は天子の朝、塞外は將軍の令)

【頰】藏頭白海頭黑。(牛合牛鬮、一手牽一手拈、金聲玉振)明眼の猶僧も會不得。(行脚三十年せよ、遂に是れ人に備ふ鼻孔を穿却せらる、山僧故に是れ口區處に似たり)馬駒踏殺す天下の人。(叢林中也須らく是れ道老漢にして始めて得べし、道老漢を放出す)臨濟未だ是れ白拈賊ならず。(瘤兒件を牽く、直體好手も、也人に捉へ了らる)四句を離れ百非を絶す。(什麼と道ふぞ、也須らく是れ自ら點檢して看るべし、阿爺阿爹に似たる

比較せるなり。  
【天上人間】 宇宙間。

【第七十四則】 四句百非の上、祖師向上の一著子あり一箇の金牛、脱體現成して、受用親切なることを明す

【金牛】 馬祖一に嗣ぐ、鎮州に生る自ら飯を作つて僧に供養す。  
【齋時】 午食の時、粥を作し、歡喜踊躍。  
【菩薩子】 菩薩は佛の次の位なれば修行最中の僧達をいふ、子は仔なり。  
【好心】 善意と同じ。  
【慶讚】 慶謝の祈禱を捧ぐ意。  
【白雲】 陞俗の金牛。

ことをる。天上人間唯我知る。(我を用て什麼か作ん、拄杖子を奪却せん、或は若し人無く我無く得無く失無くんば什麼を將てか知らん。)

### 第七十四則

垂示に云はく、鎖鑰横に接じて、鋒前に葛藤策を窮斷す。明鏡高く懸けて、句中に毘盧印を引出す。田地穩密の處、苦衣喫飯、神通遊戲の處、如何が海泊せん。灑つて委悉するや、下文を看取せよ。

【本則】 擧す、金牛和尚、齋時に至る毎に、自ら飯桶を將て、僧堂前に於て粥を作して、呵呵大笑して云はく、『菩薩子喫飯來。』(竿頭の無鐵君が弄するに従す、清波を犯さず意自ら殊なり、醍醐毒藥一時に行ず、是なることは明も是なり、七珍八寶一時に羅列す、爭奈せん相逢ふ者少なることを。)雪竇云はく、『然も此の如くなりと雖も、金牛是れ好心にあらず。』(是れ賊、賊を識り、是れ精、精を識る、末つて是非を説く者は便ち是れ是非の人。)僧、長慶に問ふ、『古人道ふ、菩薩子喫飯來と、意旨如何。』(疑げず疑着することを、元來落處を知らず、長慶什麼とか道ふ。)慶云はく、『大いに因つて慶讚するに似たり。』(席を叩て金を打す、款に據つて案に結す。)

【語】 白雲野釋笑呵呵。(笑中に刀有り、暴發して什麼か作ん、天下の僧徒落處を知らず。)兩手に持し來つて他に付與す。(菩提樹の事有らんや、金牛を誘ふことよくんば好し、喚ん

【金毛】 凡の金

【三千里】 長慶が  
詭譎を見るは、錯  
雜なる他人の動作  
を批判するなり

【第七十五則】 此  
則は、祖師門下に  
於て、學者に棒を  
許すの語と爲す。

【定州】 地名なり  
名は石藏、嵩山寂  
に嗣ぐ、神秀三世

【烏白】 馮祖一に  
嗣ぐ、烏白は地名

【會裏】 禪堂内の  
意

【法道】 法力教旨  
棒頭 烏白は首

【屈棒】 答話に窮  
し言語を發すこと

で飯桶と作し得てんや、若し是れ本分の精信ならば、這般の茶飯を喫せず。」若し是れ金毛の獅子子ならば、「須らく是れ他條件にして始めて得べし、他の具眼を許す、只恐らくは正しからざらんことを。」三千里外に誦説を見ん。(平文義に直らず、一場の滯逗、誦説什麼の處にか在る、瞎漢。)

第七十五則

垂示に云はく、靈鋒の寶劍、常露現前、亦能く人を殺し、亦能く人を活す。彼に在り此に在り、同得同失。若し提持を要せば、提持するに一任す。若し平展を要せば、平展するに一任す。且く道へ、賓主に落ちず。回互に拘らざる時如何。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、僧、定州和尚の會裏より來つて烏白に到る。烏白問ふ、「定州の法道、這裏と相似。」(言中に纏有り、淺深を辨せんことを要す、探竿影草、太煞だ人を誦す。)僧云はく、「別ならず。」(死溪の中に活底有り、一箇半箇、鐵樞子一箇實地に踏踏す。)白云はく、「若し別ならずんは、更に彼中に轉じ去れ。」と、便ち打つ。(妙然、正令當行。)僧云はく、「棒頭に眼あらば、草草に人を打つことを得され。」(也是れ這作家にして始めて得ん、却つて是れ獅子兒。)白云はく、「今日一箇を打著す。」といつて、又打つこと三下す。(什麼の一箇とか説かん、千箇萬箇。)僧便ち出で去る。(元來是れ屋裏の人、只屈を受くることを得たり、只是れ機を見て作す。)白云はく、「屈棒元來人の喫する在るあり。」(啞子苦

能はず、已むを得ずして行じたる棒  
【元事】いきなり  
【杓柄】此は棒のことと見るべし  
【回輿】人に物を返しやること

【消得恁麼】かくの如くに用ひ得たりと。

【呼ぶこと】放行

【遣ること】把住

【互換】俗に云ふ五分五分のこと

【劫石】時間の無限

瓜を喫す、放去又收來、點てして回り來らしむるとも、何の用を作すにか堪へん。僧身を轉じて云はく、「爭奈せん杓柄、和尚の手裏に在ることを。」(依前として三百六十日、却つて是れ箇の俗例の納僧。)白云はく、「汝若し要せば、山僧汝に回輿せん。」(知んぬ阿誰か是れ君阿誰か是れ臣、敢て虎口に向つて身を横ふ、武烈だ好悪を識らす。)僧近前して白の手中の棒を奪つて、白を打つこと三下す。(也是れ一箇作家の禪客にして始めて得ん、賓主互換、縦奪時に臨む。)白云はく、「屈辱屈辱。」(點、這老漢、什麼の死急をか着たる。)僧云はく、「人の喫するある在り。」(呵呵、是れ幾箇の杓柄か却つて這僧の手裏に在る。)白云はく、「草草に箇の漢を打著す。」(兩邊に落ちずんば、知んぬ他は是れ阿誰ぞ。)僧便ち禮拜す(危きに臨んで還せず、方に是れ丈夫也。)白云はく、「和尚却つて恁麼に去るや。」(點。)僧大笑して出づ。(作家の禪客天然に有る在り、猛虎鎮らく清風の隨ふことを得べし、方に知んぬ始を盡し終を盡すことを、天下の人摸索不着。)白云はく、「消得恁麼、消得恁麼。」(惜むべし放過することを、何ぞ勞苦に便ち棒せざる、將に謂へり走りて什麼の處にか到り去る。)

【頌】呼ぶことは即ち易く(天下の人總に疑せず、臭肉蠅を引き來す、天下の僧總に落處を知らず)遣ることは即ち難し。(妨げず勅絶することを、海上の明公秀)互換の機鋒子細に看よ。(一出一入、二り俱に作家、一箇の杖兩人扶かる、且く道へ阿誰が邊にか在る)劫石固うし來るも猶壞すべし。(袖裏の金鎖如何が奪取せん、千聖不傳)滄

【老】 尊敬の語。  
【幾何般】 幾重に  
【端無き】 はした  
ないの意。

【第七十六則】 古  
人の誦詠、この因  
縁の如き底は、又  
あるべからざるを  
明す。

【丹霞】 名は天然  
石頭遷に嗣ぐ、唐  
の敬宗長慶四年六  
月寂す。

深き處も、立ちどころに須らく乾かすべし。「什麼の處に向つてか按掛せん、棒頭に眼有  
り、獨り許す他親しく得ることを。」烏曰老烏曰老。「可惜許、這老漢好惡を識らず。」幾何  
般ぞ。「是れ箇の端無き漢、百千萬重。」他に杓柄を與ふ太だ端なし。「日に言前に在り、  
泊ど蔡州を打破すべし、好し三十棒を與ふるに、日く道へ過什麼の處にか在る。」

第七十六則

垂示に云はく、細きことは米末の如く、冷かなることは氷霜に似たり。乾坤に高塞して、  
明を離し暗を絶す。低低たる處、之を觀るに餘りあり。高高たる處、之を平ぐるに足らず、  
把住放行、總て這裡許に在り。還つて出身の處ありや也無や。試みに擧す看よ。

【本則】 擧す、丹霞、僧に問ふ、「甚の處よりか來る。」正に是れ總に來處没くんばあるべ  
からず、來處を知らんと要するに也難からず。」僧云はく、「山下より來る。」「草鞋を着けて  
爾が肚裏に入つて過ぐるも也只是れ會せず、言中に響有り。語含し來る、知んぬ他は是れ黃  
か、是れ綠か。」霞云はく、「飯を喫し了るや、也未だしや。」「第一杓の惡水澆ぐ、何ぞ必  
ずしも定盤星のみならん、端的を知らんと要す。」僧云はく、「飯を喫したる。」「果然と  
して箇の露柱に撞着す、却つて旁人に鼻孔を穿却せらる、元來是れ箇の無孔の鐵鎚。」霞  
云はく、「飯を將ち來つて汝に與へて喫せしむる底の人、還つて眼を具するや。」「然も是れ  
勢に倚つて人を欺くと雖も、也是れ款に據つて案に結す、當時好し禪床を撒倒するに、

【恩を報ず云云】  
此は布施等の善事を  
作すは自己の分  
限を守れとの意。

【機を盡す】 最善  
を盡すの意。

【牛頭を按じ】大  
論にある密語中の  
語、無理に頭を押  
へて食はしむ。  
【四七二三】四七  
二七、祖は迦葉よ  
り達磨に至り、二  
三は達磨より六祖  
慧能に至るを指す。  
【寶器】 佛心印。  
【陸沈】 陸地に沈  
没。

端無くして什麼か作ん。僧無語。〔果然として走ること得ず、這僧若し是れ作家ならば、他に向つて道はん、和尚の眼と一般〕長慶保福に問ふ、〔飯を將て人に與へて喫せしむ、恩を報ずるに分あり。什麼としてか眼を具せざる。〕〔也只一牛を道ひ得たり、通身是、遍身是。一刀兩段、一手擲、一手搦。〕福云はく、〔施者受者、二俱に晴漢。〕〔令に據つて行ず、一旬に道ひ盡す、其人に遇ふこと罕なり。〕長慶云はく、〔其機を盡し來るに、還つて賭と成るや否や。〕〔甚の好悪をか識る、猶自ら未だ言はず、什麼の確をか討ねん。〕福云はく、〔我を賭すと道ひ得てんや。〕〔兩箇俱に是れ草裏の漢、龍頭龍尾、當時他の其機を盡し來るに、還つて賭と成らんや否やと道はんを得つて、只他に向つて賭と道はん、也只一牛を道ひ得たり、一等に是れ作家、什麼としてか前村に構らず、後店に迷らざる。〕

【頷】機を盡して賭と成らず。〔只一牛を道ひ得たり、也他を論し過さんことを要す。言猶耳に在り。〕牛頭を按じて草を喫せしむ。〔失錢濟罪、牛は河南牛は河北、殊に知らず。鋒を傷り手を犯すことを。〕四七二三の諸祖傳。〔存れば鋒を擲ち、先聖を帶累す、唯只一人を帶累するのみにあらず。〕寶器持し來つて過ぐと成る。〔盡大地の人、手を換へて胸を槌つ、我に杖を還し來れ、山僧を帶累して也出頭すること得ず。〕過谷深し、〔可煞だ深し、天下の衲僧跳不出、且く道へ、深きこと多少ぞ。〕尋ぬるに處無し。〔衲僧脚跟下に在り、摸索不着。〕天上人間同じく陸沈す。〔天下の衲僧一坑に埋却す、還つて活底の人行りや、一着を放過す、蒼天蒼天。〕

第七十七則

【第七十七則】雲門超佛祖の談を以て、一箇の餠餅と作して、喫却了也といふことを明す。

【超佛六云】絶對も相對も超越するの意。

【餠餅】餠は胡が豆し、外は白胡麻をまぶした饅頭。

【超佛云云】超佛超祖の談を持ち廻つて問ふものすてきに多いとの意。

【衣服の綻び】衣服の綻びの大きをいふ、披は開なり。

【臺來】臺は二物合するをいふ、塞合するをいふ、塞

【語訛あり】迷想に迷想を重ねる意

垂示に云はく、向上に轉じよらば、以て天下の人の鼻孔を穿つべし。鶴の鳩を捉ふるに似たり。向下に轉じよらば、自己の鼻孔、別人の手裡に在り、龜の殻に藏るるが如し。箇の中忽ち箇の出で來つて、本來向上向下無く、轉ずることを用ひて什臺をか作さんと道ふあらば、只伊に向つて道はん、我も也知る、爾が鬼窟裡に向つて活計を作すことと。且く道へ、作臺生か箇の縑素を辨ぜん。良久して云はく、條あれば條を攀ぢ、條なければ條を攀ぢ、試みに攀す看よ。

【本則】攀す、併雲門に問ふ、『如何なるか是れ超佛越祖の談』(問、早地の急流、抄)門云はく、『餠餅』(舌上の齧を指ふ、過也。)

【頌】超談の禪客問偏に多し。(箇箇出で來つて便ち這般の見解を作す、塵の如く粟に似たり。) 縫解披離す見るや。(已に言前在り、開也自屎臭きことを覺えず。) 餠餅嚙し來つて猶住まず。(木樵子を將て爾が眼睛に擲却し了れり) 今に至つて天下語訛あり。(箇の圓相を畫きて云はく、是れ恁麼に會すること莫しや、人の言語を咬まば甚の了期か有らん。大地茫茫として人を愁殺す、便ち打つ。)

第七十八則



【第七十八則】 妙  
鯛の一句、徳山亦  
この中より出づる  
ことを明す。

【十七開士】 この  
一冊は「楞嚴經」の  
第五卷にある「  
一跋陀婆羅、並其  
同伴、十六開士、  
即從座起」に基い  
て、印変の神話な  
りとい、開士は菩薩  
の一異譯。

【忽ち、水因】 水  
は無常にして、了  
に得べからず、即  
ち其無常を悟る。【  
妙觸宣明】 妙觸  
は人觸の觸感の靈  
妙、宣明は人の視  
感の色等の美なる  
を云うて、水の靈  
妙を悟る、是は水  
浴。

【成湯子住】 佛子  
住を成すなり、佛  
地に住す、快感を  
いふ。

【了事】 大事了畢  
の俗、一箇は一人  
【消】 養するの義  
【長進】 十六開士  
入浴の境界を云ふ

【本則】 擧す、古  
十六開士あり。〔  
群を成し隊を作す、  
什麼の用處か有らん。  
這一隊不啻  
囉の漢。〕浴僧の  
時に於て、例に隨  
つて浴に入る。〔  
露柱に撞着す、漆  
桶什麼をか作す。〕  
忽ち水因を悟る。〔  
惡水蕩頭に澆ぐ。〕  
諸禪徳、作麼生か  
他の妙觸宣明、〔  
更に別人の事に干  
らず、作麼生か他  
を會せん、撲落他  
物に非ず。〕成佛  
子住と道ふことを  
會す。〔天下の衲  
僧這裏に到つて撲  
索不着、兩頭三面  
にして什麼か作ん。〕  
也須らく七穿八穴  
にして始めて得  
べし。〔一棒一條  
の痕、山僧に辜負  
すること莫くんば  
好し、撞着磁着、  
濕つて會て徳山、  
臨濟を見るや。〕

【頭】了事の衲僧一箇を消す。〔現に一箇有り、朝打三千暮打八百、金剛圖を跳出す、一箇も也消得せず。〕長進床、上、脚を展べて臥す。〔果然として是れ、高の睡の漢、劫を論じて禪を論せず。〕夢中會て説く、聞通を悟ると。〔早く是れ睡更に夢を説く、却つて備に許す夢に見ることを、寐語して什麼か作ん。〕香水洗ひ來るも蕩頭に唾せん。〔嘿、土上に泥を加ふ又一重、淨地上に來つて同する莫れ。〕

第七十九則

垂示に云はく、大用現前、執則を存せず、活捉生擒、餘力を勞せず。且く道へ、是れ什麼人が會て恁麼にし來る。試みに擧す看よ。【本則】擧す、僧、投子に問ふ、一切の聲は是れ佛聲と、是なりや否や。〔也虎鬚を捋つ

【夢中】 妙獨宣明云へと。  
 【圓通】 實感と表見。  
 【洗淨末】 蔣直に悟りするの意。  
 【第七十九則】 投子一盡して、機輪一なきを明す。  
 【投子】 名は大同等翠峯に嗣ぐ、後月、乾化四年四月。  
 【一】 所有言説皆具きしと云。  
 【一】 唐宋時代、一見、非着す目的音響を云ふ。  
 【音響】 幽感と細密と。  
 【一頭】 この驢馬、尙もとの意。  
 【機鋒】 機鋒、機鋒、活機。  
 【一】 一は是二は打、損して得との意。  
 【同被】 あの場合にもこの場合にも。  
 【弄潮人】 潮は神

ることを解す、青天に雷電を轟す、自屎臭きを嗅えず。」投子云はく、「是。」（一箇の人を賺す、身を賣つて備に與へ了れり、一逆に拈放す、是れ什麼の心行ぞ。」僧云はく、「和尚、沸騰、喝聲すること莫れ。」（只錐頭の利を見て擊頭の方を見ず、什麼と道ふ、果然として收鉢を納る。）投子便ち打つ。（着、好打、放過せば、則ち不可）又問ふ、「禪言及び細語、皆第一義に歸すと、是なりや否や。」（第二回虎鬚を拈づ、嚙を抱いて屈と叫んで什麼か作ん、東西南北、猶影響の有る在り。）投子云はく、「是。」（又是れ身を賣つて備に與へ了れり、陷虎の機、也是れ什麼の心行ぞ。」僧云はく、「和尚を喚んで一頭の驢と作し得てんや。」（只錐頭の利を見て擊頭の方を見ず、逆水の波有りと雖も、只是れ頭上に角無し、血を含んで人に擧ぐ。）投子便ち打つ。（着、放過すべからず、好打、拄杖未だ語るるに到らざるに、什麼に因つてか便ち休し去る。）

【頌】 投子投子。（灼然、天下這實蹟の老漢無し、人家の男女を教壞す。）機輪阻無し。（什麼の他を奈何ともする處か有らん、也些子有り。）一を放つて、二を得たり。（備が眼瞞を換却す、什麼の處にか投子を見ん。）彼に同じく、此に同じ。（恁麼に来るも也棒を喫し不恁麼に来るも也棒を喫す、闍黎他に替る、便ち打たん。）憐むべし限りなき潮を弄するの人。（叢林の中一箇半箇を放出す、這兩箇の漢を放出す、天下の衲僧、什麼に去らんことを要す。）畢竟還つて潮中に落ちて死す。（可惜許、爭奈せん、這圈績を出づるを得ざること、恐人、恐人に向つて説くこと莫れ。）忽然として活せば、（禪床震動、山僧を驚殺す、也

の活力とか自然の  
震動など、弄は議  
論穿鑿など、暗に  
彼の僧を指す。

【百川云々】 あべ  
こべに便打にへこ  
たれたの意。

【開眼】 開は喧  
嘩。開眼は水聲。  
【第八十問】 便ち

二老の問答、意判  
り句判る、驚くべ  
り故すべし、懸懸  
法眼宗の機用ある  
ことを明す。

【六識】 眼耳鼻舌  
身意、六境、六塵  
六根、六識、六覺、  
五官(感)等の別。

【急水上】 生死流  
轉を急水上に譬ふ。  
毘子は油斷すなの  
意。

【念念】 間斷なく  
流轉すの意。  
【無功】 へたの一  
問。

【來端】 言端語端  
の端、中正中道な  
り、端緒、來問の  
事柄をいふ。

【落處】 毘子を打  
すといふ着眼點。

倒退三千里ならしむ。百川倒に流れて開闢焉たらん。(嶮、徒に佇思するに勞す、山  
僧敢て口を開かず、投子老漢也須らく是れ拄杖を拗折して始めて得べし。)

第八十則

【本則】 擧す、僧趙州に問ふ、「初生の孩子過つて六識を具するや也無や。」(閃電の機什麼  
の初生の孩兒子とか説かん。) 趙州云はく、「急水上に毘子を打す。」(過也、俊鶴趨へども及  
ばす、也驗過せんことを要す。) 僧復投子に問ふ、「急水上に毘子を打すの意如何。」(也  
是れ作家、同じく驗過す、還つて會するや過也。) 子云はく、「念念不停流。」(葛藤を打す  
る漢。)

【頌】 六識無功一問を伸ぶ。(眼有つて盲の如く耳有つて聾の如し、明鏡臺に當り明珠  
掌に在り、一句に道盡す。) 作家曾て共に來端を辨す。(何ぞ必ずしもせん、也箇の縮素  
を辨せんことを要す、唯證して乃ち知る。) 茫茫たる急水に毘子を打す。(始終一貫、過也、  
什麼と道ふぞ。) 落處停らず、誰か看ることを解せん。(看ば即ち鷲、過也、灘下に接取せ  
よ。)

第八十一則

垂示に云はく、旗を擡き鼓を奪ふ、千埤も窮むることなし、諸語を生離して、萬機到ら

【第八十一則】便  
ち宗門の死活別に  
長處あり世人知  
るべからざるを明  
す。

【芋田】藎藪の繁  
茂せる潤澤地の意  
【擧】鹿の最も大  
なるもれにて、意  
く手をぬれ歩く多  
【箭を看】看はそ  
らと注意していふ  
【泥團を弄する漢】  
土百姓とか半搦坊  
主とかの意、拈提し  
ての意。

【君】雪竇が薬山  
をさして云ふ

す。是れ神通妙用にある事。亦本體自然にあらす。日く道へ、箭の什麼に懸つてか、恁麼  
に奇特なることを得たる。

【本則】擧す、僧、薬山に問ふ。「芋田淺草、鹿鹿を成す。如何が箭中の塵を射得せん。」  
一「箭を把つて箭に投ず、塵を擧げ角を帯びて出で來る、爾後に箭を抜く。」山云はく、「箭  
を看よ。」(就身打劫、下坡に走らざるは、快便逢ひ難し、着。)僧身を放つて便ち倒る。  
「灼然として同じからず、一死更に再活せず、轉地を弄する漢。」山云はく、「侍者、這死  
漢を撞き出だせ。」(令に撞つて行ず、再擧するに勞せず、前箭は猶長く後箭は深し。)僧便  
ち走る。「拾木裏に隠眼す、死中に活を得たり、猶衆思の有る在り。」山云はく、「泥團を弄  
する漢、什麼の限りかあらん。」(可惜計、放過することを、令に撞つて行ず、雪上に霜を  
加ふ。)「拈提して云はく、「三步には活すと擧ぐ、五歩には須らく死すべし。」(一手搥一  
手搦、直饒ひ走ること百歩するも、也須らく喪身失命すべし。復云はく、箭を看よ、且く  
道へ、雪霜の意什麼の處にか落在す、若し是れ同死同生せば、薬山直に得たり日墜し口吐  
すること、一向に無孔の鐵鑊に似たらば何の用を作すにか堪へん)。

【頰】塵中の塵。「高く眼を看けて看よ、頭を筆け角を敲き去れり。」君看取せよ。(何似生  
第二頭に走る、射んと要せば便ち射よ、看て什麼か作ん。)「箭を下す。(中れり。須らく  
知るべし、薬山好手なることを)走ること三歩、活轉地、只三步を得たり、死し了る  
こと多時。)五歩にして若し活せば、(什麼をか作ん、跳ること百歩、忽ち箭の死中に活を

【正眼】薬山を稱揚していふ。

【第八十二則】便ち堅固法身則ち意味あるを指す。

【大龍】名は智洪山龍に關ず。徳山龍也。

【色身】法身に(靈魂)對する語にして肉體をいふ。

【堅固法身】不滅の法身。六身は個性、自我、靈魂などいふ。

【山花】自然山色の美景をいふ。春景。

【問答】共に不知不會。

得ること有らん時如何」群を成して虎を趁はん。(二り俱に並べ照す、須らく他の真に倒退して始めて得べし、天下の僧俗他に出頭を放す、也只草葉裏に在り)正眼從來獵人に付す。(爭奈せん薬山未だ昔て這話を承當せざることを。薬山は則ち故に是、雪竇又作麼生。也薬山の事に干らす、也雪竇が事に干らす、也山僧が事に干らす、也上座が事に干らす。)雪竇高聲に云はく、「箭を看よ。」(一狀に領過す、也須らく他の真に倒退して始めて得べし。打して云はく、已に桶が咽喉を塞却し了れり)。

第八十二則

垂示に云はく、筆頭の絲線、具眼方に知る。格外の機、作家方に尋ず。且く道へ、作麼生か是れ筆頭の絲線、格外の機、試みに擧す看よ。

【本則】擧す、俗、大龍に問ふ。色身は敗壞す、如何なるか是れ堅固法身。(話兩機と作る、分聞して也好し)龍云はく、「山花開いて錦に似たり、露水湛へて藍の如し。」(無孔の笛子鼈拍板に撞着す、彈寄學けども破れず、人は陳州より來つて却つて許州に往き去る)【頌】問曾て知らず。(東西難せず、物を弄して名を知らず、帽を賣ふに頭を相す)各邊つて會せず。(南北分たす、咽喉を換却す、江南江北)月冷かに風高し、何似生、今日正當這時節、天下の人眼有つて曾て見ず、耳有つて曾て聞かず)古巖寒僧(雨ならざる時更に好し、無孔の笛子、鼈拍板に撞着す)笑ふに堪へたり路に逢道の人に逢うて、(也

【月冷かに】これ  
は冬、皇國法身  
の表也。

【龍領下  
の珠】皇國法身に  
據す。

【殺龍】殺は珠王  
のきす、龍は絲の  
きす。

【毒章】法律の意  
【三千首】大失章  
てもしかならざる  
の餘餘に當りたるか  
との意。

【第八十三期】便  
ち雲門の言句、益  
益意味に於て、き  
ことを明す。

【古佛】佛也。  
【露柱】大聖柱。  
【第幾機】如何な  
る消息なりやの意。

【南山】北山  
宇宙の妙體をいふ

【新羅……大唐】  
時間の圓融無礙に

是れ須らく這裏に對つて始めて得べし、我に杖子を還し來れ、群を成し隊を作し無黨に  
來る」語氣を對て對せざることを、「什麼の處に向つてか大龍を見ん、箇の什麼を對てか  
他に對して好からん」手に白玉の腕を抱つて、「一より七に至るまで摺折し了れり」驢  
珠を撃碎す。「後人に對與して看した、可惜許。」擊碎せんば、「一善を放過す、又懲  
罰に去る」數顆を増さん。「泥河を弄して什麼か作ん、轉を即當たることを見る、過犯  
大」國に忠意あり、「法を論る者は罷る、朝打三千暮打八百」三千條の罪、「只一半を道  
ひ得ること有り、八萬四千無量劫來無間の業に墮すれども、也未だ一半を還し得ざること  
在らん」

第八十三期

【本則】擧す、雲門堂に示して云はく、古佛と露柱と相交る。是れ摩竭機を、「三千里外  
沒交涉、七花八裂」自ら代つて云はく、「東家の人死すれば西家の人哀を助く、一合相不  
可得。」南山雲起れば、「乾坤觀ること莫し、刀研れども入らず。」北山雨下る。「點滴も  
施さず、半は河南半は河北」

【頌】南山の雲、「乾坤觀ること莫し、刀研れども入らず。」北山の雨、「點滴も施さず、半  
は河南半は河北。」四七三三而相觀る。「幾處にか覺むるに見えず、傍人を帶累す、露柱  
燈籠を掛く。」新羅國禪會て上堂す。「東湧西沒、東行西行の利を見ず、那裏よりか這消息

して前後、長短を  
超越せるを表す。

【誰か道ふ】唐の  
貫休の詩にある句  
字體不二事無礙  
なり。

【第八十四則】便  
ち維摩の不二に別  
に子細あり、參決  
すべきに堪ふるこ  
とを問す。

【維摩】佛在世中  
に毘耶離城に住す  
る居士なり、詰さ  
るには、維摩羅詰、  
舊譯に淨名、新譯  
に無垢稱と漢譯せ  
り。

【何等是】維摩經  
の入二法門品第九  
の尼にある問答。  
【入不二】差別に  
してしかも無差別

を得來る。」大唐國釋未だ鼓を打せず。「遅一刻、我に語頭を還し來れ、先行到らず末後太  
だ過ぎたり。」苦中の樂、「阿誰をしてか知らしめん。」樂中の苦。「兩重の公案誰をしてか  
舉せしめん、苦は便ち苦、樂は便ち樂、那裏にか兩頭二面有り來らん。」誰か道ふ黃金黃土  
の如しと。「具眼の者辨ぜよ、試みに拂拭して看よ阿鞞判、可憐許。且く道へ是れ古佛か  
是れ露柱か。」

第八十四則

垂示に云はく、是と道ふも是の是とすべき無く、非と言ふも非の非とすべき無し。是非  
已に去つて得失兩ながら忘す。淨裸裸赤灑灑、且く道へ、面前背後、是れ箇の什麼ぞ、或  
は箇の衲僧あり出で來つて道言ん、「面前は是れ伽藍三門、背後は是れ寢堂方丈」と。且く  
道へ、此人還つて眼を具すや也無や。若し此人を辨得せば、備に許す親しく古人に見え來  
ることぞ。

【本則】擧す、維摩詰、文殊師利に問ふ、「這漢太煞だ合關一場、口を合取せよ。」何等  
か是れ菩薩入不二法門。「知つて故に犯す。」文殊曰はく、「我が意の如くんば、「什麼と  
道ふぞ、直に得たり分疎不下なることを、檜枷過狀、髮を把つて衞に投ず。」一切の法に  
於て、「什麼を喚んでか一切の法と作ん。」無言無説、「什麼と道ふぞ。」無示無説、「別人を  
瞞ずることは即ち得たり。」諸の問答を離る。「什麼と道ふぞ。」是を入不二法門と爲す。

に入るの法門、宇宙の寶體と同一にして一如になるの意【五等】三十二人の菩薩たち【仁者】 釋摩をさす

【勘破了】 お訓へはすみまましたの意 試験

【生を悲んじ】 維摩の病は衆生渡すのためなりの意

【七佛】 文殊は七佛の師なればいふ

【一室】 問疾品の意、文殊の來訪を説明す

〔入ることを用て什麼か作ん、許多の葛藤を用て什麼か作ん。〕是に於て文殊師利、維摩詰に問ふ、〔五等各自に説き已る。仁者前に説くべし、何等か是れ菩薩入不二法門。〕〔這一輩道ふこと莫れ金粟如來と、設使は三世の諸佛も、也口を聞くことを得ず、何に點頭を傳じ來れり。一人を刺殺す、箭に中ることは還つて人を射る時に似たり。〕〔吾嘗てよく、維摩什麼とか道ひし。〕〔唯、革筋心に撥る、他に替つて道理を説く。〕復云はく、〔勘破了也。〕〔但當時のみに非ず即今也。慙、等寶也。是れ賤過ぎて後弓を張る、然も衆の爲に力を竭すと雖も、争奈せん。〕〔唯の私門より出づることを、且く道へ。〕〔雪隠つて落處を見得するや、夢にも也未だ夢見ず、什麼の勘破とか説かん。唯、金毛の獅子也。眞索不著。〕

【頌】 唯、這維摩者。〔他を唯して什麼か作ん、何打三千毒打八百、唯し得るとも事を濟さじ、好し三十棒を與ふるに。〕生を悲んで空しく懊惱す。〔他を悲んで什麼か作ん、自ら金剛王寶劍有り、他の閑事の爲に無明を長ず、勞して功無し。〕疾に毘耶離に臥す。〔誰に因つてか致し得たる、一切の人を帶累す。〕全身太だ枯槁す。〔病むことは則ち且く置く、什麼としてか口區擔に似たる、飯も也喫することを得ず、唯ぐことも也唯ぎ得じ。〕七佛の祖師來る。〔客來らば須らく看るべし、賊來らば須らく打すべし、群を成し隊を作す、也須らく是れ作家にして始めて得べし。〕一室且つ頻りに掃ふ。〔猶這箇の有る在り、元來鬼窟裏に在りて活計を作す。〕不二門を請問す。〔若し説くべき有りとも、他に説き了らる、打して云はく、闍黎に和して也尋ぬるも見えず。〕當時便ち靠倒す、〔蒼天蒼天、什麼と道ふ



【靠倒】 文殊に反問された。だしぬけと云ふ意。  
【金毛】 文殊をいふ。

【討ぬるに處なし】 組摩の一黙には文殊も當惑し。

【第八十五則】 便ち桐峰の機鋒高しと雖も、宗旨又別に道理あることを明す。

【桐峰】 臨濟玄に副く、傳定不詳。

【大蟲】 虎。

ぞ。】 靠倒せず。〔死中に活を得たり、猶氣息の有る在り。〕 金毛の獅子、討ぬるに處なし。〔咄、還つて見るや、蒼天蒼天。〕

第八十五則

垂示に云はく、世界を把定して、纖毫を漏さず。盡大地の人、鋒を亡じ舌を結ぶ、是れ衲僧の正令なり。頂門に光を放つて、四天下を照破す、是れ衲僧金剛の胆膽なり。鐵を點じて金と成し、金を點じて鐵と成す、忽ちに擒忽ちに縦、是れ衲僧の拄杖子なり。天下の人の舌頭を坐斷して、直に氣を出す處なく、倒退三千里なることを得る、是れ衲僧の氣宇なり。且く道へ、總に不恁麼の時、畢竟是れ箇の什麼人ぞ。試みに舉す看よ。

【本則】 舉す、僧、桐峰庵主の處に到つて便ち問ふ、〔這裡忽ち大蟲に逢はん時、又作麼生。〕〔作家影を弄する漢、草窠裏一箇半箇。〕庵主便ち虎聲を作す。〔錯を將て錯に就く、却つて牙爪有り、同生同死、言を承けては須らく宗を會すべし。〕僧便ち怖るる聲を作す。〔兩箇泥團を弄する漢機を見て作す、似たることは則ち也似たり、是なることは則ち未だ是ならず。〕庵主呵呵大笑す。〔猶此子に較れり、笑中に刃有り、亦能く放、亦能く收。〕僧云はく、〔這老賊。〕〔也須らく識破すべし、敗也、兩箇都て放行す。〕庵主云はく、〔老僧を争奈何せん。〕〔勞耳便ち掌せん、惜むべし放過することを、雪上に霜を加ふ又一重。〕僧休し去る。〔恁麼に休し去り、二り俱に了ぜず、蒼天蒼天。〕雪竇云はく、〔是は則ち是、兩箇

【耳を掩うて】 他  
の賊心を諱る。

【千里】 虎より連  
想していふ。  
【斑斑】 虎の毛皮  
の光澤あること。

【大雄】 百丈が大  
雄山下に一虎あり  
云々と云うて黃檗  
を稱揚せる語あり  
【落落】 廣大なる  
意、大丈夫、座下  
の僧達よと。  
【收】 虎尾を握る  
意。  
【持】 虎鬚をひつ  
けるの意、勇氣を  
いふ。

【第八十六則】 便  
ち雲洞室中、別に  
道理あるを明す。

の悪賊、只耳を掩うて鈴を偷むことを解す。〔言猶耳に在り、他の雪竇の點檢に遺ふ、且く道へ當時什麼生か點檢を免れ得べき、天下の衲僧到らじ〕

【頌】之を見て取らざれば、〔蹉過了也、已に是れ千里萬里〕之を思ふこと千里。〔悔らくは當初を愼まざりしことを、蒼天蒼天〕好箇斑斑。〔閻黎日領出去、定余せん未だ用を解せざる在ることをも〕爪牙未だ備らず。〔只恐らくは用處明かならざらんことを、爪牙の備はらんを待つて備に向つて道はん、〕君見すや大雄山下に忽ち相逢ふ。〔條有れば條を攀ぢれり、幾箇の男兒か是れ丈夫。〕大丈夫見るや也無や。〔老婆心切、若し眼を聞くを解せば同生同死、雪竇葛藤を打す。〕虎尾を收め虎鬚を打つ。〔忽然として突出せば、如何が收めん、天下の衲僧を收めて這裏に在く、忽ちに箇の出で来る有らば便ち一擲を與へん、若し收むること無くんば備に三十棒を放す、備をして身を轉じ氣を吐かしむ。喝、打つて云はく、何ぞ這老賊と道はざる。〕

第八十六則

垂示に云はく、世界を把定して、絲毫を漏さず。衆流を截斷して、涓滴を存せず。目を開けば便ち錯り、擬議すれば即ち差ふ。且く道へ、作麼生か是れ透關底の眼、試みに道へ看ん。

【光明の在るあり】  
本来具有の大機大用の光明。

【暗昏昏昏】  
さつぱり眞暗であるの意。

【厨庫】  
庫裏、三門は上に註す、お寺の庫裏や三門のお蔭で幸福に生活すと云ふ意。

【好事】  
何も無いのが一番安全との意。

【白照】  
人人盡く光明ありとの意。

【君が爲】  
諸人をさす。

【倒に牛に騎つて】  
平和の象徴。

【第八十七則】  
便も雲門の宗旨得るに随つて益進むを明す。

【本則】擧す、長門垂話して云はく、「人人盡く光明の在るあり。〔黒漆桶。〕看る時見えず暗昏昏。〔看る時暗す。〕作麼生か是れ諸人の光明。」〔山は是れ山、水は是れ水、漆桶裏に黒汁を洗ふ。〕自ら代つて云はく、「厨庫三門。」〔老婆心切、葛藤を打して什麼か作らん。〕又云はく、「好事も無きには如かず。」〔自ら知んぬ一半に較ることを、猶此子に較れり。〕

【頌】白照孤明を列す。〔春華萬象、賓主交參す。鼻孔を裂轉す、晴漢什麼か作ん。〕君が爲に一線を通ず。〔何ぞ止一線のみならん十日並照す、一線道を放つことは即ち得たり。〕花謝して樹に影無し。〔葛藤を打せば什麼の了期か有らん、什麼の處に向つてか摸索せん、黒漆桶裏に黒汁を盛る。〕看る時誰か見ざらん。〔晴、總に扶藤換草すべからず、兩膝三體。〕見不見。〔兩頭俱に坐斷す、跏。〕倒に牛に騎つて佛殿に入る。〔中れり、三門合掌す。我に話頭を還し來れ。打つて云はく、什麼の處に向つてか去る。雪寶也只鬼窟裏に向つて活計を作す。還つて會すや、半夜日頭出で日午に三更を打す。〕

第八十七則

垂示に云はく、明眼の漢は窠白沒し。有る時は孤峰頂上、草漫漫、有る時は闍市裏頭赤灑灑。忽ち若し忿怒の那吒、三頭六臂を現じ、忽ち若し日月月面、舌捲の慈光を放ち、一塵に於て一切身を現じ、隨類人となつて、和泥合水。若し向上の竅を撥著せば、佛眼も

【藥病】佛行願前  
【藥】小我(自己)大  
我(宇宙)に相対し  
合せしむる時をい  
ふ。

【大地】 香煙萬  
象

【自己】 自己もみ  
なれず

【古今】 古今の人  
がどう云ふもので  
の意。

【門を閉ぢて】 そ  
んならぬ事をす  
るなとの戒事あり

【處に居す】 大道  
【塵】 塵然無染  
の意

【鼻孔】 おやし  
まつたことをしたの

【鼻孔】 透天は天  
まで届く、穿却は  
鼻面に通ずる  
意。穿するに鼻を  
あかす破先を制せ  
らるることなり

【第八十八則】 便  
ち玄沙の三種病  
ただ受用自在の雲  
門のみあることを  
明す。

也觀ることを著す。設使は千里出頭し來るも、也然らく倒退千里なるべし。還つて同  
得同證の者ありや。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、雲門、鼻に示して云はく、「藥病相治す。」「合相不可得。」盡大地是れ藥  
【苦氣は根に透りて苦く、一處に徧向す】形備か是れ自己。」「甜瓜は帯に纏して甜し、那

裏よりか這消息を得來る。」「  
【頤】盡大地是れ鼻、(誰をして的を辨せしめん、沙を撒し土を撒す、高處に架して看よ。)

古今何を太が結ぶ。(言中に響有り、一草に勾下す、喘。)門を閉ぢて事を造らす。(大小の  
雲霧の爲に力を竭す、鶴私門より出づ、埧蕩として一絲毫を擲けず。脚根が脚工夫有ら  
ん、塵窟裏に向つて活計を作す。)途に通ずれば自ら空廓たり。(脚下便ち草に入る、馬  
に上つて路を見ろ、手に信せて拈じ來る、助けて奇特なることを。)錯錯。(雙劍空に倚つ  
て飛ぶ、一箭雙鵬を落す。)鼻孔透天も亦穿却す。(頭落ちぬ、打つて云はく、穿却了也。)

第八十八則

垂示に云はく、門庭の施設、且く無塵に二を殺つて三と作す、入理の深談也須らく是れ  
七穿八穴なるべし。當機敲點、金鎖玄門を擊碎す。念に據つて行ず、直に得たり蹤を掃ひ  
跡を滅することを。且く道へ、話說什麼の處にか在る。頂門の眼を具する者、請ふ試みに  
擧す看よ。

【老宿】 老大家。  
【接物】 有數傳道  
【三種病】 盲人癖  
人種人

【拈連堅掃】 師家  
が學人を接得する  
手段。

【語言三昧】 横説  
駢語をいふ。

【且く作麼生】 ま  
あととしての意。

【請益】 もすこし  
どうかねがひます  
るの意。

【禮拜着】 着はし  
てしまへよの意。  
【極】 極いて押違  
る意。

【近前來】 近うよ  
れの意。

【本則】 擧す、玄沙案に示して曰はく、「諸方の老宿盡く道ふ、接物利生と。」(分に隨つて箇の鋪席を聞く、家の豐儉に隨ふ。) 忽ち三種の病人來るに遇はば、作麼生か接せん。

(草を打つことは、只能の驚かんとを要す。山僧直に得たり口咄し口咄することを、倒選三千畢せんことを管取せよ。) 患首の者は、拈連堅掃、他又見す。(端的聽す、是れ則ち接物利生、未だ必らずしも見ざるに在り。(患首の者は、語言三昧、他又聞かず。) 端的

聽す、是れ則ち接物利生、未だ必らずしも聽せざるに在り、是れ那箇か未だ聞かざることに在り。) 患首の者は、信をして説かしむるも、又説き得ず。(端的聽す、是れ則ち接物利

生、未だ必らずしも聽せざることに在り、是れ那箇か未だ説かざることに在り。) 且く作麼生か接せん。若し此人を接し得ずんば、佛法無からん。(誠なるかな是言、山僧手を携して歸降せん、已に接し了れり。便ち打つ) 僧、云門に請益す、(也、諸方共に知らんことを要す。着) 云門云はく、「汝禮拜着せよ。」(風行けば草偃す、囀) 僧禮拜して起つ。(道

僧拄杖子を拗折す) 云門杖杖を以て打つ。僧退後す。門云はく、「汝是れ患首にあらず。」(道の端の聽す、這僧患首と道ふこと莫くんば好し) 復近前來と喚ふ、僧近前す。(第一の悪水澆む。觀音來也。當時、好し一喝を與ふるに) 門云はく、「汝是れ患首にあらず。」

(端的聽す、這僧患首と道ふ莫くんば好し) 門乃ち云はく、「違つて會するや。」(何ぞ木

分の草料を與へざる、當好し聲を作すこと莫れ) 僧云はく、「不會。」(兩重の公案、蒼天蒼天) 門曰はく、「汝是れ患首にあらず。」(端的聽す、口吧吧地、這僧聽と道ふこと莫

れ) 門曰はく、「汝是れ患首にあらず。」(端的聽す、口吧吧地、這僧聽と道ふこと莫

【省あり】すこし悟るの意。  
【杏とし】機宜を絶す。どうも致し方がないとの意。

【瞿妻】明日、眼

【正色】知音、耳

【玄絲】聲の實體

【獨坐】宇宙の妙

用と同和するの意

【葉落】詩的の表

【無孔】十四則頌に見ゆ、手には合はずとの意なり。

【第八十九則】便ち大悲手眼別に參到すべきを明す。この則の前にある垂示と第八十八則の垂示とは前後せりと云ふ。

くんば好し。』僧此に於て省あり。〔賊過きて後弓を張る、什麼の碗をか討ねん。〕

【類】盲藝病囉、〔己に言前に在り、一疾恨に問なり、己に一段と做し了れり。〕杏として機宜を絶す。〔什麼の處に向つてか摸索せん。還つて計較を做し得てんや、什麼の交渉か有らん。〕天上天下、〔正理自由、我も也任麼。〕笑ふに堪へたり悲むに堪へたり。〔箇の什麼をか笑ひ箇の什麼をか惹まん。半明半暗。〕瞿妻正色を瞿せず、〔瞿波、巧匠蹤を留めず、端の瞽す。〕圓曉豈玄絲を曉らんや。〔圓曉、大功は實を立せず、端の瞽す。〕争か如らん獨坐虚窓の下、〔類らく是れ怎麼にして始めて得べし。〕鬼窟裏に向つて、活計を作すこと莫れ。一時に漆桶を打破す。〕葉落花開いて、自ら時あらんには。〔即今什麼の時節ぞ、切に無事の會を作すことを得され。今日も也朝より暮に至り、明日も也朝より暮に至る。〕復云はく、還つて會するや也無や。〔重説偈言。〕無孔の鐵鎚。〔自領出去、惜むべし。〕旋過すること。便ち打つ。』

第八十九則

垂示に云はく、通身是れ眼、見不到、通身是れ耳、聞不及、通身是れ口、説不著、通身是れ心、響不出、通身は即ち口止く、忽ち若し眼無くんば作麼生か見えん、耳無くんば作麼生か聞かん、口無くんば作麼生か説かん、心無くんば作麼生か響せん。若し這裡に向つて一線道を撥轉し得ば、便ち古佛と同參。參は則ち且く止く、箇の什麼人にか參せん。

【雲巖、道吾】 俱に樂山に嗣ぐ。  
 【大悲菩薩】 觀世音則ち千手千眼觀音。

【太鉄】 すてきにハ意。  
 【八成】 八分通り  
 【十萬里】 眞理を測ることまことに十萬里なりの意。  
 【展翅】 搏風。莊子の内篇逍遙遊第一に故事あり、雲巖が道吾を稱揚せり。  
 【鶻】 或は崩に作る態はばたばたと翼を張るはざわざわちやぼちやぼ水をかきまはす音。  
 【六合】 宇宙。  
 【四溟】 四海。  
 【珠璣】 ごみほこり。  
 【毫釐】 微細の毛。

【本則】 擧す、雲巖、道吾に問ふ、「大悲菩薩、許多の心眼を用ひて、什麼をか作す。」(當時好し、木分の草料を興ふるに、備尋常走上走下什麼をか作ん。闍黎問うて什麼をか作ん) 吾云はく、「人の夜半に背手にして靴子を換るが如し。」(何ぞ木分の草料を用ひざる、一盲聚首を引く) 巖云はく、「吾會せり。」(錯を將て、錯に就く。一盲の人を騙殺す。同坑に異土無し、未だ鋒を觸り手を犯すことを免れず) 吾云はく、「汝作麼生か會する。」(何ぞ更に問ふことを勞せん、也問過せんことを要す、好し一擲を興ふるに) 巖云はく、「彌身是れ手眼。」(什麼の交渉か有らん。東窟裏に活計を作す、泥裏に土地を洗ふ) 吾云はく、「道ふことは則ち太甚だ道ふ、只八成を道ひ得たり。」(同坑に異土無し、奴は驢を見て慙。彌兒伴を牽く) 巖云はく、「彌兒伴麼生。」(人の處分を取らば争か得ん、也好し一擲を興ふるに) 吾云はく、「通身是れ手眼。」(假使れども斗を出でず、備が眼睛を撲却し舌頭を移却す。還つて十成なることを得るや未だしや、爹を喚んで爺と作す) 巖云はく、「彌身是。」(四肢八節、未だ是れ竹筒類の處にあらず) 通身是。一頂門上に半邊有り。東窟窟裏に在り、巖云はく、「拈じ來つて十萬里に投れり。」(放過せば則ち不可、何ぞ止す) 萬里のみたらん。題を展べて尋ねる六合の雲。拈拈の境界、將に用へり奇特と。點々。巖に擲つて戴鶴す四溟の水。此拈の境、天下の人間を奈何ともせず。道。是は何の埃。塵を忽ち生ず。(重ねて一人の爲に法界を下す。拈却して那裏にか著けん。一那箇の空蓋を未だ止まざる。(別別、吹き散じ了なり。截) 君見ま々、(又無邊に上る) 網珠籠

【刺珠】華嚴經にある譬喩、無數の摩尼珠が光輝を融和して、反影が重疊。

【咄】こりやどうだの意。

【第九十則】便ち般若の體用別に參問すべく、別に決擇すべきを明す。

【般若】梵語の漢音譯、此には智慧と譯す、心的作用

【體用】體は實體自身、用は屬性活動。

【蚌】眞珠の明月を含み美しき眞珠を産み出すによりて楮り得らるべしとの意。

【兎子】支那の傳説都て中秋の意を用ふ。

【一片】般若は一方の虚凝にして、意情を絶せりとの意、識を超越せりの意。

を垂れて影重重。(大小の雪寶道箇の去此を作す。可惜許。管に依つて葛藤を打す。) 棒頭の手眼何れより起る。(咄、賊過ぎて後弓を張る、備を反すこと得ず、盡大地の人氣を出す處無し、放得せば又須らく鼻を喫すべし。又打つて咄して云はく、且く道へ出僧底が是か、雪寶底が是か。) 咄。(一、兩四喝の後作麼生。)

第九十則

垂示に云はく、聲前的一句、千聖不備。而前の一絲、長時無間。淨躲躲、赤灑灑。頭懸懸、耳卓卓。且く道へ、作麼生。詰みに答す看よ。

【本則】學す、僧、智門に問ふ、如何なるか是れ般若の體。(通身影像無し、天下の人の舌頭を截す。體を用て什麼か作ん。) 門云はく、「蚌明月を吞む。」(光萬象を呑むことは則ち目く立く棒頭正眼の事、如何せん曲直を藏さざることを。雪上に霜を加ふ又一重。)

僧云はく、「如何なるか是れ般若の用。」(例退三千里、用を要して什麼か作ん。) 門云はく、「兎子懐胎。」(峻。苦瓠は根に連つて苦く、甜瓜は蒂に徹して甜し。光影の中に向つて活計を作す、智門の窠窟を出でず、若し箇の出で來る有らば、且く道へ、是れ般若の體か是れ般若の用か。且く要すま上に泥を加へんことを。)

【頌】一片虚凝にして、謂情を絶す。(心を擬すれば即ち離たる。佛眼も也。れども見えず。) 人天許より空生を見る。(須菩提に好し三十棒を與ふるに、這老



【玄兔】 大空の兔  
即ち月のこと。

【第九十一則】 便  
ち廳官半牛の扇子  
若し諸老の商賈  
あるに非ずんば、大  
いに難過すべきこ  
とを明す。

【廳官】 各は齊安  
馬鞍一に制ぐ。  
【半牛の扇子】 扇  
面に半牛玩月の畫  
を描さる扇子。

【還】 賠償の意。

漢を用て什麼か作ん。設使ひ須菩提も也倒還三千里。蚌玄兔を合む深深たる意。(也須らく是れ常人にして始めて得べし。什麼の意か有らん、何ぞ須ひん更に深深たる意を用ふることを。)會て禪家に與へて戰爭を作さしむ。(下戈已に息んで天下太平、還つて會するや。打つて云はく、閻黎多少をか喫得ず。)

### 第九十一則

垂示に云はく、情を超え見を離れ、縛を去り粘を解く。向上の宗乘を提起し、正法眼藏を扶堅することは、也須らく十方齊しく應じ、八面玲瓏として、直に信樂の田地に到るべし。且く道へ、還つて同得同證、同死同生底ありや。試みに擧す看よ。

【本則】擧す、廳官一日侍者を喚ぶ、一我が與に犀牛の扇子を轉ち來れ。と。一葛藤を打すること少からず、這箇好箇の消息に何似そ。侍者云はく、扇子破れぬ。二可憐許。好箇の消息、什麼と道ふぞ。一官云はく、一扇子既に破れなば、我に犀牛兒を還し來れ。二漏還少からず。幽州は猶白ら可なり、最も苦しきは是れ無算、兩箇犀牛兒を用て什麼か作ん。侍者無對。(果然として是れ箇の無孔の鐵劍、可憐許一投子云はく、一將ち出すことを辭せず、恐らくは頭角全からざらんことと。一似たることは則ち個たり、爭奈せん兩頭三頭なることを、也是れ道理を説く。一雲雲詰して云はく、我本からざる底の頭角を要す。二何の用を作すにか堪へん。詰を將て詰に就く。一石霜云はく、一若し和尚に還さば即ち無から

【兒】 やつと云ふ

【年々し】 老翁の

【勞して】 よせとせの感。

【用ふること多時】 宇宙の百神を従ふる常にも多年の意

【眼目無き】 無限大の靈機を淨化したること。

【總】 何人も。

【一轉語】 一語にして他をして轉迷開悟せしむる語句

人、「什麼と道なる、鼻柱に挿着す。」（一）「鼻柱して云はく、（二）「犀牛兒猶在り。」（三）「泊手ど徹つて感めて、頭を収めし。」（四）「鼻柱一頭柱を擧げ、中に置て、一の牛の字を撰す。」（五）「草間出すること勞せず、世を勞する波一雙實はと云はく、（六）「別來、什麼とてか得ち出さざる。」（七）「金剛擊せず、也是れ草葉の語。」（八）「深願云はく、（九）「相問を尊し、（一〇）「人に人を請をば好し。」（一一）「離地裏に、官人を罵る、辛を辭し苦を道つて、（一二）「什麼か作も。」（一三）「雪覆は積じて云はく、（一四）「懐むべし。勞して功無きことと。」（一五）「身を定ねて内に在り、也好し。」（一六）「十棒を擧ふるに。」（一七）「（一八）」

【鼻】 犀牛の鼻を用ふること多時。夏に遇うては則ち涼しく、冬に遇うては則ち暖なり。人々其是す、（一九）「波と爲てか知らざる。阿世が曾て用ひざら。」（二〇）「問答すれば元來總に當らず。

「知ることは則ち知らず。會することは便ち會せず、人を識する莫くんば好し。」（二一）「也別人を怪むことを得ず。」（二二）「眼目無き清風と頭角と。」（二三）「什麼の處に在る、自己の上に向つて會せずんば什麼の處に向つてか會せん。」（二四）「天上天下頭角重ねて生ず。是れ什麼ぞ、風雲に浪を起す。」（二五）

盡く雲雨の去つて遺ひなきに同じ。蒼天蒼天、也是れ矣。録清衆一室復云はく、（二六）「若し清風の再び復し、頭角の重ねて生ぜんことを要せば、（二七）「人人箇の犀牛の扇子有り、十二時中全く他の力を得たり。」（二八）「什麼に因つてか問着すれば總に知らざる、還つて道ひ得てんや。」（二九）「請ふ彌答各一轉語を下せ。」（三〇）「（三一）」（三二）「（三三）」（三四）「（三五）」（三六）「（三七）」（三八）「（三九）」（四〇）「（四一）」（四二）「（四三）」（四四）「（四五）」（四六）「（四七）」（四八）「（四九）」（五〇）」

れなば、我に犀牛兒を還し來れ。」（五一）「也一箇半箇有り。」（五二）「（五三）」（五四）「（五五）」（五六）「（五七）」（五八）「（五九）」（六〇）」（六一）「（六二）」（六三）「（六四）」（六五）」（六六）「（六七）」（六八）「（六九）」（七〇）」（七一）「（七二）」（七三）「（七四）」（七五）」（七六）「（七七）」（七八）「（七九）」（八〇）」（八一）「（八二）」（八三）「（八四）」（八五）」（八六）「（八七）」（八八）「（八九）」（九〇）」（九一）「（九二）」（九三）「（九四）」（九五）」（九六）「（九七）」（九八）「（九九）」（一〇〇）」

也好し。彌床を推倒するに。」（一〇一）「（一〇二）」（一〇三）「（一〇四）」（一〇五）」（一〇六）「（一〇七）」（一〇八）「（一〇九）」（一一〇）」（一一一）「（一一二）」（一一三）「（一一四）」（一一五）」（一一六）「（一一七）」（一一八）「（一一九）」（一二〇）」（一二一）「（一二二）」（一二三）「（一二四）」（一二五）」（一二六）「（一二七）」（一二八）「（一二九）」（一三〇）」（一三一）「（一三二）」（一三三）「（一三四）」（一三五）」（一三六）「（一三七）」（一三八）「（一三九）」（一四〇）」（一四一）「（一四二）」（一四三）「（一四四）」（一四五）」（一四六）「（一四七）」（一四八）「（一四九）」（一五〇）」（一五一）「（一五二）」（一五三）「（一五四）」（一五五）」（一五六）「（一五七）」（一五八）「（一五九）」（一六〇）」（一六一）「（一六二）」（一六三）「（一六四）」（一六五）」（一六六）「（一六七）」（一六八）「（一六九）」（一七〇）」（一七一）「（一七二）」（一七三）「（一七四）」（一七五）」（一七六）「（一七七）」（一七八）「（一七九）」（一八〇）」（一八一）「（一八二）」（一八三）「（一八四）」（一八五）」（一八六）「（一八七）」（一八八）「（一八九）」（一九〇）」（一九一）「（一九二）」（一九三）「（一九四）」（一九五）」（一九六）「（一九七）」（一九八）「（一九九）」（二〇〇）」

也好し。彌床を推倒するに。」（一〇一）「（一〇二）」（一〇三）「（一〇四）」（一〇五）」（一〇六）「（一〇七）」（一〇八）「（一〇九）」（一一〇）」（一一一）「（一二二）」（一二三）「（一二四）」（一二五）」（一二六）「（一二七）」（一二八）「（一二九）」（一三〇）」（一三一）「（一三二）」（一三三）「（一三四）」（一三五）」（一三六）「（一三七）」（一三八）「（一三九）」（一四〇）」（一四一）「（一四二）」（一四三）「（一四四）」（一四五）」（一四六）「（一四七）」（一四八）「（一四九）」（一五〇）」（一五一）「（一五二）」（一五三）「（一五四）」（一五五）」（一五六）「（一五七）」（一五八）「（一五九）」（一六〇）」（一六一）「（一六二）」（一六三）「（一六四）」（一六五）」（一六六）「（一六七）」（一六八）「（一六九）」（一七〇）」（一七一）「（一七二）」（一七三）「（一七四）」（一七五）」（一七六）「（一七七）」（一七八）「（一七九）」（一八〇）」（一八一）「（一八二）」（一八三）「（一八四）」（一八五）」（一八六）「（一八七）」（一八八）「（一八九）」（一九〇）」（一九一）「（一九二）」（一九三）「（一九四）」（一九五）」（一九六）「（一九七）」（一九八）「（一九九）」（二〇〇）」

也好し。彌床を推倒するに。」（一〇一）「（一〇二）」（一〇三）「（一〇四）」（一〇五）」（一〇六）「（一〇七）」（一〇八）「（一〇九）」（一一〇）」（一一一）「（一二二）」（一二三）「（一二四）」（一二五）」（一二六）「（一二七）」（一二八）「（一二九）」（一三〇）」（一三一）「（一三二）」（一三三）「（一三四）」（一三五）」（一三六）「（一三七）」（一三八）「（一三九）」（一四〇）」（一四一）「（一四二）」（一四三）「（一四四）」（一四五）」（一四六）「（一四七）」（一四八）「（一四九）」（一五〇）」（一五一）「（一五二）」（一五三）「（一五四）」（一五五）」（一五六）「（一五七）」（一五八）「（一五九）」（一六〇）」（一六一）「（一六二）」（一六三）「（一六四）」（一六五）」（一六六）「（一六七）」（一六八）「（一六九）」（一七〇）」（一七一）「（一七二）」（一七三）「（一七四）」（一七五）」（一七六）「（一七七）」（一七八）「（一七九）」（一八〇）」（一八一）「（一八二）」（一八三）「（一八四）」（一八五）」（一八六）「（一八七）」（一八八）「（一八九）」（一九〇）」（一九一）「（一九二）」（一九三）「（一九四）」（一九五）」（一九六）「（一九七）」（一九八）「（一九九）」（二〇〇）」

【參堂】 僧堂に歸つて坐禪し去れと【巖】 莊子にある神話なり【蝦蟇】 がまのこ

【第九十二則】 便ち世尊上堂、齊に拈花微笑の圓縁のみにあらざるを明世尊【佛陀の十號の一】【白槌】 大衆に告白するたために槌を打つるの意なり、槌は八角に削りたる木製の物之を鳴らすに槌を以てす【音聲の慣例なるも、あきらかに法王の法を觀ずるに法王の法はかくの如くと謂ず宇宙の森羅萬象が

僧あり、出でて云はく、「大衆參堂し去れ。」(賊過ぎて後弓を張る、槍を奪却せらる。前、村に構らず、後、店に逃らす。)雪竇喝して云はく、「鉤を提つて圓縁を釣らんとして、箇の蝦蟇を釣り得たり。」と。便ち下座す。(他の恚害地なることと招き得たり、賊過ぎて後弓を張る。)佛果自ら此語を徴して云はく、「又直に備諸人に問はん、這僧道ふ、大衆參堂し去れと、是れ會か不會か。若し是れ會せずんば爭か恚害に道ふことを勿せん。若し會すと道はん時、雪竇又道はく、「鉤を提つて圓縁を釣る、只箇の蝦蟇を釣り得たり。」と。便ち下座。目く道へ、誦誦什雲の處にか在る、試みに請ふ參詳して看よ。)

第九十二則

華承に云はく、鼓を動して曲を別つ、千載にも逢ひ難し。兔を見て鷹を放つ、一時に俊を取る。一切の語言を總て一句と爲し、大千沙界を攝して一塵と爲す。同死同生、七穿八穴。還つて證據の者ありや。試みに舉す看よ。

【本則】 舉す、世尊一日降座。(賓主俱に笑す、是れ一回潮逗するのみにあらず。)文殊白隨して云はく、「諸觀法王法、法王法如是。」一子觀み得たり。世尊便ち下座。「私人、恐人に向つて説くこと莫れ、恐人に説くすれば人を惡發す。鼓を打ち空響を弁す、相逢ふ爾會家。」

【頌】 列聖叢中作者知る。(釋迦老子を請ること莫くんば好し。他の臨濟總山に還す、千

法王の本體じやとの意

【列聖】古今の諸聖。

【叢中】叢中の詩化。

【新の如くなす】新の如くなす。

【會中】佛陀降座下。

【仙陀】梵語仙陀婆仙制後入。

【第九十三則】便わ大光の一機、袖子の基と爲るを明す。

【大光】名は居壽石和語に副ぐ。

【因寮】第七十四則の中にあり。

【野狐】精は幽靈他人を輕侮するに用ふる語、馬鹿野郎めが、ふねけめがの意。

【前箭】大光舞を作す後箭は野狐精

【黄葉】楊樹の葉を小兒にもたせて

黄金なりと母がす

かす、眞實に非ず

【曹溪】波浪といふ

曹溪下の禪といふ

「箇箇半箇を得難し。」法王の法令斯の如くならず。〔他に隨つて走る底麻の如く粟に似たり、三頭雨面、灼然として能く幾人有りてか這裏に到らん〕會中若し仙陀の客あらば、〔中に就いて俗倒し人を得難し〕文殊景は作家にあらば、闍黎定して不見。何ぞ必らずしも文殊一極を下さん。〔更に一極を下すこと又何ぞ妨げん。第一、第三、種種に要せず、當機の一旬作麼生か道はん。論。〕

第九十三則

【本則】擧す、偈、大光に問ふ、長慶道はく、「齋に因つて慶讚す」と、意旨如何。〔重光、這漆桶、妨げず疑着することを問はずんば知らじ。〕大光舞を作す。〔人を賺殺すること莫れ、舊に依つて従前懸懸に出来る。〕偈神有す。〔又懸懸にし去る、是なることは則ち是、只恐らくは錯つて會せんことを。〕光云はく、「箇の什麼をか見て便ち禮拜す。〔也好し。〕擧するに、須らく辨過して始めて得べし。〕偈舞を作す。〔様に依つて猫兒を畫く。果然として錯つて會す、光影を弄する漢。〕光云はく、「這野狐精。〔此恩報じ難し、三十二祖只這箇を傳ふ。〕

【頌】前箭は猶輕く後箭は深し。〔百發百中、什麼の處に向つてか廻避せん。〕誰か云ふ黄葉是れ黄金と。〔目く啼を止むることを作す。小兒を瞞じ得るとも、也用處無し。〕曹溪の波浪如し相似たらば、〔泥團を弄する漢什麼の限りか有らん。様に依つて猫兒を畫く、一

【平人】平地上の人とか、凡夫とかの意。

【第九十四則】便ち楞嚴の大事、恐るべき事あるを明す。

【楞嚴】第二卷にある佛陀と阿耨との説話の一節なり【吾】佛陀自らをさす。又吾人等とも云ふ意。

【不見】この則は佛陀が阿難に向つて、認識の實體は如何なる處に存在するか云ふにつきて述べしを叙す主觀と客觀とを辨別して、本體を見よ。

【全家】無限大の佛の姿は無比なれば、衆盲摸大象など、印度の寓話にあり。

【全牛】莊子内篇養生篇にある寓話【殊ならず】眼中にはいつたほこり

路を虜行す。」限り無き平人も陸沈せられん。(活底の人に遇着す、天下の衲僧を帶累して摸索不着ならしむ。闇黎を帶累して出頭することを得ず。)

### 第九十四則

垂示に云はく、聲前の一句、千聖不傳。面前の一絲、長時無間。淨槃槃赤灑灑、露地の白牛。眼卓脚耳卓脚、金毛の獅子は則ち且く置く。且く道へ、作麼生か是れ露地の白牛。

【本則】擧す、楞嚴經に云はく、「吾が不見の時、何ぞ吾が不見の處を見ざる。(好箇の消息、見ることを用て什麼か作ん。釋迦老子漏逗少からず。若し不見を見れば、自然に彼の不見の相に非ず。)

「咄、甚の闇工夫か有らん、山僧をして兩頭三面と信し去らしむべからず。」若し吾が不見の地を見ずんば、「什麼の處に向つてか去る。鐵錐を釘つに相似たり。

咄。」自然に物に非ず。「牛頭を按じて草を喫せしむ、更に什麼の口頭の聲色をか説かん。」云何ぞ汝に非ざらん。(備と説き我と説く、總に沒交涉。打つて云はく、脚跟下自家に看取せよ、還つて看すや。)

【頌】全家全牛醫殊ならず。(半邊註漢、半開半合。扶羸換軀して什麼か作ん。刀兩段。)

從來の作者共に名摸す(西天の四七、唐土の二三、天下の老和尚の如く裏に似たり。猶自ら少くること有り。)

如今黃頭老を見んと要せば、(咄。這老胡、語漢語が脚跟下に在り。)

刹刹摩訶半途に在り。(脚跟下踰過了也、更に山僧をして什麼をか説かすん。驢年にも

【黃頤】 遍見此に黄色といふ、迦提羅に蜂鹿の佛陀を慕憶老又黃面老子ト云フ。

【刹刹】 刹摩は即ち無數の園土を意味す。

【第九十五則】 便ち保福、長慶、互に例子の作用を争ふことを明すのみ。

【阿羅漢】 梵語の音譯、魔供、殺賊無生、離樂等の譯語あり、アツハツト云フ、小乘の最上級の聖者、無果を得るもの。

【三舌】 貪如より來生するの意。

【二種語】 眞實語方便語。

【如來語】 乘法第二義門、何をぐずぐずいうてをるのかの意。

【喫茶去】 雲門の胡餅と同じ。

【第二】 眞實語。

【第二】 方便語。

遊つこ曾て夢にも見んや。

第九十五則

垂示に云はく、有佛の處住することを得ざれ。住著すれば、再生す。無佛の處急に走過せよ。走過せざれば草澤きこと一丈。直從ひ淨慧觀空淨慧、事外に據無く、機外に事無きも、私だ免れず料を守つて重を待つことを。且く道へ、總に不忿懣ならば、作麼生か行履せん。試みに擧す看よ。

【本則】 擧す、長慶有る時云はく、寧ろ阿羅漢に三舌ありと説くも、(黒髮等を生ぜず。)

如來に二種の語ありと説かず、(口には是れ淨慧を語りたり) 如來に語なしとは道はず。(猶自ら翻預、早に是れ七穿八穴) 只是れ一種の語なし。(周山者也、什麼の第三第

四種とか説かん) 保福云はく、作麼生か是れ如來の語。(好一撥、什麼と道ふぞ。) 慶云はく、彈人争か聞くことを得ん。(空に望んで啓告す。七花八裂) 保福云はく、一情に知

んぬ備が第二頭に向つて道ふことを。(争か明眼の人は瞞じ得ん。鼻孔を裂轉すること、何ぞ止第二頭のみならん) 慶云はく、作麼生か是れ如來の語。(措、却つて蛇子に較れ

り) 保福云はく、喫茶去。(領、復云はく、還つて當すや、瞎過了也)

【頌】 頭たり第一第二。(我が玉庫の中に是の如き事無し、古今の傍様、邪に隨ひ惡を遂う

て什麼か作ん。) 臥龍止水を鑿みず。(同道方に知る) 無處には月あつて波澄み、(四海孤

て什麼か作ん。)

て什麼か作ん。)

【風籠】 莊子にあり、籠はうつして見ること。止水は水溜のこと。如來眞實相に比すべき語。

【無處】 消滅。

【三月】 點額は魚の鰓門に群集して三級の浪をのぼり得ずして、遂に頭を打傷せる故事より試験の落第をいふ。可憐生の意。

【第九十六回】 趙州兒孫の爲に、三轉語を垂る。雪竇三頌を拈出し、轉語毎に、語の許多の工夫を盡して、別に大事あるを論ず。

【渡】 渡ると渡すと。

【神光】 二祖慧可大師は、梁の武帝大通二年十二月九日の深夜、達磨に雪中に參じて斷臂す。

【照天地】 有名の語。

舟獨り自ら行く。徒に卜度するに勞す、什麼の機をか討ねん。有處には風なきに浪起る。人を騙殺す、還つて寒毛卓豎することを覺ゆるや。打つて云はく、來也。稜禪客稜禪客。勾賊破家、關市裏に出頭すること莫れ。失錢遭罪。三月馮門點額に遭ふ。己を退けて人に讓る、萬が中一りも無し。只氣を飲み聲を呑むことを得たり。

第九十六則

【本則】 擧す、趙州、衆に示す三轉語。〔什麼と道ふぞ、三段同じからず。〕

【頌】 泥佛水を渡らす。〔鼻孔を浸す、風無きに浪を起す。〕 禪光天地を照す。〔他の什麼の事にか干らん、兎を見て塵を放つ。〕 雪に立つて如し米が伴せずんば、二人虚を傳ふれば萬人實を傳ふ、錯を將て錯に就く、阿誰か替て備を見來る。何人か驪駒せざらん。

〔寺に入つて額を看る、二六時中走上走下是れ什麼ぞ、關市裏に遭ふ。〕

【頌】 金佛鐘を渡らす。〔眉毛を擦却す、天上天下唯我獨尊。〕 人來つて紫胡を訪ふ。〔又

恁麼にし去るや、只恐らくは、喪身失命せんことを。〕 棒中雙箇の字。〔字を識らざる底の

猶兒も也話會の處無し。天下の情俗習を掃むことを得ず、只恐らくは、喪身失命せん

ことを。〕 清風何の處にか無からん。〔又恁麼によるや、頭上漫漫脚下漫漫。又云はく、來也。〕

【頌】 木佛火を渡らす。〔燒却し了れり、唯我能く知る。〕 當に思ふ被電墮。〔東行西行何

【影鷲】 影となすは誤なり。影に作るを正すとす。下手な真似物と模倣の意。

【訪禁錮】 十七則の類に關する故事看狗の二字を以て「禁中」は高札の隱者、安國師に嗣ぐ。五祖忍三世。

【靈骨何處、準從何起、懲寒寒、殺物命】と、撃つこと三下云云の故事あり。

【我に辜負】 竈神も自分が久しうして自己の眞價を没却せしを悟つたの意。

【第九十七則】 便ち金剛經の大事なり。

【金剛經】 羅什の譯本に依る、この語は第十六段能淨業障分にある文句

【若し人の】 此經を信奉し、教誦したと云ふを人に輕蔑されるやうなと

の不可が有らん。 杖子忽ちに擊着す。〔山僧が手裏に在り、山僧人を用ひて、詞華が手裏に無き。一方に知ん、我に辜負することを。〕〔備に似て相似たり、摸索不着せば什麼の用處か有らん。〕 三十年の後始め一得ん。擧る永劫に沈淪すべくとも、諸理の解脫を求めに、若し箇の裏に向つて獲得するも未だ免れず辜負することを。 作麼生が辜負せざることを得去らん。 拄杖子未だ免れず別人の手裏に在ることを。〕

第九十七則

垂示に云はく、一を正じて二を放つも、未だ是れ作家ならず。一を擧げて二を明らむるも、猶宗匠に乖く。直に天地陟降し、四方絶唱し、雷奔り雲馳せ、雲行き雨霽き、瀑を傾け崖を倒にし、壑のごとくに消滅、盆のごとくに傾くことを得るも、未だ一半を捉得せざるにあり。還つて天關を轉ずることを解し、能く地軸を移す底ありや。試みに擧す看よ。

【本則】 擧す、金剛經に云はく、「若し人の爲に輕賤せられんに、一總道を放つ。又且つ何ぞ妨げん。」是人、先世の罪業あつて、〔驢蹄馬鞍。〕應に惡道に墮すべきに、〔陷墮し了れり。〕今世の人に輕賤せらるるを以ての故に、〔本を擧いで未に及ばず、只忍受することを得たり。〕先世の罪業、〔什麼の處に向つてか摸索せん。殺を種えて豆苗を生ぜず。〕則ち爲に消滅すと。〔雪上に霜を加ふ又一重、湯の水を消すが如し。〕



の意。

【先世】 前世の罪障。

【惡道】 地獄、餓鬼、畜生を三惡道と云ふ。

【消滅】 消滅し佛果を得ること。

【明珠】 金剛經の珠。

【胡漢】 胡も漢も皆罪業も善業もかしの意。

【波旬】 此に殺者又は惡者と譯す。

【瞿曇】 佛陀の意。

【第九十八則】 便ち西院の雨鐺、古今良則たることを明す。

【西院】 名は思明寶壽延洛に屬す。

【天平】 名は從前清溪進に屬す、雪峰五世。

【學話の人】 話の出来る人の意。

【頌】 明珠掌に在り。〔上香漢に通じ、下黄泉に徹す。什麼と道ふぞ、四邊滿說八面玲瓏。〕功ある者を賞す。〔多少分明、他に隨ひ去る。忽ち若し功無き時作麼生か賞せん。〕

胡漢來らず。〔内外消息を絶す、猶些子に較れり。〕全く伎倆なし。〔展轉して落交渉。什麼の處に向つてか摸索せん、漆桶打破し來れ、相見せん。〕伎倆既になし、〔休し去り、歡しする、阿難か憊寧に道ふ。〕波旬途を失す。〔勘破了也、這外道魔王蹤跡を尋ねるに見えず。〕瞿曇羅雲。〔佛眼もこれども見えず。咄。〕我を識るや、也無や。〔咄、勘破了也。〕復云はく、〔勘破了也。〕〔二棒一條の痕、已に言前に在り。〕

### 第九十八則

垂示に云はく、一夏雨門として葛藤を打す、幾乎五湖の僧を斜倒す。金剛の寶劍當頭に截る。始めて覺ゆ從來百不能なることを。且く道へ、作麼生か是れ金剛の寶劍。眉毛を眨上して、試みに請ふ筆毫を露さん。看よ。

【本則】 擧す、天平和尚行脚の時、西院に參す。常に云はく、道ふことと云ふ法を言すと、箇の學話の人を覓むるに也無し。〔一漏逗少からず、這漢是なることは則ち是。爭奈せん、靈龜尾を曳くことを。〕一日西院遙に見て召して云はく、〔從前。〕〔鏡鈎搭索し了れり。〕

平頭を擧ぐ。〔著、兩重の公案。〕西院云はく、〔錯。〕〔也須らく是れ鐘裏に鍛過して始めて得べし。〕劈腹剌心、三要印聞、朱點窄し。〔未だ擬議を容れざるに主賓分る。〕平行

【錯】何を云つてをるのかの意

【上座】従者を指す

【業風】狐にばかされての意  
【長老】思明和尚  
【南方】西院を指す

くこと「兩歩」(已)に是れ半前落後、道邊、泥裏に土地を洗ふ」西院又云よく、「錯」(勇  
斷剛心、人皆喚んで兩重の公案と作す。殊に知らず水を入るに似、金を金に博ふ  
るが如きことを)「平近前す」(後前として落處を知らず、畏懼して滾滾不著。西院云は  
く、「猶米道、兩錯、是れ西院が錯か、是れ上座が錯か」(前簡は錯なく、後簡は深し)「平  
云よく、「従者が錯」(錯つて脚跡を認めて喚んで爺の下領と作す、懸崖の僧俗に似ば、  
千箇萬箇を打殺すとも什麼の罪か有らん)「西院云はく、「錯」(雪上に雪を加ふ)「平休し  
去る」(雪つて定盤星を認む、果然として落處を知らず。軒かに知るが、備が鼻孔別人の  
手裏に在ることを)「西院云はく、「且く這纏に在つて夏を過し、上座と共に這雨錯を商  
量せんことを待て」(西院云、常會集談きこと眞に似たり。當時何ぞ違ひ將て出し去らざ  
る)「平當時便ち行く」(也僧俗に似たり、似たることは則ち似たり、是なることは則ち  
未だ是ならず)後に住院して案に讀んで云はく、「貧兒舊債を思ふ、也須らく是れ點過す  
べし)「我が當行脚の時、業風に吹かれて、思明長老の處に到る、兩錯を連下せられ、  
更に我を留めて夏を過して、我と共に商量せんことを待たしむ。我徒衆の時、錯とは道  
はず、我が發足して、南方に向つて去りし時、早く知んぬ、錯と道ひ了ることを」(這雨  
錯を爭奈何せん。千錯萬錯爭奈せん。波交渉、轉た見る、郎當として人を愁殺すること  
を)

【頰】禪家流、(法桶一狀に頰過す)輕薄を愛す。(也此子有り、佛を呵し祖を罵る麻の

【用ふることを着す】役に立たぬの意。

【銷鑿】 溶解。

【第九十九則】 便ち毘盧頂上を坐斷す、是れ參禪行脚の根本、人人此に到つて大いに蹉過し去るを明す。【十身調御】 調御とは、佛陀を調御師に喻へし名稱。佛十號の一。【檀越】 梵語の音譯語にて、施者則ち慈悲深き陛下。

如く粟に似たり。」満肚參じ來つて用ふることを着す。「只宜しく用處有るべし、方木圓孔に返せず、園梨他と同參。」悲むに堪へたり笑ふに堪へたり天平老。「天下の衲僧跳不出。旁人の眉を横むることを怕れず、也人の鈍悶することを得たり。」却つて謂ふ當利悔らくは行脚せしことを。「未だ行脚せざるに前に錯り了れり。草鞋を踏破して何の用を作すにか堪へん、一筆に勾下す。」銷鑿。「是れ什麼ぞ、寶金鎖につて名言を下し了れり。」西院の清風頓に銷鑿す。「西院什麼の處にか在る、何似生。道ふこと莫れ西院と三世の諸佛、天下の老和尚も亦須らく倒還三千して始めて得べし。斯に於て會得せば、爾に許す天下に横行することを。」復云はく、「忽ち箇の衲僧あつて出でて云はん銷鑿と。」一狀に領過す、猶此子に較れり。」雪竇が語は天平が語と何似ぞ。「西院又出世。教に據つて案に結す。摠に液交渉。且く道へ、畢竟して如何。打つて云はく、銷鑿。」

第九十九則

垂示に云はく、龍吟すれば霧起り、虎嘯けば風生ず。出世の宗叢、金玉相振ひ、通方の作略、箭鋒相控ふ。徧界藏さず、遠近齊しく彰れ、古今明かに輝す。且く道へ、是れ什麼人の境界ぞ。試みに擧す看よ。

【本則】 擧す、肅宗皇帝、忠國師に問ふ、「如何なるか是れ十身調御。」「作家の君主大唐の天子、也合に怎麼なることを知るべし。頭上の捲輪冠脚下の無邊履。」國師云はく、「檀

【世道】世道無常

【修行】修行の意

【意人】意人の意

【帝王】自衛の名

【清淨法身】清淨

【帝】上の句は

帝と忠との關係に

重きを置き、下國

を賞罰す、忠の

句は、忠の襟を

握出す

【南陽】白崖山に

屬す、忠國を指

す

【大唐】唐宗代宗

【扶芻】長慮頂云

【黃金】清淨法身

【三千】宇宙の意

【利】諸の意の徒

【第一百則】彼ち

智劍出て來りて無

れず、明頭未だ顯

の大事を閉す。

【第一百則】彼ち智劍出て來りて無れず、明頭未だ顯の大事を閉す。更  
一、一人を尊し、一何を尊せざる、可憐許。好彩分付せず、亦たらば當時使ち賜せら、更  
に對することを用い、何れを尊せん、一何れを尊はく、一自は清淨法身と思むること莫れ、然  
も莫難すと雖も、一出身の事行り、爾後則當とし之人を尊す。

【第二】一國の師も亦強はてず、一河を必らずしもせん、空花成日、風過して聞頭驚く。  
南陽驛り亦す露露を拂ふことと、一果然として東津を乘渡す。千南陽驛の中、一箇半箇を得  
難し。大唐扶け得たり、眞の天子、一可憐生、接得して何れを用を伴すにか果せん、一善權翁を  
接得して、什麼の事をか濟さん、一曾て毘盧頂上を踏んで行かむ。一男の人、何ぞ急  
麼に去らざる、直に得たり天上、下。上座作麼生か踏まん、一異劍擧碎、黃金の骨、一平生  
を暢快す、已に言前に在り、一大地の間更に何物ぞ、一茫茫たる四海知首少なり。全身攝  
爾す、汝を攝し士を攝す、一手持海夜沈沈、一高く眼を着けよ、封疆を把定す、備身驚妻  
に入り去らんことを待つ那、一知らず誰か蒼龍窟に入る、一三十棒一棒も也少なきことを得  
じ、指了也、還つて尊すや、咄。諸人の鼻孔穿竅に穿ち了らる、錯つて自己清淨法身と  
認むること莫れ。

第一百則

垂示に云はく、因を收め果を結び、始めを盡し終を盡す。對面私無し、元曾て説かず。

【吹毛鑿】 利鑿をいふ、人具足の敏若の智鑿といふに喩ふ。

【撐着】 支持又合有。水底の月影美なるを賞す。

【不平】 吹毛鑿を構想せる言葉なり。

【大巧】 老子經の語に出づ、敏若の妙。

【指掌】 敏若の妙用は、指頭に掌裡に在り。

【何天】 日月星辰に喩へ妙用を照露の二字にて表現す。大治良工技能の巧なるも聖人君子なるも左右の得ず。

【別別】 宇宙の万象これ敏若の斷片案。

【孿】 取なり引なり。

【藥蛇】 蛇が裸體の中に墮りて出づることを得ずと、徒に言句に固着せば、却つて葛藤窟裡に死在すとの意

忽ち箇の出で來つて、一夏請益す。什麼としてか曾て説かざると道ふあらば、備が悟り來らんを待つて、備に向つて道はん。且く道へ、爲復是れ當面に諍却するか、爲復別に長處有るか。試みに舉す看よ。

【本則】 擧す、解、巴陵に問ふ、「如何なるか是れ吹毛の劍。」(斬、斃) 陵云はく、「珊瑚枝枝月を撐著す。」(光萬象を吞む、四海九州)。

【頌】 不平を平げんことを要す。「細なること虻蜂の如し、大丈夫の漢、須らく是れ恁麼なるべし。」大巧は拙の如し。「輝色を動さず身を藏し影を露す。」或は指掌は掌。「看よ、果然として這箇不是。」天に倚つて雪を照す。「暫、看すれば則ち露す。」大治も磨礱し下さず、「更に假悚を用て什麼が作ん。干將能く來ること莫し。」良工も拂拭して未だ欺ます。「人能く行くこと莫し、直箇干將出で來ること莫し。」別別。「解、什麼の別處か有らん。」讚歎するに分有り。「珊瑚枝枝月を撐著す。」(三日月落ちて影寒潭を照す。且く道へ、什麼の處に向つてか去る、直に得たり天下太平なることを。醉後郎當として人を愁殺す)。

老僧更に一小偈有り。

萬斛舟に盈ちて手に負せて拏く、却つて一粒に因つて靈鷲を吞む  
百轉の舊公案を拈提して、時の人の幾眼沙をか撒却す

【極】

揮散なり

碧

巖

錄

終

無

門

關





無門關序

【無門關】二義あり、一には門關無し、の義とす、自門の義より入るものは是れ家珍にあらずに、關の義には無門の關の義とす、これ亦自序の「危亡を顧みず單刀直入せん」による。阿師 關無門を指す。

【笠上】有るが上に更に重ぬる義。

【乾竹に汁】青句なき處に青句を著くるなり。

【啄木】竹根を咬むなり。

【烏驪】黒き駿馬

【陳垣】未詳、習庵は別號、

【表文】無門關編纂の由来を朝廷に上表せしむるなり。

【紹定二年】南宋理宗皇帝即位五年

【天基の聖駕】天子の祝日を示す。

【無門】此書の著者。臨濟楊岐派の一尊宿。

説いて無門と道はば盡大地の人得入せん。説いて有門と道はば阿師の分無けん。第一より強ひて幾箇の注脚をか添ふ、大いに笠上に笠を頂くに似たり、硬く習翁が贊揚せんことを要す。之は是れ乾竹に汁を絞りて、這些の啄木を着得ず、習翁が一擲を消せされ。一擲、一滴をして江湖に落さしむること莫れ、千里の烏驪を追ふことを得ず。

紹定改元七月晦

習庵陳垣寫す

表文

紹定二年正月初五日、恭しく天基の聖節に遇ふ。臣僧某、頂め元年十二月朔五日に於て、佛祖の機義四十八則を印行し拈提して、今上皇帝幸皇萬歲萬歲萬歲を祝延したるを、皇帝陛下、恭しく聞はくは、聖明日現に齊しく、歡喜乾坤に等しく、八方、有道の君を歌ひ、四海無爲の化を樂まんことを。

慈懿皇后功德報因佑蓮華寺前任持僧法臣僧某聞謹言

【佛祖の機縁】 佛の根柢、因縁に從ふ。

【佛語心】 即ち佛を宗行とす。

【佛より】 巖窟が佛を宗行とす。

【無塵の説話】 此四十八則をさす。

【東嘉の龍翔】 温州永嘉縣の龍翔寺。

【筒の汲】 眞に身命を擲つて眞理を求めんとする大丈夫を指す。

【八臂の吒吒】 那吒は梵語。龍なり、四面八臂にして、大力の鬼王と云ふ。

【西天の四七】 初祖迦葉より四七二十八祖達磨まで。

【東天の二三】 初祖達磨より第六祖慧能まで。

【乞得】 ちらりと他に睛眼をうつす。

【大道】 佛道。

【此關】 この四十八の關を透らば、自由の界に入つて佛祖と等しく乾坤に獨歩せんとする。

# 無門關自序

佛祖の心を宗と爲し、無門を門と爲す。既に是れ無門、且作麼生か透らん。豈道ふことを見ず。二門より入る者は是れ家にあらず、縁によりて得る者は始終成壞す。一と。慧麈の説話、大いに風急きに浪を起し、肉に瘡を剋に似たり。何ぞ泥んや言毎に滯りて解會を責めんをや。杯を掉つ、月を打ち、靴を踏んで塵を踏む、甚の交渉あらん。愚閑、智定、戊子の夏、東嘉の龍翔に首衆たり、衲子請益するに因つて、遂に古人の公案を藉て、口を離く童子と作し、機に隨つて事着を引出す。虚無として抄録するに、是れ予軍と成る。初より前後を以て録す。共に四十八則と成る。道は無門關と曰ふ。若し是れ簡の法ならば、危亡を顧みず軍刀直入せん。八臂の吒吒、佛を擲れども作らず。繼使西天の四七、東天の二三も、只風を望んで命を乞ふことを得人。談し盡は餘踏せば、也窓を障てて馬駒を看るに似たり。眼を乞得し未らば、早く已に蹶過せん。

頌に曰はく、

大道無門、千差路あり

此關を透得せば、乾坤に獨歩せん

佛祖の機縁、四十八則

無門關

參學比丘彌衍宗紹編

第一 趙州狗子

趙州和尚、因に僧問ふ、狗子に説つて佛性ありや也無や、州云はく、無。

無門曰はく、參禪は須らく祖師の關を透るべし、妙悟は心路を踏めて絶せんことを要す。

祖關透らず心路絶せずんば、盡く是れ依草附木の精寢ならん。且く道へ、如何なるか是れ祖師の關、只者一箇の無の字、乃ち宗門の一関なり。遂に之を日けて禪宗無門關と曰ふ。

透得過する者は、但しく趙州に見ゆるのみならず、便ち歷代の祖師と手を把つて共に行き、眉毛厮結んで同一眼に見、同一耳に聞くべし。豈に慶快ならざらんや。透關を要する底有ること莫しや。三百六十の骨節、八萬四千の塵實を將て、通身に滴の涙を垂して箇の無の字に參せよ。晝夜提擡して虚無の會を作すこと莫れ、有無の會を作すこと莫れ、箇の熱鐵丸を吞了するが如くに相似て、吐けども又吐き出さず、從前より惡知惡覺を為盡し、久々に熟して自然に内外打成一片ならば、睡子の夢を得るが如く、只自知することを言す。豁然として打發せば、天を翫かし地を動せん。關將軍の大刀を奪ひ得て手に入るが如く、佛に逢うては佛を殺し、祖に逢うては祖を殺し、生死岸頭に於て大自在を得、六道四生の中

【本書は宋の祖思開禪師が理宗皇帝の紹定二年正月五日、皇帝の天基聖節に遇ひ親意を表するたため、豫め元年十二月五日、佛祖の機縁四十八問を拈提し之を印行したるものなり】

【趙州狗子】有名なる無字の公案詩に冒頭に掲げたるは、著者無門が最初禪に參じたる時此一箇の無字に參じて大悟厥底せしによる。此書を無門關と名するも此間に依る】

【趙州和尚】曹州曹縣の人、從處をいふ。南泉普願に參じて法を嗣ぐ。趙州は地名なり。

【依草附木】文字言句に依り、有無の會を作し道理の會を作すを指す

【提擡】掌け持ち出きて、公案を工夫すること。

無門關

【虚無】 老子の道は虚無自然を至極となし、趙州の意は然らずとの意

【夢子の夢】 人に託ること能はざれども自身に合點するをいふ。

【蔚然として云云】 大死一番絶後に再び蘇生して豁然大悟するなり。

【關將軍】 劉玄德の臣種種の妄想戲論を破するをいふ。

【佛に送へば佛を殺す】 佛病祖病を無字の銘刀にて截断するを云ふ。

【遊戯三昧】 曠處に主人公となりて恰も閑遊に遊ぶが如くなる意。

【法場】 法蔵の光明一時に轉廻するの慶典。

【百丈】 葛祖に嗣き温州百丈山に住す。

【迦葉佛】 是れ過去七佛中の第六佛也。第七佛は即ち釋迦牟尼佛の資。

に向つて眞實の味ならん。且作佛生か提擧せん。平生の氣力を盡して前は無の字を擧せよ、若し問斷せずんば、解法場一撃すれば便ち著くに俱ん。

頌に曰はく、

狗子佛性、全提正命、

纔に有無に涉れば、喪身失命せん

第二 百丈野狐

百丈和尚、凡そ參の次、一老人有つて、常に衆に隨つて法を聽く。衆人退けば老人も亦退く。忽ち一日退かず。爾遂に問ふ、而前に立つ者は復是れ何人ぞ。老人云はく、諸某甲は非人なり、過去迦葉佛の時に於て曾て此山に住す。因に衆人同ふ、大修行業の人、還つて因果に落つる事也。某甲對て云はく、不落因果」と。五百生野狐身に墮す、今諸君和尙一轉語を代つて、貴ぶらくは野狐を脱せしめよ」と。遂に問ふ、修行成の人、還つて因果に落つるや也無や。師云はく、不落因果」と。老人言下に於て大悟す。作禮して云はく、某甲已に野狐身を脱して山後に住在せん、敢て和尚に告ぐ、乞ふ亡僧の事例に依れ。師、羅那をして白槌して單に告げしむ、食後に亡僧を送らんと。大衆言議す、一衆皆安し、涅槃堂に又人の病む無し。何が故ぞ是の如くなる。食後に只師の衆を領して、山後の巖下に至つて、杖を以て一死野狐を挑出して、乃ち火葬に依るを見る。師、晚に至つ

格を以ての意。  
【維那】叢林の法務僧侶を掌る。  
【白檀】報告板を打つて維那が種種なる法務等を報告す。

【涅槃堂】寺中の南室。

【黃髮】黃髮山の希達百丈に鬪ぐ

【胡鬚赤】餘心多き者。

【一隻眼】天地と我と同根、萬物と自己と一體と見る眞理眼。

【風流五百生】野狐五百生も實に風流なる生活。

【兩采一賽】賽は博奕の賽、不落も不昧も大なる相違無し。更に第三第四の頌句にて忽ち打ち消して千錯萬錯といふ。

【俱胝】婺州金華山の住持。大梅法常禪師の法嗣。天龍和尚より一指頭の禪を相承して生涯之を唱ふ。

て上堂、前の因縁を擧す。黃髮乃ち問ふ、「古人錯つて一轉語を祇對して、五百生野狐身に墮すと。轉錯らざるば、箇の甚麼とか作るべき。」師云はく、「近前來、伊が與に道はん。」黃髮遂に近前して、師に一掌を與ふ。師、手を拍つて笑つて云はく、「特に謂へり、胡鬚赤と、更に赤鬚胡あることを。」

無門云はく、「不落因果、甚としてか野狐に墮す、不昧因果、甚としてか野狐を脱す。若し者裏に向つて一隻眼を警得せば、僅ち前百丈驢ち得て、風流五百生たることを知得せん。」

頌に曰はく、

不落不昧、兩采一賽、

不昧不落、千錯萬錯、

### 第三 俱胝 豎指

俱胝和尚、凡そ詰問あれば唯一指を擧す。後に童子あり、因に外人問ふ、「和尚何の法要をか説く。」童子も亦指頭を豎つ。胝、聞いて遂に双を以て其指を斷つ、童子負諸袂哭して去る。胝、復之を召す、童子、首を廻す。胝、却つて指を豎す。童子忽念として「何悟す。」胝、將に順世せんとす、衆に謂つて曰はく、「吾天龍一指頭の禪を得て、一生受用不盡」と言ひ訖つて滅を示す。

【順世】 僧侶の徒を云ふ

【真靈】 支那の古説に真靈神と云ふ

【大力量】 大神あり廣大なる大華山を二分し首陽山華山

神話を以て俱胝一指頭の大力量に譬ふ。

【或庵】 或老師講

【西天胡子】 達磨

【報復】 了義分明

【問答の義】

【香堂】 初め百丈に委じ、後に山

【西來意】 南嶽大師の西天竺より東

上に來りし意志の禪宗の意義、禪宗の大意。

無門曰はく、嶺新並に童子の悟處、指頭上にあらず、若し悟處に向つて見得せば、天龍

同じく俱胝並に童子と白じと一串に穿却せん。」

頌に曰はく、

俱胝結屣す老天前、利刃單提して小童を勘す

巨靈手を搦るるに多子無し、分破す華山の千萬重

第四 胡子無鬚

無門曰はく、嶺上の胡子、世に因つてか鬚なき。

無門曰はく、世は須らく實なるべし、悟は須らく實悟なるべし。香筒の胡子、直に須

らく親見一回して始て得べし。親見と説くも早く神箇と成る。

頌に曰はく、

嶺上目前、夢を説くべからず

胡子無鬚、惺惺二僧を添ふ

第五 香嚴上樹

香嚴相向云はく、人の前に上るが如し、日に樹枝を啣み手に枝を攀ぢず、脚、樹を踏ま

ず、樹下に人あつて西來意を問はんに、對へずんば即ち他の所問に違ひ、若し對へば又喪

【若し者裏に云云】斯かる非常の場合に於て轉身自在應對することを得る者。

【彌勒】補處の菩薩にして、將來五十六億七千萬年後に出現すといふ【世尊拈華】大光天王向佛法經に出づ

【正法眼藏】無限の法實を指す【若し者】不生不滅清淨なる清淨真心

【實相無相】實相即無相、無相其體實相【教外別傳】實は一切教經其盡教外別傳の宗旨、文字音句に拘泥せず

【黃面婆塞】黃色人種の無明愚俗【字頭】者は正法眼藏と云ひて實は實實粗惡の噴は世物

【誑誑】誑は欺、誑は大叫。

身失命せん。在慈慶の時、作塵生か對へん。

無門云はく、一縷ひ懸河の辯あるも、總に用不著、一大藏教を説き得るも、亦用不著、若し者裏に向つて對得著せば、從前の死路頭を活却し、從前の活路頭を死却せん。其れ或は未だ知らずんば、直に當來を待つて彌勒に問へん。

香眞の糝糝、惡毒盡限無し  
惟僧の目を唾却して、通身に鬼眼を透しらしむ

第六 世尊拈華

世尊、昔、靈山會上に在つて、華を拈じて衆に示す。是時摩訶迦葉尊者のみ破顏微笑す。世尊云はく、「吾に正法眼藏、涅槃妙心、實相無相、教外別傳、摩訶迦葉に付屬す。」

無門云はく、「黃面の置座、傍若無人、良を壓して賤と爲し、平頂を擧げて獨肉を賣る。將に誑へり、多少の奇情と。只當時大衆驚て笑ふが如きんば、正法眼藏作塵生か傳へん。設し蓮華をして笑はざらしめば、正法眼藏又作塵生か傳へん。若し正法眼藏に傳授まりと道はば、黃面の七子、閻闍を誑誑す。若し傳授無しと道はば、甚慶としてか獨り蓮華を拏す。」

頌に曰はく、

【五巴】巴は天竺人衆の居にて、車轡を知るの意。

【道林】衆僧の集まりて講義の修行をこする専門道場。

【鐘を喚んで云々】早合點なり、鐘を撞くと云ふを聲を敲くと云ふ。

【只分明】釋は直覺なり、理窟にては不可の意。

【月庵】大溈善果開編寮に編く。

【奚仲】夏の禹王時代の人。

【雨頭を拈却】車

の雨輪を外すこと。【轡を去却】車の心棒を取ること。

花を拈起し來れば、尾尾には驚る。趙州拈頰、人天拈くこと同じ。

第七 趙州洗鉢

趙州、因に僧問云、「某甲、乍入叢林、乞ふ僧拈鉢せよ。」州云はく、「喫粥了や。」僧云はく、「鉢盂を洗ひ去れ。」其僧汗あり。僧云はく、「喫粥了や。」州云はく、「鉢盂を洗ひ去れ。」其僧汗あり。僧問曰はく、「趙州口を開いて鉢を見る、心印を露出す。若僧、車を聞いて之責ならずんば、鐘を喚んで張と作す。」

意に曰はく、

只分明に極むるが爲に、翻つて所得をして還からしむ。早く知る燈は是れ火なることを、假然することには多事。

第八 奚仲造車

月庵和尚、俗に問ふ、「奚仲車を造ること一百幅、雨頭を拈却し、軸を去却して甚麼處の事をか明かす。」

無門曰はく、「若し也直下に明め得ば、眼、流星に似、機、掣電の如くならん。」



機輪轉する處、達者猶迷ふ  
四維上下、南北東西

第九 大通智勝

【興陽】 芭蕉清に  
副ぐ。

【大通智勝佛云】  
この四句は法華經  
化城喻品の偈文。  
【老胡】 達磨を指  
す。

【神仙】 自身の本  
佛を指す。

【曹山】 名は本寂  
曹山の良价禪師に  
副ぐ。  
【清稅】 僧の名、  
孤獨貧乏  
の略。

興陽の讓和尚、因に僧問ふ、「大通智勝佛、十劫坐道場、佛法不現前、不得成佛道の時如何。」讓曰はく、「其問甚だ謙當なり。」僧云はく、「既に是れ坐道場、甚麼としてか、不得成佛道なる。」讓曰はく、「伊が不成佛なるが爲なり。」  
無門曰はく、「只老胡の知を許して老胡の會を許さず。凡夫若し知らば即ち是れ聖人、聖人若し會せば即ち是れ凡夫。」  
頌に曰はく、

身を了ぜんより何ぞ心を了じて休せんには似かん、心を了得すれば身愁へず  
若し也心身俱に了了ならば、神仙何ぞ必ずしも更に候に封せられん

第十 清稅孤貧

曹山和尚、因に僧問うて曰はく、「清稅孤貧、乞ふ僧、賑濟せよ。」山云はく、「稅關梨。」  
應諾す。山曰はく、「青原自家の酒、三盞喫し了つて、猶道ふ未だ言を沽さずと。」  
無門曰はく、「清稅機を轉く是れ何の心行ぞ、曹山具眼にして、深く來機を弄す、然も是

【范舟】 舟に客廬

【范舟】 舟に客廬

【范舟】 舟に客廬

【范舟】 舟に客廬

【范舟】 舟に客廬

【范舟】 舟に客廬

【范舟】 舟に客廬

【范舟】 舟に客廬

【范舟】 舟に客廬

【范舟】 舟に客廬

【范舟】 舟に客廬

【范舟】 舟に客廬

【范舟】 舟に客廬

【范舟】 舟に客廬

【范舟】 舟に客廬

【范舟】 舟に客廬

【范舟】 舟に客廬

【范舟】 舟に客廬

の如くなりとも、且く道へ、那委か其は閑閑、

頰に曰はく、

貧は范舟に似、氣は項羽の如し

活計無しと雖も、重く其に富を置けりしむ

第十一 州馬馬主

趙州、一庵主の處に到つて問ふ、二有りや有りや、三、拳頭を堅起す。州云はく、二水浅く

して是れ舟を泊する處にあらざるといつて便ち行く、又一庵主の處に到つて云はく、二有り

や有りや、三亦拳頭を堅起す。州云はく、二能縱能奪、能殺能活、といつて便ち作禮す

無門曰はく、二一般に拳頭を堅起す、甚麼としてか、三首を背ひ一首を背はざる。且く道へ、

諸詭甚の處にか在る。若し者真に向つて一點語を下し得ば、便ち趙州の舌頭に骨無く、其

は放倒、大自在を得ることを見ん。然し其の如くなりとも、三、筆茶をん趙州馬主、二庵主

に勘破せらるることを、若し、庵主に便ちありと流せば、其は趙州の浪を具せず、若し後

劣無しと道ふも、亦未だ其の浪を具せず

頰に曰はく、

眼は流星、機は擊電

殺人刀、活人劍

第十二 巖喚主人

【瑞巖】名は齋彦巖頭禪に嗣ぐ。  
 【惺惺】了慧分明の義。

【神異鬼面】一箇は喚底、一箇は應する底。  
 【】是は如何にの意。

【他】瑞巖をいふ。

【學道云云】此項は長沙岑の作。

【德山】名は宣靈龍峯崇信に嗣ぐ。  
 【】名は義方德山に嗣ぐ。  
 【方丈】禪僧の寢堂。  
 【】名は全德德山に嗣ぐ。  
 【大小】流石のの意。

瑞巖彦和尙、毎日自ら主人公と喚び、復自ら應答す。乃ち云はく、惺惺、惺、他時異日、人の瞞を受くること莫れ、嗜嗜。」

無門曰はく、「瑞巖老子、自ら買ひ自ら賣つて、計多の神頭鬼面を弄出す。何が故ぞ、一箇は喚ぶ底、一箇は應する底、一箇は惺惺底、一箇は人の瞞を受けざる底、忍著すれば依前として還つて不是。若し也他に似はば總て是は野狐の見解たらん。」  
 頌に曰はく、

學道の人眞を識らざることは、只從前識神を、むるが爲なり  
 無量劫來生死の本、癡人喚んで本來人と作す

第十三 德山托鉢

德山、一日托鉢して堂に下る、雪峰に、「者老漢、鐘未だ鳴らず鼓未だ響きざるに、托鉢して堂の處に向つて去る。」と問はれて、山、便ち肩丈に回る。前、巖頭に掌似す。山云はく、「大小の德山、未だ大後の句を會せず。」山、聞いて侍者をして巖頭を喚び來らしめて、問うて曰はく、「汝、老僧を背はざるか。」巖頭、密に其意を啓す。山乃ち休て去る。一日巖頭、杖して尋常と同じからず。巖頭、僧堂前に至つて掌を拏して、大笑して云はく、「且

【傀儡】 木偶の人形。

喜すらくは老漢末後の句を會することを得たり。他後天下の人、伊を奈何とせしむ。無門曰はく、「若し是れ末後の句たらば、龍頭、德山俱に未だ夢にだも思さることならん。檢點し暫ち來れば、好し一機の傀儡に似たり。」頌に曰はく、

某初の句を識得すれば、便ち末後の句を會す  
是後と最初と、是れ皆一句にあらず

第十四 南泉斬猫

【南泉】 名は普願、馬祖に嗣ぐ。

南泉和尚、因に東西の兩堂猫兒を争ふ、泉乃ち提起して云はく、「大衆、道ひ得ば即ち救ひ得ん、道ひ得ずんば即ち斬却せん。」衆、對ふる無し。泉遂に是を斬る。曉に趙州、外より歸る。泉、州に舉似す。州乃ち履を脱して頭上に安じて出づ。泉云はく、「了、若し在りせば即ち猫兒を救ひ得たらん。」無門曰はく、「且く道へ、趙州、草鞋を頂く意作麼生。若し者裏に向つて一轉語を下し得ば、便ち南泉の令、虚りに行せざることを見ん。其れ或は未だ然らずんば險。」

頌に曰はく、

趙州若し在らば、倒に此令を行せん  
刀子を奪却せば、南泉も命を乞はん

【雲門】 韶州雲門

山光奉院に居る

雪峰義存の法嗣、

雲門宗の初祖。

【洞山】 名は守初

雲門文偃に嗣ぐ。

【查渡】 地名。

【夏】 一夏九旬の

安居。

【三頓棒】 一頓は

二十棒、三頓は六

十棒。

【飯袋子】 人を罵

る意。俗語の殺つ

ぶし。

【本分の草料】 草

料は馬の食物、是

は法喜食、禪悦食

の意。

【他】 雲門。

【性堪】 樹根にあ

つさがる意。

【獅子】 雲門の洞

山におけるをたと

へ。

【擬前】 洞山の問

語を指す。

【前前】 雲門が前

日問の言。

【後前】 雲門明日

の一言。

第十五 洞山三頓

雲門、因に洞山參する次、門、問うて曰はく、『近離甚の處ぞ。』山云はく、『查渡。』門云はく、『夏、甚の處にか在る。』山云はく、『湖南の菴慈。』門云はく、『幾時か彼を離る。』山云はく、『六月二十五。』門云はく、『汝に三頓の棒を放す。』山、明日に至つて却つて上つて問訊す。

『昨日、和尚の三頓の棒を放すことを蒙る、知らず過甚處の處にか在る。』門云はく、『飯袋子』

江西湖南、便ち慙麼にし去るか。山、此に於て大悟す。

無門曰はく、『雲門、當時便ち本分の草料を與へて、洞山をして別に生機の一途あつて、

家門寂寥を致さし、一夜是非海裏に在つて、著到して直に天曉を待つて再來すれば、又他

の真に注破す。洞山直下に悟り去るも、未だ是れ性燦ならず、且く諸人に問ふ、洞山三頓

の棒、喫すべきか喫すべからざるか。若し喫すべしと道はば、草木叢林皆棒を喫すべし。

若し喫すべからずと道はば、雲門又誑語を成す。者裏に向つて明も得ば、方に洞山と一口

の氣を出さん。』

洞に曰はく

獅子、兒を教み迷子の訣、前まんと擬して跳躑して早く轉身す

草無く再び氣ぶ當頭著、前簡は軽く後簡は深し

【七條】 七條衣。

第十六 鐘聲七條

【開聲悟道】 香殿の擊竹、永明の墮

【見色明心】 釋尊の明見。靈雲見桃の聲に駭り、良く外境を支配す。

【會するときは則ち】 萬物一體平等無差別。

【國師】 慧忠國師六祖に嗣ぐ。

雲門曰はく、「世界無常に喚鬪たり。茲に因つてか、識覺裏に向つて七條を披る。」  
無門曰はく、「凡參禪學道は、初に足の聲に隨ひ色を逐ふことを。縱使聞聲悟道、見色明心なるも、也是れ尋常なり。殊に知らず寂靜家、聲に轉り色を蓋ハ、頭頭に明に、著上に妙なることを。然も聲の如くなりとも、且く道へ、聲、耳畔に来るか、耳、聲邊に往くか、直覺寂寂、雙び本するも、非に到つて如何か語評せん。若し耳を閉て聽かば、應に會し難かるべし。眼處に聲を聞いて、方に始めて得しからん。」  
頌に曰はく、

會するときは則ち事、同一家、會せざるときは萬別千差  
會せざるときは事、同一家、會するときは萬別千差

第十七 國師三喚

國師、三たび侍者を喚ぶ、侍者三たび喚ず、國師云はく、「將に謂へり、吾汝に辜負すと。元來却つて是れ汝、吾に辜負す。」

無門曰はく、國師三喚、舌頭地に墜つ。侍者三たび應ず、光に和して吐出す。國師年老い心孤にして、牛頭を按じて草を喫せしむ。侍者未だ肯て承當せず、美食飽人の滄に中ら

【因清うして云云】  
太公望の言。

【鐵枷無孔】 鐵枷  
は罪人の首を入る  
る物、無孔なれば  
用を爲さず、厄介  
者の意。

【蚌蛤】 蚌蛤は蛤  
河山が肝腸を露  
出せるを見届けよ  
の意。

【妄覺】 妄覺  
の略。

す。且く道へ、那裏か是れ他の辜負の處。因清うして才子貴く、家富んで小兒嬌る。」

頌に曰はく、

鐵枷無孔人の擔はんことを要す、累兒孫に及んで等閑ならず

門を挿へ並に戸を閉ふることを得んと欲せば、更に須らく赤脚にして刀山に上るべし

第十八 湖山三斤

湖山和尚、因に僧問ふ、如何なるか是れ嶺三斤云はく、嶺三斤云はく、

無門曰はく、湖山老人、此の蚌蛤の類に參得して、纔に兩片を開いて肝腸を露出す。然も是の如くなりと雖も、且く道へ、甚の處に向つてか湖山を見ん。」

頌に曰はく、

突出す麻三斤、言親しく意更に諷し

來つて是非を説く者は、便ち是れ是非の人

第十九 平常是道

南泉、因に趙州問ふ、如何なるか是れ道。泉云はく、平常心是れ道。州曰はく、獲つて

道向すべきや否や。泉云はく、向はんと擬すれば、即ち乖く。州云はく、擬せしんば爭か知らん是れ道なることを。泉云はく、道は知にも屬せず、不知にも屬せず、知は是れ妄覺、

【無思】 義性にあらず、空性にあるざるをいふ。  
【大患】 眞實無相の境界。

【若し問事云】 此語は平生心是れ道の息を説き去す

【松遊】 坐居なり密處成儀に制ぐ。

【大力量の人】 松遊の三轉語の中の第一第二

【口を聞く】 口を聞いて何故彼舌せざるの意

【眞金を云々】 悟道の金傷を知るには先づ言句を以て試驗すの意

【一箇の云々】 實に身體の置場なしの意

不知は是れ無記、若し道に不疑の道に達せば、爲す處の事として洞徹たるが如し。以て無思ひて是非すべけんや。趙州、言下に於て頓悟す。  
無門云はく、南泉、趙州に就問せられて、直に得たり。五智未消、分疎不下なることを。趙州、縱使情り去るも、直に參ずること三十年にして始めて得ん。

春に百花あり秋に日あり、夏に涼風あり冬に雪あり  
若し聞事の心頭に挂くる無くんば、便ち是れ人間の好時節

### 第二十 大力量人

松遊和尚云はく、大力量の人、其に因つて去脚を擡げ起さざる。又云はく、口を聞くこと舌頭上に在らず。

無門云はく、松遊語づべし、脚を傾げば根を倒すと、只是れ人の承當することを欲く。縦使直下に承當するも、正に好し無門が處に來らば痛棒を喫するに、何が故ぞ、眞金を識らんと要せば火裏に看ま。

頌に曰はく、

脚を擡げて踏踏す香水海、頭を低れて俯して視る四神天  
一箇の渾身着くるに處無し、請ふ一句を續け



第二十一 雲門屎橛

【乾屎橛】 除糞器をいふ。道は貧道より貴きはなし。

雲門、因に僧問ふ、如何なるか是れ佛、門云はく、「吃屎橛」。無門曰はく、「雲門謂つべし、家貧にして素食を断じ難し。事忙しうして草書するに及ばずと。勤もすれば便ち屎橛を將來つて、門を擗へ戸を破ふ、佛法の眞處見つべし。」

因に曰はく、閃電光、擊石火、眼を盡得すれば、已に跏趺す。

第二十二 迦葉刹竿

【迦葉】 父は飲澤母は香至。  
【阿難】 姓は刹帝利、父は斛飯王、佛の従弟なり。  
【刹竿】 寺門の前に立てる旗。  
【毘婆尸佛】 過去七佛の第一。

迦葉、因に阿難問うて云はく、「世尊、金闍衣を著ふる外、別に何物をか傳ふ。」葉、嘆んで云はく、「阿難」と。難、應諾す。葉云はく、「門前の刹竿を倒却す。」  
無門曰はく、「若し者裏に向つて一轉語を下し得て親切ならば、便ち靈山の一会無然未散なることを見ん。其れ或は未だ然らずんば、毘婆尸佛早く心を留む、直に而今に至るまで妙を得ず。」

【眼に筋を生ず】 眼を白黒さして談ぐの意。

頌に曰はく、問處は何ぞ答處の親きに如かん、幾人か此に於て眼に筋を生ず

【家儀】 内處事な

【名物】 別世界の

【色】

【六祖】 慧能大鑑

【明上座】 弘忍に

【明上座】 蒙山慧

【明上座】 弘忍に嗣

ぐ。

【黄梅】 蕪州の黃梅、五祖弘忍大師の住所。

【新嘉支】 果物の名、老婆心切の譬

「呼び弟を、家儀を揚ぎ、黄地に明を、別を、

第二十三 不思議

六祖、因に明上座、陸うて大東遊に來り。祖、明の至るを見て、即ち衣鉢を石上に擲つて云はく、「此衣は信を表す、力を以て取ふべけんず、君が將去るに任す。明、遂に之を擧ぐるに、山の如くにして動せず、即ち驚かず。明曰はく、「我來つて法を求む、衣の爲にするに非ず、爾はくは行者開示したまへ。祖云はく、「不思議、正真の時、驚箇か是れ明。上座が本来の面目。明、當下に大悟し、吐納汗流る。汝問作して問うて曰はく、「上來の密語密意の外、遺つて更に意旨ありや否や。祖曰はく、「我今汝が爲に説く者は即ち密に非ず、汝若し自己の面目を返照せば、密は尋つて汝が處に在らん。明曰はく、「某甲、黄梅に在つて業に積ふと雖も、實に未だ自己の面目を省せず。今入處を指授することを蒙つて、人の水を飲んで冷暖自知するが如し。今行者は即ち是れ某甲が師なり。祖云はく、「汝若し其の如くならば、則ち吾と汝と同じく黄梅を師とせん、善く自ら護持せよ。」

無門曰はく、「六祖謂つべし、是事は急家より出づと、老婆心切なり。譬へば新嘉支の鼓を割ぎ了り、棧を去け了つて、備が口裏に送在して、只備が嘴一嚙せんことを要するが如し。

頰に曰はく、

【描】慧明の言下に大悟せしところ  
【生受】生のまま受取る。  
【渠朽らず】世界の成壞に關係せず

【風穴】名は延沼南院惠明に關ぐ。  
【離微】離は黙の極、微は語の極。  
【不犯】絶對の境界を犯ふの意。  
【前人】問ひし僧を指す。

【歩を進め云云】口轉と理を述べれば、此に不犯の境界には關く前づ

【御出】名は慧明  
【山頂】山頂に對し  
【第三座】座は第一座に對し  
【四句】一異有無の四句。

描すれども成らず畫けども就らず、贊するも及ばず 生受することを休めよ  
本來の面目、藏すに處没し、世界壞する時渠朽らず

### 第二十四 離却語言

風穴和尚、因に僧問ふ、「語默は離微に在る、如何が不犯を通ぜん。」穴云はく、「長へに憶江南三月の裏、鷓鴣啼く處、百花香し。」  
無門曰はく、「風穴、機、掣電の如く、路を得て便ち行く、争奈せん前人の舌頭に坐して、せざることを。」若し者裏に向つて見得して親切ならば、自ら出身の路あらん。且つ語言三昧を離却して、一句を道ひ將來れ。」  
頌に曰はく、

風穴の句を露さす、未だ語らざるに先づ分付す  
歩を進めて口轉論、知んぬ君が大いに措くこと岡きことを

### 第二十五 三座說法

仰山和尚、夢に靈物のお所に往いて第三座に坐せらる。一僧者あり、白話して云はく、「今日夢に座の法に當る。山乃ち起つて白話して云はく、摩訶衍の法は四句を離れ百非を絶す、諸法皆離れといふを見る。」

【百】 四句百非  
【十萬八千】 大乘  
【】 つるの意。

【】 扱は捻衆  
【】 尚異。

【清涼】 名は文益  
【】 の始祖。羅  
【】 漢律に削ぐ。  
【一得】 一を  
【一失】 一を  
【】 失ふ。  
【一得眼】 悟道を  
【】 得たる心眼。  
【】 法眼の失  
【】 得失  
【】 文字に就  
【】 ての理窟。  
【】 谷起  
【】 日本晴の  
【】 意。  
【】 水も漏さ  
【】 意。

無門云はく、且く道へ、是れ説法するか説法せざるか。口を開けば即ち失し、口を閉づれば又喪す。口かす閉ぢざるも、十萬八千。」

頌に曰はく、

白日青天、夢中に夢を説く  
怪怪、怪怪、一衆を誑誑す

第二十六 二僧 卷 簾

清涼の大法眼、因に僧、齋前に上參す。眼、手を以て簾を指す。時に二僧あり、同じく去つて簾を奪く。眼曰はく、「一得一失。」  
無門曰はく、「且く道へ、是れ誰か得誰か失。若し者裏に向つて一隻眼を著得せば、便ち清涼國師敗國の處を知らん。然も是の如くなりと雖も、切に忌む得失裏に向つて尚量すること。」

頌に曰はく、

雀起明明として太空に徹す、太空猶未だ吾宗に合はず  
争か似かん空より都て放下して、綿綿密密風を通ぜざらんには

第二十七 不是 心 佛

【搦盡】搦は稱量  
付度ノ義  
【郎當】浮浪ノ義

【叮嚀】却つて失  
言、無言なりしを  
可とする意

【蒼海】年代久し  
き形容詞に用ふ

【龍潭】名は崇信  
過悟に副く  
【蒼蒼】潭に教を  
説ぶノ義

【可中】徳山省悟  
ノ技倆

【吾】或は教ノ字  
に作る

【佳妙】金剛經の  
註釋本

【諸の玄辯云々】  
此二句は肇論の文

南泉和尚、因に僧問うて云はく、「還つて人の與に説かざる底の法ありや、  
一葉云はく、「有り」  
り。僧云はく、「如何なるか是れ人の與に説かざる底の法、  
一泉云はく、「不是心、不是佛、不是物。」

無門曰はく、「南泉、者一問を被りて直に得たり、  
家私を搦盡して郎當少からざること

頷に曰はく、

叮嚀は君徳を損す、無言眞に巧あり  
任從あれ滄海は變ずるとも、終に君が爲に遁ぜじ

第二十八 久響龍潭

龍潭、因に徳山請益して夜に損る。潭云はく、「夜深けぬ、  
手何ぞ下り去らざる。山遂に  
珍重して庵を掲げて出づ。外面の黒きを見て、却回して云はく、「  
外面黒し。潭乃ち紙燭を  
點じて度與す。山、接せんと擬す。潭便ち吹滅す。山此に於て  
忽然として背あり、便ち作  
禮す。潭云はく、「子箇の甚密の道理をか見る。山云はく、「  
某甲、今日より去つて下ノ老  
和尚の舌頭を疑はず。明日に至つて龍潭羅堂して云はく、「  
中箇の漢あり、  
手觸樹の如く、  
口血盆に似たり、一棒に打てども頭を回さず。他時異日、  
孤峯頂上に向つて吾が道を立す  
る在らん。山遂に疏抄を取つて法堂前に於て、一炬火を將て  
提起して曰はく、「諸の玄辯を

【圖】 晋宗の關門  
【心憤憤】 不平  
【點心】 少食して  
心を飽むる意。

【匾擔】 石を爲す  
こと能はざる狀。

【前言後語】 前言  
は獨にありし時の  
言、後語は龍潭の  
處にて云ひし語。  
【龍潭】 龍潭の德  
山を接せしは兒を  
愛するに似たりと  
【他の些子】 龍潭  
の老婆心を説く。  
【名を聞かん云云】  
德山に就いての擲  
場。

窺うかがわらも、一毫いちごうを太虚たいうきに致いたすが如ごとく、世よの樞機すうきを竭つすも、一滴いってつを巨壑こおくに投なずるに似にたりといつて、疏抄しゆせうを將まさて便たち置おく、是こゝに於おて禮辭らいじす。

無門むもん曰いははく、「德山とくざん未なだ問もんを出いでざる時とき、心憤憤しんぷんぷん、口悻悻くしやうしやう、得得とくどくとして南方なんぽうに來まつて、教けう外けが別傳べつでんの旨めいを滅却めつじやくせんと云いす。潯州しゆんしゆうの路上ろじやうに到いたるに及およんで、婆子はしに問とうて點心てんしんを買かはんとす。婆云はいはく、「大德だいとく、車子しやうじの内うちは其その裏うらの文字もんじぞ」由云よしはく、「金剛經こんがうしやうの抄疏せうしゆ」婆云はいはく、「只ただ經中きやうぢゆうに道みちふが如ごときんば、過去こくわ心しん不可得ふかふく、現在げんざい心しん不可得ふかふく、未來みらい心しん不可得ふかふくと。大德だいとく、那箇なげんの心しんをか點てんせんと云いす」德山とくざん、昔むかし一間いっけんを被かつて、直ただに得えたり口匾擔くわへんたんに似にたることを。然しかも是こゝの如ごとくなりと雖いへ、未なだ背へを蒙ま子の句下くわげに向むかつて死し却しやくせず、遂つひに婆子はしに向むかふ、「近處きんぢよに甚密しんみつの宗師そうしか有ある」婆云はいはく、「五里ごりの外の外に龍潭りゆうたん和尙わじやうあり、龍潭りゆうたんに到いたるに及およんで敗闕はいけつを納なれ盡つす謂いつべし是れ前言ぜんげん後語ごごに應おせすと。龍潭りゆうたん大だいいに兒こを憐あはんで醜みにくきことを覺おぼえざるに似にたり、他の些子たのしやしの火種くわくあるを見て、郎忙らうぼうして蓮水れんすいを將まさて蕪頭うづかに一澆いちぢやうに澆ぢやう殺ころして、冷地れいちに看來みきたらば一場いちじやうの好笑こうせうならん。」

頰ほに曰いははく、

名なを聞きかんより面おもてを見みんには如ごとかじ、面おもてを見みんより名なを聞きかんには如ごとかじ、然しかも鼻孔びくうを救きうひ得えると雖いへ、乍奈しかんせん眼睛がんぎやうを護か却しやくすることを

第二十九 非風非幡

【刹幡】寺に説法ある時寺中に旗を立てつ、これを刹幡と云ふ。

【悚然】あつけに來らるるの意。

【是心の動くにあらす】心動を字の如く見るものを説む。

【鐵】二僧の風動と幡動をいふ。

【金】六祖の心動

【祖師忍俊】飛び出して仁者心動とは却つて六祖の失敗と抑揚す。

【漏逗】秘密を漏して他人に告ぐ。

【馬祖】名は道一南嶽懷讓に嗣ぐ。

【大梅】明州大梅山の法常、馬祖に嗣ぐ。

【即心是佛】迷心即佛の意。

【定盤星】秤の目星。争か知らん佛と云ふ字は聞くも汚れと抑へしなり

六祖、因に刹幡を颺ぐ。二僧あり、對論す。一りは云はく、「幡動く。」と。一りは云はく、「風動く。」と。往復して曾て未だ理に契はず。祖云はく、「是れ風の動くにあらず、是れ幡の動くにあらず、仁者が心動く。」二僧悚然たり。

無門曰はく、「是れ風の動くにあらず、是れ幡の動くにあらず、是心の動くにあらず、甚の處にか祖師を見ん。若し者裏に向つて見得し親師ならば、方に知らん二僧鐵を買つて金を得たり。祖師忍俊不禁、一場の漏逗なることを。」

頌に曰はく、  
風幡心動、一紙に領過す  
只口を開くことを知つて、話墮することを覺えず

第三十 即心即佛

馬祖、因に大梅問ふ、「如何なるか是れ佛。」祖云はく、「即心是佛。」  
無門曰はく、「若し能く直下に領略し得去らば、佛衣を著け佛眼を喫し、佛話を證き佛行を行ぜば、即ち是れ佛ならん。然も是の如くなり」と雖も、大梅多少の人を引いて、歸つて定盤星を認めしむ。争か知らん箇の佛の字を説くも、三日口を激々と道ふことを。若し是れ箇の漢ならば、即心是佛と謂くを見ば耳を掩うて便ち走らん。」  
頌に曰はく、

【賊を抱いて】恰も盜賊が盗みし品物を抱いて愚圖愚圖云々刺きものとの意。

【泰山】五臺山は女珠を組る。【善直去】眞直に行けの意。【勘婆】婆子の職座を吟味するなり

【雜經】千里外の必勝と傳る。【要はつ云云】體用に勘過せらるる

【飯裏に云云】趙州の問には砂や刺ありの意

青天白日、切に尋覓することを更に如何と問へば、賊を抱いて屈と叫ぶ

第三十一 趙州勘婆

趙州、因に僧、婆子に問ふ、泰山の黃、畫の山に向つてか去る。婆云はく、善直去、僧纔に行くと云。五尺の婆云はく、好箇の僧、又恁麼に去る。僧後に於ありて洞に擧似す。州云はく、待て、我去つて僧が與に這婆子を勘過せん。一日、便ち去つて、亦是の如く問ふ、婆も亦是の如く答ふ。州歸つて衆に謂て曰はく、泰山の婆子、我備與に勘波し了り。

無門曰はく、婆子只坐ながら、善直去を體に假して、要且つ賊を著くることを、知らず趙州老人、善く將を論み空を劫すの體を用ひて、又且つ夫人の相無し、檢點し將來れば、二り俱に過あり。且く道へ、那裏か是れ趙州、婆子を勘波する處。

頌に曰はく、  
問訊に一般なれば、答も亦相似たり  
飯裏に砂あり、泥中に刺あり

第三十二 外道問佛



【世の良馬】 鑿影を見て走り出さ良馬の意。

【鐵製上】 外道と刀削の様字。  
【階梯】 一匙直人如來地の境界。

【非心非佛】 前の即心即佛の反對。

【路に云云】 人を見て法を説けの意  
【人に云云】 人に逢うて思ふ存分音ふ勿れ。

無門關

世尊、因に外道問ふ、「有言を問はず、無言を問はず。世尊、據座す。外道贊歎して云はく、「世尊大慈大悲、我迷雲を聞いて、我をして得人せしめたまへ。乃ち禮を具して去る。阿羅漢いで佛に問ふ、「外道に何の所證あつてか賛歎して去る。世尊云はく、「世の良馬の鑿影を見て行くが如し。」

無門曰はく、「阿羅漢は乃ち鐵鎊子、寧ろ外道の見解に如かず。且つ道へ、外道と佛弟子と相去ること多少ぞ。」  
頰に曰はく、  
劍製上に行き、氷磑上を走る  
階梯に涉りて、懸崖に手を撒す

第三十三 非心非佛

馬祖、因に佛問ふ、「何なるか是れ佛。」祖云はく、「非心非佛。」  
無門曰はく、「若し吾等に向つて見得せば、佛の靈光を疑ふべし。」  
祖に曰はく、  
路に客に逢はば須らく呈すべし、詩人に遇はずんば黙すること莫れ  
人に逢うては且つ三分を説け、未だ全く一片を施すべからず

二五

### 第三十四 信不及道

南泉云、よく心は世に在らず、世は世に在らず。

無門曰はく、南泉語つべし、聽いて差を識らずと。世に世日と聞いて、世外に得ず。然

是の如くむりとなん、思ふに少し。

頌に曰はく、

天晴れて日に出で、雨降つて地上濕ふ

情を盡して都て了る、只恐らくは信不及なることと

### 第三十五 倩女離魂

五祖、祈に問うてははく、倩女離魂、那箇か是れ眞底。

無門云はく、若し者真に向つて眞底を悟り得ば、僕も知らん教を出で二教に入ることとは

旅舎に宿するが如くなることを。其れ或は未だ然らずんば、切に亂走すること莫れ。雖然

として地水火風一散せば、湯に落つる螃蟹の七手八脚なるが如くならん。那時言ふこと莫

れ、道はじと。

頌に曰はく、

雲月是れ同じ、溪山各異なり

【信不及】 如何とすること能はざるを云ふ。

【五祖】 名は法演、白雲守鶴に嗣ぐ。

【倩女離魂】 支那清河に、鑑が季女の倩娘あり、鑑の甥の王宙と許嫁の間なり。に、鑑は遠約して、倩娘は病床に就く。云の故、事あり、是れ何れの倩女を以て眞とするやと問ふなり。

【地水火風】 沸湯の中に落ちたる蟹も同様との意。

萬福萬福、是れ一か是れ二か

第三十六 路邊達道

【其れ或は云云】  
一切助一切處に眼を著すよ

【無福無福】 福を打つこと。

【言事を云云】 柏樹子の言句に拂泥する勿れ

五祖曰はく、一路に達道の人に逢はば、語黙を待て對せず、且く道へ、鉢盂を携て來對せん。無門曰はく、若し著意に前へて對得して、隨分ならば、動はす處快なまこと。其れ或は未だ然らずんば、抱恨なく一切處に對せずくべし。

頭に曰はく、

路に達道の人に逢はば、語黙を待て對せず。擲肥勞斷に擊す、直下に會せば便も會せず。

第三十七 庭前柏樹

趙州、因に僧問ふ、如何なるか是れ庭前西來意。趙州曰はく、庭前柏樹也。無門曰はく、若し趙州の答に何づく。是れ即して隨分ならば、前に擲鉢盂、後に擲勸茶し。

頭に曰はく、

言、事を展ぶること無く、語、擲に掛せず。言を承くる者は實し、句に對るは實速ふ。

第三十八 牛過窓櫺

【水牯牛云云】五祖去臘の垂示。水牯牛は大牛。人々の住する家の明窓。

五祖曰はく、「譬へば水牯牛、窓櫺を過ぐるが如き、頭角四蹄都て過りて、一塵に因つてか尼巴過ぐることを得ざる。」

無門曰はく、「若し者裏に向つて顛倒して一雙眼を著得し、一轉を下り得ば、以て上四恩を報じ下三有を責くべし。其れ或は未だ然らずば、更に須らく尼巴を照晒して始めて得べし。」

【過る上れば云云】過退谷るの意。

過去れば坑塹に墮ち、回り來れば却つて壞らる者等の尼巴子、直に是れ甚だ奇怪なり

第三十九 雲門話墮

【眼攝】石鏡楚圓に參す。  
【話墮】失言なり  
【死心】黃龍の死心悟新。晦堂祖心に嗣ぐ。  
【自救不了】自己の身の取り廻しにも困蕪すの意。

雲門、因に僧問ふ、「光明寂照遍河沙。」一句未だ絶せざるに門遽に曰はく、「豈是れ張拙秀才の語にあらずや。」僧云はく、「是。」門曰はく、「話墮せり。」後來死心拈じて云はく、「且く道へ、那裏か是れ者僧、話墮の處。」

無門曰はく、「若し者裏に向つて雲門の用處孤危、者僧甚に因つてか話墮すと見得せば、人天の奥に師と爲すに堪へん、若し也明めずんば、自救不了。」

【急流云々】雲門の釣針に掛けられしをいふ。

【山】名は雲南百丈に同じ。淨師宗の號。  
【典故】故事を可る。

【首座】華林の善覺。  
【木杓】木の椀。

【圖圓】物を圍むの義。  
【重に傾云々】典座の時はおく、湖山の時は傾かゝらず。  
【盤盂】款事に用ふる切発。  
【策】款事用の器具。

頤に曰はく、急流に釣を垂る、餌を食る者は著く、口縁縁に聞かば、性命突却せん。

### 第四十 懸倒淨瓶

溪山和尚、給め百丈の會中に在つて典座に充つ、百丈將に大罵の主人を遣はんとす、乃ち請じて首座と同じく案に對して下誦して、出俗の者往くべし。百丈遂に淨瓶を拈じて、地上に置いて問を設けて云はく、「喚んで淨瓶と作すことを得され、汝喚んで此案とか作さん、首座乃ち云はく、「喚んで木杓と作すべからず。百丈却つて山に問ふ、山乃ち淨瓶を懸倒して去る。百丈笑つて云はく、「第一座、山子に懸却せり。因つて之に命じて問由と爲す。

無門曰はく、「溪山一明の境、争奈さ左百丈の問圓を懸り出でさること。檢點し將來れば、重に傾して案に便せず。何が故ぞ、善盤盂を單得して飯盂を拈起す。頤に曰はく、

策師並に木杓を懸下して、常陽の一突問處を疑す。  
百丈の重圓、傾れども住らず、轉全超出して佛座の如し。

【三祖】 二祖慧可

【缺齒】 達磨は毒藥の爲に齒を抜くと云ふによる。

【六根不具】 慧可大師の斷臂。

【喊】 大呼の意。

【謝三郎】 玄沙師備に達磨不來東土の語あり。

【擲垢】 慧亂の意達磨を抑下す。

【女子出定】 諸佛要集經に出づ。

【文殊】 文殊は根本の大智、七佛の師なり。

【三昧】 梵語正定又正受、深く座禪三昧に入るを指す。

第四十一 達磨安心

達磨面壁す、二祖雪に立つ。雪を斷つて云はく、弟子未だ安からず、乞ふ無安心せしめよ。磨云はく、「心を將來れ、汝が爲に安せん。」祖云はく、「心を質むるに、了に不可得なり。」磨云はく、「汝が爲に安心し置んぬ。」無門曰はく、「缺齒の老胡、十萬里海に航りして轉特として來る。謂つべし是れ風無きに浪を起すと。末後に一箇の門人を獲得するに、又却つて六根不具、唵。謝三郎四字を識らす。

頌に曰はく、

西來の直指、事は囑するに因つて起る  
叢林を撓聒する、元來是れ佛

第四十二 女子出定

世尊、昔、因に文殊、諸佛の集る處に至つて、諸佛各本處に還るに値ふ、惟一りの女人有つて、彼佛座に近いて三昧に入る。文殊乃ち佛に白して云はく、「何ぞ女人は佛座に近くことを得て、我は得ざる。」佛、文殊に告げたまはく、「汝但此女を覺して三昧より起たしめて、汝自ら問へる。文殊、女人を遶ること三匝、指を鳴すこと一下して、乃ち托して梵

【同明】 初地の菩薩。

【小小云云】 一場の大活劇を演じたる意。

【業護云云】 煩惱妄想即ち大禪定の當體の意。

【那伽】 龍と翻ず座禪の行相の嚴格を形容す。

【渠儂】 世尊を指す。

【首山】 名は念、風穴延沼に嗣ぐ。

天に至つて、其神力を盡せども出ずること能はず。世尊云はく、「假使百千の文殊も亦此女人の定を出すことを得じ、下方一十二億河沙の國土を過ぎて、罔明菩薩あり、能く此女人の定を出さん。」須臾に罔明大士、地より湧出して世尊を禮拜す。世尊、罔明に勅す、却つて女人の前に至つて指を鳴らすこと一卜す。女人是に於て定より出づ。

無門曰はく、「釋迦老子、者一場の雜劇を做す、小小を遁せず、且く道へ、文殊は是れ七佛の師、甚に因つてか女人の定を出すことを得ざる。罔明は初地の菩薩、甚としてか却つて出し得る。若し者裏に向つて見得し親切ならば、業識忙忙として那伽大定たらん。」

頌に曰はく、

出不得、渠儂自由を得たり

神頭並に鬼面、敗鬪當風流

第四十三 首山竹篋

首山和尚、竹篋を拈じて衆に示して云はく、「汝等諸人若し喚んで竹篋と作さば則ち驚る、喚んで竹篋と作さざれば則ち背く。汝諸人、且く道へ、喚んで竹篋と作さざれば則ち驚る、無門曰はく、「喚んで竹篋と作さば則ち驚る、喚んで竹篋と作さざれば則ち背く、有語することを得ず、無語することを得ず。速かに道へ、速かに道へ。」

頌に曰はく、

【竹筥】一奉の竹筥にて殺者自盡の命を下すなり。

【芭蕉】傳説に芭蕉山の博古とす、法を南塔の傍に嗣ぐ。

【拄杖子】自己の本分を示すの具となす。僧の持つ所。

【掌握云々】諸師の深淺も分明なりとの意。

【東山】法演なり無門は其五世の孫

竹筥を拵りして、殺活の命を行す  
音圖交馳す、佛祖も命を乞ふ

第四十四 芭蕉拄杖

芭蕉和尚、家に示して云はく、偏に拄杖子あらば、我佛に佛杖子を與へん、偏に拄杖子無くんば、我佛が拄杖子を與へん。

無門曰はく、一拵つては四隣の水を過ぎ、伴つては無月の村に歸る。若し喚んで拄杖と作さば、地獄に入ること箇の如くならん。二  
偏に曰はく、

諸方の深と淺と、都て掌握の中に在り  
天を撐へ並に地を打ふ、處に隨つて宗風を振ふ

第四十五 他是阿誰

東山演師祖曰はく、釋迦彌勒は猶是れ他の奴、且く道へ、他は是れ阿誰ぞ。一  
無門曰はく、一若し也他を見得して分曉ならば、譬へば上宇街頭に親希に撞見するが如きに相似たり、更に別人に問うて、是と不是とを道ふことを須ひざれ。』

偏に曰はく、



【他の弓云云】他と云ふと雖も外に求むること勿れ。

【石霜】名は慶諸道吾山阿智に嗣す【古德】長沙岑輝

【瘦】力を入るる時の詞。

【頂門の眼】第一義の心照

【兜率性】名は梵天【寶壽】克文に嗣す【養草】徧歴の體

他の弓を挽くこと莫れ、他の馬に騎ること莫れ、他の非を辯ずること莫れ、他の事を知ること莫れ

第四十六 竿頭進歩

石霜和尚云はく、「百尺竿頭何が歩を進めん。」又古德云はく、「百尺竿頭に坐する底の人、然も得人すと雖も、未だ眞と爲さず、百尺竿頭に須らく歩を進めて、十方世界に全身を現すべし。」

無門曰はく、「歩を進み得身を翻し得ば、更に何の處を嫌つてか驚と稱せざらん。然も是の如くなりと雖も、日く道へ、百尺竿頭何が歩を進めん。」

頌に曰はく、

頂門の眼を瞎却して、錯つて定慧星を認む  
身を擲て能く命を捨つ、一盲衆首を引く

第四十七 兜率三關

兜率性和尚、三關を設けて學者に問ふ、「養草參玄は只見性を圖る、即今上人の性、甚の處に在る。」自性を識得すれば方に生死を脱す、明光落時作麼生か脱せん。生死を脱得すれば便ち去處を知る、四大分離して甚の處に向つてか去る。

【邊遠云云】 吟味して修行せよの意

【一念】 一念は正念、正念は無念

【乾峯】 洞山良价に嗣

【十方薄伽梵云云】 十方皆是れ佛の義

【一人云云】 一人は乾峰、他の一人は雲門

【直底】 直は眞の誤り

【正眼云云】 以下無門和尚が本分の位地に立ちて二師を抑下す

無門曰はく、若し能く此の轉語を下し得ば、便ち以て處に隨つて主と伴の、縁に遇うて  
宗に即すべし、其れ或は未だ然らずんば、邊遠は飽き易く、細咽は飢ゑ難し

頌に曰はく、  
一念普く觀ず無量劫、無量劫の事即ち如今  
如今箇の一念を觀破すれば、如今觀る底の人を觀破す

第四十八 乾峯一路

乾峯和尚、因に僧問ふ、十方薄伽梵、一路涅槃門、未審し踏頭甚空の處にか在ら、一峯、  
拄杖を拈起して劃一劃して云はく、者裏に在り、後に僧、雲門に請益す、門、扇子を拈  
起して云はく、扇子、舞跳して、十三天に上つて、帝釋の鼻孔に塞著す、東海の鯉魚、打  
つこと一棒すれば雨盆の傾くに似たり。

無門曰はく、一人は深深たる海底に向つて、行いて簾士搗壓し、一人は高高たる山頂に  
於て、立つて白浪滔天す。把定放行、各一隻手を出して宗乘を拏緊す、大いに兩箇の馳子  
相撞著するに似たり。世上直底の人無かるべし。正眼に觀來れば、二大老、總に未だ路頭  
を識らざること有り。

頌に曰はく、  
未だ歩を舉せざる時先づ已に到る、未だ舌の動せざる時先づ説き了る

【著者】一手一手に先手を取る。【款に據つて案に結す】罪人の自狀を記して草案を作る如く、古人の語句を其儘録する意【聯蓋云云】四十八則盡く古人の至言至語なる所以をいふ。

【白雲】名は守端揚岐方會に嗣ぐ。【赤土云云】清淨なる赤土に牛乳を塗りしために汚穢となりしをいふ。

【無門を云云】我を鈍置の漢となさん。【涅槃の心云云】一枚悟りは成るも事事物物に當つて應用利かずの意。

【樂横】暗證狂禪者流【禪機】聲を曲解する者に對する諷刺【默照】漸人の禪【思善云云】有漏染法。

直儼著者機先に在るも、更に須らく向上の竅あることを知るべし

從上の佛祖の垂示の機縁、款に據つて案に結す、初めより利語無し、聯蓋を掲顯し眼晴を露出して、背て諸人直下に承當して、他に從つて覓めざらんことを、若し是れ通方の上士ならば、纔に擧著するを聞いて便ち落處を知らん。了に門戸の入るべき無く、亦階級の昇るべき無く、臂を掉つて關を度つて關吏を問はじ。豈見ずや、玄沙の道ふことを、無門は解脫の門、無意は道人の意と。又白雲道はく、明明として道ふことを知る、只是れ者箇、甚麼としてか透不過なること。恁麼の說話も是れ赤土牛糞を揉る。若し無門關を透得せば、早く是れ無門を鈍置せん、若し無門關を透り得ずんば、亦乃ち自己に辜負す。謂ゆる涅槃の心は曉め易く、差別智は明る難し。差別智を明め得ば、家國自ら安寧ならん。時に紹定改元解制前五日 楊岐八世の孫無門比丘慧開謹んで識す。

禪

箴

規に循ひ矩を守るは無繩自縛、縱橫無礙なるは外道魔軍、存心澄寂は默照の禪、恣意忘縁は深坑に墮落す、惺惺不昧は常鎮擔擔、思善思惡は地獄天堂、佛見法見は二鐵圍山、念起即覺は精魂を弄する漢、无然習定は鬼家の活計、進むときんば即ち理に迷ひ、退くと

きんば即ち宗に専く、進まず退かざる有氣の人、凡く道へ、如何に難其人、努力をて今生に就らく了すべし、永劫に餘孽を受けしむること莫れ。

【黄龍】 名は道源石門に別

【枕頭背後】 道吾の雲岩に答ふる語通身是れ手なるがため摸り損じなし

【楊岐云々】 無門は楊岐派なり、文意は五帝三皇何物ぞの意。

【五祖云々】 五祖弘忍の前世の因縁

黄龍三關

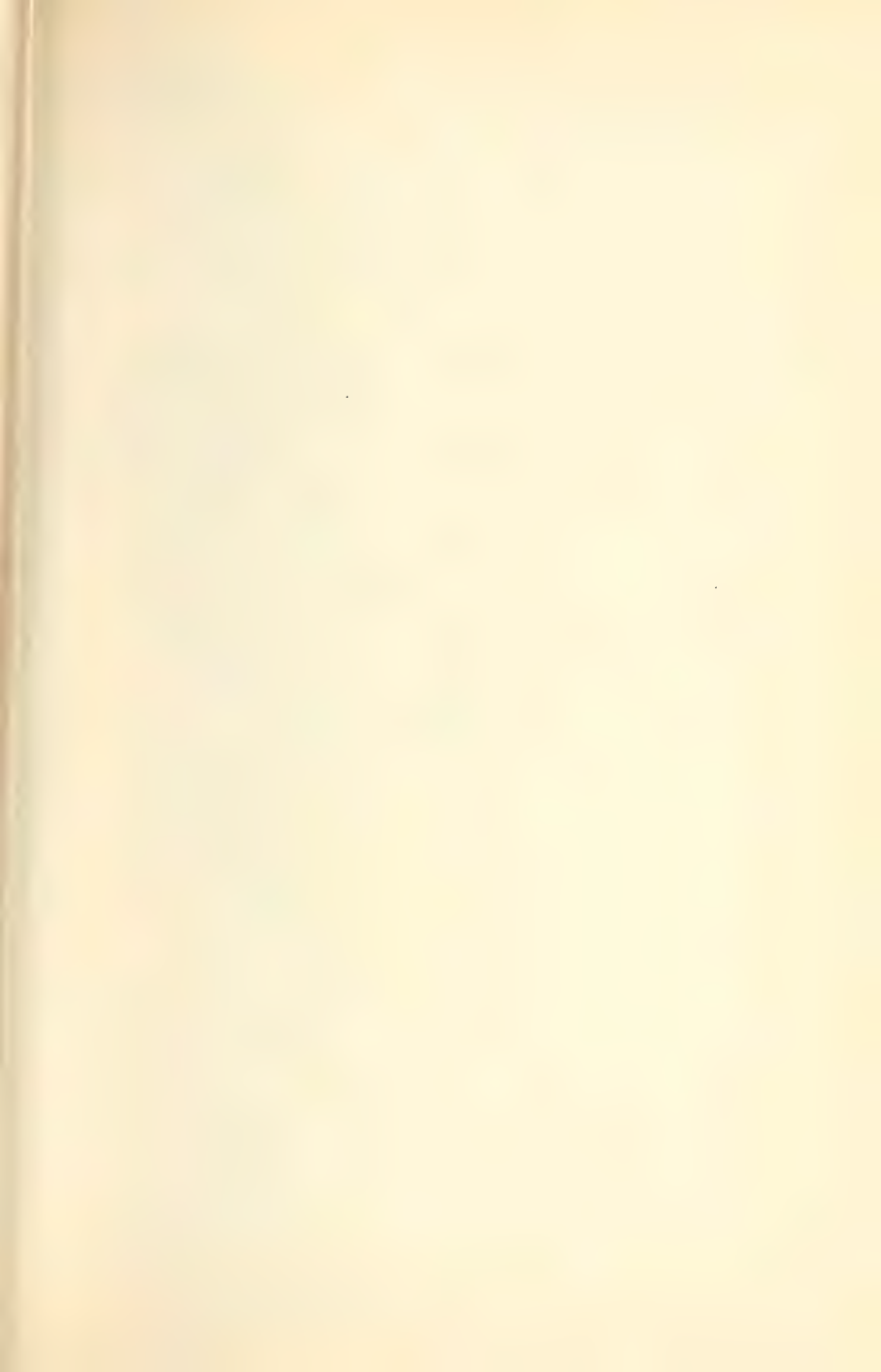
我手、我手と何似。枕頭背後を摸り侍たり  
我脚、我脚と何似。未だ歩を舉せざるは精進す  
四海に横行するに一任す、倒に楊岐の一言に對る  
人人箇の生縁あり、各各機先を透す  
那吒骨を折つて女に還す、五帝三皇の縁に信らんや  
我手驢鼻生縁、佛に非ず道に非ず、に非ず  
怪むこと莫れ無門關、險なること獅子の深窟と結盡す  
瑞巖近日無門あり、繩床に擲向して古今を待す  
凡聖の路頭俱に截斷す、衆多の響聲か雷音を起す  
無門首座を請じて立僧とす、山僧をもて謝し奉る。

紹定庚寅春

無門關終

（小字）

五家正宗贊



【五家】 臨濟、曹洞、雲門、法眼の五宗を指す

【聖人の門に云云】 孟子の語なり

【閨門】 高貴の婦人の意

【軟紅】 貴妃の着る錦襪の類

【女機】 宗門の玄要、管轉は頓機

【管】 佛祖

【白黒相次ぎ】 白黒と青と相次ぐ。色彩る。具眼の桶僧。

### 希叟和尚五家正宗贊并序

聖人の門に游ぶ者には言を爲し難しと。此れ特に閨門の兒女子、軟紅襪、地を踏んで痛みを怕るるの論なり。又焉んぞ參學の法と爲るに足らんや。衲僧家、千聖の頂巔に玄機を管轉し、鐵面皮を翻して、箒も也識らず。一機を示すときは大火聚の如く、一言を用すときは生鐵槩の如し。備が近傍の處なく、備が咬嚼の處なし。古今を針砭して必死の疾を活す、又何の聖をか稱すべく、何の門にか游ぶべく、何の言をか忌むべき、終日言ひて盡く道なり。言天下に滿ちて口の過なし、或は真或は假、或は抑或は揚、曲げて具奥を盡す、實も勸節にも非ず、寔も窮節にも非ず、抑も人を靠礙るに非ず、揚も善を擧ぐるに非ず、黠を息め剛を補ひ、鉤を裁り兇を續ぐ、倒用横施し、著著出身の路あり、骨て桎梏籠檻せられて、分甘して淺丈夫とならんや。愚、生や魯なり、瘦藤に月を挑げ、破笠に雲を包む、江湖に奔走すること幾ど五十歳、透關の眼未だ甚大明かならず、至理の言未だ甚だ的しからずと雖も、然も古人不恰好の處に於て略滌染を窺ふ。試に五彩を將て太虚を翻繖す、其力を量らざるに似たり。前に謂ゆる褒貶抑揚、當に金鐘磬を刮つて語を出せば、群を驚かす者を俟つて、重ねて爲に點發すべし。然りと雖も翠嵐の眉心、寧る地に抱くことを免れんや。

西蜀の北丘相公自拜して靈隱寺の住持に當す。

【靈祐】宋の理宗皇帝の年號。  
【希叟】西蜀の人、無學に嗣ぐ。  
【靈隱寺】方丈の額。



此書は支那四明  
 禪師が初祖を首と  
 して臨濟、曹洞、  
 雲門、馮濟、法眼  
 の五家の略傳を七  
 十人の略傳に證辭  
 を付し、五家の宗  
 風を一日瞭然たる  
 ものなり

# 希叟和尚五家正宗贊

## 初祖菩提達磨大師

師は南印度香至上の子なり。姓は刹帝利。本名は菩提多羅。因に、二十七祖般若多羅尊  
 者、行化して本國に至る。其王無價の寶珠を施す。時に王に三子あり。尊者其所得を試み  
 んと欲して、施す所の珠を以て三子に問うて曰はく、「此珠闇明なり、能く此に及ぶもの  
 ありや否や」と曰はく、「此は是れ眞寶、未だ上と爲るに足らず、諸寶の中に於て法寶を上  
 とす。此は是れ世光未だ上とするに足らず、諸光の中に於て智光を上となす。此は是れ世  
 明未だ上とするに足らず、諸明の中に於て心明を上となす。此珠、光明なれども自ら  
 照すこと能はず。要す智光を假りて此を光照せんこと、眞に眞を所じ已つて即ち是れ珠な  
 ることを知る。眞に是れ珠なることを知つて、即ち眞寶なることを明す。若し眞寶を明む  
 れば、眞自ら眞ならず、若し其眞を辨ずれば珠自ら珠ならず。眞自ら珠とせざれば  
 要す智珠を假りて、而して世珠を辨ず。眞自ら眞ならざれば即ち智寶を假りて以て法寶  
 を明めん。と。然らば即ち師に其眞あれば、其寶即ち現す。衆生に道あれば心寶も亦然  
 り。尊者其辨慧なることを歎じて、改めて菩提達磨と號す。吾宗厭世の後に及んで遂に出  
 家しぬ。師六宗を降す、一には有相と曰ひ、二には無相と曰ひ、三には定慧と曰ひ、四に

は或行と曰ひ、五には無得と曰ひ、六には寂靜と曰ふ。後に異見王の三寶を毀滅するに値ふ。弟子宗勝と云ふものあり。潛かに王の肩に至つて廣く法要を説き、往返稱請す。師懸に宗勝が義墮することを知つて、遽に波羅提に告げて曰はく、「汝速かに去ふべし。羅提稟して云はく、「羅提はくは神力を假らん。言ひ已つて雲、足下に生ず。王の前に至つて默然として住す。時に王正しく宗勝に問ふ、忽ちに羅提が雲に乗じて至るを見て、愕然として其問答を忘る。曰はく、「雲に乗ずる者は、量れ正か、是れ邪か。答へて曰はく、「我邪正に非ず、來つて邪を正にす、王の心若し正しければ我に邪正無し。王驚異すと雖も、而も慢心方に熾なり、即ち宗勝を擯して出さしむ。羅提曰はく、「王既に有道なり、何ぞ沙門を擯する。我解なしと雖も羅提はくは王問を致せ。王終つて問うて曰はく、「何者が是れ佛。」答へて曰はく、「見性是れ佛。王曰はく、「師見性するや否や。答へて曰はく、「我佛性を見る。」王曰はく、「性何れの處にか在る。答へて曰はく、「性は作用に在り。王曰はく、「是れ何の作用ぞ。我今見ず。」答へて曰はく、「今見、作用す。王曰ら見ず。王曰はく、「我に於て有りや不や。」答へて曰はく、「王若し作用せば是ならざる有ることなけん、王若し用ひずんば體も亦見難し。王曰はく、「若し用ふる時に當つて幾處にか出現する。答へて曰はく、「若し出現する時、當に其八あるべし。王曰はく、「其八の出現、當に我爲に説くべし。羅提、偈を説いて曰はく、「胎に在りては身れたりとなす、世に處しては人と爲り、眼に在りては見と曰ひ、耳に在りては聞と曰ひ、鼻に在りては香を辨じ、目に在りては談論し、手に在りては

執提し、足に在りては運奔す、週く現すれば俱に沙界を該ね、收攝するときはは一微塵に在り、識る者は是れ佛性なることを知る、識らざれば喚んで精魂と作す。王偁を聞き已つて心即ち聞悟し、乃ち前非を悔謝し、法要を咨詢す。師一日曰はく、「吾赤縣神州を觀るに、大根器あり。遂に海を踰え漢を越えて法の爲に人を求む。初め至つて梁の武帝に見ゆ。帝問ふ、「如何なるか是れ聖諦第一義。師曰はく、「廓然無聖。帝曰はく、「一朕に對する者は誰ぞ。師曰はく、「不識。帝契はず、遂に簾を折つて江を渡つて少林に至り、面壁九年、二祖を深雪の中に得たり。曾て謂て曰はく、「外諸縁を息め、内心喘ぐことなし。心體覺の如くにして以て道に入るべし。」と。後に衣を傳へ偁を付して曰はく、「吾本蠶士に來つて法を傳へて迷情を救ふ、一花五葉を聞いて結果自然に成ず。流支光統數教業害を加ふ。第六度に至つて遂に救はず。識して曰はく、「江樺玉浪を分つ、管炬金氣を聞く、五口相共に行く、九十にして彼我なし。師縁の盡くることを知つて、天竺に返らんと欲し、弟子をして各共志を言はしむ。道副は皮を得、總持は肉を得、道育は骨を得、二祖は髓を得たり。師入滅の後、熊耳に葬る、後に宋雲西域に使用して還る、師に葱嶺に遇ふ。師を見るに手に隻履を携へて返る。歸つて帝に奏す。曠を聞くに果して空棺隻履の存するを疑る。

贊に曰はく、

降準龍顏、碧瞳天の相あり

金輪を棄て瓊道の爲に出家す。寶珠を弄じて阿師と相抗す

【相抗】抗はたてつゝの意。

屋敷を生中、弟子を擧げて置見の罪を除く

香道を嗣す、香園の六宗の誘を嗣すに從す

幽州赤松大禪の根を獲す。東土西で物類の相を以す

廓然無聖、龍溪に過つて一盃水を續る

空圓として心を離す、東嶺に在して九年衆を聚る

一花五葉を聞くと、迦旃の八衆を説するに從す

語一塵斷と傳る、甘肅の玉温を分つを笑ふ

徳の如く草の如し、誰か行て外別内に行らん

鶴を分ち皮を分つ、正に好しす中の精神を喚するに

死を許つて忙しく笠履を携へて歸る。情しい故大唐國一時の人、眼を開いて海見に欺誰せらるること

曹溪六祖大鑑禪師

師諱は慧能。韶州の人。俗姓は龐。家貧しうして樵采して以て給す。一日樵を負うて市に至る。金剛經を誦するを聞き、魔無所住而生其心の處に至つて、悚然として客に問うて曰はく、此は何の法ぞや。何人にか得たる。客曰はく、此は金剛經と名く。黄梅の忍大師に得たり。師遂に其母に白す。黄梅に至つて五祖に謁せんこと。祖曰はく、汝何れよりし

【黃梅】 韶州。

【槽廠】 碓房。米  
搗部屋。  
【北秀】 五祖の高  
足禪秀。

【披剃】 衣を披き  
頭を剃り、弟子と  
なる。

【疑似】 似は呈制  
の似しめすこと。

てか來る。曰はく、嶺南。祖曰はく、何事を須めんと欲す。曰はく、惟作佛を求む。祖曰はく、嶺南の人佛性無し、若爲が作佛せん。曰はく、人に南北あるも佛性豈然らんや。祖之を異とし、乃ち曰はく、槽廠に着き去れ。と。師して退く。遂に石を負うて米を舂く。後に人、北秀の頌を學するを聞く、曰はく、身は菩提樹に似て心は明鏡臺の如し。時時に勤めて拂拭せよ、塵埃を惹かしむることなかれ。師即ち人を備うて偈を其傍に書して曰はく、菩提木樹なし、明鏡亦臺に非ず。本來無一物、何れの處にか塵埃を惹かん。祖因に衣鉢を付して、潛かに大庾嶺に至らしむ。明上座之を逐ふ、師衣を以て石上に置いて曰はく、此衣は信を表す、力を以て争ふべけんや。明曰はく、我來つて法を求む、衣の爲にするに非ざるなり。師曰はく、不思善不思惡、正恁麼の時如何が是れ明上座が父母未生以前、本來の面目。明、大悟す。師、儀鳳元年丙子正月八日に於て南海に歸る。印宗法師の法性寺に於て經を講ずるに還うて、僧の風幡を講ずるを聞くに、一りは風動くと云ひ、一りは幡動くと云ひ、これを争うて已まず。師曰はく、俗流の轍く高論に預ることを容すべけんや否や、直ちに風幡の動くに非ず、自心を動ずるのみと云ふを以てす。印宗之を聞いて遂に輿に披剃す。韶州の刺史韋據大梵寺に請じて法論を轉じ、并に無相心地衣を受く。門人紀錄して日けて壇經と爲す。南嶽の讓和尚、因に嵩山の安和尙之を嘗發す。乃ち直に語つて師に參す。師問うて曰はく、什麼の處より來る。師曰はく、嵩山より來る。師曰はく、什麼物か恁麼に來る。曰はく、一物を説似するに即ち中らず。師曰はく、遣つ

【早晚】 いつかの  
意

【石壁】 壁はぶら  
まけるなり 初祖  
の耳に壁を環或扇  
壁とあり、若同じ。

て修證を假るや否や、師曰はく、修證は即ち無きにあらず、汗染すること即ち得ず。師曰はく、即ち此不汗染、諸佛の修證する所、汝眞に是の如し、吾も亦是の如し」と。青原和尚師に參じて問うて曰はく、「當に何の所務か即ち階級に落ちざるべき、師曰はく、「汝曾て什麼をか作し來る。原曰はく、「聖諦も亦爲さず。師曰はく、「何の階級にか落つる。原曰はく、「聖諦だも尙爲さず、何の階級かこれあらん。師深く之を責ふ。師曰はく、「爾に頓寂せんとするときに新州に往かんと欲す。原曰はく、「師此より去つて早晚却回せん。師曰はく、「葉落ちて根に歸す、來時口無し。又偈を説いて曰はく、「心地諸種を舍む、普雨に悉く皆生ず。頓に花情を悟りばつて、菩提の果自ら成ず」と。

贊に曰はく、

雲日の心宗、嵩南の盤石

一字書を識らず、探善母の奉を勤む

黃梅の確頭襟に和して搗き出す。石墜ちて腰の輕きを覺ゆ

新州市上平地に擲翻す、擔折れて柴の重きを知る

鯨魚の眼睛光轉體、明上座の衣鉢の爲に争ふことを厭る

毒蛇の口氣冷水氷、即宗の僧風幡の動するに非ざることを斥る

汗染すること得ず、南岳の家財を蕩かして一物無し

瓊諦すら尙爲さず、青原の波浪を鼓して下流湧く

【村猶塵】村はるなか。猶塵は巖表の左右にある夷なり。  
【死款云云】死罪に定りし口書きなり、翻し難しはしなほされぬなり。  
【劈箭】矢をきつてはなつ。劈は劈をかたどる。

作家の爐竈を聞く、村に幾塊の精金をか收む。成帙の壇經を説く、臭皮囊許多の骨董をか盛る。葉落ち根に歸す來時口無し、死款翻し難し。地諸種を含んで普爾に皆生ず、眼を聞いて夢を説く。千古曾溪鏡樺清し、劈箭殺流の邊に非ずんば、浸殺する底は何の用を作すに堪へん。

### 江西馬祖禪師

師諱は道一。漢州什邡の人。姓は馬氏。容貌奇異にして、虎の如く視、牛の如く行く。法を南岳に得たり。後蜀に歸る。蜀人喧しくレを迎ふ。溪邊の婆子云はく、「將に謂へり、何の奇特か有る、元是れ馬祖家の子なり。祖遂に曰はく、君に勸む郷に還ること莫れ、郷に還らば道成せず、溪邊の老婆子我舊時の名を喚ぶ。」再び江西に還る。西天の二十七祖般若多羅、識して云はく、「金剛一粒の栗を啣かことを解して、十方の羅漢僧に告養す。」祖南嶽に謂つて云はく、「爾後一馬駒を出して天下の人を踏殺し去ることを在らん」と。行華、獵を爲せし時、師の庭前より過ぐ。師見て問うて曰はく、「汝は是れ何人ぞ。」曰はく、「獵者。」師曰はく、「汝射を解するや否や。」曰はく、「射を解す。」師曰はく、「汝一箭に幾箇をか射る。」曰はく、「一箭に一箇を射る。」師曰はく、「汝は射を解せず。」曰はく、「和尚射を解するや否や。」師曰はく、「射を解す。」曰はく、「一箭幾箇を射る。」師曰はく、「一箭に一箇を射る。」曰

「渡來」さき程、  
「ましましがたの意。

はく、「彼此生命なり、何ぞ他の一翳を射ることを用ひん。」師曰はく、「汝既に其の如きことを知らば、何ぞ自ら射ざる。曰はく、「若し某甲をして自ら射しめば、直に是れ手を下す處無けん。師曰はく、「普賢魔劫の無明、一時に心に息お、遂に弓箭を擲つて師に投じて出家す。師百丈と行く次、水鴨を見る、師問ふ、水鴨子何れの處に在る。丈曰はく、「飛び過ぎ去れり。師遂に丈の鼻を抱る、丈痛の聲を作す。師曰はく、「又道ふ、飛び過ぎ去ると。」丈乃ち省あり、遂に寮中に歸つて大いに哭す。同事問うて曰はく、「何の事か有る。」丈曰はく、「汝去つて和尙に問へ。同事方丈に往いて問うて曰はく、「知らず海侍者何事有つてか哭する、某甲をして來つて和尙に問はしむ。」師曰はく、「汝自ら去つて他に問へ。同事歸つて問ふ、丈大いに哭ふ。同事曰はく、「浦來は哭し、而も今は笑ふ。是れ什麼の時如何。」師曰はく、「汝が一口に西江水を吸盡せんことを待つて、即ち汝に向つて道はん。士人ぞ。」師曰はく、「汝が一口に西江水を吸盡せんことを待つて、即ち汝に向つて道はん。士此に於て省あり。師百丈、南泉、智藏と月を畫ぶ次、師曰はく、「正恁麼の時如何。」藏曰はく、「正好修行。」丈曰はく、「正好供養。」南泉拂袖して便ち行く。師曰はく、「經は藏に歸し、禪は海に歸す、唯普願のみ有つて獨り物外に超ゆ。後寂を泐潭に示す。

贊に曰はく

虎視牛行、虬峯鐵面

善提達磨の心宗を滅し、般若多羅の懸議に應す



【聖殺】 聖は菜と同音、にぎりこぶしにて突くなり。

金蓮一粒の粟を喰むことを解す、鶴葉清かに廟す

馬駒天下の人を踏殺す、惡聲掩ひ難し

鹿を射て石韋無明の薄除を印す。鴨を過して百丈の鼻頭を將て捏轉す

江を吸ふ口、龐公を聖殺し

月を翫ぶ機、普願を坑埋す

八十四人阿鞞轆、團を成して假驢脊上の蒼蠅の如し

七千餘里走つて區區、人に馬箠箕家の小回と喚ばる

赤手にして曹溪の正脈を返す、古今宗派を分つて滔滔たり

即心臨濟の克家を得、兒孫傳燈に上つて袈裟たり

稽首す眞空の大法王、蕩蕩乎として民得て稱すること無けん。踪山を信めんと疑すれば太

虚の閃電

南嶽石頭禪師

師は青原に嗣々、師は希遷、端州の人。姓は陳氏、俗に在りし時、毎に滄澗の民の浮記多きことを厭うて、輒ち牛を畜ひ祀を興つて歸る、耆老禁すること能はず、師青原に參す。原、書を馳せて南嶽に與へしとて曰はく、汝書を達し了つて速かに吾に回れ、爾の鉗斧あり、汝に與へて住山し去らしむを二師被に至つて未だ書を呈せず、便ち問ふ、諸聖をも慕

【原し】原はゆめはんじの事なり。原は推原と決す。

【竿木云云】あるわをすることなり。唐上りあるわざは竿木等を持ちあるく。

はず、已(い)まをも重(おも)きざる時(とき)何(なに)ぞ。祖(そ)曰(いは)く、「子が問(と)ふ、大(だい)高(こう)生(せい)何(なに)を向(む)下(げ)に問(と)はざる。」師(し)曰(いは)く、「須(す)る本(ほん)劫(きやく)に沈(しん)没(ぼつ)すべくとも、諸(しよ)聖(せい)の解(げ)脱(だつ)を求(もと)めじ。誤(ご)便(べん)ち休(やす)す。師(し)曰(いは)く、原(げん)問(と)うて曰(いは)く、「子上(じやうじやう)ること未(ま)だ久(ひさ)しからず、問(と)はさずして進(しん)ずるや否(いな)や。」師(し)曰(いは)く、「信(しん)も亦(また)進(しん)せず、書(しよ)も亦(また)進(しん)せず、去(き)りし時(とき)和(わ)尚(じやう)の首(くび)の鬚(す)斧(き)を許(もと)すことを蒙(まう)る。便(べん)ち問(と)ふ、原(げん)一(いつ)足を垂(た)る、師(し)禮(らい)行(ぎやう)す。異(い)日(にち)に問(と)ふ、「曹(そう)溪(せき)大(だい)師(し)進(しん)つて和(わ)尚(じやう)を問(と)ふるや否(いな)や。」原(げん)曰(いは)く、「汝(なんぢ)進(しん)つて吾(わ)を問(と)ふるや否(いな)や。」師(し)曰(いは)く、「識(し)るとも又(また)争(まが)か能(よ)く懸(けん)らん。」原(げん)曰(いは)く、「衆(しゆ)角(かく)多(た)しと雖(いえど)も、一(いつ)鱗(りん)足(そく)れり。」と。師(し)曰(いは)く、「日(にち)夢(む)らく、六(む)祖(そ)と與(よ)に一(いつ)龜(かめ)に乗(の)りて深(しん)池(ち)に游(う)ぶ、覺(さ)めて之(これ)を原(げん)して曰(いは)く、「靈(れい)龜(かめ)は智(ち)なり、池(ち)は聖(せい)海(かい)なり、吾(わ)祖(そ)師(し)と同(どう)じく靈(れい)智(ち)に乘(の)り聖(せい)海(かい)に游(う)ぶ。」と。師(し)、大(だい)寶(ほう)の問(と)衡(けい)山(さん)に之(これ)を。南(なん)寺(じ)の車(くるま)に有(あ)り、狀(じやう)臺(たい)の如(ごと)し、乃(すなは)ち庵(あん)を其上(そのかみ)に結(むす)ぶ、時(とき)に石(いし)頭(とう)和(わ)尚(じやう)と號(ごう)す。鄧(とう)隱(いん)峰(ほう)、馬(ば)祖(そ)を辭(こと)す、祖(そ)問(と)ふ、「甚(し)麼(なん)の處(ところ)にかゝる。」祖(そ)曰(いは)く、「石(いし)頭(とう)路(ろ)滑(くわ)かなり。」祖(そ)曰(いは)く、「竿(かん)木(ぼく)身(み)に隨(したが)ふ、男(おとこ)に逢(あ)はせて戲(あそ)ぶを伴(たづ)なさん。」便(べん)ち行(い)く、師(し)の處(ところ)に到(いた)りて禪(ぜん)床(じやう)を繞(めぐ)ること一(いつ)匝(じやく)、錫(せき)を振(ふる)ふこと一(いつ)下(げ)して、乃(すなは)ち問(と)ふ、「是(これ)れ何(なに)の宗(しゆ)旨(し)ぞ。」師(し)曰(いは)く、「蒼(そう)天(てん)蒼(そう)天(てん)。」祖(そ)無(む)語(ご)、却(かへ)りて祖(そ)に舉(あ)げ似(に)す、祖(そ)曰(いは)く、「更(さら)に去(き)つて問(と)へ、他(た)の答(た)有(あ)らんを得(え)つて、汝(なんぢ)嘘(うそ)すること兩(りやう)聲(せい)せよ。」祖(そ)再(また)び去(き)つて前(まへ)の如(ごと)くに問(と)ふ、師(し)嘘(うそ)する兩(りやう)聲(せい)、祖(そ)又(また)語(ご)無(む)し、回(かへ)つて祖(そ)に舉(あ)げ似(に)す。祖(そ)云(い)はく、「汝(なんぢ)向(む)つて道(みち)ふ、石(いし)頭(とう)路(ろ)滑(くわ)かなるか。藥(やく)山(さん)一(いつ)日(にち)石(いし)上(じやう)に在(あ)りて坐(ざ)す。師(し)曰(いは)く、「汝(なんぢ)者(もの)裏(うら)に在(あ)りて什(じ)麼(なん)をか作(つく)す。」山(さん)曰(いは)く、「一(いつ)物(もの)も爲(な)さず。師(し)曰(いは)く、「甚(し)麼(なん)ならば則(すなは)ち閑(かん)坐(ざ)せり。」山(さん)曰(いは)く、「閑(かん)坐(ざ)ならば即(すなは)ち爲(な)さん。」

師曰はく、「汝道ふ、爲さずと、爾の什物をか爲さざる。」山曰はく、「千聖も亦爲らず。爾乃ち傷を以て之を贖じて曰はく、「從來共に住して名を知らず、任運に相將ひて只雲に行く。」古より上賢猶諷らず、遺次の流輩明むべけんや。」と。僧問ふ、「如何が是れ禪。」答へて曰はく、「碌碌。」「如何が是れ道。」答へて曰はく、「木頭。」と。師參同契、草庵歌を著す、世に行はる。

贊に曰はく、

端州の生緣、曹溪の得度

鰲鼻崖の毒人を傷くることを要するや

破鏡鳥の心専ら母を食す

洞民多く淫祀することを厭ふ、糞祀を毀つて牛を齋うて齋る

嶽僧の興に信書を通ず、鋤斧を挾んで住山し去る

衆角多しと雖も一鱗足れり。又寧ろ能く青原を尋得せん

深池同じく一龜に載せて遊ぶ、竟に何ぞ會て夢にも六祖を見ん

巖に臨んで滑路多し、樵斧を推して手を曳いて懸崖より墮す

共に住して名を知らず、藥山に對して熟睡齋蒲純し

貼身の死訓、磐石に坐して雲を生ず

日に信せて碑を答ふ、碌碌拙つて口に似たり

【貼身】 身をはなれぬ、身にままつたの意  
【死訓】 説じつめたる計なり。

古松下隈かに一曲を誦ふ、草庵の詠富商に落ちず  
 亂山の中狂叫すること數聲、參同疑は何の言句ぞ  
 惜しいかな曹溪の一枝を出して、情忘じ義斷する時に到つて、五道の孫を生じて不孝の  
 子に繼がしむることを

南泉願禪師

師諱は普願、鄭州の人。其は王氏。初め馬祖に見えて契悟し、後南泉に住す。上堂に曰はく、「王老師少きより一頭の水牯牛を養ふ、溪東に向つて牧せんと擬すれば、他の國王の水草を食ふことを免れず。如かじ分に隨つて此些を納れて糞に見得せざらんには、山下に一庵主あり、人謂つて曰はく、「近日南泉和尚出世す、何ぞ去つて禮拜せざる。」曰はく、「但南泉の出世のみに非ず、直饒千佛出興すとも我亦去らじ。師聞いて乃ち趙州をして、去つて慰せしむ。州去つて便ち禮を設く。主顧みず、州西より東に過ぎ、東より西に過ぐ、主亦顧みず。州曰はく、「草賊大敗。」と。遂に簾子を拽下して、便ち歸つて師に舉似す。師曰はく、「我從來、者漢を疑着す。」と。師一日莊に到る、莊主預め油糍を備へて迎奉す。師曰はく、「老僧居常出入人の與に知らず、何ぞ排辨すること此の如くなるを得たる。主曰はく、「昨夜土地報じて道ふ、「和尚今日來らんと」と。」師曰はく、「王老師修行力無くして鬼神に觀見せら

【草賊】 小賊めの意。

【土地】 土地神なり。

【一分の飯】 一人前の飯。

【衆六云】 衆の上に師一日の三字を置かば見易し。

【火を失却す】 手あやまらずなり。

【我使ひ得て云云】 おれが使ふ鎌はよくきれるの意。  
【骰子】 擲に博陸の道具、故に臭骨頭と云ふ。十八は出たる采の日なり。  
【彩に信せ云云】 采の日の出次第なり。  
【家生】 道具なり會元に家事に作る。即家具なり。

五家正宗贊

る。一時に僧あり、問ふ、「既に是れ大善知識、什麼としてか却つて鬼神に觀見せらる。師曰はく、「土地前に更に一分の飯を下せ。」一日雨堂首座、猫兒を争ふ、來つて師に白す、師刀を持ち猫兒を提起して曰はく、「道ひ得ば即ち猫兒を教取せん、道ひ得ずんば即ち斬却せん。」二俱に對なし、師便ち之を斬る。曉に至つて趙州外より歸る。師前話を舉して之に示す。趙州鞋を脱して頭上に安んじて便ち出づ。師曰はく、「子若し在らば猫兒を教ひ得ん。」衆に示して曰はく、「王老師身を賣り去らん、阿羅伽買はん、時に僧あり、衆を出でて曰はく、「某甲買はん。」師曰はく、「貴きことを作さず、賤きことを作さず、汝作麼生か買はん。」僧對なし、僧問ふ、「師丈室に居る、何を將てか指南せん。」師曰はく、「昨夜三更半を笑却す、天明起き來つて火を失却す。」師由に在り、作務する次、僧問ふ、「南泉の踏、甚れの處に向つてか去る。」師鎌子を拈起して云はく、「我者鎌子三十錢に買ひ得たり。」僧曰はく、「茅鎌子を問はず、南泉の踏甚れの處に向つて去る。」師曰はく、「我使ひ得て正に快なり。」陸互大夫、人と雙陸する次、師を見る、陸骰子を指して曰はく、「恁麼不恁麼家に信せよる時如何。」師骰子を拈起して云はく、「臭骨頭十八」と陸又問ふ、「弟子家中に一片の石あり、或時は坐し或時は臥す、如今鑑つて佛と作さん、得てんや否や。」師曰はく、「得てん、陸曰はく、「得ざることなしや否や。」師曰はく、「得ざらん、師、住持の時、一僧到る、師向つて道ふ、「我由に上つて作務せん、着時を待つて飯を作して自ら喫し了つて、一分を送つて上來せよ。」少時あつて其僧自ら作して喫し了つて、一時に家生を打破し、師の床に就いて臥

【花】 牡丹花なり

す。師待こども來らず、射つて僧の床の上に臥するを見て、僧も亦地に臥いて臥す。僧便ち起ち去る。師後に曰はく、「我往前に住處の時、僧の伴僧の道者あり、今に至るまで消息を見ず。陸互一日師に向つて道ふ、摩訶衍また奇怪、道ふことを驚す、天地と我と同根、萬物我と一體と。師座前の花を指して曰はく、大夫時の人、此一株の花を見て夢の如くに相似たり。陸測ることなし。師座前に向うて曰はく、「我眞に經を講して得てんや。座曰はく、「某甲、和尚のために經を講せん、和尚、某甲のために經を講せん。師曰はく、「金彈子を將て銀彈子に博へ去るべからず」と。上堂曰はく、「諸和尚、王老師十八上にして活計を作すことを解す、如今活計を作すことを解するものありや、出で來れ、汝と共に商量せん。須らく是れ住山の人にして始めて得べし。良久して大家を顧視して合掌して曰はく、「珍重無事、各自に修行せよ。一日甘發行者來つて射を設けて云はく、「請ふ、和尚念誦せよ。師云はく、「甘發行者射を設く、請ふ、大家聖賢口誦の爲に摩訶般若波羅蜜を念せよ。贊曰して便ち出で去る。師厨内に到つて錫子を打破す。

贊に曰はく、

唱道王老師、遍地に荆棘を裁う

狐牛を東西の溪上に牧す、素頭手に在りて未だ放牧することを會せず

猫兒を上下の堂前に斬る、暗地に繩を解す、曲直を分ち難し

亂りに撒子を抛つ、鼻骨頭十八點啼し成す

錯つて路頭を指し、茅鏝子三十錢に買ひ得たり

貴と作さず賤と作さず、渾身を賣る、誰か背て商量せん

火を失却す、丈室に居して何の奇特かある

鬼神に覓見し了らる。莊上に片油糞を喫す

趙州と相見し來る、鎮州に大蘿蔔を出す

一株の花夢の如くに相似たり、孰か云ふ天地同根なりと

十八歳活計做成す、兒孫をして則を取らしむ

陸互に坐石を開鑄することを許す、惡を逐ひ邪に隨ふ

甘贊が爲に粥鍋を打破す。門を開いて賊を放す

佛出世すとも亦去らず、磬頭の庵主未だ狐疑を免れず

飯飽いて後恣に瞳眠す、靈利の道者消息を知らず

金彈子を射て銀彈子に換ふ、長慶多きことなし。覆ひて阿耨鞞の善知識と做らんことを云

す

百丈大智禪師

師は馬祖に對々、講は漢海。福州の人。姓は王氏。師再び祖に參じ、侍立する次、祖親床角の掃子を日視す。師曰はく、「此用に對するか、此用を離るるか。」祖曰はく、「汝向後

兩片皮を聞いて、何を轉てか人の爲にせん。師、拂子を取つて緊起す。師曰はく、匙用に  
 即するか、匙用を離るるか。師拂子を箸處に掛く。師、杖を擡て一喝す。師便ち轉棒す。  
 後に檀信洪州新吳の界に請じて、大華山に住せしむ。居處嚴密、故に百丈と號す。  
 師之に處し、未だ朔月ならざるに、華玄の四方より群集す。萬山、黃單共首に當る。一  
 日師衆に謂つて曰はく、佛法は是れ小事にあらず、老僧昔馬大面に一喝せられて直に得た  
 り、三日耳穿することをもと。黃單聞いて驚き舌を吐く。師曰はく、子、已後に馬祖に  
 承嗣し去ることなしや。藥云はく、然らず、今日和尚の舉するに因つて馬祖の大機大用を  
 見ることが得たり、然れど、日つ馬祖を識せず、若し馬祖に嗣せば已後に我兒孫を喪せん。  
 師曰はく、見、師と齊しうして師の生徳を滅す。見、師に逼るる方に指するに堪へたり、  
 子甚だ超師の見あり。衆便ち稱善す。向上堂する毎に一老人有り、衆に隨つて法を聽く。  
 一日衆退く、唯老人のみ去らず。師問ふ、汝は是れ何人ぞ。老人曰はく、某甲は非人なり、  
 過去迦葉佛の時に於て曾て此山に住す。因に學人問ふ、天修行の人還つて因果に落つるや  
 また無や。某曰はく、因果に落ちず、遂に五百世野狐身に墮す。今昔、和尚一轉を代れ、  
 貴ぶらくば野狐身を脱せん。師曰はく、師、問へ。老曰はく、天修行の人還つて因果に落  
 つるや也無や。師曰はく、不味因果とぞ、老、言下に於て大悟し、作禮して曰はく、某甲  
 に野狐身を脱す。住して山後住らん、敢て乞ふ、亡僧の津送に依れ。師、雜那をして白槿し  
 て衆に告げしむ。食後に亡僧を送らん」と。食後に師、衆を領じて山後の窟下に至りて、杖



【木鑿】未許一本  
辰のこをいふか

【壓腫】當に坏腫  
に作るべし、壓腫  
は、やきものし  
たぢなり

を以て一死狐を擡出す。乃ち法に依つて火葬す。司馬頭陀、湖南より來つて師を見て云はく、「瀉山奇絶、千五百の衆を聚むべし。」師曰はく、「老僧住せんと欲する、可ならんか。」陀曰はく、「和尚の所住に非ず。」師曰はく、「何ぞや。」陀曰はく、「和尚は是れ骨人、彼は是れ肉山、設ひ之に居るとも徒千に盈たず。」師曰はく、「吾衆中、人の住し得る有ることなしや不や。」陀曰はく、「待て、之を歴觀せん。」師侍者をして第一座を喚び來らしむ。師曰はく、「此人如何。」陀警教して行くこと數歩せしむ。曰はく、「此人不可なり。」又典座を喚び來らしむ。陀曰はく、「此正に是れ瀉山の主なり。」師是夜禪を召して空に入れ、囑して曰はく、「吾化緣此に在り、瀉山の野境、汝當に之に居るべし、吾宗を嗣續して廣く後學を度せよ。」時に華林之を聞いて曰はく、「某甲忝くも上首に居す、禪公何ぞ住持を得ん。」師曰はく、「若し能く衆に對して一轉語を下し得て出格ならば、當に住持を與ふべし。」即ち淨瓶を拈して問うて曰はく、「喚んで淨瓶と作すことを得ざれ、汝喚んで什麼と作さん。」華曰はく、「喚んで木楔と作すべからず。」師肯はず。乃ち禪に問ふ、禪淨瓶を踢倒す。師笑つて曰はく、「第一座山子に輪却す。」と、禪遂に往く。師清規を作る。

贊に曰はく、

出格の壓腫、對陶の巧匠

瘦骨稜稜玉削り成す、碧眸閃閃星流の様

野狐を脱して不昧因果、知んぬ歷代贊すること幾何ぞ、罵ること幾何ぞ

【耳袋】耳たぶ。  
都てひよつこり出  
たるを袋と云ふ。

【道】  
人は南泉多き者  
なり

水靴を踏はしめて便宜に浴敷す、走つて家に歸つて哭一上笑一上。

淨觀錫倒、山子の鑿を荷うて千峯に入ることを放す。

獅子踏し來る、馬師の平地に青嶂を埋むることを怪しむ。

一生鼻頭痛し、骨を刻む宜清腫し易からず。

三日耳塞聾す、心に入つて尋卒に洗蕩し難し。

共に惡業蛟龍の窟に潜ふ、黄粟を子とし麗公を友とす。

同じく生尊虎兕の胎を奪ふ、南泉を見とし知巖を弟とす。

渭規并井、深く人を驚ふる其坑を掘る。

掌背纏綿、密に彌天の網を布く。

奇勳を肇つること相擇遙に波せず、老老駭胡の真に萬古の壘池と作る、阿誰か近傍せよ。

趙州真際禪師

師は南泉に問ぐ。誰は從汝。曹州の人、姓は曹氏。一日南泉に問うて曰はく、如何が是。

れ道。泉曰はく、平常心是れ道。師曰はく、還つて趣向すべきやまた無や。曰はく、向

はんと擬すれば即ち乖く。師曰はく、擬せずんば争か是れ道なることを知らん。曰はく、

道は知にも屬せず不知にも屬せず、知は是れ妄覺、不知は是れ無記、若し眞に不疑の道に達しぬれば、猶太虚の廓然虚豁たるが如し、豈強ひて是非すべけんや。師言下に於て

理を悟る。僧あり、五臺に遊ぶ。婆子に問うて曰はく、「臺山の踏甚の處に向つて去る。」婆曰はく、「驀直に去れ。」僧便ち去る。婆曰はく、「好箇の師僧、又恁麼に去る。」と。後僧、師に舉似す。師曰はく、「我去つて誰彼せんを得て。」明日、便ち去つて問ふ、「臺山の踏甚の處に向つてか去る。」婆云はく、「驀直に去れ。」師便ち去る。婆曰はく、「好箇の師僧、又恁麼に去る。」師歸つて僧に謂つて曰はく、「臺山の婆子、汝が爲に勘破し了れり。」と。僧問ふ、「久しく趙州の石橋と響く、到來すれば只路狗を見る。」師曰はく、「汝只路狗を見て石橋を見ず。」曰はく、「如何なるか是れ石橋。」師曰はく、「驢を度し馬を度す。」曰はく、「眞定の帥王公、諸子を擡へて院に入る。」師坐して問うて曰はく、「天王曾すや。」師曰はく、「不會。」師曰はく、「小より持齋して身已に老ゆ、人を見て、床を下るに力無し。」王尤も車を加ふ。僧問ふ、「狗子甚に因つて佛性ありやまた無や。」師曰はく、「無。」僧云はく、「一切衆生皆佛性あり、騎來るを見て便ち方丈の門を閉づ。」師乃ち火を把つて法堂に於て叫んで云はく、「火を救へ火を救へ。」衆門を聞き把住して曰はく、「道へ、道へ。」師曰はく、「踐過ぎて後、乃を張る。」と。茶裏に到り、拄杖を法堂上に執へて、東より西に過ぐ。衆曰はく、「什麼をか作す。」師曰はく、「水を探る。」衆曰はく、「我若裏は一滴もまた無し、箇の什麼をか探る。」師杖を以て壁に倚せかけて便ち行く。僧問ふ、「如何なるか是れ祖師來意。」師曰はく、「庭前の柏樹子。」と。後法眼、覺鏡背に問ふ、聞く、趙州に柏樹子の話ありと、是なりや否や。師覺曰は

【一】目をみはる

く、「先師に此言無し、先師を誘ふことなくんば好し。僧、峰に問ふ、「古澗寒泉の時如何。峯曰はく、瞠目して底を見ず。曰はく、「飲む者如何。曰はく、「口より入らず。師問いて曰はく、「鼻孔裏より入るべからず。僧問ふ、「古澗寒泉の時如何。曰はく、「苦。曰はく、「飲む者如何。曰はく、「死。僧峰に舉似す、峰遙に望んで作禮して曰はく、「趙州は古佛なり、此より答話せず。僧陽問ふ、「一物不將來の時如何。師曰はく、「放下著。去はく、「註に是れ一物不將來、箇の什麼をか放下せん。曰はく、「放不下ならば、擔取し去れ。と。僧省あり。

贊に曰はく、

禪は口皮邊に在り、衲僧の眼を撫盡す

南泉の毒に中る、太虚寥廓豈強ひて是非せんや

雪峯の心を死せしむ。古澗寒泉分明に割判す

大王に見えて床を下つて接せず、吾宗の法を尊ぶに人育ることを是す

庵主を勘して簾を抽下して歸る、王老の者漢を疑着することを知ら

菜羹に水を探る、杖を擧げて立どころに根を生ず

黄檗に焚を救ひ、門を開いて膽を驚落す

狗子無佛性、露双鋼冷鐵箱を含む

臺山婆を勘破す、葛藤拈一刀に截斷す

【分疏】 いひわけのこと。

覺義辨先師に此語無しと謂ふ、日を費して分疏す

嚴尊者一物不將來を問ふ、全師に荷擔す

略句を架して唯馬を度し驢を度するのみに非ず、百世に互つて沈迷を發けて摩訶衍の岸に平歩せしむ

黄檗斷一師師

師は百丈に嗣ぐ。諱は希運。闍人。初め天台に遊び一僧に逢ふ。之と言笑すること舊識の如し。熱之を遇れば、日光人を射る。乃ち偕に行く。翻水潭に於て杖を植てて止る。其僧、師を牽いて同じく渡らんとす。師曰はく、「兄自ら度れ、徒師の衣を褰げて、足を踏んで渡を履むこと地の如し。師を回顧して曰はく、「渡り來れ、渡り來れ。師唱して曰はく、「者自丁の漢、百早く知らば當に汝が脛を斫るべし。僧嘆じて曰はく、「眞の大乗の法器なり、我及ぼざる所なり。」と言ひ訖つて見えす。百丈、一日師に問ふ、「甚の處にか去り來る。」師曰はく、「雄山下に菡子を采り來る。」丈曰はく、「還つて大蟲に見るや。」師便ち虎の聲を作す、丈斧を拈じて斫る勢を作す、師丈を打つこと一掴す。丈吟吟として笑つて便ち歸る。上堂曰はく、「大雄山下に一の大蟲あり、汝等諸人も須らく好く看よ、百丈老漢、今日親しく一口に遭ふ。」と。師清泉に在りて首座と作る。一日鉢を持して南泉の位に向つて坐す、泉堂に入り見て、師に謂つて曰はく、「首座幾時か行道する。師曰はく、「威音

【白丁の漢】 聲聞の自利。求むるを謂ふ。  
【大】 虎なり。  
【擗】 掌にて打つなり。  
【吟吟】 にここにこの聲。

【身材】 身裁にも作る、からだの事なり。

【躡】 差しつけたる意。

【宗】 宣宗なり。

【醜酒糟】 眞の酒は飲まずして糟を食うて酔うたやうな氣でゐるの意。唐宋時代に人を罵る語。

「前。」泉云はく、「猶是れ王老師が兒孫なること有り。師遂に第位に過ぐ。師嘗す、泉門送して師の笠を提起して曰はく、「長老身は世尊なるに大弟子は太小生なる。」師曰はく、「然りと雖も、大千世界纏に裏許に在り。泉曰はく、「王老師、師笠を載いて便ち行く。師官に在りて殿上に佛を講する次、時に唐の宣宗沙彌たり。問うて曰はく、「佛に着いても求めず、法に着いても求めず、僧に着いても求めず、長老、釋何の所爲ぞ。」師曰はく、「佛に着いても求めず、法に着いても求めず、僧に着いても求めず、常に禪すること是事の知し。彌曰はく、「禮を用ひて突にかせん。」師曰はく、「太生。」師曰はく、「一者裏是れ什麼の所在ぞ、龜と説き細と説く、後に隨つて又學す。宗の御位に及んで乃ち封じて鹿行の沙門となす。袁和國之を諫めて曰はく、「三掌は陛下の爲に三際を斷ず、易へて實際となす。師會て六人の朝到あり、五人は師を作す、中に一人あり、生具を提起して一圓相を作す。師曰はく、「我聞く、一隻の獵犬あり、甚だ愚しと。僧曰はく、「羚羊の聲を尋ね來る。」師曰はく、「羚羊の聲の尋ねるに到るなし。」僧曰はく、「羚羊の蹤を尋ね來る。」師曰はく、「羚羊の蹤の尋ねるに到るなし。」曰はく、「羚羊の蹤を尋ね來る。曰はく、「羚羊蹤の備が尋ねるに到るなし。」曰はく、「怎麼ならば則ち死羚羊なり。師便ち休し去る。明日隨堂曰はく、「昨日羚羊を尋ねる僧出で來れ。僧便ち出づ。師曰はく、「昨日の公案未了、老僧休し去る。備作麼生。」僧無語。師曰はく、「將に謂へり、是れ本色の衲子と、元來是れ義學の沙門と云つて打出す。示案に云はく、「汝等諸人盡く是れ醜酒糟の漢、怎麼に行脚せ

【別小】問の上にて  
文字を加へ見るべし

ば何の處にか今日あらん。還つて大唐國裏に禪師なきことを知るや。[時]に僧あり、出でて云はく、「只諸方に徒を匿し、衆を頼するが如き、又吾麼生。」師曰はく、「禪無し」と。道は下、只是れ師なし」と。師俗の時居貧しうして母老いたり、師の黄檗に住すと聞いて持て來つて相見す。師罵みず、持爲に飢寒す。大業渡の頭に至つて、失脚して墮死す。後果して天に生る。師に夢みえて曰はく、「我當時若し汝が一粒の米を受けば、常に地獄に墮すべし、寧ろ今日あらんや」と拜して去る。師一日夢を覺つて云はく、「天下の老和尚、總に吾裏に在り、我若し一細道を成さば汝が七歳八歳なるに墮す、若し一故道せずんば一燈と消せす。」問ふ、「一燈と消せざる時如何。」師曰はく、「吾こと一貴相國、一尊僧を養けて前に置いて曰はく、「請ふ、師者を安んせ。」師喚んで、「吾休と曰ふ。」休曰はく、「諸君曰はく、「汝が興に安否し是れり。」千頃の田、師に委す、師曰はく、「未だ三界の影像を現せざる時如何。」師曰はく、「即今是なることありや。」師曰はく、「有無は凡く置く、即今如何。」師曰はく、「吾今に非ず。」師曰はく、「吾が法皇は既に汝が物に在り。」師曰はく、「且く人事に當つて宜しく總會し得ること能はざるべし。但、吾書を學んで成袋葉に向つて安着することを知らずて、對る處に我觀を會すと稱し、還つて生死に替へ得てんや。老宿を輕忽して地獄に入ること前の如くならん。」

贊に曰はく、  
禪行の沙門、略拘羅なり

【喫食】 喫食し、  
し、こゝろふたり

【白】 あからさま  
とみずみすみす  
にとふふ意

大尊の天子を掌す、而血の紅なるに似たり

臨濟の麝鼠を打す、棒雨點の如し

大尊山下に處を突出す、未だ爪牙を具せず

大尊漢頭に槍を擲殺す、恩怨を分たす

大尊前在りて行道坐位を争うて、平地に喫食す

百丈 三日耳聾することを聞いて驚いて舌を吐き、根に舐して翻す

路羊糞跡を匂す、軒かに獵犬の尋ね難きを知る

潯水世法師漲る、却つて胡僧に欺騙せらる

小室大千世界を藏す、甚の處にか王老師を着けん

龜乎天下の師僧を捏す、有時一絲線を通す

千頃南に法眼、汝に在りと謂ふ、剛ひて鬼の分贖を要す

雲相國の裏に古佛に名を安す、白かに裏に汚染せらる

唾酒糟の濃濁つて大唐國裏に禪師無きことを知るや、老僧を輕忽す、地獄に入ること箇の如し

陸州陳尊宿

師諱は道蹤、俗姓は陳、江南、秦王の裔なり。因に聞元寺に游び、佛を禮し僧を見るこ



【無用の者】無用の者

【終極の辭】終極の辭にて懸り合ひなしの意

と彼の如くす。歸つて父母に白し、出家を願求す、これを許す。受具して游方して旨に黄檗に契ふ。後四衆の請するが爲に觀音寺に住す。常に百餘衆の學者容納す、問に隨つて遽かに答ふ、詞語峻峻にして以て其鋒に嬰るもの無し。是に由つて諸方尊宿を以て之を稱す。嘗て黃檗に首座たる時。臨濟方に衆に入る、師目けて大器と爲し、指して槩に見えしめて、佛法の大意を問はしむ。槩三度杖を賜ふ。雲門初め師に參す。師、門を扇して雲の脚を撈折す。乃ち云はく、「秦の時の鞍轡鎖。雲大悟す、仍つて雪峰に見えしか。爾後に聞元に歸り、母の老いて養奉するなきを以て、窟房に居し、日に蒲鞋を織り、米に糶いで養奉す、故に陳蒲鞋と號す。巢が寇境に至る、師大衆を城門に居す。巢力を盡せども擊ぐることはせず。敷じて陸州に大聖人ありと云うて、城を舍て去る、遂に獲るることを免る。師座主に問ふ、「什麼の經をか請す。曰はく、「涅槃經。曰はく、「一段の義を問はん、得てんや。曰はく、「得てん。師師を以て空中を踢つて吹一吹して曰はく、「是れ什麼の義ぞ。曰はく、「經中に此義無し。曰はく、「覽空漫語の漢、五百の力士石を掲ぐる義、却つて無しと道ふ。一秀才あり、師を訪ふ、「二十四家の書を會す。」と稱す。師杖を以て空中に點一點して曰はく、「會すや。二才測ることなし。曰はく、「二十四家の書を會すと道ふに水字の八法もまた講らず。一僧參する次、師問ふ、「汝は是れ何判なりや否や。曰はく、「是。曰はく、「且葛藤を放下せよ、會すや。曰はく、「不會。曰はく、「捨却陳狀、自領出去。一僧便ち去る。師曰はく、「來れ來れ、我實に汝に問ふ、其の處より來る。曰はく、「江西。師曰はく、「潭和

尙、汝が背後に在りて儘が亂進することを怕る、見るや。僧無着、掃機に應じて多く云ふ、  
「擔板漢。」と。門、詰、峻にして許可あること少し。後に陳操尙書一人を接す、  
贊に曰はく、

昔漢一生活板、背て它人に持換せらばんや

佛祖の命脈を斷ず、屠刀を假らす

智僧の眼睛を換ふ、只泥彈を擲す

臨濟を指して黃檗に參せしむ、生薑竹筒に入る

雲門を接して雪峰に耐ふしむ、烏鵲鶴卵を生ず

五百の力士掲百の義、脚突を將て處處に踢翻す

二十四家は破體の書、甘汁を以て空中に點じて看しむ

新到を叱して江西の羅慕藤を放下せしむ、汝巴鼻秦の慧輪を抛出す

閑房に母を責ふ、破蒲鞋能く義文の錢にか直る

古寺に身を敷す、潑家私其の破漆椀にか當らん

門に當つて大屋を懸く、虚しく聖人の名を得たり

分座猿紐を振ひ、人だの眼を瞎す

氣牛斗を衝く、詔方死棺を將て地に就いて彈ずることを薄んず、機關を用ひ盡して末後に

只尙の俗漢を接得す

【圖尖】 あしひ指  
みさきなり

【潑家私】 やくき  
道具なり。やくき  
者を潑すと云ふ

【死骨を云云】 方  
語。必死今死骨と

云へば、語意むさ  
ふさにとれたれど

も、何の役にもた  
たぬ者じやの意

徳山見性禪師

師諱は眞鑑。龍潭に嗣ぐ。簡州の人。姓は周氏。初め金剛經を講じて名成都に冠たり、時に周金剛と稱す。嘗て同學と與に曰はく、「一毛海を呑む、海性轉くることなし。鐵芥針に投ず、鋒利動ぜず、學と無學と唯我これを知る」と。南方の禪席、頼る盛なることを聞いて、師の氣不平なり。乃ち曰はく、「出家兒干劫に佛の細行を學し、萬劫に佛の威儀を學しても成佛することを得ず。南方の魔子取て直指人心見性成佛と言はんや、當に其窟宅を破し、其種類を滅し、以て佛恩に報ずべし」と。遂に青龍鈔を負つて蜀を出で、涪陽に至る。路上に一婆子の餅を賣るを見て、因つて肩を息へて買ひて點心せんとす。婆擔を指して曰はく、者は是れ什麼の文字ぞ。曰はく、青龍の跋鈔。曰はく、何の經をか講ず。曰はく、金剛經。曰はく、我に一間あり、若し答へ得ば即ち與へて點心せしめん、答へ得ずんば目く別處に去れ。經の中に道はく、「過去心も不可得、現在心も不可得、未來心も不可得」と、師審し、上座那箇の心をか點せんとす。師無語。徑に龍潭に往いて曰はく、「久しく龍潭と響く、到來するに及んで、潭も又見えず、龍も又現せず。潭曰はく、「子親しく龍潭に到れり。師對なし。遂に止息す。一夕侍立する次、潭曰はく、「更深し、何ぞ下り去らざる。珍重して便ち出づ。却回して曰はく、「外面黒し。潭紙燭を點じて度與す。師捧得ず。潭便ち吹滅す。師大悟、便ち禮拜す。潭曰はく、「子箇の什麼をか見る。師曰はく、「今より

【珍重】叢林の禮話。早起に不寐と云ふ。夜間に珍重とお休みなされし。如何がの意。珍重は御身を大切に意よく休みなさいの意。

【童子】あはせ、  
したかれ等の衣類  
を指す。

前二東に天下の老和尚の舌頭を盛んに食ひ、東日に坐り、潭陀座、（註）に對つて曰はく、「（隋）  
 の中篇の漢あり、牙齦相の如く、日血盆に似たり、一棒に打てども頭を回らさず、僧日  
 峯頂上に向つて吾道を立し去る事有らん。」師遂に跣跣を將て法堂前に非うして火を  
 圍けて曰はく、「諸の玄端を窺むるも一毫を太虚に置くがごとし、靴の相把を踏すも、  
 滴を百竈に掛するに似たり。」と云うて遂に之を焚く、（註）に於て經辯す。直に馮山に返り、  
 童子を（註）んで法堂に上り、車より西に過ぎ、西より東に過ぎ、方丈を顧視して曰は  
 く、「（註）り有りや。」山坐して曰はく、「（註）無知」と曰うて便ち出で、門首に至つて乃ち曰  
 はく、「（註）り上りも、また草草たることを得ず。」と。遂に風帽を具して出で入つて僧見す。  
 纒に口に跨つて坐具を提起して曰はく、「和尚。」と。山童子を収らんと欲す、僧便ち喝して  
 撒袖して出づ。晚に至つて首座に問ふ、「今日の新到在りや否や。」僧曰はく、「（註）法堂を存  
 仰して、草鞋を着けて出で去る。」山曰はく、「此子、已後當峯頂上に向つて草庵を築結し  
 て佛を呵し、虱を寫り去ることあらん。」師一日齋退し。自ら托鉢して堂を過ぐ、時に雲味  
 非座となる、曰はく、「鐘未だ鳴らず、鼓未だ響かざるに托鉢して甚れの處にかよふ。爾便  
 ち方丈に歸る。峯、巖頭に舉似す。頭曰はく、「大小の徳山未だ末後の句を會せず。師聞い  
 て侍者をして巖を誦じて至らしめ、謂つて曰はく、「汝老僧を肯はざるなり。巖窟に其意を啓  
 す。次の日上堂。便ち尋常と同じからず。巖僧堂前に於て掌を撫して曰はく、「且喜すら  
 くは堂頭老漢。最後の句を會せり、然りと雖もまた只三年を得ん。」後三年に單して遷化す。

示業に曰はく、「汝俱事に無心にして心に無事ならば、自然に虚にして靈に、空にして妙な  
 らん。若し空端許りも之本家を言はば、持自ら欺くとす。何が故ぞ毫釐も繫念すれば三  
 途の業因、譬爾として情生すれば、萬劫の纏鎖、聖者凡庸に是れ虚聲、殊相劣形皆  
 妄色となる。汝之を求めて累なきことを得んと欲するや、其之を解ふに及んで、又大患  
 となりて終に益する所なし」と。雲峯、師に問ふ、復上宗、宗の事、某甲過つて分ありやま  
 た無しや。師曰はく、「甚麼とか造ふ。軍省あり、廣信者問ふ、復上の諸聖、其の處に向つ  
 てか去る。師曰はく、「釋雲、作變。師曰はく、「雁龍馬を執持すれば、數整出頭し來る。師  
 体し去る。本日浴に出づ、常湯を度して師に問ふ、師言を執つて云はく、「昨日の公案如何。  
 師曰はく、「春老漢今日方に始めて替。師曰はく、「師一日正前と同じく山に入つて木を  
 斬る。師曰はく、「師の水を背て桶に取ふ。桶持して師を尋す。師曰はく、「會すや。桶曰はく、「不  
 會。師又一桶の水を背て桶に取ふ。桶持して又尋す。師曰はく、「會すや。桶曰はく、「不  
 會。師又一桶の水を背て桶に取ふ。桶持して又尋す。師曰はく、「會すや。桶曰はく、「不  
 會。師曰はく、「師が不會處を成難取也さる。師曰はく、「不會又師の什麼をか成難せん。師曰は  
 く、「大に師の無微に似たり」と。師法堂にて高學を見て云はく、「不審。師乃を棒を執し之  
 を強く、高學聞指し便之悟せしむる。師凡そ侍侍體段を不却して知り法堂を存するのみ。  
 費に曰はく、

鈔を拾うて南方に走る、善して師の磨子を滅せんとす

小宮に歸り、静かに  
息を養ふる事あり

卓老の心を出するに違ふ、小宮に歸りて一語なきことを看る  
潭紙燭を吹滅す、家財を破蕩す  
蟻草庵を盤結す、惟眞を呵罵す

洞山に到つて草鞋を著して出づ、日前の機を演弄す

巖頭に老僧を背はさる那と問ふ、杖の句を會得す

山にして靈に、空にして妙なり、人に逢うて雲泥を抛擲す

海を呑み芥針に投ず、衆に對して金剛の杵を擧折す

斃鼻蛇の海宗乗の事に因つて心に入る、飛龍馬の騾いて作塵の中に向つて馳歩す

木を打つて瓦棺を成體して、便ち休することを要す

扇を搦かして高亭の横に趁つて、去ることを喜ぶ

誠に謂ゆる俳優を拆く、吠猪狗、人情に近からざる底の老尊慈なり。想ふに是れ花錦の地に華草を無二、夾痒底の座主にあらず

巖頭禪師

師諱は丕巖、徳山に嗣ぐ、泉州の人。姓は柯氏。一日山に參じ、方に門に跨つて便ち問ふ、

「是れ凡か、是れ聖か。」山便ち喝す、師盛拜す。僧あり、洞山に舉似す、山曰はく、「若し是れ巖公にあらずんば大いに承當し難し。」師曰はく、「洞山老人好惡を識らず、錯つて名言

【沙汰】沙汰は石をゆりて其中に金をよりわくる意。故に公儀より僧尼の善惡を吟味し、惡しき者を還俗せしむるを沙汰と云ふ。會昌五年には善惡に拘らずに僧數を定め、其餘は皆還俗せしめたる。巖頭も其數に入る。

を下す、我當時、一手は搦げ一手は搦ふこと。一日雪峰、歙山と聚話する次、一桶の水を見る。歙曰はく、「水清うして月現す。」峰曰はく、「水清うして月現せず。」師歸して去る。師雪峰と同じく徳山を辭す。由問ふ、「甚の處にか去る。」師曰はく、「暫く和尙を離れ去る。」由曰はく、「子他後作麼生。」師曰はく、「和尙を忘れず」と曰はく、「子何に憑つてか此處ある。」師曰はく、「豈問かすや、智、師と齊しければ、師の平徳を滅す。智、師に遇きて方に背捨するに堪へたり。」曰はく、「何是、何是、善く自ら善哉せよ」と。閩州の巖頭に在りて沙汰に値ひ、灘地に於て渡すと作り、兩岸に各一板を擲く。人有つて渡り過ぎんとするとき、板を打つこと一下すれば、師曰はく、「阿婆を。」曰はく、「那處に擲き上らん」と。師乃ち棒を擲して之を渡ふ。一日内に弟子、一子を擲き去つて乃ち曰はく、「三棒を呈し、棒を擲すことは即ち問はず、且く道へ、婆子手中の杖此の處より得來る。」師使も打つ。婆曰はく、「婆七子を生ず、六箇は智音に遇はず、只者一箇もまた得得せず。」と云うて、便ち水中に抛向す。師後洞窟の臥龍山に墮す。徒信肆り集る。僧問ふ、「師無くんば這つて出身の處有らんやまた無しや。」師曰はく、「摩訶の古之祖。上堂云はく、「吾嘗て涅槃經を宣むること七八年、中に於て一兩段の義有つて、神僧の説話に似たり。」又云はく、「休なれ、休なれ、此に偽あり、出でて作禮して云はく、「請ふ、和尙家の爲に擧せよ。」師遂に云ふ、「吾教意は六字の三點の如し。第一は東方に向つて一點を下して、諸菩薩の眼を點開す。第二は西方に向つて一點を下して諸菩薩の命根を點す。第三は上方に向つて一點を下して諸菩薩の頂門

【身を強して】身を  
をかがめらつむく  
なり。

を無礙す。此は二行經中第一の義、石鼓歌は二行經の密門を闡明して一雙の眼を堅強するが如し、此は夏二第二の義、智度論は二行經の如し、擊つこと一獲すれば遠近聞く者俱に震す。此は法苑珠林の事、時に小居士は問ふ、如何なるが最上なる哉。一兩手を以て膝を撞きて身を強して曰はく、報信簡に隨を逐、擊對なし。慧山、石室に謂して問ふ、上住家からざる時如何。智曰はく、此に取らざるべし。山意に問はず、乃ち師に參じて問ふこと前語に同也。曰はく、他の去任に任す、他を管して作妄にかせん、遂に服膺す。一日又問うて曰はく、和尚是在。十一年前、洞山に在つて洞山を言はざるにあらずや。曰はく、是。曰はく、徳山を言はざること同也。問はず、只洞山の必きんば何の妙法が有らん。洞良久して曰はく、洞山は行佛、只是れ光無。山曰はく、如何に問ふ。其の論よりか來る。曰はく、西京より來る。洞曰はく、黄巢賊びて後、還つて師を獲得すや。曰はく、一牧得す。聞近前して頭を引いて云はく、因。僧曰はく、師の頭落ちぬ。師呵大笑す。僧後に空室に對る、空問ふ、其の處より來る。曰はく、巖頭より來る。曰はく、羅問何の言句が有りし、僧前話を舉す、掌打つこと二十許して楚は出す。僧問ふ、如何なるか。是れ道。曰はく、破桌椅、灘邊に擲つし著せよ。僧問ふ、古帆未だ掛ける時如何。曰はく、小魚大魚を吞む。曰はく、掛くる後如何。曰はく、後園の雜草を喫す。瑞巖問ふ、如何なるか。是れ本常の理。師云はく、莫文なり。曰はく、功の時如何。曰はく、是れ本常の理にあら



【譯】口を少し開きほうと云ふ聲。

【譯】刀を突込なり。

す。屍沈思す。師曰はく、「昔はば則ち未だ根塵を脱せず、肯はずんば則ち永く生死に沈む。」  
巖窟下に於て頓悟す。後凡そ佛を問ひ、法を問ひ、禪を問ひ、道を問ふことあれば、皆嘘  
言を作す。一日衆に謂つて曰はく、「老漢去るん時、大叫一聲了つて去れ。」と。一日賊大  
いに至る。責むるに供饋なきを以てして、遂に刃を刺す。師神色自若、大叫一聲して終  
ふ。數十里に聞ゆ。唐の光啓三年四月八日なり。

贊に曰はく、

智、師に過ぎたり、誰か備を信ぜん

一喝せられて大いに承當し難し、一嘘を用ひて全く巴鼻なし

横に點頭すること三十載、洞山を佛に光なしと謂ふ

塗毒を搦つこと一兩聲、韓信が朝に臨む底に聽す

棹を洞麻湖畔に舞す、臭老婆を引いて兒を抛却す

雪に熬山店頭に阻てらる、魔頭の偈を呵して去つて打睡せしむ

聲前の古蠶爛、謾に機籌に當る

後園の躑草を喫す、何れ何の宗旨ぞ

劍收めてより後鋒に嬰り去る、錯つて者僧に頭を付す

鐘未だ鳴らざる時托鉢して回る、密に先師に意を啓す

大道禪呪の處を問ふ、急に須らく草鞋を颯下すべし



【七村】 土地神の  
一小説

【家珍】 たからな  
く家珍作、寶と。

【場住】 つかまへ  
【托詞】 つきはな  
すの意

に人家の男女を魔魅し去ることならん。師曰く、「某甲の屋裏未だ穢かたらざるあり。巖曰はく、「將に謂へり、備他後に狐峰頂上に向つて草庵を築結して、佛を寫し置を寫り去ることならん。猶者箇の語話を作すか。師曰はく、「我實に未だ穢かならざる在り。巖曰はく、「若し實に此の如くならば、汝が見處に據つて一に前へ來れ。其處をば備がために證明し、不是處をば備が與に對申せん。師曰はく、「我初め巖言に對りて色々の義を學するを聞いて箇の入處を得たり。備曰はく、「此をよつて二十年、巖に惡對學することとを。師曰はく、「又洞山過水悟道の頌に因つて、箇の言處あり。巖曰はく、「若し延慶ならば自教も也不了。師云はく、「某甲因に彼山に問ふ、問上宗乘中の事、學人還つて分ありやまた無しや。山打つこと一棒して去はく、「甚難と道ふを、與當下に桶底の脱するが如くに相値たり」と。巖因に威を震つて一喝せらる。師はく、「豈道ふことを聞か乎。門より入る者は此の家珍にあらず」と。師曰はく、「如何に師も是ならん。巖曰はく、「他後若し大教を播揚せんと欲せば、須らく一自己の弊襟より脱出し將來つて、我與に蓋の蓋地に去るべし。師言下に於て入悟、連聲に叫んで曰はく、「師兄今日始めて是れ蓋山成道とを。師行脚の時、身石の觀に參ず、繩に門を敲く。觀問ふ、誰ぞ。師曰はく、「孤兒。師曰はく、「來つて作密にかせん。師曰はく、「來つて是處を踏はん。師使も門を開き檢住して曰はく、「道へ道へ。師曰はく、「觀托出して門を閉却す。師作院の後、衆に示して曰はく、「我當時若し觀の門に入得せば、備、者一隊の酒糟の漢、其の處に向つてか摸索せん。上堂、青山に

五家正宗被

【註】 西遊記の  
 第一回、孫悟空が  
 如来の掌を打つた  
 事、此處に引く  
 事なり。又は是を  
 人なり。云々。と  
 【註】 孫悟空  
 りの事なり。又  
 事なり。又は是を  
 人なり。云々。と  
 【註】 孫悟空  
 りの事なり。又  
 事なり。又は是を  
 人なり。云々。と

一節の妙あり、故に諸人切に思ひよく看るべし。時に長庚出て云はく、「今日堂中  
 大いに人の現身去逝するあり。西門外杖を担いで前庭に座向して相尋る。勸法沙  
 に學似す。流石はよく、頃らく是れ被見にして初めて得べし、然れども是の如くなりと評も  
 我は即ち然るを、僧はよく、和尙はよく、流石はよく、山を用ひて作寮せん。上堂、諸大  
 師、此れは雲水客の来との如し。前庭に座向す。流石不問及を打つて書讀して看よ。玄  
 淡一行僧に對して曰はく、「某甲、何ぞ人に相違しらん、和尙は養生、僧は前の本住を將て  
 一時に相出す。汝、和尙の勸法沙を將す。僧はよく、備置しく、山に在つて是に其の如きを  
 得べし。流石はよく、また是れ自家の事、和尙の勸法沙を將す。僧則ち、和尙を其の如き供  
 養を受く、和尙を將て和尙答せん。和尙を以て地を托へて曰はく、「和尙、我を打て」と。  
 和尙答に人を將す。後長庚に在りて事を批。事を安んずと説す。大僧に問うて庵の基を  
 信らんとす。尼有はく、「僧つて既に坐禪して何して曰はく、「未だ七日に滿たず、堂を出で  
 ん者はよくみならん」と。尼云日に云つて和尙を問く。和尙に其基を尋うて寺を建つ。和尙  
 しく、佛を佛殿に畫して云はく、「山前竟日猶虎無く、庵下終年徒兒を絶す」と。今に在るま  
 で唐省絶して無し。

贊に付はく、

得處頗る幸甚、用ふる時巧甚無し。

唐墓窟に入りて一人を護らず、唐詩の壁に坐る寧ろ少過無からんや。

【第七】 狼狽に同

焦磚打着す、凍底の凍、徳山に就いて點發す多談を假らす  
赤眼撞着す火架頭、巖頭と同行只一箇を消す

松山店頭に成道、半夜發狂す

象骨巖下に踏跟して、全身放倒す

圓木毬輾出す、玄沙火急に脚を作る

鱉鼻蛇撞じ来る、雲門郎忙として草を打つ

門を開いて、輕しく擬議す、老観に撥住せられて風嵐兒に坐す

鼓を打ち普請して看よ、龍大地指し来るに栗鼠の大きさの如し

千七百人の善知識、盡く作頭上より雨み来る

五六里の雪峰山、只蒲團裏に向つて奉侍する

松山の小塔卵石子、亂疊幾層ぞ

古洞寒泉牛蹄瀉、響く深きこと多少ぞ

山前竟日鶴子無し、杖く老僧が行くに絶す

磨下終年雀兒を絶す、膏米の耗ゆるを懸へす

一生大王の俵囊を受く、何を以てか恩を報せん、手境を托して故呼す、輕しく我を打て、

輕しく我を打て

臨濟宗

臨濟慧照禪師

【第一座】 時州陳  
尊宿なり。

【糞困】 しんみに  
糞をる意。親切  
勸勞の義。  
【多子なし】 きや  
うさんなことはな  
いと云ふ意。  
【尿床の鬼子】 寢  
小便たれの意。鬼  
子は罵る話。  
【我事ハ云】 おれ  
がしつたことでは  
ないの意。

師諱は龍玄、曹州單氏の人。幼め黄蘗に在つて、堂に隨つて參得す。時に堂中第一座、勉めて問話せしむ。因つて方丈に上つて問ふ、如何なるか。其は佛法の的の人。其は黄蘗より打つ。其の如く、また問うて、また打たる。遂に辭を虚に告げて曰はく、激勸を承つて問話。唯和尚の棒を觸ふことを蒙る。出く諸方にはきよまらし。座曰はく、汝、頃らく和尚を辭して始めて得べし。師却つて堂頭に往いて告げて曰はく、問話の儀後生なりと傳ふ。甚だ是れ如法なり、若し來り辭せば方便して採取し給へ。一日に上つて辭す、黄高安に往き、大愚に參じしむ。師大愚に到る。愚問ふ、其の處より來ると曰はく、黄蘗より來ると曰はく、黄蘗何の言教か有りし。曰はく、某甲、直佛法の的大意を問うて、一度打たる。長審し什麼の流かある。曰はく、黄蘗徒黨に在堂、汝が爲に徹問なることを得たり。更に著裏に來つて有過無過と問ふか。師云はく、未だ黄蘗の佛法多子なし。愚把住して曰はく、一者尿床の鬼子、前來有過無過と問うて、而今却つて道ふ、黄蘗の佛法多子なしと。汝箇の什麼の道理を見てか、便ち徒黨に道ふ。師愚の肋下に於て坐こと三年、愚折問して曰はく、一汝が師は黄蘗なり、我事に下るに非ず。師曰はく、黄蘗一便ち問ふ、來去去して甚の了明かある。師曰はく、只老淡心切たるが爲なり。衆曰はく、大愚健舌、見を待つて痛く

一頓を興へん。師曰はく、「什蜜の見るを得つとか説かん、即今便ち打たん。蒙曰はく、若  
風頓漢、却つて者裏に來つて虎鬚を撻づ。師便ち喝す。蒙參堂し去らしむ。徑山に五百の  
衆、毎日行道して觀音を念す、一人の參請するなし。山書を作つて蒙に與へ、具に其事を  
言ふ、蒙師をして去らしむ。師徑山に到り、裝屣して直に法堂に上る。山纔に頭を擧ぐ、  
師便ち喝す、山口を開かんと擬す。師拂袖して便ち行く。尋で僧あり、山に問ふ、「浦來者  
僧、甚の言句有りてか、便ち和尚を喝す。」山云はく、「者僧黃檗より來る、爾知らんと要  
せば、自ら去つて他に問へ。」是時五百衆大半分散す。洛浦侍者となら、蒙はずして僧し去  
る。師後に云はく、「可中箇の赤梢鯉あり、頭を搯し尾を擺ひ、南方に向つて去る、觸らず  
龍家の蓋舞妻にか海殺せられん。」師臨終の時に云はく、「吾法後、汝等吾正法眼藏を滅する  
ことを得る勿れ。」聖曰はく、「争でか敢て和尚の正法眼藏を滅せん。」師曰はく、「向後身も  
人あり、汝に問はば伊に向つて什麼とか道はん。」聖便ち喝す。師曰はく、「誰かへん、  
吾正法眼藏、者瞎瞎邊に向つて滅することを」と。

蒙に曰はく、

廣廈の梁、清廟の器

霜を詠る面、冷徹人に逼る

眼を伏する威、颯風地を捲く

睦州に見えて始めて籬を蹴り蹄を蕩ぐるを學ぶ

【誰を蹴り云云】  
盜賊の爲す所。跳  
は飛ぶこゆるな  
り。蕩は馬に上る  
意。

【行をせよ】ム云。白晝の強盜の意。とりがちにすることなり。  
【短氣】無念がり悲しがりなどして胸鬱る意。

【標致】男女の容貌秀れたるを十分の標致と云ふ。

黄葉を掌して便ち行を攪き市を奪ふことを解す

冤を報ずる六十棒、大愚の肋下に向つて築拳す

五百の僧を喝散し、徑山の胸中をして短氣ならしむ

三玄の戈甲を展、遍地鬪寒し

四種の料棟を示す、平地波濤起る

炎天雪雹を飛ばす、單に向上の機籌を明む

赤脚にして氷積に驟る、自ら是れ一般の標致

惜しい哉正法眼、三聖の臘邊に滅向することを

知んぬ赤梢鯉魚、誰家の齋裏にか淹殺する

之を賛する者は其舌泥犁、之を毀る者は洋銅沸泉

遺風餘烈百世を繼いで猶存することあり、鸞膠の絃を讀がんことを求めば違うして違し

興化獎禪師

師諱は存獎。臨州の人。初め臨濟に見ゆ。諱、師をして侍者たらしむ。嘗問ふ、新到甚

の處よりか來る。曰はく、靈城。曰はく、事あり、借問せん、得てんや。曰はく、新戒不

會。曰はく、大唐國を打破して、箇の不會の人を贊むるに得難し、參堂し去れ。師問ふ、

一適末の審判、是れ伊を成禪する那。濟曰はく、我誰か備が成禪不成禪を管せん。師曰は



く、和尚即ち死雀を將て地に就いて彈ずることを解す、一轉語を將て蓋覆却することを解せず。濟曰はく、「爾又作麼生。」師曰はく、「請ふ、和尚新到と作れ。」濟遂に曰はく、「新到不會。」師曰はく、「却つて是れ老僧が罪過。」濟曰はく、「爾が語、鉢を藏す。師擬議、濟便ち打つ。」腕に至つて濟又曰はく、「我今日新到に問ふ、是れ死雀を將て地に就いて彈じ、窠裏に就いて打つ。爾が語を出し得るに及んで、又喝起して青雲裏に向つて打せん。」師曰はく、「草賊大賊、濟便ち打つ。師後に三聖に到つて語じて首座と爲す。常に曰はく、「我南方に向つて行脚すること一遭、爾杖頭に曾て一箇の佛法を會する底を教著せず。」聖聞き得て、問うて曰はく、「爾什麼の眼をか具する。」師便ち喝す。聖曰はく、「須らく是れ爾にして始めて得べし。」大覺聞いて乃ち云はく、「作麼生か風吹いて大覺の門に入り來ることを得ん。」と。師後大覺に到り、語じて院主となす。一日覺喚んで曰はく、「我爾が道ふことを聞くと、南方に向つて行脚すること一遭、拄杖頭曾て一箇の佛法を會する底を教著せず」と。維什麼の眼をか具する。師便ち喝す、覺棒を拈す、師復議、覺便ち打つ、師又喝す、覺又打つ。次の日師法堂より過ぐ、覺院主と名す。我直下に爾が昨日の兩喝を疑はず。師試みに説け、看ん。師曰はく、「我三聖師兄の座に於て爾の宿生の句を得たり、疑に師兄に折倒し了らる、某甲に請ひ安樂の法門を與へよ。」覺曰はく、「若し漢、若し吳に來つて歌訣を納む」と云うて袈衣を卸下せしめて痛く打つこと一箇、師言下に於て、臨濟先師の黃髮の處に在つて杖を喫する底の道理を薦得す。後開堂、香を拈じて云はく、「此一炷の香、若し三聖の鼻にせば

【影草】足もとをさぐるなり。宗師家が學人を接待するに用ふる種種の手段をいふ。

【毘羅云云】心底を殘らず打ち出して見する義なり。羅織はうすものなればはつきりとは見えねども見え透く者なり。眞珠は光る者にて外より見えすく故、驗とす。

三覺は我爲に太だ狐なり、若し大覺の爲にせば、大覺は我爲に太だ豚なり、（か）かじ我臨濟先師に儀義せんには、と。雪屋、三峰に住せし時、師問うて曰はく、「權に一間を借りて以て影草と爲す時如何」居對たし、師曰はく、「想ふに和尚者話を答ふることを得じ、如何かじ禮拜し了つて是かんには。」と。後二十年、居云はく、「如今思量すれば、當時箇の可必と道ふことを消せず」と。後に化王をして師の處に到らしむ。師曰はく、「和尚三峰に住する時老僧伊に話を問ふに、答へ得ず。如今道は得てんや未しや。」主前話を學す。師曰はく、「興化は則ち然らず、争でか箇の不必と道ふに如何ん」と。僧、師に問ふ。曰はく、「四方八面來の時如何」師曰はく、「中間底を打たん。僧作禮す。師曰はく、「興化今日箇の村齋に赴く、中路に一陣の卒風暴雨に遇ふ。却つて古廟裏に去つて避け得て過ぐ。宗衆に言はく、「我聞く其下にもまた晴し、後架にもまた晴す。諸子盲喝亂喝することなかれ。直饒備興化を喝し得て、二十三天に上せて却つて撲つて下來して、一點の氣もまた無きも、興化が蘇息し起き來らんを待つて、款款地に師に向つて未在と道はん。何が故ぞ我未だ曾て紫羅帳裏に向つて眞珠を撮して、備諸人に與へざることぞらん、虚空裏に胡喝して什麼をか作さん」と。師、克賓維那に謂つて曰はく、「汝久しからずして當に唱導の師となるべし。賓曰はく、「者保社に入らじ。師曰はく、「會し去つて入らざるか、會せずして入らざるか。賓曰はく、「總に不恁麼。師便ち打ち、乃ち案に白して云はく、「克賓維那、法戰に勝たず、罰錢五貫鑽飯を一堂に設けて、仍つて飯を喫せしむるを得ず。即ち起つて肉を出さん。師向參の來り纜かに

法堂に上るを見て、師便ち喝す。僧も亦喝し、行くこと三兩歩、師又喝す、僧も亦喝す。師近前して棒を拈す、僧又喝す。師云はく、備看よ著瞎漢、猶主と作ること在り。僧擬議す、師便ち直に法堂を打ち下す。時に僧あり、問ふ、著僧法の和尚に觸忤することかある。師云はく、是れ伊達來、また權あり實あり照あり用あり、手を將て伊が面前に向つて横に兩横するに及んで、便ち去ることを得ず、著殺の漢に似たらば、打たずして更に何時をか待たん。僧問ふ、寶師の蔵すること已に久しきことを知る、今日場に當る、略借せ、看ん。師曰はく、借さじ。曰はく、什麼として借さざる。師云はく、是れ張華が眼にあらずんば、徒らに斗を射る光を窺はん。曰はく、用ふる者如何。師曰はく、一身を横へて宇宙に當る、誰か是れ出頭の人。と。同光帝師に問ふ、默中原を教めて一寶を授たり、未だ人の價を酬ゆるあらず。師云はく、陛下の寶を借せ、看ん。帝手を以て轉頭脚を引いて之を示す。師云はく、君王の寶、誰か教て價を酬いん。帝大に慥び衣裝を賜ふに、受けず、乃ち馬を馳ふ。師馬を驅らしめて、忽ち驚いて地に墜ちて足を傷く、樹手に憑りて行く。僧に問うて曰はく、遷つて老僧を識るや否や。曰はく、一争でか和尚を識らざることを得ん。師曰はく、蹶脚の法師、誤き得て行ふことを得ず。と。

寶に曰はく、

臨濟の的兒、三聖の首座

熱喝雷奔に似たり、龜踏天女の如し

【板齒に毛を生ず】  
前板齒生ぜば、上  
下の四枚を云ふ。  
生毛とはかびの生  
えることなり。

皮下に血なし、大覺に見えて精料を食して先師を慈得す

板齒に毛を生ず、雲居に到つて一間を借つて以て影草となす

村船に赴いて暴風卒雨に遇ふ、古廟裏誰か云ふ渾身を擲得すと

南方に向つて鹿穴窟窟を探る、杖頭未だ曾て一筒を擲著せず

聲を揚げて暗を止む、紫羅帳裏に明月の珠を撮す

眼有りて筋なし、鐵頭脚邊に君王の寶を攝す

同行を勘して手を將て前門に横ふこと、閉上、死伎已に窮まる

克賓を打つて院を出し鎖飯一堂を穿す、人を欺くこと少からず

寶劍を借つて場に當つて看る、光斗を射る籠うて生盲に遇ふ

死雀を將て地に就いて彈ず、語鋒を藏す功過を補は難し

龍顔に對して御馬に乗ず、一場の榮を得ると雖も、蹶隻脚、祖道を穿つる力を盡して行ず

れども到らず

南院顛禪師

師は興化に嗣ぐ。河北の人。法の諱は慧顛。俗名は寶應。師上堂曰はく、諸方只啐啄同

時の眼を具して、啐啄同時の用を具せず」と。僧便ち問ふ、如何が是れ啐啄同時の用。師

曰はく、「作家は啐啄せず、啐啄すれば同時に失す。曰はく、「此れ未だ是れ學人が問處にあ

【欺倒す】 はねかへすの意。

【驢に撲たる】 驢は馬よりは弱し。撲は前足にてふむを云ふ。

【七花八裂】 落花微塵となるの意。

【發惡】 惡發と同じ、立腹するなり

らす。曰はく、汝が問處作麼生。曰はく、失。師便ち打つ、僧背はず。衆に示して云はく、  
一、赤肉團上、壁立千仞。一時に僧あり、出でて問ふ、赤肉團上、壁立千仞、豈是れ和尚  
の語にあらずや。師云はく、是。僧便ち禪床を掀倒す。師云はく、爾看よ、者賤漢の亂做  
なることを。僧擬議す、師便ち打つて院を越ひ出す。僧問ふ、二王相見の時如何。曰はく、  
一、十字街頭に尺八を吹く。又問ふ、從上の諸尊、甚の處に向つてか去る。曰はく、天堂に  
上らずんば即ち地獄に入らん。曰はく、和尚又作麼生。曰はく、遊つて寶應が落處を知る  
や。僧擬議す、師打つこと一掃、師僧に問ふ、近離甚の處ぞ。曰はく、襄州。曰はく、是  
れ什麼物か。恁麼に来る。曰はく、和尚試みに道へ、看ん。曰はく、適來禮拜する底。曰は  
く、錯。曰はく、禮拜底箇の什麼をか錯まる。曰はく、再犯客さす。曰はく、三十年馬騎  
を弄す。今驢に撲たる。賤漢參堂し去れ。僧問ふ、人罽眼に逢ふ時如何。曰はく、鬼漆桶  
を争ふ。僧問ふ、古殿重ねて興る時如何。曰はく、明月瓦簷に挿む。僧曰はく、恁麼な  
らば、明ち莊嚴し畢つて備へ去らん。曰はく、草を斬れば蛇頭落つ。僧問ふ、普喜督曠の  
時如何。曰はく、湫を傾け嶽を倒す。僧問ふ、如何が是れ無縫塔。曰はく、七花八裂。曰  
はく、如何が是れ塔中の人。曰はく、頭禪らず、面洗はず。僧問ふ、祖意教意是れ同か  
是れ別か。曰はく、黃尚。古李傳射。曰はく、意旨如何。曰はく、牛頭は北に向ひ、馬頭  
は南す。師、僧に問ふ、近離甚の處ぞ。曰はく、龍興。曰はく、發足して菓籃を解るる  
こと莫しや、また無しや。僧便ち喝す。曰はく、好好に汝に問ふ、又發意して作麼。僧曰は

く、喚んで、（と）と作し得てんやに、（と）聞きて、（と）喝して曰はく、（と）側近に懸け、（と）手もまた、（と）心後、（と）近前來、（と）我もまた、（と）没量の界過、（と）備したる、（と）没量の界過、（と）臨濟宗堂に去れ、（と）實に曰はく、

一語解宗を定む、作家は神機せず

興化の的（と）子、氷蘗の胸（と）機、

臨濟の親孫、麟龍の頭角、

赤肉團上壁立千仞、禪位を掀（と）二律儀を打す

十字街頭二王に相見す、只八を吹いて聲雅樂を亂る

詔聖甚れの處にか去る、謾に云ふ地獄に入つて天堂に上らずと

何物か恁麼に来る、灼然として馬蹄を弄して今驢に撲る

一機一境、斗を擲へ星を移す

臂著臂噴、湫を傾け獄を倒す

頭（と）梳らず面洗はず、塔中の人描畫すとも未だ全く眞ならず

馬は北に向ひ牛は南に向ふ、祖意搏量するに俱に是れ錯

老作に従游す、廊侍者と一再同坐

小家を弄出す、龍興の僧に隨つて遞に相發惡す

千聖の眼を彈して蹤由を覚めんと擬す、白日青天風雷雨雹

【小家】 初心など  
と譯す。

風穴沼禪師

【理能く云々】系  
能く胎を割するこ  
と理能は割に作る

禪師は延沼。餘杭劉氏の子。初め講肆に遊び、止觀を習ふ。棄て去つて鏡清に謁す。清問ふ、「近離甚の處ぞ。」曰はく、「東を離れてより來る。」曰はく、「還つて小江を過ぐるやまた無や。」曰はく、「大朝興り空に飄へる、小江濟るべきなし。」曰はく、「鏡水秦山、鳥飛び度らず、且く道に聽いて途に説くこと勿れ。」曰はく、「滄溟尙無鰲の舟を信る、磧漢に帆を飛ぼして五湖を渡る。清、揚子を堅して云はく、「昔曾を争奈何せん。」曰はく、「昔曾是れ什麼ぞ。」曰はく、「果然として識らず。」曰はく、「出沒卷舒、師と同じく用ふ。」曰はく、「一豹ト虚懸を籠く、執譯して味語健し。」曰はく、「澤廣うして山を藏し、理能く豹を伏す。」曰はく、「罪を教し愆を伏す、連かに須らく出で去るべし。」曰はく、「出で去らば即ち得」と云うて傾ち去る。此のあたれ海汚に海苔、華堂に依止す。僧問うて曰はく、「我に教牛の義あり、鎌ち請ふ、開葉割せよ。」曰はく、「犢皮履を捨ひ、牛豹蹄、蓮花の作樹鴨城都、被南院に見ゆ、院師に問ふ、「南方の一作、作雲が高量する。」曰はく、「奇物の高量を作す。」却つて問ふ、「此間の一作、作雲が高量する、院師に往杖を按じて云はく、「棒下の無生忍、棒に臨んで師を見ず。」師言下に於て大悟し、風穴に出世して南院に師を所別ふ、古曲百韻なし、如何が和し得て齊しからん。」曰はく、「末親子雲に啼き、芻狗天明に吠ふ。俗明ふ、如何が是れ和尙の家風。」曰はく、「龍に九阜あり、莫を意ひ難し。馬に千里なし、漫に追風す。」示

## 【五漫】 大師の意

師に云はく、若し是れ上流ならば、おろくじよるこ 各證據ある者は、あち 略節の親眼に赴け、未だ證據せざらん者は、各自に英雄當處えいゆうたうじよに出生し、すあひしよ 隨處に滅盡す。龜紋を爆するが如し、爆すれば即ち兆と成り、爆せざれば鐘と成る、爆せんと欲して爆せざれば直下に便ち墮す。郟州の牧、しよ 讀して寫に就く。墮座して日はく、祖師の心印、狀鐵牛の機に似たり、去れば即ち印住し、住すれば即ち印破す、只去らず住せざるが如きんば、印するが即ち是、印せざるが即ち是、時に盧陂長老あり、問でて問ふ、某甲鐵牛の機あり、請ふ、師、印を拈けされ、日はく、鐵籠を釣つて巨浸を澄ましむるに慣て、攀つて登り、泥沙に墮すること、散竹思す。師唱して日はく、長老何ぞ進請せざる。散竹思す、打つこと一拂して云はく、還つて話頭を思得するや、試みに拈せよ看人に散竹を問かんと擬す。師又打つこと一拂。牧主日はく、作法は王法と一較。師日はく、什麼をか見る。主日はく、師に當つて斷せざれば返つて具徳を招く。師便ち下座す。僧問ふ、如何が是れ佛。日はく、如何が是れ佛にあらざる。日はく、未だ玄言を曉らず、請ふ、師直指せよ。日はく、一家は海門の東に住す、扶桑最も先づ照す。僧問ふ、有無俱に無にし去る時如何。日はく、三月海風に飄し花下の路、一家愁へて閉づ雨中の門。僧問ふ、語默離微に涉る、如何が不犯を通せん。日はく、嘗て憶ふ江南三月の裏、鷓鴣啼く處百花香し。』

費に日はく、

卯金刀、眞の跳通



天台の止觀を習ふ、幼にして歸浄に法ぐ  
少室の單傳を究む、直に闍奥に處る

棒下の無生忍、南院の毒に中てられて苦心に入る  
杓下虚聲を聽く、鏡清の理能く釣を伏することを抗す

芻犬明に吠え木鷲夜に啼く、古曲を調べて音韻成さず  
老鶴翼を翫ひ病馬風を追ふ、家風を話して須臾少からず

生滅の處を管窺す、蠟龜の紋鉢未だ分明ならず  
祖師の心を蓋濁す、鐵牛の機去住印破し難し

海に近き扶桑最も生づ照す、直指の事要且つ瞞肝  
達村の梅樹崎盧那、牧牛の歌度知することを爲し難し

有無俱に生滅す、一家愁へて閉づ雨中の門  
語默飄微に涉る、三月亂れ啼く花下の鳥

玄中の玄、妙中の妙、漚洒たる浙僧更に兩箇無し

### 首山念禪師

師は風穴に嗣ぐ、諱は省念。萊州狄氏の子。師、真國頭と同じく上つて、穴に問訊す。  
穴眞に問うて曰はく、「作麼生か是れ世尊不説の説。」眞曰はく、「轉法輪上に啼く。」穴曰は

【元云云】 不立  
【同家】 結なり。

く、「汝許多の福を存して作麼、何ぞ言句を體せざる。」  
 容に古路を揚、悄然に覆せず。「穴、直に評、「曰はく、「汝何ぞ法華の下語を看ざる。」一日白兆、楚、汝州につて宣化す。穴、師をして往いて語せしむ。纒かに相見して坐具を提起して便し、師ふ展ぶるが即ち、異べざるが即ち是。兆曰はく、「自家に看せよ。師便ち喝す。兆曰はく、「我曾て親しく知處に見え來も、未嘗て驚ち敢て麼麼に逆次ならし。曰はく、「草賊二殺。」兆曰はく、「昔し穴和尚に見えば、一一に舉似せんを待て。曰はく、「一任一任にすることを得され。師つて穴に舉似す。穴曰はく、「今日又爾に。具の草賊、汝下らる。」曰はく、「好子は看を彰す。兆次の日、纒かに相見して便ち前話を尋々。穴曰はく、「但昨日のみに非ず、今日曠に翻して捉敗す。此に因つて看はる。師、示して曰はく、「佛法は國王大臣有川の權那に付寫して、燈燈をして相續不斷ならしむ。人衆はく、「へ、箇の什麼を續々。」良久して曰はく、「爾らく是れ迦葉師見にして始めて得べし。一時二信あり、出でて問ふ、「靈山の一言、何を今日に異ならん。」曰はく、「坑に墮ちて落つ。」曰はく、「什麼として、其のくくな。」曰はく、「靈。問ふ、「如何が是れ和尚の家風。」曰はく、「一言に千江の口を截斷して、萬里外前に始めて玄を得たり。」曰はく、「何なるか是れ佛法の大意。」曰はく、「楚王城畔汝水車に流る。」上堂曰はく、「若し此事を論せば實に一元字脚を掛けず。便ち下座。僧問、「如何が是れ梵音の相。」曰はく、「鐘鳴大吠。曰はく、「如何が是れ佛。」曰はく、「新姑驢に騎れば阿家牽く。」曰はく、「未審し、此

語、甚の句中にか收むる。曰はく、「三玄收め得ず、四句豈能く讀ねんや。」曰はく、「此意如何。」曰はく、「天長地久、日月齊しく明かたり。」上堂曰はく、「第一句下に薦得すれば、佛祖のたまに師となるに堪へ、第二句に薦得すれば、人天のために師となるに堪へ、第三句下に薦得すれば、自救不了。僧問ふ、「如何が是れ無礙の一路。」曰はく、「或は山間に在り、或は樹下に在り。問ふ、「從上の諸聖甚れの處に向つて、行履する。」曰はく、「一轡を牽き把を挽く。」問ふ、「如何が是れ道。」曰はく、「爐中に火あり、撥するに心なし。處は横構意に任せて遊ぶ。」如何が是れ道中の人。」曰はく、「坐して看る煙霞の秀、白雲と齊しからざること。」を。」

贊に曰はく、  
海に戲るる鸚鵡、群を空する良馬

鳥喙の業を喚して、骨に和して塵へ來る

正啼の念を將て、情を盡して壽命す

動春に古路に鶻や、風穴毒を挿つて深く埋まる

好手名を影はささず、白兆を將て翼に和して提散す

漢家風節當分ならず、千江の百萬軍の前

徑截の路迂回轉た多し、或は山間或は樹下

盲に和して勃草として懸す、靈山の一言を盡して塵に等らんに成せしむ

【漢家風】やくざ  
の意、すたれもの  
の意

惡毒未だ懐に忘るず、從上の首聖を驅つて、單を牽き肥を搜かしむ  
驢鳴犬吠梵音の相、敢て聞かんことを願はん

地久天長眞の佛身、未識在なることを保す

三句を讀て天下の清僧を驚すと云も、我且く僧に問はん、管絃に騎れば阿家牽く、是れ何の語話ぞ

汾陽昭禪師

【龍袖】左右の袖をかき合すを云ふ

師諱は善昭。太原の人。俗姓は徐。初め首山に謁し、上堂に遇ふ。出でて問ふ、「馬祖降堂、百丈席を卷く意旨如何。」山曰はく、「龍袖拂開して全體現す。」曰はく、「師の意如何。」山曰はく、「象王行く處狐疑を絶つ。」師言下に於て大悟す。示衆凡そ一句語に、須らく三玄門を具すべし。一玄門毎に須らく三要略を具すべし。照あり用あり、或は先照後用、或は先用後照、或は照用同時、或は照用不同時、或は先照後用。且く備と共に商量せんことを要す。或は先用後照、また須らく是れ箇の人にして始めて得べし。或は照用同時、備又作麼生か當抵せん。或は照用不同時、備又作麼生か湊泊せん。衆に示して云はく、「汾陽に三訣あり、衲僧辨別しがたし、更に如何と問はんと擬せば、拄杖驀頭に楔たん。」と。僧問ふ、「如何が是れ初機を接する句。」曰はく、「汝は是れ行脚の僧。」如何が是れ衲僧を講する句。」曰はく、「西方日は卯に出づ。」如何が是れ正令行する句。」曰はく、「千里持來りて舊

面を呈す。一如何が是れ乾坤を定むる句。一曰はく、一北俱盧洲の長粒米、食する者喜なく亦  
 嘆なし。一僧問ふ、如何が是れ賓中の賓。一曰はく、一庵前に合掌して世尊を問ふ。一如何が是  
 れ賓中の主。一曰はく、一對面侍僧なし。一如何が是れ主中の主。一曰はく、一三頭六臂天地を撃ぐ、忿怒  
 る、劍を抜いて龍門を撥す。一如何が是れ主中の主。一曰はく、一三頭六臂天地を撃ぐ、忿怒  
 の那吒帝鐘を撲つ。一僧問ふ、如何が是れ學人著力の處。一曰はく、一嘉州、大像を打す。一如何  
 何が是れ學人轉身の處。一曰はく、一陝府に鐵牛に灌ぐ。一如何が是れ學人親切の處。一曰は  
 く、一西河に師子を弄す、北地苦寒なり。一と。一昨夜參を罷む、異比丘あり、錫を振うて至る。  
 師に謂て曰はく、一會中に大十六人あり、奈何が說法せざる。一言ひ訖つて空に墮つて去る。  
 師記するに偈を以てして曰はく、一胡僧金錫光る、法を請うて汾陽に到る、六人大器を成す、  
 勸請して爲に敷揚せしむ。一

贊に曰はく、

孤高世を絶す。靜退倫を離る

寶鼎芝房清廟の瑞、瑤林瓊樹滄海の珍

大象經行すれば狐蹤を絶す、頰に言外の旨を聞む

吹毛拔出して龍門を捲く、誰か主中の賓を譲らん

筒鉢の機を發す、三玄門擊開照あり用あり

乾坤を立する句、長粳米喫著喜もなく嘆もなし

【圓通】 聖道明花  
聖草など、聖影に  
かゝるまこと云

河に師子を弄す大いに風骨を欠く、祖門と道うて親切ならず

法中に流俗に流るる方を明に盡す、轉身を要して轉身し

法問千聖も何らずと謂ふ、宿僧を歸するに三訣あり

聖師問僧に破せらる、大器を成す只六人

聖師の裏に過從す、同坑に異上なし

道明を還うて無罵す、飯僧と祭る

電捲き風旋る、七十二員の善知識に參す

撥泥帶水の處に到つて、最も苦しきは是れ十智同眞

襄陽省禪師

師は首山に闢ぐ。諱は歸省。冀州賈氏の子。師、首山に到る。山竹篋を擧げ、問うて曰はく、「喚んで竹篋と作さば則ち響る。喚んで竹篋と作さざれば則ち音く。喚んで什麼とか作さん。」師、竹篋を擧げて抛して兩截と作して、地に擲つて曰はく、「是れ什麼ぞ。」山曰はく、「瞎。」師便ち作禮す。僧問ふ、「法海の一滴、師の指すことを蒙る、向上宗乘の事如何。」曰はく、「高祖殿前樊噲怒る、須らく知るべし、萬里烟塵を掃つことを。」僧問ふ、「維摩の丈室、日月を以て明とせず。」曰はく、「眉八字に分る。」曰はく、「未審し、意旨如何。」曰はく、「雙耳肩に垂る。」僧問ふ、「如何が是れ清淨法身。」曰はく、「廁所の壽子。」問ふ、「如何が是

れ吡盧の主。曰はく、一偈は夏臘を拂し、俗は耆年を死す。問ふ、如何が是れ深深の處。曰はく、一猫に敵血の功あり、虎に起屍の徳あり。曰はく、一便ち足なることなし。また無や。曰はく、一確は東南に掲ぎ、磨は西北に推す。一業に示して云はく、一宗師の血脈、或は凡或は聖、龍樹、馬鳴、天堂、地獄、錢湯、煉炭、牛頭、獄卒、森羅萬象、日月星辰、他方此界、有情無情、手を以て畫一畫して云はく、一俱に此宗に入る、此宗門の中亦能く人を殺し、亦能く人を活す、殺人は須らく是れ殺人刀なるべし、活人は須らく是れ活人の句なるべし、作麼生か是れ殺人刀活人句、道ひ得る底、業に對して道へ、看ん、若し道ひ得ずんば即ち平生に孤負せん。師面目嚴冷にして衆の敬畏する所なり。天衣の埃、浮山の遠、二人至る求めて住せんと欲す、正に雪の寒に値ふ。師水を將て且過に灌ぐ、其餘は皆怒つて去る。唯二人衣を整へて復生す。晚に至つて師到つて呵して曰はく、師更に去らずんば我師を打たん。遠近前して曰はく、一某數千里、特に來つて和尚の禪に參す、豈一杓の水、澆ぐを以て便ち去らんや。若し打殺すともまた去らじ。師笑つて曰はく、一師兩箇參禪を要するか。却つて去つて掛搭せよ。續いで遠を請じて典座に充つ、事武庫に見えたり、鉢に其に載せず。

費に曰はく、

項鐵重きこと千斤、備強人の敵するなし。

首山の活業を分つて自ら支撐す、臨濟の家私を將て盡く毀壞たり。

淨身、圓鏡子倒用拈拈  
觸背の機、撥竹篋の擲擲

高祖殿前笑吟吟、宗風を把つて凌辱すること太た多し

維摩の丈室日月明かなり、意旨に當つて人信不足

毗盧の師法身の主顧ひて分疎す、管は夏臘を操し倍は昔年を列す

起屍の徒試血の功起つて計信す、瘰は東南に擣き瘰は西北に推す

黃葉の肝腹霜面に冷じ、天女に渡いで凍つて氷と成さしむ

煉劍の肝膽鐵を心と爲し、浮山を逼りて走つて壁に上ることを得しむ

没巴鼻惡情惊を弄出す、活人の句、殺人刀、晴空裏に箇の靈臺を講かす

浮山圓鑑禪師

【感痛深】 感は感なり、性之意、深は感なり

師諱は法遠、圓鑑と號す。華縣に嗣ぐ。鄧州の人。王氏の子。上堂云はく、諸佛出世、化門を建化す。三身智眼を翻れず。亦摩訶首羅の三目、圓伊の三點の如し。何が故ぞ一隻眼は水泄げども通ぜず、縑素辨じ難し。一隻眼は大地全く該ね十方通暢す。一隻眼は高底一へに顧みて、萬類齊しく瞻る。然も是の如くたりと雖も、若し是れ木色の衲僧、鷲路に相逢はば、別に正眼を具して始めて得ん。所以に道ふ三世諸佛有ることを知らず、狸奴白特却つて有ることを知る。且く道へ箇の什麼をか有ることを知る。良久して、深秋簾幕千



【五を緩り云云】三を饒さばは三日置くこと、五を緩るは五日置くの意、緩は形を以て云ふ、鈍は數を以て云ふなり。

【又一路を云云】五日三日置きて又其上に一手あしむの意。

【門を閉ぢ云云】目をこしらへて生きんとするなり。

【角を奪ひ云云】碁の詞、衝はさしいるにて、關は一けんなり。

家の雨、落日樓臺一笛の風、五祖演和尚游方して師に參ず。師曰はく、「子來ること晩し、吾老たり、白雲に依るべし。吾未だ識らずと雖も、渠が臨濟三頓棒の話を頌するを見るに、甚だ適當なり。」と。演遂に往いて雲に見えて旨を得たり。師青華嚴を接して、授くる所の大陽の衣履を以て之に付して、洞上の宗を續がしむ。爾に曰はく、「須彌太虛に立つ、日月附して而も轉ず、群峯漸く他に倚る、白雲方に改變す、少林の風裏に起る、曹溪洞瀝捲く、金風龍翼に宿す、寢吾豈車輶らんや」と。初め歐陽文忠公は師の奇絶なるを聞いて、師を見て未だ以て之を異とすることあらず。因に客と暮す、師旁に坐す、公甚を救む、師を請じて林に因つて說法せしむ。師即ち杖を擲たしむ。上堂曰はく、「若し此事を論せば、兩家の碁を著つが如くに相似たり、何の窮ぞや、敵手知音ならば覆に當つて覆らず、若し是れ五を緩り、一を饒さば、又一路を通じて始めて得ん。一盤底あり、只門を閉ぢ、活を作すことを解して、角を奪ひ關を衝くことを會せず、鷹節虎口と齊しく彰る、局破れて後、徒に運轉を勞す。所以に道ふ。聖邊は得易く、瘦肚は求め難し。思ひ行けば即ち往往に粘を失す、心負なれば乃ち時時に頭撞す。兩手に秀つて護に神仙を置くことを休まず、局に纏ら籌に輸くることは即ち問はず、且く道へ、黑白未分の時、一著其れの處に落在する。良久して云はく、「從前の十九路、幾多の人をか迷悟する。」と。公知嘆すること之を久しうす。

師、會衆嚴に退休す、佛祖の奥義を宣し、「九帯を作りて曰はく、若し個極の法門に據らば、本十數を具す、今此九帯、已に諸人の爲に記き了れり、更に一帯あり、覆つて見るや、若

【石】石の  
 【竹】竹の  
 【虎】虎の  
 【白】白の  
 【日】日の

【石】石の  
 【竹】竹の  
 【虎】虎の  
 【白】白の  
 【日】日の

【石】石の  
 【竹】竹の  
 【虎】虎の  
 【白】白の  
 【日】日の

【石】石の  
 【竹】竹の  
 【虎】虎の  
 【白】白の  
 【日】日の

しきた見得分明たらば却つて前ふ、出て来つと云け、石人、... 得て分明たらば備にすす、  
 前の九底に通じて道眼を圓明すること。若し疑難切なるは、... 却つて知何。衆無語、師叱して  
 が語に依つて己が解と爲さば、則ち謗法と各く。諸人此に對つて、... 衆無語、師叱して  
 之を去らしむ。師少き時、遠鏡の鏡前、頭と七八人、蜀に入つて青林、遠和尙に水晶宮に見  
 え、雲門の宗旨を探る。幾んど横逆に遭ふ、智を以て脱することを得たり。衆師の事事を  
 曉すを以ての故に、遠鏡公と號す。師晚年、侍者を得て甚だ之を喜び、凡そ人を接する皆  
 資に委す。

【活】活の  
 【一】一の

日餓るる時、佛祖を將て吞む、脚到る處、森林を把つて掘く

【老】老の  
 【蚌】蚌の  
 【胎】胎の  
 【出】出の  
 【明】明の  
 【月】月の  
 【珠】珠の  
 【光】光の  
 【八】八の  
 【結】結の  
 【表】表の  
 【透】透の

老蚌の胎を出づ、明月の珠、光八結の表に透る

【老】老の  
 【東】東の  
 【山】山の  
 【指】指の  
 【白】白の  
 【雲】雲の  
 【正】正の  
 【傳】傳の  
 【印】印の  
 【奪】奪の  
 【は】はの  
 【し】し  
 【た】たの  
 【は】はの  
 【が】がの  
 【欲】欲の  
 【せ】せ  
 【ざる】ざるの  
 【を】をの  
 【人】人の  
 【に】に  
 【是】是の  
 【す】す

老東山を指して白雲正傳の印を奪はした、己が欲せざるを人に是す

【青】青の  
 【華】華の  
 【嚴】嚴の  
 【逼】逼の  
 【めて】めて  
 【明】明の  
 【安】安の  
 【密】密の  
 【付】付の  
 【衣】衣の  
 【を】を  
 【受】受  
 【け】け  
 【し】し  
 【た】たの  
 【は】はの  
 【次】次  
 【備】備の  
 【に】に  
 【及】及  
 【ぼ】ぼし  
 【過】過  
 【我】我の  
 【に】に  
 【在】在  
 【り】り

青華嚴を逼めて明安密付の衣を受けした、次備に及ぼし過我に在り

【雲】雲の  
 【門】門の  
 【の】の  
 【宗】宗の  
 【旨】旨の  
 【を】を  
 【探】探  
 【る】る  
 【被】被の  
 【草】草の  
 【鞋】鞋の  
 【蜀】蜀の  
 【山】山の  
 【雲】雲の  
 【を】を  
 【踏】踏  
 【斷】斷  
 【す】す

石  
【十九路】 秦楚の  
驍將

葉縣の家風を苦しむ、鑰匙を竊んで、塩に香積の鎖を開く

深秋萬葉千家の雨、三世の諸佛未だ精檢することを許さず

落日掃葉一箭の風、白牡丹奴儀の令時をか耐れん

横に九歌を乞ふ、萬葉集裏出願に求む

萬機を休罷す、會聖殿中に枕を高くして臥す

少時落領、録公の名を贏ち得たり。年老いて塵と成り、雲作古を引いて全身草に入らしむ

慈明國師傳

師諱は楚圓。汾陽に對す、本州李氏の子。少くして壽生となり、博覽にして出家せしむ。谷泉嶽無等と汾陽に見えて旨を傳じ、龍太師の龍華と同しく開を辭す。相讓つて背て參頭と爲らば、陽偶を承して曰はく、「天賦なし吉州城野に孝子を展ふ、將軍の定陽林下に過ぐ、員州城裏閑歌歌、龍口はく、「某甲は何人ぞ敢て此記前になる」と。遂に背と爲つて辭し去る。後國師に住す。黄龍、師に見ゆ、氣を以て自負す、師驚く之を平す。趙州龍溪の話を擧げて龍に問ふ、龍對なし、數日に至つて方に背す。頭を呈して曰はく、「雲林に集出す是れ趙州、老實龍溪來山なし。而今四海清うして鏡の如し、行ふ法を以て經となすなかれ。」仍ち掌中に於て有り字を現す。師見て謂つて曰はく、「好は問を好なる人、中に一字の不是なるあり。」龍遂に「掌を開いて之を示す、師印可す。無岐參する次で、問ふ、「師、龍溪の龍、

雲を辭して亂峯に入る時、師曰はく、我は荒草裏に行く、汝は又深村に入る。岐曰はく、官には針をも容れず、更に一間を借らん。師便ち喝す。岐曰はく、好喝。師又喝す。岐も亦喝す。師汝喝兩喝す。師泉大道の來るを見て問うて曰はく、片雲谷口に横ふ、游人何れの處にか來る。泉曰はく、一夜來何れの處の火ぞ。古人の墳を焼出す。師云はく、未だ、更に道へ。泉、虎聲を作す。師打つこと一生具、泉便ち師を推して坐に就かしむ。師、虎聲を作す。泉曰はく、我七十餘員の善知識に見ゆ、今日方に作家に遇ふこと。時に眞、點胸、善侍者の爲に折難とられ、金懸より瀝る。師呼して曰はく、解夏未だ一月ならず、乃ち已に此に至る。衆林を破壊して、何の忙はしきことかある。眞曰はく、大事未だ透脱せざるのみ。師曰はく、汝何を以てか佛法の要切となす。眞曰はく、雲の嶺上に生ずる無ければ、月の波心に落つるあり。師點りて曰はく、面皺み前髪にして、猶此見解をなすか。眞曰はく、願はくは、爲に之を決せよ。師曰はく、汝我に問へ。眞、前話を理す。師曰はく、雲の嶺上に生ずる無ければ、月の波心に落つるあり。と。眞遂に契悟す。師、同人の至るに因つて上堂曰はく、颯然たる涼風景、同人寂寥を訪ふ、茶を煮る山上の水、鼎に焼く湖中の蘆、珍重と。揚李の二公、師と法友たり、問答は師の本條に見えたり。

贊に曰はく、

未だ母時を出でざる時、已に超方の志を具す

【同人】 同志の人なり。

儒冠を厭うて東魯の書を棄つ、祖室に入つて西來意を叩く

隨緣放曠、千尋の浪戯に吞舟の魚を容る

大智洞明、九曲の珠、穿つことは絲を引くの蟻に頼る

身を軍伍に竄す、汾陽に葦草叢中に見ゆ

老婆を傳證す、黃龍を南金爐裏に煮る

骨董爾斯文の重寄を荷ふ、一縷千鈞を繋ぐ

將軍の馬蹏畔の戈矛を展ぶ、隻身萬騎に嬰る

深村荒草、楊岐と轡を同じくして途を同じうせず

野火古墳、谷泉の自ら倒れて響つて自ら起るに聽す

鷹嶽頂に搏つ、殺氣雲を蒸す

虎霜華に踏る、腥風地を捲く

痴兒の狂見解を掃ふ、波心の月ありて巖頭の雲なし

同人の霞窓を訪ふを謝す、酒中の醜を焼いて山上の水を煮る

祖庭秋曉る、尋思して公侯の捍城を要す、且楊翰林李都尉を推下す

楊岐會禪師

師諱は方會。冷氏に生る。袁州宜春の人なり。慈明南原に住する時、師往いて依す。



釣つりを垂たれて、浪なみを衝つく鑿はくたる游魚うりぎを釣つる

慈明あみあきらを逼せめて晩參ばんさん、裳ももを棄すけて鼓つづみを搗うつ

九峯くさうと伴ばんを合あせて、把はを執とり擊うちを扶たすく

三脚さんかくの躰たに跨またがる、驪りして象龍ぞうりゆうの頭いを踏ふむ

單丁たんていの陣じんに住す、満床まんじゆう水みづ雪ゆきの珠たまを撒まく

栗棘りつきは白雲はくうん端たんの香吐かうとすることを要えす

折脚せつかく保寧ほうねい勇ゆうに付ついて提ていせしむ

斤削しんせう鑿はく、匠石じゆうしやくの壞くわい壘らいを去さるに擬なす

紺こん妙密めうみつ、玉人ぎよくじんの瑠璃るりを治ちするが如ごとし

故こに少室せうしつの單傳だんてん全く掌握さつぎに付つす、後人こうじんの擗ひりしを觀みみ別わかれ治ちふことを觀みれば、師しに

桃ももぎとんことを得えんや

真龍まのりゆう南禪なんぜん師し

師し諱なづなは慧南えなん。慈明あみあきらに嗣つぐ、信州しんしゆう章氏ちやうしの子こ。信山しんざんに處ある。初はつめ泐れつ潭たんの印證いんしやうを受け、

掌てを領りやうめて游方ゆうぽう、氣きを以もつて自負じふす。偶なつ雲うんの世よに轉まじく真山まのやまに歸かへる。夜話やわの如ごとし、

因よに泐潭れつたん授さづくる所の旨こころを問とふ。師し思おもひ言いふ。使し行ゆく。泐潭れつたん授さづくる所ところは美禾みげ鎮ちんの如ごとし、

前に真まふべし、觀みに入いれば即すなはち流ながる。公案こうあんして真まを明あめると前まへ世よに、觀みるに無明むみやうに見まは

えて前めて得べし」と。師曰つて杖を以て之に投ぐ。徒與に驚らす。師然して之を計つて  
 曰はく、「悦擊巖を師とす、我をして明に見えしむ。縦ひ得る所有りとも、悦に於て何か有  
 らん。黎明に案に行く、中路に幸りて明の者と事とせざるを聞いて遂に往かず。巖巖に  
 冥止す。賢、師に命じて書紙を掌らしむ。杖かに貫穿す。郡守、明を以て之に問がしむ。  
 師曰はく、「悦我をして案に見えしむ、今社に坐して以て待たん。」と。明至る、笑み見るに  
 心容俱に肅む。曉參に就んで諸く諸方の形勢を問す。師乃ち曰はく、「大丈夫此事の爲に決  
 擇を求む、豈巖を胸中に置くべけんや。吾を杖にして、指示を求む。明日はく、「書記  
 徒を領じて行脚、事あらば坐して商榷すべし」と。侍者をして杖を進めしむ、師固辭す。明  
 曰はく、「書記、雲門の語を學ばば必ず其旨を言くせん。」明由に三頭杖を放すと曰ふが如き  
 んば喫すべきか喫すべからざるか。師曰はく、「喫すべし。」明色を莊にして言ふ、「棒の音を  
 聞いて便ち喫すべし」と言はば、且より鼻に平るまで鴉鳴鶴唳、鐘魚鼓磬の聲を聞いても亦棒  
 を喫すべし。棒を喫せば何時か當に已むべけんや。」と。師面然し汗下る。後に方に旨を悟  
 る。師、黃龍に住す。佛手驢脚生緣を以て學者を勘驗す、黃龍の三國と號す。慈明に角虎  
 たり。人贊して曰はく、「石霜の角虎、眼光百歩の威を搖かす。」と。明に云はく、「明月の珠、  
 夜光の璧、暗を以て之に投ずれば、則ち輝を按じて之を視ざることなし。」  
 贊に曰はく、

懷玉、由に經を受け、故紙堆に鑽出す



【匾頭】平かなるを云ふ。操ひ棒を匾擔と云ふ、ひらたくなつていびむの意。  
【怪しむ】怒るの意。立腹するなの

天地に塞がる壯膽氣冲たり、江瀾に滿ちて匾頭の名藉藉たり

枕子を擲ちて雲峯の悦を打つ、汞銀の焔に入れば即ち流ることを怪しむ

胸次を指して慈明の圓を扣く、痛棒の聲を聞いて喫すべしと云ふことを憶づ

會監寺の栗棘蓬と、十載同參

澄敬聖の冬瓜の印を拵けて、半生屈を受く

通衢に坐して物を駕ぐ、滑筭暗脚之を探つて意消す

三關を立して以て人を驗む、佛手驢脚之に近けば魂失す

角虎の眼を奪ひ、光百歩の威を搖かす

黃龍の鼻を奮つて、九圓の盤を偏起す

夫れ是れ、之を臨濟克く其家を世ぐ、古を照し、今を照し、明月の珠、夜光の璧と謂は

寶覺心禪師

師諱は祖心。黃龍に嗣ぐ。南雄の人。姓は鄭氏。幼にして儒學を習ひ、年十九にして肯

本。母之を慕つて復明かなり。出家して詩を獻す。得度り荷山雪峯に謁して留る三年、次

に黃龍に依る。四年入庵なし。一日湯を傾け手を沃いで省あり、而も猶未だ發せず、後石

室に止りて傳燈を讀み、併、多羅に問ふ。如何が是れ多羅一葉の竹。師曰はく、二葉兩

【分骨】骨も分  
の義。雪風記談  
に、收二提道淋  
狂法。管兗州  
後來管仲狂雪理  
正爲信とあり。

草は斜に、日影はく、一寸、新日はく、一、黄国草は曲れり、と云ふに、吾は、二、  
其の處をば、三、神人説す、四、信じて作す。室中多く、五、筆を削りて、六、日ば、七、喚んで、  
八、作さば、九、爾の、十、喚んで、十一、筆を削りて、十二、作さざれば、十三、則ち、十四、昔く、十五、衆、十六、  
十七、に、十八、且て、十九、其の、二十、久しく、二十一、黄国草の、二十二、筆を削りて、二十三、對り、二十四、  
二十五、らく知るべし、二十六、筆を削りて、二十七、寫し、二十八、筆を削りて、二十九、寫し、三十、  
三十一、ことなし。太悲、三十二、はく、三十三、此、三十四、筆を削りて、三十五、留し、三十六、  
三十七、須らく知るべし、三十八、筆を削りて、三十九、寫し、四十、筆を削りて、四十一、  
四十二、んと要せば、四十三、亦、四十四、亦、四十五、亦、四十六、亦、四十七、亦、四十八、亦、四十九、亦、五十、亦、  
五十一、拳垂示、五十二、赤體を、五十三、龍、五十四、龍、五十五、龍、五十六、龍、五十七、龍、五十八、龍、五十九、龍、六十、龍、  
六十一、む、六十二、從、六十三、教、六十四、人の、六十五、住、六十六、山、六十七、翁と、六十八、嘆、六十九、ぶ、七十、こと、  
七十一、嘉、七十二、嘉、七十三、嘉、七十四、嘉、七十五、嘉、七十六、嘉、七十七、嘉、七十八、嘉、七十九、嘉、八十、嘉、  
八十一、山谷師に、八十二、參、八十三、する、八十四、次、八十五、問、八十六、う、八十七、て、八十八、曰、八十九、はく、九十、  
九十一、な、九十二、し、九十三、と、九十四、如何、九十五、。九十六、谷、九十七、屢、九十八、説、九十九、け、  
問うて曰はく、一、雪、二、つて、三、桂、四、花、の、五、香、を、六、聞、七、か。八、谷、九、曰、十、はく、十一、  
十二、し。十三、谷、十四、遂、十五、に、十六、省、十七、あり。十八、死、十九、心、二十、參、二十一、する、二十二、次、二十三、師、二十四、  
二十五、を得たり。然れども、二十六、談、二十七、辯、を、二十八、尚、二十九、んで、三十、撰、三十一、摺、三十二、する、三十三、所、  
師遠かに曰はく、一、住、二、み、三、ね、四、住、五、み、六、ね、七、食、八、を、九、説、十、いて、十一、豈、十二、能、十三、く、十四、  
十五、師遠かに曰はく、一、住、二、み、三、ね、四、住、五、み、六、ね、七、食、八、を、九、説、十、いて、十一、豈、十二、能、十三、く、十四、

【偷心】 不正の心なり。わうちやくと譯す。  
 【下座】 單の下座なり。

曰はく、「某甲此に到る、以折れ筋なく、望むらくは相尙慈悲、簡の安樂の處を指し給へ。師曰はく、「一塵飛んで天に墜す、一葉墮ちて地に覆ふ、安樂の處、政に上座が許多の骨董を忌む、直に須らく無量劫來の偷心を死却して乃ち可なるべし。」と。心趨り出でて下座に默坐す。會ま知事、行者を打つ杖、聲を聞いて忽ち大悟、驚つて師に見ゆ。一覆を納ることを忘る。即ち自ら謂つて曰はく、「天下の人は皆是れ學得成、某は是れ悟得成、師又つて曰はく、「選擇に甲科を得たり、何ぞ當るべけんや」と。故堂を尋る、師、數語の話を舉げて問ふ。堂、適かに入室なし。時に猫行つて旁らに在り。師因に指して曰はく、「子彼の鼠を捕へんと欲するを見るや、隻目環視して露せし、四足踏地して動かさず、背屈曲而して首尾一直たり、擊するに申さざるはなし、子能く是の如くにして、心無礙なく、六根自ら師かにして默然として定むれば、衆に一を失はず、衆、言下に是れ大悟す。師、師に尋事、因に玄津の語を問して能んで歸行す。事復にして衆を驚す、傳して之を取つて大悟す、以て師に告ぐ。師曰はく、「師より入る者は永く真実なり。山谷曰はく、「實踐の子孫、日月を現るるがごとし。又曰はく、「聖角多し」と雖も一鱗足れり。」

費に曰はく、

本色の佳山等、一學背離を分つ

通方の眼、欺瞞して又中れり明かなり

充棟の書、棄擲して再び讀むことなし

新古今安心密傳の道に就き、妙手に湯を注ぐ  
律手鹽阿帳布の障を透る、法華鑑を管む

山谷を活埋しする、犀角の柱香道程に散下

麗しく多福に見えたる、鹿麁の空音異曲を分

雲に覆び騎掃生立立し、骨を切に思む骨を凝ふることを  
靈玉を袖む巧盡きて都生す、密伎阿彌三能く目を捏る

藤より入れば受することなし、雲霞を殺し鏡鐵吹毛に磨れり

悪佛甲科を得たり、死心を著して純霜未だ是れ赤ならず

冷照午夜碧潭の目と映く、玉琴巧みに修成す

清輝陽春白雪の絃を擧じ、鶴思親しく徒續す

黄龍の子孫、日月を掲ぐるが如し、眼を以て知り難し、衆角多しと雖も此一麒麟足れり

「情足れり」  
「随分と誇す、自ず  
の意」

白雲端師

阿諱は守端。衡州葛氏の子。茶陵の祁山主に依つて剃度す。初め楊岐に見ゆ。岐問うて

曰はく、「聞く汝が受業の師、橋を過す橋を喫して省あり、偈を作る甚だ奇なりと。能く記

するや否や。」師即ち誦して曰はく、「我に神珠一顆あり、久しく塵勞に關鎖せらる、今朝塵

盡きて光生じ、山河萬象を照破す」と。岐大いに笑つて立ち去る、師愕然として終夕寐

【鶴相の手】 貧乏  
の手の効なり

ぬす、詰口復々を呑ふ。岐云はく、昨日夜狐を打するを見るや、曰はく、一見る、岐曰はく、汝が一籌策に及ばず、謂大いに駭いて曰はく、何の謂を、岐曰はく、他は人の笑ふことを愛す、爾は人の笑ふことを怕る、爾、省あり。後世にして岐の衣を受けて子孫に傳ふ家を示して曰はく、我指を接するが如し、此語を讀べ、と、杖杖を拵じて云はく、山河大絶、水鳥枯林、情と無情と盡く、杖頭上に向つて大獅子吼を作して、一語大般若を演説す。凡く道へ、南無佛の什密の法門をか説く。直は河上五故の修行、君臣父子を講き、各其宜しきを得たりと、空若葉草の青を守ることをおれ。白雲を望みするも妙ならず、文台は臨河の三太、一葉、四葉、一葉に賓主を分ち、無用一時に行す。筏の中のを曾せん、と要せば、日午に、吏を打すこと。崖山出来つて置く、爾、爾の漢、正に法業裏に在り、道ふことを見ずや、無期の業を指かざるを得んと欲せば、如來の正法輪を誘ふな。凡、此三箇の見解若し、佛の種子の種に上せば、一箇は重きこと八萬、一箇は重きこと半斤、一箇は半文錢に違らき。故爾はくは春風若しく力を着けて、一時に吹いて我門に入り來ることを、杖杖を拵して下坐。宗業に云はく、若し、場的に一回汗出づることを得ば、便ち一葉草の上に向つて珠玉散を現す、若し未だ場的に一回汗出づることを得ざれば、觀つて珠玉散あるも、却つて一葉草に取せらる。作樂生か汗出づることを得去らん。白ら一雙彫州の手あり、未だ骨て容易に三毒を掃はさず。と、界功甫、爾に見ゆ。問うて曰はく、牛純なりや。曰はく、純なり。問之を叱す、書出して立つ。曰はく、純なるかな

五家車宗贊

終矣。南泉大潑も此に異なることなげん。仍つて偈を贈つて曰はく、「平山中に來れば水足  
 り草是る。牛山を出で去れば東に鳴く西に鳴く。」又上堂曰はく、「上大人斤乙巳化三千七十  
 七。小生八九子佳。唯仁可憐也。」甫、省あり。師、臨濟三頓棒を頌して云はく、「一拳に拳  
 倒す黄筍棒、一踢に踢踏す鸚鵡洲、意氣ある時意氣を添へ、風流ならざる處また風流。浮  
 山間き得て大いに喜ひ、五祖を指して師に見えしむ。師到へて南泉守尼の話を問ふ。師  
 之を叱す、祖須管す。偈、祖をして膺頭と作らしむ。人祖を是非す。偈、祖を喚んで問ふ。  
 祖曰はく、「然り。師之を掌して真かたむ。祖曰はく、「雙結。第一の目、方丈に到り、「某甲  
 婦人の奥に酒肉を買ふ。」「百貫を割し得るあり。送りて常住に還す。師大いに驚いて  
 恰めて謗ることを信ず。保寧の二上座處遊、處清、師に參す。處は侍者となる、師驚氣の  
 病あり。凝常に鶯前を撰して以て不時の需に備ふ。師、傳大士講經因縁の偈を作つて曰は  
 く、「大士何ぞ曾て講經を解せん、諸公の方便は相成す、空手を一揮して俱に取るることな  
 し、直に得たり。單王の劣眼睛、一掃に謂つて曰はく、「然る處は是れ什麼ぞ。」「此一句乃ち齒が  
 爲に老婆禪を説く。凝は天柱に住し、清は太平に住す。機辯あり、五祖之を畏敬す。清、  
 凝に謂つて曰はく、「吾弟の師は乃ち是れ老和尚の爲に蘆菔を撰して擲得る處なり」と。  
 叢林傳へて口實とす。

贊に曰はく、

弱冠にして師を尋ね、早年にして住院

【誕生の日】母の  
うみつゝたる日な  
り。

【掩影】威光を滅  
するの意。

得度とくだ穢せつ復ふくなし、用事もちづ汚を染せんなし

魔ま障しょうを窮きう除じよして、袖中そうちゆうに寶ほう刃えんを藏かくし光輝ひかり相あひとして生なまず

報ほう僧そうを勸かん辨べんして、水上すゐじやう胡こ蘆ろを捺おさし漫まん轉てんとして傳でんず

栗りつ林りんを呑のみ娘むすめ生なまの口くちを塞ふさす、楊やう岐ぎの赤せきを擲なりて恨うらみ卒そつに消けし

青せい蓮れんを擧あげて舊きゆう主しゆ翁おうに還かへす、知しんぬ圓えん通つうの客きやく情じやう遣やり見みからざることを

金きん鈎こうを九江じゆうきやうの曲まがに抛なげ、可か憐れん生なま業ごうを認まめて銀ぎんとなす

飯い店てんを白はく雲うんの深ふかきに開ひらき、飯い草そう騎き懸けんに和わして駒こまを纏まとる

荔りつ藜れい策さく裏うら、一いつ箇この漢わんの南なん嶽たつ天台てんたいを説せくを斥しく

毛もう孔こう汗あせ巾きん、一いつ草そう草そうを指さして瓊じゆう樓ろう玉ぎよく殿てんを現ます

瞎かっ瞎かっに跨かつて溪せき橋きやうを踏ふ断だんし去さる、村むら山さん主しゆに地ち獄ごくせむるること多た年ねん

白はく牛ぎゆうを叱しかして露ろ地ちに突つ試しして休やすす、窮きゆう官くわん人じんの打うち成じやう一いつ片ぺんなることを喜よろこぶ

臨りん濟じ三さん頰けつの棒ぼうを領りやうす、知ち音いんに遇あふこと少すくなり

摩ま尼に五ご色しきの珠しゆを投なす、多おほくは劍けんを按おさずるに違ちがふ

酒しゆ肉にくを買かふ餘あま利りの鏡かがみ物もの、演えん閣かく聖せいが誘さうられて無む根こんなるを信まず

蘆ろ葎ふを煨わして換か得える底そこの禪ぜん、濯たく侍じ者しやをして濯たく漚しゆ滿まん面めんならしむ

最ちよも端たんなきは是こゝ他人たにんの肩かた胸むねの衣えを受けて、萬ま古こ業ごう林りん惡あく風ふう扇せんぐことを致いたす

保寧勇禪師

師諱は仁勇。四明竺雲の子。少くして天台の教を習ふ。衣を更へて雲霞に誦す、霞熱  
 之を重て呵して曰はく、「中央座主」と。師の氣不平、發憤して山を下り、雪竇山を望み、  
 大展三昧して、誓つて曰はく、「我此生、行脚無間、名号竇の如く、なるに過ぎずんば、斷じて  
 之に歸らじり、徒らに往いて楊岐に見えて旨を解す。保寧に出世して、遺、叢林に播く、果  
 して師の言の如し。師、雲蓋の願に呈する經に云はく、「師要を拈將して路縱横、大地清風  
 飄として生ず、北斗柄斜にし輕く撥轉す、帝の眼直に顧らく言すべし。」上堂云はく、  
 「一は此れ一、二は此れ二、三は此れ三、四は此れ四、日甚だ分明、上下資次に依る。  
 資次に依る何の事かある。」拄杖を以て云、「畫し云はく、大衆一時に六十の甲子を亂却  
 したり。」立春上堂、立春の日春牛を打す、一棒兩棒千頭萬頭、雪花深く覆うて辨ずる  
 こと得ず、頂門に眼あり、徒らに驚怒、手を拍つて云はく、「囉哩、春風に惱亂し二卒に未  
 だ休せず。」上堂、「風條を鳴し雨塊を破る、曉來枕上驚聲碎く、吸着蚯蚓一時に鳴く、妙德  
 空生都て言せず、都て言せず三箇帯を成し、四箇隊を作す、窈窕窈窕、飄飄飄飄、南北東  
 西に向つて、梨花李花を折得て、一佩兩佩。」牧童の頰に曰はく、「西風浩浩たり楚天の秋、  
 未寔として人なし野渡頭、沙鳥曉來俱に散盡、嗚啾歸去つて倒に牛に騎る。」陳蓮秀才に  
 答へて曰はく、「胡孫の兒子最も惶惶、千年の鬼眼睛を弄することを愛す、懊惱冥相を能く

【音次】 次第の意  
 法借法臘  
 【音調】 歌曲の  
 間に其の音頭。

【胡孫】 獼猴なり  
 通じて胡  
 利口など  
 と謂す。



することを知らず、有時北頂頭に來りて行く。

費に日ひはく、

四明しやうめいに家し、保寧ほねいに住す。

東嶽とうたく請人しやうじんに逢うて拈ねん弄りやうす、空後くわご備對びたいに在ありて

林りん在あり牛ぎゆうを打うち、深ふかく覆おほふ雪ゆき花はな辨わずべき難がたし。

杖じやう北斗ほくたうを拄たぐ、大唐たいたうの人ひと眼がん直ちに須すらく盲くらすべし。

眞ま枕まき上じやう幽ゆう鳥ちやう啼ていじ殘ざんす、梨り花わを折せり一いつ餽く兩りやう

野渡やど頭かぶ沙し禽きん散さんじ盡じんく、鳴なり啣げんを聽きく三さん聲せい四し

達磨だつまを老らう臊そう胡こと指さす、草鞋そうせを著つけ、他たの肚はら重おもより過すぐ

鞭むち遷せんを胡こ孫そん子しと罵ののす、冥みやう相さうを能よくして我わが頂ちやう頭とうに來きり一いつ行ぎやうく

杜撰つざん巡じゆん官くわん、花甲けがけつ子し指さ輪りん上じやう一いつ時じに亂らん了りやうす

央おう庠じやう座ざ主しゆ、天てん台たいの教きやう、脚けつ跟げん下げ下げ十五じふご縱じゆう横ぎやう

淵えん井けいを行いじて、雪ゆき寶ほうの高かう躐りやうと並ならび罵ののす

空拳くうけんを奮ふつて、楊やう故この破やぶ屋やを把とりて支し撐じやうす

水銀すいぎん似になく阿彌あみに眞まなし、人ひとの質しつを測はかして言こと見みに打うつらなし

【花甲子】六十甲子の圖ずなり、花は丸まるきものを云いふ【央庠云云】貌せうなれども、實じつにやぐにやとして、概がいなき様子ようすを云いふ。

眞淨しんじゆん文ぶん集じふ

師諱は克文。黃龍に嗣ぐ。關西鄭氏の子。師、瀉山に在り。夜間雲門の語を誦す。僧問ふ。佛法は水中の月の如し、是なりや否や。門云はく。清波透路なし。師、省あり、氣を以て自負す。諸方目して飽參となす。其鋒に嬰る者あること少し。積翠の道、宇宙に暗しきことを聞いて、徑ちに往いて之に見ゆ。凡そ入室下語、翠皆許さず、師怒發して乃ち曰はく。我自ら悟處あり、渠我語を識らず。遂に行いて翠巖に至つて師和尚に見ゆ。師問ふ。甚の處より來る。曰はく。積翠。師曰はく。甚の處の人ぞ。曰はく。關西。師曰はく。汝が師は是れ誰ぞ。曰はく。北塔。師、聞いて乃ち哭す。師其故を問ふ。師曰はく。昔納師叔、久しく渠に參ず、渠が説話を會せず。某が禪に參得するに及んで、渠に見えんと欲す、渠已に死す。乃ち問ふ。還つて新黃檗を識るや否や。曰はく。識る。師曰はく。如何。曰はく。甚だ好し。師曰はく。渠一轉語を下し得て、便ち黃檗に住す、佛法は未だ夢にも見ざることあり。師言下に於て頓に積翠の用處を見る。因つて悔て再見せんと欲するも得る能はず、遂に順に自す。順曰はく。何ぞ妨げん、我當に書を作りて積翠に與へて子をして歸らしめん。師遂に積翠に回る。翠見て問ふ。甚の處より來る。師曰はく。翠巖。翠曰はく。頼に老僧が在らざるに遇ふ。師曰はく。甚の處にか去る。翠曰はく。天台に普請し、南嶽に遊山す。師曰はく。某甲梵堂に自在なることを得たり。翠曰はく。天下の鞋、甚の處よりか得來る。師曰はく。廬山七百五十文に唱へ得たり。翠曰はく。何ぞ曾て自由なることを得ん。師曰はく。何ぞ曾て自在ならざらん。翠之に駭く。兜率の悅、

【嘔血の禿丁】 罰當りのはげあたまめの意。禿は總て僧を罵る辭なり。

道吾に在りて衆に首たり、一日數納子を領じて雲蓋の智に謁す。智與に語る、未だ數句に及ばず、盡く所蘊を知る、智乃ち笑ひ悦に入室を求む。智問ふ、「曾て洞山の文和尚に見ゆるや否や。」曰はく、「關西子頭腦なし、一條の布裙を拖き、屎臭の氣を作す、甚の長處かあらん。」智曰はく、「首座但屎臭氣の處に向つて參取せよ。」僧、教に従つて洞山に往いて、依止すること未だ久しからざるに、深く要旨を領す。佛眼五祖を辭して歸宗に至つて師に參するの後、祖圓悟に謂つて曰はく、「眞淨波瀾闊し、大旗を弄する手段遠し。彼に到りて未だ必ずしも相契はず」と。未だ數日ならざるに書あり。悟に祇して曰はく、「比歸宗に到つて偶然として網に漏る。聞く、雲居の清首座、晦堂の眞贊を作る。曰ふことあり、「聞く時の富貴、見て後の貧窮」と。頗る他を疑着す。」と、相見するに及んで果して契合す。年を踏えて復祖山に還る。衆請うて乗拂、却つて心と説き性と説く。祖曰はく、「遠兄此の如く説禪す、また他を管するなかれ。」無盡兜卒に見ゆ。清素侍者末後の句の事を擧して、相を罷むるに建んで歸宗に過ぐる、夜話此に及ぶ。師輒ち終つて曰はく、「是れ何の嘔血の禿丁ぞ、脫空漫語豈信受すべけんや。」遂に語を終へず。無盡荆溪に居る。覺範往いて之に見え、盡與に語つて曰はく、「惜しいかな眞淨、此を知らざることを。」範曰はく、「相公只清素最後の句を知りて、眞淨眞樂現前するに及んで覺ること能はず。」盡驚いて曰はく、「果して此ありや。」曰はく、「疑はば則ち別に參せよ。」盡言下に於て頓に師の用處を見る。遂に香を炷き、歸宗を望んで悔謝す。東山一日師の提唱を得て之を讀んで甚だ喜ぶ。圓悟に謂つ

有りて

て曰はく、懶惰す末法の中、非眞善無道有ることを、師游方の時、二僧と偕に行く、谷の薛大頭の處に至る。問ふ、三人同行必ず一智あり、如何が是一智。三僧無語、師下唇に立つて唇に懸じて便を問す、薛すを擧げて問はれ、功を任す。師はく、一冉懸に勞せず。薛杖を擧いで出ず、薛、石門の虎窟に見ゆ。費に曰はく、

關表に生縁し、馬背を難脱す

詔方に走つて氣常に自負す、直指を築めて心未だ安きこと難はず  
雲夢の八九を胸中に呑む、會て芥蒂することなし

蜀江の八千を百上に瀦らす、儘波瀾あり

雙社子流の處より得來ると問ふ、積翠の南樓踏を踏揚して活す  
像布紐を抱いて屎臭の氣を任す、兜率の悅轉鞍を啞着して乾く

一生大業を成す、元勳を龍蛇陣上に策し

三關驢脚を推き、十影を驢馬群間に馳す

末後の句無盡をして疑はば則ち別に參せしむ

眞業を點行す、一轉語黃蘗に住す

未だ曾て夢にも見ず、疑團を打破す

老東山背後に贊揚す、人に逢うて頻りに合掌す

尊大頭面前に喝せらる、懶顔を着くるに地なし

鵝毛木毒、虎體元珠なり

妙處言はんと欲して言ひ及ばず、月花影を移して鵝毛に上す

五祖演禪師

師諱は法演、白雲に坊ぐ。臨州鄧氏の子、初め成陽に在りて、書を聴く時、西天の外道立義して佛弟子に問うて云はく、「言談成儀の時、神、智と冥し、理、境と言して能證所證を分たず、畢竟何を以て證となす」と。弟子義障す、乃ち鐘鼓を鳴さず、後前より出入し、袈裟を返答す。三載至つて再び外道を集めて釋して云はく、「人の水を飲んで冷暖自知するが如し、道乃ち伏す」と云ふ。ことを擧げて、諸を法師に傾して云はく、「冷暖固に知るべし、未審し自知の理如何、衆皆口を杜づ、中に有るが云ふ、汝此を明めんと欲せば、須らく南方に佛心宗を明むる者に見ゆべし」と。師遂に南に來りて興元に至り、時を経て逗留す。受業の師聞き得て、乃ち書を附して曰はく、「汝醬齏を出でて復蓋釜に入る。」師遂に發して行き、浮山に至り、此義を理して問ふ。山曰はく、「如家に密語あり、迦葉覆鉢せず、師乃ち疑を釋く。山因に指して白雲に見えしむ。師到りて因に塵尾珠の話を問うて大悟し、投機の句を作りて曰はく、「山前一片の閑田地、又手叮嚀に祖翁に問ふ、幾度か賣り來り、還自ら買ふ、爲に情を松竹の清風を引くことを。」云之を印可す。衆に示して云はく、「七

參學は後、の鑑見を打つが如し、宛かに地に泊んで便ち罷去る。若し譯筆するあらば即ち堪へず」と。小參云へるあり。年十有餘年、海上に參學、數人の賢宿に見ゆ、自ら詩ふ、予當すと。浮山の國師の書下に到るに及んで、直に是れ口を聞くことを得ず、後に白雲の門下に向つて、一偈の調御語を咬破して、直に得たり百味具足することと。曰く道へ舞子の一句作塵生か道はん。乃ち云はく、花殘いて朝霞早秋に銷ぶ、誰人が能く紫絲頭を染む、有時風動いて朝りに相倚る、晴前に向つて阻ふに休せざるに似たり。角を聞く偈に曰はく、幽幽たる寒角孤城に發す、十里の山頭湖く青冥、一掃草無なき意、覺くに堪へたるあり。然くに堪へざるあり。偶誦提脫道を問ふ、師曰はく、提脫偈て小聽の詩を讀むや否や。師りに小玉と呼ぶ、元無事只要す悟得が事を認得せんことを。剛契はず、暫聞き得て符あり。師手を握つて還寮して云はく、我侍者等に參得し了れり。瓦鼓の歌を擧して無爲の奈を授す、輸文武の處に至つて。奈、省あり」と。

贊に曰はく、

般若の鋒、智慧の炬

左舷の蒲許村に生緣、講を成郷の大慈寺に聽く

自知の理を問うて、義虎の咽喉を塞斷す

直指の心を究め、群驢の行伍に輒入す

菴蟲の藁釜に入るが如し、蒸處に向つて果して忘れ難し

【陽平】 快晴の天  
【白雨】 夕立。

俊鶉の鶉兒を打するに似たり、鐘かに地に泊んで便ら飛び去る

白雲に到りて、南泉摩尼珠を滅碎し

圓鑿に見えて、如來密語有ることを會得す

山前の田地を愛す、松竹清風を引く

格外の郷談を打す、陽平に白雨を撒す

烏鰐魚の鱗梅引を傳ふ、暗に愁腸を損す

鷄冠花の紫絲頭を染む、錯つて菓子となす

乞兒席を得たり、巡察侍者の禪を會するに誇る

破玉瑕なし、磨院婦人と同じく歌舞す

錢齋百味完全、活佛僧の吞吐するに一任す。判頭誰か解せん甜苦を知ることを

圓悟勤禪師

師諱は克勤。東山に嗣ぐ。彭澤磨氏の子。初め講を成都に聽く。范蜀公、詩を作つて勸めて行脚せしむ。云あり、成都は本是れ繁華の國、打住只花邊に因つて惑ふ。と。遂に蜀を出でて東山に依參す、入處なし、佛龕と共に靜し去る。出日はく、汝齋中に到つて熱病に打せられて、方に我を勸ふことあらん。と。師金山に至りて大に病み、定慧に在りて亦病む。書を作つて和約す、病愈えれば復東山に歸らんと、前後旨を悟る。師一日勤遠

【鼻を以て云云】  
鼻はなかわなり。

と問く東山に侍して、夜坐歸らんと欲するに月黒し、山各をして一轉語を下さむ。  
 師曰はく、「彩鳳丹霄に舞ふ。」遠曰はく、「無常青路に横ふ。」師曰はく、「脚下を看よ。」山曰は  
 く、「吾宗を演ずる者は克勤のみ。」師復轉つて昭覺に住す。南堂の流俗すと聞いて、師  
 之を憶ひ、人の城中に在りて香を賣ると言ふを聞いて、師童子をして後に對つて香を賣  
 しむ。他の將に香を度さんとするを得つて、便ち問ふ、「如何が是れ祖師西來意と。看よ他  
 何の言句がある。即ち記して歸れ。」童教に依つて彼に到つて便ち問ふ、堂香を擧して云は  
 く、「者一包の香、只五文に賣る。」童回つて師に舉似す、師云はく、「者漢只在り、と遂に親  
 しく勸めて再び僧と爲らしむ。師舉げて大階に住せしむ、繼いで昭覺に住す。大參する  
 次、師一日上堂、雲門諸佛出身の處、東山水上行の話を擧して、拈じて云はく、「長は即ち  
 然らず。忽ち人あり、如何が是れ諸佛出身の處と問はば、即ち他に向つて道はん、薰風  
 南より來り、殿閣微涼を生ず。」と。慧省あり、後首座と作つて秉拂、次の日一材僧上問  
 す、「昨夜首座提唱如何。」師指を以て鼻を夾む、一下し來つて鼓す、衆大に笑ふ。慧即ち  
 方丈に上つて辭し去る。師云はく、首座昨夜三世の諸佛、汝に罵らる、六代の祖師、汝に  
 罵らる、我只輕く鼻を夾む、爾便ち去ること得され。慧覺えず汗下る。師大由に在り、  
 雲竇の語を拈じて、碧巖集と號す。三國誌に曰はく、「子を生まば當に孫仲謀が如くなるべ  
 し、景升の諸郎は豚犬のみ。」と金剛は師乃ち小王の聲に於て發明する類なり、石頭は乃ち  
 師示寂の時師江に擧る。



贊に曰はく、  
牛を食ふ氣宇、越前の精神

范蜀公勸めて、瀟湘繁華の國を離れしむ  
老東山詛ひて、江南熱病の人と作す

小玉舞の中、織姫を認めて阿弐の下領と做す  
薰風句の裏、鼠貽兒を捉へて自己の家親に當つ

童子を教へて香を貰はしむ、靜南堂を挽いて珠合浦に還る  
青林の搬土を擧げて、達佛眼を放ちて劍龍津に躍る

碧巖を提唱して拖泥帶水、明覺を作興して玉を獲り金を鑄す  
脚下を看よ、已に漢宗の記を受く

鼻頭を夾む、寧ろ愚牘の心なからん  
金瓶香消す、酔つて袂けて笙歌迷裏に歸る

石罈花發く、笑つて錦繡の江濱に經行することを  
天斯文に稱す。孫仲謀を國濟十一世に生む、縦ひ景升諸郎龍の如く馳せ虎の如く驅る

【芳塵云云】塵は  
與なり。尾はつぐ  
と戯む。即ち其尾  
にとはつく義。

【鼠貽兒】粟鼠な  
り。牛勞價を鼠貽  
子と云ふ。

南堂靜禪師

師諱は元靜。五祖に嗣ぐ。揚州の人。師は揚州。師、祖塔に在りしとき、鼠即心即佛、  
 揚州の擔板漢、南泉の斬猫、揚州の狗子。話を學して之を釋す。所集了に灌輸たし。又  
 子胡の狗の話を舉ぐ、答稍遲し。山遠に問を著して曰はく、不是。師曰はく、不是、却つ  
 て如何。山曰はく、「此不是、前面に和して却て不是。」師曰はく、「學むらくは和尚、慈悲指  
 示し給へ。」山曰はく、「看よ、他の道ふことを、子胡一隻の狗。上、人の頭を取り、下人の  
 腹を取る、門に入る者は好く看よ、纒かに僧のいるを見ては、便ち云はく、「狗を看よ」と。  
 汝子胡狗を看よと道ふ處に向つて、一轉語を下し得て、子胡をして舌を結しめ、老僧の口  
 を鉗せしめば便ち是れ了當の處なり。」と。師鷄を喫すること嗜む、衆之を惡む。由知つ  
 て、一日入室の時、師鷄を袖中に藏す。山話を擧げて之を詰る。師袖より鷄を出して啼く  
 聲を作す、山乃ち笑ふ。師大隋に住す、舊龍有りて方丈の寢室に居れり。累代收て近かず、  
 師至つて臥さんと欲す、主首白す。師顧みず、意に去つて臥す。説の床上に臥すを見て、  
 師手を以て推して曰はく、「老耆生、老僧を半榻に留めよ。」と云うて就いて臥す。醒むるに  
 及んで龍見えす、此より來らず。葉縣に一法嗣あり、漢州の方水に住す。偈を作つて衆に  
 示して曰はく、「方水潭中の驚鼻蛇、心を擡して相向へば便ち楡榔す。誰人か蛇頭を拔得て  
 出さん。二百年人の下語するなし。」師三句を擧し了つて著語して云はく、「方水潭中の驚鼻  
 蛇。」僧問ふ、「如何が是れ奪人不奪境。」曰はく、「魔王を活捉して鼻孔穿つ。」「如何が是れ  
 入境俱不奪。」曰はく、「白日に牛に騎つて市を穿つて過ぐ。」萬丘の靜、參する次、師、香

【漆籠】 青苔こんり。共に石の聲なり。

【魔王脚】 脚は同色なり、やうす様様の氣味なり、仙人のそれぞむのいごたを脚色と云ふ。

【垂崖】 崖に垂ひ物に似せざるなり

枯木龍吟の話を舉して往返微詰す。靜悟る、師曰はく、「寒巖異草の青を守る莫れ、白雲を攀却するも宗妙ならず。」師曰はく、「直に須らく劍を揮ふべし。若し劍を揮はずんば、漁父巢に構む。」師鬚然として曰はく、「者小斷兒、珍重と云うて便ち行く。回石頭世石匠となりて字を識らず、出家を慕ふ人に求めて、口づから法華を授く。黙して之を誦す、師に投じて洒掃に侍す。一日石を取らしむ、回手に劍を執りて石を撃つて、而も經を誦すること暫まず。師謝つて曰はく、「今日も盛徳、明日も盛徳、生死到來作麼が折合せん。」回愕然として其器を釋て、禮拜して究竟の法を求む。因つて隨ひて方丈に至る。誦經を罷めしめて趙州勘破の話を看しむ。回之を久しうして石を撃つ、石堅し、力を盡して一鎚す、臂ちに火光を見る。悟あり、劍を呈して曰はく、「工夫を用ひ盡す、渾て巴鼻なし、火光迸散、元者裏に在り。」師曰はく、「子微せり。復劍を呈して曰はく、「三軍勇が未だ閑處、老婆正に是れ魔王脚、趙州無柄の鐺掃帚、輝華を掃盡して風飄颻たり。」師之を領す。遂に僧と爲り、後出世して師に鞠ぐ。紹雲先生、石頭語録の序を作つて云へるあり、五祖晩に南堂を得たり、過茶生獐、動遠を凌跨す、天道き地窄し、老を大隋に投す。回石頭劍を還し石を攻むるの手を以て、仰いで堅高を撃ち、力を出すこと既に盡たり。一鎚に仗ち透ると、腕に釣魚山中に坐して垂崖峭壁、其師に十倍す。猿虎既霜、口を下すことを容さず。師、超放不羈、故に東山、南堂を創めて以て之に居しむ。此に因つて名を得たり。

實に曰はく、

【書】  
【意】

出精野修僧、天性淡意旨

靈王を活捉して鼻孔穿つ、後に百丈の業林を將て廣す

目を以て母を睨む、陰風猛虎の林を出づるが如し

村氣人に逼る、白日黄牛に騎つて市に入る

方水の地頭を抜くとも出さず、力を用ひ盡す計の施すべき無し

子胡の狗帯を出すこと稍遅し、前面に和して一言に不足

有僧牛糞を糞ふ、若包舎具五文に賣る

峭壁垂崖と真に、看よ厨見の暗小伎を呈することを

鐘を賣て賣ふ、滿口無聲

龍に伴うて眠る、通身泥水

一釣冷かに松梢の月を掛け、樺林峯幾許の雜懐をか轉ふ

雲陣の香飄へる花信の風、牡丹屏に安す甚生標致ぞ

眞に寶鏡を揮ふ、靜思丘電影空に懸る

寶鏡を墮下す、圓石頭金帯地に懸つ

聖凡情盡く佛眼を覺むるに蹤なし、怪しむこと得ず消許の師師前、別に一象を起てて安

置することを

佛鑑勤禪師

【楊栝】 柳行李な

師諱は慧勤。五祖に嗣ぐ。舒州汪氏の子。初め五祖に參す。毎に唯此一事實餘二即非眞を以てし、之を味へて省あり、祖の印可せざるを以て辭し去る。後再び歸つて祖の上堂に値ふ、一偈出でて問ふ、「僧、越州に問ふ、「師、何處が是れ和尚の家風」州曰はく、「老僧耳聾す、何ぞ高聲に問はざる」僧再び問ふ、州曰はく、「備我に家風を問ふ、我却つて師が家風を識り了れり」と。師乃ち大悟、即ち方丈に上り印可を求む。祖曰はく、「森羅及び萬象一法の印する所」師禮拜す。祖指環を掌らしむ。師、圓悟と語る次、仰山鎮海明斗の因縁を學して、理の伸ぶる處なしと云ふに至つて、悟徴して曰はく、「既に將得と云ふ、此環を索むるに泊んで、又言の對ふべきなく、眞の伸ぶべきなし」と道ふ。師答ふる能はず。次の日、忽ち省す。悟に明つて曰はく、「東寺只一顆を索むれば、仰山一栝栝を傾け出す」悟深く之を肯ふ。初め太平に住し、次に鏡山に住す。上堂、一至道場難嫌揀擇、桃花は紅、李花は白し、誰か道ふ。僧只一色、蓮子は語りて黃鸝は鳴く、道場關關只一聲と。祖師の關板子を透らざれば、踏つて山河を認めて眼瞞と爲す」と。僧問、「聞く和尚親しく五祖に見ゆと、是なりや否や。師云、よく、鐵牛踏碎す黃金の草」と。僧忌上堂去年今日の時、紅爐片雪飛ぶ今日去年の時、曹溪夜鐘を讀む、末後の一句子、佛眼も能く窺ふことなし。白蓮峯頂の上、紅日須彌を透る、鳥を喚む珊瑚樹、魚は呑む麗水の犀、太平基業

在り、千古楊岐に盡く、道場浄土に見ゆる因縁を頌して曰はく、始め阿闍一聲の鐘を鳴らす、日午蒼龍縣正に濃なり、再び風帆臺上の鼓を撃つ。夜半鷲未だ飛舞せず。帝基葦園春石の如し、胡僧托けて平生の力を費す。首を回して少林歸去來、落花满地春狼藉たり。定上座、臨濟に參する因縁を頌して曰はく、掣電の機趙州に遇ふ、人の爲にせば須らく結交頭に到るべし、掌中拏げ出す香山子、直に高高たる十二樓に上る。と。

贊に曰はく、

淮甸雲深く、龍眠山小なり

麟鳳の子鼓を脱して出で來る、山川の秀情を盡して奪ひ了る

胸中の戈甲萬騎に森たり、氣秋風よりも肅し

舌底の笙篁五音を調ふ、椿春鳥の如し

蘇臺九句の藥を煮る、東山を恨微す

阿闍一聲の鐘を鳴らす、迷うて迷嚙に逢ふ

森羅影裏、潑家風幾くか曾て識得し來る

聲色堆頭、祖師の關何ぞ嘗て透得過せん

單に末後の句を明す、海鯨鬣水の尾を呑む

親しく先師に見え來る、鐵牛黄金の草を齧む

人の爲に須らく切なるべし、香山子趙州の幾層樓を拏げ上ぐるを看る

義を見て爲すに勇む、鎮海の珠仰山に代つて一椽栳を傾け出す

室中機峻にして人淡り難し、雲臺の將盡く生擒せらる

筆底耕すこと深くして我自ら豊かなり、翰苑の人専ら藻に擒ぶるに工なり

碧油幢下、坐がら太平の基を建つ、鍾山に到つて梁の寶公と手を握つて呵呵大笑す

### 佛眼遠禪師

師諱は清遠。五祖に耐ぐ。平州李氏の子。幼にして書生となる。祖の會下に在りて常に氣を以て自負す。祖に問ふ毎に、祖輒ち曰はく、「我會せず、我爾に如かず。」又曰はく、「爾自ら會得せば好し。」と。久しうして所入なし。乃ち問うて曰はく、「和尚門牆高峻、某甲入ること能はず、座下に誰か親近すべき、乞ふ指示したまへ。」祖曰はく、「元禮首座、見處我と一般なり。」師即ち之を扣く、時寒し禮方に火に近く、師所求を陳す。禮即ち師の耳を引いて行行且つ語つて曰はく、「我會せず、我爾に如かず、爾自ら會得せば好し。」師曰はく、「願はくは開發を求めて、而して乃ち相戯る、豈人の爲にする法なるべけんや。」禮曰はく、「爾若し悟り去らば、方に今日の曲折を知らん。」師慚ぢて、急に知客寮に歸りて、夜坐沈吟の間、寒を覺え火を撥つて大悟し、頌に「二老の用處を見る。乃ち曰はく、「深深に撥へば此子あり、生平の事只此の如し。」と、遂に燈を點じて、佛燈を讀む、破窻墮の因縁に至つて洞かに所證に符ふ。頌に曰はく、「初初幽鳥啼く、衣を披して終夜坐す、火を撥つて

【雜著】か、しうす  
のきね。無用の談

平生を悟り神を窺めて破墮に歸す、事峻かにして人自ら迷ふ、曲談業が能く和せん、之を念ひ永く忘れず、門問いて人の海ぐるること少なりと。覺悟、師の旨を悟るを聞いて五更に門を叩く、師遂に厝書を擧ぐ。悟云はく、只青林撥土の語に鐵輪の天子竇中の勅と道ふ如き、知客作麼生か會せん、師曰はく、帝釋宮中に敷書を放す。雷行はく、且喜すらくは兄に活人の句あり。後雪堂頌して曰はく、我會せず佛に如かず、笑ふに堪へたり、千花確弊を生ず、善財漫に百城に向つて遊ぶ、何ぞ曾て自家底を顯著せん。柳鐵、文殊普賢佛見法見を起す因縁を頌して曰はく、空雲裏佛出現す、手に紅羅扇を把りて面を遮る、急に須らく眼を著けて仙人を看るべし、仙人手中の扇を看ることなかれ。師問いて甚た喜ぶ。悟曰はく、此頌一切應用ひ得ん。龍門に住する時、一僧窟に咬る空中に擧して云はく、既に是れ龍門の僧、世に因つてか蛇に咬まる。衆、下語拈契はす、高麗僧云はく、果然として大人の相を現す。師之を頌す。圓悟、昭覺に在りて聞き得て、乃ち數じて曰はく、龍門に此子あり、東山の道未だ寂寥ならざるなり。』と。師、三自省有りて世に傳はる。

眞に曰はく、

默して面も神に、語つて面も當る

天生骨に靈あり、聖養胎に慈なり

業東魯を窺め、忝く曾て孔夫子に就いて經を受く

皆西來を貧む、苦た嘗て老東山に無狀せらる



會不會急に歸つて打坐、火を撥つて淨灑を覓む  
到來到普請して茶を喫す、晴靄雪浪を詠へす

仙人手裏の紅羅扇、佛鑑の看んと要する底は眼を著けて宜しく観しむべきを喜ぶ  
帝釋宮中に教書を宣ぶ、青林必死の人物して情を盡して疎放ならんと

龍門萬仞、晴空燒尾の雷を轟かす

取水千尋、殺流香を噴くの象を産す

確に花を生ず、雪堂の善財を引いて游ぶことを許す

蛇僧を咬む、高庵の大人の相を現することを識す

心と説き性と諍く、用ひす他を管すること、三自行一稿を寫して高青果林參禪底の榜樣  
となす

大慧果禪師

師諱は宗杲。圓悟に嗣ぐ。宣州奚氏の子。初め湛堂に參じて侍者と爲る。堂、病革か  
なり。師曰はく、一和尙此疾若し起たすんば、某甲去つて華にか依附せん。堂曰はく、劉巴  
子甚だ好し、我渠を識らずと雖も、子若し之に見えば必ず能く大事を了ぜん。後往いて悟  
に見えて旨を得たり。師、堂の爲に、無書に見えて塔の銘を求む、龍安の照の書を紹介と  
爲す。盡に見えて云ふことあり、金剛の眼睛、相公の筆頭上に在り。盡曰はく、恁麼なら

ば則ち其他のために光明を點出して、天を照し地を照さしめ去らん」と師、進前して  
 揖して曰はく、「師多幸、祖公の塔の影を誦す。盡大いに笑ふ。師、徑山に在り、因に頌  
 して曰はく、「神臂弓一發すれば、千重の甲を透過す。納僧門下より看れば、甚の臭皮襪に  
 當らん。」と。時に朝廷方に神臂弓を作る、宰相、師の張九成と竊かに大師に議し、兼ねて  
 以て朝廷を譏諷すと云ふを以て、遂に衡州に竄せらる。次に衡州前後十七年にして放され  
 て還る。再び徑山に住す、衡州より返つて福州に至る。張參政、洋嶼を以て之を延ぶ。一  
 夏に十三人を打發す、龜山の光を首と爲す。趙巨濟參する次、謂つて曰はく、「老僧去つて  
 後、若し別人有りて爾に禮を教へて云はん、者箇の公案如何が參せよ、那箇の因縁如何か  
 會せよと、便ち糞尿を舀んで潑ぎ將ち去れ、記取せよ。」師、應庵金輪の提唱を聞いて甚た  
 喜ぶ。乃ち曰はく、「楊岐の正眼、此老に在り。」と。遂に正傳衣并に頌を將て之に寄せて  
 曰はく、「坐斷す金輪の第一峯、千妖百怪盡く蹤を潜む、年來又眞の消息を得たり、報  
 じて道入楊岐の正眼通すと。」

贊に曰はく、

花木瓜、包家の虎

狐狸跡を届け陰木風を生ず、雪霜憑凌春陽煦媚す

金剛の眼睛筆頭點出す、龍安に因つて無盡翁を靠倒す

革風殿閣句下に活埋す、湛堂の指して勤巴子に見えしむるを恨む

【相殺】 厨殺とも云ひ、斬り合ひ、合戦することなり。殺はきると譯すべし。

烏石嶺を激闘す、黒竹寛胤推胡押

五峯の雲を撥亂す、折社杖車に輝へ西に輝ふ

雲門の掲示、問闍を護護す

悦老重ねて來り、佛祖を敬臨す

謀略の相殺に會ふが如し、賊馬を奪うて騎つて便ち行く

人有りて備に師を殺へば、糞尿を口み瀆ぎ勝ち去れ

衝鋒に肥猿をあるること十七載、臭皮襪香替人に重る

寗を洋嶼に伸ぶ十三人、塗毒鼓蕩寰宇に暗し

佛法を信て人情に當てず、楊岐正傳の衣を把りて金輪菩薩の處に分付す。法王の法令此の如くなるべし。

### 虎丘隆禪師

師諱は智暉、號悟に剛々、和州の人なり。初め長蘆の信に見えて其大略を得。智悟の語を傳へて至る者あり、師、之を聞して嘆して曰はく、醉を醒うて液を生ず、未だ悟に達せしに沃がすと雖も、且く人に養を食せしむ。第恨む未だ覺悟を喻かざるのみこと。遂に去つて悟に見ゆ。一日入室、問うて曰はく、見見の時、見是れ見に非ず、見猶見を學ぶ、見も及ぶこと能はず。師を擧げて云はく、這つて見ると曰はく、一見ると曰はく、頭上に頭

【安排】安置排列なり、安は置くべき處に物を置くなり、排はならべるなり。

を安ず。師然として契悟す。叱して曰はく、「吾の什物を見らば、曰はく、「竹密にして崩げず、流水の過ぐることを、僧之を肯ふ。後藏主と爲る。人曰はく、「臨藏主、柔易なる此の如し、僧を能く爲さん。僧曰はく、「疎虎なり。上堂曰はく、「凡そ展托あれば盡く、今時に落つ、展止す托せず、地に墮し壁に落つ。直德鼓吹けども入らず。僧打てども音けざるも、唯唯し音ち來れば自誤す了なり。世道ふことを見すや、直に寒潭の月影、昨夜の鐘聲に似て、扣擊に應つて動くることななく、實語に覆れて散世ざるも、猶是れ生死岸頭の時。杖を擡じて、盡一盡して云はく、「生法門多年の苦難を盡断すれば、斯則石壁を下字を無して去矣す、且く道へ歸るの什物をか失ふ、嗣後に憶を見ば與に往來することなかれ。と上堂曰はく、「目前に法なし、萬象森然、意目前に在り、突出し離し、是れ目前の法にあらざる、偏處深に逢ふ、耳目の到る所にあらざる、見即覺知を離れず、然れども、是の如しと雖も、また須らく向上の關候子を懸著して結めて得べし。所以に道ふ、羅龍すれども肯て住せず、呼喚すれども頭を回さず、佛祖も安排せず、今に至るまで處所なし、是の如くなれば、則ち念を離るるを勞せず、樓閣門閉く、寸歩も移さずして百城俱に到る」と。將ち杖を拈じて畫して云はく、「路に死蛇に逢はば打殺することなかれ、無處の籠子に盛り時如何り、曰はく、「草鞋眼を截斷す、云ふことあり、渴驢の泉に奔るが如く、塵網、熱籠の石を執するに似たり。云ふことあり、薩鞞囊中に處す、自ら其樂を得」と。費長房付に

一先生の壺を壁上に懸くるを見る。長房之に湖して遂に同じく壺中に入れば、乃ち眞の神仙の境なり。

費に日長く、

機は秋冷かに、笑語春温かなり

垂疎の鬢積に載して傾を待つ、檻に走る珠影落るて衰なし

少室密傳の心を慕ふ、湯曠驛岩下の水に奔る

碧巖無義の語を味ふ、陸鷄自ら壺中の天を尋む

路長うして踏踏す草鞋跟、源大道を尋む

竹筒にして泫水の過ぐることを見けず、且蓮葉を撃つ

麝香囊を打起す、點頭石菖蒲の韻聞ずることを笑ふ

一大歳を演出す、睡睡虎眞家に懸懸せらる

深地の御氣冷かにして霜を含む、掃雪を斬つて積に石上に舞す

古洞の桃花紅錦を綻らす、罽兒と與に削を風前に語る

跡に煙霧に逢ふ、無波の鏡雲つて驚る何の川ぞ

春は首鳥に聲かに、曲調を能傳して言なし

東山の龍鳳、幽崖の兒孫

玉壺塵染まらず、別に是れ一乾坤

迦庵坐師師

師師は、虎丘に嗣ぐ。新州王臣の子、初め方圓首座に坐す。入室、師に就す。室云はく、「坐つて什物をか作す。」師云はく、「首座の罪を免らん。」師云はく、「後生年少、著般の語話を作す、嘔血し去ることをあらん。」師云はく、「某甲は嘔血せず、首座を免し去ることをあらん。」師、後座に坐して師の言の如し。師水南の屋の南に在りて侍者と作る。入室の次、南、提付して云はく、「侍者、汝と與に簡の公案を論じ、せんことを待つ。」師曰はく、「大地是れ簡の公案、簡の計量をか商量せん。」南機縁なり。師、拂袖して去る。後、虎丘に見えて巖那と作る。命じて首座に充てんとす。明に座下多く悟の會中の耆宿あり。師の後生を言ふ。師聞いて傳を作つて曰はく、「江上の青山殊に未だ老いず、屋頭の春色放教あれ。」是きことを、人は言ふ洞裏桃花嫩しと、未だ心ずしも人間此枝有らず。』と。遂に去る。後衆に示して云はく、「三十三州、七十の僧、驢肥馬頷、人の憎みを得たり、諸方普し羅籠の手を其せば、今日淨明に到るに因無けん。』と。上堂。『五百の力士扱石の義、萬般崖前手を撒して行く。十方世界一團の鐵。虚空背上白毛生ず。直饑膩脂帽子を拈却し、腐臭布衫を脱却するも、報恩の門下に向つて、正に好し棒を喫するに。何が故ぞ半夜起き未つて膝を屈して坐す、毛頭星現す衲僧の前。』と。上堂。『若し一句の商量を作さば、喫粥喫飯阿誰か會せざらん。』一句の商量を作さずんば屎坑裏の蟲子も閻梨を笑殺せん。』寫に拄杖

【腐臭】 腐は膝の清なり。又骨透ひたり。今の義に非ず、髓に通ず。臭は鼻が臭きなり。腐の匂ひ腐臭の如し。

【小賣弁】 ひけら  
かす意で

を拈じて云はく、「拈杖子罪犯彌天、二鐵圍山に貶向す、且く道へ薦船還つて過ありやまた無しや。」卓一下して云はく、「遅一刻。」と。僧問ふ、「普僧あり、雲門に問ふ、「如何が是れ清淨法身。」門云はく、「花藥欄。」此意如何。曰はく、「淫沙努眼睛。」僧問ふ、「只者れ是ならば、自己を擧没す、只者れ不是ならば、先聖に辜負す。此二途を去つて、和泥合水の處、請ふ師道へ。」曰はく、「玉筋虎口を穿ふ。」僧問ふ、「槐を呈し棹を舞すことは、即ち問はず、且く道へ、娑婆手中の兒子、甚の處より得來る。」巖頭船板を扣つこと三下、未審し意旨如何。」曰はく、「焦糠打著す凍成の凍。」曰はく、「當時若し和尚に問はば、如何が他に對せん。」曰はく、「一棒に打殺せん。」曰はく、「普老和尚、大いに帽を買ふに、頭を相し去るに似たり。」曰はく、「彌甚の處に向つてか眞頭を見ん。」曰はく、「一割。」曰はく、「杖擲の神和。」曰はく、「婆、七子を生む、六箇は無音に遇はず、長者一箇もまた消得せずと云うて、無常水中に抛向す、又且つ如何。」曰はく、「少賣弄。」曰はく、「巖頭覺えず舌を吐く、普甘麼生。」曰はく、「樂しきときは則ち樂を同じうす。僧、樂具を提起して云はく、「但者前を繼取せよ。」曰はく、「放下著。」南唐記、師の會中に在り、狗子の語を頌して曰はく、「狗子無佛性、羅隱星、命に入る、是れ人を打殺するにあらずんば、人に打殺せられん。」師之を肯ふ。虎丘忌に香を拈じて云はく、「平生波異、普無意旨の老和尚に撞著す、後前を做し誦すとも洩洩し得ず、此より寸艾を卸却して、分に隨つて著衣喫飯二十年來、曲痒木に坐して、羊頭を懸けて狗肉を賣る。知んぬ他世の憑據がある。然りと雖も一年一度焼香の日、千古人をして懷想た

深からしむ。

費に曰はく、

蘄陽の人、血を見ることを怕る。

虚空の背白毛を生出す、古墓の中に深く暗箭を藏す

頭を研取し去る、首座と血相噴く

袖を拂つて行か行く、水南の機思遅鈍なることを笑ふ

孩兒を蒲陽裏に抛つ、驚むときは閉ち同じく歡ぶ

拄杖を鐵圍山に貶す、鐵應に免れ難かるべし

折玉筋を指す、強ひて巖前の虎口を繋つて擽ふ

落潮の詩を讀す、謾に云ふ洞裏桃花

夏叉の心菩薩の面、南無記の劍刃上に行くことを説ぶ

正法眼破沙空、傑侍者を引いて草堂裏に觀す

七十の僧臘肥馬頰、諸方の手を具して羅籠せざることを薄んず

二十枝狗肉羊頭、先師を誦うて便ち龍を呑んで恨を發す

楊岐の正脈を通ず、金輪峯影千江に落つ

宏智の芳塵を繼ぐ、獅岡池の光八面に生ず

趙宗異日誠に佛日の品題に負かず、後生源深くして法遠きことを致す





備、口はく、釣魚橋上の三郎、氣に示して曰へることあり、乃流燈籠を亂さず、老屋  
 窓を咬まず、罇子春、罇と冠を置く時、云はく、昔二子と明心に結す、賊を討け夜走る  
 南山の陰、大野原に踏む津浦の御、其風くして踏つて關所の林に来る、隙を逃り危に登る  
 四三里、少しく前前津水を通る、平野に身を乞ふ野人の家、十日長く燃る窟穴の裏、岡  
 俱我装束の室なることを見下、同作舞在伏鼠の中に陥す、人は言ふ、何れを脱す、枕  
 襲人を仙ふ炎疾同じ、春風雨雨たり佛道の寺、相對して夢中夢事を論す、雄ふ熱れ薄儀一  
 莖の蠶、部國而今鼓鼓なし、

養に曰はく、

驍龍の角、弓治の箕

百鐵の百片、漁師の御

縮に雲霧の雲を懸す、出格の風流

聖悟の空雲其已に成る、只一回の點眼を缺く

浮玉由に機を見て作す、三搭頭を回すことを消せず

錦緞帷前一へに羅襪、返つて婦人の毒手に遭ふ

助助枕、上兩行の涙、麻主の機を逃れ難し

語を出して稽ふることなし、老鼠の籠籠を咬まざるに誇る

機に臨んで奔軼す、駿馬に騎つて直に烟樓を撞く

虎溪の橋を踏踏す、遠法師の蓮社に活埋せらるることを斥ふ  
行いて積草の窟を窮む、杲風子の遠く梅州に竄せらるるに随ふ

稜氣を掃蕩す社樓一樓衣、凌烟の勳業  
戈を俾目に揮ふ風雲三尺の劍、筋を借る機謀

沮洳の徑楊梅の林、早く南山に寇を避くることを憶ふ

牛頭山雲頂寺、曉に西蜀を思うて歸休す

若更に老漢に筋となる端的を問はば、謝三郎未だ必ずしも漁舟に在らず

龍庵雪御師

【見通】 妻を娶る  
こと。

師諱は鼎高、大慧に習す。福州林氏の子。本儒業を習ふ。因に寺に入りて遺教を以て  
數版を見て有あり。出家せんと欲す、同門の近きを以て之を難る。師曰はく、天桃紅杏  
一時に春風に分付す、翠竹黄花此去つて永く伴侶と爲らん、親を辭し髮を剃る。歸湖湖に  
名宿に得參す。心所縁なく身に膺依なし。庵を荒峯の絶頂に結ぶ、後に大慧に見ゆ、一日  
問うて曰はく、内よりも放出せず、外よりも放人せず。正恁麼の時如何。師口を開かんと  
擲す、慧竹篋を拈じて男背に連打すること三下、師大悟。慧印するに偈を以てす、曰はく、  
一頂門堅亞す摩羅の眼、射後刹に懸く命の符、眼を瞞却し符を卸却す、趙州東嶽に胡盧  
を持し、上堂、懶翁窟中の懶妓、懶なるは説禪に懶なり、亦自己を重んぜず亦先賢を重ん



春風二重桃の花、各付已に開し

紅日三竿薄雲の枕、撼搦すれども醒めず

内放出せず、外放人せず

竹筥を洋奥裏面に敷し、身に所依なく心に所頼なし

半庵を丸亭、頂上に置ふ

盲人地を依り、扇門の眼輪障を敷敷す

雲身につく、肘後の符命するに類爲なり

直懸山に背を懸て天を貫す、衣句を廻り真りに其音を爲すなり

泥地にを閉り樹花を開く、陰陽を算して從來の事なり

錦標を奪ひ得て上り、寺が蘭菫花符を符上に従す

目前の鏡を裏書せば、木虎を引いて真馬懸影を寫すなり

頭打の輪界を心に環なし、空く迦達磨李道士非生ひの事なりす、又書きたり、川井

す

密庵後編節

密庵は密庵、密庵に寫す。福州鄰氏の子。福懸山竹屋に入る。夢みて生る。髮を下して禿く。四方を拓く。後世傳に見ゆ。庵、室中に開き、如何が法眼。一日はく、「密庵

【密庵】とす

【面門】華嚴大疏に、面門即ち口也とあり。

盆。庵之を肯ふ。未だ幾ならずして辭して親を省す。庵傷を以て送つて曰はく、大徹投機たいてつていの句、當陽たうやうに面門めんもんに麗れいかなり。相従ふ今四載しよざい、晴湖せいくかにして痕なし、未だ鉢衣へつゐを付せずと雖も氣宇、乾坤を呑む。正法眼せうぽうがんを把りて喚んで破沙盆はさへんと作す、此行將ここのちに省觀しやうくわんせんとす、切きに思しむ使しち躁跟そうこんすることを。吾われに未後の著しやくあり、歸かへつて汝なんぢが遊あそはんことを要よするを得えつ。上堂じやうだう、世尊せそん不説ふとくの説、曲まがを拗あして面めんと作さす、蓮葉れんゑつ不開くわいの聞もん、空くうを望ぼうんで辱は告こす。馬祖ばそ即心じやくしん即佛じやくぶつ、羊頭じやうとうを懸かけて狗肉くわうじゆを賣うる。趙州ちやうしゆ、庵主あんしゆを問もんす、費たく買かうて賤せんく賣うる分文ぶんぶんも直ちらず。只文殊じふんじゆは是こゝれ、佛ぶつの師しの如ごとく、甚こゝに因よつてか女子こなんし定じやうを出だすことを得えざる。天河てんが月暈げつうんして魚子ぎよこを生うみ、摩竭まがつ風微ふうゐにして鹿茸しかじゆを養やしふ。上堂じやうだう、婆提はて庵あんの話を舉こして拈ねじて云はく、

『者公案しやくあん叢林そうりんの中拈提ねていする者あること少まなり、傑けつ上座じやうざ面門めんもんを裂破れつぱして敗缺ばいけつ一上いつじやうを納なることを免まれず、また諸方しよほうの點檢てんけんを要よすることを。乃すなはち大眾だいしやくを召よして云はく、一者いつしやく婆子はし洞房どうぼう深隱しんゐんにして水泄すいせつげども通とぜず、枯木こぼく上じやうに向むつて花はなを糝こきし、寒灰かんゑ中に餓がを發はつす。南なんの管孤くわんこ身しん過かして洪波かうぱに入るに慣なふ、等閑とうかんに坐ざす濛天もうてんの潮うしほ、到底たうてい身に汗滴あせつの水みづなし、子細しよさいに檢點けんてんし將まさらばらばらを蔽かき鎖さを打うつことは即すなはち無なきにあらず。若し是こゝれ佛法ぶつぽふならば夢ゆめにも見みざることあり。鳥巨ちやくこ恁麼いんまの提唱ていじやう畢ひ、竟きやうの意何いれの處ところにか在ある。良久らうじゆして云はく、一いつ把つの柳絲りゆうし收しゆむることを得えず、烟えんに和わして搭たつ在ざす玉闌干ぎよくらんかん。面松めんしゆ源破げんぱ庵あんを接せつして鳥巨ちやくこに出い世せし、天童てんどうに終はふ。

費に曰はく、

根林こんりん錦荔きんりを生うず、密樹みつじゆ旃檀せんたんを出いす

廬山の僧夢に何の面目を見る、蠱毒の水沾着すれば心肝を爛かす

向上の露干聖と共に行く、泥犂獄に入つて懺悔懺愧

破沙盆分文に準ずるに直らず、正法眼に換ふ大難大難

女出定を拈じて楊州に髻髻たり、鹿耳を養ふ微風海菜より生ず

婆燒庵を判す越國に依稀たり、柳絲を垂る烟に和して欄干に搭在す

松源を喝して兩耳聾せしむ。鉢に特石を包む

破庵を殺して全心死せしむ、鐵泥團を裏む

冷泉百日の主人と做る、郭汾陽が中書の考に勝れり

屹たる輩江の中流の砥柱、覺羅州の既倒の潮を回す

大徹投機頂門を廓かにす、初めより奇特なし、信に道ふことを知んぬ、江南兩浙秋熟し春

寒し

臨濟此に至りて十四世共に二十六人なり。

曹洞宗

洞山悟本禪師

師諱は良价、雲巖に嗣ぐ。越州諸暨の人、姓は俞氏、初め忠國師に謁して、無情說法を問うて契はず、後に流山に到る。山問ふ、聞く、閻梨曾て國師に無情說法を問ふと是なりや否

云、師云はく、是、山云はく、其、に擧せよ、看、師擧し了る。湧山云はく、我、着、夢、  
 また此子あり、只是れ其人に違ふ事なり。師云はく、便ら請ふ。三、子、子、を以て點一點す。  
 師云はく、請ふ、和尚某甲が爲に證け、湧山はく、父母所生の口終に子が爲に證かす。師  
 云はく、此間に同年道を違ふ者あることなしや。湧、云、巖に見えしは、師辭して直に雲巖  
 に迷りて前話を請ふ。巖云はく、見ず、師、巖に云はく、水鳥、林、悉く皆念、念  
 決こと。師因つて省あり、偈を作つて曰はく、也、本、寄、也、太、寄、無、情、法、不、無、情、若、し、耳、を  
 聽て聽かば終に會し、眼、處に聲を聞いて方に知ることを得ん。一日、巖に問ふ、某甲、誰  
 問あり、未だ盡さず。巖云はく、汝、曾て甚、密をか作し來る。曰はく、平、諦も亦、爲さず。曰  
 はく、這つて歡喜地を得るやまた未だしや。曰はく、歡喜は即ち無きにあらず、糞、堆、頭、に  
 一、塵の明珠を拾ひ得るが如し。師、巖を辭して問ふ、百年の後、忽ち人あり、這つて和尚の  
 眞を證得せば、如何が相對せん。巖良久して云はく、只、昔れ是、師、津、津、す。師云はく、  
 一、併、聞、梨、偈の事を承當す、大いに這らく、實なるべし。師、巖に、這る、後、水、を、濁、き、影、を  
 照るに因つて、方に頓悟を得て偈を作つて云はく、一切に思む、他に證うて、獨行することを  
 追、追、我、と、疎、なり、我、今、獨り、自ら、往、く、處、處、要、に、違ふ、ことを得たり。渠、今、正、に、是、れ、我、我、今、  
 是、れ、我、にあらず、他、に、這、らく、慈、密、に、會、せば、方、に、如、如、に、堪、ふ、ことを得ん。渠、に、示、して、云、は  
 く、末、法、の、時、代、は、人、乾、慧、多、し、若、し、眞、偈、を、轉、轉、せんと、要、せば、三、種、の、滲、漏、あり。一、には、見  
 濁、濁、機、位、を、離、れ、されば、毒、海、に、墮、在、す。二、には、情、法、濁、智、常、に、向、背、して、見、見、偏、情、す。三、に



は語添滿、體影、宗を失ふて、終終に味し。雪山歸する次、師、山に先雲嶺の付する所の  
 寶鏡三昧五位の顯訣を授け畢りぬ。山、再拜して去る。北院の通、參する次、師上堂云は  
 く、「上人翁を坐斷して第二見に落ちず。通、衆を出でて云はく、「須らく知るべし、一人あ  
 り、合併せず。」師云はく、「爾第二見、通、便ち禪床を掀倒す。師云はく、「老兒作麼生。」通  
 云はく、「某甲が舌頭の觸るるを得つて即ち和尚に向つて道はん。後師を辭して堂に入る。  
 師云はく、「飛猿出壁なり、好く看よ。」通、沈吟す。師云はく、「通闍梨は何を當に入り去ら  
 ざる。」通省あり、更に窺に入らず。雪山、師に參す。師問ふ、「甚の處より來る。」師はく、  
 『大慈より來る。』曰はく、「大慈を見るや。』師はく、見る。師はく、「色前に見るか色後に見  
 るか。』曰はく、「前後の見に非ず。」師默して、後に山衆に對して過を省す。前話を舉げて、  
 乃ち曰はく、「師を離るること未だ早うして、師の意を盡さず。」師默して曰はく、「結木花開  
 く劫外あり、倒に玉象に騎つて無難を起ふ、而今高く隱る千峯の外、月皎く傾清し好日  
 辰。」

實に曰はく、

雲嶺跳躑の兒、諸塵と對せず

薰花に觀入して白馬を離つ、難出を賀め

倒に玉象に騎つて麒麟を起ふ、單に向背を問す

水鳥樹林何ぞ曾て說法せん、徒に自ら毒と飲す

塘（たう）、草瓦（そうが）、曝（はく）汝（に）が爲（に）に機（け）を發（は）す、豹（ひょう）然（ぜん）として言（い）せす

婆（ば）頭（とう）に頭（とう）其（その）類（るい）を拈（ね）ひ得（と）たり、習（じゆ）氣（ぎ）したるかす

水（みづ）影（かげ）鏡（かがみ）に影（かげ）の鏡（かがみ）を透（と）得（と）す、尖（せん）錢（せん）遺（い）單（だん）

金針（きんしん）玉鏡（ぎよきやう）、暗（くら）に鑰（やく）匙（し）の千重（せんじゆう）に鎖（さ）す

石女（せきにょ）木人（ぼくにん）、密（みつ）かに密（みつ）語（ご）の二珠（にしゆ）を付（つ）す

何（なに）そ世（よ）に入り去（さ）らざる、通（とう）關（くわん）梨（り）の背（せ）で道（みち）はずして舌（した）を爛（らん）了（りやう）して休（やす）するに堪（た）す

還（かへ）へて大（だい）慈（じ）を見るや達（たつ）貧（ひん）山の早（はや）く脚（あし）を離（はな）れて心（こころ）に悔（くわい）ゆるに似（に）たることを覺（しる）す

網（あみ）罟（ご）に生（なま）鐵（てつ）を著（つ）く、見（み）情（じやう）淨（じやう）濕（じつ）被（ひ）殺（ころ）つた多（おほ）し

安（あん）持（ぢ）心（しん）を用（もち）ひ盡（じん）す、偏（へん）正（しやう）君（きん）臣（ぢん）一（いつ）事（じ）すまに計（けい）ることなし

千里（せんり）書（しよ）を持（も）して家（か）に到（たう）らず、金（きん）鳳（ほう）の籠（かご）單（だん）に宿（しゆく）して、斜（しゃ）月（げつ）夜（や）明（めい）扉（ひ）外（がい）に掛（か）くることを看（み）る

曹山元證禪師

師（し）諱（な）は菟（う）章（しやう）。洞（どう）山（しやう）に闍（せ）々（せ）。泉州（しゆんしゆ）黃（わう）氏（し）の子（こ）。始（はじめ）め洞（どう）山（しやう）に謁（えつ）して依（よ）止（し）すること數（すう）載（ざい）。乃（なほ）ち山

を辭（し）す。山（さん）問（もん）ふ、什（じ）麼（え）の處（ちよ）にか去（さ）る。曰（いは）はく、不（ふ）變（へん）異（い）の處（ちよ）に去（さ）る。曰（いは）はく、不（ふ）變（へん）異（い）ならば

豈（あ）去（さ）ることあらんや。曰（いは）はく、去（さ）るも亦（また）不（ふ）變（へん）異（い）。遂（すなは）に辭（し）し去（さ）る。曹（そう）山（しやう）に止（と）まる、學（がく）徒（た）雲（うん）の

如（ごと）く集（あ）る。僧（そう）問（もん）ふ、佛（ぶつ）本（ほん）た出（だ）世（せ）せざる時（とき）如何（いか）。曹（そう）山（しやう）は如（ごと）かず。出（だ）世（せ）して後（のち）如何（いか）。曰（いは）は

く、曹（そう）山（しやう）に如（ごと）かず。僧（そう）問（もん）ふ、如何（いか）が是（こゝ）れ枯（こ）木（ぼく）裏（うら）の龍（りゆう）吟（いん）。曰（いは）はく、血（ち）脈（みやく）斷（た）ぜず。如何（いか）が是

れ、獨襟裏の眼晴、こはく、「乾き盡くさす。乃ち偈を作つて曰はく、「枯木龍吟、眞の見道觸  
機、識無くして、眼初めて明なり。喜識盡くる時消息盡く、當人那ぞ濁中の清を辨せん。」  
僧問ふ、「清税孤貧なり、乞ふ師持濟せよ。」師税鬮梨を召す。税應諾して曰はく、「青原自家  
三盞の酒喫し了つて猶道ふ、未だ唇を沾ほさすと。」僧問ふ、「璞を抱いて師に投ず、乞ふ  
師願遂せよ。」曰はく、「願遂せず。曰はく、「什麼としてか願遂せざる。曰はく、「須らく知る  
べし、曹山好手なることを。」僧問ふ、「如何が是れ和尚の眷屬。」曰はく、「白髮連頭に戴く、  
頂上一枝の花、師三種の墮あり、一には披毛戴角、一には不斷聲色、三には不受食。稠  
布納あり。問ふ、「披毛戴角是れ什麼の墮ぞ。」曰はく、「これ類墮。」不斷聲色是れ什麼の墮ぞ。」  
「これ隨墮。」不受色是れ什麼の墮ぞ。」曰はく、「これ尊貴墮。」

贊に曰はく、

寶鏡光寒く、彌縫眼活す

貳を接いで門牆を闢く、宗綱掌握に歸す

身を尊貴に墮す、寒風寶み來る玉樹の花

法を立すること森嚴なり、金鳥喙傲す瑠璃の數

自家の酒唇沾すること未だ嘗ず、幾か會て清税が孤貧を濟ふ

荆山の璞懷抱相投す、輕しく者僧の與に願遂せず

萬機俱に掃蕩す、佛も亦如かず

【其を教く云云】  
【云々】

一位に存す。人皆稱して云ふ。

五箇指を示す。諸家思想情を指出す。

一枝の電を戴く。眞實の心。いつて此の如し。

曹山高懸、雲を穿て有り。經路。

河水逆流、浪を衝く。經路。

不異の處、昔を憶つて修行す。故に海潮波もみ消すまじし。

雲居冬三法師

師は道膺、高山に居り、湘州王山王尼の寺、高山に居す。山問ふ、其の處より來

る。曰はく、華嚴より來る。曰はく、華嚴の言句有りてか處に來す。曰はく、翠微羅漢

を供養す。某甲問ふ、一草一木を供養す、還つて來るや否や。曰はく、一聞毎日箇の什麼を

ふ。曰はく、山曰はく、實に此語あり。吾々曰はく、有り。曰はく、吾々曰はく、作家に參見し來

らず。一日山問ふ、世の處より來る。曰はく、山を踏み來る。曰はく、那箇の山に住する

に堪へたる。曰はく、那箇の山に住するに堪へざらん。曰はく、無事ならば則ち國內の山

盡く閑梨に占却せらる。曰はく、何れぞ。曰はく、何事ならば則ち子箇の入路を得た

り。曰はく、路なし。曰はく、若し路なきは爭か老僧と相見ることを得ん。曰はく、

若し路あらば則ち和尚と坐を隔てん。山乃ち曰はく、子をば已後千人萬人も把不住なら

ん。南泉、箇に問ふ。什麼の經をか講ず。曰はく、彌勒下生經。曰はく、彌勒幾時にか下生せん。曰はく、現に天宮に在り、當來下生せん。曰はく、天上に彌勒無く、地下に彌勒無し。彌勒して由に問ふ。未審し誰と與に名を授ずる。山問はれて。座震動す。乃ち曰はく、彌勒衆と吾雲巖に在りて、曾て老人に問ふ。直に火燒震動することを得たり。今子に一間せられて直に得たり、通身汗下ることを。彌三摩に應ず、句を經て堂に赴かず。山問ふ。近日何を堂に赴かざる。曰はく、毎日自ら天神の食を送るあり。曰はく、將に謂へり、汝は是れ箇の人と猶者箇の見解を作すか、汝曉開に未れ。彌勒に問ふ。山、彌勒梨。と召す。師應諾す。曰はく、不思議不思議見見付置そ。彌勒に問つて授す、天車來心方。後國皇に對つて問に對いて屋を焼して居す。雲居と居す。衆に示して曰はく、人の三貫錢を賣て肉の鹽水を買ふが如し、只蹤跡ある處を現れ得ることを解す。忽ち羚羊の角を擲くるに遇りて鐵錐と遺ふことあり、氣息も亦無し。僧便を問ふ、羚羊未だ角を擲けざる時如何。六六三十六。掛くる後如何。六六三十六。僧を解す。師云はく、會すや。云はく、不會。云はく、曾道ふことを見すや、蹤跡を解すと。に示して云はく、得る旨は無微ならず、明なるは賊用せず。講する者は著塵せず。解する者は匪想なし。天より降下するときは則ち貧窮、地より湧出するときは則ち富貴。門裏身を出すことは易く、身裏門を出すことは難し、動けば則ち身を埋むことす。文、動かされば則ち富貴に當を生ず。一言地に墮すれば當時に同我す、言語なきことを要せず、多ければ則ち用處なし。一葉

に示して云へる有り、一得座の人は、二瓢背の扇の如し、口邊直に映出することを得たり、  
是れ蓋はて爲すにあらず、任運に此の如し、又云はく、一瓦子を古人の道はく、學處をたらし  
まんば、二盡く是れ法指の間の中の物、捨つること得ず、但に法指とす、一切の事を任ぜ  
盡せば、三結めて過なきを得、人の頭頂に上に映み、物物の上に通ずるが如し、只喚んで了  
事の人と作す、終に喚んで無言と作さす、時に知る、四覺の一語を自らに就あることを。道  
ふことを見せや、門より入る者は實に非ず、捧げ上りせりとを聽して成らず、知る者、五僧問ふ、  
一人ありて鐘を衣て入り來る、師に見て後をとして寸絲を掛けざる、師はく、直に琉璃眼  
上に行くことを待つて舞を倒せば、二細く粉掃すべし、三師侍者をして鐘を送つて、一庵主に  
與へしむ、主はく、一自らに師生の物あり、受けず、再び送り去つて問はしめ、二鐘未だ生れ  
ざる時、三鐘の其響をか著く、主語無し、後還作、楚いて舍利を得たり、時し以て師に似す。  
師はく、一直に八斛四斗を出し得るも、如かじ當に一轉を下しするの好からんには、二僧  
問ふ、三山河大地何よりしてか有なる、師はく、一妄想よりして有なりと、師はく、二某甲がため  
に一鐘の金を想出せん、得てんや、師はく、三佛日の空、參ずる次、問ふ、四能珠を爭  
ふ、誰か是れ得る者、師はく、一業身を卸却し來れ、子と相見立ふ、師はく、二已に業身を卸  
ぐ、師はく、三珠、此の處に在る、空、語なし、遂に誠を投じて入室す、師示寂、主首、師  
に白す、一誰か席を纏ぐべき、師はく、二堂中の簡時に簡密に師の印を受く、人知る者なし、  
臘の高きを以て第一座となす、衆師の意を曉らず、謂へり、三揀擇せしめんと、四第二座に命

じて仕持せしめんと欲す。且つ禮を備へて先づ前に請ふ、簡護らす、即ち自ら道具を持して方丈に入る。衆懼はず、簡其情を察して乃ち棄て去る。其夜安樂樹神號泣す、且に及んで、衆奔つて麥莊に至つて、過を悔いて哀請して衆に歸す、問く、空中連聲唱へて曰はく、『和尚來也。』と。

贊に曰はく

作家に參見し來る、語を出せば人驚恐す

幽州江口是れ生緣にあらず、天上の雲居褱が賣弄するに従す

山を踏んで閑樂の入路あり、幾か會て和尚と生を離つ

是れ難か難勤のために名を安す、禪中の靈鷲することを得るに到らず

羚羊氣息を絶す、軒かに知る鐵犬の尋ね難きことを

庵主機嫌なし、寢か天師の供を造ることを得ん

寸絲掛けず、翠瑠殿上輕しく脚を寄けて人を撲倒す

千丈身を擡む、貧富門頭大いに眼を開いて笑を説き出す

孃生の袴拈出することを休めよ、一轉語を下し得ば方に持攝すべし

安想の心掃除し難し、一錠の金を想出す何の用をか作すに堪へん

口邊に醜を生ず、臘月の扇子正に好し揮掃するに

學處女ならず、閨閣の中の物徒に貴重するに勞す

【喜入喜入】  
こころなきはは、こころありて歡くなり

「身」を以て「二相」目と相する、此も「二目」を「問」答と相す。  
「二目」を以て「問」答と相する、此も「二目」を「問」答と相す。  
四よ、入る、不入、相の上と云ふ、此も「二目」を「問」答と相す。

同安宗要

師曰。道不。法華の人。師着經する次、俗の來り參するを見る。遂に袖を以て扇を蓋し、僧弔の髪を分す。師袖を放下し、師曰く、會すや。僧袖を以て扇を蓋す。師曰く、若天。僧問ふ、如何が方。師曰く、一波浪を透らば。僧曰く、慚責する時如何。師曰く、終に波を穿かば。僧曰く、一身を穿かば。僧曰く、是ならん。青雲の事作生。僧問ふ、如何が其の家風。師曰く、金鷄子を殺して香湯に歸り、兎懷胎して紫夜に入る。僧曰く、念も客の來るに遇はば何を以てか辨行せん。師曰く、果早朝に摘みあり、果ては、問はず木る。師曰く、湖南。師曰く、選つて同安が風雲の體道。花籃を以て知る。師曰く、知る。師曰く、公の境界に非ず。僧便ち喝す、師曰く、短販の外人、杖に以て知る。僧進語せんと擬す。師曰く、劍甲未だ施さざるに、賊身已に敗る。僧問ふ、如何に言説あらば盡く今時に當つ。師曰く、當に當らざる。僧問、師直説せよ。師曰く、木人舌を嚼す、舌に于るに非ず。石人膝を抛つ、豈絲を亂さんや。僧問ふ、一經に依り意を無す、一机拂の窓、經の



字を尋るれば即ち魔説に同じ、此理如何、曰はく、孤寧迦かに秀で罽羅を掛けて、片月空  
に行く白雲自在。僧問ふ、佛未だ出世せざる時、如何。曰はく、藕絲人像を繋ぐ。曰はく、  
「出世の後如何。曰はく、何れも有牛を誑す。僧問、何れが是れ異類中の人。曰はく、案  
地に白牛を藏し、長空日月を呑む。」

資に曰はく、

奔軼絶塵、了に羈絆なく

偏正位中より來る、聖凡情已に泮く

青雲何の事かある、野額の魚已に波濤を透る

家風論するを要せず、金鷄の子豈香漢に歸せんや

六の境界に非ず親しく喝せらる、樵人の短販書劍徒に誇る

三の空に落ちず直説に來る、石女棧を抛ち機絲紛亂す

佛性を啣み霜猿果を摘む、賓客を待して未だ眞情を見ず

三の空に秀で片月空に行く、佛魔を辨じて元正眼なし

佛未だ出世せずと答ふ、截流して象藕絲頭に繋ぐ

伊和として異類中の人を説く、露地の牛は芳草の岸に藏る

佛を編し罷みて金針のやに、綿密誰か知る

佛具虚空しうして玉衣寒し、森嚴犯し難し

【持人】人の面  
目をつぶしてなぐ  
さむこと。【利巧】  
利巧にて人を嘲弄  
するなり。

持人、是れ形塵の僧、大袖頭を差ふ蒼天蒼天、賊過ぎて後弓を張ること、に跪し

同安志 師

師、洪州の人。予、將に示寂せんとす。上堂云はく、「多子塔前  
宗子秀づ、五老堂前事若何。是の如く三問未だ對ふる者あらず。師出でて曰はく、「夜明  
外塵を拂して立つ、萬里歌道太平。」不曰はく、「須らく是れ者漢にして結めて得べし。遂  
に寂を示す。僧問ふ、「標到らず、如何が異唱せん。」師曰はく、「偏處逢はず、玄中失せ  
ず。」僧問ふ、「凡そ言句あらば、盡く今時に落つ。學人上來請ふ、師直指せよ。」師曰はく、「  
」日前に現ぜず、句後に迷はず。」曰はく、「向上の事如何。」曰はく、「無然として撰ず、標準  
すれば即ち乖く。」

贊に曰はく、

鶴寒松を夢み、鶯幽谷に啼く

正偏に墮せず、寧ろ背嚮を分たんや

多子塔前宗子秀づ、先師の金剛の雙趺を露はすことを喚ふ

夜明雁外立塵舞し、瞎驢の頂門の三日を緊するに還す

偏處逢はず、玄中失せず

二機到らざる處轉た紛拏を見る、目前に現ぜず句後に迷はず

直に本來の心を指し、翻つて迂曲となる

實殺人無くして孤月冷じ、南風物を早かにするの琴を清弾するを聴く

震苦路を封じて彩雲深し、垂棘無瑕の玉を妙琢するを見る

梁山の破家種を出す、蒼龍の子彩鳳の雛豈の傳に當らんや

曹洞五位の宗を繼ぐ、青山の父白雲の兒是れ何の昭穆ぞ

迴然として換へず、標準すれば即ち乖く、向上の事海底に金針を摸る、然も妙扶正中拈

出し來れば、花簇簇辟簇簇

### 梁山觀禪師

師諱は緣觀。同安志に對ぐ。邇州の人。僧問ふ、「如何が是れ禪の家風。」曰はく、「益陽水急にして魚行澁り、白鹿松高うして鳥泊ること難し。」問ふ、「師が家の曲をか唱へ、宗風阿誰にか對ぐ。」曰はく、「龍龍子を生じ、鳳鳳兒を生む。」問ふ、「如何が是れ西家意。」曰はく、「慈惠唐土の信を傳へず、胡人謾に太平の言を説く。」問ふ、「如何が是れ學人が自己。」曰はく、「實中は天子塞外は將軍。」曰はく、「便ち任麼にし去る時如何。」曰はく、「鐺刀室に懸つて室中語に生ず。」問ふ、「如何が是れ衲衣下の事。」曰はく、「密。」問ふ、「如何が是れ正法眼。」曰はく、「南華裏。」曰はく、「什麼としてか、南華裏に在る。」曰はく、「汝が正法眼を問ふが爲に。上堂、鈎を四海に垂れて、只獐鹿を釣る、格外の玄機知己を尋ねんが爲なり。」座下に

一團頭あり、人謂つて曰はく、何ぞ此で來つて一團頭を問はざる。曰はく、我若し出で  
 問はば、須らく此老和尚にして、經律を下つて立たしたるべし。人のを拜して、一日出で翻  
 上、家賊防ぎ難きと云。何、曰はく、一團頭すれば世をたさす。曰はく、一團頭して經律何  
 曰はく、無生國婁に經向せん。曰はく、何ぞ是れ世の安身立命の法なるべし。また  
 無生國、曰はく、水龍を藏す。曰はく、何ぞ是れ活來妻の法。曰はく、法を拜して  
 痕を作さず。曰はく、忽ち涙を傾け世を圓し來るに遇ふ時無何。一團頭を拜して  
 曰はく、團梨、新僧が袈裟の角を執りてしむることなかれ。衆遂に之を觀す。左馬の支參  
 なる次、問ふ、何何が是れ無相道場。新僧を指して云はく、一者前、是れ更僧が華、支  
 道清を撰す。前を正案めて曰はく、首領は是れ有相。何何が是れ無相。二つも行を言下に  
 斬つて斬りして傳す。師曰はく、何ぞ一句を説成せざる。曰はく、道とは何も許さず。悉  
 らくは氣平に上ぐることを。師笑つて曰はく、此語、尊に上り去ること存らん。女僧を呈  
 して曰はく、我昔初無相道逢ふ。萬水千山見智を覺む。今を明ぬ、古を踏す、終に會し  
 難し。直に無心と説くも轉た更に難ふ。秦時の佛を誦出すことを乘りて、父母未生の  
 時を照見す。如今覺了す何の所得ぞ。夜鳥鶏を放つて雪を帯びて飛ぶ。一團、洞上の宗倚む  
 べしと稱す。佛あり、曰はく、樂山一曲の歌、格外人知し難し、十載知音を訪は、未だ  
 言て一箇に逢はず。

費に曰はく、

益陽水急に、白鹿松高し。

鶴睡清うして月魄を飛ばす、魚行細くして金梭を擲つ

死水龍を蔵さず、家賊を貶して無生國に向ふ

鄭音空しく雅を亂る、胡人を引いて太平の歌を唱ふ

衲衣の事密用の中に在り、拈じ來れば破綻多し

正法眼南華裏を指す、幾語謔を用ひ出す

寰中は天子塞外は將軍、學人の真に自を塗欄す

格外の玄機鉤頭の絲線、獐龍を釣つて洪波に活葬す

一語太陽の碑に上すを許す、人をして悪心少からざらしむ

十載梁山に在りて尚を唱ふ、風に臨んで耳を掩ふこと應に多かるべし

妙盡き功亡す、玉斧を揮つて夜月鏡を修す

環虚に横沢す、仙槎に駕して曉星河を渡ら

更に亡僧の遷化を問へば、紅爐烟上絲縷なし、堅に攬き横に抱く

### 大陽玄禪師

師諱は警玄、梁山に嗣ぐ。江夏張氏の子。仲父沙門と爲り、智通と號し、金陵の崇孝に仕侍す。往いて依つて師と爲し、圓覺の了義を慧き、棄て去りて梁山に謁して旨を悟る。

上堂云はく、「羅漢萬仞鳥道通じ難し、何句雪氷重に覆りてか、識懐せん。宗乘の妙句諸路練  
 じ難し、不二法門淨名口を任じ、所以に流弊九年如壁、留めて知音に遇ふ。大陽今日ま  
 た無無く、珍重、僧問ふ、「如何が是れ和尚の家風、曰はく、「滿瓶傾け出さず、大地飢人  
なし。上堂云はく、「二手を撒す那邊千聖の外、祖堂少室根芽を長ず、鷲雪巢に倚る猶、自ら  
 可なり、更に看よ白馬廬花に入ること。上堂、諸師徒類らく明むべし、平常無生の句、  
妙玄無私の句、精明無盡の句、第一句一路を通ず、第二句賓主なし、第三句兼帯し去る、  
一句に道ひ得ば師子顯呻、二句に道ひ得ば師子遺跡、三句に道ひ得ば師子踏地、衆つやど  
 方に周徧す、挽ふるや一時に坐斷す。正無客の時作麼生か、僧の消息を通ぜん。大衆證明  
 若し通不得たらば、末朝更に楚王に獻じて看よ。時に僧あり、出でて問ふ、「如何が是れ平  
常無生の句、曰はく、「白雲青山を覆ひ、青山頂露はれず。」如何が是れ妙玄無私の句、  
曰はく、「寶殿人の侍立せざるはなし、梧桐を種をされば鳳の來るを免る。」如何が是れ體  
明無盡の句、曰はく、「手空を指す時天地轉ず、石馬紗籠を出づ。」如何が是れ師子顯呻、  
曰はく、「終に回顧の意なし、争か背て平常に落ちん。」如何が是れ師子返擲、曰はく、「周  
旋往返全く父に歸す、大用を繁興して體動くることなし。」如何が是れ師子踏地、曰はく、  
『去來の機を廻絶して古今變異なし、上堂、夜半鳥鷄鶴卵を抱く、天明起き來つて老鶴を  
生ず、鶴毛鷹背鷺鷥の身、却つて鳥鷄と伴侶となり、高く烟雲に入り低く柳岸に飛ぶ、晚  
に向つて歸來子細に看れば、依倚として雲中の鴈に似たり。僧問ふ、「如何が是れ透法身の

句。曰はく、『大洋海底紅塵起る、須彌頂上水横流。師年八十、其法を繼ぐ者無きを歎じて偈を作つて、皮履布襪を并せて遠録公に寄せて、法器を求めて之を傳續せしむ。曰はく、『楊廣山前の草、君に憑りて價の焔なることを待つ、異苗蕃茂の處、深密に靈根を固らす。』其尾に云はく、『得法の者衆に湛ること十年にして、方に闡揚すべし。』遠拜して受く。師嘗て曹山三種の語を釋す、須らく轉位を明得て始めて得べし。一には曰はく、『水牯牛と作る是れ隨類墮、是れ沙門轉身の語、是れ異類中の事、若し此意を曉めずんば、即ち所滯あり、直に是れ伊が一念無私なることを要す。即ち出身の路あり。二には曰はく、『不受食是れ尊貴墮、須らく那邊を知り了つて却つて者邊に來つて行履すべし。若し此位を處しうせずんば即ち尊貴に存在せん。』三には曰はく、『不斷聲色、是隨處墮、聲色を明めざるを以ての故に、隨處に墮す、須らく聲色の裏に向つて、出身の路あるべし、作麼生か是れ聲色外の一句。』曰はく、『聲白ら聲ならず、色自ら色ならず、故に不斷と云ふ。』指掌當に何の掌をか指すべき。浮山、師の氣に贊して曰はく、『黑狗銀跡を爛す、白象豈肯に騎る、斯二に於て無碍なれば木馬火中に啼ゆ。』

贊に曰はく、  
惡毒種、寧馨兒

漢陽渡頭に奪胎して出づ、智通寺裏懸腕して羈るなし  
圓覺場を掀翻す、跳つて言詮不及の處に入る

秦時の鏡を打破す、父母未生の時を照し見る

語路信に陳じ難し、宗乘の句灰に和し土に合す

滿瓶傾け出さず、大地の人餓を忍び飢を呑む

千聖の外手を撒して經行す、蘆花に入つて白馬に騎り去ることを笑ふ

寶殿の中人の侍立するなし、梧桐を種う寧ろ風風の觸むことを免れんや

消息既に通ず、惜むらくは師子爪牙未だ具らず

機縁契はず、青山父子相違することを致す

須彌頂上水横に流る、透法身疑團未だ破れず

楊廣山頭苗茂盛す、死款を供して老涙交垂る

老梁山の抑逼ただ多きに苦しむ、烏鷄鶉卵を生ず

達録公に塗欄せらるること少からず、黒狗爛銀蹄

聲色堆頭強ひて出身の路ありと説く、中央座主に非ずんば、誰か脛が破皮履潑禪衣を受く

投子青禪師

師諱は漢青。大陽に嗣ぐ。青社李氏の子、初め百法論を習ふ。歎じて曰はく、「三祇途遠

し、自ら困せば何の益かあらん。洛に入りて華嚴を聴く、義貫珠のごとし、講じて諸林菩薩の偈の即心自性と云ふに至つて、猛省してははく、「法は文字を離る寧ぞ講ずべけんや。」



と、棄て去つて、浮山に會聖巖に謁す。山、俊鷹を得て之を蓄ふと夢む。既に覺めて師至る。山以て吉徴となす、留まること三年。山問うて曰はく、「外道傳に問ふ、有言を問はず無言を問はず、世尊默然たるは如何。」師、進語せんと擬す、山其口を掩ふ。是に於て師悟つて拜起す。山曰はく、「汝玄機を妙悟するや。」曰はく、「設ひ妙悟あるもまた須らく吐却すべし。」時に資侍者旁らに在つて曰はく、「青蓮今日精に汗を得るが如し。」師回顧して曰はく、「狗口を合取せよ、汝更に初初たらば、我即便噴かん。」山、大陽の皮履布綴を以て師に付す、吾に代つて洞上の宗を續がしむ。上堂、「宗乘若し舉せば凡聖躰を絶す、樓閣門開く、別口に相見、設使塵を捲いて悟り去るも、豈旁觀を免れんや、春桃花に遇ふ、重ねて病血を増す。所以に古人道はく、「向上の一路千難不傳」と、諸仁者疑に是れ不傳なるに、甚としかか鐵牛新羅國に走過す。喝して曰はく、「進者は須らく知るべし、暗裏に驚くことを。」僧問ふ、「師誰家の曲を唱へ、宗風阿鼻にか崩り。」曰はく、「威音前の箇兩重の山を射過す。」上堂、默すれば空界に沈み、語すれば深坑に墮す、撰著すれば則ち天地に殊なり。之を棄するときは則ち千生萬劫洪波浩渺、白浪滔天、集海の明珠誰に在りてか掌を收む。良久、主杖を卓して云はく、「百雜碎。」示衆に云はく、「若し此事を論せば、龍潭の雪に沖するが如し、其跡を留めず。羚羊角を掛く、那ぞ其體を覺めん。金龍潭を守らず、玉兔豈能影に照まんや。其れ或は主賓若し立せば、須らく威音世外に頭を搖すべし。問答言陳すれば、乃玄妙路旁に唱をなす。若し能く是の如くならば、猶半途に在り。更に時を盡さば、相見

に勞せざらんや。師五位君臣を叙して曰はく、「夫は長空一色、星月何ぞ分る。大地偏なし、榮枯自ら異なり。是を以て法に異法なし、何ぞ迷悟あつてか及ぶべき。心自ら心ならず、言象を假つて而して提唱す。其言や偏圓正到、兼帶叶通、其法や是非に落ちず、豈萬象に關らんや。幽旨絶に水月に融す、宗源派れて金河に混す。虚凝に墮せず、迥達復妙なり。師大湯の秦時の鏡を點出する語を擧して、歎して曰はく、偏中正、夜半天明自影を差づ、朦朧たる霧色轉するも何ぞ分たん。濕然として秦時の鏡に落ちず。」

贊に曰はく、

嶽英靈を降し、天碗斗を生む

【碗斗】碗は山特に立つの貌、斗は斜に通じ、峻立の意。

因明を習うて未だ網羅を透らず、華嚴を究めて重ねて樞柁を増す

浮山不祥の夢に入る、折翅の鷹何ぞ畜ふことを用ふることを爲ん

洞下已墜の風を追ふ、躑躅の狗卒に醫救し難し

金風龍巢を借つて宿す、豈知らんや會聖の重剛に陥らんとは

良馬觀影を見て行く、初めより世尊の良久を待たず

即心自性、佛も亦強ひて名く

妙悟玄機、我即便嘔たん

鐵牛走過す新羅國、向上的路下聖不傳

石女輕く彎く月子弓、兩重の山一箭に射透す

鎮海の珠を擲つて百雜碎、語默到らざる處未だ轉身を會せず  
秦時の鏡一重の光を添ふ、明暗未だ分たざる前豈手を出すことを容さんや

玉兎豈蟾影に頼まんや、甚の處よりか者消息を得來る

金龍は寒潭を守らず、者漢別に條路を尋ねて走る

章を偏正に分つと雖も、虛靈に墮せず、轉位回功核則の處に到つて、何ぞ曾て有ることを知らん

芙蓉楷禪師

師は投子に嗣ぐ、諱は道楷、涪州雌氏の子。初も投子に參じて問ふ、「佛祖の言句は家常の茶飯の如し、此を離れての外別に爲人の言句ありやまた無しや。」曰はく、「汝道へ、寰中天子の勅、邊つて禹湯堯舜を假るやまた無しや。」師之に酬いと據す。子拂子を以て師の口を搯つて曰はく、「汝意を發し來らば早く二十棒あらん。」師即ち聞悟再拜して便ち行く。子曰はく、「且來闍梨。」と、師頷みず。曰はく、「汝不覺の地に到るや。」師即ち耳を掩ふ。一日子に侍して園に遊ぶ。子拄杖を以て師に付して曰はく、「理與塵なるべし。」曰はく、「和尚と靴を提げ杖を拏ぐ、分外となさず。」曰はく、「同行の在るあり。」曰はく、「第一人教を受けず、子休し去る、晚に至つて子請つて曰はく、「早來の説話未だ盡さず。」曰はく、「更に請ふ舉せよ、看ん。」曰はく、「卯に日を生じ戌に月を生ず。」師即ち燈を點じ來る。曰はく、

「上東下西、禮に從然ならず。曰はく、左右に在つて理此の如くなるべし。曰はく、一鉢兒  
婢子誰家の屋裏にか無き。曰はく、和尚、壯年他を缺かば不可なり。曰はく、一與麼に懸觀、  
曰はく、一恩を報ずるに分あり。上堂、畫紙泥の范に入り、晴月天に當る、夜靈鷲の山に登  
る、太陽日に湛る、鳥鴉雲に似たり、孤雁群を成す。鐵狗吠えて雪を凌ぎ、泥牛踏つて海  
に入る。正當懸壺の時十が共に聚る、彼我何ぞ分たん。古佛場中祖師門下、大家一隻の手  
を出して往來の知識を接待せよ。諸仁者、且く道へ、箇の什麼邊の事をか成し得たる。良久  
して云はく、一巖へ無影樹を栽て後人に留與して看しむ。僧問ふ、胡家の曲子、五面に墮  
せず、靄、靄、靄に出づ、請ふ師吹唱せよ。曰はく、木籠夜半に鳴き、鐵爐天明に叫ぶ。曰  
はく、一懸壺ならば則ち一句の曲千古の韻を合む、滿堂の雲水、盡く知音。曰はく、一無舌の  
童子能く觀和す。曰はく、作家の宗師、人天の眼目。曰はく、兩片皮を禁取し去れ。大觀の  
初め、京尹李孝壽奏す、一師の道行、叢林に卓冠す、宜しく褒顯あるべし。上紫衣を賜うて定  
照禪師と號す。内侍勅命を捧して至る、師恩を謝し竟つて、乃ち己が志を陳す。出家せ  
し時嘗て重誓あり、名利の爲にせず、專誠に道を擧して用ひて九族を資けん、苟も瞋心に  
違はば當に身命を棄つべし、父母此を以て出家を聽許す、今若し本志を守らずして竊かに  
寵光を冒さば則ち佛法下衰せん、是に於て表を修め力めて辭す。旨を京尹に降して堅く  
之を受けしむ。師、徹く守つて回らず、命を執むを以て罪に坐せらる。旨を奉じて收めて有  
司に付す、有司師の忠誠を知り、疾ありやを問ふ。師曰はく、平日疾あり、今實に無し。」

曰はく、「疾有りと言はば法に於て罪を免れん。師曰はく、「已に厚意を悉す、但妄りに安んずる所に非ず。恬然として刑を受けて行く、之に従ふ者市に歸するが如し。淄州に抵つて屋を織りて居す、學者愈々粗しむ。明年冬、刺して自便せしむ、芙蓉に庵す。四衆雲の如く集まり、大いに洞宗を聞く。示衆、「山僧行業取ることなし、忝く山門を主る、豈坐ながら常住を費して頓に先聖の付囑を忘るべけんや。今は輒ち古人に倣うて住持の體例をなさん。諸人と議定す、更に山を下らず、齋に赴かず、化主を發せず、唯本職兼課一年の所得を將て均しく三百六十分と作し、日に一分を取つて更に人に隨つて添減せず、以て飯に備ふべくんば則ち飯と做さん。足らずんば則ち粥と作さん。又足らずんば則ち米湯と作さん。舊到相見には茶湯のみ、更に煎點せず、惟一の茶堂を置いて自ら去つて取用し、務めて縁を省かんことを要して專一に道を辨せよ。師放たれて還つて後、有司爲に飯を去らんと欲す。師曰はく、「先帝の遺囑豈去るべけんや。帝謂はく、「此老終身無事」と。靈源の師を贊するに曰へることあり、「嚴天の大雪始めて松筠を見る、烟華天花も亦造化と成る、苟も世法を竊まば、實に思に強くものなり。」

贊に曰はく、

偏頗の老尊慈、眷愛生徒儲る

實中の勅、堯舜禹湯を假らす

洞下の宗、寧る偏正回互分たんや

【合】火夥同音通  
用 仲間の事。合夥はそんなかまの意。家私はこのは財産を指す。

眞に不疑の田地に到る、快に一雙の身を將て擡うて休す  
纔かに作家の宗師を識く、好し兩片皮を禁じて出で去るに  
胡家の齒子音韻なし、苦に夜半木雞啼くと言ふことを休まよ  
祖師門下功勳を絶す、徒に兵を出して無影樹を賤裁す  
同行教を受けず、謾に伊をして杖を擧げ鞋を提げしむ  
來去總に徒然、誰家にか奴兒縛子なき  
石女樓を抛ち木人錦を開く、潑箕義的に呈れ家傳  
泥牛海に入り鐵狗膏を凌ぐ、爛葛藤偏に能く路布す  
爛爛たる形影淄川に去る、松筠の操幾ど雪霜に傲る  
濟濟たる威儀漢節回る、芙蓉の花親しく雨露を承く  
粥是り飯是る、三百六十日合火家私を語る  
僧か俗か、三萬六千場床を對して夢事を論ず  
垂垂たる白髮、先帝の遺墨猶新しきを守る、媚草天花の造化を成すに視へ、苟も世業を竊  
まば顔に汗すること雨の如し

丹徒淳禪師

師は芙蓉に嗣ぐ、諱は子淳。鄧州賈氏の子。師上堂學す、「德山云はく、「我宗に語句なし、

亦一法の人に與ふるなし」と。徳山慧曇の說話只草に入り人を求むることを知つて、覺えず通身泥水なることを。子細に看來れば只一隻眼を具す。丹霞は則ち然らず、我宗に語句あり、金刀剪れども聞けず、深深たる玄妙の旨、石女夜懷胎、示衆舉す、一擧法師云はく、「乾坤の内、宇宙の間一寶あり、形山に秘在す一擧法師慧曇に遺ふ、只躡を指し跡を話することを解して、且つ人に指示すること能はず。丹霞今日宇宙を明開し、形山を打破して諸人の爲に拈出せん、具眼の者は擧取せよ。草一下、擧つて見るや、雲霧雪に立つ、同色に非ず、明月蘆花他に似ず。上堂、寶月輝を流す、澄潭影あり、水に月を離すの意なく、月に照を分つの心なし、水月兩ながら忘れて方に離と稱すべし。所以に遺ふ、昇天底の事は、直に須らく颯埵すべし、十成底の事は、直に須らく去却すべし。地に擲つ金の聲回顧することを須めず。若し能く是の如くならば始めて異類中行を解せん、諸人者裏に到つて還つて相委悉するや。良久して云はく、「行に當つて人間の歩を舉せず、長毛戴角泥塵に混ず。上堂、亭亭たる日午、猶半を驚く、寂寂たる三更尙未だ風かならず、六戸曾て曉意を知らず、往來月明の前に在り。僧問ふ、「牛頭未だ四祖に見えざる時如何。曰はく、「一金菊乍ち開いて蜂蝶は採る。曰はく、「見ゆる後如何。曰はく、「昔拈れ花謝して、了に依ることなし。眞歇參する次、師問ふ、「如何が是れ空劫已前の自己。歇對せんと擬す。師云はく、「備聞なること有り且つ去れ。一日鉢盂峰に登つて忽ち悟つて歸つて侍立す。師掌して曰はく、「將に謂へり、備有ることを知る。』と。歇忻然として之を拜す。翌日上堂、曰はく、「日照して

孤峰翠に、月臨んで溪水寒し、龍歸玄妙の表寸心に向つて安することなかれ、便ち下座。  
 歇直前して曰はく、今日陣座裏に某甲を設することを得され。師曰はく、備試みに我が  
 今日の際座裏を舉せよ、看ん。歇良久す。師曰はく、將に謂へり、備警地なり」と。  
 ち出づ、安智參する次、師問ふ、如何。是れ空劫已前の自己。智曰はく、井底の蝦蟇月を  
 吞却す。三更借らず夜明。師曰はく、未だ更に道へ。智擬議す。師打つこと一拂子して  
 云はく、又借らずと道ふか。智言下に於て大悟す。

贊に曰はく、

明珠無價より生ず、野鳥無群に在り

木佛を燒いて遺風未だ浪せず、聖門を敲して家語親しく聞く

心光を照發す花蠟燭、鄧州の道地  
 殺氣を慘舒す劍門關、長聞雲に連る

玉女懷胎恰も半更、玄妙の旨深淺を分ち難し

驚雲に立つ同色に非ず、形山の寶分々に直らず

水月雨ながら忘す、昇天底固に當に颯下すべし

塵泥既に混す、異類の中殷勤を惜むなかれ

鬼魂未だ分たざる時、軒かに知る六戸曉意を知らずと

牛頭相見の後、可憐生百花亂落ちて繽紛

【花蠟燭】繪蠟燭  
 なり、花は模様の  
 事なり。  
 【道地】其土地に  
 出来たるものを土  
 産と云ふ、他國よ  
 り來る物を道地  
 ふ。(わたりもの)と云



暗に金枝を擲ちて古洞の機絲を織る、輕輕に杼を鳴す  
細に玉線を排して曹山の綿縫を聞く、簇簇紋を成す

威音王已前、菩薩を教へ了つて毫光一掌に歸す

夜明廉借らず、覺天子を携にして筆陣千軍を掃はしむ

等閑に一句を道へ、正中妙抉織ひ金刀綿密の處を剪破するも、依然として巧黠に瞞せず

### 眞歇了禪師

師諱は満了。左縣の人。俗姓は雍。始め丹霞に見えて旨を悟る。後長蘆の照に謁す。照一見して之を器とす、命じて侍者とす。年を踰えて分座、未だ幾くならざるに、照病を稱して還園す。師に命じて席を譲がしむ、學者歸するが如し。拈香の時照衣を付して、師に與へて拈出することを望む、見るに及んで復の爲にす。照左右をして衣を抜き去け、師衣も布伽梨を袖に備へて遂に拈く。示衆、杖を擲して云はく、「看よ看よ、三千大千世界一切搖動くことを、雲門大師は即ち得たり、雪峯門下は即ち然らず。拄杖を卓して云はく、「三千大千世界什麼の處に向つてか去る、還つて會すや、重梅の雨を得ずんば秧苗争か青きことを得ん。上堂、絶翠崖に上り獨木橋を通く、鷲直恁麼に行くも、猶是れ時の人脚高く脚低き處なり。若し見得徹せば、戸を出て身十方に徧く、未だ門に入らずして常に屋裏に在り。其れ或は未だ然らずんば涼を趁うて一轉の柴を撮せば好し。上堂、「微を

【脚高く云云】高  
足かむなり、脚下  
の危きを云ふ

前め本を要ハ、妙を體シ家を夫す、句流を裁つて淵玄及深す、是を以て金針家なる處  
 輝光を輝けさす、則ち時時かに對面を解示、然も是の如くなりと謂ふ、是れ文互  
 雙へ明かなり、且つ一、功を到作せしむ相妻せん、其久して是はく、一、是れ青  
 藍合す、義理時時低昂懸深し、一、上流の幻化の空身即法身。是に舞を作して以て、一、是る不見  
 ろや、後世に見得せば橋を過ぎて何酒美なり。一、又舞を作して是はく、一、是る不見るや、是處  
 に見するは情を捨てて野化を許し。一、上流の若古權を對て虚誕に墮せず、若徒を誦す背て風  
 姿を彫さんや、動計憑動默か云々。父里に體むも、其處に當りせば、自ら是れ帝の快  
 活、還つて香關の眼を具する底ありや。直體ひ明くこと早くして便ち歸り去るも、手でか  
 從來門を用でざるに似かん。上流の功を傳じて位に就く、是れ向未成の人、玉衡山に鑑ん  
 で古し。位を傳じて功に就く、是れ地木成の人、紅蓮片草の命、功位俱に釋す通身。澤ら  
 す、手を擧げて伏ることを止す。石女夜機に登る、密窺人の影ふなし。一、上流の久しく斯要  
 を識して務めて速かに脱かす、釋迦老子歌曲に賣弄せんことを要するを待つ、爭奪せん未  
 た母胎を出でざる時、已に人に親敬せらるることを、且く道へ簡の什儀をか親敬する、雪  
 峯を親することを得ず。

贊に曰はく、

眞正左箱の人、親しく丹波老に見ゆ

胸藏掌徹して量洋汪、高嶺痕なし

心月孤圓にして影團圓、千江照を分つ

人前に主を辨ず、布伽梨を把つて當面に換へ來る

關裏に身を翻す、鉢盂峰を將て一脚に踢倒す

芍藥花開く菩薩の面、玉鬪古湖の春を載す

綠楊翠盡す木人の眉、寶鏡曹家の曉を照す

重梅の雨を得たり、寒に乗じて幾千の杖を卓して休す

獨木橋を過ぐ、涼を越うて一轉の柴を搬せば好し

巖樹翠深うして雲霧青合す、截流の句巧拙分ち難し

橋を過ぎて酒美に岸を隔てて花香し、見法身郎當少からず

虚凝墮せず泥牛月に吼ゆ、占徑苔の封するに任す

手を撒して依を亡す、盲女機に登り密室人の掃ふなし

星兒香餅好し、龍淵の赤梢羅を引いて懸鐘鉤を吞ましむ

些子藥頭靈なり、南山の驚鼻蛇を禁じて深く草に竄れしむ

功を轉じて位に就き、位を轉じて功に就く、底を盡し撒翻す、黃面老瞿曇未だ母胎を出で

ざる時、已に阿師に圓破せらる

宏智覺禪師

師是正覺。丹波に綱ぐ。澤州李氏の子。母夢らく正臺の僧環を解いて右の臂を環らすと。乃ち孕む。生るるに及ん。右臂に一環を起す。上堂。心、縁すること能はず、口議すること能はず。直徑を退けて荷擔するも、切に思む。當頭に諱に唱るることを。風月寒清古渡の頭、夜時發轉す琉璃の境。上堂。黃閣簾垂る誰か家信を傳へん、紫羅帳合す暗に眞珠を撒く、正覺の時視聽到らざる所あり、言詮及ばざる所あり、如何が箇の消息を通じ去らん。夢回つて夜色依稀として續く、笑つて家信を指す。爛熳の空。上堂。僧問ふ。如何が是れ向去底の人。曰はく、白雲壑に投じて盡く、青峰空に倚つて高し。曰はく。如何が是れ却來底の人。曰はく、露頭の白髮巖谷を離る、半夜雲を穿つて市塵に入る。曰はく。如何が是れ未來去底の人。曰はく。石女喚回す三界の夢、木人坐斷す六門の機。乃ち云はく、何處に宗を明かすは即ち易く、宗中のを辨ずることは即ち難し。良久して云はく、蓮つて一臂すや、凍鴉未だ報せず。家林の曉、隱隱たる行人雪山を過ぐ。辭世に云はく。夢幻空花六十七年、白鳥爛沒して秋水天に連る。

贊に曰はく、

精進幢、慈悲種

臨州の古佛、未だ放光を解せず

五臺の老僧、何ぞ曾て夢に入らん

紫芝の眉宇黄金の骨、天上の麒麟

黄聖の襟懐錦繡の賜、僧中の靈風

尊貴に墮せず、三世何ぞ用ひん國王となることを

苦に清吟を事とす、一詩未だ清宋を違ふことを見ず

琉璃殿滑氷にして船輕く懸す、尙玄微を帯ぶ

黄閣機垂れて信通せず、願向奉を存す

二十里の松濤寒月を翻へす、漫絃琴時に清彈を發す

一百尺の佛影清池に懸す、不宰の功全く妙用を彰す

風斤巧に誦く迦那の經、梵唄了に衰なし

燐火輝く然す照清の原、虚濶管て動ぜず

青嶂空高くして白雲壑に投ず、寒機に感じて者僧の眼睛を瞶却す

白鳥如漫して秋木葉に連る、死款を供じて他人の鼻孔を笑破す

泰華を尋問して優伽が河源を運出することを容す。三世佛を呑む是れ死此なりと雖も、また活弄せんことを要す

天童珙禪師

師は眞歇に嗣ぐ、諱は宗珙和州の人なり。上堂云はく、「劫前に歩を踏み、世外に身を横ふ、妙契意を以て到るべからず、眞證言を以て傳ふべからず。直に得たり、塵刹を急む、白雲

【發明云云】 自悟  
自證。

寒崖に向つて断ゆ。寒光暗を破り、明月夜船に随つて来る。正恁麼の時、作麼生も履踐せ  
ん、偏正會て本位を離れず、縦横那を因縁を語るに涉らん。僧問ふ、「如何者是此道。」曰は  
く、「十字街頭に研鉢を休めよ。」三寶の海山に入つて發明して後乃ち曰はく、「般若王已  
前無自證、般若王以後無自證の者は即ち邪魔外道。」山を出でて空中の語を聞くに云は  
く、「修行山は尙身の言なり。」と。長臺に至つて幡に見えて印證を求む。劍之を背ふ。

贊に曰はく、

參軍修造、開府清節

一擊亭九成の傑風、新開洞五色の奇麟

大道康溪、十字街頭徒に研鉢を擲す

玄微洞窟、般若世外正に好し身を措ふに

眞證言を以て措ふべからず、言天下に滿つれども口の過なし

影射得意を以て到るべけんや、意萬有を窮めて根塵を絶す

暗に靈光を燭す、夜船姑娟の月を載す

氛虚海を消す、寒崖片の雲を斷つ

縦横那ぞ因縁を語るに涉らん、水を弄んで鴛鴦に潑々影迹を滅し難し

偏正會て本位を離れず、枯骨癩馬を繋ぐ徒に心神を死せしむ

錦縫輕く開いて、花香を噴き蝶清曉に眠る

機絲動かず、機罽を含ま露芳春に織る  
眼有つて筋なし、錯つて郷行山肉身の菩薩なりと印證す、竊奪千丈電音を伸ぶる聲、叢林  
を撼すことを致す

### 自得陣禪師

師は宏智に嗣ぐ。諱は慧暉、會稽張氏の子。上堂「巖風を信り、穴は雨を知る。甜  
き者は甜く苦きものは苦し。計較して思量を作すことを棄ぬす、五五從來二十五、萬數の  
施設平常に到る。此は是れ叢林龍象の句、諸人還つて委悉すや。野老は知らず堯舜の徳、  
葵藿鼓を打つて江神を祭る。上堂云はく、「皮膚脱落して方圓を絶す、身心を明了すれば一  
物無し。餘に道實、深静の處に入つて、玉人輪駟す白牛車、妙川の田地絶る者遺稀なり。  
識情到らず唯證して乃ち知る。白雲の兒、靈靈自ら照す、青山の父。卓卓常に存す。機頂  
後の光を分ち、智劫前の眼に契ふ。所以に道ふ、新豐の路岐にして仍鼓かなり、新豐の洞  
分湛然として沃ふ、登るものは登る。動搖せず、遊ぶものは遊ぶ。勿速することなかれ、  
亭堂到る人有ること稀なりと雖も、林泉尋常の木を長ぜず。諸禪徳向上の一著。尊貴明也難  
し。琉璃殿上尊と稱せず、翡翠巖前遊つて合作す。正與塵の時針線貫、道眞宗蹟さす、合に  
作塵生か疑談せん。滿頭の白髮峽谷を懸る、半夜雲を穿ちて市肆に入る。師に六牛の圖あ  
り。一に曰はく、「始めて知識の示母を聞いて即ち信心を起す。信心既に萌して永く道の本

となる、故に牛首の上の一黠白し。一念信を本となし、千生入道の因、自ら憐れむ覺性に迷  
 うて隨處埃塵に染むことを、野草時時綠に狂花日日新なり。家を思うて得るに計無し、  
 但覺ゆ涙の中を泣すことを。二に曰はく、「信心既に發して念念指磨す、忽爾として發明す、  
 心歡喜を生ず、最初に入頭す、故に頭全く白し。問訊す者牛兒。非を知ることを何ぞ太  
 だ遅き、家を抛つて幾劫をか經、妄を逐ふ許多時ぞ。念念無念に歸し、所思所思を絶す、  
 入頭此より始まる次第に無爲を證せん。三に曰はく、「既に發明あり、漸漸に熏煉す、智慧  
 明靜にして。未だ純一なること能はず、將に牛身を白うせんとす、看よ教すること幾春  
 秋ぞ。將に露地の牛を成せんとす、荒草を出離し去つて、向つて雪山に近き遊ぶ。正念一  
 に歸すと雖も、邪思尙流れに混ず。愁を脱して心迹盡く。六處收むること能はず。四に曰  
 はく、「更に妄念なし、唯一眞心清淨湛念として、通身明白、六處該ぬること能はず。優  
 曇火裏に閉き、了然として系屬なく、塵中にして纖埃を絶す。繩索將た用なし、人牛安  
 んぞ在らんす。追逼かり空劫の外、佛祖能く猜ふことなし。五に曰はく、「心法雙べ忘して  
 人牛俱に泯す。亦く塵外を超越し、唯一空寂。是を解脫門、佛祖の命脈と名く。人牛消  
 息盡き、古路知音を絶す。霧捲いて千巖靜かに、苦生じて一徑深し。心空所有なし、情盡  
 きて今に當らず。把釣公何に在るか、磯邊綠陰を鎖す。六に曰はく、「命根斷する處絶後還  
 つて甦す、隨類受身。場に逢つて戲を作す、只舊時の人を改めて、舊時安履の處を改めず、  
 妙盡きて復窮通、還つて六道の中に還る、摩塵皆佛。處處是れ家風、皓玉泥中に異なり、



結念火裏に逢ふ、優遊す無間の露、随月日つ澤達、

賛に曰はく、

石火電光、雷霆一瞥

若耶溪沙裏の結念、草堂山嶽中の露滴

眞歇に花を挿んで老婦の墓を見る、寧ろ万徳を説らんや

妄智に飯を嚼んで嬰孩に似る、敢て自得と言はんや

明暗の路を斷斷す、眼晴偏地の蒺藜

離微の根を剗斷す、脚蹠下參天の荆棘

十成無貴、香車に屈して罽毘を輾らんや

一路平常、江神を祭つて神力を知らず

烟霽れて寒沙孤鶩立つ、野溪頭雪正に糞糞す

凍消し積木老龍吟す、竹戸の外春に消息なし

道衰淫靜の處、麟後の光劫前の眼猶是に金車

情識未だ歇せざりし時、青山の父白雲の兒猶て家賊と成る

正偏並到、十洲の花寧ろ湖鏡を照れんや

牧放未だ全からず、六牛の爾何の奇特かある

長庚門下潑生涯を掃蕩す、信に神駒汗血の功あり、金鶴司農の徳を拈く

【摸糊】 漫滅して見えわからぬを云ふ。

【潑生涯】 やくぎな身代なり、生涯は生計と同じ。

洞山此に至つて十一世共十四人。

雲門宗

雲門匡眞禪師

師は雲峯に嗣ぐ。諱は文僊。秀州の人。俗姓は張。空王寺にして受業す。四分律を精しく。棄てて睦州に見ゆ、州邊かに見て便ち門を掩うて、師の足を拶折して曰はく、「秦時の轆轤鑽、師大悟す。州指して雲峯に見えしむ。師、峯の巖に至つて僧を見て問ふ、「上座由に上り去る那、僧云はく、「是。師曰はく、「一期の語を寄せて堂頭和尚に問はしめん。是れ別人の語と道ふことを得ざれ、僧曰はく、「諸。師曰はく、「上座、寺に到つて和尚の上堂に衆の集るを見、便ち出でて腕を擽つて地に立つて曰、「若を漢項上の鐵錘、何ぞ腕掉せざる」と。其僧、師の教に依る。峯者僧の奥裏に道ふを見て、便ち下座し、欄干に把住して曰はく、「速かに道へ、速かに道へ。僧語なし。峯拈聞して曰はく、「是れ汝が語にあらず。僧曰はく、「是れ某が語。峯曰はく、「侍者繩棒を將ち來れ。僧曰はく、「是れ某が語にあらず、是れ莊上一りの浙中の上座、某に教へ來りて道はしむ。峯曰はく、「大衆莊上に去つて五百人の普知識を迎へ取り來れ。師次の日由に上る。峯一見して便ち曰はく、「甚に因つてか到ること真寔なることを得たる。師手を以て口を拭うて蹙り出づ、峯之を奇とす。靈樹二十年首座を請せず。一日師至る、即ち之に命す。辭せずして職に就く。劉王、寺に

入る毎に樹接せず。王其過を檢せんと欲す。樹已に之を知りて遂に入寂す。王至る、衆之を言す。王曰はく、「何の言句かありし。衆曰はく、「和尚去りし時一合子を封じて王の至るを待ちて自ら開かしめよと云ふ。王開いて一小帖を見るに、云はく、「入天の眼、堂中の首座」と。王即ち師に命じて席を繼がしむ。前世の因に劉王は乃ち香を獨々人なり。寺に入りて僧堂の中に涕唾す、剛は堂司と爲る。偶して之を叱して曰はく、「爾上に唾するが如し。」と。之を争うて休まず。師之を諫めて去らしむ。師に願鑑一字關、紅旗、横骨の宗旨あり。示寂に臨んで遺表に曰はく、「風雷に十七年間に因り、南北を數千里の外に涉る」と。費に曰はく、

蕪蒲異材を生ず、清氣雲漢を呑む。

空王寺を出づ、四分の葛藤情に繋るに心なし。

陸州の門に跨る。折脚秦時の寶鏡を悟る。

果は首を経て熟す、軒かに知る靈樹の明窓下に安排すること。

金は指を繞つて牙かなり、更に雲綺洪爐の中に入りて烹煎せらる。

劉王に見えて、僧堂に睡面の杖が乾かざるを憶ふ。

玄沙を友として、漁舟の通身紅蓮なることを笑ふ。

洞山に三顧の体を放す、鐵面老婆心。

雲門の一字關を懸つ、宗師の眼を踏穿す。

赤土の紅蓮立てて未だ暮らさず、暗中の横骨挿んきて何の製りもあらん  
十七年、臥雷に逆風途間に困すと雖も、然も自ら高懸を搦、烟硝、明に飛つ  
俗眼を人説、緊詰か九成をたし重淵を掘て、東流をたて祖廟の建晩に香煙せしむ

香林遠禪師

師は雲門に嗣々、諱は澄遠。漢州の人。師は上。官師、侍者となり、衲衣を將て門の語句を  
録す。後に蜀に歸りて水晶宮に於て往來に茶湯を接待す。僧問ふ、「美味の醜濁、其として  
か、何と二毒藥となる。」曰はく、「導江紙貴し。」僧問ふ、「如何が是室内一掃の擔。」曰はく、「三  
人龜を證して野となす。」僧問ふ、「如何が是れ衲衣下の事。」曰はく、「臘月火山を燒く。」僧問  
ふ、「如何が是香林一脈の泉。」曰はく、「念間斷なし。」曰はく、「如何が如何。」曰はく、「隨方の  
斗秤。」師、業に謂つて曰はく、「老僧四十年、方に打成一片、將に示賣せん」とす。知府宋公瑛  
を辭して曰はく、「老僧行脚し去らん。」通判曰はく、「若僧、風狂八十歳、行脚して那裏にか去  
る。」宋曰はく、「大善知識、夫住自由、遠縁公、雲門の宗を探り蜀に入り、師に大面山に見ゆ  
賢に曰はく、

頂五峯よりも峭し、眼三角を生ず

溜石の象龍鼎裏、犀牛を奪ひ得たり

岷峨山水の窟中、驚魂を驚飛す

紙衣他人の語句を録す、魚目を認めて明珠と作す  
沙瓶客を得つ湯茶を煮る、醍醐を翻して毒藥となす

水晶宮 冷かにして香篆を浮ぶ、圓鼎に待つて舞月光風に宴す

人面山高うして翠屏を埋む、瘦筇を尾いて青猿野鶴を訪ふ

龜を證して賢となす、室内の燈光明を滅却す

曠六山を燒く、女下の事恐らくは摺搥し難からん

四十年打破一片、明皎皎無昏

八十歳諸方に行脚す、峭巖巖活潑潑

鑿喫の宗旨を探る、遠縁公を引いて走得して脚皮を穿たしむ

落頼の門風を起す、奔智門些の辛苦を喫し著すを懸す

香林の一脈泉間斷すること多時、若し隨力の斗秤の上を要せば自ら直しく對答すべし

### 洞山初禪師

師は雲門に屬す。諱は守初。鎮朔傅氏の子。初め門に參す。門云はく、「近離漢の處ぞし  
曰はく、「香渡。曰はく、「夏甚の處に在りし。曰はく、「湖南の報慈。曰はく、「幾時か彼を離  
れし。曰はく、「八月二十五。曰はく、「汝に三頓棒を放す。次の日、師上つて問訊して曰は  
く、「昨、和尚の三頓棒を放すことを蒙る。知らず過港雲の處に在る。曰はく、「飯糞子、江

【道士黄を云云】  
道士はすべて黄色  
を用ふ、因つて道  
士を黄冠と云ふ

西湖南便も急要にし去るか。師大悟、遂に曰はく、他後人頼なき處に向つて箇の庵子を卓  
 てて、一粒の米を蓄へず。一輩の氣を垂糸す。十女の徒衆を模待し、盡く他のために釘  
 を抽き杖を拔き、灸脂帽を拈却し、無衣を脱却して、伊をして洒洒地に箇の無事の無僧  
 となり去らしめんこと、豈快からずや。門云はく、僧が身、椰子の大きいさの如くして、  
 許多の大口を聞き得たりこと、示業はよく、言、事を展ぶるなく、語、棒に投ぜず、言を  
 承くる者は復し、句に、師もものは遠く、遠つて得るを、備、杖に投ぜず、言を  
 らく擇法眼を具して始めて得べし。只洞山が任要に道ふが如きは、まな一場の過あり。且  
 く道へ、適什麼の處にか在る。僧問ふ、文殊普賢入參の時如何。曰はく、水牯牛の欄裏に  
 趋向し着せん。曰はく、和尚地獄に入ること箭の射るが如し。曰はく、まなく子が力に憑  
 る。問ふ、師、師子座に登る。請ふ師道情を唱へよ。曰はく、晴乾水道を開き、無事曹司  
 を談く。曰はく、任要ならば期ち師の指示を謝す。曰はく、草鞋の老婆脚趂趣。問ふ、心  
 機意識を離却して、請ふ師一句。曰はく、道士黄を著け笠裏に坐す。問ふ、大衆雲の如く  
 降る、請ふ師其要を撮つて、略大綱を擧せよ。曰はく、水上の浮漚五色を呈す、海底の  
 蝦蟇月明に叫ぶ。問ふ、蓮花未だ水を出でざる時如何。曰はく、楚山頭、倒に卓つ。曰は  
 く、水を出づる後如何。曰はく、漢水正に東に流る。問ふ、如何が是れ佛。曰はく、麻三  
 斤。僧に問ふ、甚處より來る。曰はく、汝州。曰はく、此去つて多少ぞ。曰はく、七百  
 里。曰はく、幾縷の草鞋を踏破す。曰はく、三繖。曰はく、甚の處にか錢を得て買ふ。曰は

はく、笠子を打す。日はいく、參堂し去れ。僧應酬。

贊に日はいく、

問世の贊、眞の法器

報慈を離れて未だ常情を出でず、雲門に見えて方に始めて瞥地なり

鳳萬壑に生ず、虎豹の子氣已に牛を食ふ

電掣壁を傾く、龍馬の駒足蹟を展ぶるに懸へたり

渾身を視るに椰子の如し、能く幾くの長かある

大口を開いて紡車に似たり、略少情なし

先師の會中に於て何の過か有ると問ふ、雙藤條をか喫すべき

人頭なき處に向つて往來を接待す、一粒の米を畜へず

酒は公子の面を醜く、黃頭碧眼を把りて犀角頭に倒卓す

花は美人の頭に挿む、文殊普賢を將て牛欄裏に趨向す

賣鞋の老婆脚趂越、道情を唱へて鬘子郷談を打す

瓮に著く道士坐して鬼堆、雜意識の波斯單市に入る

大海の浮漚蝦蟇月に叫ぶ、錯つて照石の胡宗を稱提す

楚山倒に卓ち漢水東に流る、謾に蓮花の出水を塗欄す

僧に問ふ此去つて踏多少ぞ、幾緞の草鞋をか踏破する

【藤條】 藤まきの  
棒はねちの類なり

佛に答へて臨濟は片言に就事す、禪は星原の鳥を食ふ。言事を説くはたゞ、諸國に於て予、道理を説くことは即ち無きにあらず、心室の門風を望むこと其自雲葉也。

智門禪師

師は青林に對す。師は支那、隨州の人。上堂云はく、「山僧更得す、母胎に在りし時一則の語あり。今日大家に當限せん。諸人道理の高下を作すを得され。還つて人の商量し得るもりや。」僧問ふ、「空罈眼中に箇の眞實をか著得ずや。」曰はく、「把の鉢。」曰はく、「甚麼として此の如くなる。」曰はく、「公の境界に非ず。」問ふ、「荷花未だ水を出でず。」時如何。」曰はく、「蓮花。」曰はく、「水を出づる後如何。」曰はく、「荷葉。」上堂云はく、「汝等諸人横に拄杖を拄つて一叢林を出で、一叢林に入る。僧道へ、叢林幾處かある、或は旃檀栴檀、旃檀の圍繞するあり。或は旃檀栴檀。荆棘の圍繞するあり。只四種の叢林の如き、是れ汝諸人阿那伯の叢林に在りてか、安身立命する。若し安身立命の處なくんば、或は草鞋を踏破せん。闍羅王僧に草鞋錢を徴むるに日あること在らん。」上堂、「東家の李四婆西家に來。二人を乞ふ。門外に立つこと少時、僧の杖を倚滯せしむるを嗔つて、惡發して走つて家に歸る。虛心にして屋裏に坐す。群小兒終日、飢餓を受く、眼ありて睛を點せず、寧しく觸膝を鎖し破る。僧問ふ、「如何が是れ般若の儀。」曰はく、「蟬明月を含む。」曰はく、「如何が是れ般若



の用。曰はく、「鬼子懐胎。問ふ、如何が是れ師。」曰はく、「草鞋を踏破して赤脚にして走る。」如何が是れ佛向上の事。曰はく、「拍、杖頭上に日月を挑ぐ。」問ふ、「曹溪路上に還つて俗談ありや。」またなしや。曰はく、「六祖は是れ盧行者。」問ふ、「古鏡未だ磨せざる時如何。」曰はく、「また其れ箇の銅片。」曰はく、「磨して後如何。」曰はく、「且く收取せよ。」雪竇師に見ゆ。問うて曰はく、「予却一念云何事過あらん。」師召して竈に近前來せしむ。雪竈かに近前す。師拂子を以て竈口に打す。竈口を掴かんと擬す。師又打す。竈大悟す。

費に曰はく、

舌本調、調り、調物なし

滄海細しく千草月の屋、香林放出す蓮雲の鶴

母胎の中一期の所、鉢鉢裏正か育て調、せん

金剛眼一把の調、寶鏡重如何が洗割せん

荷葉蓮華後先に水を出す、截流の波に當らす

拈檀刺棘叢林を圍繞す、無生國に活ぜす

少時門外に立つ、李四婆が来りて内子事を乞ふを知る

一念未生前、無開裂の痛く龜毛の拂を喫することを要す

鬼子懐胎神明を呑む、般若の徳用を將に沈埋す

鯉魚棒を喫して布袋を傾くるに似たり、諸君の家財を把りて籍没す

【調遣】 半分動なり、調遣と同じ、無茶苦茶の意。

杜神頭、日月を兼々、老羅漢的の擲捨せらる。

曹溪路上俗談あり、修行者性性潮湿となる。

古路を折出す、將に謂へり、是れ一片の頑刺放下すれば、元來埋つて是に覆の木屑。

雲巖明覺禪師

師は智門に嗣を、諱は重巖。遂州の人。社は李氏。初め翠峯に住し、次に雲巖に住して法道大に行はる。遂に雲門の中興と號す。舊客二賓を大陽に興る、客と栢樹子の話を論ず。時に韓太伯旁に侍つ。二客笑す、客去る。師謂つて曰はく、「汝何ぞ笑ふや、韓曰はく、「知客古今を定むる古ありて、古今を定むる眼なきを笑ふ。師曰はく、「豈説あるか。對ふるに偈を以てす。曰はく、「一重身を横へて古路に當る、蒼鷹一見して便ち生擒す、後來獵犬噬噬なし、空しく栢樹の舊處に向つて尋り。師之を異とす、乃ち結んで友となす。李巖院嘗て福堂の雅禪師を訪ふ。時に師巖主となる、李と論話の間、忽ち道士と秀才と至る。李曰はく、「三教の中那教が最も尊き。師起ちて側立す。李曰はく、「口あり、何ぞ道はざる。」師曰はく、「夫子に對して言ひ難し。李曰はく、「休みね休みね。」と云うて便ち起つ。師曰はく、「適來造次なり。」師大龍の堅固法身の公案を領す、問も曾て知らず、答も還つて會せず、月冷かに風高し古巖の寒檜、笑ふに堪へたり路に達道の人に逢うて、語黙を特て對せざることを。手に白玉鞭を把つて驪珠盡く擊碎す、擊碎せずんば瑕類を増さん。國に憲

章あり、三千條の罪、忠國師の無縫塔の公案を頌して、無縫塔見ること還つて難し、澄潭は許さず蒼龍の舞ること。層落落影團團、千古萬古人に與へて看しむ。自費に上三指彼此七馬、拈花未だ曾て微笑せず、何ぞや石を玉と謂ふや器必ず分つ、水虚を凌ぐや月下に非ず、知らず誰か是れ旁觀の者、重告禪者を送る。春雨膏の如く在雲鶴の如し、忽ち此、忽ち彼、乍ち休し乍ち起る。枯木離離維れ風太だ遅し、萬石片片遶空亦危し。一花五葉相似ず、獨運孤明還つて自知す、還つて自知す、雪を歴て染に遊んで徒爾として爲す、跡自ら貽す、圖畫當年洞庭を愛す、波心七十二翠青し、如今高臥前事を思へば、添へ得たり盧公の石屏に倚るを。」

費に曰はく、

隋侯照乘の珠、趙國連城の璧

岷峨の秀を奪ふ、眉宇の精華を形す

涇渭の流を分つ、心源の絡繹に在て

萬象を長劍す、蘇翰林が錦繡を摘ぶるの才を、地にす

五宗を褒貶す、魯の司寇の春秋を作るの筆に當む

遼廓の鉢盂の與に柄を安ず、黃梅の半夜未だ是れ傳ならざるを笑ふ

冷泉の屎椀光を放つを見る、詔石の一言供する所の詣實なることを信す

白玉鞭驪珠を撃つて瑕類を増さず、光皎皎として灰よりも冷かたり

無縫塔澄潭蒼龍をすましめざることを要す、影潭湖漆よりと照し

古今を定むるの限なし、韓太伯に蒼鹿路に當つて生擒せらる

立どころに儒釋の窟を分つ、李陵陸をして老虎身汗出せしむ

多子塔前曾て梅花散亂せず、三指七馬何を唇に掛くることを用ひん

少林宝裏のめより胸背安心なし、五聖一化徒に指的に勞す

翠峯に住するが好き雲霧に住するが好き、狗熊油鷄を蒸る

曲師碑を讀む文字碑を説く、龍窟泥の壁に寫す

飛雪一千餘丈を噴て瀑布と成すと、胸襟より流出す

洞庭七十二峯を愛す石屏に和す、歌めて陶籟に歸す

高風逸句、古來今只許す、一人北半奈山の知くなることを、之を仰げば彌高く、之を望

めば及ぼす

洞山聰禪師

師は文殊の眞に崩ぐ、譯は曉聰、韶州杜氏の子、初め文殊に見ゆ、示衆に云はく、直鉤

には鱷龍を釣り、曲鉤には蝦蟇蟾蜍を釣る、漚つて龍ありや、良久して云はく、勞して功

なし、乃ち省あり、師雲居に在つて燈頭と作る、僧の泗洲の大聖、近ろ楊州に在りて出現

すと説くを見て、問を設くるあり。曰はく、即ち是れ泗洲の大聖什麼としてか却つて楊州

に向つて出現する。師曰はく、「君子財を愛す、之を取るに道あり。後僧蓮華峰の禪庵主に  
 學似す。主大いに驚き、曰はく、「雲門の兒孫猶在り、中夜に雲居を望んで之を拜す。上堂  
 擧す。寒山云はく、「井底に紅蓮を生じ、高峰に白浪を起す、石女石兒を生す、龜毛寸寸長  
 す。若し菩提を學せんとせば、但此棗核を看よ。」良久して云はく、「還つて落處を問るや  
 また無しや、若しまた落處を知らずんば、看よ看よ菩提樹に入り去ることを。」久立、僧  
 問ふ、「達磨未だ心地の印を傳へず、釋迦未だ懸中の露を解かず、此時若し西來意を問はば  
 還つて西來意ありやまた無しや。」曰はく、「六月雨淋漓、具萬計の心を寘にす。」曰はく、「恁  
 麼ならば則ち云は散す家家の月、春は來る處處の花。」曰はく、「脚跟下金剛水窟に湧ること  
 是れ多少ぞ。」僧無語。乃ち曰はく、「祖師西來特に此事を唱ふ。自ら是れ上座傳せず。所以  
 に門より入る者は是れ家珍にあらず、影を認めて顔に違ふ、豈大踏に歩すや。既に是れ祖  
 師西來、特に此事を唱ふ、又何を必ずしも更に業に對して初初たらん、珍重。上堂。晨  
 曉を報じて覺なり、粥後天便ち明かなり、掃地後日暝、露柱却つて惺惺。復曰はく、「惺  
 惺は直に是れ惺惺、塵塵は直に是れ惺惺、明後日暝を認めて即ち傳すことなかれ、珍重。  
 示衆。天晴れて屋を蓋却し、閑を述うて禾を刈却す、玉瓶を輸納し了つて腹を敲ちて自ら  
 高談す。僧問ふ、「徳山門に入れば便ち背す。猶是れ機を起し様を盡く。臨濟門に入れば便  
 ち喝す。未だ免れず、目を捏して花を生ずることを。」此二語を離れて未審し、洞山如何が人  
 の爲にせん。師曰はく、「天晴れて久しく雨なし、近日雲の脚あり。」曰はく、「他日若し人

【注】 ほうりく

ありて洞山の宗尊を問はば、敬人をして師傳と稱せしめり。曰はく、園蔬枯槁甚だし、水を擔つて渡津に渡り、所問より師傳は是れ青色を懸るるあり。曰はく、南瞻部洲北鬱單越。曰はく、一師をたはば思ふ人思を知りて吐さざるなり。曰はく、洞大海深きこと多少ぞ。一師一日不食上餐、能く高し。彼等とす。師にははく、常樂山正法たることなかれ、透法身を問へば、北斗に照る、空を照る。師は、人を見て高草を踏るに力なし、唯頭の手道を知りあり、師を仰慕して時に復金剛に上るに師を依りて安す。

賢に曰はく、  
羅龍を絶す、巴鼻なし

上欄を新豐海峽に立す、仙舟を動揚成軍に候く

文庫の鉤頭に就いて世まして、羅龍の窟窟に入つて、師を放て伊を存明せん

洞洲の轉語に答へて洞窟に、雲門の兒孫を作る。未だ師を打得する暇あらず

塵に和して古鏡を磨す、高麗に前蜀洞洲

水に入りて長人を引、驚嘆天下全無際

菩提を學んで石女兒を生ず。有る、以師を稱して、師傳の師傳を學す

屋を覆うて官を輪し都て了却す、狀を寫して腹を放ちて、念に昇平を樂しむ

參禪學道商量することなから、鏡を背を松を杖坐て且つ遊戯を圍る

身を翻して北斗に覆す、未だ是れ良謀にあらず

水を擔つて渡棧に渡ぐ、錯つて宗行を問ふ。聲色を離るる句、是りに云ふ北堂單。直饒者僧を謾じ得とも、自己を謾し

雲居舜禪師

師諱は曉舜。洞山に嗣ぐ。瑞州の人。初め洞山に參す。一日。洞山に對して首として劉居士に謂す。士高持時。爲に敬せらる。意の與奪する所之に從はざるはなし。師時に年少、其飽參なることを知らず、師之を覺る。士はく、老漢一問あり、著し相契はば則ち疏を聞かん、如し契はずんば請ふ山に釋れ。遂に問ふ。古竺未だ磨さざる時如何。曰はく、黒うして漆に似たり。一勝して後如何。曰はく、天を照し地を照す。上長辨して曰はく、日く講ふ、上人山に説くと云うて機辯して宅に入る。師嘗て問ふ。山曰ふ。師其事を言す。山曰はく、爾我に問ふ、爾が爲に道はん。師前問を理す。山曰はく、一此去つて漢陽遠からず。師後説を述す。山曰はく、黃鶴樓前洲。師省あり、師廬山の楓賢に住す。槐斗官南康に守たり。其の念に因つて其衣を民にす。大覺の瓊會て師の室に入る、師の還俗を問いて人を遣し、教つて淨因に至り、正寢を以て之に居らしむ。嘗は禪室に處す。仁宗數覺を召し入内せしむ、竟に師の事を言はず。問。日暮正行を取りて淨因に出で僧に飯す。覺の師の勇に信して其於茶しきを見て、回つて奏す。仁宗召し、

【取つて】取はつ  
らへると云ふ處、と  
らへることに非ず

【便殿】 常御殿。

【覺律】 住方尤も  
なりの意

【嗚嗚】 唐音おう  
おう、日本のあわ  
わなり

【撥し】 撥攘の撥  
にて、なぶりおだ  
てる風味なり  
【行囊】 脚絆もも  
少きの類  
【錢を六六】 竹を  
わつて根緒にする  
なり

便殿に對す。之を見て驚きて曰はく、（此處奇偉眞に山林の達士なり。屋上に於て書して曰はく、）「譬舜に舊に依つて僧となることを賜ふと特旨あり。再び無賢に住す。仍つて紫衣銀鉢を賜ふ。師檀資を退く時、二力を以て橋を昇がしむ。羅漢寺に至つて、一月曰はく、「既に是れ我師の長老にあらず、遠去すること宜はず」と云うて、橋を棄てて回る。師の再住するに會んで、人をして先づ二天を惹めしむ。曰はく、「爾當時の彼得其は信心を安せよ、必ずしも疑懼せざむ」と。師入院、上堂曰はく、「如なく語せられて杜けて遠に置ふ、半年有餘俗人と作る、今日再び歸る、三峽の寺、人多か歡喜し、人多か嘆る。上堂舉す、「夾山道はく、「關市門頭に天子を識取し、百草頭上に老僧を識取せよ」と。雲居は即ち笑らず、結偈を誦して軋軋、兒日を弄して嗚嗚。師常に天衣の葛藤神を説くことを説る。一日懷遷化す、師法堂上に於て曰はく、「且喜すらくは葛藤子倒し了れり。」秀圓通會中に在りて維那と作る。嗚嗚せらるる毎に、同列に謂つて曰はく、「我徒らく者老漢と理會一上すべし。夜參に及んで又罵らる。秀偈を誦して衆を出でて曰はく、「豈見すや、圓覺經の中に道ふことを。」師遽に曰はく、「久立、大衆伏して。惟れば珍重。便方丈に歸る。秀曰はく、「若老漢、通身是れ眼。懷和尚を罵得せり。」上堂曰はく、「諸方は龍頭を弄し、虎尾を撥し、大海に跳り、劍双裏に身を藏すあり。雲居が者雲天宮には熱水に脚を洗ひ、夜間には襪を脱して打睡す。早朝には旅行囊を繋ぐ。風籬を吹いて倒すれば、人夫を喚んで襪を男きて縛起す。」上堂、「唯一堅密身、一切塵中に現す。蝦蟇蚯蚓各窟穴あり、烏鵲鳩鸽亦窠巢あり、正當與麼



【事を了せ云云】不濟事と同じ埒があかぬと譯す。  
 【祭】きびしくしわいの意なり。  
 【大家云云】大家鹽官を指す。割捨はすつる也、物を得、思ひ切らぬを割捨不下と云ふ。  
 【楹樞推】塵捨場なり。

の時甚憂人の爲にか説法せん。良久して云はく、「方は扇を以て聚まり、物は群を以て分る。上堂、雲居禪を會せず、脚を洗うて床に上りて眠る。冬瓜は直くして籠侗、飢子は曲つて鸚鵡。一師一日鹽官和尚の侍者を喚んで、犀牛の扇子を將て來れと云ふ因縁を擧し、拈じて曰はく、「三代當時正に扇子を須む、侍者が事を了せざるが爲にす。然も是の如くなり」と。鹽官太だ絮なり。何ぞ大家侍者を割捨せざる、當時若し鹽官の扇子既に破れば、我に犀牛兒を遣し來れと道はんを見て、便ち向つて道はん、口に楹樞堆頭に颯在し了れり」と。」

贊に曰はく、

艱棘の中より來る、靈明不昧。

霄漢を凌ぐ深院の笙筠、雪霜に傲る古巖の寒檜。

身は三峽の寺に歸る、五老幾多の噴をか添へん

脚は鸚鵡洲に跨る、古鏡を撲して百雜碎

婦機を搖して軋軋、鬧市頭天子を識ること未だ眞ならず

兒口を弄して嗚嗚、百草上老僧を驚めて會せず

通身是れ眼、天衣の懷が葛藤椿を倒了すること喜ぶ

平地に堆を生ず、槐都官が枉げて民衣の罪に入ること笑ふ

脚を洗ひ襪を脱して打睡す、切めより出格の生涯なし

人を喚んで箒を竹き籠を縛せしむ、また是れ尋常の家計

鳥鵲の巢葉蝦蟇の窟穴、堅密の身庫中の出現

冬瓜は箇個瓠子は曲彎、祖師禪迦かに言外に語心

蛇頭を弄し虎尾を踏ふ、諸方の劍刃裏に影を露し身を蔽すに聽す

破扇子滲屎牛、鹽官の糞堆頭に團を成し地を信すと謂ふ

道韻奇偉、山林達士の名を得たり。合浦珠還る、數寶に走つて了に瑕類なし

大覺璉神師

師は泐潭に嗣ぐ。諱は懷璉。漳州陳氏の子。母僧伽を夢みて生る。因つて小字して泐潭と云ふ。師は法席に遊りて僧を授けて印可、之に傳ふ事あること十餘年、去つて廬山に湧んで、詔を問通の法席に坐る。仁宗、詔を召す、訥倦んで師を奏して代らしむ。旨ありて潭回到住す。北成殿に召對し、佛法の大意を問ふ。旨に稱うて大覺と賜ふ。後中使を遣して問う。曰はく、予に去つて擲を略つ、人立つて當り難し。師は璉を以て回答するに曰はく、『節あり竹に干つて非ず。三星月宮を繞る、一人日下に居す。衆人と同じからず。』帝覽て大いに悦ぶ。又便殿に召對す。羅扇を賜ふに、元寂の頌を題して師に與ふ、問答詩頌書して以て之を賜ふ。凡そ十七篇。至和中に山中に歸老さんと乞ふ。頌を進めて曰はく、『六載皇都に福檀を唱ふ、再得會て金殿に天威に奉す。青山歸れ去つて折び何ぞ得ん、

滿漢唯御頰を將て歸る。帝頰を相して充さず。宣室に曰はく、山は即ち知如の體、また將に安くに歸らんとするや、再び京國に住して且く佛法を興せよ。師再び頰を進めて、謝して曰はく、中使宣薄して禁制を出づ、再び臣として此禪原に住せしむ。青山來て千抽を藏すことを許さず、白髮何を將てか萬機を掃はん。雲霧の思歸方に湛世、林泉の情味苦た依依、堯仁混んや是れ天の湖霧が如くなるんや、塵に孤雲の自在に雲霧に任すべし。尊龍歸の鉢を賜ふ、願恩を謝し了つて、鉢を捧げて曰はく、善哉法瑤色の衣を以てし、瓦甕の器を以てす、此鉢は非法なり。と云うて、遂に之を焚く。中使却つて去す、上如世は去す。僧門より聖君御二知して疑も賜ふ、和尚何を將てか法恩に報いる。師平を以て地を托す。曰はく、慈雲ならは則ち一人塵おほば慈悲之に頼る。曰はく、平時の住持黃河を瀆す。閑堂僧問ふ、語林出世群生を利濟す、麈尾圓空らば何を將てか法恩を。曰はく、山高く水濶し。曰はく、花は發く無根樹、魚は調る驚帆時。曰はく、新羅國裏。曰はく、蘇舟船ささす法波の上。師徒に木を放つ。曰はく、衣著るも世知して判物に誤す。曰はく、一人は管を將て試む。曰はく、其短を得るに世に。僧掌を拂して曰はく、一更に知世せよ。土堂、文殊の寶劍得る者を知しとす。りち正杖を拈じて曰はく、浮囚年月法要に直に親たり。千乘路絶ゆることを。塵も草の如くなりしと雖も、鶴見の千折相攻む、鶴を犯さず如何が運用せん。良久して曰はく、野蕪自ら發いて空しく水に乾た、江無初めて歸りて人を見ず、參。治平中に蔬を上つて歸を乞ふ。師を進めて曰はく、千鏡の雲山花雲の

清、歸心終に其峰頭に老いん。餘生期はくば無礙の壽を祝し、一炷の清香石樓に講つ。英  
 宗之を留むれども可かず、召許し、二自便せしむ。龍江を渡つて金山に留まる。南潤開明の  
 守育王を以て迎へ至らしむ。龍九峰、勸請の疏を作り、四明人相與に力を出し、三間を建  
 てて賜ふ所の神威を成す。榜して寶刹とけふ、東坡徒に知たり。書を以て師に問うて得ば  
 く、承る。雲、三間の碑を作るを要すと、師んで以て撞し成す、衰朽廢學知らず、右に上す  
 に堪へんや否や、公案の説を見るに、師京を出づるとき支那手語を賜ふと、其略に曰はく、  
 性に任せて任持といふは師の法に任せて有りや、知し有らば切に肯ふ識して合文を示せ。此  
 一節を添へんと欲す、師終に識して出さず、支那の後に達んで儀常に獲たり。師津圖白を  
 以て藥堂を造つて之に處しむ、後其の西林因つて法を取る、師育王に住して逸老堂を造る。

贊に曰はく、

家は博桑國に近し、波斯耳に環を帯ふ

漳泉の區頭と謂ふ、灼然として心毒なり

泗州の夢に入ると説く、人に説せらるることなけれ

萬象を胸中に羅ぬ、風雷陟嶺

片言を舌上に吐いて、錦繡麗斑

澄散 聖の虎頭閻を抜く、笑つて虎尾を收む

銀瑠使龍腦の鉢を焚く、喜び龍顏を動す

【胡床に云云】たみ床儿なり、宇  
 爲に俗呼ニ坐凳  
 爲「椅子」とあれば  
 小きき物のやうな  
 れども、脇枕とい  
 へば其上にねられ  
 るほどの物と見ゆ  
 【穿】脚にはくこ  
 と、身に衣服を著  
 けることも穿と云  
 ふ。

推杖を拵じ將て黄河を擲す、報恩分あり

衣裳を脱却して荆棘に臥す、駒を濟ふこと何ぞ慳さん

道徳を尊んで韋布の交を忘れず、舜老夫に譲つて身正寢に居せしむ

佛法の爲に代つて紫泥の詔に赴く、訥圓通をして名聞裏に播さむ

江燕初めて歸りて人を見ず、文殊の劍鋒鈍太だ露はる

野蒿自ら發いて空しく水に臨む、千聖の路頭山すること應に推かるべし

錦敷花を鋪く、華内翰が羅文を得て鏡を寶華州に託んにす

對錐脱帽、韶九峰の一説の爲に來つて育王山に住す

屋敷根の椽を誦す、大地の人をして業居して正を食はしむ

雲の車の袖を掛す、住山翁を學んで逸老閑を授す

梅影に就いて脇胡床に枕す、新羅して明月を穿ら

竹陰を破つて履替律を穿つ、鏡に俯つて狂瀆を見る

青に藍より出でて藍よりも青し、鰻鮓の意を驚めんと欲せば、幽鳥語胡蝶

天衣 慎禪師

誦講は義懐、雪嶺に獨り、永嘉眞氏の子。世世漁を以て業となす、胡蝶わらく翠屋陰に  
 隕つと。産するに及んで吉祥多し。兒稚にして父の船居に坐す、魚を漁し得て鮓に命じて

師忍びずして私かに市中に投ず。父怒つて善く諭る、甘諾して以て意に介せしむ、  
 て京師に遊んで景徳寺に依て修行となる。天聖中に試經得度し、金華の華葉縣の省  
 に歸す、皆契はず。洛に由り龍門に抵り、復都下に至る。宗風を續がんとて意にた  
 決さざるあり。忽ち言法華に遇し、師の背を撫して曰はく、雲門臨濟にしようして東海にて  
 師に至り、明覺を翠峯に禮す。入室の次、覺曰はく、恁麼もまた得ず、不任也。師曰、  
 恁麼不恁麼總に得ず。師擬覺打ち出す、是の如くなるもの數四、却て人前とて  
 因に水を汲みて、擔折る、忽ち折る、投擲の傷を作る。曰はく、一二三四五六七、無復  
 他足にして立ち、驢籠籠下の功を奪得して、一言に勘破す。維摩詰の覺、心を離つて善し  
 とす。鐵佛に出世す。上堂、圓へば鷹の長空を過ぎ影寒水に沈むが如し、圓に清淨の意  
 たる水に留影の心なし、若し能く是の如くならば方に異類中行を解せん、相ひすもを破  
 破を破り、岳を夷け壑を盈つることを。放行すれば百拙千拙、收來すれば百巧千巧、  
 用ふるときは則ち敢て八大龍王と當を闘はしむ、用ひざれば都て半文錢に直らず。次  
 て、平江の講廟に赴して、冲和を説く。師曰、佛の文に榜して涼を説くと曰ふ、楊無爲贊する  
 には、冲和を説く、冲和を説く、冲和を説く、冲和を説く、冲和を説く、冲和を説く、  
 らく耕夫の牛を驅り、飢人の食を乞ふ、腹に過うては加す、口に過うては即ち賤なるべ  
 し。耕夫の牛を乞ふ、乞ひ苗稼をして豊稔なるしむ、飢人の食を乞ふ、乞ひして大く腹  
 を絶せしむ、腹に過うては加す、口に過うては即ち賤、命を絶じ

て土とせず。輕州亦田夫の牛を驅らす、亦飢人の食を奪はず、何の謂ぞ耕夫の牛、我何ぞ  
用ひん、飢人の食復何ぞ喰はん。我土を掘つて金と成さず、また金を鑄じて土と作さ  
ず。何ぞや金は是れ金、土は是れ土、玉は是れ玉、石は是れ石、僧は是れ僧、俗は是れ俗、  
古今の天地、古今の日月、古今の山河、古今の人倫、然も此の如くなりとも、大散關を  
打破して後唐を建てて後唐に逐ふは、堂須彌頂上金鐘を打たず、畢鉢前人の聚會す  
むらじ、山僧僧に佛前に入り請人退に草鞋を著く、朝に雷特に海び暮に羅浮に到る、  
は後唐の僧を誹りて、上堂、寒來寒霜薄、黃河凍結して佛前の鐵牛腰を穿る。盡く道ふ  
人佛性を失つて人を誹るは、問天の一缺を争奈せん、如今他のために補却せんことを欲す、  
又恐らくは、大地の人氣を出さぬからんことを。曰く若一塵を揚めて、地の人に與へ  
て塵を出さしめん、參、僧問上堂、牛頭未だ四祖に見えざる時何、曰はく、長江六月な  
し、白はく、夏を後唐の僧はく、一年一度の春の上堂、佛前宵に叫ぶ、圓通門大に  
佛く、佛事三昧を隔つて、紅日博桑を照す、雲霧嶽を封す。三更鐵圍を  
踏む、鐵圍を踏折す。佛前是月、分破す翡翠千峯の翠。佛前是乃ち大衣の境  
なり。

雲に月映く、

雲に月映く、

早に朝露に泣いて、高僧、空を響いて、自ら雲霧に舞

長く翠峯に就いて聖を養ふ、力成を奏して日に麴を樂しむ

巨口動を呑む、颯下すること鶴んぬ赤梢鯉

精金治に躍る、不詳なるは是れ四界眼

寒水一掬清し、長空に印し鷹を洗

區指兩頭折る、額を挾して明珠を奪ふ

眼に睡人あり、初より上を握つて金と成し耕を驅り食を奪ふにあらす

身異加に行く、又何ぞ須ひん獄を夷げ空に盈る鶴を奪り堯に續ぐを

微竹貧窮、救て堯王と富を鬪はさん

一言擲破す、崑崙詰の名模を奪れんや

人をして世に吐を著けしむ、暮に羅浮に到つて朝に檀特に遊ぶ

俗に輕しく背を擲たる、急に明覺を奪ねて遠く姑蘇に到る

半夜霜寒し、黄河の凍を結んで陝府の鐵牛腰行る

一年春到る、牛頭を引いて四祖に見えしめ枯木花敷く

鷓鴣夜に啼き蜀蘭香に吟す、圓通門大いに扇輪を奪く

翡翠雲を掃ひ琉璃月を分つ、天女の境巧に畫いて圖と成る

林を出づる獅子、塊を歴る神駒  
鐵圍を走過して尋ねて得ず、趙州東壁に蒲蘆を掛く



圓照本禪師

師は天衣に嗣ぐ。諱は宗本。常州晉氏の子。初め天衣に見ゆ。室中師に問ふ。即心即佛の時如何。師曰はく。殺人放火甚密の難きことかあらん。是に於て名顯はる。元豐の間、李清使復蕃、師に命じて法を講究に開かしむ。法常日に講なり。杭州の守陳公襄、承天、興教の二刹を以て師に命じて擇び居らしむ。蘇人之を留むること益甚なし。又淨慧を以て堅誡す。移文して道俗を諭して曰はく。師を信ること三年、此擧の爲に師を植えしむ。敢て久しく占めず。と。道俗始めて從ふ。元豐五年師宗詔を下して、相國寺の六十四院を聞いて八となし。詔二つ、律六つ、師を召して慧林の第一祖となす。既に至る。使を遣はして問勞す。翌日延和殿に召對して道を問うて坐を賜ふ。師即ち脚跌す。帝曰ふ。罪受業何の寺ぞ。奏して曰はく。承天、永安と。帝大いに悦んで茶を賜ふ。即ち蓋を賜けて長く談ふ。又之を蕩越す。帝其眞なることを喜ぶ。諭すに、方に師宗を興さん、宜しく善く聞導すべきを以てす。奏して曰はく。陛下、此道あることを知る、日日照臨するが如し、臣輩敢て自ら怠らんや。と云うて、即ち辭して退く。帝之を目送す。左右に問つて曰はく。眞の禪慧の僧なり。僧問ふ。如何が是れ祖師西來意。曰はく。轉法輪に臨教義。曰はく。中下の流如何が領會せん。曰はく。伏尾萬里。曰はく。早く今日の事あるを知らば、悔ひらくは當初を讀まざることを。曰はく。三皇塚。上草離離。上堂。頭問なるは天に像

り、方なるは地に杖たり、古貌稜唇丈夫の氣、山嶽に倒れ、海水を踏翻す。帝釋と龍王と身を著る處なし、可ち拄杖を拈じて曰く、却へて杖上來つて廻避す。咄。任ひ汝神通變化する、究竟して須らく者裏に問すべし、草杖一下、元祐元年老を以て歸を求む。旨を得て任、州郡に雲游す、抑へて住持せしむることを得ず。鼓を撃つて衆を辭して曰く、本是無家の客、那ぞ任便して留ぶに堪へん。順風に櫓棹を加へ、船子楊州に下る。既に都城を出づ、王公大臣送る者車馬相屬す。師に臨んで之に誨へて曰く、一月月把袂すべからず、老病人の爲に期せず、唯勤修して怠ること勿れ、是れ真相の爲るなり。聞くもの流涕せざるはなし。其眞慈善導、人を感じしむること此の如し。晚に蘇の靈巖に居して示寂す、後門弟子全身を寺の左に塔す。

曾の無慧の僧、丈夫の氣を稟く

鳥藤に倚つて古實稜巖、清談を發して春風靡靡

南泉不疑の地に到る、機噲鴻門を踏む

少室滄臺の淵を窮む、韓信朝に臨む底

大海を踏翻す、龍王の宅を他方に改むるに踰す

須彌を踢倒す、帝釋をして身を容るるに堪ならしむ

圓照堂前光皎皎、祖師の心を揭示す

三皇塚上草離離、東君の意を漏洩す

一機を垂れて人に活路を指す、大用雷奔

三年を借つて福を此邦に植う、惡聲鼎沸す

一錫晚に林下に歸る、輩寺心なし斷雲を宿せしむるに

七絃高く壁間に掛く、琴臺月あり秋水に翻へる

即心即佛、殺人放火、甚麼の難きあらん。船子孤州に下るに到つて、甚處に因つてか人を

感じて流涕せしむ

### 圓通秀禪師

師は天表に闢て、慧は法秀、本州の人。俗性は孝。母、老僧宿を授ずと察みて乃ち厭むあり。是より先、麥積山に老僧あり。鹿乾寺の善和尙と号し。毎に魯に従うて游方せんと欲す。魯之を老として憫に去る。乃ち曰はく、「他日當に我を竹脚杖の端に尋ねべし。俄に見あり、其間に生ず。往いて歸れば兒一笑をなす。三歳にして魯に隨うて歸らんことを願ふ。十七にして試經得度、志を講肆に勵ます。圓覺華嚴を習ふ、妙に精義に入る、無碍の鐫佛の談禪佛法席盛なりと聞いて、魯も往いて參す。法問云、「盧主任法華の經を講ず。曰はく、「華嚴。曰はく、「華嚴何を以てか宗とする。曰はく、「法界を宗とす。曰はく、「法界何を以てか宗とする。曰はく、「心を以て宗とす。曰はく、「心何を以て宗とす。曰はく、「法界何を以てか宗とする。曰はく、「心を以て宗とす。曰はく、「心何を以て宗とす。曰はく、「法界何を以てか宗とする。曰はく、「心を以て宗とす。」師

語なし。僧曰はく、華嚴も亦あれば大地無怖す。汝當に自ら看るべし、必ず發明あらん。後、僧の白非無慈に問う。云はく、一僧生すれば智悲たり、想観すれば圓覺なり、情未だ生さざる時如何。僧云はく、離といふことを學ぶるを聞いて忽ち悟る。實に方丈に到つて所證を陳す。僧曰はく、汝は眞の法器なり、吾宗異日汝に在つて行はれん。師輩動すること八年、懐拯して慈首となし、四面に出世し、後本山に住す。上堂、少林九年冷坐却つて神光に眞傳せらる。如今更有分毫疑し、只此無疑處すまことを得たり。還つて曾すや、我を笑ふ者は多く、我を罵る者は少し。示衆、山僧摩訶を會せず。大地四時節に應ず。相喚んで休湯茶を喫せしむ。亦且師の妙談なし。禪人若しまた未だ相語んばせんば、禪鏡を踏著すれば硬くして鐵に似たり。上堂、裏雨細く朔風高く、碁を吹き石を走らしめ、木を抜き條を鳴す、諸人盡く有ることを知る、且く道へ風何の色をか負す。若し識得し去らば備に許す眼を具することを。若しまた識らざるは怪しむことなかれ相謾することを。僧問ふ、生死を離れずして涅槃を得たり、魔界を出でずして佛界に入る。師曰はく、赤土牛糞を塗る。曰はく、師の答話を誦す。曰はく、備が話頭什麼と道ふぞ。僧擬議す、師便ち喝す。師嚴冷なり。叢林號して鐵面となす。李伯時馬を畫いて神に入る。師勸めて曰はく、一當に馬腹の中に入ることを想ふべし。李省あり、因つて改めて觀音を畫かしむ。李之に従ふ。山谷好んで艶詞を作る、人争うて之を傳ふ、師之を呵す。谷笑うて曰はく、又當に我を馬腹の中に置くべきか。師曰はく、公艶詞を作つて、以て人心を蕩かす、止馬腹のみ

ならず、正に恐らくは泥犁の中に生ぜんのみ。一谷驚愕して乃ち止む。

贊に曰はく、

羈東なし、何ぞ才干たる

寒嶺山夢裏に身を翻へす、竹鋪坡笑中に毒を含む

頂門闕正し、天地を等しうして淨淵の如くす

建國心に游ぶ、江湖を以て桎梏と爲す

報慈の情生ずれば智隔たることを悟る、冷汗通身

華嚴の法界心宗を指す、紅花目を眩ます

玄中に自得す、幾星沙か善く玉連環を解す

妙處不備、一蟻絲巧に珠の九曲を穿つ

赤土牛糞を塗る、佛魔に入つて命懸けのごとし

生鐵面皮を裏む、龍蛇を舞つ機軸を晴むが如し

金龜影動いて掌上に輪し、圭角稜稜

寶劍光寒うして眉間に挂く、鋒絶撲撲

神駒を書き妙處を得て馬腹に入る、李龍眠を喚び醒す

寶訓を作つて人を惑亂し泥犁に陥る、黄山谷を覆殺す

【雀殺】 驚懼の義

市林院書の申に坐す、百玉を分ち難し

巧言善辯、時態に應ず、極品苦を要すること又何を會てせん。兩袖を改くことを祈し、  
飄然く衣を脱ぐ

七、通本禪師

通本禪師、圓照に嗣ぐ。深人深地、妙悟にして極く前聖を極む。住官の意を  
し、京師に往いて法華得度、既而瑞光に參じて旨を領り、雙林に出世す。次に淨慈に住  
す。妙善其名を聞いて、詠あり。上都の雙林に住せしを、大通の號を賜ふ。上皇曰はく、  
「上人を見ず下地を見ず、虚空に地著して歸するに似たり。君が政に明達するに即ち中  
らず、且く南山に向つて雙林を著して、百玉を懸て下座、僧問ふ、「寶珠元無處、如何是人  
に指示せん。」曰はく、「雙林背面に生ず、雙林背後を著る。」曰はく、「如何が是れ塚中の人。」  
曰はく、「日走轉らば汝世のま、暮年出頭す出頭の時。」曰はく、「向上に更に事ありやまたな  
しや。」曰はく、「太無厭生に上座、僧問ふ、「若し此事を論世は懸へば別家の林を著くるが如  
し、學人上座請ふ師。」曰はく、「早く歸けりれり。」曰はく、「如何。」曰はく、「是。」曰はく、  
「近前するに路なし。」曰はく、「杖を卓すること。」曰はく、「若前を奈何せん。」曰はく、「只  
黑白未分の時の如きんば又作塵生。」曰はく、「且く一著を籠す。」僧問ふ、「百尺の竿頭如何  
が少を進めん。」曰はく、「如何。」曰はく、「便も無處に去る又作塵生。」曰はく、「百雜碎。」僧問

【光刺】、淨洗鉢に  
 二語共に人を罵る  
 の語。光はさつば  
 りの意。光刺は  
 さつばりと刺りた  
 る頭なり。淨洗鉢  
 はきれいに鉢をあ  
 らひたるなり。

ふ、九夏賞券は即ち罰はす、今より向きの事何に曰はく、一光刺頭、淨洗鉢に曰はく、一罰  
 の指示を罰す、曰はく、一説水も消し盡し、

贊に曰はく、  
 諸縁を侍息し、單に自己を明む

面を仰いで天を見ず、脚を凝らして地をりす

優かに細腰に入ら、一門の業を極む

博く羣經を綜ぶ、伸舒條維の志を抱く

烟霞背面に坐じ、無縫衣物量者様す

黑白未分の時、一門の業頓頭に宿す

百尺竿頭、輕しく歩を進む、懸崖よりも險し

九夏堂中の光刺頭、清涼も消し盡す

直鉤香燭あり、清涼に入らして燈を燃す

明眼即人漢し、南山に向つて無常を見る

覺目如くも清涼の界、或は或は未だなく安んず

夏半坐斷す白雲の郷、慧凡の心時欠す

碧梧陰合す、慧林帝鳳の巢を隠す

白雨霽喧し、南宕老鹿の臂を磨す

此山草菓八種の種を採集し、虚空に懸置す、此種の人をして動轉に便なるに也

勤車

【勤車】 車をつむ

師は思ふ、山頂に到り、結縛の大、龜氏の子、山堂、其の脚を布いて人々の魚を撿す。此山、老翁の杖に懸置すに似ず。只是其を見ても驚き、疑に遇りて驚と發す。乃て高層に大衆を召して目ばかり、中ねりて上堂、前日、山草採集せず、勤車すれば旬月を經て、一日大衆變かを知る、山代り方丈に歸る。諸師の脚法早く自ら洗滌なり、論を來れば、勤車子に似たり。如今、毎日脚を束して虚空、動轉但地、問ふ者は日輪車に似たり、答ふる者若露地の如し。擔に今日に似たらば、靈山の慧命猶んど懸絲の如と。少室の家風愈くして果報の如し。又堂下座の盤然として宗車を扶壁するに、志ある蓋の衲子を得ん。出で來りて大衆を喝散す、唯耳邊垂下するのみに準す。常に正法をして久住せしむべし、豈徒ならざらんや。如し、此は佛げたりとも龍と成らず。山僧倒に此令を行はん、持杖を以て一時に懸置せん。上堂、南のり諸人を喚びて草鞋を踏破す。絶學無爲、坐ながら日月を消す。死情脱し、身も泥塑と成り、但懸置あれば掃地と成る。可申爲に道ふ、地の山を撃つるに似たり、物に擊じて、杖を現す、風の耳を轟かす如し。縦計、鼓なきも途轍はに成る。若し相續を断せば、無た没交渉。勉めよや、明仁者、錯つて用心することなかれ、各自に歸堂更に何事をか求らん。上堂、一法若し通すれば萬縁方に透る。拄杖



を拵じて曰はく、若し若しに悟了せば拄杖を掲げ海上に横行せよ、若し雲居山頭に到らば、我が爲に雪峯和尚に傳語せよ。唯、上堂、一切法差ふことなし、雲門の胡餅、趙州の茶、眞鶴樓前玉笛を吹く、江城五月落梅花、慳慳す太原の芋上座、五更に畫角を聞いて天曉に狂響を弄す。一喝、僧問、吾殿燈なき時如何、曰はく、東皇西皇を打す。上堂云、はく、眼晴横に上方に立り、眉毛上青天に透り下黄泉に徹す。且く道へ、鼻孔什袋の處に在る、良久して云はく、一喝。

雲門八世の孫、巨匠に門塔を把りて闢く

一喝を垂る平地土の波濤、一喝を承す峻崖中の洞窟

龍を羅し風を打す、閃電雷に緞天に布く

兎を獵し翼を射す、菩提樹の影に中らしむ

日紡車に似て舌露雲の如し、雪峯門下書を掘つて深く埋む

身累卵の如く命懸絲の如し、靈鷲山前に胸を積ちて相と叫ぶ

無爲を學んで坐ながら日月を消す、水を渡つて魚躍を信む

諸友に詢ねて草鞋を踏破す、山を過ぎて蟻跡を尋ぬ

萬縁未だ透らず、徒らに拄杖を拵じて海上に横行するに及す

一法差ふことなし、且く菩提花江風に狼藉なるを驚く

龍山清庭雲に立ちてことを笑ふ、小魚大魚を呑む

破院に住して古燈なし、東西壁を打す

金解凡情鐵案を絶して漆漏なし、途轍の上轉た破の分るを見る

眉毛眼睫十方に互り青天に透る、鼻孔の中元氣の出づることなし

徹骨風流、人の企及ぶなし

塘江上に琵琶を弄り、黃鶴樓前に玉笛を吹く、千峰萬峰寒雲を弄す

日高古賢師

師は雪峯の意に嗣ぎ、諱は道昌、寶溪異真の子、上堂に云く、未だ祖師の關を透らざれば千難と萬難と、既に祖師の關を透れば一難と一難と、未だ透らざる時の難は則ち日く置く、既に透り了る、甚に因つてか難と一難と、我を脱して價を得と雖も、他に杓柄を執りすること未だ端なし、上堂に云く、我と相照二氣を共に縁なし、我を打翻して煙烟を傾き出し、一丹一粒分明に在り、人間に流布するは我軍ぞ。師、玉几冷泉に住して南山に塔す。真歇和尚徑山に住する時、寶溪に行化す、師の家の中に到つて乃母を見る、撒手を以て其腹を拍ち、人之を打。撒手曰く、我重なり。子者裏に一員の古師を出さん。

費に日はいはく、

寶溪の寶、常の寶に非ず

【珠雨の云云】  
輕重を稱すの意  
はかりなり、故に  
はかりを等子秤子  
と云ふ。

鉢水を呑んで珊瑚枝を露出す、龍潭に響つて珠の顆を打出す  
眞贋を辨じて瞎波斯に撞著す、重寶を統べて誅つて胡法精に逢ふ

玉几に鋪陳す翟臺の舍利、寂寂として聞ここなし

冷泉に抛擲す靈鷲山王、忙忙として尋討す

祖師隔寒光射透す、策籬杓柄脱體現成すること見はず

大還丹冷徹一揮す、藥銚爐烟を把りて情を断つて傾倒す

場に當つて價を定む、隋侯照乘を贈して分文に直らす

檀に纏めて藏したり、趙國連城の計に計を算するを笑ふ

老娘肚裏他人の捫摸することを苦しむ、古柳の根柢に同じきことを愛す、無星の碁子風雨

の分明なることを等しうす、先師に説了せられたり、白玉 觀摩 摩して塵芥をに踏なし、千

古 古南宕山前草離離日杲杲たるに聽す

空門此に至つて九世共に一十四人。

潘 仰 宗

潘山文曰師

師曰はく、石を壁中に火ありや否や。師之を撥つて曰く、なし。文身を起して深く  
臥す。文曰はく、石を壁中に火ありや否や。師之を撥つて曰く、なし。文身を起して深く

【愚】 なんとぞと  
だともひかくるに  
用ふ

撥つて少火を得、擧げて之に示して曰はく、「汝等もと意ふ、者既、師大悟、謝して所見を陳す。』』曰はく、「此は暫時、跛路のみ。經に『はく、性心義を離らんと欲せば、當に時節因縁を觀すべし、時節既に至りぬれば迷ふ。忽ち情多かり、起じ、念ち憶ふが如し、方に己の他より得ざることを省む。』故に師云はく、『弟子未嘗に同じ、無心亦無法。』只是れ山妻凡聖の心まければ、本心の心法元より自ら具えず。汝を眞に爾り、善く自ら持すよ。』師茶を擣む次、仰山に問つて曰はく、「經曰茶を擣む、只子が聲を聞いて子が形を見ず。』仰、茶樹を擣かず。師曰はく、『子其用を得て其體を得ず。師曰はく、『未嘗し、仰尙如何。』師良久す。仰曰はく、『仰尙只其體を得る用を得ず。師曰はく、『子に三十棒を敲す。雲當來る。師問ふ、聞く汝久しく雲山に在りよ、是なりや否や。』當云はく、『是。』師曰はく、『如何か。』師藥出大人の相。當曰はく、『涅槃後有。』師曰はく、『如何が是れ涅槃後有。』當曰はく、『未嘗ほど著けり。當却つて師に問ふ、『百丈大人の相如何。』師曰はく、『羅漢堂、焔燐燈、聲前聲に非ず、色後色に非ず、蚊負牛に上る、僧が猪を下す處なし。劉鐵磨來る。師曰はく、『老牛、汝來る。』當曰はく、『來る。』曰はく、『雲山に大會堂あり、和尙還つて去る。師乃ち身を放つて臥す。勢を作す、磨便ち出で去る。師睡る次、仰山の來るを見て、仰も驚す。仰曰はく、『仰尙何を此の如きを得る。』師起きて曰はく、『我が適來一夢を得たり、備に我爲に原せよ看ん。』仰一盆の水を渡す、師便ち面を洗ふ。少頃あつて香餅する。師曰はく、『我適來一夢を得たり、寂子我爲に原せよ

れり、汝更に馬に原せ看ん。賊一輩の馬を踏じ来る。師曰はく、二子の騎道爲りに過ぎたり。師壁に泥る夫、李軍容、公裳を具し、師の背後に至つて、物を進しうして立つ。師首を回し見て、便に泥像を削てて泥を搦する。勢を作す、李將を踏じて泥を進む。場を作す。師泥像を踏つて師とく方丈に歸る。僧問ふ、馬山一頂の空を作らんば、莫塞村に到ることを得るに由なし、如何が是れ馬山一頂の空を踏んで行はく。近而來、一僧近前す。師一頭を與ふ。上堂、一老僧昔年の後、山下槐樹の家に向つて一頭の水牯牛を作り、左脅に五字を書し曰はん。二通山僧某甲と。危嶽の時に當つて喚んで渡出智と作さば、又是れ水牯牛、喚んで水牯牛と作さば、又是れ馬出前、畢竟喚んで什物と作さん。師作踏して見く。仰山夏、一師に問訊す。師曰はく、予一夏上堂するを見ず、下面に在りて何の所務をか作す。師曰はく、某甲下堂に在つて一片の雲を踏んで、一過の空を得たり。師曰はく、予今夏虚しく過さず。師却つて師に問ふ。一和尚一夏佛の其教をか作し得たる。師曰はく、山中一食、夜後一睡。師曰はく、和尚を夏本座して過さず。這は了つて乃ち舌を吐く。師曰はく、一寰宇を自ら己命を傷ふことを得たら。一

費に曰はく、

華毒の家、胡種を滅す

心に半點の諍なし、肉に半片の重きあり

大軍に火を撲まれて、眼睛を活祭す

寂子を引き坐を敷きしめて、坐の意用を説す

予と坐の意用を説す。坐の意用を説す。坐の意用を説す。

坐を説く。坐の意用を説す。坐の意用を説す。

坐を説く。坐の意用を説す。坐の意用を説す。

坐を説く。坐の意用を説す。坐の意用を説す。

坐を説く。坐の意用を説す。坐の意用を説す。

坐を説く。坐の意用を説す。坐の意用を説す。

坐を説く。坐の意用を説す。坐の意用を説す。

坐を説く。坐の意用を説す。坐の意用を説す。

仰山知通禪師

仰山は慧覺の弟に相承し、南州州民の子、祖師を嗣して南方の首、志に凝るる者あり。

師の嗣上に於て、師して曰はく、予の弟子の行脚せば、師説法か説せしめん、師説いて曰は

く、師、師説の中にも、師の行脚を伏する、人我之を棄とす。師し師は層門より出で、

師説法は層門より出で、師の行脚に依りて已に立言を習ふ。師、師に師つて曰はく、師説法

時六代祖師の同用、共に九十七尚を傳へ得て、老僧に授與して曰はく、吾説して三十年、



流はく、「汝に二箇の紙封せざる罪を執す。師曰はく、「生と死と只一言に在り。師曰はく、「汝が是に依れず、師に一人の責せざるあり。師曰はく、「河東之<sup>一</sup>三<sup>二</sup>孤林を指して曰はく、「吾<sup>三</sup>師曰はく、「什摩と問ふぞ。師亦曰はく、「什摩と問ふぞ。師曰はく、「白<sup>四</sup>鼠<sup>五</sup>推し<sup>六</sup>選<sup>七</sup>て、<sup>八</sup>銀<sup>九</sup>象<sup>一〇</sup>盤<sup>一一</sup>で、<sup>一二</sup>師<sup>一三</sup>勸<sup>一四</sup>め<sup>一五</sup>内<sup>一六</sup>院<sup>一七</sup>に入<sup>一八</sup>る。堂中の諸位皆足る、佛<sup>一九</sup>第<sup>二〇</sup>座<sup>二一</sup>空<sup>二二</sup>す、僧<sup>二三</sup>罵<sup>二四</sup>いて坐<sup>二五</sup>す。一<sup>二六</sup>尊<sup>二七</sup>者<sup>二八</sup>あり。内<sup>二九</sup>通<sup>三〇</sup>して曰はく、「字<sup>三一</sup>富<sup>三二</sup>第<sup>三三</sup>、僧<sup>三四</sup>法<sup>三五</sup>せよ。師<sup>三六</sup>舉<sup>三七</sup>つて内<sup>三八</sup>通<sup>三九</sup>して曰はく、「擊<sup>四〇</sup>訶<sup>四一</sup>衍<sup>四二</sup>の法<sup>四三</sup>は<sup>四四</sup>何<sup>四五</sup>句<sup>四六</sup>を<sup>四七</sup>難<sup>四八</sup>れ、百<sup>四九</sup>非<sup>五〇</sup>を<sup>五一</sup>絶<sup>五二</sup>す、誰<sup>五三</sup>能<sup>五四</sup>誑<sup>五五</sup>師<sup>五六</sup>。師<sup>五七</sup>言<sup>五八</sup>上<sup>五九</sup>る、覺<sup>六〇</sup>む<sup>六一</sup>ま<sup>六二</sup>に<sup>六三</sup>覺<sup>六四</sup>んで<sup>六五</sup>師<sup>六六</sup>に<sup>六七</sup>舉<sup>六八</sup>恨<sup>六九</sup>す。漏<sup>七〇</sup>曰<sup>七一</sup>はく、「予<sup>七二</sup>に<sup>七三</sup>汝<sup>七四</sup>位<sup>七五</sup>に入<sup>七六</sup>る。師<sup>七七</sup>佛<sup>七八</sup>を<sup>七九</sup>難<sup>八〇</sup>す、作<sup>八一</sup>無<sup>八二</sup>明<sup>八三</sup>の<sup>八四</sup>術<sup>八五</sup>あり。漏<sup>八六</sup>明<sup>八七</sup>を<sup>八八</sup>得<sup>八九</sup>て曰はく、「此<sup>九〇</sup>子<sup>九一</sup>繼<sup>九二</sup>せり。師<sup>九三</sup>曰<sup>九四</sup>はく、「此<sup>九五</sup>は<sup>九六</sup>梵<sup>九七</sup>心<sup>九八</sup>樹<sup>九九</sup>或<sup>一〇〇</sup>法<sup>一〇一</sup>王<sup>一〇二</sup>に<sup>一〇三</sup>得<sup>一〇四</sup>て<sup>一〇五</sup>坐<sup>一〇六</sup>る、某<sup>一〇七</sup>山<sup>一〇八</sup>を<sup>一〇九</sup>視<sup>一一〇</sup>しく自<sup>一一一</sup>ら<sup>一一二</sup>此<sup>一一三</sup>道<sup>一一四</sup>せんこと<sup>一一五</sup>を<sup>一一六</sup>得<sup>一一七</sup>て。師<sup>一一八</sup>後<sup>一一九</sup>に<sup>一二〇</sup>前<sup>一二一</sup>に<sup>一二二</sup>問<sup>一二三</sup>ふ、和<sup>一二四</sup>尚<sup>一二五</sup>が<sup>一二六</sup>師<sup>一二七</sup>佛<sup>一二八</sup>聖<sup>一二九</sup>賢<sup>一三〇</sup>の<sup>一三一</sup>類<sup>一三二</sup>を<sup>一三三</sup>執<sup>一三四</sup>する<sup>一三五</sup>を<sup>一三六</sup>見<sup>一三七</sup>る、漏<sup>一三八</sup>又<sup>一三九</sup>入<sup>一四〇</sup>て<sup>一四一</sup>看<sup>一四二</sup>ん<sup>一四三</sup>。散<sup>一四四</sup>り<sup>一四五</sup>も<sup>一四六</sup>坐<sup>一四七</sup>す。師<sup>一四八</sup>曰<sup>一四九</sup>はく、「此<sup>一五〇</sup>は<sup>一五一</sup>凡<sup>一五二</sup>俗<sup>一五三</sup>習<sup>一五四</sup>工<sup>一五五</sup>の<sup>一五六</sup>類<sup>一五七</sup>也<sup>一五八</sup>。若<sup>一五九</sup>し<sup>一六〇</sup>正<sup>一六一</sup>信<sup>一六二</sup>ある<sup>一六三</sup>は<sup>一六四</sup>別<sup>一六五</sup>に<sup>一六六</sup>見<sup>一六七</sup>け<sup>一六八</sup>看<sup>一六九</sup>ん<sup>一七〇</sup>。漏<sup>一七一</sup>又<sup>一七二</sup>去<sup>一七三</sup>年<sup>一七四</sup>の<sup>一七五</sup>言<sup>一七六</sup>は<sup>一七七</sup>何<sup>一七八</sup>れ<sup>一七九</sup>實<sup>一八〇</sup>なら<sup>一八一</sup>ざる<sup>一八二</sup>言<sup>一八三</sup>を<sup>一八四</sup>坐<sup>一八五</sup>す。師<sup>一八六</sup>は<sup>一八七</sup>曰<sup>一八八</sup>はく、「如<sup>一八九</sup>來<sup>一九〇</sup>師<sup>一九一</sup>は<sup>一九二</sup>若<sup>一九三</sup>弟<sup>一九四</sup>の<sup>一九五</sup>言<sup>一九六</sup>する<sup>一九七</sup>を<sup>一九八</sup>許<sup>一九九</sup>す。祖<sup>二〇〇</sup>師<sup>二〇一</sup>師<sup>二〇二</sup>は<sup>二〇三</sup>多<sup>二〇四</sup>に<sup>二〇五</sup>引<sup>二〇六</sup>する<sup>二〇七</sup>こと<sup>二〇八</sup>在<sup>二〇九</sup>り。漏<sup>二一一</sup>又<sup>二一二</sup>曰<sup>二一三</sup>はく、「我<sup>二一四</sup>に<sup>二一五</sup>一<sup>二一六</sup>機<sup>二一七</sup>あり、漏<sup>二一八</sup>曰<sup>二一九</sup>して<sup>二二〇</sup>初<sup>二二一</sup>を<sup>二二二</sup>視<sup>二二三</sup>る、若<sup>二二四</sup>し<sup>二二五</sup>入<sup>二二六</sup>會<sup>二二七</sup>せ<sup>二二八</sup>ず<sup>二二九</sup>ん<sup>二三〇</sup>ば<sup>二三一</sup>別<sup>二三二</sup>に<sup>二三三</sup>沙<sup>二三四</sup>彌<sup>二三五</sup>を<sup>二三六</sup>焼<sup>二三七</sup>ばん<sup>二三八</sup>。漏<sup>二三九</sup>に<sup>二四〇</sup>相<sup>二四一</sup>と<sup>二四二</sup>て<sup>二四三</sup>曰<sup>二四四</sup>はく、「且<sup>二四五</sup>善<sup>二四六</sup>す<sup>二四七</sup>らく<sup>二四八</sup>は<sup>二四九</sup>聞<sup>二五〇</sup>師<sup>二五一</sup>弟<sup>二五二</sup>、祖<sup>二五三</sup>師<sup>二五四</sup>を<sup>二五五</sup>會<sup>二五六</sup>すること<sup>二五七</sup>を。南<sup>二五八</sup>塔<sup>二五九</sup>の<sup>二六〇</sup>湯<sup>二六一</sup>、臨<sup>二六二</sup>濟<sup>二六三</sup>に<sup>二六四</sup>謁<sup>二六五</sup>す、後<sup>二六六</sup>歸<sup>二六七</sup>り<sup>二六八</sup>て<sup>二六九</sup>師<sup>二七〇</sup>に<sup>二七一</sup>侍<sup>二七二</sup>す。師<sup>二七三</sup>曰<sup>二七四</sup>はく、「汝<sup>二七五</sup>未<sup>二七六</sup>づ<sup>二七七</sup>て<sup>二七八</sup>什<sup>二七九</sup>麼<sup>二八〇</sup>をか<sup>二八一</sup>作<sup>二八二</sup>す。漏<sup>二八三</sup>曰<sup>二八四</sup>はく、「和<sup>二八五</sup>尚<sup>二八六</sup>に<sup>二八七</sup>禮<sup>二八八</sup>観<sup>二八九</sup>す。師<sup>二九〇</sup>曰<sup>二九一</sup>はく、「誰<sup>二九二</sup>つ<sup>二九三</sup>て<sup>二九四</sup>和<sup>二九五</sup>尚<sup>二九六</sup>を<sup>二九七</sup>見<sup>二九八</sup>るや。漏<sup>二九九</sup>曰<sup>三〇〇</sup>はく、「見<sup>三〇一</sup>る。師<sup>三〇二</sup>曰<sup>三〇三</sup>はく、「和<sup>三〇四</sup>尚<sup>三〇五</sup>何<sup>三〇六</sup>を<sup>三〇七</sup>驢<sup>三〇八</sup>に<sup>三〇九</sup>似<sup>三一〇</sup>か<sup>三一</sup>ん<sup>三一二</sup>。漏<sup>三一二</sup>曰<sup>三一三</sup>はく、「某甲<sup>三一四</sup>和<sup>三一五</sup>尚<sup>三一六</sup>を<sup>三一七</sup>見<sup>三一八</sup>る、亦<sup>三一九</sup>佛<sup>三二〇</sup>に<sup>三二一</sup>似<sup>三二二</sup>か<sup>三二三</sup>す。師<sup>三二四</sup>曰<sup>三二五</sup>はく、「若<sup>三二六</sup>し<sup>三二七</sup>佛<sup>三二八</sup>に<sup>三二九</sup>似<sup>三三〇</sup>か<sup>三三一</sup>ず<sup>三三二</sup>ん<sup>三三三</sup>ば<sup>三三四</sup>簡<sup>三三五</sup>の<sup>三三六</sup>什<sup>三三七</sup>麼<sup>三三八</sup>は<sup>三三九</sup>か<sup>三四〇</sup>似<sup>三四一</sup>る。漏<sup>三四二</sup>曰<sup>三四三</sup>はく、「若<sup>三四四</sup>し<sup>三四五</sup>似<sup>三四六</sup>たる<sup>三四七</sup>所<sup>三四八</sup>あ<sup>三四九</sup>ら<sup>三五〇</sup>ば<sup>三五</sup>驢<sup>三五</sup>と<sup>何</sup>ぞ<sup>別</sup>な



【道】 關人兒を呼んで云ふ。

【巻】 吃驚せしむるを云ふ。關中に人を驚かす聲なり。

らん。師大いに驚いて曰はく、凡そ兩つながら定ず、情盡きて體落はる、吾此を以て人を  
驚すること既に二十年、決了の著なし、予之を保存せよ。師毎に指して人に謂つて曰はく、  
「此手は肉身の佛なり。」  
贊に曰はく、

鐵海の珠、毒蛇の窟

十月乾眼を借つて出生す、一顯蚊翅に落ちて回轉たり

近前文字、向上の機鋒を單傳す

思は盡きて、海に還る、無窮の體験を抄出す

坐草座の法、内種の通達し得て、

南山大いに人の事を切るあり、單を提する何を曾て夢にも見ん

道徳の感する所、身動静を衡む勢在りして分つ

生殺の在り、内風塵一運りて頓盡せす

前の開相を突却す、執照をして尊法を稱揚せしむ

小輝迦を過す、總體に當前に顯せらる

沙彌を喚んで香嚴の體相を會得することを印す

何似驢南塔を引いて成毛の眼を放出す

人の指みを得る處、只他家の父子知ること許す、然も萬古の微猷縦ひ佛手も亦掩ひ難し

南塔湖經師

師曰。仰山に對して。經師の人。實其の才。殊に妙し。夕、神光室を照して。經師對  
 して。因つて。湖を以て。之に名く。少うして。板橋なり。仰山に依りて。觀度し。之を問ふ。  
 僧問。文殊は。是れ七佛の傳。文殊に還つて。師ありや否や。師曰。只是れ使。是なることなし  
 り。曰。如何が文殊。師曰。拂子を擧起す。僧曰。只是れ使。是なることなし  
 や。師曰。拂子を擧下す。問。如何が是れ妙用の一句。師曰。水到れば。船成る。問。何  
 ぞ。眞佛のの道にか。住在す。師曰。言下無相。是らば。また別處に在らじ。清化の妙。何ぞ  
 する。問。何れよりして。來る。曰。鄂州。曰。何れ。鄂州の使君は。若し何事ぞ。曰。何  
 なく。化下。敢て。相觸れず。曰。何れ。北地には。通じて。畏れず。曰。大丈夫。何ぞ。心を出。試  
 みる。師曰。然として。笑ふ。師に。印可す。北山。峯下の。大禪佛。傳燈に。具に。載す。

贊に曰はく、

光乳室に照らさ、神豐城に照る

經師に對して。淵蓋虫を起す。駒地に墮つて。驢馬郡。驚く

臨濟に對して。生。猶。時。夢。の。如。し。仰。山。に。見。え。て。凡。聖。兩。つ。な。か。ら。情。を。忘。す

忽爾として。大いに驚く。人前に指して。肉身佛と謂ふを。疑はむ

飄然として笑ふ。知る化下敢て。使君の名に觸ることなき

獨露眞常、雲收つて月現す

全く體用を彰す、水到れば渠流る

南塔影の中文傑師、錯つて拂子を懸つ

雲峯下の大禪佛、悞つて師見と笑ふ

一再次東平の鐘を響る、佛塔面に滯つ

二十年人を説する誤、數度請ふことを止む

言下無相期ち固是れ期處に在らず、然も眞佛の所傳、伎倆を窮めぬ處に在りて其高麗し

芭蕉清禪師

師諱は慧清、南塔に廟々。新羅の人なり。師、衆に謂つて曰はく、我十八丈、仰山に到

り南塔に見ゆ。上堂曰はく、汝等諸人若し是れ箇の漢ならば娘社婆より扇出し來つて、便

ち師子吼を作して好を解すや。我言下に於て身心を歇得す、便ち住すること五載。示衆に

云はく、備に拄杖子あらば我備に拄杖子を真へん。備に拄杖子なくば我備に拄杖子を奪

却せん。僧問、如何が是れ提婆宗。師曰はく、赤幡左に在り。問、如何が是れ提婆

西來意。師曰はく、欄干自ら慙慙として暗に江を渡る。問、如何。師曰はく、星天無影草花あ

り、暈つて交州するに堪へんや。師曰はく、汝若し將ちさらば前因後不言。上

堂、須らく看るべし、忽ち客賊俱に來るに遇はん時如何。師曰はく、星天無影草花あ

【芭蕉】 さびしき  
【須らく看るべし】  
須らく遊接要應す  
べしの意。

堂一人の行ふに、忽ち前向、萬丈の懸崖、崖は岩の氣りあり、兩畔は荆棘林なるに遇ふが如きんば、若し向ふすときは、則ち坑に墮す類に落つ、若し退後するときは、則ち野火を見を焼く、若し向せば、大森林に碍へられん。任處の時に當つて作麼生か免れ得ん。若しまた免れ得ば、此の路あるべし。若しまた免れ得ずんば、身を死漢に墮せん。問ふ、「二、爾三首をば問はし、唯ふ師、師の面目を直せよ。」師默然として正坐す。問ふ、「如何が是れ歟。」毛の劍。曰はく、「進前三歩。」曰はく、「用ふる若し如何。」曰はく、「退後三歩。」問ふ、「北斗裏に身を藏す事如何。」曰はく、「九九八十一。」曰はく、「會すや。」曰はく、「不會。」曰はく、「一、二、三、四五。」問ふ、「古師未だ出づる時如何。」曰はく、「千年の茄子根。」曰はく、「出興して後如何。」曰はく、「念所の泥眼、承天の碓、師の會下に在りて發明す。後僧問ふ、「衆罪は霜露の如し、慧日能く消除する時如何。」師曰はく、「庭燕は其の雨、樓閣靜時の鐘。」曰はく、「任處としてか因縁得する時果實成つて自ら受く。」師曰はく、「管筆書を能くし、片舌百語を解す。」

贊に曰はく、

脚頭未だ結紵に跨らざらば、大唐の諸祖に參詣す

提婆宗を以て外道の毒を奪ひて回る

西來意に各へて達磨を罵し江を渡り去らしむ

拄杖子一生與奪、未だ嘗て玉麒麟を敲き出さず

摩肚裏十月出生、幾か曾て眠えて金師子と作る

【當的帝都了】皆舌音なり。一。たんでていとをていん唐音、日本人が唐人の辭をちんぶんかんと云ふに同じ意なり。

前因後下吉、破草鞋受用の時を得難し  
退けば火進めば深坑、荆棘林那を出身の路あらん

羅の人語を辨じ難し、當的帝都了

北斗裏穩かに身を藏す、一二三四五

兩口一無舌、臨溪の石鎖を打開して兩頭揺くことを看る

雜毒深く心に入る、承天の庭臺深夜の雨を吐出するごとく致す

默然正坐、本來の面二頭に在らず

用ふる者如何、吹毛の劍豈三步に掛らんす

青は藍より出で藍より青し、信に言傳の兒孫萬劫り風雷ふ。

芭蕉徹師

師諱は穉徹、芭蕉の法に傳々、臨濟の人なり。初め風穴に請す。穴問ふ、如何が是れ正法眼。曰はく、菩提子、穴之を異とす。後芭蕉に參す。上堂にふへるあり。兩口一無舌、卽是吾宗旨。と云ふを見て驚然として大悟す。僧問ふ、如何が是れ深深の處。曰はく、石人石戸を聞く、石鎖兩頭揺く。問ふ、如何が是れ臨溪の境。曰はく、山あり、水あり。問ふ、寂寂無衣の時如何。曰はく、未だ是れ清僧分上の事にあらず。曰はく、如何が是れ清僧分上の事。曰はく、行かんと要すれば便ち行き、坐せんと要すれば便ち坐す。問ふ、一人

あり、非時を合せて、清淨を證せば、無常として起見するを看す。曰はく、地獄に落ち、地獄に落ち、地獄に落ち。曰はく、何處よりか提攜せざらば、曰はく、極深極厚好悪を證する。本來に曰はく、昔日の如く、器空にして梵王請して法輪を轉す、如來はまさるのみ、宗風を屈すはあり、儀に隨つて教を還す。遂に三乘の名有り、更上人間に據す、今に至るまで光澤墜さず。若し祖宗門下に據らば天地懸に懸あり、上上の風聲如響ならず、作麼生か是れ混融の一句、匠つて人の道ひ得るありや、これ、此は得ば學の價あり。若し道ひ得ずんば天寶、地窄し。一示衆、眼中に譬なければ、真に范なし、大長世は變ぢく、泥多ければ佛なかり。問を將ちゑることなれば、我また答なし、會すや、問は答處に在り、答は問處に在り。高僧に云はく、真直の旨、外道に掛けず、木童唱和すれば石左耳を側つべし。

人面能、利似兼

問行半自ら誘服せんことを要す、鮮潔を證する人信不及

泥彈子正法眼と作る、豈知らんや、地窟の窟に冥闇を窺むことを

嘉乎相古傳の傳に據す、先世蕉の曲に時石を包むことを學ばず

濕地の旬地窄く天寬し、臨溪の境山深く水碧し

經僧の涅槃生死を問ふに遇ふ、覆懸せんと要せば且く隨年を待て

翟安の顛滿偏圓を説くことを斥ふ、宗風を屈せば卒に了日なけん

西來意、貼肉衫の汗千重に通る

宗門の事、脚跟下泥深きこと三尺

木童唱和すれば石人耳を削つ、宗宗旨誰か肯て唇に掛けん

眼中に翳没れば空裏に花なし、聞言語拈出するに勞せず

人皆謂ふ、瀉山五世にして師に對つて寂爾として傳ふることなしと

殊に知らず、萬仞の門牆登らんと擬する者は、銀山鐵壁

瀉仰宗此に至つて五世

法眼宗

清涼法眼禪師

師諱は交益。餘杭魯氏の子。髮を祝つて闍梨の覺律師に詣して具戒を受く。覺の化を四明に盛にするに及んで、師往いて毗尼を習ふ。文章を工にす。覺之を奇とす。日して吾門の游夏と爲す。師玄機一たび發するを以て、寶篋其に拈て錫を振うて前に邁いて福州に抵る。初め長慶に見えて契悟する所なし。進修の輩と湖外に之くことを擬す。既に發して雨に値ふ、少く城西の地藏に憩ふ。堂に入りて彼の地藏に坐するを見る。師に問ふ。此行何く之く。曰はく。一行脚し去る。曰はく。一行脚の事作麼生。曰はく。知らず。曰はく。此行何く。曰はく。一行脚し去る。因に聚論を擧す。天地と我と同根の妄に至つて、藏又曰は

【游夏】字游、子夏。孔門十哲中の文學に長ぜし人。

く、山河大地自己と見れば同か是れ別か。師曰はく、同。戒雨指を曝つ、無之を視て爾時  
と云うて便ち馳ち去る。問蒙れて歸して行く。戒雨を違つて問うて曰はく、上座、尋常  
果真心と云く、乃ち當下の石を指して曰はく、一旦く問へ、此石心内に在るか心外に在る  
か。師曰はく、内心に在り。曰はく、行脚の人其の米山を背けてか地石を坐じて心頭に在  
くや。師客んで以て對ふることなし。遂に杖を置いて俱に決擇を求む、并除に通くして見  
解を呈して道理を盡く。師曰はく、佛法は是れ慧慧にあらず。曰はく、某甲非に對つて離  
窳まり理絶す。師曰はく、若し佛法を論せば一切畢竟、佛大智して龍川の染縁に出世す。  
一香藏の爲に捨す。僧子方なる者問うて曰はく、公久しく正處に説くを、乃ち地藏に對つて  
ことは何をぞ。師曰はく、其處が萬象の中獨露身と云くことを解せざるを以ての故に。方  
拂子を擧して之を示す。師曰はく、萬象を撥ふか萬象を撥はざるか。曰はく、萬象を撥  
はず。師曰はく、獨露身。方曰はく、萬象を撥ふ。師曰はく、萬象の中。方是に於  
て行を悟る。二僧參する次、師座を指す、二僧齊しく去つて捨く。師曰はく、一得一失。二  
示業に云はく、盡十方世界、皎皎地一絲頭なし、若し一絲頭あらば擲ち是れ一絲頭。金陵  
の報恩の則初め青峯に參じて問ふ、師河が是れ學人が自己。案曰はく、丙丁童子來求火。  
と。契はず、師に見ゆ。師問ふ、甚處より來る。曰はく、青峯。師曰く、青峯何の言句か  
有りし。則前話を擧す。師曰はく、上座、作麼生か會する。明曰はく、丙丁は火に觸す、  
而も更に火を求む。自己を將て自己を求むるが如し。師曰はく、與麼に會せば又爭でか得



ん。則曰はく、「某甲は只恁麼、未審し、和尚如何、師曰はく、「爾我に問へ、爾が爲に道はん。則前問を尋す。師曰はく、「丙丁童子來求火。則乃ち悟る。僧問ふ、「如何が是れ一卷の經。師曰はく、「題目分明。師李王の與に道を論ずる者、因に牡丹を見る、王命して劍を作らしむ。即ち曰はく、「我を推して芳業に就す、由來、應同じからず、變は今日より白く、花は是れ去年の紅、艶冶朝露に結ぶ、露香晚風を逐ふ、何を漬けん茶落を行ちて、然して後始めて空なりと知ることを。「王聞いて悟す、師偈あり。曰はく、「鶯鳥語、鶯の如し、柳搖いて金線長し、雲は山谷に歸りて帯かに、風は香花の香を送る、永日蕭然として坐す、澄心萬慮忘す、言はんと欲すれば言ひ及ばさず、林下好し商量するに。言はく、百法明門は乃ち唯唯の詞なす。」

長に曰はく、

竝にして玄機を發す、趣く行いて尋訪す

小乘根器開要を抛棄す、惡家塚和尙に播磨す

片石を寸心の内に安す、機に當つて擊碎するも新羅鐵に沈る

全身を萬象の中に露はす、力を盡して扶持するも伎倆として幽奇

二僧を帯して窟を捲き去らしむ、得失未だ分明ならず

童子の火を求め來ることを勘す、是非定當し難し

鶯の如くにして幽鳥語る、山林の意別に是れ風標

鼻を挿して芳表に對す、牡丹の詩筆が體道をか窺む

是れ曹源一滴の水、齒木を擧む偶刺として文を成す

學人一卷の經を問ふ、麈尾を讀み全く經向なし

唯心唯識、石頭城路下差を列す

無法無人、通玄峰雲巖峰に横はる

盡十方世界、峻峻地一絲頭なし、者裏に到つて百法明門、只宜しく收抗すべし

天台韶國師

師諱は徳韶、法眼に嗣ぐ、處州龍泉陳氏の子、幼にして龍門寺に依る。得慶十八にして受

具、去つて龍牙に謁して問ふ、雄雉の尊甚處に因つてか親近することを得ざる。『牙曰はく、

『火と火との如し。』師曰はく、忽ち水に遇ひ來らば又作麼生。『牙曰はく、汝我が語を背せ

ず。』又問ふ、天も蓋は空地も蔽せず、此理如何。『牙曰はく、是の如くなるべし。』師旨を論

さず、再び問ふ。『牙曰はく、道者汝向後自ら會し去らん、師後に通玄峰に於て澤浴し

て忽ち省す。遂に香を焚いて龍牙を望んで禮拜して曰はく、當時若し我に説向せば今日決

定して罵らん。』疎由に見えて問ふ、百匝千重是れ何人の境界ぞ。』山曰はく、左搓の芒繩

鬼子を縛す。』曰はく、古今に落ちず、請ふ師諱け。』曰はく、説かず。』曰はく、甚として説

かざる。』曰はく、箇の中有無を辨せず。』曰はく、師今善く説けり。』山之に駭く、是の如く

にして五十四員の知識に參ず。後法眼に謁す、眼一見して深く之を器とす。師參請に倦んで但衆に隨ふのみ。一日眼上堂、普問ふ、「如何が是れ曹源一滴の水。」眼曰はく、「是れ曹源一滴の水。」師座下に大悟す、遂に眼に白す。眼曰はく、「汝向後當に國王の爲に師とせられて、祖道の光大を致すべし、吾如かざるなり。」と。是より諸方の異唱、古今の玄鑑之が爲に決擇して微跡を留めず。乾祐元年忠懿王位を嗣ぐ、使を遣はして之を邀へて弟子の禮を申ぶ。示業、古聖の方便猶河沙のごとし。祖師の道はく、「風幡の動くに非ず、仁者の心動く」と。斯れ乃ち無上の心印、至妙の法門、我輩祖師門下の空と稱す、合に作麼生か祖師意を會すべき。若し風幡動かすと言はば、汝が心妄りに動く、若し風幡を撥はすと言はば、風幡の處に就いて遙取せよ。若し風幡動する處是れ法眼と言ひ、若し物に附いて心を明む、物を認むることを須ひすと言ひ、若し色卽是空と言ひ、若し風幡の動くに非ず、應に須らく妙に會すべしと言はば、祖師の意旨と了に波交涉なり、既に是の如く會すること許さず、諸上座使も知悉すべし、若裏に悟り去らば何れの法門か而も明めざらん、百千の諸佛の方便と雖も一時に測了せん。若し此の如くならずんば、設ひ風幡を死とも空しく自ら神を勞せん、是處あることなけん。通玄峰に住する傳あり、云はく、「通玄峰頂是れ人間にあらず、心外に法なし。蒲昌山」と。眼問いて乃ち曰はく、「只此一偈若宗を起すべし。示業、古人道はく、「若し一法を欠かば法身を成せず、若し一法を測さば法身を成せず、若し一法あらば法身を成せじ、若し一法無くんば法身を成せず」と。此は是れ般若の眞宗

なり。又曰はく、夫れ一切の問答は針鋒相投するが如し、無堂の参えなし、事として言てざしことなく、理として備はらざることなし、良に一切の語言、一切の三昧、横豎深淺羅去來、是れ諸佛菩薩の門なるに由る。只貴むらくは如何か一時に領取せよ、珍重。又曰はく、言喚聲に非ず、色荷物に非ず、何れを言す乎。下太公、大王長壽久立、僧問ふ、古德遺はく、天に登るに梯を信らず、廻地行踏まじと、如何が天に登るに梯を信らざる。師曰はく、絲髮の地を踏さず。曰はく、如何が是れ廻地行踏なき。師曰はく、海來爾に向つて什麼と道ひし。問ふ、法眼の寶珠、如何親しく傳ふる。未審し、今日の一言何人にか分付せん。師曰はく、聲響たる鼓。一頭打は兩頭鳴る。問ふ、舌に道ふ、虚空を敲打すれば鳴つて鼓鼓、石人木人齊しく應諾す、六月降雪落ちて紛紛、此は是れ何來の大回覺、如何が是れ虚空を敲打する底。師曰はく、豈得兒鐵袴を著く、打一棒行一步。曰はく、筆麼ならは則ち石人木人齊しく應諾す。師曰はく、備邊つて聞くや。問ふ、飯光經過丈六の衣を持して躑躅山に在つて、麈尾下生を待つて丈六の衣を將て千尺の身に披す、塵尾恰好なりと、只釋迦の身の長丈六、麈尾の身の長千尺なるが如くんば、爲復是れ身短を解するか、衣長を解するか。師曰はく、汝却つて會すや。問掃袖して出づ。師曰はく、小兒子、山僧若し汝が話に答へ得ずんば、當に因果あるべし。汝若し不足ならば吾當に之を見るべし。明歸りて七日にして嘔血す。淨光和尚勸めて曰はく、汝速かに去つて懺悔せよ。明方丈に至つて悲泣して曰はく、願はくは和尚慈悲、某甲が懺悔を許せ。曰はく、人の地に倒れ

て起きるが如し、曾て汝をして起倒せしめず。爾久曰はく、「若し某甲が機軸を許さば、終身給侍せん。」師爲に語を出して曰はく、「佛佛道齊し、宛爾として高低なり、釋迦彌勒印の泥に印するが如し。」天台の教を傳ふる義寂といふものあり、乃ち螺溪基なり。屢師に言つて曰はく、「智者の教、年記寔違し、慮ふに散失多し、今新羅國其本共た無れり、和尚の慈力に非ざるよりは其れ教が能く之を致さんや。」師、王に出す。位を譲はし、海に航して傳寫備足して廻る。今に迄るまで盛んに世に行はる。

贊に曰はく、

心法雙べ忘す、乾坤に猶非す

天に奪るに 疑を信らず、廻地行路なし

熾石火を翻へす、石頭地を壊破す

掌 龍泉を掘る、空つて龍歸寺を出づ

天蓋ひ地載す、若し龍牙の飯飯を嘗情して 閑を宗るに言し

百鍊千重、羅山に左捺の芒屨に鬼子を縛せらる

去來羅刹諸佛の實相を明む、而且へ羅刹

欠剩有無數者の眞宗を説く、劫許半薄肉なることを

是れ曹源の一滴水、玄機を悟る眞豆を符で眞珠と作す

通玄滿目の山を指す、吾宗を述す甜瓜を變じて苦瓠と成す

祖師門下の客、風幡を翻す常永流泥

大王長壽の人、性色を外にす沙を爐ち上を撒す

法眼祖師の寶印を得たり、脚皮被頭頭罵る

木人に對じて虚空を敲打す、寔諦兒識防を著く

南嶽天台義乘の麈尾を念ふ、新羅園に往いて轉寫して歸る

釋迦摩勒身衣の短長を論ず、興教僧をして嘔血し去らしむ

諸方の異唱古今の玄鍵、決擇して蹠を留めず、認らず一國の師と爲つて名震宇に喧すしきを

永明智覺師

師諱は延壽。韶國氏に嗣ぐ。餘枝王氏の子。幼より佛乘を敬ふことを知る。既に冠して

葷酒を茹はず、日に惟一食、法華を持する七行俱に下る。群羊の跪いて聽くことを感ず。

年二十八華亭の鎮將となり、翠巖の參禪師、龍師に選止して大いに玄化を闡くに屬ふ。師

遂に出家を求めて朝に請ふ。文穆王具志に従ふ、參を禮して師と爲す、勞を執つて業に

供す、身唯一布衲。後に天台の天柱峰に往いて九旬習定、鳥類斥鷃あり、衣襟の中に巢

ふ。國師に謁するに壁んで一見して之を器とし、密に玄旨を授く。仍つて師に謂つて曰は

く、「汝元帥と縁あり、他日大いに佛事を作さん、惜むらくは吾が見るに及ばざらんのみ。」初

め雪竈に住す。上堂、「雪竈が者裏退漢千尋、纒粟を停めず。奇巖萬仞足を立つる處なし、汝等

諸人甚慶の處に向つてか歩を進めん。僧問ふ、「一得如何が履踐せん。」曰はく、「一歩歩寒華結ぶ、言言徹底氷る。」又偈に曰はく、「孤猿叫び落す中巖の月、野客吟じ殘す半夜の燈、此景此時誰か意を得る、白雲深き處坐禪の僧。」建隆元年、忠懿王、請じて靈隱に入れて第一世となす。明年に請じて永明に住せしめて第二世と然す。僧問ふ、「如何か是れ永明の旨。」曰はく、「更に香を添へ著けよ。」曰はく、「師の指示を誦す。」曰はく、「且喜すらくは波交涉。」偈あり曰はく、「永明の旨を識らんと欲せば、門前の一潮水、日照して光明生ず。風來つて波浪起る。」僧問ふ、「聖人久しく永明に在り、什麼としてか永明の家風を會せざる。」曰はく、「不會の處に會取せよ。」曰はく、「不會の處如何が會せん。」曰はく、「牛胎象子を生ず、碧海紅塵を起す。」師、宗鏡錄一百卷を著して海外に播す。高麗國王師の言教を覽て使を遣はして書を齎して弟子の禮を叙ぶ。又僧三十六人を遣はして道を問はしむ。皆印記を承く、前後本國に歸つて各一方を化す。開寶八年十二月二十六日を以て淨慈に示寂す。大慈山に塔す。

贊に曰はく、

一たび出頭し來る、風標適かに別なり  
華亭の靈將を棄てて、腰に寶刀を佩ぶ

龍冊の老僧に依つて、身布納を被る

法華を誦して七行俱に下る、群羊の跪いて座隅に聽くことを感ず

大定を習うて三月にして方に向る、斥躡の擧うて衣襟に觸むあり

天台に片言を得て旨を悟る、念念對經宗子  
乳岸一踏を踏して通玄、步步雲花結露

泥漫千尋萬葉を伴めず、火を隠れば丈痕深し

香爐萬葉地に馴味を起す、串を穿めば心跡通す

牛膝象子を生ず、垂示太が分明

碧海紅蓮を起す、家風重ねて漏洩す

極床に死して清夢を喚び回す、野客吟じ遊す半夜の流

蒲團に倚つて白雲を生懸す、風は時清す中嵐の月

宗鏡一百餘卷を著す、法を點じて念と貫す

高靈の三十六偈を印して、義を證して無上とす

番行密用御眼も亦窺ひ羅し、眞の精進僧、露日峯前百世に互りて光明樂として説す

法眼此に至つて三洗、經高麗の三十六偈を印すと斷ま、然れども傳燈に名字總縁を載せ

ず、茲に贅するに及ばず。

小師 眉澤 香を扶いて拏手稽首諱んで乳岸に書す。

希叟和尚五家正宗贊終



護

國

論



興禪護國論序

【興禪】興起の義、護國とは内煩惱を護し、外國家を護すの義。師、後鳥羽天皇建久九年此詔を造る、師五十八歳なり。  
【樂神】建仁寺に於ても鎮守廟として之を禱る。  
【日應山】備前國津高郡日應寺村師を以て開山祖とす。  
【三摩耶行】金胎兩部の密行をいふ。  
【二百年來】師の入唐緣起に曰はく「二十一年にして志渡海に在り、中頃或尋阿闍黎、三河入道寂照以後、大唐の僧絶ゆる所なり」と。  
【伯耆州大山】基好といふを密乗の師とす、十七八歳ごろ。

此論の作るや、只宗門弘道に在るのみ。師は本邦佛心宗の初祖なり、因つて千光祖師と號す。備前州の人、賀陽氏、孝靈天皇の裔なり。母は田氏、吉備津宮の宗社樂神の嗣に祈りて、明星を夢みて感じて孕む。亦明星出づるとき誕す。八歳、父母を辭し、三井の流供舍婆沙の義を學ぶ。仁平三年癸酉の秋、十三歳にして叡山に登る、得度して諱を榮西と曰ふ。圓宗の義を學ぶ、同會の中、已に超羣と稱す。然れども世の浮幻を觀て、誓心日に増す。二十三歳にして叡山を下つて、備前の州日應山に往き、教を絶つて三摩耶行を修すること年あり。専ら齋戒を持し、殊に律儀を精しうす。久しく入宋の志を懷く。然るに本邦二百年來、喻海の沙門なし。偶説いて此言に及べば、則ち人に嘲らる。而も意屈せず。自ら謂らく、詳かに聖教を闡するに、前聖垂迹の地、古佛行道の處、至心に精祈するに、宿願成ぜずといふ事なしと。毎に處處の靈區に詣して必ず之を祈る、則ち皆其應を得たり。二十七歳、伯耆の州大山に在つて勤修一夏、偶然として唐木の法華經を得ることあり、即ち自ら以爲らく渡海の祥なりと。遂に父母に告げて筑州に赴く。會宋國の通事李德昭といふものに博多の津に遇ひ、彼地禪宗の盛なるを聞いて、希有の思を發す、時に二十八歳、仁安三年戊子四月十八日、南船に乗じて放洋、二十五日、宋國明州に到る。

【卷之三】此書の中書、宗法

【卷之四】此書の中書、宗法

【卷之五】此書の中書、宗法

【卷之六】此書の中書、宗法

【卷之七】此書の中書、宗法

【卷之八】此書の中書、宗法

【卷之九】此書の中書、宗法

【卷之十】此書の中書、宗法

【卷之十一】此書の中書、宗法

【卷之十二】此書の中書、宗法

【卷之十三】此書の中書、宗法

【卷之十四】此書の中書、宗法

【卷之十五】此書の中書、宗法

【卷之十六】此書の中書、宗法

【卷之十七】此書の中書、宗法

【卷之十八】此書の中書、宗法

【卷之十九】此書の中書、宗法

【卷之二十】此書の中書、宗法

【卷之二十一】此書の中書、宗法

【卷之二十二】此書の中書、宗法

【卷之二十三】此書の中書、宗法

五月十七日、天台山に在り、二十四日、萬年寺に到り、二十五日、雲を以て供ずる中、

雲霞の全身を現す。遂に石橋を渡り、忽ち青龍二頭を見る。是に基て感得する所あつて、

自ら前身菩薩にして、萬年に在りしことを信ず。二十七日、夜明州に還る。六月十日、青王

山に到る。神舍利を瞻禮し、光明 映耀するを感ず。凡そ瞻禮する所の處、皆妙よらず。

九月、歸朝、在宋生處、師以て歎と爲す。爾後十八年を歴たり。嗣して順帝二門の盟主と爲

す。嗣より是れ百宗には皆ち一心三觀の印を留て、密部には即ち入壇灌頂の證を授て嘗

て其師の法を傳ふたり。王居是が爲に崇奉す、特に遺、後世行念に勉む。師一日、勅を奉じ

て、勸勵の法を傳ふに修す。十指大光明を授て、一切の草木に輝耀し、天大いに雨

を降らす、蓮花臺上の雲中、悉く師の真像を見る。因つて特に菓上の戒を勉む。又慧王に

律いて知來の八大塔を拜せんと欲す。文治三年丁未、復宋國に入る。乃ち孝宗帝の尊嚴十

四年なり。上表して印度に達せんことを請ふ、許さず。嗣に三遺あり、其地時に皆蒙古に

屬して通ずることを得ざるが爲の故なり。因つて天台萬年に止る。在宋五年、三たび經

を聞る、天台萬年の第一世吉祥具尊者の遺教を更だ斂めて、塔表を造す、師の前身たるを  
以てなり、嘗て詩あり、曰はく、「海外精藍得得來、青山迎我笑顏開、三生未  
朽花骨、石上尋思掃綠苔、蓋し此時の作か。智者禪師の塔院を造す、衣資を捨て  
て土木を營す。萬年の三門兩廡缺けたら、尋いで興造す。天台山の千佛閣改作の事、師  
の力多きに居る、東皆之を美とし、功を勅して石に刻む。宋國の學士、有賢が撰すとの

【太白名山】 天台  
山の一名。

【兼て台密】 建  
仁寺に在り、密、禪  
の三宗を置き、又  
眞言、止觀の二院  
を攝ふ。

【重尋】 後乗坊、  
眞禪寺に入り、こ  
の坊に居り、眞言  
を學習す、源空に  
淨上をも學び弟子  
となる。

【法勝寺】 六勝寺  
の一、京都東山阿  
闍に舊蹟あり、今  
廢す。

【榮圃】 上野國  
良田長榮寺の禪圃  
【兼て山城】 阿闍  
法勝寺の天蓬源  
也。

【明全】 佛樹明全  
師、貞應二年永  
平の遣元等三人を  
率ゐて入宋し、天  
童山の了然齋に化  
す。

【高僧】 梅尾明全  
一人、來りて師に  
多じ、後に袈裟を  
着りて之を印可せ  
らる。

太白名山千佛閣の記、竝に都稅虞楊が述する所の日本同千光法師禪堂の記に詳かなり、共に載せて收めて太白名山に在り。宋國大いに没あり、君臣之を憂ふ。高僧數輩に詔して之を祈らしむ、效なし。師に請す。師に奉じて、一日の後疫已に除き、二日の後死するもの蘇す。帝嘉嘆して詔して曰はく、和尚、藥上と名く、是れ藥上の千釋迦の身を現するにあらずや。特に千光大法師の徽號を賜ふ。遍く宗匠に參す、皆再來の人を以て稱す。虛菴禪師に天台、天童兩山の意に従ふこと年あり、親しく其室に入つて佛心印を傳ふ、禪門の事、悉く皆授受す、明菴の法を立つ。辭して東歸せんと欲するに及んで、禪師自ら偈語數十紙を書して、以て贈つて之を證す。乃ち海東佛心宗流通の附屬、斯に在り。建仁二年辛亥に歸朝し、筑紫の諸州に在ること數年なり、尋で京に入る。建久二年壬戌、鴨川第五橋の畔に一禪刹を創す、建仁の號を賜ふ、一へに佛心宗を唱ふ。學徒雲集して、禪を習ひ定を修す、廣く菩薩の大戒を流へ、兼て台密の事業を修す、大いに梵行を興し、徧く道化を布く。黑白月毎に、布薩説法、闍如あることなし。久しうして都下、信じて之に歸す。東大寺修造の化主重源入滅し、朝廷、師に命じて事を主らしむ、以て成る。法勝寺九層の塔、災あり、亦人命を奪つて、再造を都監す。周防の州、三年の賦稅を收めて、以て備と爲す、功曩る。其餘の諸州、初聞の道場、中興の名刹、兼管の諸刹多し、悉く記せず。既にして教外別傳最上乘の宗を弘む。然るに南都北嶺の諸講院、頗る偏執のものあり、仍に誇りて且つ誹ふ。是に於て論三卷を撰し、經論の文を證して之を排す、日

【瑞岩】 泉涌寺開山律師、來りて密法を傳へ、且つ禪要を授けり。

【瑞岩】 瑞岩律師、惺は仲建律師。

【龍山】 七世の云云、明徳寺西一釋圓榮、明徳寺一龍山徳見、龍山一麟一。

【建仁】 一八七代、九龍能縣、建仁一七一代、中建龍惺一南聖。

【大木國云云】 初建仁は日本の高倉天皇は安三年なり、再建仁は日本の後鳥羽天皇文治三年なり、留ること五年、同天皇の建久二年秋歸朝す。

して、禪師の傳と曰ふ。以て、是に出つて言宗、天下に流布することを得たり。觀しく門に入つて法を得るもの、龍州、行勇、源祐、明全の輩出づ。其他門には、高辨、俊、真、及、其、音、密、一、門、に、出、づ、る、もの、勝、て、計、ふ、べ、か、ら、ず。抑、又、後、代、室、師、相、嗣、ぎ、並、び、興、つ、て、化、を、法、淵、に、進、に、す、る、の、日、に、就、て、嗚、乎、此、論、や、果、して、益、な、か、ら、ん、や。粗、其、大、略、と、し、て、以、て、後、世、に、傳、へ、る。

右の序未だ何人の作なることを考へず、適南聖朝の記する所の冊中に獲たり。舊本之を載せず、蓋し其時に出づるか。編師の、相去ること僅に二百年、其言猶是れ詳悉、亦以て得するに足るべきか。一二、記傳に異なることある所以は、想ふに其遺事を收拾するなるべし。當むらくは本論此序ある原本を據て、之を考訂せざることを、今卷首に附して、何ぞ刻む。朔、瑞岩惺の徒、實に觀師七世の孫なり。寶徳中、九淵縣と明國に入る、終を詳かにせず。

東叅識す

興禪護國論序

大宋國天台山智學日本國阿闍梨傳燈大法師位榮西跋

大いなるかな心や、天の高き極むべからず、而るに心は天の上に出づ。地の厚き潤るべ

【天台宗】 台州府に在り

【大法師】 三綱に當るの僧官

【天地我を得つ】 佛に「我」とは即ち心なり」とあり

【最上乘】 一佛乘

【般若實相】 即ち一切種智なり

【一眞法界】 一心を本源となすの意

【楞嚴三昧】 甚深にして一切、畢竟して堅固を得るをいふ

【正法眼藏】 人人具足、唯證道すること勿れと

【三輪八藏の文】 如來一代の經詮の致をいふ

【四樹五乘の旨】 旨とけり、來一代所證の法、四樹とは華嚴の法華、法華の法、人、人、華嚴、華嚴、佛の具

【大雄氏】 佛の具

【淨迦字】 淨迦字

【佛弟の略】 佛は

からず、而るに心は地の下に出づ。日月の光は暗ゆべからず、而るに心は日月光明の表に出づ。大千沙界は窮むべからず、而るに心は大千沙界の外に出づ。其れ太虚か、其れ元氣か、心は則ち太虚を包んで、元氣を孕むものなり。天地我を得つて覆蔽し、日月我を得つて運行し、四時我を得つて變化し、萬物我を得つて發生す。いなるかた心乎、言ひむことを得ずして強ひて之に名く。是を最上乘と名け、亦第一義と名け、亦般若實相と名け、亦一眞法界と名け、亦無上菩提と名け、亦楞嚴三昧と名け、亦正法眼藏と名け、亦涅槃妙心と名く。然れば則ち三輪八藏の文、四樹五乘の旨、打併して商の裏に在り。大雄氏釋迦文、其心法を以て、之を金色の眞陀に納へて、眞陀前傳と號す。是等の眞面、眞智の眞類に前んで、拈華千枝を開き、玄潭萬派に注ぐ。竺天の眞傳、善地の法流、東越を以て知るべし、室に先帝弘宣の法、法衣自ら垂ふ。巽聖傳行の義、眞傳ち己に實たり、法の體相、佛弟の綱に在り、行の眞儀、邪正の雜なし、眞に西來大旨、眞を南海に鼓し、眞を東川に鼓いてより以降、法眼、高僧に速び、牛頭、日輪に起る。眞を以て眞を傳して一生に眞傳す。外涅槃の律律を打し、内般若の智慧を傳す。眞は眞の眞、眞に眞に眞に授す、素臣、世を治むるの經を行は、緇僧、出世の道を弘む。因革の法、眞以て用ふ、五家の眞、眞敢て捨てんや。而るに眞を謗るものあり、謂うて眞の眞と爲し、此を眞なるものあり、謂うて惡取空と爲し、亦末世の法に非ずと謂は、亦手屈の眞に非ずと謂ふ。或

【法華】法華經に於て

【法華】法華經に於て

【法華】法華經に於て

【法華】法華經に於て

【法華】法華經に於て

【法華】法華經に於て

【法華】法華經に於て

【法華】法華經に於て

【法華】法華經に於て

【法華】法華經に於て

【法華】法華經に於て

【法華】法華經に於て

【法華】法華經に於て

【法華】法華經に於て

【法華】法華經に於て

【法華】法華經に於て

【法華】法華經に於て

【法華】法華經に於て

【法華】法華經に於て

【法華】法華經に於て

法華の斗符を賤んじて、以て未だ文を徴せずと爲し、或は我が佛性を輕んじて、以て衆を  
 興し、其れと爲す。是れ則ち法を持するものの法を滅し、我に非ざるものの我心を知らな  
 り、智願の宗門を亂ぐのみに非ず、抑々衆生の祖道を毀る。慨然悄然、是か非か、仍  
 つて三篋の大事を以て之を時哲に示し、一宗の要目を記して之を後昆に貽す。跋して三  
 帝と爲し分つて一門を立つ、之を興禪護國論と爲く。法王、仁王の元意に稱へんが爲の故  
 なり。唯、其の言中に違はざるを情んで、全く雜素の弄説を忘れ、臨濟の末代に謂はら  
 らんことを憶うて、論議の訛謬を恥ぢず。蓋しは傳燈の句、消することなうして、三會の  
 曉を照し、油臭の義窮らずして、千聖の世に注せんことを。凡そ厥題門文日は後に  
 死す。云ふこと固り。



【西波羅夷】以下二百五十條、極惡と譯す。  
 【十三條上波羅戶沙】僧殘と譯す。  
 【二不定法】突吉羅、本智不定定の故に。  
 【三十尼持名】捨墮、又は止捨と譯す。  
 【九十波羅提】墮と譯す、八宗八熱地獄。  
 【西波羅提提舍尼】十波羅上譯す。

興禪護國論 卷上

大宋國天台山留學日本國阿闍梨傳燈大律師位榮西述

令法久住門第一

第一令法久住門とは六波羅蜜に云はく、佛言はく、法をして久住せしめんが爲に毘尼戒を説く」と。大論に云はく、佛弟子に七業有り、一に比丘、二に比丘尼、三に提婆尼、四に沙彌、五に沙彌尼、六に優婆塞、七に優婆塞。論の五は是れ出家、論の二は是れ居家。文と。此七業清淨なれば、即ち令法久住す。其に因つて禪宗の禪者清規に云はく、蓋し毘尼を傳淨するを以て、方に盡く三界に洪範たり。然らば則ち禪宗の禪者清規に云はく、蓋し既に過を覆れ罪を防ぐに非ずんば、何を以て成就佛作祖せん、是故に四分律の四波羅夷、十三僧伽夷戶沙、二不定法、三十尼持名、九十波羅提、四波羅提提舍尼、一百學學、七波羅法、對經經の一切淨戒、十五四十八條の如き、讀誦功利して、善く持犯開遮を知れ。但今日の聖言に依つて推し、佛に明教に聽ふこと茲れ。文と。大論に云はく、此經若し滅せば、佛法則ち滅せん。東風の佛典と、佛典作に云はく、佛言はく、諸佛、戒を誦せずんば、其正法久しく住せず。文と。佛經經に云はく、佛言はく、舍利弗、是人無上の法

【一百衆學】 梁吉、衆法學隨習の

【三不淨戒】 菩薩戒の根本なり。攝律儀、攝善法戒、攝行有禁戒の三。

【十事】 不殺生等、四十八種戒、不敬師長戒等。

【持犯開遮】 止持止犯、遮犯、開遮。

【大經】 大涅槃經、僧祇律、摩訶僧祇律。

【大王】 舍衛國の波羅門王等の十六名に因玉。

【後時後分】 末法のこと。

【東北方】 支那、朝鮮、日本等を指す。

【頂相】 三十二相の中の頂上肉髻相

寶を捨て、罪に墮在す、是れ沙門の輪陀羅なり。舍利弗、其清淨の法は、是因縁を以て清淨に成就す、我久しく生業に在つて不善を受けて、成ずる所の菩提法は、諸の惡人、隨時毀壞す、其の如きの人ば、我即ち一滴の水を交ふる事を罷さず。文」と。梵網菩薩戒經に云はく、正戒を犯する者は、一切情心の善法を交くることを得ざれ、亦國王の地上に歩くことを得ざれ、國王の水を飲むことを得ざれ、五千の大鬼軍、常に其前に對つて、鬼、大賊と云はん、若し房舍城邑宅中に入らば、與、其跡を踏はん。乃至犯戒の人は、畜生と異なること無し。文」と。仁王菩薩經に云はく、大土、法長世の時、諸の比丘四部の弟子有りて、國王大臣多く非法の行を作し、世に佛法衆僧の興に、大非法を作し、諸の罪過を作し、非法非律にして、比丘を驚嚇するに、因縁の法の如くせん。爾時に當つて、法滅久しからず。文」と。大般若經に云はく、舍利子、我涅槃の後、後時後分の後五百歲に、甚深般若相應の經典、東北方に於て大いに佛事を爲さん。何を以ての故に。一切如來の共に尊重したまふ所、共に誦念したまふ所なり。彼方に於て久しきを絶て滅せざらしむ。文」と。此は扶律の禪法に依つて、法をして久住せしめらるるを明す。大法炬陀羅尼經に云はく、護法とは、謂ゆる法滅せんと欲する時、菩薩、中に於て方便護持して、法をして久住せしむ。此因縁を以て復頂相を得。文」と。仍つて合法久住門を立つ。

鎮護國家門第二

【威刑、治剪】刑罰鬻殺。  
 【大菩薩】菩薩四弘願六度行。

【四種の律義】姪盜、殺、妄の四波羅夷。  
 【般怛囉咒】經に具には摩訶薩陀經無上神咒と譯して大白傘といふ。  
 【心佛所念の神咒】前の般若經神咒を指す。  
 【悉地】成就、亦成菩提。

第二鎮護國安門とは、仁王經に云はく、佛、般若を以て、現在未來世の諸の小國王等に付屬して、以て護國の祕寶と爲す。文と、其般若とは神宗なり、謂く、境内に若し持戒の人有人らば、即ち普天共國を守護す云云、佛天王般若經に云はく、「般若を學ぶる菩薩、若し國王等と作らば貧賤の人行り、來つて罵詈辱せん、時に王、威刑を示さずして云ふ、『我は是れ國王、法皇に治剪すべし、即ち是念を作す。我往昔諸の佛世尊の前に於て、大持戒を發す、一切衆生、我皆救拔して阿耨耨提を得しめん。』』今願を起すときは即ち本願に違す。文と、四十二章經に云はく、『一人に飯せんよりは、一の善人に飯するに如かず、千の善人に飯せんよりは、一の五戒を持する者に飯するに如かず、萬の五戒を持する者に飯せんよりは、一の須陀洹に飯するに如かず、十萬の須陀洹に飯せんよりは、一の斯陀舍に飯するに如かず、百萬の斯陀舍に飯せんよりは、一の阿羅漢に飯せんよりは、一の阿那含に飯せんよりは、一の阿羅漢に飯するに如かず、十億の阿羅漢に飯せんよりは、一の十世の諸佛に飯するに如かず、百億の三世の諸佛に飯せんよりは、一の無念、無住無修無證の者に飯するに如かず。文と、謂ゆる無念等とは、是れ此宗の意なり、楞嚴經に云はく、『佛言はく、一、難、此四種の律儀を持して、陵辱して冰霜の如くにし、一心に我般怛囉呪を誦せよ。要す常に戒清淨の善を選択して、以て其師と爲すべし。新淨衣を著け、香を焚き、閉居して、此心佛所念の神咒を誦すること一百八遍、然して後に結界して、道場を建立し、悉地を求

【出入業畜】 關ち  
行住坐臥、身心を  
操持す。  
【摩訶】 西域の表  
敬式九字の一。

【正受】 三昧、譯  
して調直定。

【八萬四千】 衆生  
の眞業に應ず。

【二十八】 四方の  
紅なり、順なれば  
則ち福應じ、逆な  
れば則ち災應ず。

【白燈大師】 園城  
寺の上足、傳教大  
師の上足。

【慈覺大師】 北叡  
山の圓仁、傳教大  
師の上足。

【白法】 大法なり  
扶律談常。

【愚】 榮西自ら稱  
す。

速かに現前を得ん、道場の中に於て、菩薩の願を發し、出入澡浴、六時の行道、是  
の如くにして寢ねず、七日を経ば、我自ら身を現じ、其人の前に至つて、摩訶安慰し、  
其をして開悟せしめん、誦持の衆生は、火も燒くこと能はず、水も濡らすこと能はず、乃  
至心、正受を得ん、一切の呪詛、一切の惡星、魔を起すこと能はず、阿難、當に知るべし、  
是咒常に八萬四千那由他の金剛藏王菩薩の眷屬有り、一に皆諸の金剛衆有つて眷屬  
たり、晝夜高侍す、眞し衆生有つて、散亂の心に於ても、心に念じ口に持せば、是金剛王  
常に隨從せん、何に泥んや決定菩提心の者をや、阿難、是婆婆界に、八萬四千災變の惡星、  
二十八の女惡星有り、世に出現する時、或く災變を生ず、此咒ある地は、悉く皆消滅せ  
ん。十二山句、結界の地と成りて、雷惡災罰、よく入ること能はず。是故に如來、此咒を  
宣示して、未來世に於て、初學の諸の修行の者を守護す」と。文「禪院伍に修するは、  
此れは白傘蓋の法なり、國家を鎮護するの儀則かなり。智證大師の表に云はく、慈覺大師、  
在唐の日、を願して曰はく、「吾遙かに答教を抄つて、遠く白法を求む、然し本朝に歸るこ  
とを得ば必ず禪院を建立せん」と。其意専ら國家を護し、衆生を利せんが爲の故なり云云、  
愚も亦弘めんと欲する者は、蓋し是れ其聖行に従ふなり、仍つて鎮護國家門を立つ。

世人決疑門第三

第三世人決疑門とは二有り、一には知らずして迷惑するの疑、二には學者偏執の疑、問

【一分の機】 眼に佛を見るは一分の機は可發の義、衆生をいふ。

【彼上】 他方世界をいふ。

【現益】 出現利益

【西天】 天竺即ち印度。

【東扶】 東方扶桑國、即ち日本。

【況んや】 有縁の證を擧ぐ

【又】 然れども之が邪見を拒ぐの證

【後五百歳】 論には後五百歳像法の中に作る、第五の五百歳を指すの意か。

【畢竟空】 空の着すべきなきを云ふ十八空中の第九

うて曰はく、「或人云ふ、後五百歳の人は、鈍根小智なり、誰か此宗を修せんや」と答へて曰はく、「大聖、時を監て教を垂る、何ぞ凡情を恃んで之を推さんや。謂く、佛、昔紙園に住したまふこと二十五年、城中に九億の家有り、三億が眼に佛を見る、三億は耳に聞いて見ず、三億は聞かず見ず云云。然れども、佛一分の機に就いて八相を示し、或は舍利を遺し、或は教跡を留め、或は彼土にして聞くことを得、乃至通教たり。法住經に云はく、「佛言はく、阿彌、吾今久しからずして、當に波羅捺すべし、一切の佛事、皆已に究竟す。我應に度すべき者は、皆已に度し訖る、諸の未度の者も、皆亦爲に得度の因縁を作す。我已に外道魔軍等を降伏し、誓願を圓滿して、未來世の無上の佛眼を爲す」と。佛既に現益を究めざるか、今此神宗も亦爾り、若し縁有らば之を修せん、若し縁無くんば棄はじ。設ひ之を修せずと雖も、見聞觸知の縁、得脱の因と爲らん。類れば西天未だ必ずしも盡く修せず、中華、行はざる者あり、東扶も亦實に爾るべし。若し萬が一も能く之を行する人あらば、豈不可ならんや。若し諸人皆行ふべからずと言つて勸めずんば、曠地の二縁、俱に闕くる者か。況んや大般若經に云はく、「復次に舍利子、我涅槃し已つて、後時後分、後五百歳、是の如きの般若波羅蜜多甚深の經典、東北方に於て大いに佛事を作さん、乃至無量の善男女等、益を得ること思ひ難し」とし、抄又中論に云はく、「問うて曰はく、「何故に此論を造る」答へて曰はく、「佛滅度の後、後五百歳の中、人根鈍にして深、諸法に著し、決定の相を求む。佛意を知らずして但文字に著す、大乘法の中に、畢竟空と説くを聞いて、

【見と疑】 邪見と疑ふ也。

【釋して云云】 釋とは智者大師の釋

【諸佛の遺教】 名を絶し相を絶る。

【不淨物】 八不淨物、田疇、穢業、奴婢、群畜、金銀、象牙、刻鏤、銅鐵、谷餅。

【今家】 榮西自ら

【大經の部】 涅槃部八十卷

【扶律談常】 戒律を扶けて佛性常住の法を説くこと、

【乘戒】 乘は經、戒は律を云ふ一切の善法。

【常住命】 佛の慧命法身。

【弘法】 十條の戒を宣明す、具には止持行傳弘法、其心を傳ふこと、心即ち戒、是れ即ち扶律談常。

何の因縁の故に空なることを知らず、即ち見と疑とを生ず、何ぞ畢竟空の中に於て、種種の端を生ぜんやと。故に此中論を造るなり「文」と。天台宗の釋籤に云はく、「疑つて云、佛法早已に實を顯はす。涅槃何ぞ復權を施すや」と。釋して命を贖ふ重寶と云ふは、涅槃の十四に云はく、人の七寶を外に出して用ひざる、之を名けて藏と爲るが如し」と。是人其寶を藏積する所以は、未來の爲の故なり、謂ゆる數貴くして、賊來つて國を侵し、惡王に値遇するときは、用て命を贖ふが爲に、財の得難き時に、乃ち當に出し用ふべし。諸佛の遺教も亦復是の如し、末世の諸の惡比丘、不淨物を蓄ふるが爲に四衆の如來を畢竟して涅槃に入りたまふと説き、外典を讀誦して、佛經を教へざるが爲に、是の如き守の惡、世に出現する時、諸惡を滅せんが爲に、是經を説く事を爲す。是經若し滅せば、佛法則ち滅せん。今家引く意は、大經の部を指して、以て重寶と爲す。彼經部前後の諸文、皆扶律談常なるを以てなり。若し末世の中、諸の惡比丘、破戒乃至並に乘戒無くんば、常住の命を失はん。此經の扶律談常に頼り由らば、乘戒具足せん」と。天台宗の弘法に云はく、

「佛して後涅槃は、偏に末世に被る、帶方便の證なり」と。又止觀義例に云はく、「涅槃を用ふるは、法華に依つて成く一實に歸すと雖も、末世の根鈍、若し扶助無くんば、即ち正行傾覆す。正助相添うて、方に能く速く運ず、佛化尚涅槃を以て高と爲す。況んや末代の修行、助に非ずんば前まず、故に扶律談常、以て實相を顯す」と。法華經に云はく、「後の惡世に於て、乃至閻魔に在つて、其心を修攝して、一切の法は空なり。如實相なり」と

【安住不動】 是れ  
 與麼の境界なり。  
 【天台大師】 名は  
 智顛、隋帝、號を  
 智者と賜ふ。  
 【中道觀智】 十界  
 の諸法一一舉體、  
 即ち中道の外、更  
 に別法なし、能智  
 慧に絶して、境智  
 冥一、唯中道のみ  
 に非ず、空假融即  
 ち三觀圓妙、一三  
 一。  
 【一切の法】 諸法  
 實相なり。  
 【大品】 摩訶般若  
 【安樂行】 身安心  
 樂、能く行に  
 樂むこと。  
 【人及ぶ云云】 小  
 乘の法をいふ。  
 【是法中に】 是れ  
 法中の諸願。  
 【四行文】 身口意  
 相應の四安樂行。  
 【觀音】 愛時後分  
 後五百藏の文。  
 【法華】 後惡世末  
 劫中、佛來比の文。  
 【涅槃】 涅槃續命  
 重寶の文。

觀ぜよ。乃至常に樂うて是の如きの法相を觀じ、安住不動にして、須彌山の如くせよ。文と。  
 天台大師品ノ疏云はく、「觀は中道觀智なり、一切の法は十法界の境なり、乃至凡そ十  
 九句有り、初めの一句は總、後の十八句は、大品の十八空に對する文」と。又經に云はく、  
 「如來の滅後、末法の中に於て、是經を説かんと欲せば、應に安樂行に住すべし、若くは  
 口に宣説し、若くは經を讀まん時、人及び經典の過を、説くことを樂はざれ、亦諸餘の法  
 師を輕慢せざれ、他人の好惡長短を説かざれ。文」と。又云はく、「後の末世、法滅せんと欲  
 する時に於て、法華經を受持する者あらば、在家出家の中に於ては、大慈心を生じ、若  
 薩に非ざる人の中に於ては、大悲心を生じ、乃至我菩提を得ん時、隨つて何れの地に在  
 とも、神通智慧力を以て、之を引いて、是法中に住することを得しめん。文」と。此四行の  
 文、皆後末世の時と言ふ。然れば即ち般若、法華、涅槃の三經を樂すこと、皆末世坐禪觀  
 行の法要を説きたまふ。若し末代、機縁無かるべくんば、佛、此等を説きたまふべからず、  
 是を以て大宋國盛んに之を行ふ。之を知らざる者は、以て傳法流の相となす、非なり、巨  
 細は第五門に注す。

先に大般若經に、東北方と説くは、是れ震旦、高麗、日本なり。震旦は已に流傳し畢る、  
 高麗は法眼宗を傳ふ。唐の德詔國師、天台宗の書籍の關本を高麗、日本の兩國に求めし時、  
 高麗は禪宗興盛なり云云。翻國師入滅の後、三百年に及びり、又日本國は天平年中、唐の  
 道鏡、大安寺に在つて、禪宗を以て行表和尚に授く云云。傳教大師の語の文に云はく、「禪

【唐】機は時機

【唐】唐の人

【行表】天平十

【傳】傳授す

【傳】傳授す

【傳】傳授す

【傳】傳授す

【傳】傳授す

【傳】傳授す

【傳】傳授す

【傳】傳授す

【傳】傳授す

【傳】傳授す

【傳】傳授す

んで、其の遺縁を案するに、云はく、師は上京の大安寺傳燈法師位行表と。文。其祖瑠和

上、大唐より持し來つて寫し傳ふる達磨大師の法門、比叡山の藏に在り。延暦の初、大唐

國に向つて昇益す、真に達磨大師の付法を受く。大唐の貞元二十年十月十三日、天台山禪

林寺慈光の僧脩然、天竺大竺二國の付法の血脈、並に達磨大師の付法、牛頭山の法門等

を傳授す、正戴して持し來つて叡山に安す。文と。其後、今に四百年に及び、蒙西、此

宗の絶えたるを慨き、其後五百歳の藏に懸つて、廢れたるを興し絶えたるを續かんと欲

す。方と云ふ時と云ひ、已に佛説に據ふ、何處縁無しと言はんや、又彼如來の圓寂、周

の德王五十二年壬申の歲より、日本當今建久九年戊午の歲に至るまで、二千一百四十七年

たり。然れば今は是れ後五百の中の第一百年なり。天台大師云はく、後五百歲、遠く妙道

に法ふ。文と。華嚴大師云はく、末法の初め、教流行す、故に五百と云ふ。文と。今汝既

に機縁無しと云ふときんば、則ち本師の教勅に違し、亦般若を誘り復佛菩提を誘るなり。

大般若經に云はく、我正法具衆邪耶の中に於て、當に佛の諸の出家者あるべし。彼我を

稱して以て大師と爲すと雖も、而も其誘ける甚深般若に於て、誹謗毀壞す。善現當に知る

べし、若し般若を誘るときんば則ち佛菩提を誘ると爲す、若し菩提を誘るときんば則ち諸佛の一切相智を誘ると爲すと。文。上の文に云はく、一若し我具に正法を破する者は、當

【傳】傳授す

【傳】傳授す

【傳】傳授す

【傳】傳授す

【傳】傳授す

【傳】傳授す

【傳】傳授す

【傳】傳授す

【傳】傳授す

【傳】傳授す

【傳】傳授す

【傳】傳授す

【傳】傳授す

【傳】傳授す

【傳】傳授す



【方と云ふ】日本は般若に當ふ所の東北方に當る。

【蓮久九年】榮西五十八歳、此論を著る。

【善地】梵語にては須彌是。

【一切相續】舊に一切相續。

【地獄、餓鬼、畜生の三惡趣更に修徳を加へて四善趣と名く。

【影身】身形大小の別、身の輕重に因つて身に大小あり。

【佛覺】佛覺。

【佛覺】佛覺。

【佛覺】佛覺。

【佛覺】佛覺。

【佛覺】佛覺。

【佛覺】佛覺。

【佛覺】佛覺。

【佛覺】佛覺。

【佛覺】佛覺。

是れ則ち般若の誘するを謂ふなり。佛藏經に云はく、舍利弗、正法の中に於て、一切諸見の根本を拔斷し、悉く一切諸の語言道を斷じ、虚空に、手に觸觸無きが如くせよ。諸の

沙門の法、皆是の如くなるべし。文と。寶瓔珞經に云はく、無心にして意識を離る、是れ

沙門の法、諸根を守護する、是れ沙門の法。文と。是故に、設け華陀の典義を弘むとも、

智者は妨げず、汝等能く諸根を守つて、佛法の興隆を妨ぐるること勿れ。法華經に云はく、

一及以世間の發生產業、皆實相と相違背せず。文と。眞見示に云はく、如來、度人門の中に於

て、折斷して修得せよ。乃至一切三乘の經法を講ずることを得ざれ、若し誘せば即ち佛法

俗を誘じ、大菩提心を誘するなり。秘密藏中、一切の方便は、皆是れ佛の方便なるを以て

なり。是故に一一の法を毀るは、即ち是れ一切の法を誘るなり。乃至世間の治生產業、術

等の事、隨つて正理有つて、是佛の問證に相續する者は、亦誘することを得ざれ。何に況

んや三乘の法をや。文と。又文殊問經に云はく、未來の我弟子、二十部有らん、能く法を

して住せしめ、並に四果を得ん。三觀平等にして、不中上無きことを、譬へば海水の味

に異なること無きが如く、人に二十の子有るが如し。眞實佛來の所説なり。文殊師利、根

本の二部は、大乘より出で、般若波羅蜜より出づ。文と。又善見律等を按ずるに、云はく、

一佛、何を以ての故に女人を度せざるや、佛法の爲の故なり。正法本千年、女人を度するを

以て、五百歳を減ず。八敬法を修するを斷して過つて千年を滿す。然して後に佛法千年、

末法萬年なり。末法の中、五千年來は、三連智を擧し、並に四果を得、六千年後は、道果

【摩訶僧祇毘】 摩訶僧祇毘  
【佛滅後百年】 佛滅後百年  
【摩訶僧祇毘】 摩訶僧祇毘  
【又體毘】 又體毘  
【より十一部を出す】 より十一部を出す  
【これを合して二十】 これを合して二十  
【部と成る】 部と成る

【大乘より出】 大乘より出  
【實道より方便を施】 實道より方便を施  
【すが故に】 すが故に

【善見律】 善見律  
【沙律十八卷】 沙律十八卷  
【女人を云云】 女人を云云

【佛】 佛  
【或道の十四年に阿】 或道の十四年に阿  
【羅の三請に因つて】 羅の三請に因つて  
【父母大愛道を度し】 父母大愛道を度し  
【出家せしむ】 出家せしむ

【敬法】 敬法  
【比丘尼の】 比丘尼の  
【八敬法】 八敬法

【三達智】 三達智  
【三世通】 三世通

【作すべき所】 作  
【はもとむなり】 はもとむなり

【浄の法】 浄の法  
【浄は】 浄は  
【離る】 離る

【思益梵】 思益梵  
【心】 心  
【不立文字】 不立文字

【内外別傳なり】 内外別傳なり  
【五眼】 五眼  
【佛の】 佛の

【七日】 七日  
【一、日月】 一、日月

【七】 七

を得ず、萬年以後は、佛法を行ずること無く、經典の文字白然に滅盡せん。文と。汝是の如きの文義に背き、妄に論議を致して、流通を妨げんと欲すること、既に罪に背けり。大論に云はく、一切の論議は皆過罪あり、唯佛の智慧のみ諸の戲論を滅す。文と。法華に云はく、如来の出でたまふ所以は、佛性を説かんが爲の故なり。又云はく、今の世に作すべき所は、唯佛の智慧のみ。文と。凡そ如来出世の本意は、是れ衆生をして邪見を破し、大般若無諍の心に住せしめんが爲なり。天台宗の止觀に云はく、如来の教門は、人に無諍の法を示す、消する者は甘露と成る、消せざるは毒藥と成る。文と。弘決に云はく、如来の下は、佛教の本意は人に無諍を示す、諍は人の過なり、何ぞ法の非に問らん。今人に無諍の法を示さんと欲す、故に摩訶般若波羅蜜を説く。乃至今は則ち通じて以らく、佛法は大小皆本人に無諍の法を示すが故に、天の甘露の本長、生ならしむるに、徳は食して消せず、反つて諍をして促らしむるが如し。佛教も亦爾り、本通じて常住涅槃に至らしむ。諍を生ずるを以ての故に、反つて三途に入る。文と。思益經に云はく、諸佛の出世は、衆生をして、生死を出でて涅槃に入らしめんが爲にあらす、但生死涅槃の二見を度せんが爲のみ。文と。此等の文義に背く、故に般若を諍すと言ふなり。

問うて曰はく、或人云ふ、禪宗は不立文字ならば、則ち依憑なし、若し論議無くんば、帝王信容し難からん。又汝不肖の身を以て何ぞ禪く天堯を爲かすや。答へて曰はく、仁王經に云はく、我今五眼をもつて、明かに三世一切の國王を見るに、皆過去世、五百佛に侍

度を失ふの難、星宿度を失ふの難、火の難、雨水變易の難、惡風の難、充陽の難、惡賊の難。

【五大方】金剛呪、龍王呪、無畏十方呪、雷電呪、無量り呪。

【貞昌】貞の武宗の會昌三年。

【靈素】道士靈素

【受戒】天に告げて戒を傳ふ、後之と謂ふといふ。

【乞土】比丘の譯者をいふ。

【是人】持業修徳者をいふ。

【淨信を生云云】是れ淨信を信するなりと。

【玄奘の記】西域記七。

するに由つて、帝王と爲ることを得。是故に一切の聖人羅漢、爲に來つて彼國土の中に生じて大利益を作す。若し王福盡くれば聖人捨て去り、聖人其の時七難必ず起る。大王若し未來世、諸の國王、三寶の愛持する者あらば、我五大方菩薩をして往いて彼國を護せしめん。是五大士、五千の大德轉王、汝の國中に於て、大利益を作さん。大王、汝等皆、般若波羅蜜を受持すべしと云ふこと。是故に一切の國王、正法を聞くことを得れば、自然に信容す。況んや又佛法を崇めるの君王、誰か能く證を得て後に進行するや。其暴秦、典籍を焚き、僧尼、僧尼を害し、靈素、聖教を滅し、靈素、聖像を改む。兼に是れ羅漢の王を拜す、皆是れ惡國の流類なり。謂ふこと其れ、佛法無微にして國王信じ難しと。然らば愛國の君王は既に五百佛に侍する佛の乞土より來り、唯三四五の如來の所にして久しく勝因を植うるのみにせず、已に管て恆沙の諸佛の所に於て深く廣大般若の因を植えて、方に一句の妙法を解するなり。金剛般若經に云はく、佛言はく、一當に知るべし、是人は、一佛二佛三四五佛に於て、善根を種えしのみならず、已に無量千萬佛の所に於て、諸の善根を種えて、是章句を聞いて乃至一念淨信を生ずる者なり。文と。君王最も聽書すべし、仍つて天龍を觸がすに何の失か有らん。凡そ窮民の愁も、悉く救問に達す、況んや度縁を賜ふの僧をや。何に況んや榮西、法位に登るをや。玄奘の記に云はく、昔、中印度の教主國に三人の比丘あり、北方より來つて聖跡を巡視す、時に印度の諸帝、三僧を尊び、邊鄙の人なりと言つて寺中に入宿せしめず。謂ふ五印の僧は耳を穿つて環を繋ぐ、此三僧は耳を穿たず

【聖德太子】 印度

【白鳥】 本錦

【染衣】 袈裟を著

【月支】 或は月氏  
【一紙の宣】 弘宗  
の宣部

と。故に常に捕せられ、雨露に侵されて麻屣憔悴す。時に國王出て遊ぶ、忽ち三僧を見て怪しみ問うて曰はく、「何れの方の乞士にして是の如くなるや」と。答へて曰はく、「我は是れ北土祝貨還國の人なり、曾て二三の友物つて曰はく、妙理幽玄、言談の究むる所にもらず、聖跡現存す、聖蹟をば則ち罪を減すべし、爾は心を通じうして聖蹟に参詣すべし」と。契ひ了つて周旋して此に奉る。然るに印度の沙門、敢て善念あらざして、恠に我等を損棄す、因つて以て此の如しと云云。時に王其説を聞いて、悲感を増し、驛地に點じて御座を建立す。白鳥の上に題して曰はく、朕人中の至尊と爲る、斯皆一實の靈漸なり、爾に人王と爲れば佛の付囑を受く、凡そ厥染衣は朕當に惠濟すべし。此御座を建てることは、式て旅衆を招かんが爲なり、今より已後、諸の穿耳の僧、朕が寺に止宿する事を得べからず」と。冀なる哉此言や。仁王經に云はく、「是故に諸の國王に付囑す」と。又云はく、「五百佛に侍して、帝王と爲る事を得たり」と。又云はく、「大王、吾今一實を汝に付囑す」と。又云はく、「大王、我滅後未來世の中、四部の弟子、諸の小國王、太子は乃ち是れ任持して、佛法を護する者」と。厥れ東扶の王者は、中天の苗裔に非ずと雖も、北國の至尊は皆是れ南無の佛子、月支の大王、三僧の愁を聞いて已に一伽藍を建つ。日域の聖王、一貧の士に應じて、蓋ぞ一紙の宣を賜はざらんや。汝が妨難は是れ佛法を破するの因縁、國土を破するの因縁なり。是の如く説くこと莫れ。仁王般若經に云はく、「未來世の中、諸の小國王、四部の弟子、自ら此罪を作す、國を破する因縁なり。身自ら之を受く、佛法僧

【十六の大國王】異合諸國より大提國に至る。

【三品の法器】器  
み字は衍か、南北  
唐本になし。  
【善治】下に出す  
所の驅遣羯磨、  
貴羯磨等。  
【止】可否を決  
すべし。  
【毀逆】微細制小  
の義、或は陵夷と  
いふ。  
【驅遣羯磨】重罪  
除き、釋して棄  
所なり。  
【可責羯磨】輕罪  
【可責】には七場  
作を原す。

に非ず。大王未來世の中、此經を流通せよ。七佛の法器、十方の諸佛、常に行ずる所の道なり。諸の惡比丘、多く名利を求めて、國王の前に於て、自ら佛法を毀するの因縁を説かん。其王別たず、此語を信じ聽いて、横に法制を作つて、佛戒に依らず、其を佛法を破し國を破するの因縁と爲す。爾時に當つて正法時に滅せんとすること久しからず。爾時に十六の大國王、佛の所説を聞いて、悲啼激泣して、三千を勤す、日月五星、二十八宿、光を失つて現ぜず。時に諸の國王、各各至心に佛智を受持し、四部の弟子の出家行道を制せず、當に佛の教の如くすべし。文一と、涅槃經に云はく、「如来令無上の正法を以て、諸王大將軍及び四部の衆に付囑す。此諸の國王及び四部の衆、應當に佛の學人等を勸勵して、増上の戒定智慧を得しむべし。善し是三品の法器を學せしめて、善意破滅し、正法を毀る者あらば、國王大臣、四部の衆、應當に善治すべし。善男子、是諸の國王罪なし。文二と。佛已に教者と無上の正法とを諸の國王に付囑す、其自當に護止すべし、何ぞ奸心の妨を致すや。予、陵遲の禪を興さんと欲す、汝強ひて覆を未だ、護ひ小比丘は不肖なりと雖も、何ぞ佛法の非に關らんや。是れ則ち佛子、還つて佛法を護るなり。大涅槃經に云はく、「法を毀る者に於て、驅遣羯磨、可責羯磨等を興へよ、乃至善男子、如来、法を護する者の興に、是の如き降伏羯磨を作す所以は、諸の惡を行するの人に果報あることを示さんと欲したまふが爲の故なり。我涅槃の後、其方面に臨つて其或の比丘あり、威儀具足して正法を護持せば、法を壞する者を見ば、即ち能く驅遣し可責して懲治せよ。當

に知るべし。其人相を得ること無量、前出すべからざる事と。是故に 君王、偽事を不<sub>レ</sub>し  
て異<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>あらん。

問うて曰はく、或人云ふ、禪は諸宗通用の法なり、何ぞ別宗を建立するやと。答へて曰はく、通用の法を用て別稱を立つ、又一法を以て兩分と爲す、其例一ならず。謂ゆる律儀は、通用の法なりと雖も、而も今律宗を立つ。比丘戒は別途無しと雖も、而も五天、五部に分る。三藏は一途の法なりと雖も、而も十八部に分る。中論は直に一實論を説すれども、而も三論天台二宗の依憑となる。眞言は偏に密乘なれども、而も東寺天台の兩門を置く。何に況んや禪宗は諸教の極理、佛法の總府なるをや。別に一宗を立つるに妨げ無からん。茲に因つて傳教大師の内證 佛法相承 血脈譜に云はく、叙して曰はく、譜圖の興る、其來ること久し。夫れ佛法の源は、中天に出で、大唐を過ぎ、日本に流る。天竺の付法、已に經傳あり、震旦の相承も亦血脈を造る。我叡山の傳法、未だ師師の譜あらす、謹んで三國の相承を纂めて、以て一家の後葉に示すと云ふのみ。江崎大師の付法相承師師血脈一首、天台法華宗相承師師血脈一首、天台圓教菩薩戒相承師師血脈一首、胎藏、金剛兩曼荼羅相承師師血脈一首。文智證大師の教相同異に云はく、問ふ、祖傳へて云ふ、佛弟子に三類あり、謂く、禪師、律師、法師なり。今諸宗の中、何れの宗を以て何れの師とするや。答ふ、禪宗、天台宗、眞言宗を悉く禪師となす、自餘の諸宗を皆法師と爲す。然して此三類の師は、明法師の十輪經の略疏に見れたる者なり。問ふ、彼禪宗は、是を何の宗と爲るや。

譜圖

世系。

【八宗】華嚴、天台、眞言、法相、三論、律、俱舍、戒、實、論、資、師は模範資は取法。  
 【山上】比叡山。  
 【大師等】傳教慈覺等。  
 【九宗】初の八宗に禪宗を加ふ。  
 【案】案は魚をとるやな、跡は兎をとるやななり、何れも物を捕へ得るまごの具の意。  
 【心處】心位。  
 【俱舍を第九】彼次に第三法華宗、第四華嚴宗、第五無相宗、第六法相宗、第七毘尼宗、第八戒實宗、第九俱舍宗となす。  
 【顯密心の三教】顯教は諸乘の經律論密教は瑜伽灌頂五部護摩、三密曼陀羅の法、心教は直指人心、見性成佛の禪法。  
 【摩騰】中天竺の人、後漢の永平中に漢土に来る。支

護國論

答ふ、其宗は八宗の攝に非ず。問ふ、其宗の教相如何。答ふ、禪宗は金剛般若經、維摩經を所依と爲す、即心是佛を宗と爲す、所著無きを業と爲す、諸法空を境と爲す。佛世より始めて表鉢授受し、師資相承して、更に異途なし、具に傳記に出づる者なり。問ふ、此宗、誰か將來するや。答ふ、山上先、入唐求法の大師等、親しく此道を承けて歸國すと。文「安養和上の教時諍論に云はく、乃ち知る、三國の諸宗、興廢時あれども、九宗並び行はるること、乃至教理淺深に依つては、初めに眞言宗、大日如來、常住不變、一切時處に、一闍理を説きたまふ。諸佛の必需なり、最も第一と爲す。次に禪宗、一代禪師、多く案跡を施す、最後に心を傳へて經文に滯らず、諸佛の心處なり、故に第二と爲す。乃至俱舍を第九と爲す。文」と。大宋高僧傳取意に云はく、顯密心の三教あり、顯教は摩訶を初祖と爲す、密教は金剛智を初祖と爲す、心教は達磨を初祖と爲す云云一然れば則ち唐土日東、皆是の如く之を釋す。是に知んぬ、三國俱に九宗を行ふことを、然して此宗は梁代に起り、宋朝に獨んなり。陳隋の明匠、總別を諍はず、唐宋の賢皇並びに施行し、行表、傳教俱に之を傳へ、智證、安然同じく之を行ふ。後生繼に名字を聞いて、俄かに之を諍ふ、其恥誰にか在るや。

問うて曰はく、或人云ふ、宗を立つるは希代の事なり、汝其人に非ず、何ぞ大事を成さんと欲するや。答へて曰はく、釋尊滅度二千年前、恆沙の佛法と俱に闍寂し、南郭和須は第三付法の人なり、三藏各八萬と一時に滅亡す。爾より已來、教法時を遂うて減少し、

那沙門の始。

【金剛智】 跋日羅

善提、華に金剛智

といふ、南印度摩

頓耶國の人、唐の

開元己未歲に來る

【日東云云】 日東

の釋は血脈譜、教

相同異、教時淨論

皆言、禪宗あり

と。

【榮茂】 蕭梁の武

帝、昔、八、年達磨

帝府に到る、

【一眞】 眞實の理

【南嶽天台】 南嶽

は惠思、師、天台

は智者大師、

【三昧】 法華三昧

【五百に及べり】

後五百歳の時まで

斷ぜず

【羅刹】 達疾鬼、

又は可畏、暴惡、

【優波掘多】 或は

優波掘多、此には

大護。

【六比丘】 一に

闍維、二に迦留陀

戒行人に隨つて漏缺す、然れども馬鳴、龍樹一貫を證し、南嶽、天台、三昧を發す。法燈

四遠に煥き、戒行五百に及べり。若し凡卑に依つて聖跡を修せずんば、佛法豈命を盡がん

や、汝何ぞ禪法の絶えたるを悲ますして、強ひて人法の短を求むるや。法華經に云はく、

「亦佛道を學ぶ者を輕罵し、其長短を求むること勿れ。」文と。安然和尚の云はく、「己を揚げ

他を貶するは、未だ道を弘むと謂はず。」文と。大智度論に云はく、「自法愛染の故に、他人

の法を毀皆す。持戒の行人と雖も、地獄の苦を脱れず。」文と。眞言宗の大日經に云はく、

「云何が羅刹心、善法の中に於て不善を發起するを謂ふとは、如し人佛語を信じて、諸の塔

廟を造らんに、彼反つて謗じて云はん、無量の小蟲を損じ、施主を擾す、將に何の益する

所ぞ、當に苦報を受くべしと。是の如き不善心、是れ羅刹心なり、但功德利益を觀て彼の

短を求めざる。是を對治と爲す。」文と。首楞嚴經に云はく、「十方の如來、同一道なるが

故に、生死を出離するは、皆直心を以てなり、心言直きが故に。」文と。然れば則ち心言直

からずして、人法の短を求めば豈道を知る者ならんや。大智度論に云はく、「昔、佛の滅後

一百年、優波掘多あり、阿羅漢を得たり、時に闍維提の大導師たり、彼時に一の比丘尼あ

り、年百二十歳、年少の時佛を見る、匍多來つて佛の容儀を問はんと欲す、比丘尼、威儀

を試みんが爲に油を盛れる鉢を扉の裏に著く、匍多來つて入る時、徐に戸を排すれども油

少し棄る、既に入り畢りて、坐して佛の光明を問ひ乃至比丘の威儀を問ふ。比丘尼答へ

て曰はく、「佛在世の六群比丘は弊惡の比丘なり、而も威儀法則は汝に勝れり、行住坐臥、



【赤雲の比丘】 薄易怒の貌。

【二人は天上】 二人は漏盡を得て無餘涅槃に入る。

【一心先心】 發心單覺の先心、即ち發心。

【希代の事】 建立一宗の希代の事。

【名記】 僧正等の位。

【太公】 冨尙。【半偈をも】 涅槃經十箇に雪山童子半偈を求むる爲に身を羅刹に投ずる事あり。

【輝映】 輝映は光色互に相映暉す。

【鏡中の寶】 眞金皮囊臭。

【皮囊臭】 眞金と雖も、亦佛の想を生ずべからず。

【蜀錦主を問はず】 蜀錦自ら美、之を裁する人に由るに非ず。

護國

法則を失はず、六羣尸に入るとき油を棄てしめず、汝は是れ六神通の阿羅漢なりと雖も、彼に如かずと聞いて、大いに自ら慙愧す。文と。然も佛在世の六羣の中、二人は龍趣に墮し、二人は天上に生ず、而今優波鞠多是則ち四果を得たり。然らば末代は一戒をも輕んずべからず、況んや利生の心、佛意に背かずんば、則ち佛と何ぞ別ならん。大涅槃經に云はく、「發心と畢竟と二、別なし、是の如き二心、先心は難し、自ら未だ得度せずして先づ他を度す、是故に我初發心を禮す。文」と。希代の事たりと雖も、又不肖の身たりと雖も、大悲の行願を以ての故に、先聖の跡を逐はんこと妨げ無からんか。況んや末代は具器無しと雖も、其名記を置くの例一ならず、若し太公を待つて宰相と爲さんと欲すとも、而も千載、太公無く、羅什を得て師範と爲さんと要すとも、而も萬代、羅什無し。其佛法は半偈をも賤しんぜず、何ぞ強ひて人を嫌はんや。予既に傳燈の職位に登る、廢を興すの儀、何ぞ勸許無からん、庶はくは熱察せよ。」

問うて曰はく、「或人云ふ、古代の祖師は、各皆大權の菩薩なり、汝既に異徳なし、畢竟を興すことを許さんや」と答へて曰はく、「輝映未だ現せずと言つて、鏡中の寶を捐へんや。皮囊臭しと言つて、亦金を捐つべからず。蜀錦、主を問はず、檀椰只味を取らぬのみ。禪宗は獨り法を説いて人を度するのみ。況んや末代の佛法、多くは密益を以て事と爲す、必ずしも變通を求めず。今難する所は、予一人の恥に非ざるか。謂ゆる世尊昔毘蘭若婆羅門の請を受くる時の如き、婆羅門、魔弊に爲つて、佛を請するの誠を忘れて、終に佛を誑せず、

【變通】 變通は十

【摩訶】 困惡を弊

【王舍城】 中印度

【聚落】 衆の共

【馬麥半分】 律に

一日に比丘に馬麥

五升、世尊に一斗

【貧頭盧】 不動と

翻す、姪を頗羅陞

世尊、五百の比丘と俱に其處に詣る。夏已に至るが故に王舍城に歸ること能はず、其聚落の村に留る。時に飢饉に遭うて乞食するも得難し。時に波利國の馬師、五百匹の馬を將ゐ來る。偶、佛及び弟子の飢饉を見、馬師即ち馬麥半分を施して五百の比丘に與へ、但佛に一斗を施す。爾時に口連、佛に白して言さく、「我北俱盧洲に往いて、自然粳米を食はん。佛、日連に告げたまはく、「汝は神力あり、爾すべし、凡夫の比丘當に之を如何すべき一日連白して言さく、「我神力を以て之を接して往かん。佛言はく、「止みね止みぬ、汝は神力あり、將來の諸の凡夫の比丘如何せん」と。文。又貧頭盧尊者、施主の爲に神通を現す、佛、貧頭盧を誦書して言はく、「汝何ぞ一食の施主の爲に神通を現するや、譬へば釋女の半錢の利の爲に、人に己が餘處を示すが如し。我汝を罰す、減度を取ること勿れ。世間に住して應に末世の福田と爲るべし。取」と。竝に是れ如來、末世の比丘の爲に、此制を作したまふのみ。昔、彭城王、牛頭山の法融禪師傳教大師のを責むるが如きは、其王、後友を見て還つて歸伏す。凡そ冥靈の靈驗、誰か先識有ることを知らんや。

問うて曰はく、「或人云ふ、此宗不立文字と言はば、痴情の輩は聖教を學ばずして、還つて佛法を滅せんと。答へて曰はく、「觀佛三昧經に曰はく、「如來を觀せんと欲せば、未來世中、諸の弟子等、應に三法を修すべし、一には修多羅甚深の經典を誦せよ、二には禁戒を淨持して、威儀犯すこと無かれ、三には繫念思惟して、心、散亂せざれ。文」と。是故に此宗は、學八藏に互り、行六度を兼ぬる者なり。若し禪宗は即心是佛なりと言つて、教

【夜曉に云云】暗證の徒、未だ慧明を具へざるに喩ふ除標とは聖教を除棄して邪見を逞しうす。  
 【輪祖に墮す】惡道に墮墮す。  
 【獅子は人を】有獅子の用。  
 【狂狗は地を】無獅子の作。

跡を伺はざれば、何ぞ夜、曉に當つて雨も未だ明ならざるに、燭を除いて輪祖に墮するに異ならんや。」

問うて曰はく、「或人云ふ、傳教大師の末法燈明記に云はく、「末法には持戒の人なし、若し持戒の者ありと言はば、是れ謬なり、譬へば市中に虎あるが如し」文」と、「答へて曰はく、「大般若經に云はく、「獅子は人を咬み、狂狗は地を逐ふとは、是れ此謂が、汝何ぞ文字言句の地を逐うて永く持戒修善の人あることを忘れたる。直く聖教の施設を見るに、遠く衆生の善業を噬みたまふ。大般若經に云はく、「後五百歲」文」と、「小教淨業經に云はく、「末法の闍命」文」と、法華經に云はく、「於後末世」文」と、大論、中論、摩訶止觀之に同じ。金剛般若經に云はく、「後五百歲、戒を持し福を修する者あつて、此章句に於て能く信心を生ぜん。當に知るべし、是人、一佛二佛三四五佛に於て善根を種うるにあらず、已に無量千萬部所に於て諸の善根を種えて、是章句を聞いて乃至一合、淨信を生ずる者なり」文」と。竝に末世の戒行を勸むるなり。凡そ如來の戒口、皆末世に冠するか。禪師の對舌、併せて今より後の實なり。傳教大師の釋、意を得べし、或は彼は小乘の律儀戒ならん。大乘の菩薩戒を講ふに基ざらん。」

問うて曰はく、「或人難じて云ふ、何故ぞ、禪宗新に令法久住と稱するや」と。答へて曰はく、「戒律は是れ令法久住の法なり、今此禪宗、戒律を以て宗と爲す、故に令法久住の義を立つるのみ。天台宗の止觀に云はく、「凡夫に教漏して、賢聖に呵せらる、惡を破するは淨

【普賢觀】 具には佛說觀普賢菩薩行法經。  
 【妙勝定】 明藏麗藏、此經を教めず。  
 【四重】 淫盜殺妄是れ根本戒。  
 【方等】 大方等陀羅尼經四卷。

慧に由り、淨慧は淨禪に由り、淨禪は淨戒に由る。文と。問うて曰はく、「或人難じて云はく、何故ぞ此宗對り鎮護國家の法たるやと。答へて曰はく、「四十二章經に云はく、「爾時に世尊、既に成道し已つて是思惟を作したまふ、離欲靜寂、是を最も勝れたりと爲し、大神定に任して、諸の魔道を降し、令法輪を轉じて衆生を度す。文」と。遺教經に云はく、「此戒に依因すれば、諸の禪定及び善を減するの智慧を生ずることを得。文」と。是に知んぬ、禪力に非ずんば一切の惡破し難きことを。問つて此宗を以て鎮護の大要と爲るのみ。問うて曰はく、「禪宗何を觀して戒行を觀むるや。答へて曰はく、「涅槃の扶律顯常の意なり。遺教經に云はく、「戒に依つて禪を生じ慧を生ず。文」と。天台の止觀に云はく、「慧を破するは淨慧に由り、淨慧は淨禪に由り、淨禪は淨戒に由る。文」と。問うて曰はく、「若し觀らば、破戒の人、悔心を生せば、後還禪を得んや否や。」答へて曰はく、「大涅槃經に云はく、「懺悔を名けて第二の清淨と爲す。文」と。修禪要決に云はく、「若し大乘の中には但能く心を息むる即ち眞の懺悔なり、故に障滅し戒生ず、故に禪定を得。文」と。天台の止觀に云はく、「普賢觀に云はく、端坐して眞相を念ず、是を第一の懺と名く。妙勝定に云はく、「四重五逆、若し禪定を除いて、餘は能く救ふことなし。方等に云はく、「三歸五戒、二百五十戒、是の如く懺悔して、若し還生せずといはば、是處有ること無し。文」と。是故に此宗は、戒を以て初と爲し禪を以て究と爲す。若し破戒の者も、悔心止惡せば即ち禪人と號せん。況んや大悲心に任せば則ち一切の戒品智慧、開發せざること無し。是故に此宗は大悲を以て本

【超日月三昧經】  
三卷、西晉信士譯  
承遠譯す。

【四事】 身、口、  
欲、座、死、魔、天

【六下】 禪宗與隆  
の職宣。

【覺德比丘】 持教  
の比丘。

【有德王】 兵を起  
して覺德を救ふ、  
覺德は迦葉佛、有  
德は釋迦如來。

興神護國論卷上終

と爲す、何の罪か滅せざらんや。菩薩瓔珞經に云はく、善男子善女人、初發意より菩薩心を修し、禪定の中に於て復當に六度を具足すべし。文と。超日月三昧經に云はく、「佛言はく、魔に四事あり、乃至意止み意斷すれば、魔則ち降伏す。其四魔とは皆心山り生ず、外より來るにあらず。文」と。是故に大乘は心息めば、戒生じ禪定を得。問うて曰はく、「何故に強ひて宣下を望むや。」答へて曰はく、「佛法は、必ず國王の施行に依つて流通せしむべし。是故に佛慈愍に國王に付囑したまふり又王の行も復莫大なり。大法炬陀羅尼經に頂上肉髻光明の業因を説いて云はく、過去無數阿僧祇劫、一に善根あり、一に嫉妬を遠離し教示に隨喜す、二に他の爲に作す時、果報を求めず、三に他を壞損して以て己が善を成さず。復二法あり、一に護法、二に善法。護法とは謂ゆる法滅せんと欲する時、菩薩中に於て方便護持して、法をして久住せしむ。此因縁を以て復正相を得、善法とは喜辭、四衆の行に説法する時、若し一念忘失する者には、隨順重説するなり。文」と。大涅槃經に云はく、「我護法の故に金剛心を得たり等。文。覺德比丘、有德王の因縁、此中に眞に眞に云くべし。」

興禪護國論 卷中

【第三門の餘】世人決疑門未説盡之餘、重ねて論ず。【惡取空】成唯識に云はく、二諦を撥無する、是れ惡取空。【暗證】聞なく、慧なきをいふ。【増上慢】他人を慢る。【大海の底】性清淨なるが故に。【圓位に依り】凡を轉じて聖に入る。【圓頓を修り】體漸成に非ず、故に名けて頓と爲す。【圓信】信は位のをいふ。【盲禪】暗證の禪をいふ。【自心】自心とは法界。【一旨】一乘。

第三門の餘、問うて曰はく、「或人云ふ、此宗既に不立文字と言ふ、是れ殆んど惡取空、並びに暗證の類に同じ。若し爾ら天台宗に之を破す。謂ゆる止觀に、觀不思議境を釋して云はく、「暗證の禪、論文の法師の知る所に非ず。文と云義に云はく、「若し觀心の人心に即して是、已、則ち伸に均しと謂つて、都て經論を尋ねずんば、増上慢に墮せん。此れ即ち炬を抱いて自ら焼くなり云云」釋義に云はく、「暗證の炬を把つて、勝定の手を焼くなり。文と。此禪宗不立文字ならば、何ぞ此禪を免れんや。答へて曰はく、「此禪宗は、其暗證の禪を惡み惡取空の人を嫌ふこと、宛も大海の底に死屍を厭ふが如し。但圓位に依り、圓頓を修し、而して外は律義にして非を防ぎ内は慈悲にして他を利す、之を禪宗と謂ひ、之を佛法と謂ふ。盲禪惡取の輩は此義無きのみ。即ち是れ佛法中の感か。宗鏡錄に云はく、「一理、實に緣に應ずれば、事を礙ふるの理無く、事は理に因つて立すれば、理を失するの事なし。如今圓信に入らざるの者、皆自ら下凡なりと鄙んじて、遠く極聖に推す、斯れ乃ち唯事を失ふのみにあらず、理も亦全く無し。但一心無礙自在の宗を悟らば、自然に理事融通し眞俗交徹せん。若し事を執して理に迷はば、永劫沈淪せん。或は理を悟つて事を遺すは、此れ圓證にあらず。何となれば理事自心を出でず、性相寧ぞ一旨に乖かん。

【六觀】 理即、名  
 空即、觀行即、相  
 似即、分證即、究  
 竟即。  
 【狂慧徇文】 相  
 を執し性に迷ひ、文  
 を逐ひ句に溺るる  
 もの、一心は前に  
 所謂一心無礙の宗  
 を止といひ、寂然  
 を止といひ、寂性  
 寂照を觀といふ。  
 【巧喪】 絶待なり  
 【止息の止】 妄想  
 分別して、休息す  
 入息數繩等。  
 【停止の止】 空假  
 中の三大をいふ。  
 停は心を論理に終  
 じておせず。  
 【不止の止】 止觀  
 に一無明も亦止に  
 非ず、不止に非ず  
 而も無明を喚んで  
 不止と爲す。  
 【穿穿の觀】 穿鑿  
 し究め來り究め去  
 る。  
 【觀達の觀】 觀智  
 通達して眞如に契  
 會す。  
 【不觀の觀】 實相  
 不觀をいふ。又無

若し宗鏡に入つて、頓に眞心を悟らば、尙非理非事の文なし。豈若輩若事の執あらんや。但本を得るの後、亦圓修を廢せざれ、盲禪暗證の徒の如きは焉んぞ六即を知らんや。狂慧徇文の士は奚ぞ一心を識らん。如今但先づ圓信疑ひ無からしめて。自ら觀行の位に居せん。古人云はく、「一生に辨ずべしと。豈虚しく言はんや。文」又云はく、「一旨教に二種の止觀を明す、一に相待止觀、二に絶待止觀、巧度なり、相待に三止三觀あり、三止とは一に止息の止、二に停止の止、三に不止の止。三觀とは一に觀穿の觀、二に觀達の觀、三に不觀の觀。絶待に三止三觀あり、三止とは一に體眞止、二に方便隨緣止、三に息二邊分別止。三觀とは一に從假入空觀、二に從空入假觀、三に中道第一實觀。今宗鏡は唯一心圓頓の旨を論ず、圓頓止觀の如きは、止を以て諦に緣すれば、一諦にして三諦、諦を以て止に繋ぐれば、則ち一止にして三止、觀を以て境を觀すれば、則ち一境にして三境、境を以て觀すれば、則ち一觀にして三觀、摩醯首羅の面上の三日の如し。是れ三日なりと雖も、而も是れ一面、一を擧すれば即ち三、三を完うして是れ一、縦ならず横ならず、鉅ならず別ならず、前の諸義を總べて、皆一心に在り、其相如何等。文」と。是に知んば、此宗は暗證に非ず、亦惡取空に非ず、亦假名の法に非ざることを。

問うて曰はく、「或人妄に禪宗を稱して、名けて達磨宗と曰ふ、而して自ら云ふ、「行も無く修も無し、本煩惱なし、元是れ苦畏、是故に事戒を用ひず、事行を用ひず、只應に偃臥を用ふべし。何ぞ念佛を修し舍利に供じ、長齋節食することを勞せんや」と云ふ。此義如何。」

【明喚喚】下觀となす

【無明顛倒】無明顛倒の妄、即ち是れ實相の眞に轉ずる方便隨止す縁に隨ひ境を屏るも安心して動ぜず

【息二分別止】生死涅槃、有無等の二邊を分別せず二邊は空假

【從假入空觀】事上に從つて解脫を得る、二諦觀といふ

【從空入假觀】却本的、平等觀

【中道第一義觀】亦即來的と名く、涅槃及び生死をも見ず

【摩訶般若】此に大自在、或は以靈帝と翻す、色頂天王なり、一面三目

【根義】正法の根本因縁、又は衆生の根縁

【盲無眼の者】愚人に喩ふ

【隨自意】聖者

【隨自意】聖者

答へて曰はく、其人は惡として造らざること無しといふの如なり。聖教の日に空見と言ふ者の如きは是なり。此人と共に語り同座すべからず、竊に自由句を避くべし。寶雲經に云はく、「寧ろ我見を起して、積んで須彌の如くすとも、空見を以て、増上慢を起すこと莫れ。所以は何んとなれば、一切の諸見は空を以て脱することを得、若し空見を起すときは則ち治すべからず」と。古徳云はく、「州空の禪師は、日無くして行いて、火坑に墜落する者の如し。文字の法師は、迦鞠の人語を能くして人情無きが如し。然れば禪宗は、佛の法藏を學し佛の淨戒を持す、故に之を佛禪と謂ふ」又天台宗の止觀に云はく、「淮北河北に大乗空を行ずる人あり、禁なくして蛇を捉ふる者あり。今當に之を説くべし、具先師、善法に於て觀を作す、久しきを経て徹せず、心を放つて惡法に向つて觀を作す。少定心を獲て薄く空解を生ず、根縁を識らず、佛意に達せず。純ら此法を將て、一向他に教ふ。他に教ふること既に久しくして、或は一兩益を得る者に達ふ、蟲の木を食うて、偶字を成すことを得るが如し。便ち以て證すと爲す、是を實事と謂ひ、餘は妄語と爲す。持戒修善の者を笑ひ、謂つて非道なりと言ふ、純ら諸人をして遍く衆惡を造らしむ。盲無眼の者、是非を別たす、神根又鈍く煩惱復重し。其所説を聞いて、其欲情に順ず、皆信伏隨從して禁戒を放捨し、非として造らざること無うして、罪山岳を積む。遂に百姓をして之を忽にするこ」と草の如くならしむ。國王大臣因つて佛法を滅す、毒氣深く入つて今に未だ改めず。此れ乃ち佛法滅の妖怪、亦是れ時代の妖怪なり、何ぞ隨自意の意に關らん。何を以ての故に。



【本師】 邪見の師

【禪法の云云】 こ

れは禪宗の禪に非ず、天台禪、觀の禪。

【無憂】 無修無證

【結使】 煩惱の義

【諸善律儀】 三聚淨戒。

【良田】 報恩經に云く、「衆僧は三界を出づるの福田。」

【世禪】 世間禪、出世間禪、上上禪。

【三諦】 眞、俗、中なり。

【法橋上人位】 僧官。

【奇祭】 永觀年中入宋す。

【魚魯】 辨じ難きを云ふ。

此の如き愚人は心に慧解無し、其本師を信じ、又前途を慕ひ、決して是れ道なりと謂ひ、

又情に順ずるを易と爲す。心を恣にし樂を取つて迷を改めず。文」と。是れ即ち淮北河北

に昔狂人あり、僅に禪法の殊勝なるを聞いて其作法を知らず、只自恣に坐禪して事理の

行を廢し、以て邪見の網に繋るの人なり。此人を號して愚取空の師と爲す、是は佛法中の

死屍なり。宗鏡錄、一百二十見を破する中に云はく、「或は無礙に徹つて修行を放捨し、或

は結使に隨つて本性空を恃む。並に是れ宗に迷ひ旨を失ひ、湛に昔き眞に垂き、氷を敲い

て火を索め、木に縁つて以て魚を求むる者なり。文」と。此れ即ち無行の人を惡むなり。況

んや禪戒を捐て、眞智を非とするの人をや。道宣律師云はく、「夫れ以れば禪那三昧を修

せざれば、長く眞智の心に垂き、諸善律儀を習はざれば、以て其勝行を成し難し。是を

以て古今の大徳、實に世に良田たり。文」と。加之、天台宗の弘決に云はく「若し事戒無

くんば世禪尙無し、況んや三諦をや。文」と。是故に禪宗は戒を以て先と爲す。禪苑清規に

云はく、「參禪問答、戒律を先と爲す。云云。」

問うて曰はく、「或人云ふ、法橋上人位僧然、入唐歸朝して、三學宗を建立せんと欲す、

諸宗の訴に依つて廢せられ已畢る。此宗と同異如何。」と。答へて曰はく、「名字已に殊な

り、魚魯に及ばざるか。且つ奮然の意を知らず、今の禪宗は清淨如來禪なり、三學の

名字無し、梁朝已來、只一宗と號するのみ、更に別號無く異教無し。」

問うて曰はく、「或人云ふ、念佛三昧は教無しと雖も天下に流行す、禪宗何ぞ必ずしも教

無しと雖も天下に流行す、禪宗何ぞ必ずしも教

無しと雖も天下に流行す、禪宗何ぞ必ずしも教

無しと雖も天下に流行す、禪宗何ぞ必ずしも教

無しと雖も天下に流行す、禪宗何ぞ必ずしも教

を望まんや」と。答へて曰はく、「佛法は皆國王に付屬す、故に必ず應に教に依つて流通すべし。又余佛宗は聖皇敎して天王寺に置く云。今尊卑の全佛は是れ其餘黨なり、禪宗争か施行の道を専らざらん。」

問うて曰はく、「或人云ふ、天下、八宗を流行す、何ぞ九宗有らんや。」答へて曰はく、「安然和尚の察時討論に云はく、「三國の禪宗、興慶時有れども九宗並び行はる。文」と。智證大師の云はく、「禪宗は是れ八宗の外なり」と。三國九宗の名字、檢して之を知るべし。」

問うて曰はく、「非禪宗は戒、定、慧の中に於ては何れぞや。」答へて曰はく、「是は是れ如来禪なり、不立文字の宗なり、與へて之を言はば諸大乘に通ず、奪つて之を言はば心意識を離れ言説の相を離る。」

問うて曰はく、「若し諸大乘に通せば、何ぞ別に立つるや。」答へて曰はく、「佛言はく、「我意異相無し、衆生の誤性に隨つて、獨り異相を爲す。文」と。如来の方便、祖師の意業、佛いぞ之を信すべし。問覺禪の序に云はく、「直道二無し、學に殊有るが故に、佛老、道を語るときは則ち同じく、術を論ずるときは則ち異なり。文」と。三論中吉藏の中論の疏に云はく、「諸大乘經、道に異なきことを顯す、道既に二無くんば、教豈異ならんや。文」と。異無しと雖も術を以ての義に別に之を立つるに咎なし。況んや梁の代に起り宋朝に傳んなり、何ぞ能く後生、總別を論ぜんや。」

問うて曰はく、「若し爾らば此宗、所依の經論有りや。」答へて曰はく、「與へて之を論せば、

【直道】直心是れ道也

一大藏教、皆是れ所依なり、奪つて之を論せば、一言の所依無し。」

問うて曰はく、「或人云ふ、千餘卷の書籍ありと如何。」答へて曰はく、「禪人の講録なり、世間の抄出の如し。若し禪宗の依憑有りと言はば、譬へば羸毛兕角の常に無なるが如し。

但し甚深の旨歸無きに非ず、智者之を思へ。」

問うて曰はく、「若し爾らば甚深の實相は凡夫の行業は及び難し、何の方便を以てか行じ得てんや。」答へて曰はく、「遺教經に云はく、「此戒に依因すれば諸の禪定及び善を滿する

智慧を生ずることを得、是故に比丘、當に持戒清淨にして毀缺せしむること勿るべし。

若し淨戒無くんば、瞋善の功德皆生ずることを得ず。是を以て當に知るべし、戒は第一安穩功徳の住處たることを。」文と。梵網經の序に云はく、「持戒を平地と爲し、禪定を屋宅と爲して、能く智慧の光を生ず。」文と。法華經に云はく、「我説す、是の如きの人は淨戒を修持するが故に。」と文。天音宗の止觀に云はく、「淨戒は淨戒に由る導文」と。又大經を引いて云はく、「尸羅不淨なれば、遠つて三途に墮す、禪定智慧、初發することを得ず。」文と。

首楞嚴經に云はく、「若し經を誦せずして禪定を修する者は、沙石を煮して其飯を成さんことを欲すれども、百千劫を経て只熱沙と名くるが如し。乃至三途に輪轉して必ず出づること能はず、如来の涅槃何れの路よりも修證せん。我此説の如きは名けて佛説と爲す。此説の如くならざるは即ち波旬の説なり。」文と。其れ佛法は、持戒を以て先と爲す、若し佛戒を破して佛子と號する者は、譬へば國王の臣の生命に類はすして王位と稱するが如し。

【波旬】正には波卑夜といふ。此には波は悪者。

【三學】戒、定、  
 【五】無漏の五  
 戒、五分法身  
 戒、定、香、惠香  
 香、解脫香、解脫智見

大涅槃經に云はく、「阿難、佛に白して言さく、佛滅度の後、誰を以てか師と爲ん、佛言はく、戒を以て師と爲よ。支」と。況んや三學五蘊、皆戒を以て初旨と爲るをや。是故に此宗は、佛戒を以て師と爲す。之を行じて之を得たり。要を取つて之を言はば、一切の邪見悉く破し種種の魔業兼治す、法を衆人と爲ふ。其魔業とは海慧經に云はく、「爾時に海慧菩薩、佛に白して言さく、世尊、我今十二の魔鉤を説かんと欲す、一に菩薩、愛する所を施さず、二に破戒の人を見ては惡み賤んず、三に身口を忍べども意忍びずして高慢、四に衆生を化して二道に入らしめ、徒勞を好む、五に四禪より起つて還つて欲界を見て、長壽天に生じて百千佛の出でたまふを見ず、六に智未だ熟せざるに尚も五波羅蜜を興り、般若の心を讀んで還つて邪路に墮す、七に阿蘭若を好んで他を利せず、八に衆生の授くるに堪へたるに法を授けず、九に外道の論を聞いて佛法を覆藏す、十に惡友を以て善知識なりと謂ふ、十一に真高にして、師信父母にも心摧伏すること無し、十二に富貴にして耐心怠慢す。意」と。寶童子經に云はく、「佛言はく、修行の菩薩に三種の實語有り、一には諸佛如来を誑せず、二には一切衆生を誑せず、三には自身を誑せず。謂く、菩提心を發して復小果を樂はず、復種種の苦惱に値ふと雖も驚かず動ぜず、是を佛及び衆生並に自身を誑せずと爲す。復四法あり、如來を誑せず、一には堅固心、二には威力心、三には勢力心、四には持戒精進、衆生を誑せざるに四法あり、一には堅牢修學、二には慈心樂を與へ、三には悲心苦を憐み、四には衆生を攝取す、自身を誑せざるに四法あり、一には堅固心、二に

は重復堅固心、三には無陷惑心、四には無誑心、文と。梵網經の序に云はく、「戒を持つて心悔せざれば所願も亦成就す、文と。若し持戒清淨ならば必ず一切の禪定、智慧、成就圓滿することを得、此外の疑難は盡く未問を評するに由無し、仍つて世人決疑門を立つ。」

古徳誠證門第四

第四古徳請證門とは、謂く、古徳此宗を行ずるの誠證なり。十あり、一には聖徳太子の傳並に傳教大師の一心究の中卷に云はく、「願の南嶽の思禪師、建寧大師に值遇して教示を蒙る云云。又天台の履心論の奥批に云はく、「崇山少林寺の大師、禪法を以て南嶽の思禪師に傳授す。禪師此禪法を以て天台の智者禪師に傳授す云云。」二には智者禪師、恆に此禪を修して法華經を誦す。是眞持造具名眞法供養如來。に至つて、忽然として大悟、自ら靈山の一會儼然未敢なることを見る云云。」三には二祖よりは下、今に至つて二十五代、天下之行ふ、四には後漢より唐に至つて二十八代、翻經の三藏二百餘人、或は道或は俗、多く禪要の法門を譯す云云。五には唐の道場、日本の南京に來り、此禪法を以て行表和上に付屬す云云。六には日本傳教大師、南都に於て初め此宗を聞き、終に海を渡つて天台山の修禪寺に到り、牛頭山の流を泉受し、乃至豁然として大悟す云云。七には慈覺大師常に此禪を修す、在唐の日發願して曰はく、「歸國せば禪院を建立せん」と云云。八には智證大師宗體を釋す云云。九には安然和尚、禪の旨歸を釋す云云。十には天宋見行、禪苑清規一

【一代】 如來五十年の說法

【心印】 如來の傳味なり、乃ち此三印證と熟語して、確證するの義。

【鹿劫】 鹿沙は無數の意、劫は時なり。

【莊嚴劫】 過去の劫名なり、現在住劫中に於ける前の七佛の名稱。

【七佛】 七佛の内前三は過去莊嚴劫後四は現在賢劫中に出現す。

【多子塔】 又は千子塔、多子文提といふ、印度の吠舍羅城の西北三里の所にあり。

部十卷あり、要を取つて之を言はば一代五時の諸經律論皆是佛經の旨歸なり。佛の遺教は行往坐臥偈せて禪意なり。經に云はく、常に禪定に在つて衆生を悲愍す云云と。是れ即ち眞證のみ。仍つて古徳請證門を立す。

宗派血脈門第五

第五宗派血脈門とは、今此心印は過去七佛より相承す、而して繼脈密傳心印絶すること無し。禪宗興由に云はく、式つて禪宗を觀るに、先佛數周の摩訶に肇まる。文と。長阿含經を據するに云はく、莊嚴劫中、一千佛有つて世間に出現す、乃至末後の三佛を七佛の最初と爲す。七佛各付屬するに心印を以てす、日決別に在り、血脈後の如し。

第一毘婆尸佛、第二尸棄佛、第三毘舍浮佛、第四拘留孫佛、第五拘那含牟尼佛、第六迦葉佛、第七釋迦文佛。

成道四十九年の後、靈山多子塔前の大集會中に於て、摩訶迦葉に半座を推して、告げて言はく、「吾清淨の法眼、涅槃妙心、實相無相、微妙の正法を以て汝に付屬す、汝當に護持すべし。並に阿難に轉す。」斷絶せしむること莫れ。「偈に曰はく云云。華手經に云はく、佛遙に之に命じて曰はく、「善來、迦葉。久しうして乃ち相見す、汝當に此佛の半座に就くべし」と。佛身を移したまふ時に三千震動す。迦葉白して言さく、「敢て佛の衣鉢の坐處に坐せず、佛は是れ大師、我は是れ弟子なり、我昔佛に従つて僧伽梨を受く、

【佛曰】 本本法無  
法、無法法亦法、無  
今付法法、時、法  
法何曾法  
【僧伽梨】 大衣、  
又僧碎衣、則ち入  
王宮聚落時衣と名  
く、乞食說法の時  
に着す。  
【無學】 阿羅漢、  
學を究め盡すの意  
【】 襪なり。

【】 聖の普通八年  
武帝の年號なり、  
普通元年庚子を正  
と爲す。

禮敬尊重して未だ曾て敢て著けず、我是より來た微覺を生せず、我學地に於て世尊の  
衣を受けて以て頂戴せし時、即ち無事を成ず、我佛の教に順ひ如來の衣を受けて、實に  
敢て高下の心を生ぜず。但手に執持して餘身に觸せず、若し未だ手を潔はざれば亦敢て  
擧げず、豈敢て輕慢して頭下に枕とせんや。法王は無師自然の逮覺、一切の聲聞辟支  
佛と共にせし。佛言はく、「善哉善哉、汝の言ふ處の如し」。佛、迦葉に告げたまふ、「汝且  
く塵に就いて、所疑を請問せよ。當に汝が爲に説くべし」。迦葉即ち塵より起つて、佛足  
を頂禮し、次に隨つて坐す。支と。法鼓經に云はく、「迦葉佛に白して言さく、「如來大い  
に敬待せらる、云何が敬と爲さん。曾て我に告げて言ふ、汝來つて塵に坐せよと。是因  
縁を以て我應に恩を知るべし。次「佛言はく、善哉、是義を以ての故に我汝を敬待す。支」  
と。」

第一摩訶迦葉、第二阿闍維、第三南那和修、第四優波洹多、第五提多迦、第六羅漢迦、第七  
婆須蜜、第八佛陀難提、第九伏駄蜜多、第十羅尊者、第十一富那夜奢、第十二馬鳴、第十  
三迦昆摩羅、第十四龍樹、第十五迦提婆、第十六羅羅多、第十七佛迦提、第十八迦  
耶舍多、第十九鳩摩羅多、第二十闍夜多、第二十一婆修盤頭、第二十二摩訶摩、第二十三  
鶴勒那、第二十四伽子、第二十五婆舍斯多、第二十六不如蜜多、第二十七長者多羅、第二  
十八菩提達磨、  
大綱、昔の普通八年丁未の歲、南海を経て東府に到る、同年十一月洛陽に居る、魏

【支那】支那廣東

【流域】後魏の都

【未だ立て】

【吾本來法】

【救迷情】

【結果】

【清涼廣】

【開山は大】

【賓客を司】

【唐開期の偽】

【無次】

【神光、無】

【頭故、得】

【方知從日亡】

【支那】支那廣東  
【流域】後魏の都  
【未だ立て】  
【吾本來法】  
【救迷情】  
【結果】  
【清涼廣】  
【開山は大】  
【賓客を司】  
【唐開期の偽】  
【無次】  
【神光、無】  
【頭故、得】  
【方知從日亡】

法以沙界に周し、世尊密許千萬有餘ならん、吾徒を遣はし、曰はく云云。

第二十九可大師、第三十可大師、第三十一可大師、第三十二可大師、第三十三能大師、第

三十四可大師、第三十五可大師、第三十六可大師、第三十七可大師、第三十八可大師、第

三十九可大師、第四十可大師、第四十一可大師、第四十二可大師、第四十三可大師、第

四十四可大師、第四十五可大師、第四十六可大師、第四十七可大師、第四十八可大師、第

四十九可大師、第五十可大師、第五十一可大師、第五十二可大師、第五十三可大師。

子日本仁安三年戊子の春、海を渡るの心有り、鎮西傳多の津に到る。二月、兩朝の通

事李徳昭に遇うて傳へ言ふを聞くに、神宗有り宋朝に弘まる云云。四月、海を渡つて大

宋の明州に到る。初め廣慧寺の知客禪師に見えて問うて曰はく、我國の祖師、禪を傳へ

て歸朝す、其宗今遺缺す。予慶を興さんことを懐ふ、故に此に到る。願はくは法旨を聞

けせよ。其禪宗の祖師達磨大師、傳法の偈如何。知客答へて曰はく、達磨大師、傳法の

偈に曰はく云云。又問うて曰はく、我日本國達磨大師知死期の偈ありと云ふ眞偽如何。

知客答へて曰はく、嘘す所の法は乃ち小根の魔子、妄に其語を撰するなり。夫れ死生の

道、吾宗に在つては本去來生死平等なるを以て、初めより生滅の理なし。若し其死期を



【金剛經】六六 龍  
大師傳に此語を聞  
き大悟す。

【歸朝】 秋九月。  
【畜念】 畜は積な  
り蓄と通ず。

【八塔】 迦提羅城  
摩伽陀國、波羅那  
祇孤獨園、曲女城  
正舍城、廣嚴城、  
拘尸那城。

【安撫】 官名。  
【蔓】 申なり。

【西乾】 乾は天。  
【乾】 五竺に往  
くに三道あり。

【中平】 中天竺、  
金地金剛

【持照】 諱判、案  
照ははれたる。

【尊】 尊家の年

【敬】 尊家の年

【三】 光宗の年

【世】 世

【世】 世

知ると謂はば、是れ吾祖の道を欺く小害に非ずや。久しく聞く、日本國佛法流通すと。  
幸に吾師に逢ふ。須らく筆語を奉ずべし。然して人に華夷の異あれども、爾も佛法は  
總に是れ一心なり。一心纔に悟れば是れ一門。金剛經に謂ゆる、無所住而生其心なり。

源流を知らんと欲せば、請ふ訪及を垂れよ。一一に相問すべし。竝く祖師の道を問ふこと  
は小愛の知見の能く測度する所に非ず。云云。時に宋の乾道四年戊子の歳なり。即ち秋  
に及んで歸朝す。而うして安然の秋時諍論を看て、九宗の名字を知り、又智證の教相同  
異を問て山門相承の巨細を知り、又次に佛光大師の佛法相承諍論を見て、我山に稟承有ること  
を知る。畜念罷ます二十年を経たり。方に今予西天の八塔を觀せんことを懷うて、日  
本文治三年丁未の歲春三月、舟を辭す。南宗の血脈、並に西域の方誌を帶んで宋朝に到  
る。初め行在臨安府に到つて安撫侍郎に謁して西乾經遊の情を報す。即ち上殿して云

はく、半影を輝耀たる棧道に曳き、全身を中平の金地に懸るべし。然ども敢て具照  
を與へず。只案照を與へて、獨り相を成一人に勝す。時、未だ有らず、耶ぞ一を接たざ  
るを得んや。時に泰末淳熙十四年丁未の歳なり。即ち大青山に登つて、萬年禪寺に留る。

堂頭和尚、敬に批して、師と爲し參禪問道す。頗る臨濟の宗風を重み、四分戒を重し  
著。終身を誦し學ぶ。遂に宋の紹興二年辛酉の歳、日本國に歸る。別に著んで、  
釋師爲に書して曰はく、日本國千世説の大法師、常に靈骨有つて、曠に其間深重の恩榮を  
給て、佛に侍ひ、髮を剃り、僧伽を著け、洪に此法を傳す。萬里を近しとせしとて、海に

拾て、佛に侍ひ、髮を剃り、僧伽を著け、洪に此法を傳す。萬里を近しとせしとて、海に

拾て、佛に侍ひ、髮を剃り、僧伽を著け、洪に此法を傳す。萬里を近しとせしとて、海に

拾て、佛に侍ひ、髮を剃り、僧伽を著け、洪に此法を傳す。萬里を近しとせしとて、海に

拾て、佛に侍ひ、髮を剃り、僧伽を著け、洪に此法を傳す。萬里を近しとせしとて、海に

拾て、佛に侍ひ、髮を剃り、僧伽を著け、洪に此法を傳す。萬里を近しとせしとて、海に

拾て、佛に侍ひ、髮を剃り、僧伽を著け、洪に此法を傳す。萬里を近しとせしとて、海に

【石橋】 五百羅漢

【大】 一六事と、世尊

【一】 萬年号の御座り

【二】 於て、授けらる

【三】 變に對す

【四】 五拍衣あり

【五】 信に袖の字に

【六】 三衣、坐

【七】 直

【八】 杖、數珠、柱

【九】 漚水囊、戒

【十】 不露鋒

【十一】 揚眉喚

【十二】 著衣早

【十三】 打瓦鑽

【十四】 若信師

【十五】 無疑日

【十六】 底意分

航して我炎宋に入り、師を宗旨に探る。乾道戊子の歲、天台に遊び山川湖上の勝景、道

場の清淨殊なるを見て大歡喜を生ず。嘗て淨財を施して十方の僧徒を養ひ、世に世下

已にして石橋に至り、香を拈じ茶を煎じて、住世五百の僧徒を養ひ、世に世下に

歸り、夢境恰恰として二十年。音問相聞かずと雖も、而も山中の老宿、師として其事

を問ふ。又舊徳を懐う之を復す宿縁淺からず、志願に盡し、法旨を示さず

ばあるべからず。夫れ昔釋迦老人將に圓寂せんと欲するの時、涅槃心正法眼藏を以て

摩訶迦葉に付屬す。乃至嫡嫡相承して予に至る。今此法を以て汝に付屬す。汝當に護持

すべし。其祖印を佩んで國に歸つて化を末世に布き、衆生に開示して以て正法の命を繼

げ。又汝に袈裟を授く。大師昔衣を傳へて法の信と爲して而して木末無物なることを表

はす。然れども六祖に至つて衣は止めて傳へず云云。其風絶えたりと雖も、今外國の法

信と爲して汝に骨御梨を授くるのみ。又菩薩戒を授く。拄杖、塵尾、衲子の道具一をも

留めず付屬し畢る、轉法の偈を聞け。云云。此宗六祖より以訖、漸く宗派を分ち法四海

に周ぬし。世二十に泊び脈五家に流ぶ。謂く、一に法眼宗、二に臨濟宗、三に沩仰宗、

四に雲門宗、五に曹洞宗なり。今最も盛なるは臨濟なり。七佛より東西に至つて凡そ六

十代なり。嫡嫡相承して繼脈す。定に佛法の公驗以有る者なり。是れ只一徹を列す。自

餘の支派は圖に在り。之を宗派血脈門と謂ふ。

【公驗】 功驗の蹟

より榮西に至る二十一世。

典據增信門第六

【一切の法】上の  
便成正覺の次の文  
なり。

【其心を生ず】正  
覺なり。  
【佛を誇す】諸法  
空に達して畢竟し  
て憍なし、今説あ  
りと言はば是れ佛  
を誇し云云。  
【若し色を以て云  
云】唯自證知する  
が故に。

第六典據增信門とは、謂く、此禪宗は不立文字教外別傳なり。教文に滯らず、只心印を傳へて文字を離れ、言語を止じて直に心源を指して以て成佛せしむ。其證法散じて諸經論の中に在り。且らく少分を出して以て一宗の證と成さん。華嚴經に云はく、「初發心の時便ち正覺を成ず。文」と。又云はく、「一切の法は即ち心の自性なり」と知り、慧身を成就して他に由つて悟るに不ず。文」と。寶積經に云はく、「心の本性は水中の月の如し。文」と。又云はく、「諸法の自性不可得なること、夢に欲を行するに悉く皆虚にして但想に隨つて起り、實有に非ざるが如し、世尊の知しめす法も亦是の如し。文」と。淨名經に云はく、「心淨ければ佛土淨し。文」と。又云はく、「淨名無言。文」と。楞伽經に云はく、「如來清淨の體。文」と。大般若經に云はく、「色は所有無く不可得なり。乃至一切の智智、所有無く不可得なり。文」と。又云はく、「言語有ること無きを名けて佛法と爲す。文」と。又云はく、「第一義論は文字有ること無し、一切の言語は世俗に依つて説く。文」と。金剛般若經に云はく、「應に所住無うして其心を生ずべし。文」と。又云はく、「若し人如來に所説の法有りと言はば、即ち佛を誇すと爲す。文」と。又云はく、「若し色を以て我を見ば是人邪道を行する等。文」と。法華經に云はく、「唯佛と佛とのみ乃ち能く諸法實相を究盡す。文」と。又云はく、「如に非ず異に非ず。文」と。又云はく、「言を以て宣ふべからず。文」と。大涅槃經に云はく、「如來は常住にして變易有ること無

【止觀】天台は南  
 岳、一に漸次、二  
 に手裏、三に圓頓  
 に文下。【大論】大論二十。  
 【大經】大般若經。  
 【解】一書あり、二書あり、三書あり。  
 【四事】上の四事。  
 【長行の文】上の四事。  
 【遮尼乾子】大藏  
 卷、菩提流支の譯  
 此の文は海、二の  
 一乘品に出る。  
 【月】上の四事。  
 卷、隋の慧遠提象

し、乃至諸の如く説く者は其旨のあらず。文」と。又云はく、我一字を説かず。文」と。大智度論に云はく、一乾陀越摩訶薩は其法にして無例なるを、其の體はに著き、其の法も亦滅す。無量の罪を除いて清淨にして心常に一なり。凡の如く微妙の人は、即ち著く般若を見ることと、虚空の衆無く、實無く文字無きが如し。若し能く是の如く觀する、是を即ち佛を見ることとす。若し法を如く解せば、佛と般若とをび涅槃と、是即ち一相にして其實有ること無し。文」と。【言宗】大日經に云はく、我本不生なことを覺すれば、而言の道を出過す。諸過脱することを得。因縁を遠離す。空にして虚空に等しと知り、如實相の不生ず。已に一切の闇を離れて、第一真にして垢無し。中々に云はく、「問ふ、何が故に此論を造るや。答へて曰はく、後五音成は人師儀にして文字を教し不見を、故に此論を造る。文」と。天台の止觀に云はく、天台、南岳三種の止觀を傳へ、乃至一文字有り」と。文も亦例すること有ること無し。論に云はく、「若し般若を見、佛を見ざる皆轉若脱」と。文も亦例して然り。大經に云はく、「若し如來は常に說法したまはすと知らば是れ即ち多聞なり」と。此は不説にして見れ説なることを指すなり。文」と。解即經に云はく、「自希無相の法は言説四事を離る。無辦法の通相は諸の覺境の境を過ぐ。文」と。四事とは見聞覺知なり。菩薩遮經に云はく、「法界の性差別無きを以てこの故に」と。月輪三昧經に云はく、「一切諸法の體性は平等無戲論三昧なり。文」と。文雖問經に云はく、「此法は不思議にして、意識を離る。一切の言而斷ず。是れ般若を修行するなり。文」と。占察經に云はく、「地藏菩薩言はく、一實の

耶舍の譯、この文は卷の二に出づ。  
【占察善惡業經】二卷、隋の菩提登の譯、この文は下卷に出づ。  
【長壽王經】一卷、失譯、この文は卷末の偈に出づ。  
【善戒經】九卷あり、善戒經は、釋迦摩訶沙門求文は卷二菩薩地不可思議品に出づ。  
【不二】實の爲に權を施すの意。  
【善巧】四の意、妙巧を説きしむるをいふ。

【萬行】萬は是れ此方の總數、其最も多きを表す。行は是れ修徳の都名なり。

【四攝】常樂、常行、常行等、常行善樂。

境界とは、明く、業生の心體根本以來、行生不滅にして自性清淨なり。文一と金剛三昧經に云はく、「法本有無無し、自他も亦復無り、始ある事亦無あり、成就也、住せよ」と具壽王經に云はく、「自然にして個受無、我行にして師無く、志願にして尊信無く、重道往反無く、善巧清淨にして真なり。文一と善戒經に云はく、「菩薩、法の爲に禪定を修せしむ。現世に業を受け身、空寂なる、法を自明と看く、身心清浄なるが爲に業生を纏さず、其を利徳と名く」と摩訶般若波羅蜜經に云はく、「法界は平等なり。衆生も亦無く、法界に云はく、「法界の明を説く」と。乃至一代所説の經の文、盡く此中に説くべけれども、今は少分を説く。餘は處に準じて知れしごとく、經家所説の經の中、若くは標、若くは實、指掌をして佛心不二法門を受持せしめんが爲に、此の善巧方便を説すのみ。空しく勸告の云はく、「此禪定は一代傳は多く善巧を説す。最後に心を修へて教文に、禪、乃至、清淨の心なるが爲に、文一と善戒經師の云はく、「即ち佛性を宗と爲し、心所著なる事と爲す」と。文二と摩訶般若波羅蜜經に云はく、「萬行を修習して禪心に當はさるること莫れ。此禪定の力を以ては、經に華界をも滅すべし。又日輪經に云はく、「禪定に契らしめて般若を得ると云ふ者は是處有ること無し。文一と。若し般若の意を得ば、乃至、罪を滅すべし。涅槃の經は實出般若に當はるること無きが故なり。天台の止觀に云はく、「若し事の罪を犯すと、因縁二業に依らば罪も滅法有り。善巧清淨に云はく、「攝して善相を成ず、是を第一の禪し看く」と。禪定に云はく、「因重五逆若し禪定を除いて信は能く成ふこと無し。文一と。並に經に、佛の佛性と爲す。仍

【野】 初に撰し  
【野信】 といふ、之  
は誤り也

【大綱】 禪の大意  
を擧げ示す、なほ  
綱の綱を擧ぐるが  
如し

【宗鏡】 永明智覺  
延壽禪師は、大乘  
の經論六十部を集  
めて、交ふるに賢  
聖三百家の言を以  
てし宗鏡録百卷を  
作る

【心意識を離れ】  
青林虔禪師の語。

つて典據増進門を立つ。

大綱勸參門第七

第七大綱勸參門とは有り。一に約教分、二に約理分、三に約相分なり。初めに約教分とは諸教を謂ふ。諸根の人は皆諸教諸宗の妙義を伺ひ、禪の旨歸を學して修入の方便と爲す。宗鏡録に六十部の經論を引き、三宗の妙義を蘊し、三百餘家の語句を註して以て宗旨を釋す、是なり。次に約理分とは佛前を謂ふなり。文字に拘らず心思に繫らず。是故に心意識を離れて參じ、凡聖の踏を出でて學す。是れ最上利根の人に約するなり。三に約總相とは、謂く、教と云ひ禪と云ふ、但名字のみ有り。參と云ひ學と云ふ、亦是れ假名。我人衆生乃至菩提涅槃皆亦名字、實に所有無し、佛の所説の法も亦是れ名字。實に所説無し。是故に禪宗は文字の相を離れ、心縁の相を離れ、不可思議にして畢竟不可得なり。謂ゆる佛法とは法の説くべき無き、是を佛法と名く。今謂ふ禪は即ち其相なり。以前の三義悉く是れ假名なり。若し人佛禪に文字言語ありと言はば、實に是れ佛を謗し法を謗し僧を謗す。是故に、禪師不立文字直指人心見性成佛せむ。謂ゆる禪門なり。名字を取るものは法に迷ひ、相貌を取るものは亦是れ顛倒。本來動せず物の得べき無し。是を佛法と謂ふ。佛法は只行住坐臥の處に在り、一絲毫を添ふることを得ず。一絲毫を減ずることを得ず。便ち恁麼に會し去つて更に些兒の氣力を費さず。纔に奇特玄妙の商量を作さば已に交渉

【顛頂】分曉著明  
 【源思】瘵は物を  
 取るなり  
 【蠱心】荀且疎略  
 【擄虎】奪取なり  
 【臘月】除日を以  
 て死日に當つ  
 【太原季】この語  
 は、懸燈二十四に出  
 づ。  
 【拊拍】ひねりお  
 す。  
 【若し人】此語は  
 智語十二に出づ。  
 【考掛】生には父  
 母、死に考掛。  
 【一大事】法華の  
 方便品に出づ。  
 【五千】闍沓釋教  
 録に之を定數と爲  
 す。  
 【水を云云】説き  
 得て漏らざるも  
 【羅山】羅は道閑  
 岩頭端に附く。  
 【石霜】詩は慶諸  
 道伍智に附く。  
 【巖窟】詩は全常  
 徳山鑑に附く。

なし。所以に動なれば生死の木を起し、靜なれば昏沈の郷に醉ふ。動靜變て忘ずるも佛性  
 を顯預す。總に不恚塵畢竟如何、若し是れ戶外に宗を明らば終に言中に於て則を取らず。  
 直下に便ち見、撩起して便ち行け、箭既に絃を離る。返回の勢無し、千聖も也持来不著。  
 或は未だ此田地に到らずんば、既に思む蠱心大膽なることを。一向に掠虚ならば臘月三十  
 日に到り得て、總に用不著、豈太原の孚上座一りの禪人の爲に笑はる所と爲りて即時に  
 禪を得て名聲を九州に留めしことを見ずや。孚云はく、某甲自來經を講ず。只父母生身の  
 鼻孔を將て拊拍す、今より已後敢て是の如くならず云云。若し人海に入つて實を探らば  
 當に如意を求むべし。若し如意を得ずんば其餘は皆道ふに足らず。學道の人一箇半信業か  
 無らん。只是れ此大事を了することを得ざる處、誠に憂ふべしと爲す。古人の謂ゆる「大  
 事明めずんば考懸に喪するが如くせよ」と。釋迦老人一大事因縁の爲の故に世に出現す、  
 日らく道へ如何なるか大事。又作麼生か明らめん。直に續らく當人大悟一回して、親しく  
 見親しく到るべし。方に自家の口を開き得て、自家の話を説き得ん。若し也未だ悟らず未  
 だ見ず未だ到らずんば、縦饒五千四十八卷を説き得て、水を盛つて漏らさざるが如くなる  
 も、也只是れ汝身量邊の事、此大事に於て透うして述し。試に古人の悟處を舉せん。當  
 に商量して看るべし。羅山和尚の如き、一日石霜和尚に問ふ、「起滅傳らざる時如何、霜  
 云はく、直に寒灰枯木にし去り、一箇萬年にし去り、兩葉相離し去るべし。」山契けす却つ  
 て巖頭和尚の處に往いて亦是の如く問ふ。巖頭和尚便ち喝して云はく、「是れ誰か起滅す

【解を以て】 經句  
 【善法集に出づ】 經句  
 【善に應に】 經句  
 【學生、藥は如來】 經句  
 【善法】 經句  
 【應化す】 經句

【狗の意】 狗は  
 種動物を指す。意  
 意は、狗の可憐を  
 知る、本分に  
 【定盤星】 經句  
 【餓子】 具眼の  
 【狂狗】 不具眼の  
 【刻溪】 晋王徽之  
 が故事、裴求上に  
 出づ。

【天皇】 名は道悟  
 龍潭信に示すの語  
 【青林】 洞山師虔  
 洞山价に洞山師虔  
 【鳥遣】 鳥の空中  
 に行ひ跡なき意  
 【保任】 保護任持  
 【學般若】 坐禪儀  
 の取要なり。

【善法集に出づ】 經句  
 【善に應に】 經句  
 【學生、藥は如來】 經句  
 【善法】 經句  
 【應化す】 經句

る。田舎下に於て忽として悟す。凡そ道へ、簡の什襲を著る。古人の志ふことに  
 に在り、十二時の中に向つて工夫を費す。直に是れ悟を以て期と爲す。只心下を覺悟と  
 して、經法行らざるに縁つての所以に、此一問を發して此事を決明せんとす。善宿病に重  
 じて笑を與ふ。或は一服にして便ち効ある者あり、或は多方併合し、百數計法して方に覺  
 する者あり。唯病去り、全體輕法なるを以て覺と爲す。後木の學者本源に於て、  
 覺して覺ちを守つ。但道ふ。石霜の爲人の語は死す、單頭の爲人の語は活すと。是の如き  
 の見解ならば、草鞋を買つて行脚して始めて得ん。狗頭の高を領せず、獨つて靈星  
 を認む。謂ゆる餓子は人を咬み、野狗は人を咬む。大凡覺宿は虚しく發せず、須らく是  
 れ學者擇法眼を具して、方に能く針芥相投すべし。若し也好惡を離らずんば、直に洞溪に  
 船を渡らるが如し。如何を彼岸に對することを得ん。又裴求和尚の云はく、性にて道流し、  
 縁に隨つて放曠たれ、但凡情を去せず、別に善惡無し、若し指示を要せば、盡く是れ狗の爲  
 に足を著く。青林和尚の道はく、龍圖門下、鳥遣女役、功窮つて悟せず、實にされば明め  
 難し、這裏に對つて直に須らく心意識を離れて參じ、凡聖の路を出でて學すべし。方に保  
 任すべし。若し是の如くならずんば宗門の子息に非ず。と。乃至古徳の妙語一代の傳旨此  
 中に於て盡く之を載すべし云云。若し行人行つて此法を修行せんと欲する者は應に學教  
 若の菩薩なるべし。當に大悲心を起し、弘誓願を發し、三昧を修作し、大菩薩清淨の妙戒  
 を具し、廣く衆生を度して一身の爲に獨り解脱を求めざるべし。爾して乃ち諸縁を放捨し



萬事を休息して、心身一如動靜無、其飲食を量て多からず少からじ。其睡眠を調へて節せず、恣にせず、結跏趺坐して日は頰らく傾すべく、氣息既に調へて久久にして縁を忘せば自ら一片と成らん。若し此意を得ば自然に四大無礙安たらん。謂ゆる安樂の法門なり。若し已に發明する者は流の水を得るが如し、未だ發明せざる者も但行心を離せよ、必ず嫌退せざれ、定を出づる時は徐徐として身を動かさず安詳として起て、一切時中定力を護持すること嬰兒を護するが如くならば即ち定力成じ易からん。所以に珠を探るは宜しく浪の静かなるべし。動水には取り難し。空水清らかならば心珠自ら現せん。圓覺經に云はく、無礙清淨の慧は皆禪定に因つて生ず。又」と是に如く凡を超え聖に入ること必ず縁を假る、行住坐臥須らく定力に憑るべし。是れ禪定と爲す。若し定を成せんと欲せば必ず須らく戒行に依るべし。若し戒法無くして禪定を得る者は是處り有ること無し。禪法要解に云はく、「譬へば獼猴の繋れて柱に在る。終日奔走すれども禪定に據して還る、極れば乃ち休息するが如し。所縁は柱に在るなり。余は則ち心の如し。心は獼猴に喩ふ。行者の觀心も亦爾是の如し。漸漸に心を制して緣處に住せしむ。若し心久しく住すれば、是れ處に禪法に成ずと。是故に此禪を成ぜんと欲せば無礙清淨にして眼處有ること無く、戒心を離るること禪定法の如くせよ。又、戒經に云はく、「心を繋いで放逸ならざるも亦猶に鎖を著たるが如くせよ。又」と。予は是持柔の野人、木林間の間に居す。例に隨つて遠く紅海に遊び、垢衣を披して日を度り、獨り面壁して以て言無く、甘んじて自ら守つて聞

【禪法要解】 二卷  
あり、羅什の譯

【戒經】 梵網經。

【阿毘達磨】 摩訶沙  
入宋求法をいふ。

【比者】初め虚叢するをいふ  
 【道家】漢主遊歴【香を炷いて】虚叢の室に入りて投  
 【日事】虚叢付【上】すべてな  
 【尼徒子】古語か本考と古註に出づ  
 【佛十號】佛十號の一。好去と云ふ、又善逝と云ふ、  
 【門を指さ】共に修勞して益なきに當ふ。

くこと無し、深く平生の百拙を媿づ。比者少く古人の行履に倣ひ、漢家の道風を伺ふ。數般に數歡す。纔かに香を炷いて當下に禪、賓主を分ち、未に相會を擧げ、顯く發明す。心と有つて、出身入道の式打疊して歸る。口に打成一片なることを得たり。日本國に於て祖道便ち之に興ることを得んことを欲す。保任諸祝の情只斯に在り。因つて以て都盧打疊して還つて之と處に、一宗の儀法行すべき無し。謂ゆる尼徒子の數般、脩伽陀の一黙並に應に符合すべし。夫れ宗虎の淺深は情を得て而して之を識れ。門を扣き空を操つて疲勞すること莫れ。菩薩大聖の處に云はく、「亦無、無、亦無、有無も亦無、非有非無も亦無、是の如きの言説、亦無。」と。又云はく、「數無く文字無し、著し能く量の如く觀する、是を則ち佛を見る上爲す。」と。禪宗の大綱註の如し。又楞伽經に、「四種の禪有り、一に愚夫所行の單、二に觀察相義の禪、三に攀緣所實の禪、四に如來清淨の禪、如來地に入つて自覺聖智の相を行するを謂ふ。是れ禪の相たり。」

興禪諸國論卷中終

興禪護國論 卷下

【權子】 大乘の善根微弱なるをいふ

【修禪】 相承一途

【和上】 戒師、父  
【闍梨】 教授、母

【緣務】 一に生活二に人事、三に伎能、四に學問、

【調達】 解飯王の子、提婆達多、出家す

【五神通】 天眼、宿命、他心、神足、宿命、他心

【周利槃特】 佛弟子中の極鈍者  
【維寶藏】 八卷、元龜の吉迦袞曇暉と共に譯す

第七門の餘方に今此禪を以て、末世の權子に勸めて而して直道の緣と爲さんと欲す。少聞薄解の輩と云ふと雖も、大鏡小智の類と云ふと雖も、若し專心に坐禪せば必ず道を得ん。善戒經に云はく、禪を修すれば現世に樂を受く、身心寂靜なれば是れ自利。身心靜なるが故に衆生を惱さず、是れ利他。文一と。修禪必決に云はく、吾和上闍梨の相承の如きは、一真直向に禪を學して多聞少聞を問ふこと無し。文二と。然れば則ち末世調根の人と雖も、心を佛成に繋げ動かさず一如にして念を衆生に存し、不見を休息して佛性を信受し心を一項に制して諸の緣務を息む。是れ眞の修禪の人なり。遺教經に云はく、此輩に依り問れば、諸の禪定及滅苦の智慧を生ずることを得。文三と。凡そ一句の佛言を信するば、是れ萬徳の直道なり。調達の如き阿羅漢に五神通の法要を受けて修して即ち得たり。周利槃特の如き只佛に一偈を受けて阿羅漢を得たり。或偈に云はく、若し人靜坐すること一項のなるも、流沙の七寶の塔を造るに勝れり。寶塔は畢竟化して塵となる。一念の靜心は正覺を成す。文四と。又維寶藏經に云はく、昔比丘あり。年老いて持齋なり。少比丘の四果の法を説くを見て、心欣樂を生じ。諸の少比丘に語す。願くは四果を以て我に與へよ。諸の少比丘嗤つて而して語つて曰はく、我に四果有り。須らく好食を得て然して後に相與ふべし。時に老比丘歡喜

護國論

【生七死】 詳に  
俱舍二十三に出

【略には戒  
品】 廣には三十  
七の眞品の道は通  
はれぬなり。

【因縁生。  
苦行は無  
常なれば  
苦行は一  
相異相無  
なるが故に空なり

【眞言】 大日經義  
釋一文なり。

【甘露】 味中の最  
勝、聖道に驗ふ。

して佛の徳を信じて之を得つ。諸の少比丘は比丘を爲して語つて曰はく、汝等舍の一角に在つて坐す。當に汝の坐を爲すべし。時に老比丘默然して坐す。諸の少比丘即ち皮籠を以て其の上を打つ。語つて曰はく、此は佛の坐に眞坐す。老比丘聞已つて緊念して默然す。即ち初坐を豫けり。諸の少比丘坐之を立して言ふ、汝等初坐の眞坐すと雖も然も生七死相有り。更に一角に移れと、乃至復爾を以て打つ。老比丘坐を念を加へ即ち一坐を證す。乃至老比丘を將ゐて次第に移り坐せしむ。四坐を證し已つて心大に歡喜し。諸の諸結縛の香智を設け、少比丘を請じて其思徳に報へ、諸の少比丘と共に道品を證す。諸の少比丘言を説して灌漑す、時に老比丘方に其に語つて言ふ、我已に阿羅漢を證得す。諸の少比丘咸く皆戲弄の罪を懷持す。又とて入云はく、昔女人有り、深く三寶を信ず。一比丘を請じて供養既に訖る。女人を心二日を閉ぢ靜坐して説法を求請す。比丘所答す、身を清めて寺に歸る。然も此女人有爲の無常苦空自在を得ざることを念じて、深心觀察して眞花蓮果を獲たり。既に果を證し已つて寺に向つて求覓し、以て其恩を報ぜんとす。比丘默然して一向に藏れ避く。苦るに求めて方に問づ。此女具に道果の因縁を誦す。比丘世に憐れむ。と。兼に是れ信心の徳なり。上智正明に云はく、佛法の大海は信を能入し爲す。又と眞言宗此文を引いて釋して云はく、佛入王輪法輪を請する時の如き佛偈を説いて言ふ。我今甘露味門を開く、若し信有る者は歡喜を得ん。此偈の中言はまして施多聞忍進智慧の人能く歡喜を得ると。獨り信人を説く佛意、是の如し。乃至故に信力を以て初と爲す。慧等

【慈恩】 窺基は玄奘の弟子、所出不詳との文は、【真如】 一切萬有の眞性。

【神變】 無にして有、有にして無。

【入印】 信力入印法門經五卷、元龜の南天竺曇摩流支の譯、今文は卷の四。

に由つて能く初めて佛法に入るに非ず。文と。金剛般若經に云はく、信心清淨なれば則ち實相を生ず。文と。法華宗慈恩の釋に云はく、謂く、一念の信實實して心に在らば、能く無邊廣大の生死を破す。文と。又溫州の釋に云はく、信相眞實と證する能はずと雖も、而も信解も亦能く惑を除く。文と。是はに受ず師の片言を信解すれば即ち佛法眞定の海中に入る。只一切の佛法信を以て能く信入す。起信論に云はく、問して曰はく、諸法眞實の方便、能く十方に於て衆生を利益すと云はば、何故に衆生常に難く見、或は難信を觀、或は眞法を聞かざる。答へて曰はく、如來智に是の如きの方便有り。但衆生止心の清淨ならんことを要して、乃ち爲に身を現す。眞の境有れば即ち眞覺せず、斯くとも是の境も現するが如く、衆生も亦然り。心未だ端を離れずんば法身現せず、斯くとも是の境も現す。文と。入印法門經に云はく、佛、支殊に告げたまふ。譬へば日月輪の照淨塵に如く、一切の習を清淨にして濁らず、淨塵を離るれば即ち淨く現す。而も日月輪水照淨せるが如く、如來も亦然り。化すべき衆生自心清淨なれば吾師來を見る。而も淨の如來木の如くにして動せず。是の如く十方一切世界の衆生發起の心中には指すべく現す。文と。金剛經に於て、信心を決定し、眞律を守護し、心水澄淨ならば、威嚴として正を法て衆生に利益する。佛心根小智を離れ、而も佛智清淨ならば、眞淨除し心自朗然とらん。七寶の城中の扶杖高僧の如き日圓も此意なり。問うて曰はく、是らば夢に如の様に依つてを解すべきや。答へて曰はく、四分爰網等の式、是れ正に宜しき所なり、外佛圓の威儀を學び、内菩薩の悲心を得ず

【五經七書】 とも

【三教】 儒道佛

【法苑珠林】 法苑珠林

【法苑珠林】 法苑珠林

【法苑珠林】 法苑珠林

【法苑珠林】 法苑珠林

【法苑珠林】 法苑珠林

【法苑珠林】 法苑珠林

【法苑珠林】 法苑珠林

【法苑珠林】 法苑珠林

【法苑珠林】 法苑珠林

【法苑珠林】 法苑珠林

【法苑珠林】 法苑珠林

【法苑珠林】 法苑珠林

【法苑珠林】 法苑珠林

【法苑珠林】 法苑珠林

【法苑珠林】 法苑珠林

【法苑珠林】 法苑珠林

【法苑珠林】 法苑珠林

【法苑珠林】 法苑珠林

るが故なり。問うて曰はく、五篇七卷は是れ小行の意なり。敬信論二ること何の要を

解間の持成は則ち菩薩の破戒なりと謂ふ。摩訶般若論、地に墮く身慧の不同を明すや。答

へて曰はく、佛法の本意は、唯戒を懸け非を妨ぎを以て持と爲す。其持犯問意を得て、

是を修するに基に、勸無らんか。道宣律師云はく、或は云はく、我は是れ大乘の人、小乘

の法を行ふことを要せずと。此れ則ち内菩薩の心に承き外佛間の行を闕く。法を知るの

法に背さるより、孰れか故く之を修する者あるんやと。凡徳なるも互此言や。禪宗

の要儀と爲す。天台宗の弘法に云はく、問うて云はく、今初門を明すに何ぞ小格を讀ひて

十種得戒の人を明すや。答ふ、涅槃の中道處作を扶く。今此も亦爾り。小を方便と爲す。

故に出家の菩薩は六和十利樂園と同じく、六度四弘小行に異ることを知る、若し在家の菩

薩は三歸五戒、或く善地に墮く、況んや復其八萬の律儀は七業並に責け、五道通じ被むる

をや。豈破戒を容して稱して優柔と爲さんや。品に乘心四句を以て對曉す。文と。又云は

く、天經及び十住婆沙持攝聖を指して云ふ。菩薩摩訶薩其戒を犯すと。當に知るべし、

戒に大小なく受者の心明に由ることを。是れ則ち中道漸く空假及び其の律法に入つて、方に

名けて具足持戒と爲すことを得。文と。又上の文に云はく、涅槃の中の五篇七卷は、並に是

れ出家の菩薩の律儀たり。文と。是れ並に大小の戒を以て如來禪修人の方便と爲るの意な

り、或は云はく、戒緩乘急の人何世に値ふ、何を必ずしも戒行を須ひん。云云。此言此理

無し、孰れか戒緩を好んや。戒緩の人佛世に値ふと謂ふは、是れ龍畜等の惡身を以て長壽の

【四句】戒急り乘緩乘急戒緩乘戒俱急、乘戒俱緩、十住毘婆沙論、龍樹造、釋什譯。

【戒に大小】本大小あるが故に、ただ心に由るが故に無。

【中道】中道實相は一切の法に融す故に云云。

【戒緩】この人徳薄く垢重く煩惱に便はる。

【人中天上】乗戒俱急は前の持相の如く、十種清淨事理取なく、觀念相續して、今生に即ち應に得道すべし。

【蓋過】慧頭蓋弗此に猛喜、又は極喜。四空定を得て空見に墮し、後に氣となる。

【長遠云云】三祇百劫即心成佛せず【此宗の意】禪宗は即生成辨なるが義に。

【篇】綱なり。

報を感じて、商も願力を以ての故に佛世に値ふなり、人中天上に於て佛に値はば増善と爲す。天台宗の止觀に云はく、凡そ是の如き等の因果を降し昇し一に非ず、云何が難じて難戒得道す。何ぞ事戒を用ひんと言ふや。非に人天に於て道を受く、何の意ぞ苦んで三途に入らざらんや。今此文好なるかな。但大經に云はく、戒緩と緩と名けず、乘緩と名けて緩と爲す。文と此文四句の中、乘戒俱緩の人約して此の如く云ふ、好んで戒緩なるべきに非ず。又止觀に云はく、又經に云はく、寧ろ其樂進多と作るも蓋弗と作らざれ。文と是此意なり。弘決に云はく、以戒緩を容して、稱して佛乘と爲さんや。文と此文の如きは、乘若し急なりと雖も、戒緩せば即ち名けて佛乘と爲すべからず。況んや此禪宗は必ずしも長遠の果を望まず、敢て後日の益を期せず。薄戒を以て方便と爲し、眼前の毒箭を拔き即生の妙悟を期するなり。薄戒に云はく、善法樂定を修すれば、現世に樂を受けて身心寂靜なり、之を自利と名く、身心靜なるが故に衆生を度さず、是は利他と名く、文と今言ふ所は捨來世の報に約す。是れ實大乘諸宗の旨、即ち又此宗の意に實なり。觀しと爲すべからず。此宗は是れ眼前に應酬を割き來世の行と等しからんことを欲す。薄戒に云はく、佛、禪定に在る乎、魔、信を得てこそ得ず。文と。其れ戒緩なるは、信實に値ふの文に憑つて、好んで戒緩する者は、何ぞ金寶を濫持して無死するに莫らんや。況んや止觀の戒緩に値ふの文、大經の戒緩と名けざるの戒、益に是れ戒緩樂樂の樂を謂ふに非ざるをや、重罪を犯す者は戒緩と謂はず、薄戒と謂ふべし。謂ゆる戒緩とは輕罪を奈くせざ

【二】問は「ひ

【三】に著理云云  
【四】は謂の誤ならん  
【五】は謂の誤ならん  
【六】は謂の誤ならん

【七】は謂の誤ならん  
【八】は謂の誤ならん  
【九】は謂の誤ならん  
【一〇】は謂の誤ならん  
【一一】は謂の誤ならん  
【一二】は謂の誤ならん  
【一三】は謂の誤ならん  
【一四】は謂の誤ならん  
【一五】は謂の誤ならん  
【一六】は謂の誤ならん  
【一七】は謂の誤ならん  
【一八】は謂の誤ならん  
【一九】は謂の誤ならん  
【二〇】は謂の誤ならん  
【二一】は謂の誤ならん  
【二二】は謂の誤ならん  
【二三】は謂の誤ならん  
【二四】は謂の誤ならん  
【二五】は謂の誤ならん  
【二六】は謂の誤ならん  
【二七】は謂の誤ならん  
【二八】は謂の誤ならん  
【二九】は謂の誤ならん  
【三〇】は謂の誤ならん  
【三一】は謂の誤ならん  
【三二】は謂の誤ならん  
【三三】は謂の誤ならん  
【三四】は謂の誤ならん  
【三五】は謂の誤ならん  
【三六】は謂の誤ならん  
【三七】は謂の誤ならん  
【三八】は謂の誤ならん  
【三九】は謂の誤ならん  
【四〇】は謂の誤ならん  
【四一】は謂の誤ならん  
【四二】は謂の誤ならん  
【四三】は謂の誤ならん  
【四四】は謂の誤ならん  
【四五】は謂の誤ならん  
【四六】は謂の誤ならん  
【四七】は謂の誤ならん  
【四八】は謂の誤ならん  
【四九】は謂の誤ならん  
【五〇】は謂の誤ならん  
【五一】は謂の誤ならん  
【五二】は謂の誤ならん  
【五三】は謂の誤ならん  
【五四】は謂の誤ならん  
【五五】は謂の誤ならん  
【五六】は謂の誤ならん  
【五七】は謂の誤ならん  
【五八】は謂の誤ならん  
【五九】は謂の誤ならん  
【六〇】は謂の誤ならん  
【六一】は謂の誤ならん  
【六二】は謂の誤ならん  
【六三】は謂の誤ならん  
【六四】は謂の誤ならん  
【六五】は謂の誤ならん  
【六六】は謂の誤ならん  
【六七】は謂の誤ならん  
【六八】は謂の誤ならん  
【六九】は謂の誤ならん  
【七〇】は謂の誤ならん  
【七一】は謂の誤ならん  
【七二】は謂の誤ならん  
【七三】は謂の誤ならん  
【七四】は謂の誤ならん  
【七五】は謂の誤ならん  
【七六】は謂の誤ならん  
【七七】は謂の誤ならん  
【七八】は謂の誤ならん  
【七九】は謂の誤ならん  
【八〇】は謂の誤ならん  
【八一】は謂の誤ならん  
【八二】は謂の誤ならん  
【八三】は謂の誤ならん  
【八四】は謂の誤ならん  
【八五】は謂の誤ならん  
【八六】は謂の誤ならん  
【八七】は謂の誤ならん  
【八八】は謂の誤ならん  
【八九】は謂の誤ならん  
【九〇】は謂の誤ならん  
【九一】は謂の誤ならん  
【九二】は謂の誤ならん  
【九三】は謂の誤ならん  
【九四】は謂の誤ならん  
【九五】は謂の誤ならん  
【九六】は謂の誤ならん  
【九七】は謂の誤ならん  
【九八】は謂の誤ならん  
【九九】は謂の誤ならん  
【一〇〇】は謂の誤ならん

る者なり。若し海軍五逆の者は、必ず無間地獄に入るが故に、忽ち佛の出世に値ふべからず。佛を犯すものは龍象等に喩ずれども、長壽を享じて佛に値ふべし。庶幾はくは汝等龍象を籠り身日清妙にして染縁の誠諦に隨ひ、心淨淨にして悲の妙門に入り、親しく今世に禪を得ることを明せんことを。空門、楞嚴經に云はく、三昧を斷ぜずして禪定を修するは、破石を承して其の飯を喰さんとし、百す劫の經とも具しと名くるが如し。文」と其人曰して「はく、法華經に云はく、若し此經を修せば其の疾を癒すと名く、疾かに佛道を得ん」と。此文は期を乘立の人得迫す。有なりと。此經非なり。其の義あれども未だ戒律の要を叩かず。具是れ圓覺經本有の戒律に此經を修する心の具れ持戒を破して理功徳を得と云ふは、是處あること無し。天台宗の意表に云はく、豈に戒を容して稱して佛徳と爲さんや」と。若し其の持戒の文に思へて、戒律を犯し、律華を讀んで勤有りと云はば、是處あること無し。具是れ遠因のみ。經に事理の觀門を修し、計非相施して方に戒を治す。其に云はく、智目行界海涼池に持る。文」と。唐の龍濟三藏云はく、直に空門を指して轉に佛意と爲さんとす。寧ろ戒律に非すと云ふことを知らん。一貴一賤を指しに出づ。戒律を犯す。兩卷の空門を修して、便り理、三昧を包むと謂ふ。唯、當に流弊の苦有るべきことを思はず。誰か歩理に賤住の疾を招くことを知らん。淨寶池さざるは乃ち是れ菩薩の本心なり。小愆を輕んずること勿れ。還つて最後の唱を成す。理、大小變べ修して方に慈の訓に値ふべし。小罪を妨ぐ大空を觀じ、物を擇し心を



【賊住】形と和合を論み自義の爲に論く自ら出家し、

【盗歩】心念なり。

【浮戒】并戒なり。

【小慧】小乘なり。

【最後】引。

【大乘】大乘宗。

【物を盗し】上は

【外俗空に】内

【實空と】二共に要

【雲云云云】浮雲

【穿穴、針穴は小罪

【衣食云云】諸言

【罪を造る】我昔

【止觀に云】前の

【法華論に出づ】

【眼前三昧】四禪

【四時六時】四時

【晡時、初夜、後夜、六時は

【前に見ゆ、領護國

澄ましむ。何の過か之れ有らん。乃至聖教八萬要は唯一二の爲に、外俗途に順じ内護智を凝

す。西方の常理戒淨を本と爲す。襄穿の小慧を護し、對空のた非を覆む。大非の善衣實持

多し。修教を奉ずるときは則ち解脫途かなるに非ず、塵著と相合は乃ち沈淪自ら久しか

らんとす。末代の行者、之に依つて之を行はば甘露の道遠なり、善に之に従はば眞の種子な

り、又古宗の弘法に云く、又世に愚者あり、心は無念を以て淨法を亦無なりと謂つて、後時

罪を造る。夫れ罪を造るは必ず、惡に依る。惡の無生對人は福すら尙有らず。況んや罪

をや、罪と福と俱に生死の處に對するを以ての成なり。又止觀に云く、善を事理の

兩識と名く。障道の罪處しては淨清淨なり。三昧現前し止觀行す。善の淨清なり。故に

根本三昧現前し乃愛即中の愛淨さが故に王三昧現前す。又と、弘法に云はく、善名の下は

若し事の戒無ければ世間尚無し、何に泥んや。佛を。行は言ふ、大乘何ぞ戒を執ることを

須んとは膠れり。文と。又上文に云はく、善に知るべし、隨處一、善くべからざることを、

世人事を蔑にして淨理を前ばんと欲する者は、誠かに知る、其處にして在ることを、

既に觀境を虧く、觀も亦壞ふこと無し。文と。大涅槃經に云はく、若し此觀を善して戒

する者は是れ魔の眷屬なり、我れ善に非ず、亦受持淨法することを聽さず。文と。法華論

に云はく、戒に於て決淨あれば法を受くるに堪へず。文と。又云はく、一切の戒戒亦觀

近せざれ。取、其破戒の人すら尚觀近せず、况んや自ら。名、其處の文に憑つて觀する

るをや、其れ是は則ち輪迴の句に墮つて空しく四時六時の觀を費し、其名持戒の文を傳いで

【四重】亦重  
 【上重】一重を以て  
 【二重】二重を以て  
 【三重】三重を以て  
 【四重】四重を以て

【富貴】字なり  
 【外資】字なり  
 【忠孝】字なり  
 【佛法の中】或有

【不中】中道に於  
 【其長】此に當り  
 【其住】不其住は  
 【一生】上上の理

【談論云云】無益  
 【若は人云云】大  
 【船を刺す】刺は  
 【サホリス】網は法  
 【又は書なり】莊子  
 【漁父篇の話】

裏りに四重十重の戒を犯すは是れと云に背き、亦にも申るか。菩薩戒に云はく、爾時正文、能に自ら、異尼は三伏の龍一切の法を無量、是れ調なり。佛、何故に異尼を説きたまふや。佛の言はく、昔に凡夫人等、此の法を説きたること知らば、佛終に異尼を説かず、是れざるを以てこの故に、佛に異尼を説く。文に、又云はく、菩薩の人、法は空なりと説かば則ち大罪を得ん。然るに、佛に説いて、佛に説くも亦大罪を得ん。即ち是れ外道富貴等々の彼の弟子なり。富貴等は謂ふ、諸法は性無なり、爾を佛法の中には亦は有亦は無と云ふと。若し人あつて一切の法は空なりと説かば、當に知るべし、是人は不中なることなり。而も、佛に説くは則ち大罪を得ん。何を以ての故に、空の法を稱せざるが故に、是人は自ら利して他を利すること能はず。又云はく、是の如きの凡夫無道の人、裏りに空の義を説いて、佛を利すること能はざるものは、是れ外道の類なり。或は是れ魔民なり。大涅槃經に云はく、是れ魔の眷屬なり、我弟子に非ず。又云はく、是れ佛に非ず、強ひて戒を持して一生に取縛せんことを勤む、現益を期すればなり。淺智を以て長を説き、短を説くこと能れ。若し世間の議論は實に益するところ無し、佛法の議論は、若は大、若は小、皆益するところ無し、乃至圓融無作も、日に説いて心に會せずんば、湯之の著の美味、冷水を飲すればども、而も口喉に入らざるが如し、又長者の子の能く釣を利すの釣を讀誦すと雖も、釣を刺すこと能はず、進まずして没死するが如し、仍つて大綱釣奪門を立つ。

建立支目門第八

【禪宗支目門】初の總標には建立支目と曰ふ、此には禪宗支目と曰ふ、建立は施設、支は分、日は施設、支は【戒綱】祇園圖經二卷あり、委記す【受戒】三世の諸佛皆出家成道と曰ひ、西天の六十八祖、唐土の六祖、皆佛心印を傳ふ、皆之に依る。【梵行】梵に梵行此には清淨、正には戒綱といふ。【寶珠】戒を持つこと、明珠を護する如くす。【戒綱】梵經經。

第八禪宗支目門と云、禪苑清規に大國見行の式を按ずるに十有り。一に寺院、謂く、寺の大小異なりと雖も、皆一樣に祇園精舍の圖を模す別に在り四面に廊有り、脇門無し、只一門を開く。而して監門の人有り、薄暮に之を開き、天明に之を開く。特に比丘尼女人並に雜人内人の夜宿を制止す。佛法の滅亡は只女事等に起るが故なり。二に受戒、謂く、大乘戒小乘戒人の情に在り、但大乘再生の情を存するのみ。此宗は戒の大小を擇ばず、偏に持戒林行を尙ぶ。三に護持、謂く、戒を受くと雖も護せずして破らば、何ぞ寶珠を得て打破するに異ならんや。禪苑清規に云はく、「受戒の後常に常に守護すべし、寧ろ法有つて死すとも法無うして生きず。」と云故に比丘の二百五十戒、菩薩の二百四十八戒、堅固に護持す。是故に戒經の説に任せて、半月半日に布薩して徒衆に開示するのみ。若し犯戒の者あらば必ず之を擯出す、譬へば大海の底に龍馬を留めざるが如し。四に學問、謂く、學八藏に凝り、行兩戒を修め、外比丘の威儀を備へて人々の福田と爲り、内菩薩の大慈を存して衆生の慈父と爲る。然れば則ち皇上の重寶、國土の良聲、只此に在り、因て以て興隆せんと欲す。五に行儀、謂く、僧は長齋持戒梵行よく佛語に順するのみ。一日一夜の式左の如し。上座に坐す時なり諸僧備儀に坐す。坐す時眠臥更臥更臥更臥更臥の作法あり、粥を食ふ辰の時長老離座偈時時食ふ末の時事。偈時時食ふ末の時事。然れば則ち四時



【土地神】守護の神。

【祈請】聖壽萬歳

【大會】未考。

【最勝會】金光明

【眞言院】禁内は台密禪の三宗を兼學す、故に眞言院止觀院を構ふ。

【水陸供】大施餼

【法華三昧】三種の三昧は台家の遺式法師の建つる所

【入室】參禪問法

【巡察】寮は同官巡は各寮を巡見す。

【昇座】陞堂して宗旨を擧揚す。

【五事】聲聞の弟子、世俗の言論に著せず、睡臥に著して行道を妨げ、

報ず。三に土地神の事、謂く、毎月初二、十六の兩日諸神の法施、處に隨つて同からず。四に報恩、謂く、毎月朔日今上皇帝の爲にし奉つて、般若經を講ず。十五日は先皇の爲にし奉つて大涅槃經を講ず。祈請の句有り。五に年中月次の行事、謂く、正月は羅漢會、二月は舍利會、三月は大會、四月は佛生會、並に結夏、五月六月は最勝會、七月八月九月は般若會、十月は受戒、十一月は冬節、十二月は佛名大會、指儀式有るべし。六に安居中の行事、謂く、毎日楞嚴會等、七に讀經、謂く、毎日一切經一巻を讀み奉る、若し一寺に百僧有れば、則ち一年の内に一切經六巻を終ふ、或は施主寺に入つて功徳の爲或は祈禱の爲に之を音讀す。八に眞言院の行事、謂く、常に水陸供を修すなり。施主僧を著るが爲に、功徳の爲亡者の爲に之を修す。九に止觀院の行事、謂く、法華三昧、觀經三昧、觀音三昧等を修す。十に入室、謂く、和尙問觀の日に遇うて之を建立す、此宗の一大事なり。作法問ふべし。十一に命書、謂く、半月中半日に命書常の如し。十二に巡察、謂く、毎月五日に一度昇座教誡巡察問訊す、昔如來五事を以ての法に、五日に一次坊坊を巡る云云。五事は律の文の如し。十三に開浴、謂く、或は公事或は施主開浴して衆僧を浴せしむ。五日に一次、齋月には毎日云云。十四に忌辰齋、謂く、或は先皇の爲にあり、或は先師考妣の爲に齋を設く。法期有り。十五に官家の做齋、謂く、大臣公卿齋齋を作す、其官人寺に入る時儀式有り。十六に修葺、謂く、衆僧集會して伎樂を奏し、八關の齋齋を修す、問うて曰はく、是の如き行儀は末世の機根は堪ふべからず。還つて苦惱の因縁と爲り、亦

【轉業】 住持業を領じて、農山を繞りて一區す。

【伎樂】 鳴鼓鳴鼓なり。

【八幅】 八角に作る。

【織師】 織屋。

【高野】 弘法大師名は海。三教指歸一書あり。

【佛骨】 法華方便品の佛、蓋は尾長き牛なり。

【飯を食はん云々】 是れ農夫織女に喻へて言ふ。

武蔵の國と爲らん、如何と云へて曰はく、佛法は修めて行じ易く、信じ易し。佛の言はく、安樂の道門なりと云ふ、但會得の道に修むと云はく、佛の道は安樂、修行の道は苦と云ふ、世間の男は自ら父母の能を學ぶ、只能を得んことを思ふて勞働を辭せず、必ず以て業を興ぐ。是に因りて世間の五福、富貴、尊榮、名譽、妻子、財物、是れ佛の道に修むる者には非ざるなり。但佛子の氣を學ぶと云ふ、是れ安樂の道門なり。彼世の業の力骨を修くが如くなるに非ずや。只是世間におもはるは方に成成す。河に流む力有る者は陸に立つて相み、車に在つて能行る者は地に立つて力無し。是故に佛家に修行する者は在家に入つて苦行し、惡行に染著する人は佛法を以て修行と爲す、亦方大師の教撰歸に云はく、好むところに修くは石を水に投するが如く、好むところに修くは肉を皮に投するが如く、夫と云ふ、佛の業生は苦を謂つて樂と爲す。佛の業はく、深く五欲に著すること、牛の尾を受するが如し、深く諸の病患に入つて苦を以て樂と爲すと云ふ、是れ佛の業の故に大悲心を起す。夫と云ふ、佛法は爾ら乎。佛の淨行の時身心共に安樂なり。遺教經に云はく、身安ければ即ち道隆なり。飲食、睡眠、を忘れ、文と此旨を思ふべし。佛弟子既に佛法を編がず。寃を師子の兒の羊猶と爲るが如く、亦農夫の兒の真兒と爲るが如く、亦織女の兒の遊女と爲るが如きか。然も世法は能く騙いで而して善善者に過ぎたり。佛法は已に絶えて懈怠病兒に超えたり。如今の佛子は則ち農夫等の家風を編がざる者の如し。飯を食はんと欲せば應に沙泥を喫すべし、衣を著けんと欲せば、應に木皮を著くべし。

大國説話門第九

【大國】 印度と中國。  
 【單裙】 楚には浣袴共那、三衣の外に僧却時此には敷掩、左肩を覆ひ雨袂を掩み、相は帶纏なし、衣を「ヒダ」となす。

【五十餘州】 小湖を數へて言ふか庫倫より交趾廣府に至る夷界なり。  
 【毘耶】 毗舍衛國中毘耶にあり。  
 【菩提樹】 摩竭國同佛成道の樹。  
 【觀音】 南無あり南北界を標し東面して生ずと。  
 【那爛陀】 唐には

第九大國説話門とは、謂く、西天中華見行の法式を語つて、修行の人をして佛法大海の中に入らしめんと欲す。西天の事情へ言ふに四有り。一に昔漢西京前朝博多の津兩朝の通事、李德昭八十歳の時語つて曰はく、余昔二十有餘歳、東京に於て梵僧を見ん。下に單裙を著け、上に袈裟を披す。冬、寒を苦めども雨を餘衣を著けず。明春臘上に歸る。曰はく、若し此に在らば掛網を見さん。仁安三年は子。二に成都府の僧語つて曰はく、淳熙元年甲午黎州に梵僧の來る有り、意氣神通神呪を誦すれば日、光を放つ。明若し星を著す、下に單裙を著け、上に單衣を披す。冬月極寒なり、諸僧袈衣を與ふ、手を離つて著けず。聖曆に非ずと謂ふ。衆を提れて明春西天に歸る云云。子。三に廣府の僧語つて曰はく、崑崙五十餘州、商船軍を逐うて往來す。時に僧來る。耳を穿つて環を懸け、下に單裙を著け、上に單衣を披す。雨天と大に同じ、冬月極寒を著けず、清府の威儀を見て讚嘆せし云云。四に天台山修禪寺。今は大和府誦前つて曰はく、謂く西土の毘耶里國、摩竭居士の方丈今に見在す。南海の僧常に菩提樹下に到つて觀音を禮す。一高城陀寺に五千の僧有り、多くは三藏の典を誦す。又佛袈和修の衣皆見在す。八塔の在るところ諸人往返遊觀す、是れ皆今時の事なり。又宋朝に奇特二十箇有り。一に淮南の僧語つて曰はく、清凉山に文殊師子に承つて現す云云。二に天台山に生身の羅漢現す、足跡にも亦光明あり。三

【自體】 自體の義、九卷の自體、其の義、

【法門】 法門の義、法門の義、

【奇王】 奇王の義、奇王の義、

【使身】 使身の義、使身の義、

【東越】 東越の義、東越の義、

【田業】 田業の義、田業の義、

【商量】 商量の義、商量の義、

【中印】 中印の義、中印の義、

【中印】 中印の義、中印の義、

有に奇現下、視すれば明も下、一四に極流華等の義跡一一一、五に青玉山  
 合の義を、六に青玉山の義、七に併の威儀、八に併の威儀、九に併の威儀、  
 十に併の威儀、十一に併の威儀、十二に併の威儀、十三に併の威儀、十四に併の威儀、  
 十五に併の威儀、十六に併の威儀、十七に併の威儀、十八に併の威儀、十九に併の威儀、  
 二十に併の威儀、二十一に併の威儀、二十二に併の威儀、二十三に併の威儀、二十四に併の威儀、  
 二十五に併の威儀、二十六に併の威儀、二十七に併の威儀、二十八に併の威儀、二十九に併の威儀、  
 三十に併の威儀、三十一に併の威儀、三十二に併の威儀、三十三に併の威儀、三十四に併の威儀、  
 三十五に併の威儀、三十六に併の威儀、三十七に併の威儀、三十八に併の威儀、三十九に併の威儀、  
 四十に併の威儀、四十一に併の威儀、四十二に併の威儀、四十三に併の威儀、四十四に併の威儀、  
 四十五に併の威儀、四十六に併の威儀、四十七に併の威儀、四十八に併の威儀、四十九に併の威儀、  
 五十に併の威儀、五十一に併の威儀、五十二に併の威儀、五十三に併の威儀、五十四に併の威儀、  
 五十五に併の威儀、五十六に併の威儀、五十七に併の威儀、五十八に併の威儀、五十九に併の威儀、  
 六十に併の威儀、六十一に併の威儀、六十二に併の威儀、六十三に併の威儀、六十四に併の威儀、  
 六十五に併の威儀、六十六に併の威儀、六十七に併の威儀、六十八に併の威儀、六十九に併の威儀、  
 七十に併の威儀、七十一に併の威儀、七十二に併の威儀、七十三に併の威儀、七十四に併の威儀、  
 七十五に併の威儀、七十六に併の威儀、七十七に併の威儀、七十八に併の威儀、七十九に併の威儀、  
 八十に併の威儀、八十一に併の威儀、八十二に併の威儀、八十三に併の威儀、八十四に併の威儀、  
 八十五に併の威儀、八十六に併の威儀、八十七に併の威儀、八十八に併の威儀、八十九に併の威儀、  
 九十に併の威儀、九十一に併の威儀、九十二に併の威儀、九十三に併の威儀、九十四に併の威儀、  
 九十五に併の威儀、九十六に併の威儀、九十七に併の威儀、九十八に併の威儀、九十九に併の威儀、  
 一百に併の威儀、



【赤縣】 支那をいふ。

【付法藏】 卷の三の取意、吉蓮夜曇の共譯六卷あり

【證果】 諸漏斷盡す。

二千天地の中央なり、佛の威神處地に生ずべからざるが故。中天竺國如来成道樹下に金剛窟あり。文是の如き野地に今豈佛法無からんや。然れば、唐在唐の口傳符合すべきか。問うて曰はく、今言ふ所の如くならば、天竺雲且佛法興雲なり、今證果の人有りや否や、予が眼に耳に聞くが如くならば、唐土に灰身の人有り、西天も亦爾り、前に之を説くが如し。問うて曰はく、若し爾らば日本にも亦有るべしや否や答へて曰はく、亦應に有るべし。難して云はく、印度赤縣は是れ殊勝の地、黑龍龍の八其中に生ず、日本は是れ邊地なり。不善の種故此に生ず、故にしも有り難し、又其地缺なれば彌有るべからず。答へて曰はく、大般若經に云はく、我涅槃の後、後時其の後五百歳、是の如きの經典、東北方に於て大に佛事を作さん。東北方とは日本是なり。未だ邊地を嫌はざるや。又戒律は佛在世に二百五十歳を云うずると、滅後末世に只四重を持すと經に同等なるべし。付法藏經に云はく、年、一百一十の比丘尼、六群比丘と交遊多とを彼量す、時に毘多懶懶を懐く。比丘尼の言はく、大徳師に自ら愛敬を生ずべからず、佛の言ふが如き、我滅度の後、初日の衆生は二日の言に勝り、三日の人は復考考ならん。是の如く展算して福徳衰耗し、是復間諷に、三言は損せん。況んや今大徳、佛を去ること百年復非廣儀の事を作すと雖も、正に其宜しきを待たり、何ぞ恨しとするに足らん。又其らば則ち證果漏盡は必ずしも威儀を重んず、只用て殷勤に眞修すべし。謂く、中印度は草衣を以て年を終ふ、餘方は薄ら乎。唐土日本は俗服を着くとも、而も得法既に同じく曠野に

【三衣を除く】 聖

【三衣を穿く】 偏衫の

【三衣を穿く】 和俗の一袖

【三衣を穿く】 雪山中

【三衣を穿く】 慧思大師

【三衣を穿く】 未だ聖位

【三衣を穿く】 六根清

【三衣を穿く】 慈覺七代

【三衣を穿く】 按ず地大

【三衣を穿く】 顯密の英

【三衣を穿く】 天台宗、

【三衣を穿く】 羅什の弟

【三衣を穿く】 羅什の後分の渡

【三衣を穿く】 一行の化す用

【三衣を穿く】 一行の化す用

【三衣を穿く】 一行の化す用

【三衣を穿く】 一行の化す用

【三衣を穿く】 一行の化す用

異ならず。三衣を除くの餘は、其れ俗服なり。謂はる僧服を止すとす、三衣筒袖を

謂ふ。俱寒郷には立袈衣の聖服有り。此に袈服と云ふ。我國の法は雪山之那國に同か

るべからず。或は六衣を穿く。然れども只寒服を著く、玄衣、黄衣、白衣、赤衣、黒衣、

云々。これども車一の南無天台は五品六根を證し、尊嚴は破して人衆を驚かす。是れ修身

に僧衣を著けて、爾時百福の法衣に著されども、而も其れ全無なるは、其れ勝利なり。

今問く、日本伊賀の相田の郡、法華院の僧覺、其れに於て、忍死言説

の因縁を説いて、即ち高僧に於て入寂す云々と。人知らざれば、其れ共と爲すと、況んや一重要決

に著く、日本木の、其れ機純、朝野近同じく、乘に著す。又國の地勢等、倫無、

三寶極盛なり、專心にて法華を持し、至信にて佛性を修まば、空しかんや。大宋の

峨嵋山居士文博、其れを贊じて、其れは、孰れか彼土居士を八たん、相去ること幾かに咫尺

の、鱗鱗たり六十六州、渺渺たり千餘里。へ剛無土藏の山、其れ相多莊嚴の地。四諦流

通を證し、尊嚴極高なり。其れに目を擧して、便を具る、何ぞ足行いて至ることを待た

ん。珍重珍重。云々。然れば則ち此は是れ勝也。佛法流布の方より、其れ佛性に著せ

ば、則ち如来法に著すべし、果も亦應に至るべし。汝等天竺居士、佛法の興と衰とを論ず

ること無く、只能く無我の忍を修し、亦能く我國の佛法を興せ。佛法とて、其れ捨修に云は

く、佛に四種勝妙の善法有り。一には戒、二には禪、三には般若、四には無著心、云々と。其

中禪定第一なり、一切を包むるが故なり。天台宗の止觀に云はく、三妙勝定に云はく、四重

の韻を押む。  
 【相去】 大宋日本  
 【勝妙】 つうなる  
 【地】 地の廣き  
 【多】 勝妙の境  
 【勝】 純淨土  
 【三尊】 佛法僧。  
 【無我忍】 人法無  
 後の故に、唐も日  
 本も「忍」といへば  
 違ひ。  
 【佛光】 佛光顯燈  
 功徳第一、佛の光の  
 照らすに譬する、  
 【果】 果をさしを、  
 【生】 生をさしを、  
 【真】 眞の之をさす  
 【法】 法をさす、  
 【法門】 法門二卷あり。

【阿耨多羅三藐三菩提】 阿耨多羅三藐三菩提を證し、佛の位に  
 入る、阿耨多羅三藐三菩提の意

五逆若し罪定を除いて餘は能く救ふこと無し。罪を減するは必ず戒に請る、善を生ずるも復讐の力を假るべし。大智度論に云はく、三乗は行處證に異なりと勸も、必ず無念禪定の力に請る。云々と。然れば則ち、八家の行處區別すと雖も、證依に至つては必ず無念に請るべし。乃至精名、念佛の行も、佛に非ずんば、大業を成ぜず。然に因つて地勢を思ひ、末世を慮り、種子を清み、祖道を法うて、其體に契入んと欲す。爾に種種の魔縁あつて之を妨げ、或は佛子嫉妬の心を起すありて、因て以て之を離す云々。今は只是れ此地を避くべきか、寶積經に云はく、二教論論の處は多く、者の煩惱を起す、習者は應に遠避すべし、云々。云々。山句なるべし、云々と。四別に誘家有り、東洛に誘者有り、野けんと欲するに、百由旬の地無し。一肯んと欲するに、射行有に、水中。當に之を如何すべき。再び巨海を渡つて迹を背宿の雲に處すべしと願ふ、唯願らくは百土を待てて、佛へ歸法の法水に潤はんか。無諍二味經に云はく、若し人我にた然有りて、佛して、一切の諸の人を輕毀せん、三千世界の人を殺すべしと願ふ、其罪甚だ重けれども斷ずるよりも過ぎたり。云々と。初と妨者自ら此罪を得ん、亦出家の具に以て棄すること無し。予慢つて其根原と爲る、又むべけん。云々と。仍つて大國諸語門を立つ。

阿耨多羅三藐三菩提 阿耨多羅三藐三菩提

第十回阿耨多羅三藐三菩提とは、大般若經に云はく、善男子、佛に答へて言はく、善男子、佛に答へて言はく、

【靈宮】 殿中。

【靈宮】 殿中。

【靈宮】 殿中。

【靈宮】 殿中。

【靈宮】 殿中。

【靈宮】 殿中。

【靈宮】 殿中。

【靈宮】 殿中。

男子、女人等、深般若波羅蜜多を行ひ、佛の如くして回向心を發せんと欲する者は、

是念を作すべし。諸の如來、正等覺の如き無障の佛、功德善根に是の如き性あり、是の

如き相有り、是の如き法行りと、通達遍知して而して隨喜すべし。我今應に是の如く隨喜すべし。諸の如來、正等覺の如き、無障の佛、通達遍知して是の如き諸の福業の事を以て無上正等菩提に回向すべし、我今應に是の如く回向すべし。佛善哉と贊す、以に至つて

誰を以て回向し、何を以て回向し、何の處にか回向せん。三輪清淨にして希冀する所無く、此言其を指して、諸の有情と平等に共に無上正等菩提に回向せん。文と。又云はく、菩薩摩訶薩、諸の有情の一切の病苦を見ては、是願を作して言はく、我當に精進して身命を

顧みず、六種の波羅蜜多を修行し、有情を破直し、佛土を嚴淨し、速に無上正等菩提を圓滿疾證し、我佛土の中、諸の有情の類、身心清淨にして、諸の病苦無く、乃至病苦の名をも聞かざらむべし。此六種の波羅蜜多に因つて、無上正等菩提に隣近せしめん。文と。

是故に、我今是の如く回向し、是の如く發願して、生生世世、般若に值遇し、最上如來の佛法を修行し、諸の衆生と同じく、共に大悲方便を修習して、盡未來際疲倦すること無からん。

興禪觀論十門大觀斯の如し。夫れ佛法不言なり、經卷に託して以て教示し、禪那無

意たり、一味を假つて以て體解す。是を以て龜毛兔角の稱、自ら難顯の妙理を表し、無心無念の法、滯く一心の靈宮に符ふ、此論を執する所以は、是れ其意を述べて佛法を興さんが

爲なり。但引く所の經論章疏、文義或は本意に違し、或は首題を謬らん、是れ語引の故なり、管に文義の訛謬のみに非ず、亦恐らくは法學齊しからざらんことを。但古徳の云はく、書に向つて文を引かざるが故に、首題或は悞る、首題の悞を以て善義理の處と爲んや。庶くは見ん者添削せよ。

興編漢國論卷下終



息

耕

錄





息耕錄開筵普說印施解

【普說】叢林に於ける式法。宋の熙寧、元祐の間、眞淨和尚、洞山歸宗に住して、獨特の禪風を孤起して、以て學人を指導するに始まると云ふ。

【齊後】齊座後。【鶴林】白隱禪師

【無】猶し遭の如し。

【少林忌】達磨忌

【勤】合せて。

【藤泉】相州藤澤

宣保第三委家、臘八の朝後、客あり。杖に背けて曰はく、鶴林近ごろ普說の印施あり、諸方往往に師を以て利者を釣る者と爲す。諸賢無大、將に師を炙かんはず、要して是るか、將又別に端山あるか。空を説を作つて、此筵を教はざる。杖が曰はく、要、其事あらん、世の極むること固きに成りて、師の此筵に離れり。師告し者、般の飯加行らば、豈其れ在座八十首の慧律虎頭を穿んで、世を遺るる者ならんや。孰か敬し事へて饑寒を感ることを爲さ。是れ從頭、杖が曰はく、成する所の善なり。居士、吾師に背けん。師、先文第五年中の年、江湖の諍訟に依つて、息耕擊鉢の古曲を離脱するもの一堪、其時年已未の冬十月少林忌の朝後、四顧の佳處數十村の夜裏、力を勤す。善を定めて、豫め一會の備を營辨す。老屋の傾側せるは扶起し、古井の地割せしは築開し、戸囀の脱落せるは釘釘着、梁棟の朽腐せるは懸掛着。澤微沙泥の積り、積物を掘つて國善す。休は遺方に走つて、我夢を化し、世は近里を廻つて、菜蔬を乞ふ。其餘は、更難して互に助贊す。晝間夜終、作務停業、閑且く之を避く。純と杖とを携へて、止つて白木に留れ、海州より者句、藤泉に杖を、石氏が隱處に入る。留滞處に月餘に向とす。其中間、請に飽き客を催するの外、杖を喚んで甘睡す。鼻竇鼻息として、屋樑を揺ぎ、梁塵を吹く。竹も巴蛇の肉に喰いて、便臥す。

【同火】 同輩と六ふ意。

【御責】 師匠と弟子

【合後】 異議同心二身回念の意

【萬卷】 名は萬巻

【大慧茶果】 名は茶果

【妙喜】 名は妙喜

【五祖六演】 法制の衆

【海會】 叢林に衆會する衆僧

【從奥】 すすめそのかすの意。

【魚魯の譏】 文字又は文章上の譏

る時の如し、來客皆驚異す。純、航の二子之を患ひて、哀求して曰はく、忠見附託あり、大師願くば後學を策進せんが爲に、普記一編を唱へよ。書して歸つて同火に示して、以此間の勞働を慰めん。一編撰成して之を領く、領くと雖も果さず、二子更懇求して、赤子の責むるが如し。此に於て歸恬如として、目を收めて唱ふる者、或は五行、或は十行、唱ふるに隨つて、航之を筆記し、純之を訂正す。師、心の浮ぶ所に任せて之を唱ふ、次序を顧みず。航又唱ふるに隨つて書して傳ます。師責共に合後を忘る。卷いて石氏が暖處に到れば、終に五十束紙を得。居士の口はく、我聞く、萬卷の法語、妙喜の長書、佛眼の普說は天下の三絶と爲す。知らず從上の諸老、杖を添へ蔓を牽いて此の如く叨叨雜語たる底ありや。萬卷の法語か、妙喜の長書か、一相俱に手を拍して大笑するのみ。既にして仲冬普雲の前、一日師即ち歸陸、茶籠を開いて慰勞す。諸子羅圍して茶話怡悅す。純、航の二子並び坐して、燈下に之を讀む。諸子信受勸誦して、踏舞を忘るる普累日。海會正に散筵に向はんとする頃、闍衆、羅拜して之を梓にせんことを請ふ。師急に丙丁童を呼ぶ、諸子恐れ畏して卷いて懷にす。向後、間暇を得る毎に、從奥する者若干次、師總に顧みざるもの蓋し茲に三年。今歲寛保癸亥の秋、忠、譯の二上座、入室して曰はく、普說の如きは之を梓にするときは、師は二つの患あり。之を梓にせざるときは道に一つの害あり、蓋し試みに之を論ぜん。夫れ抱道の士は道の存する所を愛して、文字あることを見ず。文字の人は文字の刁刀のみを點検して、總に道の存する所を知らず、必ず魚魯の譏を惹かん。是

【輓推】前より引き渡より推すをいふ。

【馬馬の語】魯魚の誤りに同じ。

【忠庵主】白隠下の文忠。

【隣驛の書肆】駿州副津驛の紀伊國屋藤兵衛。

れ向に謂ゆる師の忠たる所以の一つなり。吾聞く、樹、林に秀ぶるときは風必ず之を撃ち、行人より高ければ衆必ず之を憎むと。今若し之を梓にせば師共れ一頭地を衆に抽づる者なり、衆必ず衆を撥ぎ前を切つて之を妬害せん。是れ向に謂ゆる師の忠たる所以の二つなり。若し夫れ之を梓にせざるときは、後生晩輩争つて之を傳寫して、誹すれども休まず、各筆墨を舐つて、遂に道業を棄廢せん。是れ向に謂ゆる道に害ある所以の一なり。上頭の二つは師且く忍受せば是れ可なり、後頭の一つは多少の後昆を被役して、許多の道情を戕賊す、必ず衆を識者に惹かん。初めより説かずんば止みね、我が輩、師の爲に大いに嘆惜する所の大故なり。譬へば輓推の車に於けるが如く、之を刺むの功還つて鈴喜の一炬に孰若ぞ一師曰はく、「予も亦之を知れり、然りと雖も睡後暫時の戒諭語、諸記の失あり。焉馬の語あり、必ず笑を大方に見ん、是れ亦予が惹びざる所なり。待て他日憶達高司の師の電眸一瞬を歴て、而して後に諸君の需を察がん。此に於て諸子大いに力を得て、東、胡、再び之を筆記し、澁、譯、竊かに之を訂正して、忠庵主が達の野氏を誘ふ行輪に及び。野氏驚喜して之を激す、遂に去つて濃東の結林の丈室を叩いて、展拜して悉に所求を演ぶ。丈室固く辭讓して可かず、三止四請、果して丹書と正書とを得、恰も隣驛を山下に懸むに似たり。又走つて京師に逝く。中路にして隣驛の書肆紀の藤子に奇遇す。精しく終始を告ぐ。藤大いに驚喜して資財を抛つて之を扶く。日ならずして板印成る。愚即ち羽翰を放つて、東の方我同火に告ぐ。諸子、各香を焚いて、青かに濃東を望んで合掌す。嗚呼忠も藤

【丹指】 眞心。

【解嘲】 後漢の楊華(字は子)嘗て太玄、法言の二書を作る、或人之を嘲るを解く爲に解嘲を作ると。

【眞淨】 克文禪師

微つせば、京師を廻ること數ひ百千障すとも、此業を成ずること難はす、難も思微つせば法に聲色を逐ひ、花柳を耽んで此正因を成ふこと能ふた一處、其の弊、微ひ多少の丹指ありとも、則ちの高麗を解すんば、此網を拂いて京師に在る無道者、空に四美並せる者か、何處かに此書を聞知し、其南する其是日、能を成じよつて之を觀せんと欲す。我輩相識して云はく、「京洛數日、泥んや其家十草家の風塵をや。何れの處を指して、想が所在と爲して之を觀せんや。知の命命に於ける、何より聞かざる者に似たり。儼然として數じて曰はく、「悔らくは昔日客中語つて曰く、彼が啼を止む、今其れ啼を咬むことを爲す。嗟我を知り我を譯する者は其れ唯青龍か。是れ彼が師の傍に在つて、聞見する所の大難なり。客の曰はく、「此網未だ成らざるに、其將に誰か起らん」とす。吾子蓋其始末を記して、以て之を救はざる。一紙が曰はく、「解のを讀みずして、師を寶護する者は、是れ侍者の任なり。我豈之を譯せんや。」と云うて、終に之を記す。記して以て解嘲に似ふと謂ふなり。

宣保(名)三の(名)冬(名)冬(名)道(名)道(名)後

侍者玄軾(名)好(名)記  
侍者大(名)廣(名)講(名)書

白隱禪師息耕錄開筵普說序

大れ普說は、大覺世尊、華嚴會上に在しし日に根據して、眞淨祖師、洞山歸宗に居せし時

【正受老人】 至道無難の法門、道鏡慧端禪師。長野縣下水内郡飯山町正受庵に居る、白隠の師。  
 【紺鏡】 學人を接待する手帳。  
 【興請】 衆請。  
 【禿僧】 禿は僧服のこと。  
 【劍刺氏】 版木屋

【三句繪章】 文辭の精密麗美

に寢首す。爾來、宋元明清賢び本邦の禪林、往往に在り。大意廣く古人の直覺爲人の處を説いて、切に學者をして痛く自ら省發せしめんことを要するのみ。是を以て、息翁老子、苦言直説に、深く警むる所あり。學者知らずんばあるべからず。茲に駿陽松蔭白隠老禪師あり、早に正受老人に参じて、徧く引問を採り、多歳行脚し、到る處の禪林、能を如何ともすること無し。後來一夜不寐に、正受老人の直覺爲人の用處を徧見して、人を撞するに常に向上の紺鏡を用ふ。是故に胡轅亂撞に似て、暫しく諸方の許可を受くる者、毎毎出を望んで退く。是より先、元文庚申禪風の交、興請に迫つて鼻刺士言の言葉を許す。因遠の禿僧、先を争つて至る者、其歳收と云ふことを知らず。閉筵の日に丁つて、學者を批誨するに、言説一篇あり。頃ごろ、野村下の客遠く斯庵を討し來つて曰はく、「吾曹二三子、將に劍刺氏に命じて、京師に有かんをす。爾れども爾會て請さずして言ふ、逆數の陳爛葛藤、毒を早く一煎に持せざるや」と。二三子曰はく、「野、吾、斯庵の如き、師が直截爲人、直截呵罵、文字を撰らざる根實を以て、則ち如ん直截是れ師の苦心無漏なることを。請ふ吾曹參禪の警言と爲して、以て同好の者に公にせば、相思足りなん。潔ひ世其略を上言にすと雖も、何の慚することか之れ有らんや」師曰く、「此ことを授きして、今請ふ校閱して之に一語を加へよ」と云ふ。予、痛辭して曰はく、「禪師の機、毒雷の舌、大いに古今未食の口を食いて、吾々佛前不説の法を説く、片言隻字を撰らば、斯れ佛前佛祖の談なり、豈世の紅句繪章、黄を挿んで白に對するの比ならんや。通稿、其本色に

【堯を羨勝】舜、堯を羨に觀、勝に觀るの故事。  
 【行を縵ふ】行は瓦製の樂器、縵は雜聲の樂。  
 【劍去つて久し】史記に「去りて劍を學ぶ又成らず」と大道の落所を閑却して、徒に言句葛藤を追求するなり。

一任して可なり。何ぞ況んや之に拙語を加へば、予恐らくは光彩を埋没し去らん。「客曰はく、高論、議を容れ難し、只其論を簡首に書せよ。」と。諄諄たる請意、再びより三に至る。是に於て予肅然として之に應へて曰はく、「然らば請ふ、各其意に參じて後に句に參ぜよ。雲參夜參、是に由つて參て懈らすんば、疾く堯を羨勝に觀んこと必せり。其時に當つて、單して意句俱に相下らざることを知らば、窓を糊し行を縵ふに一任す。且つ謂へらく、昔説は不説なり、一句子あり。千佛萬祖説不説、千人萬人會不會。若し箇の漢あつて、本を斯宿を精かざる以前に向つて、不説を會取せば、禪師不説の説、徹困の恩に辜負せざらん。否なるときは劍去つて久し。」

時、寛保癸亥八月二十九日

濃東桂林嗣祖沙門禪祚天啓焚香拜書

【總鏡】鳥林の定むる總鏡。

【佛果和尙】五祖法演の法嗣。

【南宋建炎】南宋高宗即位の時。

【明禪大師】雪竇重顯、智閑、光祚の法嗣。

【佛果】五祖法演の法嗣。

【佛果和尙】五祖法演の法嗣。

# 白隠禪師息耕錄開筵普說

侍 卷 東 胡 錄

昔佛果和尙、南宋建炎の始め、潭州の火山靈泉禪院に住せし時、明禪大師の百單の法を把つて、評唱する者數次、佛堂責むるに書を以てす。其苦兼辛、實に骨肉に通ざり。佛果領つて休す、定に貴ぶべし。山野今復息耕十刹の孤誕を就つて單兩度を喚り、高廣座を設け、公然として屏拂を棄つて、滿堂の諸老を輕忽する者は何ぞや。予安保の初め業風に吹かれて此破院に住す、單丁なる者二十年、其中間、江西の實際、湖南の海衆、經に録に評唱を請ひ講義を覓めて、或は數百業の名流を及し、或は數十行の異端を綴つて予が罪狀を妨ぐる者、大凡三十度に向とす。其中間、志氣憤然たる者あり、西京の諸老に談へ、近迹の情信に報じて、強ひて力めて之を折らんと欲す。念に隨つて書を案がんと欲するに、常住の枯白、庫間の銀酸、東の方奥羽を極め、西の方記筑を盡めて誰か明ら知らざらん。復恐る、近世道微に法衰へて、不羈の晚進無頼の後生、其始め對る時は閑雅なる態度、定に愛しつべく、善願の志氣定に費ふべし。特に請へり、生死を念とし、透過を求むる處の眞正の衲子なりと。既にして未だ一月を経ざるに、靈鏡を濯洗し、汚濁を堪看し、伴を引き黨を結んで、横放縱逸、庭階を涉つて喚呼し、廣席に立つて圖誌す。宗師も伏す





【三叉路口】 三途

【鷹扇】 無用の義

【獨狗】 獨狗、輩

【法術】 又法術、

演法問暢するをい

ふ。

【龍象】 尊前、又  
は力量ある僧。

が放つて行脚せしむ。若し汝が今の醜態を見れば、將高ほんか將悲しまんか、獨者、予が同  
 火の兄弟七八輩、法を言成得せんが爲に、搏石擊土、赤薪紫炭、鐵索を懸懸し、鐵輪を喚懸  
 して霧を拂つて出で星を載いて入る。寮介片蓮浴室東洞、變千草ぞや、幾度苦そや、見る  
 者飄汗し、聞く者淚浮ぶ。願ふに夫れ何れの處の若林か、此勞働にあらん、豈其の容易な  
 らんや。而るを汝が輩、手脚を汚さずして入り來つて、多少の鐵索を打す。是れ什麼の心  
 行ぞや。龍天も悲み哭し地祇も嗔り恨む。古來皆敗の流類を見るに、一箇も勝を企する  
 者なし。人禍あらざれば必す天罰あり。三叉路口宜其れ遠からんや、定に怒るべし。我  
 平生此等の輩を増んで、縦得ば必す買いて論はんと欲す。昔蒙の鐵索、鐵日目に七八  
 箇を打役すとも何の過かあらん。是れ只祖師涅槃し、法苑周流して我が祖堂門下、遙遠す  
 べきの重關あり、超出すべきの疎林あることは、夢にも曾て知らざるが爲なり。諸力高德  
 の諸老、涅槃の宗師、數百輩を誦して、用しとせざるも、跡を尋し光を消んで、自ら鷹扇  
 にし去り、自ら獨狗にし去つて、縱は眞正佛道の弟子あつて、百箇を誦めて、鷹扇裏求すれ  
 ども容れず、結淡を甘ひ、鐵索を忘れて、徒爾として一生を過すつて、丘壑に衰朽するこ  
 と、定に宜なり。法鏡を懸壁し、真風を曳曳する者は此輩の部類なり。予亦之を感んで願  
 みざること久し。嗚こゝろ退方の碩德、近隣の格老、志を同じうし、壽を定めて辱く予  
 が緩怠を責むるを見、此に於て四輩の龍象大いに力を得て、蜂の如くに起り、蜂の如くに  
 攻む。或は赤子の母に求むるが如くなる者あり、或は黒吏の民を却するに似たる者あり、

【真下】 守持なき

【真地、祖魁】 山の怪を魁、宅舎の怪を魁。木石の怪を魁。  
【愚痴山頭】 正受老人をいふ。  
【六六】 愚堂定庸山崎に嗣ぐ特賜大圓實徹國師。  
【無礙】 武藏國益谷奥北寺開山至道無礙。法を愚堂定に受く。

之を辭するに難たぐ之を拒むに力を失す、學法はすることなく、遊臥處れ谷まる。熟子  
が平生を顧ふに、慚むべきの事若なく、或るべきも無量なし。詩も亦知らず、禪も亦會せ  
ず、百端千端、徒勞草草、志に祖魁し、起き來つて亦春練す。一箇も宗國の形に似たる  
なく、一箇も後世の形に似たりと。一も亦之を知つて常に此れ之を憎むと雖も、手脚  
の著くべきなし。道般醜惡の徒實禿、全身の地獄に穢辱せられて、七丈八離、夏夏分散し  
了らば、人を構うて其處を掃除し了つて、龍潭潭を關して、萬正依つて睡眠せんのみ。何  
の思ふる間かあらん。若し復後世の諸君の時節に依つて、一夏を全うするも惟れ可なり。  
是れ又理ひて、一とするとするに足らず。詩、書、法、亦亦願に非ず、高車も亦善願に非ず、欲する  
所は諸方の碩徳、同輩の諸老、予が故國を卒業せられず、兩箇も隨願向せらるることを得  
ば、相俱に薪を拾うて煎茶し、間を偷む。一箇に舊話を打し、一月二月共に枯淡を樂まんの  
み。日蓮江湖の袂子に對して、昔報すべきの第一兩伴あり。吾姑め龍潭の詩、鶴魁に  
引かれ、魁魁に導かれて、後無山頭、極澤の深林に入つて、一箇の破庵主に見ゆ、號して  
正受老人と道ふ。老人講は祖淵、大圓を祖とし無難を父とす、眞正無事の難を漢なり。平  
生垂語して云はく、我此禪宗は南宋の末に衰廢し、傳へて大明に對つて一箇も傳へては絶す。  
餘亦殘つて日域に在りと雖も、隱かに日裏に斗を見ゆが如し。汝が輩、皇朝禿破凡夫、夢  
にも曾て之を知らんや。又云はく、汝等相似の漢、一に似て禪も亦會せず、教に似て教も  
亦果さず、律に似て律も亦成せず、儒に似て儒も亦得ず。總に箇の什麼に似たる、衣架

【輪馬】 輪は輪人車大工、馬は名。

【驚きみつむる】 驚きみつむる。

【味】 くちをあく【長老】 住持を稱する敬語。

【狗子佛性】 趙州の狗子に就ての公案。

【類を鳴らし】 類を謂ふ。

飯囊、又云はく、一鉢に一箇の重圍あり。圓吏何り坐して、各其所能を試みて、而して後に其をして透過せしめん、輪馬と稱する者あり、輪を懸つて推し出して即ち去る。畫工と稱する者あり、戲畫一紙を拂ひて推し出して即ち去る。妓兒は高歌一疊し去り、淨家は高聲念佛し去らん。特異稱法と稱する者のみ、作樂生か是れ諸佛頂上の禪と問はれて、口呖して、茫然として架立して、只兩腋の汗を見ん。是に於て高祖の賊奴なりと爲して、遂に國外の宿東と爲らん、寔に悲むべし。又云はく、一汝が輩、他時一員の長老と爲つて、請に積家に赴かんに、衆を領じ徒を隨へて、覆枚の曲圍を重ね、覆種の珍饈を列ねて、公公然として坐し、抗抗乎として演じ了つて、高談朗笑せんに、一箇あり。納僧、眉を皺むる處の語頭を把つて、輕輕に移寄せん時、如何が祇封し去らん。恐らくは胸喘ぎ肌汗して、滿地一場の愁を見ん。然らば則ち禪門に在つて、坐禪苦學せざれば、馳騁を晴地裏に種うる者に非ずや。何の時か此患難に逢はんも未だ知るべからず、寔に恐るべし。又云はく、近世の狗子、狗子佛性の語を把つて、真念純王せん者、一箇の前後過を得ずと云ふこと無し、繩かにかしく透過するるときんば、自ら得たりと爲し自ら悟れり。爲して、高談大口す。是れ只生死の大患にして、已見を益増し我見を増長す、如何せん。東施臨天淵を隔つることを、眞正安樂の田地に到らんと欲せば、轉た佛れば轉た攀せよ、轉た了せば轉た參せよ。果して祖師最後の因縁を見んこと、字上と見んが如何ん。何が故を燈下に爪剪らざる。又信陽に富家あり、果代、富、國司を置す、鏡を賜し常に奏む、時時に貴賓



中に掲言して、以て由せりと屬し、書して以て獅子に授く。法華經の獅子、是れ已靈を  
 擧揚するの義に、靈命を擧揚するを依託することを知らず、寧ろか擧揚義にして、人をして  
 見しめず、或は此を小靈に依託し、法華中に結言して、以て情解の場と爲す、空に受ふべ  
 し。予、偶彼小靈を以て一見するに、靈命の在る間八正道に非はく、靈界はく、法  
 身に三種の病二種の光あり。更に須らく向上の一發あることを知るべし。是時、吾耳聞を  
 を悟せず、諸人の言に隨順せん。其、山河大地、明淨色空、一切衆生、隨處を隨順す。其  
 法身の病と爲す。是を一種の病と謂ふ。或は諸法の空を以て隨順は法身に法身理あることを  
 覺し、是を法身非れすと爲す、亦是れ一種の病なり。是は法身を透得すと雖も、論議し將  
 らぬ處は、或は法身すべき處なきことを覺し、或は主觀すべき處なきことを覺し、或は指  
 すべき處なきことを覺し、亦是れ法身を覺せず、法身を覺せず、隨順すべき處なきことを覺し、  
 是れ一種の光、透脱せざるなり。後二種の病も亦是れ一種の病なり。是れ法身を覺せず、  
 覺し能く向上の一發を覺るときんば、三種の病一掃す、一掃と爲すして爲せん。始  
 めてこそ靈命の靈界の心と爲みたり。法華云はく、靈命、是れ何れも靈命の靈命、是れ何れ  
 の靈命、隨順して靈命なりと爲せば、靈門入師利はく、靈内の靈命、是れ何れも靈命の靈命、  
 靈命なり。是れ又法身の靈命を覺せず、如何が法身に靈命なりと爲すことを覺し、乾峰底は  
 靈命者、靈門には靈命なりと。二大徳の説話、一變ては靈命を覺し、靈命の靈命、如何く、鶴

榜樣

洞上

宗の意

新聖

名洞上

綿密の宗風

曹溪

のこと

標榜

此は曹洞

新聖は地

真傳洞上

六祖大師

【不落】 百丈の野狐の話。

鳥の尾の如く、象の鼻の如く、獅子の乳の如く、塗毒鼓の如く、大火聚の如し、纔に擬議するるときんば、曠野に遁し、是を法窟の爪牙と看せ、是を須臾の命と看せ、須らく知るべし、萬古百林の榜樣なることを、吾聞く、永覺大師は、龍昌無明和尚の嗣、洞上の豪傑にして大いに吾輩の宗旨を中興し、尊く吾輩の真風を扶植すと、今の其人其名を聞くと、きんば、其を正しく容を改む、定に一代の龍門なりと、何ぞ謂はん、其の吾輩の如く醜陋に、其の如く魯野ならんとは。若し内集果して永覺の手に出でんとせば、永覺の得處を以て、信を後し。廬ふに夫れ狂悖の禪和、亂に自ら胸膈の片骨を鈔錄して、名を永覺に借つて、信を後しに取らんと欲して、竊かに録中に挿入する者ならんか。其の吾輩の情識は妄解を以て、參學の事了すと爲せば、夢にも曾て乾嚙老人及び一門大德を見えず。其の恣態にして善知識と稱して可たらんや。謂ふ莫れ一擲と消せずと、手捏草鞋千百位捏も亦空しく力を勞せんのみ。祖師血滴の承蒙を把つて、執家初心の談論にたも及ばざらんや、空に悲むべし。古不落の兩字五百生、野狐窟裡に暗在す。若し一句子の話を以て、錯て誤解し了つて、參玄衲子の眼目を瞎却せば、罪過十方諸佛の身血を出すに譬へん。吾今人我を還しらし胸膈を恣にするに非ず、恨むる所は多少情識の解、晨轉流行して、他の後昆の悟門を妨碍し、古人真正の宗旨を染汚することを。叢林の衰弊、祖庭の荒涼、一に此等の邪説に依り。是れ何の心をや。吾聞く、大明國裡、禪苑敗蕪し、真風滅絶すと、信なる哉。吾日域宗門の頹朽すること既に亦此極に至るや、定に恐るべし。謹んで參玄の士上に

【頭仰】 暴悪を奉  
ひ敬ぶこと。  
【乳臭】

【長沙】 名は景岑  
南泉普願の法嗣。  
【鹿野】 名は景岑  
鹿野降に削ぐ。

息掛録

白す、乾峯の示業、大難大難、容易の足を生せされ、如上の狐涎を舐りされ、但單に參究せよ。一旦不合に破著して通身白汗流るれば、爆然として乾峰をき得て徹悟なることを見ん。雲門和し得て高古なることを覺せん。息禪師し得て諸當なることを了せん。永覺無し得て寒暄なることを知らん。鶴林判じ得て親切なることを領はん、豈淺ならずや。古人云はく、藟參の窟將、發足超方すれども、打頭に黑髮手段底の宗匠に遇はざるが爲に、見地に存在す一縷の甘心して志を枯し前を忘れ、之を鑽り之を仰ぎ、之を濁し之を汰すと雖も、但己れを敬重するのみ。體衣布鞋を脱去すること能はず。一旦時緣成穩し、出て來つて人の前にするとも、取具の間、塵機未だ然らざることを、蓋し教野境界の中より得て、人に難獲し將ち來られて、便乃ち他を尋ねて出ます。此語、此等の人の爲に設くるならんか。今時諸方一片湛寂の清水池に浸殺せられて、即ち言はく、諸師を看ること見れ、話頭は是れ自性を掘渡するの泥土、文字を知みること見れ、文字は是れ已儘を縛殺する葛藤なり。と。怪しいかな汝が謂ゆる自性は胡爲の物ぞや。既に是れ縛殺せらる、將是れ狐兔に類する者が怪しいかな汝が謂ゆる已儘は胡爲の物ぞや。既に是れ掘渡せらる、將是れ芋栗に似たる者か、知らず誰が家の滯貨ぞ、何處の寶庫上より者般の奇怪の物を求め得來るぞ。既に是れ將長沙の謂ゆる識頭を得する底の寶庫子と爲さんか。將鹿野の謂ゆる深山の古窟裏、無轉知の大王と爲さんか。他日危亡を顧みざる底の箇子あつて、一句子の話頭を把つて、面前に擲向して云はく、是れ甚麼の道理ぞ。と。此時、汝泥土と作し得て

【五十七卷】 五家  
【七卷】 高僧の戒  
【五卷】 高僧の戒

【五十八卷】 智者  
と好む

【五十九卷】 一千八百十八卷  
【六百十八卷】 一切部の部道なり

【六百十八卷】 なくあふ  
たり

んや、葛藤と作し得てんや。只恐むくは難んことと亦續り思ふ事、汝くことと亦汝き果さ  
 ざらんことを。今時一般世智辯聰の諸師あり。此世に於ては、彼土の諸師大いに  
 言句を造るるまじきを、汝が惠命を汝後する所の極處なる無常の諸師なればなり。其諸師  
 を善法し、其言を聞する事は、吾が善法の後、を化聞する所、權に善法する所の門處  
 の諸師なり。此に極處の諸師に非ずこと。此に於て此諸師を聞天女の儀、大いに高  
 遠を開いて、其師を善法する所分たす、碌碌として師を稱め、非相として師を稱して、其て  
 高踏の風標と目して、作祖を稱述し、諸方を非難す。其師は氣を動揺たり、鵝鴉は飽い  
 て畏服たり。爾若し其儀の儀をくれば、點滴し亦留せし、其く是れ地獄の衆生なること  
 を。所以に道ふ一倍と信じて其に論ぜざれば、身を以て情施をばす。汝知らずや、  
 五千四十八卷一字、善法の前、同じ二三の賢聖、其師の全身なること。其語  
 浪天を過して、日月も亦輝を吞み、其師も亦光を失して、日月に對峙たりと稱す、爾も  
 汝が輩、予知し其行をすることば、鵝鴉の畫出でて口を噤じ、大山を以てさるが如し。  
 大山豈爾を思ふて、身を護する者ならんや、其鵝鴉に在るのみ。汝は身を以て眼を瞶し  
 て、此毒煙を避くるも、行雲流水、業業在如何が廻避することを得ず。汝は汝の業を夜  
 叉を備へて、毒に飯を中せしめ、飯を食へて、彼背後に隨つて其大土を遠ること三三師す  
 とも、寸上も身を護す處なけん。爾も一箇半箇、宿に毒竹を、其竹の底の鐵釘の汝あつ  
 て、憤然として歸り來つて、彼毒焰の烟に向つて投入して、乍ち大死一回せん。一回し起



【女身捨身】法の  
ため身命を捨つる  
なり。

【無上正等正覺】  
梵語阿耨多羅三  
三菩提、佛陀の智  
徳總稱を稱す。

【目連】直指人心  
見性成佛。

【無記】中間の性  
三性の一。

【龍藏】蘇東蓮の

【東蓮】名は蘇南  
有善地所に嗣ぐ、  
黃龍派の祖、  
【龍藏】黃龍海堂  
實修の心、  
【大目】闍悟克勤

き來つて、過量の大妙頭を擡うて、圓天下を流して眞正の種子を見る時、臂を張り手に唾  
して、大妙頭を擡べて妙境を納め終ち來つて、華鬘に仰ち洒がんに、誦いで伊をして放身捨  
命せしめば、豈痛覺ならんや。一徹あり、平生正當して曰はく、「一徹を、錯つて外に向つて  
馳求すること無し。但一向無作無作にし去り、不生不證にし去り、無作は無作の直は、  
不修不證は實相の現現、其故に十力の調練、之を離して無上正等正覺と爲す」と。是に  
於て伴侶盡く身を捨け、情念を置いて、毎つて無作を成さんと爲す。殊に何れも、此は  
是れ少の造作なることを、若し人見性せずして、惡業を離れ朋友を訪ねて、惡業の行  
業を伴さば、輪に墮れ實情の所爲、生死の土邊なり。終日無作を成んで終日無作を打し、  
終日無作を求めて終日無作を打す。若し又一回無作を打し去らば、終日有爲を行すれども即  
ち是れ無爲、終日造作を打すれども直に是れ無作、蛇牛一器の水を喫して、乳毒遂かに殊  
なるが如し。是處に血脈命に曰はく、「若し見性せずして、一切心中無作、無作の行を作す、  
是れ大罪人、是れ大癡人なり。無量劫中に落ちて皆皆として、前人の好惡を離れ、  
し。若し無作の法を無さんと爲せば、先づ相違ひ有り性して緣起を成らべし。若し見性せず  
して無爲を成さんと欲せば、其處あること無し。東林の常樂禪師、當に相傳へ、尋  
常垂誦して曰はく、「唯空、眞淨阿闍梨の諸老、祇一圓の禪に參りて、七師の道を傳ふ」と。  
大慧曰はく、「蓮華の窟、平常無事、無見解會を立とざるを以て道と爲して、更に悟を求  
めず、却つて諸佛諸祖、德山、臨濟、曹洞、雲門、巖谷等情見性之法を以て蓮華と爲す。

【に關ぐ】  
【山】  
在澤塔傳  
に關ぐ

【上堂】  
世言多  
見難、長老と爲す

【廬山】  
江西省都  
陽湖の南時  
【南堂】  
名は元靜  
五祖禪に關ぐ

楞嚴經の申の所説、山河大地皆是妙明真心の中の所現の物なりと云つて、胎上の語亦是  
 凡建立と爲す。古人文を讀むを以て聖と爲して、佛學を講じ、後學を學ぶ。眼  
 無に故皮なく皮下に血なきの如し、佛に就つて如何し。情然として覺えず、彼に覺せずべ  
 し。圓覺經に曰はく、此世の衆生、佛道を希求し、佛を求むしむること無く、唯多聞を益  
 まば其見を増長す。又云はく、末世の衆生、善文を求むと雖も、邪見の者に遇うて未だ正  
 悟を得ず。是を名けて外道の徒と爲す。邪道の過多なり、衆生の管に非ず。と云は相續  
 のみたらんや。所以に眞淨和尚の小論に云はく、「今時一般の漢あり、佛の平常心。是れ  
 通と云ふを執して以て極見と爲す、天は是れ天、地は是れ地、山は是れ山、水は是れ水、  
 僧は是れ僧、俗は是れ俗、大盡三十日、小盡二十九、並に是れ草間木、不知不覺一向に  
 迷ひ將ち去る。忽ち若し他に我手何ぞ佛手に似たると問はば、便ち道ふ、是れ和尚の手  
 其何ぞ驢鼻に似たる、便ち道ふ、是れ和尚の脚。人人箇の坐處あり、麝筒は是れ上座が  
 坐筒、便ち道ふ、某は是れ某州の人事なりと。是れ何と言ふことぞや。且つ錯へて會する  
 こと莫し、凡百の施爲福平生の一路子を要して、以て穩當なりと爲して、定ち將ち去り、  
 合し將ち去つて、更に敢て別に一步を移さず、坑塹に墮落せんことを怖る。長時一に生  
 盲底の人の語を行くに、一條の杖子寸寸も持ち得ず、緊く把著して憑み將ち去るに似たり。  
 以上眞淨和尚、學智に謂つて曰はく、「備廬山の無事甲裏に去つて、平地に去れ。」  
 と云。而るに今子孫死灰の如し、良に覺すべし。南堂の靜禪師曰はく、「見性は須らく掌上

【尸陀林】 具には  
尸陀波那、梵語  
(Siddhahin) 森林と  
譯す。

を見るが如く、了了分明にして一一田地穩密なるべし。と。備參玄の上士に勸む、大丈夫兒、猛く精彩を著けて一回見性せんことを要せよ。穩かに見性分明なることを得ば、捨て去つて箇の難透の語頭を參決せよ。必定して涅槃經に請ひる諸佛世尊、眼に佛性を見ること、掌上の阿摩勒果を觀るが如しと云ふことを了知せん。爾へ祖師最後の因縁を徹見せん。此に於て初めて法窟の瓜瓞を採み、壽命の神符を授けて佛果に入り、魔界に迷んで釘を抜き機を奪つて、大慈雲と歎き大法施を行し、大いに東方衲子を利濟し、舊に依つて眼瞶鼻直、無事高階底の一老僧、是を真在佛祖の足跡、眼瞶鼻直の人と爲す。爾に許す、茶に逢うては茶を喫ひ、飯に逢うては飯を喫ひ、惰知として日を過すこと。無事も亦得たり、有事も亦得たり、神祖も亦手を扶むこと得き、萬雨の黃昏も亦消得せん。若し今時に効うて八萬無量の暗窟を認得て、自ら得たりと爲し、自ら活けりと謂つて、亂に佗の別人の齋戒供養を乞ふ。是を未證、謂證、未得、謂得、増上慢の人と爲す。恐るべし。施主一粒の米、粒粒實丸麩沙、施主一滴の米、滴滴汗滴湯屎、施主一縷の袍、縷縷針刺熱鎖。嗟出離を求めんが爲に別業兼衣、結つて解却に喪亂せられて、一生請つて胡亂の道人と爲る。眼を合すれば即ち是れ黃泉の入り、生、生、命、命の苦患に懲りず、再び三塗の舊里に歸つて、嬰娑を掛けながら深く泥習の底に沈んで永劫の苦輪を見ん。最も恐るべきは、解却の迷惑なり。古七賢女あり、尸陀林に遊ぶ。一女、屍を指して諸姉に謂つて曰はく、一屍は這裡に在り、人甚の處に冑つてか去る。之中に一姉ありて云はく、存嬰作嬰。諸姉



と雖も、未だ清兵も佛法の盛衰を見ず。我開く、法華は罪悔の本志にして、一代の經王なりと。是に於て起つて着讀すること一返す。一返し了つて箱を開きて大息して曰はく、「此經文、因縁を説く。中間佛有一乘、諸苦皆寂滅、法ありと雖も、是れ彼臨の諸座の清世の諸王にして其國の家なり、寔に此の經を讀して大いなりを説くことなりし。後平住院正に不感に及ぶ凡、宿願を成じて再之を讀む。讀んで第三の寶品に到つて、從上の疑惑撲然として解け、經王の王たる所以、經王として目前に遊つ。深奥に入り、此と豆菴の事つてあるが如し。聖子聲を放つて捨つ。初めて知る、昔曾得しを得する何の事の因縁、大いに錯り了ることを。是に於て存して正受老人、平生の受用を復見す。其人大覺世尊、兩華、佛徳を欠くことを了知す。臨濟正和して好く二十棒を與ふるに。清淨、迦葉尊者に問ふ。其の佛徳を得るは外、更に何の法を以て得る。迦葉曰はく、「阿彌、門前を經ず、倒却し落せよ。正受佛に對して正受難解、恰も無言の正聲を取らるが如し。其の佛徳、萬の佛果眼識す、爾を令時、佛の法を以て華公然として法を説くことなり、」

「此中、中間佛の事なり、中間佛説するところとは大事故也。此の經を讀むは、情識の凡解と名く。佛の聲の在るを測ふに似たり。經王の言はく、此の經を讀むは、佛の聲を思ふ、佛の聲を思ふことなり」と。

「此經も亦往往に情に隨つて注す。第六代の經王、後門を問ふて云はく、「前より其のて早晩を知るべきに、昨日はく、「佛佛して根に對す、佛佛はなし」と。是より、此經の眞の黒火坑、佛佛も亦性命を全うすること能はず、徧界一生の方便目、初には其の佛佛を撰す



【六音】般若多羅  
滅後、同學の者六  
宗を聞く、達摩悉  
く之を破す。

【熊耳】達摩滅後  
熊耳峰に葬る。

【髓皮】達摩少林  
子に去るに臨んで弟  
子に告その詣る所  
を陳ぜしむ。

【單于】匈奴の將  
象骨、雪峯山、一に象骨  
雪峯山、一に象骨

【萬葉】千羅なり  
と、萬葉、千羅柱、珠  
と、萬葉、千羅柱、珠

【首山】名は首念  
風、首念、名は首念

【石頂】名は慶諸  
慶諸、名は慶諸

【黃大呂】十二  
月、黃大呂、十一月は

【法】大摩羅、法  
法、大摩羅、法

【子】利、子、利

【三】佛、佛、佛

目紫髯の樂神を見る。偉なる哉、獅筋一掃して六音、膏を呑み、靈膠八轉して神絃密に續ぐ。其光香至の人にして元王家の子なり、來つて熊耳の林梢に依る。好んで無乳の鐵笛を吹く、人の胸胃を絶つこと能はず、却つて自家の靈皮を分つ。七形にして踏つて一頭の瞎死駒を放出す。胸促り蹄高うして、百六十の骨、毒乳漲り飛び、八萬四千の毛、瘀血汗争ひ湧く、大千を踏碎し長空を嘶き裂く。百億の須彌走つて、地に立ち、六を親土碎けて、國と爲る。傳へて南泉山下に對つて、大巖青然に明ら。長沙短州、林梢各在して、甚だ必測に怯く、向來、大萬波日の老渡、好んで骨を敲いて、單于の脚を踏つて、大いに樂を奪ふ。象骨、餘韻を續ぐ、萬葉、行を續る。羅城の二山、古曲曲に入る、轡車高懸なり。

首山石霜和するに黃鐘大呂の音を以てす。其聲微にして心に、野泉流る。ま、閑静を清む。最も苦きは吹いて廣南の光寒、院裏に對つて、毒鼓倒に擲く。魂喚ば懸嬰けて、鐘を伏

すること八十餘編、其餘の口啞し耳聾する者、如くは鐘音を奪。聴は絃を觸つて、剝山に入

り、圓は影を抱いて、耳響に撞る。其音、大いに響ふ。鐵錘、河に叩きて、木を碎落せ、獨

狗、自封に閉んで汗汗流る。前人あり、郭氏の子にして、福州巴西の人なり、此を東山

老人と遺ふ。昔、破頭山頭に在つて清音十、中ころ白雲甲虫に來つて、爲る。一朝、野原に入つ

て、衣を奪つて破確を遠ること一匝、毒鼓噴り如神、淫淫然なり、腹腹乎なり。雷鳴を輸

りて毒鼓を打つが如し。佛之、其爲に驚を失し、一靜之が爲に膽を裂く。狂喜唱へて、聲

衝陽の浦に滿つ。佛氣味いて、響、龍潭の底に徹す。林梢を穿て、石は虎丘の長崎す。なり。





【華南】 事を爲す

【五祖或公】 雲門

【下三祖】 五祖師戒

【真師】 大滿

【高僧】 名は了義

【五池】 殺父、殺

母、殺阿羅漢、破

和合僧、出佛身血

【類生】 他生の佛

【慧心陀術】 慧  
心信物深信。

事を引いて、参禪を以て益なしと爲す。殊に觸らず、支公の業、専ら稱名念佛の人なることを。嗟自家一日の凡庸を主張せんと欲して、一箇兩箇志願厚からず、見地言ならざる底の再生の老秃兵を拾りて、従上多少の傳燈の賢聖を謗倒し、父子不傳の秘訣を刺害せんと欲す。五逆も亦比するに足らず、瀆漫たる罪累、懺悔を言ふ所なけん。夫れ禪の外に淨刹なく、禪の外に心なく、禪の外に佛なし。曹溪は八十度の淨刹、南嶽は三生臘の老僧、大雲瀟海、大盛、真を絶す、再生あり再生あり、再生あり再生あり、天堂地獄居士淨土、一闍、衆に何して托出する廣の智知意寶、毫釐も懸念するともんば、真人、夜壇に汲む。若し夫れ類生の事を以て、佛法の極則と爲せば、眞師具二三行の書を漢土に歸べて足れらくのみ。曰はく、「專念稱名して淨刹に往生せよ」と、何を多し其論を以て、十萬里の波濤を淡いで、此見性の法を留るることを用ひんや。爾知らば、觀心法經に曰はく、「禪身の長六十輕河淨俱低、山多由旬」と。彌子細に諦觀して看よ、是れ則ち直心見性無上菩提の道に生ずして何ぞや。慧心陀の術都曰はく、大信は大信を見せよと。参禪は則ち了了分明に、這箇の古佛を見做する者なり。意外對に佛を求めば、佛に是れ罪魔の種放なり。故に佛に曰はく、「若し色を以て我を見、香聲を以て我を求む、他人有道を行じて、如來を見上ぐることを能はず」と。大凡一切の如來、三障の身あり、法身具在、此には佛一切處と云ふ。報身處合耶、此には淨土と云ふ。化身轉應奉用、此には無常寂默と云ふ。衆生の身中に在つては、即ち寂智用の三たり。寂は是れ法身、智は是れ報身、用

【俱世  
止句】  
量するし

無量無量  
距離を計

法身佛現すと。達磨大師はく、「法身佛現すと云ふは、即ち化身佛現すと。智慧を修すれば、化身佛現す。法身佛現すと云ふは、法身佛現すと。法身佛現すと云ふ者は化身佛現すと。斷惡修善、法身成道すと云ふ者は報身佛なり。法身佛現すと云ふ者は報身佛なり。善い道理を論ぜば、一神すも無し、何ぞ三あることを得ん、此に三身と云ふは但人智に上中下あるに據つ二なり。下智の人は心に福力を興して、妄に化身佛を見る。中智の人は心に煩惱を斷じて、妄に報身を認む。上智の人は妄に報身を離して、妄に法身佛を見る。上上智の人は内照回互、即ち佛の心を行せずして佛を得、直に佛んぬ三身と云ふ法と總て其の不可取不可説なることを。經にははく、「佛說法を説くは、衆生を度せず。衆生を度せず」と。其れ斯を之れ謂ふ。佛はく、「法身の實は、言語音聲形相文字を以て求むべからず」と。所説なく所重なく、只自性虚通のみ。眞に曰ふ、法の説くべきなき、是を說法と名く。報身化身は、身中に隨つて應現說法す、皆實法に非ず。寔なる哉、報化は眞佛に非ず、又說法の者に非ずと須らく知るべし、諸佛の無量千萬億の隨類現の大小の形量ありと雖も、畢竟此三身の中を出でず。「金光」明皇、王經に云はく、「此の如き三身具足して、阿耨菩提を成ず」と。報化の二身は假名にして、法身は是れ眞實常住なり。前の二身の爲に根本と作る。然るに經中分明に説く、佛身の長六十恆河沙俱低那由多由旬」と。試みに道へ、是の如き眞人の身量、報身と爲んか、化身と爲んか、將又法身と謂はんか。既に言ふ、報化の二身は機利生すと。知らず那由廣博の世界に現じて

【四部衆】比丘、  
比丘尼、優婆塞、  
優婆夷。

【弘誓】弘大の誓願の意。

【三心】一喜心、  
二孝心、三大心、  
【射策】射御、射

息 掛 錄

那箇大身の衆生を化するや。謂ふ莫れ、廣淨刹の如きは衆生大身なるが故に、佛も亦大身を現すと。若し果して然らば、彼世界の大菩薩衆及び四部衆等、幾恆河沙の身量ありと爲るや。彼恆河の如きは、周匝四十里、其沙彌密にして微塵の如し。縱ひ一恆河沙、半恆河沙乃至方丈裏の沙數と雖も、鬼神も亦盡すこと能はず。況んや六十恆河沙をや。佛眼も亦量ること能はず、實に是不可思議の量、不可思議の量、此は經中難解の玄旨、無量諸佛黄金の骨髄なることを。若し強ひて論ぜば、六十恆河沙は是れ色聲等の六塵を指す者なり。大凡世間所有一切の諸法、六塵を超出する處、一箇も亦無し。彼所有の六塵諸法悉く是れ無量壽佛黄金の全身なることを覺了せば、立地に生ずる苦境を超過し、立地に無上正覺を成せん。此時に當つて、東方も亦蓮華刹土、南方も亦蓮華刹土、西方も亦蓮華刹土、北方も亦蓮華刹土、亦別處なけん。是を遍一切處廣大寂定窟と爲す。萬法を貫通し、群有を銷融して長劫不變なる者はなり。又經に大衆讚誦の人を以て、上口上生最上の教と爲す。大衆經とは何ぞや。黃卷大衆經の謂に非ず、畢竟決定して自家本真底の佛心を指す者なり。而るに亂に參禪益なしと道つて可ならんや。然りと雖も、大慈弘誓の寶智、中下の機を挿せんが爲に、隨處に來て來つて、自ら法を宣修し、伊をして眞生の心を決定して、三心四性の眞果を成辨せしむる者は、開いて禪門に在つて、純工に眞く進修に肆かして、而して復に參禪益なし、精工なしと謂する者は、眞實せずんばあるべからず。是れ只及第の進士、射策功なくして郎當流落、日を四方に關して、郎

【三賢】一七賢位中の初め三、五賢、六別相念處、總念

願の資を事とする者、指を指地に折つて、兩臂三指を遊雲流の官人を數へて、官途頼なく、仕路途を指物と稱して、彼遊雲律師の弟子を指授する者を知し、是れ縁流を攀する能はずして、自ら徳を事と道ぶ者に非ずや。其人の曰はく、「一にして淨土を成願するは、虎にして翼を挟む者なり」と。是れ何の縁流の妄談をぞ。唯平手師子、佛が菓、夢にも曾て度及さんや。縁流に縁するときは、三賢四果、心群を淨治す。賢聖氣を失し、佛事、語を乞ふ。無邊に徳を添へ類を假つて、而して後に那、得る者に非ず。近世浪華岸、一譯一千年、如来の出世に逢はざる處の老僧、佛中尊に就きて問言して、慨然として起き來つて、毒流を吹くこと萬斛、火口を閉いて曰はく、「唯にして淨土を成願するは、猫兒の眼を失するが如く、淨土にして願を成願するは牛背に帆を張るに似たり」と。當時の靈語と雖も、亦是れ也太奇。二十年前、或人の曰はく、「向後二三百歳を經ば、唯徒盡く淨家に入らん」と。予が曰はく、「淨家者し、佛の純淨せずんば、其人必ず淨家に入らん。淨家者し、專念稱名して、三昧を行することを得ば、其人必ず佛に歸せん」と。盡大徳の曰はく、「三四十年前、二の上人あり、一を慨然と云ひ、一を歸學と云ふ。但愚は何許の人と云ふことを知らず、姓氏も亦詳かにせず。平生稱名專念して、頭念を教ふが如し。一日乍ち三昧現前、圓覺煥發して、直に流の初由に登つて、對湛老人に曰はく、「湛問ふ、爾は是れ何處の人ぞ。」愚云はく、「山城。湛問ふ、「何の宗をか修習す。」愚云はく、「淨業。」湛曰はく、「無量壽尊年多少ぞ。」愚曰はく、「某甲と同年。」湛曰はく、「即今何處にか在る。」愚即ち

【雲棲の株宏】明末佛法漸衰の時、淨一致を唱ふ。

【境釋】六祖法寶境釋の略。

【魔羅】梵語なり能奪命と譯す。

右手を握つて少しく舉ぐ。溝はく、「備は是れ眞の淨家の人なり」と。是れ即ち予が向に謂ゆる淨家若し專唱して三昧獲得することを得ば、必ず禪門に入らんと、是れ其證なり。恨むる所は淨にして禪に入る時は、日裏に星斗を尋ぬるが如く、禪にして淨に歸する底は、晴夜に星斗を數ふるに似たり。近ごろ聞く、遠境の禪林、動もすれば磬盤を張り、伏鐘を居る、高聲稱名、四境を驚す底聞又之有り」と。嗟向に謂ゆる三百年後、懸議定に恐るべし。江西濟北の諸聖、皆び出頭し來るに非ざるよりんば、輒く救ふこと能はず。予常に之が爲に、牙戦ぎ膽震ふ、忠勇參玄の上士、誰に伏し膽を嘗めて、宜しく自ら策進すべし。法寶壇經疑問第三に曰はく、「若し相の説を論ぜば、西方此を去ること十萬八千里とは、即ち身中十惡八邪なり。」と。近代大明萬曆の間、杭州雲棲の株宏なる者あり。彌陀經の疏鈔を撰す。疏中に曰はく、「境釋一書つて五六竺を以て、極樂國土と爲す。五天震旦同じく是れ娑婆穢土と爲す。何ぞ須はん分別して東を願ひ西を願ふことをし、娑婆、娑婆を去ること十萬億土なり。蓋し境釋は持學人の記録なり、何ぞ説なきことを保せん。境釋の如きは慎んで之を初機に示すこと勿れ。若くも非器に投ぜば、便ち其魔に墮せん。其指すべし」と。嗟雲棲は胡爲る者ぞや。偏固の儒生か、小乘の教人か、且、淨家言は、觀經の深理を知らず、看經の眼を具せず、妄に自ら境釋を判議する者か。將又魔羅波旬の部屬、圓頂方袍の容を現じ、文字般若の衣を着け來つて、難讀微妙の聖言を普言せんと欲する者か。大いに怪しむべし。或人の云はく、「然らば、熱羅ふに、安公見性の眼なく、入理の力に

【大師】 六祖大師

【曹溪大師】 六祖大師。名刀。其利、毛を吹くが故に。  
【白毫】 三十二相の一、佛の眉間に白玉の纖毛あり。  
【青蓮日】 梵語に優曇羅、蓮華の一種、その葉長く廣く、青白分明。大

乏しきが故に、進むに宿昔最上の正囚なく、退くに末生流俗の患難あり。是故に専念稱名、聖業の迎攝を感得して、以て信果を成ずると歡す。眞正直指の金文を教覽するに大いに懷素に達し、俄かに所望を失す。是故に憤然として彼疏鈔を綴つて、以て師言を救はん。と欲する者なり。儒に非ず、教に非ず、羅波旬の部類に非ず、只是れ少しく文字を解する底の無眼の一僧のみ。宋明の末、此黨の如し、何ぞ怪しむに足らん。若し果して然らば雲棲が此舉、甚だ良策に非ず。幸に惟れ大師の慈訓あり。蓋ぞ恭敬し、尊信し思惟し熟讀して、他の聖域に入らんと欲せざるや。妄に自ら文字の小伎を恃んで、觀の高明の至理を請倒せんと欲する者は何ぞや。自ら錯り了ることは是れ可なり、之を書に下して、多少の後人を教壞すること悲しいかな。大凡凡意に反するを以て、之を聖言と爲し、聖言に違するを以て、之を凡愚と爲す。聖言若し凡意に反すること無くんば、是れ凡語ならんのみ、何ぞ貴ぶに足らん。凡愚若し聖言に違すること無くんば、果して是れ聖言か、實に敬すべし。原ぬるに夫れ曹溪大師は傳燈過量の大導師、黃梅七百衆の中更に第二人なし。其兒孫、四海に綿互して若の如く、布星の如くに列る。安公の如きは、故紙中應覺情解の一布情、轡を並べて驅すべからず。彌識らずや、曹溪古鏡の中、天堂地獄淨刹極土、總に是れ沙門の一隻眼、輪鎚開かず、吹毛入らず、去なく來なく、生なく死なく、五須彌山の白毫光、四大海の青蓮日、七重の寶樹、八功德池、心上に煥爛として目前に歷たり。黑繩、衆合、叫喚、無間、總に是れ無量壽尊紫磨金の全身なり。或は喚んで東方瑠璃光土

人の眼目の相となす。  
**【七重の寶樹】** 七重に并位せる極樂の寶樹をいふ。  
**【八功德池】** 極樂淨土に存在して、彼の國の莊嚴となす。  
**【黑繩、衆合、叫喚、無間】** 何れも八大地獄の一。  
**【寶報】** 天台四土の一。寶報土とは菩薩の中道を證し、無明を斷破したるもの居所。寶報とは多劫の斷證に報ゆの謂。

**【邯鄲枕上】** 唐の盧生の故事。

**【備】** 株宏を指す

と作んも亦得たり。或は喚んで南方無垢世界と道はんも亦得たり。元是れ一箇の大圓覺海に人本具の性、其業感の強弱、福力の多少に隨つて、所見同じからず。地獄は之を見て鑊湯爐炭と爲す。餓鬼は之を見て火聚膿血と爲す。修羅は之を見て刀兵戈戟と爲す。凡夫は之を見て娑婆穢土と爲す。専ら荆棘の瓦石を見ては、之を踐みて淨土を求む。諸天は之を見て瑠璃玻璃と爲す。二乘は之を見て方便有餘土と爲す。菩薩は之を見て寶報莊嚴土と爲す。諸佛は之を見て常寂光土と爲す。知らず衲僧之を見て漫つて什麼とか作すや。須らく知るべし、天上の珠網、泉下の鐵網、直に是れ羅縵千重の衣、淨刹の美徳、地獄の洋銅、全く是れ百味具足の食、靈乾坤大地、更に第二月なし。此れ庸常下劣の士の了知すべき所以に非ず。祖師門下參玄の上士、嶮崖に手を撒して、絶後に再び懸つて始めて此三昧に入得す。此時理と智と冥し、心と境と混す、之を眞正古佛の來迎、參玄上士の往生と謂ひ、之を名けて上品上生最上の機と爲す。宏若し一回、者般の淨刹に入得せずんば、縱ひ爾千萬億の刹土を抹過し、八千度の往生を歴盡すとも、總に是れ夢中の幻事にして、邯鄲枕上一炊の羹糲ならくのみ。祖師分明に道ふ、「西方十惡八邪を離つ」と。是れ至公至正の論にして、六方恆沙の刹土の如來、同時に出現し來るも、一字子も亦移易すること能はず。我且く備に向つて説かん、「西方此を去ること十八里、西方此を去ること十八肘、西方此を去ること一寸八分」と。是れ又至公至正の論なり。如何が子脚を著けん、那處の村里を指すとか言はん。擬議せば壁間に七尺の折朱杖あり。自家の所見に違するを始んで、願輪不

【優鉢華】優曇華  
父員には優曇華  
華といふ。梵音「二  
umita (Sampur) の音  
なり。瑞應華、又は  
有といふ。

【野干】又衰干と  
書く、野獸の名  
梵語「悉迦羅」とい  
ふ。

【迦毘羅城】聖父  
首領摩那淨飯大王  
の居城。

朽の傳を捉へて、淨邦と竺土と別すること得ざる處の衆人に擬して可ならんや。是れ  
他なし、株宏の意に窮かに謂らく、大歸の如きは空に響り得て甚だ好しと雖も、甚しむ  
は元是れ南方の樵人、文字を知らず經典を讀まず。頑固無智、直に彼我の縁の華に異  
なること無し。」と。爾れ其の牧漁、隸の華と雖も、豈淨邦と竺土とを辨得せざる處あら  
んや。今三歳の孩兒と雖も、淨邦あることを尊信す。況んや聖賢難遇、間出聖智の大師  
師をや。尊ぶべし、曹溪大歸諸聖の懸崖に墜する後鉢華眞正力の聖者、圓輪に乗じ來る  
者にして、從上の佛前十大曾て説き及まざる底の秘訣を唱へ出すこと、皆神龍の阿盧  
海に入つて、苦鹹の海水を飲轉し來つて、清涼甘露の膏雨と作して、積に漲ぎ陸に澆ぎ、  
無礙自在にして、枯骨を洪旱に蘇するが如し。又世の大徳長者の大寶璣の裡に入つて、  
世間希有の雜寶、手に任せて操し來つて、凍餒を救ひ枯急を賑すに似たり。意度にはあらず  
清解を容れず、今時阿葛藤を攀縁し、臭糟粕を嚙咬し、情卜意測して、高麗に雲き出す處  
と目を同じうして語るべからず。佛は説く、十萬億土。」と。祖は道ふ、十萬八千里。」と。  
大威神力大智力寔に龍象の躡跡、獅子の攀躑、褒議せば野干麟裂せん。然るを安公、公然  
として判じて曰はく、身經經つて五天竺を以て極樂國土と爲す。」と。又曰はく、蓋し璽  
經は皆學人の記録なり、何ぞ詭無きを保せん。」と。救ふに依稀として誇るに彷彿たり。  
肖歎に曰はく、地志を按ずるに、謂ゆる長安の西門より、西天迦毘羅城の東門に至つて、  
凡そ十萬八千里なり。雲棲の麓中に增經鋪つて五天竺を以て極樂と爲すと曰ふ、良に據



【大禹】 夏王の稱

【頓漸】 佛成道の初に菩薩の爲に頓に覺きし法、華嚴を頓教といひ、小乗の漸を漸次に大乘に漸むる法、阿含、方等、般若を漸教といふ。眞言宗にては大日如來の代たるを密教とし、釋迦、彌陀等の教を顯教となす。

あるのみ」と。是れ何の閑妄想ぞや。嗟有難良に按じ得て好し。試みに言へ、大禹より以來、窮簡の地理志にか五六竺國十惡八邪を隔つと説き來るや、可情許。何ぞ地志を按ずる底の暇日を廻し來つて、讀んで地志を熟讀し、予願に律意を觀察せざるや。觀じ去り觀じ來つて、忽然として佛道に撞着して、以て據と爲ば、覺えず手を拍して大笑せん。大笑する既は何れ什麼ぞ。宏公眼なうして安に現言を判著す、寔に笑ふべし。有義も亦同じく是れ葛藤窠裏の人、恰も綾子の戯を見るが如し、他に随つて上下す。譬へば兩箇の睦波斯一箇の單文の貝葉を拾ひ來つて、背地裡に向つて相共に力を盡して得斷す。暗發菩提一字も亦隨當ならず、却つて笑を傍觀に取るが如し。勾下して論するに足らずと雖も、恐らくは多少の行人を害せん、所以に許多葛藤す。途中に又けはく、境經は慎んで之を傍觀に示すこと勿は、苟も半辭に技せば頗ち狂魔に墮せん、嘆惜すべし」と。是れ又甚ぞ慎まざるの顯言なる。後にはかしく、境經の如きは慎んで安に判斷する勿れ、苟も暗鈍無智の小見を以て妄に之を判せば、便ち狂魔に墮せん、嘆惜すべし」と。原ねるに夫れ番番出世の如來、衆生をして佛知見の道を聞かしめんが爲の故に、世に出現す。是れ諸佛の本志なり。中間頓漸半滿、顯密結終等の經卷ありと雖も、畢竟唯有一乘人人本具の自性に教歸す。曹溪大師も亦然り。行由統開定慧戒悔等の法門を説くと雖も、畢竟一乘見性の法を傳へて、四七二三の賢案及び五家七宗の諸老をさへに、各此見性の法を傳へて、漸に代つて化を揚ぐ、専ら諸佛出世の本志を演ぶ。終に隻字も西方の事を談せず、片言も往生の事を

大崎王 世尊を  
 奉提希 思惟上  
 譯す 摩訶闍維  
 婆娑羅王の后妃に  
 なりして阿闍世王の母

説かず。後事の初機、問又講かに壇經を把つて讀む、終に狂魔に墮する底一箇も亦無し。却つて各大器を成就す。請ふ宏、嘆惜することをも休めよ。是故に大元南海の宗寶曰はく、  
 『禪經は文字に非ず、達磨單傳直指の指なり。南嶽、青原の諸大老、嘗て是指に因つて以て其心を明め、後之を以て馬祖、石頭諸子の心を明す。今の禪宗、天下に流布するは、皆是指に本づく。今よりして後、豈是指に因ること無うして、心を明め性を見る者あらんや。』  
 是れ亦表社の公論にして、宏公僻地裏一人の私言と實に霄壤なり。蓋し根に利鈍あり、機に大小あるが故に、説も亦千般百種なり。譬へば世の良醫の胸中、初めより一方を貯へずと雖も、病者多様なる故に、方劑も亦多般なるが如し。夫れ願生淨土の一門の如きは、大醫王教善者、奉提希獄中の患難を救うて、其をして唯心自性の淨土に歸せしめんが爲に假に且く施設する底の善巧、暫時の一方なり。宏が如きは諸佛善巧の眞理に達せず、心外別に淨土ありと死執し、心外別に佛ありと妄想して、諸佛土なく前衛後巷、總に是れ諸佛の利土、諸佛身なく南隣北舍、全く是れ諸佛の全身なりと徹了すること能はず。十惡八罪、西方を隔つる等の眞正の說話を聞いては、自家の所望に違するを惡んで、強ひて排斥して他の聞見を塞がんと欲す。若し宏が意樂に任せて、壇經初機に可ならずして讀むことを容さずんば、單嚴、方等、法華、涅槃、其餘の了義の諸經皆盡く初機に可ならざるとせん。何が故ぞ、大師既に佛心の玄微に透徹し、教海の淵底を窺決して、諸佛と同一舌に演べ、諸佛と同一口に唱ふるが故に。且つ華嚴合論にはく、『一たび佛力を念じ戒を修し願力を

【合論】 桂宏の詩  
眼に映るることを  
免れ、幸なるを云  
ふ。

【少室】 達摩の代  
名詞に用ふ。

【三伏炎】 三伏炎  
を避けて涼をとる  
こと。

【三都經典】 無量  
壽經、觀無量壽經、  
阿彌陀經の三經を  
云ふ。

【畢波羅】 畢波羅  
消を云ふ、御珠滅  
後第一結集を行は  
れし所。

【無事甲中】 無用  
の物を置く所なり

發し淨土に生ぜば、是れ化佛の淨土なり、眞の淨土に非ず。見性に非ず、及び無明は是れ一切如來の根本智なりと了ぜざるが爲の故に。是れ有爲なるが故に。阿彌陀經の如きはなり」と。妄若し一見せば、必定して初機に可ならずと爲して、之を書に筆せん。合論何の幸ぞや、蓮池が謬誤に觸るることを免れ得て、之を非難に投せば非難に隨せん等の批判を聞かず。臺積大士、大寂定中多少の慶幸ならんか。大凡老幼尊卑、縑素賢愚、正眼に看來れば、如來の智慧徳相を具有すること、分毫も欠少せず。初機なりと爲して棄廢すべき底、半筒も亦無し。然りと雖も、其最初發足の日、辨道の利害を知らず、造修の急緩を辨せず、且く假に名けて初機と爲す。此に於て聖教を披閱し師友に諮詢し、大事を了畢し大略を成就し、大辯才を具し大法施を行じて、慧日を常夜に輝け慧命を蓮季に當む、之を名けて眞正報恩底の佛子と爲す。爾を彼も亦初機なりと爲して、強ひて解へて具をして念佛せしめ、此も亦初機なりと爲して、強ひて解へて具をして念佛せしめば、少室の謂ゆる此土大乘の根器、神俊の才を具へ根器の質あつて、他後山臨濟にしまり、馬祖石頭にしまるべき家の可畏の後生、半死の老爺に驚ひ、半生の阿蘭に伴うて、水邊林下白晝に目を收め、頭を低れて念佛せば、誰が家の子を備うてか佛の慧命を續がしめ、末代の蔭涼樹と作さんや。眞風乍ち地に陸ち、御種永く斷滅せん。男兒大丈夫、請ふ其れ之を擇べ。此時に當つて、三都經典の外、畢波窟中初機授學の爲に結集する底の諸大乗經、三藏の金文盡く無事甲中に歸し、空しく蠶魚の腹中に容らねて、深山の古廟裏暴暴たる舊紙鏡に

【上品上生】 輪廻に往生するをいふ

【始皇】 秦の始皇

【三武】 一には北魏の武帝、二には北周の武帝、三には唐の武帝

【淨人經人】 淨土門の人、經人は釋宏

【墳典】 三墳五典

【清惠】 富樓那、舍利弗

異なること無けん、何の用を爲すにか堪へん、室に窓をべし、鏡中に映る上品上生、  
 大乗の清惠の人も亦土を擲うて之無けん、自家の所執に反するを以て、嚴善して之を廢  
 せば、宏が疏抄は始皇の其書現に非ずや、秦晉苛政を恣にして、大いに之を輕賢典に處  
 す、其況するを解んで儒を以て之を毀く、其れ亦其國に並らんが、唯ふに三武は佛に  
 佛教を廢し、祿宏は密かに佛教を毀すと、亦然らずや、然らば則ち顯密品殊なりと雖も  
 罪犯は將一船ならんか、是れ宏が罪には非ず、是れ宏が本眞正の導師に見えず、參玄の  
 眼なきが致す所にして、見性せざるの類なり、人の呼んで通現未來善知識の位に、彌  
 律部大和尚の標題と稱することは、轉世の劍の心そや、總論に、今時諸方の禪林、往往  
 に黨太だ多し、宏が密を死守して以て道と爲る者は、自家の所語に違するを擲うて、  
 佛教を見ること室の如く、人をして看讀せしむることを容さず、皆も野瓊の桃符を擲  
 るに似たり、見聞覺知を痴執して以て禪とする故、自家の所見に違するを擲んで、觀錄を  
 見ること室家の如くす、人をして披閱せしむることを許さず、皆も跋鬼の惡虎を避くるが  
 如くす、淨人は嫌うて譏刺し、經人は憎んで謗倒す、佛道の危險正に此時なり、然りと雖も  
 是れ亦廣く經史を窮め、徧く墳典を探つて、詩偈を玩弄し文字を耽嗜して、人我の殊岳に  
 培ひ勝他の輻輳を樹てよと道ふには非ず、縦は備辯才滿慈に等しく、智力鷲子に過ぎたり  
 と雖も、菩提の資糧に乏しく見性の正眼なくんば、終に憍慢の窟見、肺腑の間に入つて乍  
 ち佛種性を斷滅し、永く泥梨獄中の衆生と成らん、眞正の道流は即ち然らず、先づ須らく

【蓮池大師】 殊宏を指す。

【釋解】 蛤貝。【十地】 五十二位。

【十信】 十住、十行、十廻向、十地、等覺、妙覺。

【阿彌陀】 由須(Amitayus)、または阿彌陀婆(Amitayus)と云ふ、阿彌陀須は無量壽命と云ふ、阿彌陀婆は無量光明と云ふ。

【觀音】 即ち慈悲觀音の妙用を指す。

見性、掌上を見るが如くし去つて、間亦佛祖の言教を把つて看過し來つて、心を以て古教を照し、且つ眞正の導師に見えて、覺つて祖師最後の因縁を參決し、末期一箇半箇を打出して、以て佛敎の深恩を報答す。是を當家の種草と爲す。謹んで蓮池大師に告ぐ、薄地裏に向つて蓮實の念珠を挿り、頭を俯け目を收めて、稱名念佛して蓮華國裏の生を求むることは、是れ君子が分の宜しきなり。曠蕪たる慧眼を開き、胡亂の文章を吐弄して、佛燈臺の大人を制するに非ず。古人曰はく、夫れ西方とは衆生の心地なり。十萬億の諸土を過ぐるるとは、衆生十惡の念を止め、菩薩十地の階級を超過するなり。阿彌陀此には無量壽と云ふ、是れ乃ち衆生の佛性なり。觀音等が等の聖業とは是れ自覺の妙用なり。衆生とは無明煩惱、愚智分別の多心なり。臨命終の時とは眞情、寂滅の時なり。識陰情念の宣洩すとは心地清淨なり。之を名けて西方淨土と云ふ。西方とは日日星雲の散る所なり。而るに衆生一切の愚智分別の心、一心地に教る。則ち一心不亂にして彌陀如來現在するが故に、自性を顯るとき八萬四千の顯福得じて、八萬四千の妙業と成る。這妙用を觀音勢至等と名くるなり。迷へば妄心を穢土と名く。悟れば其心淨き、之を淨土と名く。所以に龍藏論に云はく、「過去の諸聖の修する所の念經は、皆是れ外道に非ず、只心内を指す。若し佛を求むんと要せば、先づ觀らく見性すべし。若し見性せざれば念佛誦經何の益かあらん。佛陀此には覺と云ふ。覺するるときんば、自心即ち是れ佛。若し心を離れて別に有情の佛を求むれば、

【只心】只心の能く明光を  
出づ。

【三十二年】河潤  
ふくと九里、瓜熟  
し、霜落つ。

【三】臨書爲人  
の要。三玄三要

【三】三阿僧祇  
劫の摩。

是を名け一癡人と爲す。譬へば魚を求むる人の如く、坐づ須らく水を見るべし。魚は是れ水の所成にして、水の外に更には魚なきが故に。若し人、佛を覓めんと欲せば、先づ須らく心を見るべし。佛は是れ心の所成にして、心の外に更に佛なきが故に。問ふ。既に是れ心外に佛なし、如何が自心を當りして徹底なることを得たらん。曰はく。慚に問著する處は是れ心なりや是れ性なりや、卑と爲んか神と爲んか、内外中間にありや、青黄赤白なりや、自家に須らく究明すべし。立時に究明し、喫飯喫茶、語時默時但單單に窮め將ら去れ。切に思む。教文字の中に向つて求覓し、善知識の口頭に向つて尋討することを。只心機盡き情盡る處に到つて、鼠の鼠を捉ふるが如くに去り、鷄母の卵を暖むるが如くに來れば、豁然として風金網を離れ、無籠を脱する底の時節あらん。縦ひ死に到るまで打發すること能はず、三二十年徒爾として光陰を送却し去るとも、誓つて南方死處當の老漢老婆の説話を認め來つて、以て得力の處と爲すこと莫れ。骨に著き皮に粘じて終に打發すること能はじ。況んや祖師最後の因縁に於てをや。是に古人云はく。『空は須らく三要を具すべし。一には大信根あり、二には大疑情あり、三には大智慧あり。若し此一を缺けば、折足の鼎の如し。信根とは何をか言ふや。只是れ人人見得すべき底の自性あり、徹了すべき底の宗旨あることを信ずる是なり。縦ひ是れ信すと雖も、非邊の話を疑着せざる時は、底に透つて徹了すること能はず。縦ひ是れ疑團凝結すと雖も、憤志以て相續せざるときは、疑團破れず。』是故に言はく。『懈怠の衆生の爲には、涅槃三祇に互り、勇猛の衆

【暖氣】 盛を續るに譬ふ。

【生冤家】 怨骨體に徴する仇敵。

生の爲には、成佛一念に在り、只須らく切に精進を著くべし。參禪は鐵を鑽つて火を取るが如し。唯一氣に進むを以て、賢たりと爲す。鐵かに暖氣を生ずるを見て即ち休し去り、少しく煙氣の浮ぶを見て乍ち休し來らば、鑽つて三軌均敷を経費すとも、終に星火を見ること能はず。吾等海濱に近きこと鐵かに數百形、鑿へば一人あり、未だ曾て海水の甘酸を知らざるを以て、鑿と爲して自ら行いて之を嘗めんと欲す。鐵かに百歩にして歸り來り、十歩にして却回せば、何の時か彼苦鹹を辨得ざる。鐵は信甲鐵濃の人と雖も、一氣に進んで退かざるときは、日ならずして海濱に到つて、鐵かに一指觸を染めて之を藏るときは、月支、眞丹、南濱北溪、世間所有の海水の甘酸、一時に口に知せん。参玄の上も亦此の如し。自らの心上に向つて参究して、一氣に進んで退かざるときは、自性、他性、業生性、煩惱性、菩提性、觸性、觸性、菩薩性、有情性、談鬼性、修羅性、畜生性、乍ら一念子の間に於て、一旦に見徹して毫芒を留めず、万事を了畢し生處を透脱す、豈快ならずや。讀んで参玄の上士に勸む、已事を宣明することは須らく頭然を著ふが如くすべし。透達を求むることは、須らく要用處の物を尋ねるが如くすべし。佛祖の言教を見ることは、須らく生冤家の如くすべし。禪門には話頭を疑はざるを以て、自業無相の睡人と爲す。所以に言ふ、大疑の下に大悟あり、疑十分あるとき證悟十分ありと云ふこと。謂ふ草は、鐵條鐵線にして疑團を流すに疑なく、思念紛積して疑工を下すに力乏しと云ふ。置へば關關市の間、稠人廣衆の中に於て人あり、錯つて二三兩の黄金を遺落せんに、關關なりと爲して顧みず、

【赤梢鯉】又赤梢鱗。俗稱の納僧に對する評語。傳説に禹門に三級の波ありと。

【海若】 海神。

中なりして、氣置するは半箇も亦無けん。多かり人、推排し、寺多の壁上を打撞し、  
 涙を含んで幸逐して再び手に入らざるとせんば、心頭平穩なること能はず。然らば譬  
 中無價の大寶、自己木石の妙道、彼三片の黄金にだも、胡爲に其れ  
 容易なる。東海に波臣あり、名けて赤梢鯉と道ふ。大いに其概を具す、中の大丈、  
 平生慨しては、我此鱗也、知念ぬ幾千萬種ぞや。普漢の廣大に墜り、銀浪の洪濤を情  
 んで、長間に浮し、漢裡に泪流すと、骨は塵土に交り、頭は野犬に餉す、山市の鮪と爲り、  
 終に刀刃に罹つて人口に膾炙す。骨は塵土に交り、頭は野犬に餉す、山市の鮪と爲り、  
 の備と爲る。箇も其終を全うする者を見り、定に悲むべし。此に於て大いに憤發して誓  
 つて言はく、「我願くば彼龍門を透過し、彼雷火に觸著して、凡鱗の聚隊を出でて、  
 次に列り、永く此患難を脱せん、永く此垢辱を雪がん。」と。既にして二月、桃浪の節を得つ  
 て、直に禹門を望んで尾を擺つて進ず。君見すや、禹門は杳かに崑崙山頂より落つ、百  
 千丈の江、浪漲り飛び、二三級の峻崖側ち濤す。丘山崩れ落ちて、迅雷怒り吼ゆ。回響咽ん  
 で毒霧を捲き、閃電苦んで臭煙を驅る。巨壘も之が爲に氣を失し、海若も之が爲に驚愕す。  
 纒かに一滴に著するときは、巨壘の背を裂き、長鯨も骨砕く。是に於て鱗魚、錦鱗を張り  
 鐵牙を敷して、一氣に直に衝く。嗚呼、鱗魚か鱗魚か。渺茫たる海中の片鱗にして、小鮮を得  
 て、饑腸を救はば足るらくのみ。胡爲れぞ、具れ斯の如く猛烈なるや。土頭には何の有る所  
 ぞ。迅雷巖を裂き、雷火天を焦して、鱗甲之が爲に打たれて、尾之が爲に楚かれて、乍ち



【雨師、風伯】 雨神と風神。

【和修吉】 八大龍王の一。

【摩那志】 八大龍王の一。

【織脰】 なますの肉の大切

大死一回す。一回し起きれば、薄皮たる一枚の神龍雷神は先驅たり、火帝は殿後たり。

雨師を右にし、風伯を左にし、雲を平の霧を懸んで、焦芽を荒旱に殺し、正法を濁世に護

す。昔し彼鼓鼙に傳ひ彼百鳥に鳴りて、鯉を拾ひ蝦を滾して、一生を満して以て是れりと

せば、和修吉も救ふことを得ず。摩那志も亦如何ともすることを得ず。豈此其非あらんや。

盲龜とは何をか謂ふや。今時話頭を杖葉なりと爲し、參禪を鹽鼓たりと爲る所の仕選の瞎

流たる。彼れ些しき了解なきに非ず、徒ちに門頭戸底を認めて言はく、「自性本淨く、心源

海深し。生死の指つべきなく、涅槃の求むべきなし。湛然寂默、空廓虛深、是れ則ち人

人本其真の天寶所、付靈の欠少する所あらんこと。暫似なることは眞に似たり、如何せ

る途路都て半點の力無くして、觸牛の角に逢うて河海に縮却するが如く、鐵龜の處に

觸れて、六處盡く暗黒するに似たり。氣を出すことも亦得ず。或は眞正の觸手に撈著せ

られて、彼羊公が細の如く首を屈すことも亦得ず。彼魚の力祖の上に在つて、生萬死、

鐵輪も亦他に任せ、大樽も亦他に任せて泣くことも亦力無きに似たり。懸崖にして破陣門

下の客と稱して可ならんや。懸崖にして欠少する所なしと言つて、心に快きこと有りや。

古眞正禪道の衲手の如きは、汚穢纏上に身軀を挿ち、命根を忘れて幾かに一回奮發する

ときは、彼東無の轉軸を振つて龍門を透過し了つて、千無萬無脱洒自在なるに似たり。歡

痛快ならざらんや。寧ろ此を爲せよ、彼を爲ること勿れ。神龍とは何をか謂ふや。古眞

參純工なる底、眞正の活祖なり。唯其れ人を以て魚にだも如かざるべけんや。死せずして

【家室】夫婦

【輪轉】業縁によ  
りて六道に輪轉す

【背盧都】支那の  
俗語、不語の貌。

何と云ふ爲さんや。又一假借の語あり。其部屬を率て曰はく、海濱を破れんと欲せ  
ば、先づ海濱の心を探せ。心を探せば故に生死あり涅槃あり、天堂地獄、心の  
所生に依らずと云ふことを無し。是故に汝が如く、單單に唯心を空却せよと。是に於て  
歩を定めて其心を空せんと欲す。如何せん既に空に横に空して其心を重ぬと雖も、長竿を  
掉つて其心を掃ふが如く、其竿を俵べて河流を渡るに似て、徒らに迷悶を増すのみ。其  
ば一箇の家室行らんと、其行つて賊兒の姦謀上も巧なる者を揚げて、其をして家事を任  
しめんに、倉庫府庫、目を透らして其謀す。此に於て家室の行も、其行は舊  
をして日夜黠機糾問せしむ。其家之が爲に憂懸し、家室之が爲に憂悶すと雖も、其産は舊  
に依つて離散す。是れ俱歸つて賊を認め、附托するが故なり。須らく知るべし、其家即  
んと認する底の心、即ち是れ生死の大兆なることを。極く其經に曰はく、汝無始より今生  
に至つて賊を認めて子と爲す、汝が死常を死す、故に輪轉を受く。一疏に曰はく、功徳の法  
財之に因つて喪失す。之を名けて賊と爲す。汝うて識らず、認めて眞常と爲す。其に謂へ  
り、嫡生と期して世を嗣がしめんと欲す、反つて破喪に墮らうて、極く貧窮なり。一と。眞  
正、生滅の心を空却せんと欲せば、箇の渾剛打就する底の難透の語頭に參ぜよ。忽然とし  
て命根に和して打失せん時、始めて永嘉の語ゆる妄想をも除かず、眞をも求めざる底の玄  
旨を了畢せん。妙喜曰はく、近世魔強く法弱くして、湛入合湛を以て、究竟と爲る者勝けて  
數ふべからず。又云はく、近年以來、一種の邪禪あり、以て目を閉ぢ請を藏して、背盧都

【紫雲馬】 驢馬を  
紫雲馬、自由のき  
かぬことに云ふ。

【八義類耶】 阿頼  
耶は梵語(Arhan)  
にして、業、又は  
無後と譯す。  
【大圓智】 四智  
の、無礙の智  
【五眼】 肉眼、天  
眼、慧眼、法眼、  
佛眼。

【第七】 八義類耶  
の第七。  
【淨名】 維摩居士

地にして妄想を作すを之を不思議の事と謂ひ、亦之を威首那畔空劫以前の事と謂ふ。幾かに口を開けば、便ち喚んで今時に落つと作す。亦之を根本上の事と謂ふ。悟を以て彼岸邊の事と爲す。蓋し業行め形を盡せし時、便ち大いに歸り了れり。以上大。今時も亦首殺の魔黨少しと爲す。試みに問ふ、位定座の事は且く宜く、汝が威重し珍貴する底の根本上の事、作願生、恐らくは一片虚濁不動不搖底の繫礙無ならんか、將湛湛たる黑暗の深地ならんか、空に南畏すべし。之を見地に頂すと謂ふ。是れ即ち世間多少の權人を嫌し來つて滑探する底の齷齪、老狸輩。續ひ汝保護し尊重して情威劫責を固るも、依然として一教の舊箱束、此を名けて八義類耶の箱窟と爲す。吾人行脚、多少の齷齪を厭し盡す者は、此老屋を超過せんが爲なり。若し人其參純工にしてよつて、一回、吾等の舊案を打破することを得ば、乍ち大圓智智を見ん。四智候に煥發し、五眼直に密開せん。若し又今時の魔黨に欺誑せられて、首尾に存在して業畜と爲し寶所と爲して、所習し去り捕括し來るも、何の用を爲すに堪へん。是れ一片の含藏、驢船に入り去るも亦是れ故、馬腹に入り去るも亦是れ故。若し勤む、努め方あり一カを下さんことを要せよ。昔大德世尊成道の日、三七日中方廣氣積の本懐を演説、之を珍貴寶聚の衣と謂ふ。徒來、聲の如く囁に似たり。此に於て中下の機を擲取せんが爲に、然に且く此箱宅を構ふ、之を化氣と謂ふ。後來此窠窟を破せんが爲に、習御は内に在つて提擲し、淨名は外に在つて顯明し、二乘の人を以て珠瑜野下の身に比すと雖も、終に其本懐を致くこと能はず。善息慮に善激して、丹支に

【二十四流】後鳥羽天皇建久二年榮西禪師が禪を傳上せしより、後村上天皇正平六年東陵永興禪師が渡來せしに至る百六十年間に禪を二流に就いて分類す。

高く神州に滿つ。石窟、寶淨、佛果、妙喜の諸老、臂を振り鶴を切つて、朝臥て力めて  
 攘斥すと雖も、恰も手を拍して碩鼠を驚るが如し。此に實れ彼に理す、陰陰として常に師  
 不傳の眞風を諷刺す、悲しい哉。我日城二十四流の寶剎、承久、嘉祥、建武の間、  
 命を鯨海に擲ち、身心を虎穴に投じて、此の信の密訣を傳へて、無日と扶養數年の高徒  
 に懸けて、寶炬を蟻淵異劫の暗窟に留めんと試す。誰か知らん、此點照の部屬、相似の禪  
 徒に警害せられて、空かに未だ一三百輩を養はるに、手を擲つて涙流して死灰の如くにし  
 去らんとは。曼も深く悲しむべき者は、此流の衰頹なり。或は眞正の辨道の上士あつて  
 密參功積り純工力充つるときは、平生の心眞識情總て行れす。眞覺某某。某某某詞窮  
 つて、參究家の心に和して一時に打失して、氣息も亦將に絶えなんとす。殊に知らず是は  
 萬ち龜紋將に爆せんとする底の時節、寶殼中に脱せんとする底の時節、佛法門に人を得ん  
 とする底の好消息たることを。惜むべし、其好善知識乍き、某某某心を起し、慈仁の情を  
 縦にして、種種の道理を説いて、情量の窟宅に拽き知解の軍門に懸し、空風の印子を  
 以て一印に印定して曰はく、「爾も亦是の如く我も亦是の如し、善く護持せよ」と。吁嗟、  
 護持することは備が護持するに任す、爭奈せん祖庭猶天淵を隔つることを。是れ甚だ之を  
 憐むが如くなれども、其言は之を害す。學人毒なることを知らず、寶を掉つて歡喜し、尾  
 を揺して踊躍す。自ら謂らく、「祖師西末の密訣、全く手に入り畢んぬ」と。豈知らんや、  
 祖關透らず棘林猶深きことを。此しい哉、棟梁の質あつて超邁の才を具ふる底の英雄の漢

【塵を把つて云云】  
南岳禪と馬祖との  
因縁。

【塵】 大なる家。

【冷歌歌地】 ひつ  
そり泣き沈む。

【音塵寮】 一座大  
衆の題目。

予も、此弊風に吹倒せられて、半醒半醉終に一生擬議不來底の鈍漢と作り去ることを。素  
林人に乏しきこと亦宜ならずや。若し其れ執著して根本上の事と爲さば、恐らくは免えず、  
焦牙敗種の部屬に隨はんか。古南岳禪師、馬師の座前に在つて觀を把つて磨する者は、大  
寂をして此意を了知せしめんと欲してなり。古人一句轉透の語頭を留下して、兒孫をして  
許多の精神を剝落せしむるは、汝をして著箇の窠臼を踏躓せしめんが爲なり。所以に古人  
云はく、「三十年餘吾も亦住す、宜なる哉、多くは備る舊狐穴」と。寔に知る、參禪は速だ  
容易ならざること。五祖禪師暮年に喜んで東西の廬に遺ふ、且通に偈の一編を吟して之  
を闡するを見て、祖之を觀るに、「今人多くは是れ今の身心寂滅、寂滅現前、前後斷斷し、  
一念萬年にして休し去り歇し去り、古廟裡の香燭にし去り、冷歌歌地にし去ることを得て  
究竟と爲す。殊に知らず、此野狐の境界に自己を降参せられて、正如正見現前すること能  
はず、神通光明發露すること能はず」といふに至つて、即ち卷を捲うて手を以て擁搦し  
て曰はく、「奇なる哉、導師善く法要を説く」と。徑に首座寮に往いて尋んで曰はく、「奇  
の事あり、奇特中の奇特なり。即ち圓悟に付す。悟之を讀んで父子相與に鼓舞嘉慶して自  
ら已むこと能はず。大慧禪師初め圓悟に見ゆ、且自ら叫つて云はく、「當に五夏を終ふべし。  
若し諸方と同じく我を以て是と爲さば、我無禪論を著さん」と。汝が變重する處の根本上  
の事、危嶺鐵壁せざらんや。若し之を鑽り之を仰ぎ、之を洩し之を汝せば、一生を錯り了  
らん、此の好罵天をか見ん。果して自南の毒風に命根を吹滅せられて、前後斷斷す。佛果

【龍崖に手を置】  
白ろ百尺竿頭進一  
歩して。

【鑿兒】 鍋。  
【鑿】 自由恬淡  
【鑿】 名は道顔  
大慧宗に嗣ぐ

【轉】 かけ札。

【一千七百衆】 大  
慧晚年徑山に住し  
大いに宗風を擧揚  
す、玄學の參集す  
るもの二千餘人と  
【巴陵三轉語】 巴  
陵慧鑿禪師の三句

曰はく、也易からず、鑿兒死しつて居ることを疑はす、言句を疑はざる、是を大病と爲す。豈道ふことを見ずや、龍崖に手を置して絶後に當りて然る事。而らく此些の道理あることを備せんことを要すべし。前來、鑿兒の藤枯る時、何、何、何、何と云ふを聞いて、然として大悟す。鑿則ち鑿段の杖を擧して之を踏むに、面對、澤なく、鑿山の巖上層に端居して、千僧閣上、龍象を拈令すること饑鴨の群を飼ふが如し。貴ぶべし、祖家門下、者、此の靈あることを。鑿、ある人の呼んで枝葉邊の事と爲すことを。備が珍藏する底の根本上の事、萬兩の黄金と添へ得て持て來るも亦貸ふべからず。佛果曰はく、古人得道の後、茅茨石室折脚鑿兒の内に野菜を煮て、喫して日を過し、且名利を求めず、故曠として一轉語を垂れて、佛祖の深處を思ふいと要す。記、龍和尙、南泉、山に上つて、作務する内縁を断して、是はく、鑿、佛祖上兩行の涙、半は是れ君を思ひ半は君を恨む。天慧聞き得て侍者をして時を收めしめて曰はく、只者一轉語、佛恩を報むるに足れり。多少の人自ら香爐を張り茶湯を點じ、供具を備へし華果を捧布して多拜多禮し、六時行道し身臂指を鉢ると雖も、佛恩十分が一を報ゆるに分なし。而るに古詩一聯の斷葛藤下に佛恩を報ずることは何ぞや。是れ室に輕薄の論に非ず。妙喜は一代の龍門にして、一千七百衆の蔭涼樹なり、豈荒唐の詞を吐かんや。昔巴陵三轉語在り、龍門大師曰はく、我後後、齋筵を設くること莫れ、只此三轉語を擧せよ。祖師豈汝が謂ゆる枝葉邊の事を好んで、茶果珍饈に充つる者ならんや。巴下百三十九 古徳曰はく、昔中忽ち箇の出で來つて末來向上向

【長沙界】南  
 【三聖】名は慧然  
 臨濟の法嗣。

無し、卷ずることを用ひて什麼をか作さんと道ふこと有らば、只伊に向つて道はん、我も也知る、彌果窟裡に向つて活計を作すことをと。悲しい哉、後人多く道理の會を作して云ふ、龜音細語皆第一義に歸すと。若し無量に會せば且く去つて南と作つて、一生多智多解を離を得んには、而今往往に道ふ、本悟處なし、箇の悟門を作して此處を建立すと。若し恣便の見解ならば、獅子身中の蟲の自ら獅子の肉を食ふが如し。見ずや、吾人道はく、「慈悲からされば流長からず、智大ならざる者は見ること遠からず。」若し用ひて建立の會を作せば、佛法界今日に到らんや。箇、長沙同參の會和尚に問ふ、「和尚、南泉に見えて後如何。會默然たり。箇又問ふ、「和尚未だ南泉に見えざる以前作麼生。會云はく、「更に別に有るべからず。箇因つて長沙に舉示す。沙即ち箇を示して曰はく、「百尺竿頭不動の人、然も得人すと。未だ真と偽さず、百尺竿頭に頭なく也を脱むべし、十方世界是れ全身。後來長沙眞禪師因に三聖、秀上座をして問はしめて云はく、「南泉遷化、甚處の處に向つてか去る。箇云はく、「石頭、沙彌たりし時六祖に見ゆ。秀云はく、「沙彌たりし時を問はず、南泉遷化、甚處の處に向つてか去る。箇云はく、「伊をして尋思し去らしむ。秀云はく、「和尚、千尺の竿ありと聞も、且條を抽づる石筍なし。箇默然たり。秀云はく、「和尚の答話を問す。箇亦默然たり。秀因つて三聖に舉示す。聖云はく、「若し無量ならば臨濟に歸ること七步、汝石よ臨濟が長沙か、定に佛海の蚊虻、祖庭の蠶蝨、翅を絶ち倫を離れて、遙かに物表に出づ。其塵絲步履の間、大火聚の如く熱鐵櫃の如し。塵網を断ること無く、

【鐘鉢】其勝劣の  
分際の毛厘なるを  
云ふ。

【九峰】石霜の法  
嗣、九峰道虔。

【一色邊】有無色  
空、其悟得失の二  
見對待を超越した  
る修業の極地、即  
ち清淨一邊の境界

【道膺】雲居の名  
河山真价の法嗣。  
【嬖】母を云ふ。

魔外も其用を辨ずること能はず。誰か其涯際を測らん、華人か其鐘鉢を別たん、然るに三聖は臨濟に嗣ぐ者にして、却つて此言あり、豈其れ容易ならんや。須らく知るべし、汝が謂ゆる葛藤窩裡、少しき妙處あることを、石霜の諸禪師遷化す、衆、首座を請じて住持せしむ。時に九峰の虔禪師、侍者たり、衆に白して首座に問うて云はく、「生師の道はく、「休し去れ歎し去れ、冷啾啾地にし去れ、一條の白練にし去れ、古廟檀の香爐にし去れ、一念萬年にし去れ」と。甚麼邊の事を明す、會得せば即ち住持せよ、會不得ならば不可なり。」首座對へて云はく、「一色邊の事を明す。虔云はく、與麼ならば先師の意を會せざること有り。座云はく、「但香を装ひ來れ、香煙斷する處若し去り得ば、即ち先師の意を會せん。若し去ること得ずんば即ち會せず。」座遂に香を焚いて、香煙未だ斷えざるに首座脱去す。虔、手を以て首座の背を打つて云はく、坐院立亡は即ち無きにはあらず、生師の意は未だ夢にだも見ざるに在り。」と。往往に辨道純工の人、年窳り臘通り、孤燈獨照の時を以て最後輪軸の重關と爲す。既に是れ香煙絶ゆるに、恬然として化す、此外更に何をか言はんや。而るに其背を撫でて云はく、「先師の意は未だ在。」と。大いに怪しむべし。洪州雲居の道膺禪師、會て侍者をして、袴一腰を送らしめ、一住庵の道者に與ふ。道者、嬖生の袴ありと曰うて竟に受けず。師再び侍者をして問はしむ、嬖未生の時、箇の甚處をか著く。「道者無語、後遷化して舍利あり、持して師に似す。師曰はく、「直儂死して八百五斗を得んより、當時一轉語を下し得て好からんには如かず。」吾聞く、舍利は定慧の叢果より出づと。所以



【破庵】名は祖先  
密庵成傑に嗣ぐ。  
【蒙庵】名は元聰  
晦庵慧光に嗣ぐ。  
【横機進出】縦横  
の宗機。

【設利】舍利に同  
じ、又舍利羅とい  
ひ、骨身、又は靈  
骨と譯す。

に火浴の頃、粟粒芥顆の如くなるもの、纒かに一點を見るときんば、老幼并波し、縑素競  
湊して、瞻禮尊重讚歎恭敬す。而るを言はずや、八石五斗を得んより生前の一句には如か  
ずと。怪しい哉、生前の一句は胡爲る物ぞや。舍利に超過して是の如く尊貴なるや、吾之  
を怪しむこと久し。破庵和尚、資福を退いて徑山蒙庵の招に赴く、委ぬるに立信首座の職  
を以てす。資上座と云ふ者あり、大知見を具す。住持首座の開堂に遇つては必ず横機進出  
す、鉢を迎へ勝つことを取る。一日破庵開堂、資上座至る。破庵垂語して曰はく、乾坤の  
内宇宙の間、中に有り、一資擬議す、打出せらる。其時資、破庵の語を擧し盡すを待つて、  
乃ち進語せんとす。中に有りと云ふ處に於て打出せらる。破庵故に我を推くと以謂へり。  
衣單下に歸して脱去す。火後郷人、舍利を收めて破庵に呈す。破庵拈起して云はく、資上  
座饒ひ爾舍利八斛四斗有るも、之を一壁に置く。我に生前の一傳語を還し來れ。といひ、  
地に擲つて惟膿血を見ると。古人云はく、百燈一千七百の善知識、設利ある者十四人のみ。  
僧寶傳の中八十一人、設利ある者數人のみ。且吾宗に重んずる所の者は、惟宗通說通に在  
り。向上の爪牙あつて、人の爲に粘を解き縛を去るを、傳法度生と謂ふ。餘は皆末事なり。』  
と。吾祖宗門下、釋信難解、難透羅入底の一苦子あり。學者をして心死し意消して、凜然  
として變じ勃然として興らしむ。是を法窟の爪牙と謂ふ。譬へば老虎の長嘯して林を出づ  
るが如し、狐兎狸猪の輩、膽冷え股戰いて正しく立つこと能はず、全く視ることを得ず、尿  
屎俱に下ることは何ぞや。彼鐵牙金牙の劍樹の如くなるを具ふればなり。若し此物なくん

【洞山初禪】一名は守初、雲門文偈に嗣ぐ。

【福嚴良藥】洞山の初法嗣。

【或庵】名は師。此庵元の法嗣。

【圓通】名は慧。陸堂名は慧。圓悟克勤の法嗣。

【水庵】名は師。育玉徳の法嗣。

【授子】名は大。翠微無學の法嗣。【大隋】名は法真。大和尙の法嗣。

【龍籠】 價の貴き珠。

ば、亦此聖にも亦例なること得ず。所以に古徳曰はく、予、建中、蜀國の初め、故人の處にて、洞山初禪の語一編を獲たり。福嚴良藥の生むる所、其の言公妙にして經の法窟の爪牙なりと。乾道の初め、建堂、圓通の住す。因に建堂、圓通の像を畫すを見るに、曰はく、本分に依らず、衆生を憫愍す。之を瞻之を仰ぐ、則ちあり直の如し。長安の風月今昔を貫く、邪道の子兒か喙を授して行く。建堂歎言して曰はく、謂はざりき山庵に此兒ありんとは、即ち之を索む、遂に江心に得たり。固く稱人の中に於て、請じて第一座に充つ。固く、人を見ること定に難し、聖賢す。其れ猶病ありと。而るを建堂、五七行の讚辭を見て、請じ來つて第一座と爲す、時容易ならんや、猶聖ならんや、亦又見る所ありや、定に怪しむべし。淨慧水庵の師、圓通、室中語して云はく、洞山の藹子鬚髮なし。傳傳へて水庵の志に至る。庵の云はく、儀狗、而を變す。所因つて水庵に奉示す。水庵云はく、此は是れ五百人の告知識の語なりと。洞山の授子和尚の如きは、大隋、佗に隨ひ去るの語を聞いて、香を柱いて禮拜して云はく、西蜀に古徳あつて出現すと。君看よ明眼の宗師、一見して靈華を疑さざること、秦鏡の影駒を照すが如し。洞山の曉庵師、初め文殊の眞神尙に見ゆ。師、業に示して曰はく、直釣は龍籠を釣り、曲釣は蝦蟇蚯蚓を釣る、過つて龍ありや。良久して云はく、勞して功なし、龜毛寸寸長し、師即ち省あり、後雲居にあつて燈頭と作る。傳、潤州の大聖近ごろ揚州に向つて出現すと説くを見て、問を説くる者あり。曰はく、既に是れ潤州の大聖、什麼と爲してか却つて揚州に向つて出現

【龍華堂】 祥庵主  
春先通深に嗣ぐ

【因辨入音】 佛の  
有する四無礙辯と  
八種の妙音と

【魯論】 魯論語を  
云ふ

【無頼の蒲風】 僧  
を云ふ、杖は蒲

すしと。藤はく、君子は財を積す、之を聚るに道あり。後江僧寮して、春先通深に示す。庵主大いに驚いて云はく、雲門の兒孫猶在り。中夜に音を懸いて、居を寤んで之を拜す。香問く、庵主は雲門を祖とし、奉先を父とす。其機は卓絶にして、二十八年人を試むるに終に其機に契み着なしと。羅ひ六方恒沙刹土の調御師、同時に出現し、つて、無量の光明を放ち、無量の大菩薩を現し、四辯を逞しうし八音を悉にして、深法奥の如くならも、總に顧みざる底の悪習の老骨枯なり。然るに只今機かに在るの問を聞いて、香を聞いて雲居を擧んで懸する者は何ぞや、將是れ何の意ぞや。此れ孔夫子の語にして、魯論の中に載せたり。故以初めより此語を知らざらんや。今敢かに問公の奉するを聞いて大いに驚ます。將狂すと爲んか、將驚すと爲んか、將又大いに貴ぶべき所あるか、寔に怪しむべし。機變通轉、龍門に住す、時に一僧、蛇に咬まる。室中舉して云はく、既に是れ龍門の僧、甚に因つて其處に咬まる。素下下すれども疑はず。高僧曰はく、果然として大人の相を現す。蛇之を噛ふは即僧、蛇覺に在つて問き得て、乃ち驚してははく、龍門に此子あり、東山の遺木た宿葉ならすこと。試みに問ふ、明眼にして以て盲と爲る者は、胡爲の事ぞや。時其は眼卓絶の語が、竹其れ葉蘭の語が。驚問く、僧は正に在つて庵に在らずと、然らば數十桶の白飯を擲ひ、つて、幾百枚の銀の筒を擲つて、伊をして強盜置置し了らして、竹を擲し伊を驚し、伊をして六時行道せしむと驚く、若し其れ一箇も抱道の衲子なくんば、明覺に必ず言はん、枯淡なる真事なりと。羅ひ一箇

【慧明】名は楚國汾陽縣に嗣ぐ。【雲峯】大慧芝の法嗣。

【藥末】水銀。【師】龍慧南。

と雖も半箇と雖も、陰僻嗣尊上に漏り、下濕ふ底の三間の老屋裡に在つて、頭を縮め膝を屈して坐すと雖も、專一に宗旨を究明せば、昭覺は必ず言はん、富貴なり盛大なりと。然らば古人の寂寥と爲る者は今人の盛事にして、今人の盛事と爲る者は古人の寂寥なるに非ずや。何ぞ此極に至るや。黃龍慧南禪、慧明に嗣ぐ。初め泐潭の靈澄の印證を受けて、彼を領じて遊方す、氣を以て自負す。雲峯悦に會ふ。同じく西山に遊ぶ。夜話、泐潭長くる所の旨を問ふ。師其要を言ふ。悦曰はく、「澄公、雲門の後と雖も、然れども法道異なるのみ。師異なる所以を問ふ。悦曰はく、「雲門は九轉の透餅丹の如く、鐵を踏じて金と作す。澄公は藥汞銀、徒に玩ぶべし、氣に入らば即ち流れ去らん。師怒つて杖を以て之を授す。明日悦、過を謝す。又曰はく、「雲門の氣宇玉の如く、死語を吐じて下さんか。澄公は法あり、人に死語を授く、死語其れ能く人を活せんや。」と云うて即ち背き去る。師之を挽いて曰はく、「葦か汝が意に可なる者。悦曰はく、「石霜楚圓、手段諸方に出づ、子之を見んと欲せば、後ろべからざれ。」師默計して曰はく、「此れ實に行脚の大事なり。」悦は翠巖を師とす、而るに我をして石霜に見えしむ。之を見て得ること有りとも、悦に於て何か有らんや。即日に辨裝す、汝看よ古人毫釐も相欺かざることを。今時の如く偏承を恃み舊見を執し、氣を張り非を飾つて強ひて自ら欺かば、何の時か了日あらん。後慧明に見えて其論を聞くに、多く諸方を貶刺す、件件數ふるに邪解の者を以てす。皆泐潭密付の旨訣なり、氣索めて歸る。而して悦が平日の語を念じ、灑然として改めて曰はく、「大丈夫心脊の間、

【明】 慈明。

【洞山三頓】 無門  
關に出づ。

【南】 黃龍南。

【趙州勘婆】 無門  
關に出づ。  
【撫權】 恥づる。

其れ自ら疑礙を爲すべけんや。」と云つて、趨つて明の室に詣して曰はく、「慧南、暗短を以て道を望むに未だ見ず。頃ごろ夜參を聞くに、迷行に指南の車を得るが如し。然れども唯大慈更に法施を行じて餘疑を盡さしめよ。」慈明笑つて曰はく、「書記、徒を領じて逆方す、名叢林に聞ゆ。若し疑あらば衰老を以て卑棄せざれ、坐して商略は願ふに可ならざらんや。」侍者を呼んで榻を進めて日坐せしむ。公固く辭す、哀懇愈切なり。明曰はく、「書記、雲門の禪を學ぶ、必ず其旨を善くせん。洞山三頓の棒の如きんば、喫すべきか喫すべからざるか。」師曰はく、「喫すべし。明、色莊にして言はく、「棒聲を聞いて便ち喫すべし」と言はず、且より暮に到るまで、鶴鳴鵲噪、鐘魚鼓板の聲を聞いても、亦應に棒を喫すべし、何の時か、當に已むべきや。」南、蹠して却く。慈明云はく、「我始め汝が師に堪へざらんことを疑ふ、今可なりと云つて拜せしむ。」南、拜起す。慈明、前語を理めて曰はく、「脱、汝雲門の意旨を會せば、趙州嘗て言ふ、臺山の婆子、我に勘破せらると、試みに其勘すべき處を指せ。」公而熱して汗下る、答ふることを知らず、懔懔して趨り出づ。明日又詈罵せらる。師雷ちて左右を見て即ち曰はく、「政に解せざるを以て決を求むるのみ。罵ること豈慈悲ならんや、法施の式ならんや。」慈明笑ふのみ。是に於て旨を悟つて失聲して曰はく、「泐潭は果して是れ死語。」則ち頰を獻す、叢林に傑出す。是れ趙州老婆勘破、來山あり。四海如今清くして鏡の如し、行人道を以て驪と爲ること莫し。時に南三十五、汝看よ古人參禪甚だ辛苦することを。恰も鷓鴣の臭卵を踏破して、玉鳳乍ち躍出するが如し。是に於て

【楊岐】名は方會、蘇明圓に嗣ぐ。楊岐の禪。

【嵩山】靈祐この山に住す、故に又嵩山と號す。

【典座】六知事の一、衆僧の辨食を掌る。  
【輪却】靈祐に嵩山の山を差し上げたの意。

楊岐靈祐の二派、兼尾の如くに別る。其淨和尙初の香巖に往いて、上座の順祖尙に見ゆ。順祖云、「汝の處より来る。師云はく、黃龍より来る。曰はく、黃龍近日尙の言句か有りしこと。汝看ま。若し今時に似たらば、黃龍近日尙の言句を守り、幾世の徳をか誦し、尙の徳を誦し尙の徳をか其つと問ふべきに、打頰に尙の言句か有りしとは何ぞや。師曰はく、黃龍近日州州委して、黃龍の長老を請す。師語して曰はく、師位上に令置し休。下にて茶を領り、語を下し得て疑はば便ち往いて信持せよ」と。又見ずや、古而丈夫大眼因に司馬頭陀、湖南より來つて師に見えて曰はく、「嵩山は前納なり、千五百衆を聚むべし。師曰はく、「吾衆中一轉却を下し得て出捨ならば、當に與へて住持せしむべし。師も淨瓶を指して問うて曰はく、「喚んで淨瓶と作すことを得され、汝喚んで世間とか作す。時に玉林第一座たり。則ち曰はく、「喚んで木杵と作すべからず。師告はず。時に嵩山靈祐師、典座たり。則ち問ふに、淨瓶を踢倒す。師笑つて曰はく、「第一座、山子を鉢盂せり。師遂に往く。若し今時をして一員の長老を拜ばしめば、姓氏如何、出生如何、負擔の重輕如何、親族の貧富如何、詩は如何、文は如何、何某は面具好けれども長少しく低し、何某は長高けれども面具宜しからず、彼は筆墨住し、此は辯才足らずと道つて、許多の無明を長せん。而るに如上の屎尿を打せず、直下に一句子を見る、寔に貴ぶべし。時に勝首座曰はく、「猛虎路に當つて坐す。黃龍終に去つて黃檗に住せしむ。願覺えずして曰はく、「勝首座一轉却を下し得て、便ち黃檗の住を得たり、佛法は未だ夢にだも見ざること有り。師言下に於て

【齊庵】名は成傑  
應庵堂華に嗣ぐ

【佛智和尚】圓悟  
勤の法嗣、佛智端  
裕。

【鹿】大鹿。

【浮山圓鑑】葉縣  
歸省の法嗣。

【鶴冠】鳳來紅。

大悟して方に黃龍の用事を知る。古來玄の納子は寺門の繁興を逐はず、多業の圍繞を尋ねず、此大事を以て懐と爲す。今時は奴郎辨せず玉石分たず、何某の和尚は衆を憐むこと赤子の如く、何某の長老は例を視するを以て眼目と爲す。彼は日中一食、此は長坐不臥、宛に向身の古節なりと。可惜許。昔密處成傑師は闖人なり。初め密を出でて轉州の智者に至る。獨喧を負ふ次で老宿あり。問うて云はく、「上座此行、何の處にか去る。」云はく、「四明の育王に佛智和尚に見え去る。」老宿曰はく、「甚衰へたり、後生家行脚は其身を帯びて眼を帯びず。」佛曰はく、「何の謂ぞ。」老宿云はく、「今育王に一千の來衆あり、長老日に扶杖を逐うて觀あらず、農工夫着實の汝が輩の爲に費を發すること有らんや。」佛、涙を下して曰はく、「若し其の如くならば、某今何の處にか往かん。」老宿云はく、「此去つて衢州の明果に華區あり、後生と雖も見識超卓なり。汝宜しく之に見ゆべし。」傑師に依つて華に往く。四年にして千聖の命脈を究め盡す。今時彌伽の濃厚を逐ひ、寮舎の塵埃を尋ね、生死に掛けず、參玄念と爲さず、塵の行くが如く、蟻の衆るが如くなる者と天壤懸隔す。五祖演和尚、衆に示して云はく、「某、十有餘年、清上に侍りて數人の尊嚴に見ゆ。自ら謂へり、了當すと。浮山圓鑑の會下に到るに及んで、直に是れ開口不得、後白雲門下に到つて一箇の銀帶頭を咬破す、直に得たり百味具足することを。且く道へ、童子の一句、作麼生か道はん。」乃ち道はく、「華發いて鶴冠早秋に如ぶ、衆が人能く染む茶鉢頭、有る時は風動いて麈に相倚る、塔前に向つて問うて休せざるに似たりと言ふことを聞かずや、自ら

【臨濟三領】一黃檗禪院に三神を喚ぶなり。

【私語】自我に音なること。

謂へり既に了當すと。佛若し自ら了當すと爲して、國師の室内に入り、白雲の腰下に侍るにあらざるば、佛心と一生を誤り了らん。費ふべし、明眼の宗師、人々の大寶なることを、今時自ら了當すと爲して、一語を誤り了るも亦未だ知るべからず。互に切あず山道禪師に參す。遂一日師に訪つて云はく、吾はいんたり、恐らくは虚しく了が光陰を度らん、往いて白雲に依るべし。此輩、佛生にして吾未だ師を誤らずと雖も、但し其西の師の語を知するを見るに、人に語ぐる處あり、必ず微く大事を了せん。師言かに然りとす、禮辭して白雲に到る。外儀なき或、師語の執照なきこと定に徴ふべし。今時一片の死法を授けて、一印に印して曰ふ、汝も家底の如く、我も亦是の如し。死に平るまで護りして、必ず終止しむること為れ。學者も亦師用受して、師に守り儀に守つて堅しく一生を過し了る、是れ何の顔ぞや。彼指して白雲に見えしむる者は、門庭の階階を好まず、偏に眞風の地に隆ちざらんことを欲すればなり。演祖、始の磨院に在りし且、僧あり、磨の轉するを見て、遽に指して以て師に問うて曰はく、「此れ神通なりや、此れ法術なりや。」師、衣を袈げて磨を旋ること一匝す。僧、無語、上た、衆ならざるに、白雲到り來る。師に語つて云はく、「數禪客あり、廬山より來る、昔僧人の處あり伊をして説かしむるに、亦説き得て來齋あり、因縁を舉して伊に問ふに亦明め得たり。伊をして下語せしむるに亦下語し得たり、私見れ未だ、師是に於て大いに疑ふ。私に自ら計つて曰はく、「彼に悟り了る、説くことも亦説き得たり、明むることも亦明め得たり、如何が却つて未だなる。遂に參究す



【大禹】舜の攝政  
たること二十二年  
【漢高】漢の高祖  
蕭何、張良、韓信  
は皆其臣。

【張三才四】即ち  
樵兵衛、末郎兵衛  
と云ふ如し。

【播間】 葵間。

ること果日、忽然として省悟す従前の寶惜しむらくは一時に放下す、走つて白雲に見ゆ。  
雲爲に手舞ひ足踏む。師亦一笑するのみ。爾後に兵はく、吾輩に因つて一身の白汗を出す  
便ち下載の清風を明め得たり。責ふべし、濱川津に累日の苦吟にして、乍ち三賢四果の著  
漸を起し、四七二三の玄韻に徹す。其樂説無碍の聲、答ふるときは人意の表に出で、聞ふ  
ときんば學者氣を喪す。願ふに是れ大丈夫見、萬夫に傑出する者の懐とする所にして、庸  
才情弱の士の望を其際に斷つ所以の者なり。昔大禹四百州の患難を洪水に掃除すと雖も、  
三五載、多少の人力を費投す。昔漢高、四百年の鴻基を草昧に隆興すと雖も、四十年、許  
多の生命を傷害す。彼は有爲世間の功業、此は無爲出世の勤果、天淵香かに殊なる者に非  
ずや。有爲世の仕業は、七八輩の部屬を集めて、鷹の啼、虎の如く、被れる鼻、氣の如く、  
公公乎として言せて曰はく、何某の長老の如きは定に佳し、詩は李于興に入り、文は袁中  
郎に効ふ。且常世の豐饒なること當時無雙なり。一時の勇激、三時の點茶點心の度、未だ  
毫かざるに藥石の板又鳴る。其授與する所の宗旨は専ら直指の法にして、人をして行人せ  
しむること定に芥を指ふが如し。張三も亦立るに慣り上つて、李四も亦直に會し歸る。  
士に農に工に勤に、及び屠清負負の人をさへに、鞭に門闥に入り來つて打倒せざるは半箇  
も無し。知らず天壤の間、初稿の武林か之に勝らん。行脚若し此門に入らば、一生始  
つて參摩の事を興せん。と。噫、汝は是れ何の處の播間の乞兒ぞや。汝が謂ふる直示は、  
誰が家の曲調ぞや。芥を拾ふが如く、胡爲れお其れ易きや。湖南の處談か、湖北の宗要か。

【香嚴】 雲山の法

【忠國師】 高僧也

【忠國師】 高僧也

此事若し説き得て足り、教へ得て成ぜば、豈に不傳の事と道はんや。雲山に參す。山問ふ、「我聞く、汝、白丈先師の處に在つて、一を問へば十を答へ、十を問へば百を答ふと、此は是れ汝が聰明靈利、意解慧解、生死の根本なり。父母未生の時試みに一句を道へ看ん。師、一問せられて、直に得たり茫然たることを。寮に歸つて平日看過する處の文字を將て、縦頭一句を尋ねて酬對せんと要すれども、竟に得ること能はず、乃ち復じて曰はく、「書餅、饑に充つべからず。」屢、雲山の説破せんことを乞ふ。山曰はく、「吾若し汝に説似せば、汝已後我を罵り去らん。我説く底は是れ我底、終に汝が事に干らす。」師遂に平書看過する底の文字を將て焼却して曰はく、「此生に佛法を學せじ。且、僧の長行粥飯の僧と作つて、心神を役すること免れん。」と云つて、乃ち泣いて雲山を辭す。直に南陽を過ぎて忠國師の遺跡を視る、遂に憩止す。一日草木を爇除す、偶瓦礫を抛つに石を撃つて聲を作す、忽然として省悟す、遽に歸つて沐浴し、香を焼いて道かに雲山を禮して讚して曰はく、「和尚の大慈恩、父母に逾えたり。當時若し我爲に説破せば、何ぞ今日の事有らん。」と。儒看よ從上の宗師、點滴も亦施さざることを。是れ法を惜しむに非ず、其實は人を惜んでなり、今時往往に頑疑無智一縷の香にだも堪へざる底の癡鈍の漢子を捉へて提擲教示、牛頭を按じて草を喫せしめ、腋を鎖つて翼を出し、許多の屎尿を打し畢つて、印定許可する底と香墮遙かに異なる者に非ずや。若し人あつて、我能く法を説いて人をして悟入せしむと言はば、須らく知るべし、斯人真正の導師に非ず、斯人本より是れ參究底

の人(ひと)に非(あ)ざることを。縦(た)ひ汝(なんぢ)鶯(う)子の智(ち)あり滿(まん)慈(じ)の辯(べん)才(さい)を具(こ)ふるも、從(したが)う上(う)の宗(しゆ)師(し)、父(ふ)子(し)不(ふ)傳(でん)の妙(めう)如何(いか)が辨(べん)を下(くだ)すを得(え)ん。古(こ)慶(けい)喜(き)尊(そん)者(者)の如(ごと)きんば、佛(ぶつ)の親(おん)戚(せき)にして髻(けい)配(はい)より傳(でん)に隨(したが)つて出家(しゆ)し、如(ごと)來(らい)の常(じやう)隨(じゆ)侍(じやく)者(者)たり。其(その)親(おん)近(きん)黨(たう)炙(じ)する者(者)、大(だい)凡(ぼん)幾(げ)評(へい)年(ねん)ぞ、其(その)間(ま)示(し)教(きやう)論(ろん)豈(あ)淺(せん)近(きん)ならんや。然(しか)りと雖(い)も終(は)つに打(う)發(はつ)すること能(あた)はず、世(よ)尊(そん)入(に)滅(めつ)の後(のち)、大(だい)龜(き)師(し)兄(あに)の所(ところ)に在(あ)つて、初(は)めて喪(まう)身(しん)失(しつ)命(めい)す。願(ねが)ふに其(その)れ上古(じやう)は大(おほ)いに難(た)く、近(ま)世(せい)は大(おほ)いに易(やす)きことは何(なん)ぞや。蓋(おほ)し上古(じやう)は根(こん)鈍(とん)く人(ひと)薄(うす)くして、近(ま)世(せい)は人(ひと)利(り)に根(こん)熟(じゆく)すと道(みち)はんか、將(まさ)復(また)其(その)提(てい)揚(やう)教(きやう)示(し)の巧(かう)妙(めう)、近(ま)世(せい)に及(およ)ばずと爲(な)んか。神(しん)光(くわう)は其(その)臂(うで)に双(ふた)し、石(いし)霜(しも)は其(その)股(また)に雜(まじ)す、輪(りん)廓(かく)に着(つ)けざるあり、足(あし)、闔(くわん)を越(こ)えざるあり、何(なん)ぞ其(その)れ難(た)きや。若(も)し其(その)れ近(ま)世(せい)の易(やす)きが是(ぜ)ならんば、上古(じやう)の難(た)きは非(あ)ならん、上古(じやう)の難(た)きは是(ぜ)ならんば近(ま)世(せい)の易(やす)きは非(あ)ならん。大(だい)丈(ぢやう)夫(ふ)兄(あに)遠(えん)過(か)せずんば則(すなは)ち已(い)みなん。若(も)し其(その)れ大(だい)口(く)を聞(き)いて透(てう)過(か)すと道(みち)はんば、縦(た)ひ艱(げん)辛(しん)窮(きゆう)苦(く)して三(さん)四(し)十(じゆ)年(ねん)を經(へ)るも、頑(がん)らう必(かなら)ず決(けつ)定(てい)して、古(こ)人(にん)所(しよ)證(じやう)の田(でん)地(ぢ)に對(たい)らんと要(え)すべし。何(なん)ぞ容(よう)易(い)に汝(なんぢ)が岸(が)を拵(ひら)ぶが如(ごと)くなる底(そこ)の輕(けい)薄(はく)の凡(ぼん)解(げ)を恃(た)んで、一(いつ)生(せい)難(た)つて半(はん)醒(せい)半(はん)醉(すい)にし去(い)らんや是(ぜ)れ齊(せい)人(にん)の蟻(あ)間に走(は)つて、連(れん)龜(き)を計(けい)る底(そこ)の窳(じゆ)見(けん)に非(あ)ずや。是(この)故(ゆゑ)に寶(ほう)藏(ざう)論(ろん)に云(い)はく、去(い)れ進(しん)道(だう)の由(ゆ)に、中(ちゆう)に萬(まん)途(と)あり、因(いん)魚(ぎよ)、濫(らん)に止(と)り、病(びやう)鳥(てう)、黨(たう)に棲(す)む。其(その)二(ふた)の物(もの)、大(だい)海(かい)を騰(た)らず、叢(そう)林(りん)を離(り)らず、人(ひと)の小(せう)道(だう)に處(は)る、其(その)義(ぎ)も亦(また)然(しか)り。此(この)れ謂(い)つべし、久(きう)切(せつ)中(ちゆう)止(し)の如(ごと)理(り)に達(たつ)せず、大(だい)を拵(ひら)て小(せう)を求(もと)めて、半(はん)路(ろ)に依(よ)止(し)、少(せう)しく安(あん)じて自(みづか)ら安(あん)を以(もつ)てし、大(だい)に安(あん)じて安(あん)きに及(およ)ばずと、いかにゆる人(ひと)とは何(なん)ぞや。眞(しん)正(じやう)見(けん)性(せう)、大(だい)法(ぽう)の淵(えん)源(げん)に徹(てつ)底(てい)する底(そこ)の透(てう)過(か)の道(だう)流(りゅう)なり。小(せう)とは何(なん)ぞや。見(けん)聞(もん)覺(かく)智(ち)を認(にん)得(とく)する底(そこ)の

【兜率の悦公】名は悦也、降克文の法嗣。  
【生芻支】龍眼向(楮果)。

【南區頭】慧南禪師云ふ。

【文】眞淨文和尚

【無盡】無盡居士張商華。

相似の禪徒なり。於乎聖公の如き誠に眞正大家の法器なり。姚秦の時、祖師未だ西來せず、禪道未だ東漸せざるに、渺茫たる教海の中流に獨立して、至大至正の高橋を立つ。今時の禪徒に比するに、金輪奴郎遙かに殊なる者に非ずや、定に敬しつべし。石霜の清素侍者は闔の古田の人なり。曠に湘西の鹿苑に遁る。閑淡を以て自ら牧す。兜率の悦公、時に未だ出世せず、之と定を隣る。客あり生芻支を惠む。悦、素に命じて曰はく、「此れ乃ち老人が郷菓なり、同じく飽すべし。」素慨然として曰はく、「先師書を去つてより之を見ず。」悦従つて之を問ふ、「師は誰とか爲るや。」對ふるに慈明を以てす。悦乃ち閑に乗じて客を致して其緒餘を歎く。素因に問ふ、「子曾て何人にか見ゆる。」悦、眞淨文和尚を以て之に告ぐ。素曰はく、「文又惡にか見ゆるや。」悦曰はく、「黃龍南禪師。」素曰はく、「南區頭、石霜に在ること久しからざるに、其道盛なること此の如し。」悦益益駭異す、尋で香を楯にして香扣す。素曰はく、「吾師解く縁寡し、闍人の師たるべけんや。但子が見解試みに吐露せよ看ん。」悦即ち具に陳ぶ。素曰はく、「只佛には入るべくも魔には入るべからず。須らく知るべし、古徳の謂く、「本後の一句始めて牢關に到る」と。悦對へんと擬す。又邊に問ふ、「無爲を以て如何が説かん。」悦又對へんと擬す。素忽ち高笑す。悦恍然として得ることあり。數月にして素乃ち印可す。仍つて之を戒めて曰はく、「文、子に示す者は皆正知正見なり。然れども之を離るること太だ早うして、其妙を盡すこと能はず。吾今子が爲に點破して子をして受用して、大白在を得せしむ。他日切に吾に嗣ぐこと勿れ。」師後に眞淨に嗣ぐ。後來無盡、

【夜話】 即ち素者と悦公との前話を云ふ。

【風穴】 南院慧顛の大師、風穴延沼の大師、名は全齋徳山宣鑑に嗣法す

兜率に見ゆるに末後の句の事を擧す。粗を罷るに違んで歸宗を過る。夜話、此に及ぶ、眞淨、輒ち怒つて曰はく、『是れ何の嘔血の禿丁ぞ、脫空謾語す、眞信受すべけんや。』遂に語を終らす。崇寧三禩に違んで、寂音尊者、無盡に陳州の荆溪に謁す。語つて曰はく、『惜しいかな眞淨之を知らず。』音曰はく、『相公は只清素最後の句を知つて、眞淨の眞藥現前するに及んで覺むること能はず。』盡驚いて曰はく、『果して此ありや。』曰はく、『疑はば參せよ。』盡、言下に於て顛に師の用處を見る。遂に香を炷いて歸宗を望み悔謝す。即ち家に載むる眞淨の肖像を取つて、展拜して畫を其上に題して以て寂音に擬くと。噫、愧能く素に扣いて其轍跡を忘るること能はず、無盡從つて其中に墮することを致す。寂音、眞淨眞觀の藥を發するに非ずんば、何ぞ能く無盡膏肓の疾を愈さんや。信に宗師の爲人各惠利あり、豈其涯際を測り易からんやと。予謂く、『是は則ち是、可惜許。眞淨眞觀の眞藥、寂音に點出せられて、其能恐らくは敗鼓の皮にだも及ばざること存らんか。』嗚呼、居士の如きは聞出の君子にして、官、宰相に登り、壽、百齡に近し。君信と臣貴と士氣と民憤と。智鑑高明識量寛大、實に王佐の才なり。寂音も行いて見え、妙喜も遙かに尋ぬ、何の不足の處あつてか眞淨詬罵惡發の首を聞いて、星夜に歸宗を望んで炷香禮拜し、悔謝することは何ぞや。須らく知るべし、我祖宗門下、大いに怪しむべき事あることを。百丈大師は馬祖に鼻端を提住せられて、乍ち安身立命の處を失し、濟北は藥嶠に打着せられて家國喪亡し、風穴は南院に折挫せられて面門を打失す。象骨は巖頭に一喝せられて膽魂驚落す。雲門は

【香嚴】名は智圓、  
【山】法嗣、  
【存】名は令儀、  
【存】存の法嗣、

【雲山和尚】洞山  
真侖、師の法嗣、

【明招】羅山道閑  
の法嗣、明招徳謙

【雷牙】名は居道、  
洞山真价の法嗣、  
【翠微】丹霞天然  
の法嗣、翠微無學

【韶陽】雲門文偃  
師の別名、

左脚を逆折せられて魂飛び魄散じ、香嚴は片瓦竹根に觸れ、石窟は汾陽に日頭を掩却せられ、翠巖は瓦片に刺刺せられ、仙果は離詩を讀んで涙落ち、大原は笛聲を聞いて心死し、妙喜は南風が毒熱に觸る。此れ各調御、雪山に在つて明星に照徹せらる底の消息を打失す。其得力の處、塵外も留ふこと能はず。疎山和尚の言、聲に非ず、色前、物に非ずと道ふを聞いて、自ら謂らく、底に徹して了當すこと。證するに及んで約するに師兄住處あるを待つて、來つて香水を見んと。一旦明招に觸破せられて、初めて祖師門下の事あることを知る。歸り來つて香嚴の茶室を聞くに、費介公子の田夫の說話を聞くが如くにして、即ち嘔吐の聲を作す。初めは香嚴を以て、此中に人ありと爲して、師資の約を爲し、鏡かに宗旨を知るに及んで、大いに舊時に異なれり。須らく知るべし、吾祖宗門下に參禪、擔骨の靈驗あることを。彼若し初め禪安の苦難を攀づるに非ずんば、何ぞ大器を成ずることを得ん。昔龍牙、臨濟に打着せられて、即ち言はく、打することは打するに任す、要且つ祖師西來意なし。翠微に打着せられて又言はく、打することは打するに任す、要且つ祖師西來意なし。是れ他の見處、上諸佛なく下衆生なく、頭、天を戴かず、脚、地を踏まず、甚乾坤大地一箇無孔の鐵鎚。是故に明覺之を名けて能所共に泯する底の一枚の瞎龍と爲す。恨むる所は夢にだも會て臨濟を見ること能はず。是れ即ち佛祖も醫し難き底の大病、徃往に此一塊の屎丸を得るときは、祖師の面目と爲し、衣内の寶珠と爲す。可惜許、知らず是は此れ韶陽、平生人の爲に投却する底の不淨の釘楔なることを。縦ひ釘楔なるこ

【華鬘】 天人の頭上に頂ける華美なる髮飾。

【額】 額。

【驢年】 蛙年、蛙年と云ふに同じ。

【宗峰妙超大師】 大徳寺の開山。

とを覺知し、漫に之を除去せんことを欲すと雖も、彼波旬、毘多に挂着せらるる底の死狗の華鬘の如し。波旬初め毘多に挂着せらるる時、自ら謂らく、「莊嚴光明、梵釋も亦羨むに足らず。」と。戟ち歡喜し戟ち踊躍し、歸り來つて天宮に入る。時に宮妃嬪御、鼻を掩うて走り額を蔽めて避く。此に於て初めて人狗蛇の三屬なることを了知す。鼻翳穢惡、氣索き滅落して憤悶憂惱す。學人も亦此の如し。初め宗師に説被せられ、授與せられ、許可せられ、印定せらるる時、自ら謂らく、「志願成辦し大事了畢して、佛祖と雖も羨むに足らず。」と。如何せん日往き月深うして、見處偏枯動靜矛盾して、暗頭は明となるに似たりと雖も、明頭、半點の力を得ず。鐵枷金鎖狐窠鬼窟、正眼に看來れば、滿地一場の熱にして、祖師門下の事は驢年にも曾て夢にだも見んや。覺えず彼焦牛敗種の部屬と爲んや。是れ定に死狗の華鬘に非ずして何ぞや。走つて一四天下を遶ると雖も、徒に鼻穢を増長するのみ。何の時か脱下し去らん。之を爲さんこと如何。若し人從上の諸老宿の田地に到らんと思せば、豈其れ難からんや。先づ須らく狗子佛性の話に參すべし。歲月を重ねて墮跟せずんば、必ず得力の處あらん。捨て了つて箇の羅透の話を見よ、必定、古人受用の處、悟解了知の間に在らざることを見得せん。息辯老師初め古帆未掛の話を了悟す、以て足れりと爲す、壽塔の話を看ること四年、初めて大器を成就す。大地も載せ起さざる底の見地に留住せば、茫茫たる死水裏、鷗も亦顧みざる底の一塊の白蟻屍。誰か請じて十刹の大宗匠と爲んや。茲に最後向上の秘訣あり、從上錯つて會する底甚だ多く、胡亂にし去る底少からず。宗

【大定】 妙心開山

【柏樹子】 建州柏

【雨尊】 雨尊宿

峰妙超大師云はく、朝に眉を結び、夕に眉を交ふ、我何似生。此語極めて難信難解なり。  
 大定聖應國師云はく、柏樹子の話に賊の機あり。此語極めて難透難入なり。貴ぶべし。雨  
 尊慈、此機骨の秘要を留めて以て有力の兒孫を待つ。寔に眞正法窟の爪牙なり。若し人、  
 參窮して一回、白汗流るれば、備に許す息耕東海日多の孫と稱することを。若し又擬議不  
 來ならば言ふこと莫れ、我は是れ華場國師の兒孫なり。今時諸方往往に道ふ一言句は  
 是れ奴子婢子の事なり、我彼奴子婢子の事を要せず。と。錯錯。二大老若し其れ奴子婢子  
 ならんか、我亦奴子婢子ならんのみ。我備が貴介公子なることを把らず、備が奴子婢子な  
 ることを嫌はず。既に是れ二大老の兒孫、若し二大老の說話を透過せずんば、何の惡機あ  
 つてか正法海裏の片鱗と稱することを得ん。木透底の土は而が得力不得力、純一非統一を  
 管すること莫れ。唯單單に話頭を擧揚して、問答なからんことを要せよ。譬へば十圍の樹  
 を伐るが如し、一斧片にして倒るる所以の者に非ず、刀刀怠らざるときは其倒るることを  
 欲せざるも、俄然として倒る。其倒るる時に當つて、其近遠の子弟を備うて、力を要せて  
 之を拒がんと欲すと離も立つべからず。六尺の身を棄つるが如し、一不善にして亡ぶる所  
 以の者に非ず、行行休せざるときは其亡ぶることを好まざれども、卒爾として亡ぶ。其亡  
 ぶる時に當つて、上下の神祇に禱つて涙を含んで救ふと雖も、及ぶべからず。一則の話を  
 窮むるが如し、一舉起にして了する所以の者に非ず。參參廢せざるときは、則ち了するこ  
 とを要せざれども、忽爾として了す。其了する時に當つて、十方の波旬に命じて障礙せし



むと雖も、窺ふこと能はず、豈快ならざらんや。若し彼權者の如き、纜に一二刀を下して、其倒れざることを憂へて張三に問ひ、纜に三四刀を下して、倒れざることを憂へて李四に尋ねれば、何の目か彼木の倒れることを見んや。學道も亦異ならざらんか。吾久已見に誇り人我を逞しうするに非ず。三十年前正受老人、嗟悼し慨念する所の件なり。此事を聞示する毎に、老淚數行、衣襟を滴さすといふことなし、吾今其附託の丁寧を追憶して、身の置く所なきが如し。心肝を傾け盡して諸君に告報する者は、願くば努力して再び祖庭孤危の眞風を挽回し、永く禪門最上の宗趣を隆興せんことを。老來を待つて予が滿地一場の愁を幾くに慣るること莫れ。久立大衆伏して惟れば珍重。

元文第五庚申歲孟正下浣

息耕録評唱剩五十一

息耕録第一報恩光孝禪寺語錄冬至小參に云はく、擧す。五祖演和尚、衆に示して云はく、「但只菓子を喫せよ、誰ぞ樹の曲葉を嘗せん」師云はく、「若無筆生の老翁、與雲に來處を知らざることを得たり。報恩は菓子の貴賤、價數の高低、也諸人一知得せんことを要す」と。鵲林曰はく、「兩箇の惡情、一箇は碧瞳胡、被齒を闕くことを知つて、黃面老母胎に臨むことを言せず。一箇は巖頭笑底に似て、玄沙の道ふ底に如かず、點檢し看來れば共に

【玄沙云云】達摩  
東土に來らず、  
祖西天に往かず。

【誓組】 誓は「ひもろぎ」にて焼肉なり。  
【首山省念禪師】 風穴延沼の法嗣。

【持情】 又は情持と熟語す、兩字共「たのむ」と訓ず。  
【長沙道ふ底】 長沙景岑和尚の偈を云ふ。

是れ願組を大夫に致さず」と息肩録第二寶林録中に曰はく、「首山省念禪師綱宗の偈に云はく、「唯哉巧女兒、梭を織つて織ることを解せず。看よ他の鬪鷄の人、水牛も也識らず。唯哉拙郎君、巧妙人の識る無し。鳳林關を打破して、靴を着けて水上に立つ」今時諸方異解紛紛たり。或は五位を執つて配合し、賓主を引いて粘着す。一箇も把るに足らず、大いに後人の智眼を瞎却す。中に就いて龍抄と稱する者あり、恣に自家の首偈を運出して、之を書し之を梓にす、甚だ人の悟門を妨ぐ。予従頭一筆に勾下して、後人をして隻字も照顧せしむることを欲せず。且つ又大いに言しむべき者あり。汾陽の註解と稱する者數十字、句毎に之を履穿せしむる者あり。看來れば、龍抄と一狀に領過すべき者に似たり。願ふに是れ汾陽和尚未だ首山に見えざる以前に註する者か。將又後人謾に竊註して、名を汾陽に假る者か。原ぬるに夫れ汾陽善昭禪師は首山の鍾愛、石霜の持情、智鑑高明、識量寛大、時に西河の獅子と稱す、豈容易ならんや。師若し首山の三指を握つて註せば、星夜に香を炷いて西を空んで大展九拜して以て罪を謝せん。師若し首山の兩指を握つて註せば、長沙道ふ底。息耕云はく、「首山自ら謂へり、臨濟の正傳を得たり」と、却つて野干喙を作して、天下の兒孫をして箇箇挖泥帶水ならしむることを致す。予一見して覺えず寒毛卓豎す。是れ大いに子房が遙かに沛公を日送し了つて、歸り來つて竊かに棧道を燒却する者に似たり。然りと雖も、夢にだも曾て首山を見ることを得んや。何が故ぞ、首山は是れ黃檗の第六世なればなり。」

【保世】 曾同、組  
合  
【油を撃つ】 退業  
第二十二の巻

息耕錄第八卷夏小參に云はく、「風を呼ぶ指を嚙く、傍若無人、百數群を成して王化に屬せざる。言驚賞勞するに及んで、便ち暗中に物を取るが如し。其間一箇半箇あり、因を知り果を識る處、鰭魚頭上に置在して、敢て妻りに走作することあらず、爲然として蹠却す。一箇の鑿子を陷殺せば、乃ち語頭圓かならず、只西天の廣額屠兒、屠刀を放下して、我は是れ千佛の一數なりと云ふが如し。又作麼生。出で來つて一轉語を下し得て、別置に香を炊くことを管攝せよ。風を呼ぶ指を嚙く四字、諸鈔及び古今の註解紛然たりと雖も、各諦當ならず。是故に古來、息耕錄中最後の羅處と爲す、宜なるかな。先軍群けずんば後隨知るべし。上頭卒直なるが故に、下文轉た莽直なり。予讀んで此に至つて苦吟する者一夜爆然として見徹す。恰も竹を劈くこと三節。節節刃を持つが如し。下面數行の難處、煥手として掌上を見るに似たり。歡喜に堪へず、書して以て諸子に授く。是れ他なし。從前の諸老、國字の板墨に欺誑せられて、見得透すること能はず。謂ゆる呼風指とは呼喚風詠、嘯歌指揮の義なり。言はく、諸方の素林一員の宗匠あり、法幢を建てて眞施を行するの目、百數、群を成し、萬指、頭を撃む。其初め保社に入る時、面容規步法を學ぐるが如く、氷を踏むに似て、眞正參禪、生死を以て念と爲し光明を以て法と爲す者に例し。既にして續に月餘に、向として餘少く、寮舎の廣陔銅釜の火小を知るときんば、乍ち放放瞥觀、鐵櫃不羈、庭階を涉つて呼喚し、南塔を遶つて風詠し、樹根に傍うて嘯歌し、窺窺に立つて指揮し、規に循はず知を守らず、王化に屬せず、傍若無人。知んぬ他は是れ凡か

【盤山】盤山廣積  
【音化】盤山和尚  
【法嗣】

【力云云】楚の項  
羽の詩に、「力山を  
抜き氣世を蓋ふ、  
時、利あらず、驢  
逝かざ、驢の逝か  
ざるは奈何すべき  
虞や虞や汝を奈何  
せん」

「（一） 盤山、鳳標あり、音化の體及あり、甚だ痛快なり。悲しむ所は對明  
掌證、言當實勞の日に到つて、俄かに首を低れ肩を窄めて、平生の高笑潤論、毫釐も使ひ  
得ること能はず。氣力なく、懐懐憧憧、口中に物を取るが如し。於、息  
耕纒に四字の葛を下し得て、一簣輕薄の柄子を模寫して、束ねて諸人の面前に抛出す、  
寔に妙ならずや。息耕纒、偏か縱横不軌を擬らず、爾が歸納密帯を要せず、只真正透  
底の漢子て未だ一語に、此一役の法道を舉す。時の人錯つて看過する底甚だ多し。既に  
是の屠兒廣額、屠刀を執下して云はく、「我は是れ千佛の一教なり」と、又作慶生、謂ふこ  
と莫れ、此は是れ佛語に涉らず情明を假らず、人人本具實成久遠の道理を説き來ると。若  
し果して音化の見識ならば、屠兒は且く置く、刀子も亦見ること能はず。何が故ぞ、弊堂  
自ら千均の弩を以て、枉げて虞人鼻孔の長きことを恐る。

息耕録第六黃髮、酒糟の漢。舊林云はく、黃髮大師、五羊の皮を綴つて以て千狐の腋に  
擬す。者般の僧、信越が才有りと雖も、如何せん兩處に功を見ざること、何を將てか驗  
と爲ん。刀、山を抜き、氣、世を蓋ふ。驢行かず驢行かず。虞子虞子爾を如何せん。  
息耕録續輯龍抄第八。師、靈隱の鶴峰塔に在つて、世諱を杜絶して、納子請益す。遂に  
三問を立てて、各着語せしむ。

一には已眼未だ明かならざる底、甚に依つてか虚空を將て布袴と作して着く。  
二には地を劇して牢と爲す底、甚に因つてか首飾を透り過ぎざる。

【武侯】 諸葛武侯  
即孔明亮。

【龍泉大阿】 支那  
名劍の名。神書  
活の機用を説くに  
用ふ。  
【斗】 北斗星。

三には海に入つて沙を算ふる底、甚に因つてか針鋒頭上に足を越つ。

鶴林曰はく、「息耕老師、後、三行の毒澁を吐出して、以て命を負ふ處の兒孫を得つ。恰も武侯が預め六陣を敷いて以て巴蜀を護るに似たり。謂つべし親切なりと。右開の三章、章毎に二句。予、彼録中を一見するに、各章の左邊に於て、下語に屬する者三十字、朱字以て之を書して、後生に附する者有り。或は曰はく、「是れ近世、何某の宗匠講録の次、註解する所の者なり。江湖瞻療の龍象、記寫して以て之を貴重す」と。予、茲に於て覺えず大息して曰はく、「嗟、已んぬるかな、息耕東海日本の兒孫、既に今、士を擄つて、鬻す。譬へば龍泉大阿の如き冷焰、膽を照し鮮光斗を射て、群妖悲しみ走り、閻魔馬を滑すも、乍も野人奴隸の手に落つるときは、柴を刈り篋を劈いて霜刃折れ碎け、終に菜刀にだも及ばず。是れ世に世に劍を知る人無きの謂か。者箇三箇の間頭、其峻しきこと九虎の間に過ぎたり。若し恁麼にして邊過し、分ありと爲ば、跛鼈、禹門を望む者なり。恐らく、閻吏の腹を抱へて大笑する有らんか。我今諸方を輕忽するに非ず、只慎む此文の裏盡せんことを。參玄の士士、請ふ焉を願へ。」

白隱禪師息耕錄間筵普說終



太  
和  
集





本書は暎元の法語、書簡、題辭、序文、祭文等を性謙、性徹の二人が編したるものなり。

# 黄檗和尚太和集

侍者性派、性徹同く編す

【不請の友】衆人の招請を受けざれども、その友となつて能く之を利濟するをいふ。

【法種を建立す】大法を舉揚するに警ふ。

【一莖草上に瓊樓を現す】法王の自在を測すなり。

【六根即ち眼、耳、鼻、舌、身、意に譬ふ】一室とは一心の體性をいふ。

【隻眼】片目のこと。第一義諦即ち真諦。

【萬新年】萬年に同じ、斯は句調を助くるに用ふる字なり。

萬治三年庚子十二月十八日、上の令旨を承けて、歸ふ所の太和田を黄檗山萬福禪寺と爲し、寛文元年八月二十九日に於て、山門に進んで云はく、「一錫筵に臨んで千山稽首し、法法誠を獻して拈じ奉つて手に信す。黄檗名を安じて本有を忘れず、聊か一念無縁の恙を興して、永く千秋不請の友と爲る。老僧道裡に到つて法種を建立することは且く止む、只進門の一句の如きんば、作麼生か道はん。萬福門開いて日日新に、時豊かに道泰うして長く悠久。」便ち進んで、佛殿の基に至つて云はく、「乾草萬莖、萬古在すが如し。日月摩臨、光明廣大、一片坦平、縱横無礙、個の中に卓立して、山靈待つこと有り、諸人還つて見るや。一莖草上に瓊樓を現じて、三世の如來俱に頂戴す。方丈に至つて云はく、「六覺明淨一室虛玄、個の中に抄入して、一言儼然たり。轟轟烈烈、白日青天、凡を尊じて道と成し、萬を轉じて賢と作し、隻眼を遊閑して、後を耀かし前を光す。猪鼻盧都二を訣じ、洗滌皴皴風韻を起す。風韻を起すことは且く止む、今日新聞又作麼生か道はん。」一掃荒を破つて千古に振は、槩山を現す萬新年。

初めて槩山に到る 傳成

【男崩】 山の高く連る貌。  
【希常】 異常、又は非常の意、稀なること。

【隻手】 片手なり力を用ひず輕しき義。

【太和】 萬物の元氣、又は至正太中の道をいふ。  
【道義】 道德義理

【雙鶴亭】 黃檗山西方丈の右にあり後華藏院、今はその舊趾を存す。  
【庚子】 萬治三年

新に黄檗を開いて一基を壯んにす、正觀流傳海外奇なり有志の黄檗須らく眼を著くべし、苦心の道共ニ操持す法尊復へ事非難の相、驛跡何ぞ妨げぬ出塵の時男崩たる峰頭雲日を捲、一草一木上頂巔を注ふ岐路露崖の句を撒翻し、希常過量の機を談論す大道坦途として正果を成す、獨かす翠峯の好男兒

聊か隻手を伸べて天荒を破る、莖草拈じ來つて法幢に當つ一片の太和道義を濯ぎ、千秋の黄檗宗綱を振ふ掀翻すれば陸地に波濤湧き、收放すれば紅爐徹上の霜盡く謂ふ通身影像無しと、誰か知らん徧界曾て藏さざることとを偶來つて卓立す高峯の頂、笑つて看る大千の空しく自ら忙はしきことを

雙鶴亭に題す 引有り

茂庚子の仲冬、上の令を承けて太和田を受け、黄檗萬福寺の基と爲す。越えて明年の春、再び遊んで取向し、仰いで松際を望めば、雙白鶴の馬に翹つ有り。更に上ること二十餘武、其鶴、次輪の松頂に翔り鳴いて立つ。仍つて高峯の絶頂に陟つて、勝槩を大觀し、時を逾えて下るに、鶴猶松に在り。嘆じて口はく「奇なる哉奇なる哉、此日我前導を爲し、其勝跡を點ず。倘

【成寒の心】利害に臨み事變に遇うて君子の守る所の憂ぜざるに譬ふ  
 【知音】親友の義  
 【夢天】夢かなる  
 【勞生】塵勞の衆生の義。

し得を建つる時は、當に此を以て驗と爲すべし」と。即ち遊を紀して近衛大納言公に贈る。鶴松頂に寄いて賢侶を招く」といふの句有り、嗣後龍溪回り、僧をして仲秋念日に起工し、開八月二十九日に於て造山せしむ。次の早、亭に登つて遠眺すれば、大いに胸襟を暢ぶ、江山萬頃、翠黛千峰、盡く當人の一瞬に在り。謂つべし千古の風光殊勝の事、一天の雲彩印文の中と。侍僧謂く、「前に白鶴の瑞を現するは即ち此處、當に之を雙鶴亭と顔して可なり」と。余唯唯として善しと稱す、仍つて尙を説いて以て識す。

空亭未だ現せず復何をか知らん、白鶴松に翹つて悟期を示す

老眼密閉す雙翠壁、其筠卓立す片靈臺

天然の雄逸風光別なり、曠世の達觀世外奇なり

此日功成つて誰か錫を遺ふ、曾に秀木を羅む正當の時

式

亭開けて微見す歲寒の心、霜雪滿頭冰吟を喜ぶ

老い得て古松共に友とするに堪へたり、靜に思ふ白鶴也知音

峰高うして思ち吐く寒天の月、葉落ちて平鋪す徧地の金

間に簾像を掲げて聊も卓朔すれば、萬縁放下して追尋を絶す

瑞光院に示す

勞生女世轉飄蓬す、百歲渾て一夢の中と成る

【釋】 萬有の實

【界】 二界の總稱

【求銀】 水銀

【一若】 一若し人三

【切佛】 切佛を知ら

【唯心造】 唯心造とし

【破地獄】 破地獄の交

金を對面し去らば、又新法を以て同くす

打撃して、其意よく、其時聞明にして業類に空す

此之上に心先開けて、觀復、何さ其へ結實功を全うせざることを

出山の轉廻の證

頭を雪嶺に埋むは尋常ならん、其意に覺を忘る量るを以て、是れ一番徹骨の法にあらん、此傳の中、王と稱り得

松浦肥後守に與ふる

しれ生佛法界を擇し、永劫に窮り無し、成住壞空、安んぞ比すべきや、心宗門

悟して千生にも事さず、紅花影、豈能く惑はさんや、是を以て金剛の種子、百煉す

ば、愈光輝、藥未製の、一燈は便ち返漏す、驗當人に在つて至難を逃れ難し、老僧憶

に二十年、唐に空つて黃檗を重興する時、首疏に云はく、海に跨るは常木に在らず、天

を掴ふ必ず大材、東林如し意有らば、我門に吹き入り來れ」と。嗣後工竣り、扶桑の請に

て、今に迄んで又八春を聞せり。茲に上令を蒙つて開山し、此地に草創す、仍つて黃

檗と名く。始めて覺前開、此日に應驗することを、爾も數萬里の木を來して、氣と爲し

て爲すといはば、覺思すべけんや、又居士の護送して此に到ることを得たり、謂つべ

し、天王人力、兩ながら其美を全うすと。今古罕に聞き、畢世希に有り、誠に不可思議の

境、凡小庸庸の知る間に非ざるなり。然らば則ち不思議の大材は、必ず不思議の大用有り、



金石の鑑

因縁所

無爲に

雲鷲山

諸法皆

佛法

一切諸

を看破す

一會儼然

一會儼然

幘に同じ

法界同

一體性なる

一合相

姓は廬

廬居士と號す

靈照女の

廬居士

馬祖道一

靈照女は

山頂すこと

一びび門を堅てて

古年筆底に夢花開き

此際聊か曾ぶ正法眼

洛中九十翁の慶會

九十の翁翁古稀を慶す

頰の壽相を忘れて増減無し

妙道を對談して

行解相應

利己利人

乾坤を舒卷して

如意を單提して

一法空する時

家珍盡く急流の中に付す

靈女の生活を憐むに

廬老如何ぞ上風に立たん

觀音の讚

大悲菩薩を度して全身を現す、世上何人そり得して復し  
惟當機のみ有り高く眼を著けよ、一回瞻仰すれば一箇天人眞

雙鶴亭にて松平吉州守に示す

點塵飛んで到らず、雙鶴機を告げし  
格外聊か眼を舒ぶれば、胸湧大千に覺し

井上信士考心覺、姪妙春を驚せんことを来心

一言大道に合ひ、心覺して便ち頓悟す

行藏畢竟無し、何れの處か通津たらさらん

孝道天地に感じ、心花妙春を賣く

清淨眼を點開し、本來人を味さす

直指回互無く、悄然此辰よりす

覺靈師旨を悟らば、妙大眞に徹達せん

觀音の讚

垂揚の下に獨坐して、自取觀音音

慈心能く樂を興へ、悲願迷津を渡す

一瞻一顧、徹見す本來無二の人

淨慧の讚

【清淨眼】 正法眼に同じ。

【回互】 彼此交互に渉入する義なり

【悄然】 悄は憂なり、急なり、今は大悟の意に思ふる

【觀世音】 世の音聲を觀じて覺せしむる義、誓願には觀自在

【五葉】臨濟、曹洞、法眼の五宗

【經】目の驚くこと

【眼光】眼の光、自己の心光を修むる事なり

【眼】俗の眼の字、あやとす

【菩提】道と譯す、菩提を覺悟す、此樹下に坐して成道す

【九品臺】上品上生、上品中生、上品下生、中品上生、中品中生、中品下生、下品上生、下品中生、下品下生

上品上生、上品中生、上品下生、中品上生、中品中生、中品下生、下品上生、下品中生、下品下生

不義王に對し、法法として暗に江を渡り、去來中礙無く、面壁亦何ぞ妨げん

直に法光、國界の往に至つて、浪りに五葉を傳へて諸方に福し

劈臉を突出し、半身を流す

端無く西渡東渡、知んぬ他は是れ假量れ眞なることを

眼を眩得し来る千萬里、回光返照、眼を令らす

洛中の信士、古梅樹を送り至る

猶老いて崖隈に倚り、骨瘦せて寒樹の若し

纖塵薄て華ませ、曾て占む百花の觀

微笑殘雪に驚き、吟風獨り肥を露す

清幽法界に福し、賈俗也奇なる哉

申景禪人、菩提樹を送り至る

菩提既に構有り、的的西より來る

五葉中土に蔓り、歸根共に一枚

苟も原本二なることを知らば、誰ぞ栽培せざるべけんや

花發いて三春、露かに、香は飄る九品臺



【錯】 あやまる。

【腹胃】 おぼいな  
る。

【摺】 通る貌。  
【摺】 しかと取  
り定めて見えざる  
こと。

【穴】 穴穴。

【空中の幻】 空中の幻

【本有】 本来の面  
目、即ち自己固有  
の本性。

丈夫須らく益省すべし、那ぞ更に又疑勝せんや

苦口唯苦菜、端無く吼ゆること實に似たり

知音加し知過せば、我をして時なる哉を嘆せしむ

雙蓮亭に登る 四首

一度亭に登れば一たび情を解く、乾坤何の意ぞ西東を待つ

寒梅雪霜腹胃の叟、偶爾として開闢すれば我すはとも開かずし

一度亭に登れば一たび眉を展ふ、江山萬頃帯いて青なり

淡淡疎林影、状し難し、筆を擲して三思すれども、馬からずし

一度亭に登れば一たび猿鶴、隱明巖族利那の間

杖頭閑常かなり幻花の夢、萬竅の怒號也等閑し

一度亭に登れば一度新なり、眸を凝せば何れも處か大はならざる

山環り水遶る村村の供、併せて太和萬劫の都と作す

妻木彦右衛門の江戸に回るに贈別す

道義同明にして日月よりも昭かに、世情の濃淡空草に等し

本有を返觀すれば多子無し、生死岸頭路は平

此日重光萬福に臨み、聊か半偈を吟じて茶葉に當つ

門頭の隱居

底前に開坐して晚山を看る、半ば落日を看んで注冊に轉す  
空しく餘す此短の天徳を光がすことを、三氣門に息を吐きて

【六】 禪者に示す

禪者對面に坐し、顔る能く老情に慚ふ  
其情を覺すること無く、一味却つて南

田用佛法を事とし、心華至誠を發す

行門八萬を開き、福足つて自ら圓明

道業信士に示す

乾坤變化の夢、業浪滔滔たり

六橋消息むこと無く、悲しいかな若を奈何せん

一に南方の聖有り、一心汝が曹を念す

長年隻手を垂れ、直に苦婆婆を接す

智者は本を三思し、翻身して愛河を出づ

狂愚は酸芥肉、浪を逐ひ又波に隨ふ

一たび利名の酒に酔うては、醜態として自他を味ます

一たび繁華の室に落ちては、我山萬丈高し

福縁目を逐うて滅じ、業累轉増多し

【行門八萬】 沙門の儀式の多きをいふ。

【六趣】 地獄、餓鬼、畜生、人間、天上、修羅、をいふ趣は所往の義、又は到るの義、又【隻手】 力を用ひず、輕輕にといふ義。

【娑婆】 梵語、譯して忍土、諸の有情能く一切の苦を忍ぶが故に名く。【我山】 我見我慢の高きを山に譬ふ

【蹠跣】 つまづく

【金剛の刺】 極めて堅利なる智慧にて堅利なる智慧に

【意息行】 意息行の身心

【無量の倒】 無量の倒

【刹那】 時の極めて短きをいふ。一念の中に九十刹那、一刹那に六十刹那

【妙】 妙

【妙】 妙

【妙】 妙

【妙】 妙

【妙】 妙

【妙】 妙

【妙】 妙

【妙】 妙

【妙】 妙

縦ひ抜山の力有るも、曷ぞ能く一毫を動さんや  
丈夫、ちやうとに冥着せよ、まやうしやく冥白の蹠跣たるべけんや  
本寮青白の眼、明を更に冥勢に混せんや  
冥らく金剛の刺を棄つて、こんごうのし籠中の塵を清浄すべし  
徳澤船外に濶しく、とくたくかくけ眞風太和に扇々  
珍重すちんじゆう、此行甚麼の爲ぞ  
籠辱ろうじやく三更の闇、さんじやうのあん彌伽一刹那

虚名世榮に漫り、はなごころ若恨か烟蘿を挂く  
返却せよ娘生の面、むすめうしやう老雪陀に孤かす  
無孔笛を吹くべく、むくわんふえ拍拍として悲に狂歌すべし  
眞偶に能くまことあなごころの如くならば、千秋磨すべからず

三尊一巻の巻、さんそんいつまき巖浪休むこと無し  
福大なれば天厨に昇り、ふくだなれば雲をけみば下陣に出む  
杖頭正眼を開かば、じやうとうしやう直指ちし直指に上る  
清風萬古に寂り、せいふうばんこ外道千劫に盡ふ  
梅窓虚しうして白を生じ、うめまど雲とて車くるまはまま壯んにす

三尊一巻の巻、さんそんいつまき巖浪休むこと無し

福大なれば天厨に昇り、ふくだなれば雲をけみば下陣に出む

杖頭正眼を開かば、じやうとうしやう直指ちし直指に上る

清風萬古に寂り、せいふうばんこ外道千劫に盡ふ

梅窓虚しうして白を生じ、うめまど雲とて車くるまはまま壯んにす

梅窓虚しうして白を生じ、うめまど雲とて車くるまはまま壯んにす

梅窓虚しうして白を生じ、うめまど雲とて車くるまはまま壯んにす

梅窓虚しうして白を生じ、うめまど雲とて車くるまはまま壯んにす

梅窓虚しうして白を生じ、うめまど雲とて車くるまはまま壯んにす

梅窓虚しうして白を生じ、うめまど雲とて車くるまはまま壯んにす

梅窓虚しうして白を生じ、うめまど雲とて車くるまはまま壯んにす

【天上界】

【梅莊】

【祖道】

【閻浮提】

【大總名】

【鐵】

【源頭】

【七句】七十。  
【絲】細き白き絹  
【煦日】煖き日、  
日の出でて温かな  
るの意。

雪を觀る

山來眼廓にして塵に沾はず、獨り古む閻浮の第一貧  
間に空亭に臥して赤酒酒たり、身を晒せば覺えず萬山の銀

梅を栽う

老來無事天眞に任ず、一粟の生涯利に混ず  
纔に梅花を種ゑて又雪を置く、然も骨瘦すと雖も也精

林元實信士に示す

萬卷の書を搜羅することは容易に、源頭に打徹して放すことは難し  
得失窮通皆造化、榮枯夢幻相干らず

風波歴盡して心平坦、歲月推移して性地安し

海外の青山山外の海、羨む君が一片の鏡心肝

七句の麗日の白濁

白雪頭に堆うして兩鬢絲なり、峰高うして煦日上ること遲遅たり

渾天の理氣運つて息むこと無く、蹈海の心眞移すべからず

鐵骨霜を凌いで志節を堅うし、老松甲を帯びて威儀を長ず

孤光閃爍として龍蛇動き、葉葉濤呼して此時を慶す

其二

【中華】 支那。  
【蓬島】 日本。

【撞】 うつなり、  
つぐなり。

【撞】 撞つゝの石の  
相撃つ聲。

【龐眉】 大なる眉  
老年。

【面門】 單に口門  
と六根門を指す場  
合との二義あり。  
【九核】 九は数の  
極、核は界。國界  
のはてをいふ。

【東西坐】 東西  
の表に對置して自  
在なるを云ふ。  
【大家】 人を尊敬  
していふ。

【鼻孔遶天】 昂ぎ  
視るの義。蓬は遙  
遠。

中華、成く慶す古來稀なりと、蓬島の古稀未だ奇とするに足らず  
百歳にして知ること無くんば翁赤子の如し、朝に開き夕に死すとも願期に勝れり  
一心淨潔にして塵刹を超越、片念圓明にして悟迷に微す  
春秋幻化の夢に涉らずんば、撞頭撞額盡く願眉

其

未だ娘胎を出でずして全體現す、降晨獨寐す半蓮の肥  
人天相を見て、成く歸敬し、龍象機を知つて俱に嘆ずるかな  
七句幻化の夢を歷盡して、重ねて萬福面門の開くことを増す  
拈花の一會斯日に逢ふ、奕葉香飄つて九域に播し

其 四

天然の一會也奇なるかな、特地に全く彰す格外の村  
眼に三千の光日月を燦かし、舌は一片の紅風雲を翻す  
東西坐斷して回互無し、今古頓に空じて去來を絶す  
此を以て人を視し家ねて自ら視す、大家共に住す菩提臺

覺悟徒に復する言

老僧太和に入つてより以來、面門高峯と其突兀を同じうし、鼻孔愈更に遶天、而も人  
情世務遺ることを待たずして忘れたり。忽然として峰頂に間睡し、颯いで西方を望めば、



長崎の曹道婆を刺す

【頭陀】 梵語、又

杜多に作る、沙門

の別稱。

【七白】 七歳。

【絶業】 死者を造る業、猶ほ戒は移

に作る。

【留連】 留りて歸

【留有】 三界二十

五有、又欲有、色

有、無色有を三有

ともいふ、有とは

三界皆有漏法なる

が故に名く。

【九淵】 極めて深

【金仙】 釋迦牟尼

佛。

【願後に願つ】 一

應表面は道理、背

面に缺陷あれば、

一鞭を加へて悟ら

しめよと。

崎中の曹道婆、千里真院に歸す

淨念餘欠無く、誠心磨すべからず

別來將に七白ならんとす、道況意ふに何

近く聞く西歸の信、人をして覺駭を動かさしむ

難彼岸に超ゆることを知る、決して座旁に植せず

我偽を説くこと是の如し、功は成る一印耶

馬淵性益、母妙仁を薦せしことを求む

人生幻化の夢、夢裡轉留連す

福大にして諸有を超え、業盈ちて九淵に墮す

昇沈幾萬劫ぞ、何れの時か悄然を得ん

孝誠をば大地を撼し、念正しければ真偽すること無し

直に入る太和の室、拜し求む萬福の前

法を乞うて慈氏を薦す、救拔急なること絃の如し

孝眞薦すること必ず克くし、定めて九淵の蓮に蓮ん

此を以て慈徳に報せば、即刻金仙に契ん

然も仁に敵無しと雖も、也須らく願後に願つべし

【眞體】 眞體の意  
即ち現身の義

【聖壽六年】 長崎  
市高野寺の聖壽  
山崇禎寺、同縣伊  
良林建の東明山興  
福寺、同市岩原町  
の分紫山福濟寺、  
之を三福寺と稱す  
【福界會て藏さず】  
全體露はるる意

尼性蓮に示す

心淨潔にして蓮の如く、性明圓にして鏡に似たり

本來の人を味さずんば、般若凡聖を超えん

死生の關を看破せば、何事會て欠利有らん

善人返照を解せば、邪を擯いて正に入る

佛祖汝を欺かず、天人或く歸慕す

道詮信士に復する書

意者に今歲初めて太和に入つて、世事未だ備はらず。則ち大いに驚たりと雖も、何事

何を必とせず。但境に入つては俗に耽ふ、安然を慶と爲す。忽ち聖壽、興福、福濟策ねて

信士等、人に著けて毀殿として祝を致す。舊に仍つて昔時の南門を突出す、一任す搭抹一

上するに。謂ゆる通身影象無し、福界會て藏さず。花を添へ彩を獻じて不可無きなり。

前者には西國の太木を舍つることを蒙り、嘆論未だ已まず。今慶祝の誠を承く、其功德

重重秘ぞ思議すべき者たらんや。蓋し此時此際、頗る物に利する者有り、爲すべくんば則

ち爲せ。切に勝縁を錯過し、徒に丈夫の名を稱すべからず。吾亦老いたり、風樹定まらず、

毎に思ふ放生を急務と爲すと、慧命と生命と永壽疆り無からんことを意欲す。乃ち本懷

に稱ふ、苟も能く吾意を體し善事を行はば、生生盡きず、放放窮り無からん。則ち國を祝

し民を福にし、恩に報い福を植うる、盡く斯に在り。布謝何如何如を盡さず。



【被蒙】 羽毛を被る義、禽獸の異稱

【草を標して利とす】 法に於て自在なるを云ふ。  
【手眼】 師家の手段眼識。

【輪地】 黄檗山は將軍より賜はりたる土地なる故にいふ。  
【方丈】 今の西方丈を指す。

【依依】 餘情の多き貌。  
【五百尊者】 五百の阿羅漢。

性堅信士に示す

繁華世を蓋ふも摠て空と成る、若個の丈夫か被蒙ならざる

花落ち花聞く夢眼の裏、香飄り香盡く幻光の中

一絲掛けず摩網を離れ、萬事干ること無く機籠を出づ

聲色堆頭看得破す、是を格外の主人翁と名く

松平土佐守に與ふる書

草を標して利と爲るは、手眼親切なるに非ずんば能はざるなり。法門を擇持するは材用弘大なるに非ずんば支へ難し。是を以て大人は大器を成じ、大機は大用を得。今此日に見るときは、則ち速かに成るの功期すべし。春間草を峯頂に蓋うて、風に吟じ月に嘯いて、自ら娛んで以て輪地の徳に酬いんと意欲するのみ。後諸居士の繼いで結屋の資を助くることを蒙つて、其に敢て虚しく費さず。則ち方丈を建つるの擧有り、又功を全うすること能はざることを慮る。正に躊躇の間、忽ち華翰に接す、良材美木有つて惠まらるるに喜ぶ、方丈の擧成るべしと、其功德莫大、無相の福、思議すべからず。謂ゆる謀らざれども而も自ら至り、介せざれとも而も自ら親しと。天然に合ふ、豈人情の能く議する所ならんや。茲に使回るに因つて、勸して此に布謝す、依依を盡さず。

王振鵬が畫く所の五百尊者の觀音に朝する圖の序

詳にするに、夫れ梵語には阿羅漢、華には殺賊と云ふ。無明の賊を殺し盡して、以て

【三昧】三摩地、  
等は三摩鉢底とい  
、等持とも正定  
とも譯す。

【仁宗皇帝】宋の  
四代の天子。

【柱下史】柱下史の  
史の別稱。

【千里の馬】  
【白樂】古の善く  
馬を相せし者。

不生不滅の事を證し、遊戯三昧、天上人間、各神靈を以てて、心に離るべきことをし。  
亦代佛勸化の一助なり。故に振鬣に公を遇うて、一字に致して、卷いて之を藏す。縦ひ  
無量の功徳有りとも、揭陽公爲さん。信たるかな、龍窟の妙用、萬五百智者に勝る者  
多きが如し。筆を以て仁宗皇帝孤雲の書を鑄ふこと良に似有るなり。然るに天子の重んず  
る所は、筆を重んずるに非ず、筆に尊者の妙趣を盡すなり。我明の太皇、天下を一  
匡するに在りて、臘氣頓に墜いて、胡人守を失ひ、北庭、川舍翁の手に著つ。一日持ち出  
して臂に懸ふ。柱史張公半筆を以て之を得たる。嗟、其妙に遇はされば驚しきこと固に是  
の如し。耽しを時孤雲の筆の賤しむに非ず、誠に五百智者を帝累すること少からざるなり。  
後遊覽の事はするに値うて、公乃ち書を寶とす。蓋しする時孤雲の名を二只とするに非ず。  
誠に筆の道を寶とするなり。南觀するに、開闢より以來、佛、聖賢、天地萬物、榮枯  
得失、事無より是の如し、豈獨り我輩者のみならんや、然らば苟ち奇蹟臨幸に困しめら  
れしも、伯樂一顧して、日に千里に馳す。大道勢利に屈せらるるも、聖王一たび遇うて天  
子之を配とすれども、以て貴しと爲す。茲に大明守を失して湖廣南嶺、貞春又亂兵の手に  
落つ、其貴賤尊卑、又何如をや。今に造んで三百餘載、東西の得失幾幾なるかを知らず、  
幸とする所の者は、水火に没せず、智者の神通の驗有るに非ざる莫きか。余扶桑に遊ん  
で意はざりき之を海外に得んとは、其神遇道合、法屬相闡し、古今揆を一にする。偶然に  
非ざるなり。一たび卷を展ぶれば神異萬狀、以て名言し難し。始めて知る、孤雲の名虚し

【開通】 總論、之  
を以てし、特筆、  
之を述ぶ。

【大光明藏】 法身  
所依の土、法性土  
とも常寂光土とも  
稱す。特に諸佛の  
真處に名づく。大光  
明とは心性、其の  
大智慧光明、百千  
の神通光明、百千  
の起る、故に之を  
藏といふ。

【即心即佛】 一と  
此頌は馬祖一と  
其法嗣大梅法常と  
に關する即心即佛  
非心非佛の論を  
顯するものなり。

【馬糞箕】 馬祖と  
稱す。糞箕、米を  
揚げ糞を去るに用  
ふる具、馬祖の手  
段能く人をして轉  
是開悟せしむる故  
に譬ふ。

【郎當】 老僧、涼  
僧に同じく老僧。

【郎當】 老僧、涼  
僧に同じく老僧。

からずして、而も尊者の道測り回きことをし、尊者に非ずんば孤雲の大名を顯すこと莫く、  
孤雲に非ずんば孰か尊者の妙道を知らんや。尊者孤雲、名實並ひ稱ふ。其貴顯尊卑、皆能  
く顯揚せんや。眞に格別の美器、法門の大寶、觀音土土同正の境に入るべく、其の大光明  
藏と非に亦永に傳へて、而も其の如き者宜なり。

病中即心即佛の因縁を顯す

即心即佛死ただ急なり、善心佛衆を下すこと遅し

大梅申す、十餘載、病中即心即佛に入つて醫すべからず

疾するに堪へたり、昔日路に迷ふ者、又個の裡に冥つて骨皮を弄す

疾に即病を滅する人無數、異殺す江蘇の馬糞箕

又二偈を占す

偶病中即心即佛を滅す、頭門覺えず、頭門に活ふ

疾に即病の即當の境の如し、空か風塵、日影、影なるを得ん

病を得て始めて知る幻化の身、豁然として、諸法皆空、本元寂

觀音行て置く病を藥と爲すを、今日聞て入つて、頭門に活なり

辛廿の十一日二十日、本師馬祖之知肉の語著する。其を拈けて云はく、此は即心即佛、其  
郭州府崇徳縣龍安寺住持、漢の正徳三十五年、龍安寺の住持なり。其の著するは、龍安立

【一儀】 ひそかに  
 【本元】 本命元  
 【大元】 大元  
 【大元】 大元  
 【大元】 大元  
 【大元】 大元  
 【大元】 大元

【大元】 大元  
 【大元】 大元  
 【大元】 大元  
 【大元】 大元  
 【大元】 大元  
 【大元】 大元

【大元】 大元  
 【大元】 大元  
 【大元】 大元  
 【大元】 大元  
 【大元】 大元  
 【大元】 大元

【大元】 大元  
 【大元】 大元  
 【大元】 大元  
 【大元】 大元  
 【大元】 大元  
 【大元】 大元

【大元】 大元  
 【大元】 大元  
 【大元】 大元  
 【大元】 大元  
 【大元】 大元  
 【大元】 大元

せず、展開するや大地をく乾る。曾て十大寶符に坐し、法三十三餘年、爲一人一月、直心直  
 行、紆曲を挽回すること良に多し。一條西嶽の巖、龍龍を收拾すること少からず。道四  
 海に満ちて、龍の如く虎の若し、大いに江河の馬老、天下の人を踏殺すること無数なる  
 に似たり。餘風直に海門の東に到つて、混牛を駕かして得て、俱に起舞臺出せしむ。金鳥  
 海門を出でて、光前耀後、今古を越ゆ。鼓を以て用て我師恩に報ゆるも、究竟未だ一棒の  
 痕に答へず、虚空忽ち墜いて涙川の如し。白浪滔天自ら吐吞し、眞生眞の面目を打濕  
 す。眞誠徹骨の蓮兒孫、諸人還つて見るや、山僧是の如く擧揚す、還つて酬恩の一句に當  
 り得るや。復云はく、「大道育して師益尊し、法輪帝に傳す一乾坤、正脈長へに流る  
 四大海、光明正結として師恩を見る。」復ち真を擧ぐ、

首七の祭文

維れ寛文元年、歲辛丑に於る十一月庚子二十日、不肖徒某、日本國山城州黃檗山萬福  
 禪寺に寓し、爲に前一日の中刻、支那國杭州府崇德縣福嚴堂上本師費老和尚の遺囑封に未  
 後の事寔一封を郵到す。焚香誦讀して、乃ち知る、本師是年三月念九日未の時を以て示寂  
 したまふことを。越えて七日、念有五日、謹んで獨香盃茗を以て奠を文室に致し、昭かに  
 告ぐるに文を以てして曰はく、於戲、我老和尚は、大明神宗正盛の世に生れ、玉融何氏の  
 瓦族に係る。早茂にして本邑鎮東の三寶巖に脱白す。年十九、便ち宗門中の事有ることを  
 知り、遍く知識に參ずること二十餘秋、宗教の二説、該通せずといふこと莫し。末後、密

制度す。

【十九歲】 初め壽昌慧經に、次いて薄山元來に參ず。

【宗義】 釋宗と義相との二説。

【密師翁】 密雲則

【大事】 佛祖の大

道を指す語なり。

【三十九歲】 七月十五日密雲の付囑を受く。

【正法眼】 眞正眼目の法門。

【申す】 免をのへ辱をすすぐ。法門を宣揚するに譬ふ。

【日喜】 まあよかつたこと喜ぶ意。

【召し回す】 懸元大師を賃隠和尙が支那へ還らしめん

と懇切に勸められたること。

【純陀】 釋迦牟尼佛に最後の供奉を捧げし治工。

【正善】 福州黃蘗の開山正幹禪師。

六祖慧能の法を得て歸り、唐の貞元年間、唐の黃蘗山

師翁に謁して、惡辣の鉗鎚を受け、乃ち了手を得て、大事已に畢り、生平を慶快す。其受用安樂、餘蘊無し。後師翁金粟に應じ、再び上つて省觀す、乃ち西堂の臘に就く。翁の黄蘗に應ずるに違んで、亦從つて嚴勤す。一日當堂正法眼藏を付囑す、嗣後蒲城の馬塞院に歸る。乙酉の冬、黃蘗に應じて、首めて爐鑪を聞く。鉗鎚惡辣、凡を歸し、寒を厭へ、一鎚の下良に本有るなり。某、不肖、首め其壽に中り、今に迄んで三十餘載、茂處にか巾雪すれども、其懷を罄し無し。然らば則ち毒に中るの深うして而して之を解くの易からざるなり。昨、計の至るを聞く、日喜すらくは天下太平なることを。昔日の寬、雪ぐを待たずして而も自ら解けり、更に歡ざる所の者は、召し回すを承くること二言、教誡諄諄、最親最切、婆心畢く憐るることを懷戀して、未だ觀面以て師資の命を快くすることを得ざりしことを、罪焉より大なるはあり。今は已に眞常の果を證して、悔も無く臭も無し、聖賢佛祖と雖も知らざる所有り、況んや區區たる某小子をや。茲に首じの期に值ひ、歡んで純陀の徳を談けて、懸前に謝じ、小しく高德に酬ゆ。伏して垂るに老和尙、大家光中、某が微言を讀みたまへ、尙ほくは其れ之を獲けたまへ。

【純陀】 釋迦牟尼佛に最後の供奉を捧げし治工。  
【正善】 福州黃蘗の開山正幹禪師。  
六祖慧能の法を得て歸り、唐の貞元年間、唐の黃蘗山師翁に謁して、惡辣の鉗鎚を受け、乃ち了手を得て、大事已に畢り、生平を慶快す。其受用安樂、餘蘊無し。後師翁金粟に應じ、再び上つて省觀す、乃ち西堂の臘に就く。翁の黄蘗に應ずるに違んで、亦從つて嚴勤す。一日當堂正法眼藏を付囑す、嗣後蒲城の馬塞院に歸る。乙酉の冬、黃蘗に應じて、首めて爐鑪を聞く。鉗鎚惡辣、凡を歸し、寒を厭へ、一鎚の下良に本有るなり。某、不肖、首め其壽に中り、今に迄んで三十餘載、茂處にか巾雪すれども、其懷を罄し無し。然らば則ち毒に中るの深うして而して之を解くの易からざるなり。昨、計の至るを聞く、日喜すらくは天下太平なることを。昔日の寬、雪ぐを待たずして而も自ら解けり、更に歡ざる所の者は、召し回すを承くること二言、教誡諄諄、最親最切、婆心畢く憐るることを懷戀して、未だ觀面以て師資の命を快くすることを得ざりしことを、罪焉より大なるはあり。今は已に眞常の果を證して、悔も無く臭も無し、聖賢佛祖と雖も知らざる所有り、況んや區區たる某小子をや。茲に首じの期に值ひ、歡んで純陀の徳を談けて、懸前に謝じ、小しく高德に酬ゆ。伏して垂るに老和尙、大家光中、某が微言を讀みたまへ、尙ほくは其れ之を獲けたまへ。

【純陀】 釋迦牟尼佛に最後の供奉を捧げし治工。  
【正善】 福州黃蘗の開山正幹禪師。  
六祖慧能の法を得て歸り、唐の貞元年間、唐の黃蘗山師翁に謁して、惡辣の鉗鎚を受け、乃ち了手を得て、大事已に畢り、生平を慶快す。其受用安樂、餘蘊無し。後師翁金粟に應じ、再び上つて省觀す、乃ち西堂の臘に就く。翁の黄蘗に應ずるに違んで、亦從つて嚴勤す。一日當堂正法眼藏を付囑す、嗣後蒲城の馬塞院に歸る。乙酉の冬、黃蘗に應じて、首めて爐鑪を聞く。鉗鎚惡辣、凡を歸し、寒を厭へ、一鎚の下良に本有るなり。某、不肖、首め其壽に中り、今に迄んで三十餘載、茂處にか巾雪すれども、其懷を罄し無し。然らば則ち毒に中るの深うして而して之を解くの易からざるなり。昨、計の至るを聞く、日喜すらくは天下太平なることを。昔日の寬、雪ぐを待たずして而も自ら解けり、更に歡ざる所の者は、召し回すを承くること二言、教誡諄諄、最親最切、婆心畢く憐るることを懷戀して、未だ觀面以て師資の命を快くすることを得ざりしことを、罪焉より大なるはあり。今は已に眞常の果を證して、悔も無く臭も無し、聖賢佛祖と雖も知らざる所有り、況んや區區たる某小子をや。茲に首じの期に值ひ、歡んで純陀の徳を談けて、懸前に謝じ、小しく高德に酬ゆ。伏して垂るに老和尙、大家光中、某が微言を讀みたまへ、尙ほくは其れ之を獲けたまへ。

【底】を結ぶ、【】の始め、【】の終

【公祖】希遷の師

【通体】方いな

【天龍】密和尙

【非非】秋序正し

【中】杯を浮べて水を度

【東渡】をいふ

【五内】五臓

【金湯】金城湯池

【堅固】堅固に轉

【捨】放つ

【舍利】正しくは説利、身

底を結し、力めてふるこさし谷秋、雨霽霜の如くなることを、門をり、二月の

別離し、杯渡して直に扶桑に、大いに公の鼎首を擔、一、手、無、無

知無、群を成し、黨を成し、殊を言す。道、尊はず、法化、法化、法化、法化

山來、自ら用ひて、焉ぞ知ら、勞を、にして行藏せば、重、重、重、重

來る、蒼蒼を、莫、江淺ければ、も拘すべく、林、林、林、林

是の如きの不、内煮もが如、傷るるが如し、水、水、水、水

かにして、豈狐狼を、奈く始終の、正眼、正眼、正眼、正眼

須を掃除せば、大、本師、嚴費、費、費、費

【】を絶つて中華に在り、餘、餘、餘、餘

花大の願王法界を超え、廣、廣、廣、廣

【】て碧漢空、葉、葉、葉、葉

【】す杖、白、白、白、白

【乳香の燈】 釋迦  
牟尼佛滅迹の前、  
一牧牛の女、陀よ  
り乳鉢の供養を受

【初度】 人の生日  
をいふ  
【玉】 玉の如く  
溫和なる意。  
【世家】 世世忠貞  
を盡し、王家に勤  
勞し、功績ある人  
【桑田】 田舎。

一片の婆心碧漢に澄む、千秋の道義煙霞に掛く」

如何なるか是れ佛、渾身の骨を突出して

一箇す乳香の燈、圓明の相満月」

如何なるか是れ法、動着すれば活潑潑

拈じ來れば多子無し、一生用ひて乏しからず」

如何なるか是れ僧、白雪兩眉に横ふ

老來思算無し、日午三更を喚ぶ」

如何なるか是れ道、日常光 浩浩

十字縱横に任す、是下甚廣をか缺く」

如何なるか是れ師、口を開けば半邊に落つ

一念未生の時、全く彰れて大千に徧す

董太宰の歌の韻を次す

高峯に寄せて目上ること宜し、風雲變き處激詩を憑む

牧童歌曰して鳴鳥を驚かし、常醒す南望の鶴一枝

天賦下麟の叟、文章世家を興す

一朝宮殿被れて、歸隱す舊草堂

【五桂】 五子の美稱。

【乾】 健なり、陽の性。

【三山】 南京の西南に在る山、大江に臨み三峰排列せり。

【從心】 七十のこと、この茂隱元大師も亦七十なり。

【趙老の茶】 趙州從諗禪師の喫茶去

【甲】 花のまじり、

【終七】 四十九日

五桂常に膝に薫じ、

人天咸く仰ぎ視し、道場嘉たり、嘆ず

大なるかな乾徳備つて、妙用廣うして無無し

一軸蓬島を讀し、三山巖霞に映す

理明かにして日月を昭し、筆老いて龍三を化す

海屋壽を添ふる日、瑤竇華を篆す

從心兩ながら互に焔し、稀有淨うして無無し

聊か東漢の水を捧げて、爛熳す趙老の茶

懷を閉く三五盞、緜履五沙に滿つ

載庭花の甲に上り、江干返業を待つ

來時歲月を同じらす、師也室めて差、二二無からん

文殊の歌

雲中に身を現じて、妙徳神の如し

文點を加へず、分外に天真なり

一巻の心經常に離れず、未だ知らず待して何人にか付せん

終七に再び祭る

維れ寛文元年歲辛丑に次る臘月晦日、不肖徒某、謹んで純陀の供を以て、再び本師費



【道迫】 光り輝く  
【灶】 俗の徳。

【香洪】 香雲なる  
【雙林】 佛人集  
の娑羅樹林、一葉  
一枯相一集をなす  
に因りて名。

【茶毘】 焚香、火  
葬の義。  
【細素】 細は僧、  
素は俗。

【伊蒲】 佛僧に供  
する香。  
【蘭、蒲】 蘭は伊  
蒲の供。

老和尙覺慧の前に笑つて、而も告げて曰はく、鴨手、我老和尙、首の黄髮の蟻蟻を開いて、  
濟北の道を中興す。釋後著前、何ぞ其れ偉なるや。末後手を無常に擲して、千劫を生斷す。  
寂然として解脫す、よつて來ること有り。世壽六十有九、法臘五十有九、開法三十年、十  
大刹を恢擴にす。師法承襲、人を接して傳へず、律を編ぎ末を開き、功勳固より極む無  
し。其正眼圓明、青天白日、開けて因達し、了に城府無し。人天に號令して、普著法  
るべし。棒頭に旨を得る者、忠愚烈烈、句下に墜落する者、逆過難難。乃至名公鉅卿、兒  
童童婦も、眼青鼻指せずといふこと無し。宗門の尊典、自道無類たり。國家たる宗統、千  
古の龜鑑、禪林の標榜、今く斯に備はれり。蓋しは節に申るを貴ぶ、之を行ふに力有り、  
情切正眞にして、高麗に遠遊す。正眞の旨を以て、自道の說に留露せば、必ずや情切し  
たまへ、中節の徳を以て、帝室の堂に行はば、節として格らざることを無し。申説は君子の  
貴之所、常は節僧の歸する所、其節を得れば則ち孟漢の尊典し。貴ぶるは其本  
を獲て超俗の方有ることを。吾師兼是て之を有す、行は以て天下を濟ふべく、言は以て萬  
世に垂るべし。我明より以來、名定中正、其節は、五教に非ずして而も誰そや。  
末後吉祥にして逝す、雙林の蒲旨を憶す。其晷の後、舍利無量にして二百餘顆あり、細素  
區分して供養す。則ち當年の天上人間に流布する者、今日に異たらざるに似たり。不肖某、  
縁に海外に遊じて、已に八歳を経たり、最後の普容を覩ること莫く、涅槃の遺蹟を聞かず、  
恨を終身に抱き、羞を含むに地無し。其に終七の期に當つて、蠟んで伊蒲の供を陳ねて、

【杖】杖を伏して、世に尙譽せよ。

【月念九日】本師在位七、即日安座に云はく、「道中興し、興未だ闌ならず、如何ぞ手を撤して世に無し、打翻す花甲春三月、紅爐鐵一、位草堂に設けて田地穩かに、名海國に垂れて杖頭安し。圓應感す天竺、動を安するを用ひずして自ら安し。

【道】道に安し、日く道へ、即今甚處の處に在る。拂を舉して二百、還つて見よや、常光瑞照して靈機發し、一會梅花又破節す。還つて雷機の者有りや、聖倒兒を憐んで醜きことを覺えず、盤に和して托出す大家看よ。群を置して別踏す春、刀裡、若個の雷機か自ら

【遂に吉服を披し、禮拜して方丈に對る。】  
本師過七金剛經を誦す

【電光泡影】無し、白恩を報ぜんことを圖つて再び展有す  
道ふことを示しむ口門に個の面無しと、金剛嚙碎して又圓満

【又法華經を誦す】  
七軸の蓮華一法華、心印を清閑して淨うして取無し  
盤に和して托出して歸徳に酬應、狼藉たる台風海涯に廻し

【辛丑の當年】  
乾坤我に負く舌猶今、我乾坤に負く苦しく自ら吟す  
七十愚の如く茂月に渾す、多生の習氣轉淨沈す

【辛丑】寛文元年  
【元大】師七十歳

【習氣】習慣性。

【録】録懸の義、  
聲音に用ひ。

【壬寅】寛文二年  
大鈞に同

【洪武】造化のこと。

【仁】天子。徳  
を以て仁を行ふ者

は王なり。徳の仁  
に合ふ者は之を王

と稱ふ。

【衡門】衡木を以  
て造りたる門。賤

者之門。

者同半爾す孤峯の頂、那ぞ更に端無く外に向つて尋ねん  
最も喜ぶ松海晩節を鏗することを、共に彈奏一曲歳寒の心

壬寅の元旦

洪鈞運轉して歳章新なり、惟心香を薫いて平仁を祝す

文室下ち開いて萬福泰く、衡門滅せず四時を春

喜ぶ車馬の靈谷に頓しきこと無きを、却つて江山の法身を繞る有り  
年去り年來る幻化の裡、日常終に天真を味さず

養善に極づること無し是れ我家、乾坤運泰し二年華を擲す  
脚跡行處にして聊か主と爲り、眼目圓明にして豈邪を逐はんや

梅南枝に霞いて正氣を含み、日東海に昇つて朝霞を擁す

微風吹き醒す案前の舞、竟の満院の花にゆくことを得たり

春日に懐を寄す

一氣の嶺風賦性を開く、翻身すれば萬葉の聲なり

江山懸隔して花に夢を憶ぐ、惟梅花に託して共に情懷たり

又、

神曲の功勳處にか寄向す、海天空廓たり奚をか負さんと欲す



【什罽】 梵語阿密  
哩多の譯語、不死  
の義。初めは蘇摩  
といひ、之を飲めば  
靈力を回復すとせ  
り。佛敎には之を  
解脫の法門に譬ふ

【刹塵】 塵刹に譬ふ  
じく無量の國土。

【彌勒】 當來成佛  
の菩薩。

【布袋上人】 名は  
契此、彌勒の分身  
と稱す。

【兜率】 具には兜  
率陀、又は瑠都  
史多。知足、又は妙  
足とも譯す、彌勒  
の淨土とする所。

【頭陀】 金色の頭  
陀、摩訶迦葉。

【明】 明の誤りな  
らば、明は漢音と  
う、冥音、虚言妄  
語の意。

【兜】 裏に同じ。

一塵の甘露、遍く刹塵に洒ぐ  
楊柳枝頭悲願切に、却つて大地をして、盡く春を回さしむ  
彌勒小兒を負うて水を過ぐる圖

新春筆を擧して、事事克するに堪へたり  
彌勒布袋上人に逢ふ、必竟何の所得か有る

昔に少小の孩兒を負うて、覺えず脚跟の打濕することを  
兜率の路頭を忘るること勿れ、即ち是れ眞正の彌勒

彌勒の圖の序

西乾の四七、眼橫鼻直、中華の二三、寢語喃喃たり。天下を惑亂して、了期有ること無  
し。正眼に看來れば、電掣空花、奚ぞ珍と爲るに足らふや。其本源を詰れば、蓋し靈山の  
老子、關頭の密ならざるに因る。聊か杖筇を露して、以て頭陀の啖破を致す。端無く虚を  
承け响を接し、訛を以て經に傳ふ。相襲うて風を成し、直に如今に至つて、人の裁斷する  
無し。深く慍くべきなり、那ぞ眞に様に依つて猫兒を書き、持し來つて余に示し、忤心を  
して惡發せしむることを致さんや。未だ呵叱糊塗一上することを免れず、累東土西方諸  
老の面門に及び、愈々態を増す。我を罪するも奚ぞ辭せん。然も是の如くなりと雖も、返  
つて憶ふ、雲門老漢、一棒に打殺して、狗子に飢はして殺せしめ、貴ぶらくは天下太平を  
圖るといふことを。彌勒を掃蕩して、恩を知るに地有り、余の逗漏、奚ぞ云爲するに足ら

んず。有相には、智を以て用ひて、類に其本を著うま、則ち圓明互爲とし、清  
 淨すること無く、樂しみ焉より大なるは莫し。以てまた、志を以て、  
 之を以て、  
 日軍制して、道風益熾んならんことを、  
 之を得るの功に孤かざるなり、

一山寧禪の語 相師の語

【一山寧】支那浙  
 江台州の人、正安  
 元年日本に渡來し  
 兼倉の建長、圓覺  
 京都の南無に居住  
 し、深く後宇多天  
 皇の歸崇を受く。

頭樞に祖承して、念、偏備を學ぶ、  
 放有り收有り、偏無く黨無し、  
 草兩様に非ず。末後端無く、  
 同心信士に示す

仁智は山水を樂しみ、祖師は未前に對ふ

に、諸の色相を空せば、心月自ら圓明

物に遇うては則ち靈鑑し、緣に隨つて有情を利す

耳夫能く木に返れば、天下汝を輕んぜず

本來二致無し、何ぞ壞し復何を成せん

之を視るに見るべからず、之に名くるに貴静く言けしや

唯餘す深造の者、歩歩無生を證す

【無生】法の本体  
 生滅の相を離れ如  
 如不動なるを云ふ

【沙界】一、海沙界にして、無量無邊無數の世界

【意】一、佛の教の意、世俗に善しと希まらるる者はい

【三教】一、儒、道、佛

【九流】一、儒、墨、法、陰陽、道、農、工、兵、醫

【陰陽流】一、陰陽の流

【流】一、律法

【墨流】一、墨子の流

【算流】一、算術の流

【餘の八】一、農、工、兵、醫、書、術、星、卜

珍重す固心す、日常須らく力行すべし  
木石の路を忘るること勿れ、沙界縦横に任す

陸文林居士に示す

道を奉じて行を知らず、奉ずるもの甚麼ぞといふことを知らず  
路に迷ひて道を見失ふ、南更に情むに堪へず

儒を學んで儒を識らず、宛原の驛何如

三教既に漸退、人をして長く嘆吁せしむ

九流去つて返らず、河津の舟か渠に逢ふことを得ん

全職東にあり、一徳世に堪たり

行を路と教とを以て、固明世に任す

天は開く太極の輪、法界一に高懸

東風吹ぬに成と、行高流に任す

東海有る好、夢に成ることを知し

一段流の流、成を求むて成を求す

善善如し悪善に、善に其源に任す

日昌居士に示す

本末一字無し、善善其源に任す

【八面盡く玲瓏】  
十方に應現すること無礙なるに譬し

【鹿說嶽然說】  
座一法皆悉く嶽然として說法すとの義

【揚眉】  
迦葉尊者の揚眉瞬目、破蘊微笑を指す

【直指】  
達磨大師の直指人心、見性成佛

【三際】  
過去、現在、未來の總稱

機に對して發歸無し、何れの處にか風を過すべき  
有語一法に非ず、無言大夢の中

有無俱に坐臥して、八面盡く玲瓏

鹿說嶽然說、心通すれば道も亦通ず

揚眉瞬目を超え、直指迷蒙を醒す

言前の路を破せば、評傳極めて功を見

格外の句を撥翻せば、木末の翁に負かず

青木民部、罷山成休信士を薦すことを求む

心心一念無く、念念二心無し

心念渾て一致、圓明古より今に到る

正固正果を該ね、終に外に向つて尋ねず

花は發く蓮池の會、香は飄る碧玉林

茲を以て靈徳を薦す、割出す罷山の金

聊が偈を述べて證と爲す、名は標す上品の簾

靈雲院信女を薦す

本寂三際を超え、返觀自他無し

蓮は開く方寸の裡、香は熟す徧婆婆



【類伽鳥】 具には伽陵頻伽鳥といふ譯して好聲鳥、美音鳥。

【慧首座】 豐元大帥の後を繼ぎ、支那黃河に在り寛文元年十一月高泉、曉堂の二法子を遣して七十の賈を致す。

【洪荒】 秩序なく大いに荒れたる意

【天釣】 造作

【九潭】 水の極めて深き淵

【功を宰せず】 功を主宰せざることを大功は宰せずといへる義

道を助く類伽の鳥、心を安ず極樂の窩  
一彈す無生の前、慶快意如何

半世の仲冬、巖山の慧首座の專使慶誕し、兼て鶴の由に歸らんことを請うて果さず、偈を作つて之を慰す

洪荒として萬里一乾坤、獨り羨む薰風の海門を越すことを  
奕葉芬芳として法座を算し、氣風たる瑞氣祇園を壯にす

無私撥轉す天釣の令、有力消し盡し鐵林の痕  
味さず九潭雲雀の種、海嶽を掀翻して結めて想を知る

自叙

老倒たる杖藜海東に跨る、忘れず名賢舊家風

尋常運用して事別無く、牛臥圓明なり方寸の中

圍遶せる人天萬福を増し、大いに手眼を聞いて虚空を廓かにす

蓬島に逍遙して奚ぞ拘碍せられん、徹見す西來功を宰せざることを

深尾庄兵衛、考了喜信士を薦せんことを求む

生死由來幻なり、昇沈す曉復昏

善い哉能く業を了することを、葉落ちて自ら根に歸す

八十六春の夢、空しく一法の存する無し

唯心常に寐せず、（一） 寐す未來の源

此を以て瞑眼を爲し、（二） 煩悩を斷ずべしん

心若開いて散亂たり、（三） 果敢是れ何事

性公尼、（四） 續有具太守清問居士を薦せんことを求む

佛日輝を流す西海の濱、（五） 杖頭指す東海を臨す

蓮生燦破して鳥何んぞ有らん、（六） 未去分明に眞眞を分つ

二十三春、（七） 孝行満つ、這句提唱して、意尖新

蓮花會上風光美なり、（八） 盡く情は清閑無事の人

御奥津田平左衛門を薦す、（九） 孝子平六求む

正氣天命を奉じ、（一〇） 代天帝職を担にす

生民俱に草に極し、（一一） 徳化風の轉するよりも、（一二） 道なり

盲手留戀すること無く、（一三） 歸途春正に肥えたり

恰も彼岸に届るに逢ふ、（一四） 微證夫れ何ぞ疑はんや

偈を説いて靈性に通じ、（一五） 願に超ゆ淨者の機

圓明萬古に互る、（一六） 一會碧蓮の池

仲春、（一七） 念五日方丈の上、（一八） 梁

葦草の拈じ來つて鋒芒を却く、（一九） 到る處爲に極す水月場

【水月場】 菩薩應  
現の道場

【啓手】 死のこと

【門不二を聞く】  
維摩經の不二法門をいふ。  
【風雅】 詩の國風と二雅とを總べていふ。

【涅槃場】 成佛を決定する所、坐禪堂。

【三思】 善思、決定、執後、心的三作用。  
【六度】 布施、淨戒、安忍、精進、禪定、般若。

微庭大櫓大用に堪へたり、果然として楯を成し又梁を成す

門不二を聞いて千差拂し、法無多を演べて量るべきこと莫し

此日太和風雅振ふ、聚山の正眼永く流長

方丈の上梁、且時陰翳す。侍僧雨り時に及んで便ならざるを恐れ、亟かに拜

梁を備さした。老僧謂く、一時至らば自然に光輝ならん。と。稍停む。果して

願あり、遂に偈を説いて之を識す

薪に丈室を聞いて鋒芒を迅にす、御筈翻じ成す選佛場

道ふこと莫れ太和手眼無しと、蓮天の一擲愈風光

小川又左衛門に示す

正信三思の本、平心自他を一にす

檀門六度を聞き、慈流波を掲げず

浩氣眞主を飾り、脩身蘊魔を驅る

百年文化の華、豈自ら蹉跎すべけんや

曾て西來の皇に講し、胸開けて太初を清たしむ

聚山翠を添へて茂く、福徳種増高し

四海玄化を誦し、功は一刹事に歸す

日常能く是の如くならば、必ずしも如何を問はず

【内開けて云】  
【外開けて云】  
【内開けて云】  
【外開けて云】

【虚極】名は了廓  
妙心寺第二百十九  
代の住持。後、廣  
島の禪林寺に住す  
隱元の長崎より攝  
津の普門寺に上り  
し時、豫め道中宿  
白等の便宜を計る  
【潦倒】時勢に適  
せざる貌。

三門三門の門を踏んで見ゆ

華嚴を讀み罷て春をたぬくならず、白雲の嶺を登り海嶺の間

真心を片知に承け、隨海重重の嶺を北に上

る。幻化の境を歴して、風に二葉を吹れて空に散して立

門開けて樓閣風光並だし、忙忙として五山を走らむむむに無はる

水野源太夫に示す

仁者は善事を興し、愚人は惡業を行ふ

黒極つて自ら身を滅す、愚人亦聞く老に到る

至若天下に獲る、古今皆可しと曰ふ

黒白兩ながら分明、善悪是れ實とする所

之を得れば用ひて窮らず、諸を識すれば分外に好し

福徳日に一新に、慧光圓にして最早たす

決定信じて疑無し、超群の種草

虚極禪徳過訪す

老納心聞く解脱の花、時時増長して福涯無し

薰風五度玄策に臨み、和氣三春紫雲に間はる

潦倒として迷はず正法眼、黄寶豈塵沙に泥すべけんや

香飄り果熟して人天慶す、便ち是れ靈山の一會家

復卓右信士に示す

【五欲】色、聲、香、味、觸。  
【茂年】盛年に同じ。

【因】船を牽く聲にして、力を出すとき「エイ」と勢をつくるを云ふ。

【明德】本然虚靈にして衆徳を具へ萬事に應ず。

人寰富の室に生る、多くは五欲の籠罩する所を被つて、丈夫の志を活埋し、一も出離するに無き、眞に聞かすべきなり。信士の如き、茂年に便ち無常の過地を當り、此道を正信して、救済として救かず。唯此精進力に依つて、頻りに佛知見を聞かんと願ふを急務と爲し、塵勞に溺れざるは、萬劫中唯一二のみ。甚だ羨む。世に得たは、但し得及して、晝夜寤、相忙を聞へること無く、忽然として因地一聲せば、佛知見現前して、外より得ず。了了として自知せん、生起以來、千魔百怪も、搖動すること能はず。始めて自證の驗を知り、夫の魔王子と手を把つて並行いて、便ち日用の事別無きことを信ずるときは、則ち虚しく此生を渡らず、否らざるときは則ち盡く是れ流俗の隊中に算し將ち去り、佛知見と奚ぞ箇に懸隔すること霄壤のみならんや。如何。

諸君禪人の叢考宗師信士を薦せんことを求む

子力めて參照する所らば、萬超而も必ず克くす

何ぞ須ひん余が言をどうて、而も後に明德を成ずることを

本來心を真徹せば、了然として空淨の色

死生夢幻の中、夢覺して便ち超格せん

一撻せば鼻天に達に、聞明にして幽室無し

【世】 佛道と譯

觸處是れ、靈通として得ざること無し

手在口日、關梅居士調す

在巖誠信し、來り調す太和の言

花柳春將に暮れんとし、江山口直に紅なり

善遊俱に、一に適其、對る處、く同風

個の中の言を喜得せば、國家路踏通せん

山は左門、高考昭心性月信士を薦せんことを表す

【高峻】 高峻。

世途見別に、一各峰嶽、直指西來路垣平

【意】 放つ意。

托出せば、平常心に、さす、推開せば、性月獨り圓明

三千の塵、御時に、六五の翻秋手を撒して行く

此日更に、後め句を求む、實然として一撈せば無生を證す

【五千の語】 老子道徳經をいふ。

大隱は無知にして、關閑に混ず、如何ぞ、憤に騎つて、兩陣を過ぎん

誰人か、一撈す五千の語、面門を玷汚して、只自ら謾す

正氣蓬鬆に、瀉波海揚らず、功成つて寧せず、徳業始めて全く彰る

本來の物を返照せば、類に求じて量るべき莫し

死生事感無く、萬慮盡く消忘す

天中の月を突出して、人を照して野野深し

仁風四野を愷し、草木俱に香を生ず

格外に玄旨を求め、玉露瓊か放光す

渾く東海の時を仰む、地久と天長と

老清張長甫に示す

飄飄頂上の峯を踏躡して、看水れば異氣と亦無し

眼開けて著けず繁花の夢、富人を嫌離す一箇の中

僧一紙を呈す。師見訖つて云はく、「未だ祖師の淵を透らず、謾に岸中の踏を行く。」僧云はく、「某甲、三十棒を喫するに分有り。」師云はく、「棒有れども道無血氣の託漢を打せず。」

僧云はく、「和尚、掌中に向つて死屍を弄すること莫くんば好し。」師、大棒に打出して云はく、「且く遣へ、是れ死か是れ活か。」

彌伽を大和尚小解忌の拈香に云はく、「吾師徳量虚空に靡かに、乾坤を包裏して功を字せず。直截人の爲にす三痛の棒、無私物を照す一輪の紅。滔滔たる法海洪流の柱、兀兀たる

宗門大雅の風。此日涅槃初忌の諱、又漁涎を添ふ栗山の中。諸人遣つて言すや、羅漢堂上春光盡き、太嶺峯前正脈通す、竹逆横に指ふ鐵樹栗、禍翻すれば鼻孔盡く相同じ。

【小解忌】 一別忌

此を以て恩に酬るに猶未だ足らず、分身刹利無窮に答ふ。便ち香禮拜す。

一室居士に示す

乾坤を籠攝するの力、大いに孔徳の容を開く

生を衛ふことは一子の如く、國を護ることは雲の従ふが若し

中天の目を捧げ出して、祿は億萬鍾を増す

英風八表に響り、一劍先鋒を定む

生死回互無く、響り蓋代の功を超ゆ

果して能く是の如く信ぜば、直截勝ること猶前ことのし

津田道茂信士に示す

前に云ふ、「一念一行ならば、成就せずといふこと無し。」と。謂ゆる之を一處に置けば、

事として辨ぜずといふこと無し。今人の工夫を作す、心境雜亂。一に歸すること能はず、

生死岸頭、摠に用不著。正に謂へり、路多ければ草を踏めども死せずと、豈能く本來の面

目を徹見せんや。又問ふ、「自今何を得てか行じ去らん。」と。老僧六はく、「一念圓明ならば

萬古に正る、涅槃生死空花に等し。苟も能く圓明の本體に徹證せば、中に於て涅槃生死の

相を算むるに、了に任可得、豈歡喜憂憤の事有らんや。故に古に云はく、「流に隨つて性

を認得すれば、喜も無く亦憂も無し。」之本體豈他人の擬議すべき者ならんや。」是を以て末

に又答へて云はく、「一念萬年終に改めず、任他滄海桑田に變ずることを。始終一貫、無

【鐘】量の名。六斛四斗。

【一念萬年】一念以て萬年を一貫するの意。



二無別、誣ぞ生死去來の遷變すべけん。謂つべし、活潑自由、聖無く魔無しと。便ち是れ月明かにして、塵外轉身の時、荷鉢鉢中脚を下すの處、否らざれば期ち流俗の漢子に算し將ち去るに非ざる無し。一念圓明と愛ぞ常に香壇のみならんや。道茂善人、諸を勉めよ、諸を勉めよ。

性海夫人、法華經を寫すに示す

圓明眞の性海、心妙眞華を盡く

手眼淨きこと鏡の如く、揮毫彩霞に映す

三乘獄して稽首し、諸子牛車を共にす

七軸心髓を照し、萬言爪牙を露す

靈山會上の客、俱に法王家を證す

張嶽泉信士に示す

生平の造就只是の如し、百歳の風光一時に過ぐ

未だ源頭の活潑演を得ず、那ぞ忙裡に嗚呼たるに堪へん

眼は聞く濃淡三更の夢、心は着す榮膺五藏の塵

珍重す老人の感かに猛省することを、聖賢の舊路蹉跎なること莫れ

圓明の語

覆空渾淪、至徳を涵容す。一氣心眞、靈然淵互回し

【牛車】 羊、鹿、牛の三車を以て三乘に譬ふ。

【法王家】 佛を敬有法王とも稱す。

【渾淪】 一氣の未だ分蘊せざる貌。

【盤古】支那開闢の首魁、天地人三分る人。  
【天淵】海の異名

【没絃琴】絃のなき琴、本分の妙音

【周回指顧】周行七步、叱咤は嘲る聲、天上天下唯我獨尊

【優鉢花】優曇鉢羅花の略、祥瑞靈異、又は希有と譯す

盤古端無く、黑白を半分す

天淵浪濺、乾坤色有り

風雲に際會せば、文章乃ち重す

三才を應用す、盤古の遺則

【川藤空衛門】示す

人生幻夢、自ら浮沈、着偶か幻中に寸陰を惜む

塵勞を爍破す淨圓、漆桶を打翻す吼雷音

出世丈夫の志を虚しめせず、豈靈山大士の心を昧さんや

一味人に涼しうして聞聲無し、格外の没絃琴を彈するに好し

佛誕日

回地一聲全體現す、周回指顧更に叱咤

人天龍象希有と嘆じ、草木林檎瑞嘉を獻す

照日忽ち臨む獅子窟、薰風乍も長ず法王家

團圓として移入す眞生の會、特地に心開く優鉢花

偶成

茅を把つて、頂を蓋へば便ち心休す、那ぞ更に弱無く強ひて出頭せん

事千差を別つも都て生圓、理一決を明かにするも獨り全く周し

機杼室に生じて風塵を翻し、寂として淺潭を照して月勾を放つ

自得安閑善習を消し、空花淺淡復何をか求めん

也曾て特地に寄哉と嘆ず、直に今に至るまで點埃を絶す

紅日自ら昇つて還自ら落ち、白雲飛び去つて又飛び来る

無明の草は長き菩提の路、無縁の花は敷く般若の臺

死生幻化の夢を醒徹すれば、千門萬戸一門に開く

牛頭波し也佛頭彰る、空字凡名量るべき疑し

草木無心にして格外に麗し、乾坤何の意を山堂に映す

自ら情む一斗南方の好きことと、嘆ずるに堪へたり兩丸太殺だにはしきことを

但信推素志を同じうすを得て、渾身の霜雪も也風光

某詞集に示す

正法眼を驚開して、徹見す太和の人

出入回互無く、去來始めに切親

仁に當つて能く譲らず、正氣自ら高く昇る

末後直らなく深く造るべし、機に臨んで轉身を貴ぶ

善哉空無なく、妙用自然の機

萬法本に收歸し、風光初事に正親し

【上方】 上方に同  
【雨光】 日月

【忍不性】 忍俊不

【勞生】 塵勞の衆生

【現成】 現前成就の意

眼識として是の如く證せば、常體正位能に

佛性即ち空の體を證するを聞いて解有り

九年摩訶迦羅を斷ず、勞生に極致して道に空に示さ

意はよりそ法界總體を轉することを、漸然として大地植林と作る

三思の徳海千吉に證し、一體の正報黄金よりも更し

是の如く其持する法界、常體正位能に二如昔

參禪の儀 上青

參禪の人は其心を證さば、心証ならば念を斷ず

觸著すれば一念を斷ず、觸著も也天眞

參禪の人は百病を實さ、一念圓明ならば常に托鉢

死生夢幻の花を塵埃して、指しおれば手に無世二個の奇特なる

參禪の人は自ら斷斷せよ、空在澗溪遺跡すること勿れ

本有多子無きことを返觀せば、徹骨の風塵忍不性

參禪の人は唯かに返覺せよ、返覺すれば現前影疎無

自家の應用自ら收藏せよ、何ぞ此の蓮臺千葉に托せん

參禪の人は難を辭すること勿れ、黄金鑄就す一心肝

紅爐百煉更色無し、徹見す丈夫自ら證せざることを

【修羅】 詳しくは阿修羅、又は阿素羅。非天と稱す、六道の一。

【十臺】 十地の菩薩、三寶は十住、十行、十回向の菩薩。

【鷓鴣】 眞實の義、眞空、眞實、眞空有の中道。

【一勺】 物の分量の少き義。

【無住】 眞空の當處住著すべからざるをいふ。

參禪の人は草草たることを休めよ、間忙勤靜、暇かに懺考せよ。

假如言行相應せずんば、一たび人身を失するも何れの處にか討ねん。

參禪の人は眞高なることを休めよ、眞高の念住れば便ち慳と成る。

恐らくは修羅窟に挿入せしめて、百劫千生、奈何せん。

參禪の人は綿密密、十聖三寶見れども及ばず。

須彌を撞倒して兩眼を開かば、死生の大事始めて歸的。

參禪の人は執著すること休めよ、執著すれば眞空一勾と成る。

小見は誠は井底の蛙の如し、驢卒にも處にだも金剛華を具んや。

參禪の人は自ら疑を決せよ、一念未だ前さず正に好し處よに。

追うて無生無住の處に到らば、龍鱗として固地書を脱がず。

淺野玄壽に示す

天然無事の雨を自得するも、穢汚な華雨に洒花を夏たふことと。

洒花濃淡三春の夢、無事天然片月の塵。

水漲り高うして上流を守ち、雲開け江海かにして無涯に徹す。

苟も能く眼底空しうして洗ふが如くなれば、不二門中共に一家。

雨窓の懷舊

劫江山を燒いて盡く愁を帯ぶ、憶づらくは妙法の心機を帯く無きことを。

空しく歸す時、點寒露の涙、并せて雲海と作し、舊着を洗はん

三瑞相を成ずること示す

古なる成三瑞相間に、持す、果して希當を成す事ぞ等閑ならん

業上の業尤、但に掃地、扶桑の雲氣正に燃

群英、清淨心を成り、正信依依として素を止んにす

但願はくは東、極樂、變轉たる社、摩訶に満つ

黄檗の自如監寺に寄せ示す

法門千古に重く、徳業植うることに無し

海外風語に聞く、吹き來つて善牛を長ぜしむ

直心祖道を衛り、正氣群邪を伏す

返照す中天の目、胸開いて點夏を絶す

始終能く若し一ならば、道果嘆ずることを成ひず

大村の轉守に示す

人我の相空じて、冤親致を一にす

解脱の門に入り、般若の智を成す

福を植え生を成つ、存亡兩ながら利す

正信に歸依し、歡喜地に超ゆ

【三瑞相】 蓋し牛  
 梅檀瑞像、三平  
 像、列祖圖の黃  
 帝山に到れるをい  
 つか。

【精斑】 まだらの  
 皮。

【鼓聲】 鼓の聲。

【監寺】 衆僧を總  
 攝する役名。

【人我の相】 我相  
 人相。

【業障】 業障より  
 免るる義。

【歡喜地】 十地の  
 位の第一位に當る  
 地位にて始めて一  
 分の中道を證す。

【世書】俗諦の義  
差別門をいふ。

【八載】建元、  
明暦元年長宗廟  
寺より、津門寺  
に到り、今寛文二  
年に至る。

【詰驢】詰字に盲  
詰と正詰の別あり  
盲詰は一向に眩し  
ていひ、正詰は抑  
下して托上す。正  
に正詰に當れり。  
【高峯】黄崖山十  
二京の第一妙高峰  
【不言の天】本分  
に譬ふ。

【一六年】五穀の  
豊熟せるをいふ。  
轉じて佛果の熟せ  
るに用ふ。

世諦空花争ふべからず、心開けば便ち是れ安身の由

【世書】俗諦の義  
差別門をいふ。

【八載】建元、  
明暦元年長宗廟  
寺より、津門寺  
に到り、今寛文二  
年に至る。

【詰驢】詰字に盲  
詰と正詰の別あり  
盲詰は一向に眩し  
ていひ、正詰は抑  
下して托上す。正  
に正詰に當れり。  
【高峯】黄崖山十  
二京の第一妙高峰  
【不言の天】本分  
に譬ふ。

去來着せ平人天の福、一擧の清風聖境を託んたす

【世書】俗諦の義  
差別門をいふ。

【一六年】五穀の  
豊熟せるをいふ。  
轉じて佛果の熟せ  
るに用ふ。

【詰驢】詰字に盲  
詰と正詰の別あり  
盲詰は一向に眩し  
ていひ、正詰は抑  
下して托上す。正  
に正詰に當れり。  
【高峯】黄崖山十  
二京の第一妙高峰  
【不言の天】本分  
に譬ふ。

【世書】俗諦の義  
差別門をいふ。

【一六年】五穀の  
豊熟せるをいふ。  
轉じて佛果の熟せ  
るに用ふ。

【詰驢】詰字に盲  
詰と正詰の別あり  
盲詰は一向に眩し  
ていひ、正詰は抑  
下して托上す。正  
に正詰に當れり。  
【高峯】黄崖山十  
二京の第一妙高峰  
【不言の天】本分  
に譬ふ。

【世書】俗諦の義  
差別門をいふ。

【一六年】五穀の  
豊熟せるをいふ。  
轉じて佛果の熟せ  
るに用ふ。

【詰驢】詰字に盲  
詰と正詰の別あり  
盲詰は一向に眩し  
ていひ、正詰は抑  
下して托上す。正  
に正詰に當れり。  
【高峯】黄崖山十  
二京の第一妙高峰  
【不言の天】本分  
に譬ふ。

【世書】俗諦の義  
差別門をいふ。

【一六年】五穀の  
豊熟せるをいふ。  
轉じて佛果の熟せ  
るに用ふ。

【世書】俗諦の義  
差別門をいふ。

【善積】 積善の倒語。

【典座】 粥齋を典る役名。

【瑜伽】 瑜伽焰口經をいふ、瑜伽は梵語、相應の義、心口意の三業一境に相應するをいふ。

【芙蓉】 蓮花。用ふる經文。

【黄梁】 暫時の夢のことなり。  
【心安】 二祖安心のこと。

【鬼母】 鬼子母神なり。

大心淨信の王、前積成きこと山の如し  
有爲の國に著せず、人天教と與に班せん  
能く清淨の眼を開かば、未來の顔を見せん  
一念圓明にして向背無し、留めて知る生死相聞らざることを

【誓新典座の瑜伽を演ずるに示す】

竊に一片の白芙蓉を戲して、聊か毫端を吐いて太虚を淨うす  
獨り幽宴の法喜に消ふのみにあらず、人天の業樂意ふに何如

【達磨の讚】

東土西天眼裏に空す、三千法界一蒲團

鉢盂口開く黄梁の夢、兀坐古今教と與に班せん

是れ神光跋闍を納るるにあらずんば、更に何れの處に於て心安を付せん

鉢を掲ぐる圖に題す

一萬の鬼子、神通盡くること有り

没量の眞人、道力窮り無し

劍戟雷轟き電掣き、機に臨んで虚空を斬るが若し

百千の伎倆を逞盡して、勝たんと欲して轉更に迷蒙

瞿曇慈面に點化し、鬼母前功を醒悟す



【四生】 胎卵濕化

卒急に三歸淨戒し、豁然として兒童に親見す

始めて信す四生皆一子なることを。舌根吐き出す妙蓮紅

愛情盡くる處 道情現す。子母相將みて樂徳を出づ

季夏の偶占

火雲影裡梧桐に通る、何れの處か 颯り來る滿院の香

是れ蓮池初めて儼然すること莫しや、人の煩惱を解いて清涼と作す

又

人間半點の塵を惹かず、小亭聊か憩ふ也天真

愧づらくは一物の山色を粧んにする無きことを、滿頭の白髮を示し得て新なり

又

心に瓊府無く行に踪無し、塵内幾か能く此儂を識らん

何れの處か雲を蔽いて午夢を醒す、一雙の白眼青松に對す

江州木俣守安信士、十六應眞の圖を送つて爲に黃葉に識す、遂に偶を占して

之を識す

新に壁岫を開いて初禪を露かにし、間雲の碧天に映することを掃盡す

十六の應眞勝侶を探り、千秋の道誼高麗を談ふ

太和の風雅東方の瑞、萬福の門庭特地に如なり

【應眞】 阿羅漢の譯語なり。

世間の法は、花の一言よく、

観音の法は、花の一言よく、

何居士重り、如に、神祇の過、當に、日時に憶うべきなり。開く是下、時に在つて、心を以て、身心を説く、是れ、清静なり。此時、居士の弟子、道清するの際、實に、説の生、專ら、海外に、修行に、海外に、修行を、することを得たり、實に至ると、惟、葛は、是下、三寶を、正信するを、根本と、根本既に固ければ、生生、業必、成らん。原、心、に、夫れ、世間の、事、水月空花、目を寓すれば、便ち休せよ、久しく、戀ふべからず。中に、居て、思ふは、丈夫の、志、を、埋めんことを、誰か、之れ、過さぞや。更に、冀、は、くは、獨、に、自己の、身心を、返照せよ。必竟、這一、點の、靈光、何れの、處にか、棧泊せん。錯つて、眞生を、過すべからず。到頭の、一著、誰人か、替り、代らん。縦ひ、金玉山の、如く、子女堂に、満るる、有れども、塵に、用、著、憤、しまさるべけんや。嗚嗚。

観音の法

大なる、我、自、在、業、願、く、休むこと無し

物、我、原、同、體、法、に、隨、ひ、又、法、を、入、す

一、枝、甘、露、深、い、で、法、界、に、空、く、周、し

業、盡、茫、茫、の、者、速、く、自、ら、默、頭、せ、し、む

法、界、人、正、の、令、女、に、示、す

【水月空花】水中の月の如く、實の花に似たり、實有實無、著すべからざるなり。

【判頭】畢竟の義、到頭の一著とは、生到來の時。

菩提心發し玉蓮開く、返響すれば原半點の埃無し  
娘生の眞面目を徹見せば、本有の個の如來に瘋かす

土土呂木剛兵衛に示す

死生夢幻の著し、何れの處にか追尋すべけん  
一念返つて燭照せば、圓明古より今に至る  
人情輕きこと片葉、道重きこと千金  
大地麻草の如し、誰か能く此心に徹せん  
善業法旨を求む、直示南針を定む

大野主税助に示す

丈夫世間を出づ、日用自ら開闢  
正氣千古に耀り、眞心八極を照す  
死生能く看破せば、逆順豈相關せんや  
一念明かなること目の如く、風光老顏を壯にす

惟禪人に示す

汝の所問を目に、眞無く又一種の疑心を生じて、却つて兩物と成り、其中を雜亂して、  
一に歸すること能はず、終日般若を持すと雖も、般若を轉ずること能はず、却つて般若に  
迷はさる。則ち起滅の感無きにあらず、愈持すれば愈相應せず、轉た念すれば轉た觀

【八還】 八方、又  
は八面、還は環。  
圍繞の意。

【一】 意に同じ

【龐公】 此語は石頭希遷に子老僧に見えてより以來日用の事作麼生と問はれて、一偈を呈したる、その初二句。

【偶書】 適合調和

【回光】 熾盛の火焔の狀後光なり鏡は其の中心にある鏡

【十界】 六道四聖の總稱

【居諸】 日月をいふ語の助衛

切ならず。正に隱隱淨洗の中に在つて、一刀兩斷すること能はず、車に來つて示す諸ふ者宜なるかな。然れども老僧に頭上に頭を安んじ、節外に節を生じ、入をして顛倒休むこと無からしめざるなり。但願はくは汝一信永信、一持永持、一決永決、一斷永斷、第二念無く、第三念無く、萬年一念、一念萬年ならば、世ぞ盡裡に繫を走らむることを怕れん。龐公の謂ゆる日用事別無し、唯吾自ら偶諧すと。傳大士の云はく、二夜佛を抱いて眠り、朝朝還共に起くこと。汝能く信得及し、悟得徹し、提得起し、放得下せば、要且縮縮密密にして、斧劈けども開かず、刀研れども入らず、安んぞ日用相應せざる者有らんや。

觀音回光の鏡銘

慈悲行願の鏡、刹刹常に清淨

衆生の心に照徹せば、本末明かなること鏡の如し

眼空點埃を絶し、觀眞實性を显る

十界一同通、遠觀せば說法し盡んぬ

黄檗の昔舊龐公の像贊

彼耆宿を相るに、居諸黄檗

人に頭地を出して、唯唯として一默す

四代の知識を轉請して、風清く月白きことを惹き得たり

兒孫烈烈轟轟として、蓬萊の片舌を托出す

【自括賊】 白鳥の  
影なり。

海は深きとして贊すれども窮らず、看來れば直にれ  
張振替等、田圃妙心信女を懸せんこと

重員を首を催ひ、報を禮す

李位を薦め、紅光を點す

愛恨清して淨潔す、暇を全く彰る

三十六年の夢、回り看れば一咲場

衆徒一切に、衆徳復宣揚す

高泉孫に竭き、妙の月片香し

以て高泉の路を資く、直下に使ち超方す

高泉孫に示す

高泉孫に示す

海は深き希に、縦横踏踏多し

海は深きを感へ、親面直何にか居る

知る子は超群の萃、故く馬駒を扶く

正法を擴充して、縁に黒區を味さす

片津の月、圓明徧在の珠

任從濱海は歌すと、萬古自ら如如たり

業高僧手を添へ、蓬萊肩を寄る

【馬駒】 ちんぽん  
とさきうま。役に  
立ぬ意。

【天馬駒】 駿快不  
馴。

【中元】 七月十五日

【勇勢】 力を盡す

【黄天狼子闘】 此の思の至大にして天の蒼くすることなきを謂ふ

【雲脚】 清水高岐守忠朝の諱、忠跡は若狭小濱の城

【曲桂】 予孫の發見せるを指す

【伽陀】 梵語、偈して偈又頌と譯す

微笑の旨に孤かす、祖席永く 炭 無し

中元の嘆

落葉の空林本根に歸す、忽ち聞いて特地に深恩を懐ふ  
江山限り有り情限り無し、草木存すと雖も誰も亦存す

劬勞に報ゆる莫く空しく自ら嘆ず、號天極り罔し誰に向つてか言はん  
事か平偽を宣べて悲槍を食む、字字淋漓として血痕を帯ぶ

空印老居士を輓す

百歲朝暮の如く、浮雲一瞬日

人生古來稀なり、面も況んや又六を加ふるをや

蘭柱庭中に満ち、蘭詩座ながら但に見る

歸道一に坦平、行處拘束無し

生きては國に珍とせられ、去つては幽冥の幅と爲る

法蔵厥心を盡し、慧炬唯吾獨りす

再び語言を對せんと欲す、云に歸るこも胡ぞ太た遠かなる

世事夢中の花、道情空谷に傳ふ

何れの處か擲落の聲、悲凄林麓を動かす

聊が以て伽陀を詠く、唯君是れ視する所

【於穆】於は歎辭  
穆は深遠。

【水を飲んで源を  
知る】一を聞いて  
十を知るの譬なり

蓮は開く千百葉、葉葉車輪の如し

上品化生に任す、俯仰真金の屋

師友陶淨に滿つ、於君唯りトすべし

手を扱つて歸去來、誰か於穆を嘆ぜざる

又爲に拈香する偈

虚空を印破して背面無し、翻身すれば鼻孔念遠天

眞香一罇君が福を資く、特地に心開く九品蓮

自證禪人に示す

歸家壽直の路、擬議せば三千を隔つ

一氣回互無し、行自ら惘然

丈夫の志決烈、豈更に鞭を加へざらんや

生死輪回の事、夢聞亦憐むべし

中途如し踏野を、田を求むることは驢年を待て

大坂善齋、大塚ト齋信士を薦せんことを求む

伽陀義味無し、水を飲んで自心源を知る

草木春に逢うて發し、禽魚氣を得て原む

孝養業果を回し、道重乾坤に震ふ





【日午正に三更】  
日中を以て夜半と  
漫漫たる本分の境  
界。  
【開士】 菩薩の譯  
名。諸の衆生を開  
導する上夫の義。  
【未發の中】 性の  
本源なり。

【淨信】 清淨の信  
心。

頭を擧げて天眸に看る、日午正に三更

松平民部少輔に示す

開士羣世を離し、眞人有空を破す

物が三寸の舌を舒べて、太和の風を轉す

志は負ふ青雲の外、心は閑なり未發の中

丈夫頷らく返却すべし、碧雲をして籠ましむること莫れ

精庭道茂信士を薦す

歸快淨信の士、退隱已に多年

三途の雲を離脱して、便ち九品蓮に登る

死生皆夢身、出沒天然に任す

御陀の旨を聆さずんば、風光大千に徧し

桂の雨に遇ふを賞す

轟轟たる雷雨秋花を破る、桂子紛紛として坐は落香

悔のらくは間に花下の路を行くこと莫きことを、一身淨潔也清涼

自ら愧づ無常の老倒翁、飄飄として一輩西東に任す

杖頭拵ひ出す秋破の眼、覺えず毫端祖風を糲すことを

一長僧三持、劍峯山、東山を長つて、寂しく、  
野舎に如く、  
又、

聞、  
酒食分明、  
又、

金剛を嚼碎してより後、一字鳥ぞ齒牙に轉くべけんや  
八面の鑽錐縫罽無し、機に臨んで撒き出して、  
相月の漫興

【相月】よき月か

海外間に瀟散、何ぞ期せん此郷に到らんとは  
忽ち聞く天際の時ゆることを、  
玉露秋鏡を輝け、人の肝膽を照して涼し  
少時多く孟浪、老大愈清狂

髮白うして脩途邁く、眼青うして看世忙し  
等慈解脱の路、般若是れ歸航  
念を擧すれば三際を超え、相を開けば十方に遍かたり

【等慈】平等の無  
縁の慈し

縁に随つて片断に任す、何れの處か音響にもあらん

阿彌陀佛の天増福を願ひ

無量の大徳大徳を讃ひ、南無阿彌陀佛を誦さん  
願ひ得たり太和瑞子の氣、頂天立地自ら心と成す

葉舟人に託す

正信の歸依點塵を絶す、時時返超す本來の身  
鐘殿角に鳴る山中の主、月峰頭に吐く格外の寶

百歳の光陰能く幾か有らんや、一生の幻夢總に眞に非ず  
這回了徹して他事無し、負かす拈花會上の人

華 鱖

君が家海中に住し、性命水府に鐘る

木を以て其形に肖、高懸奚ぞ大だ楚なる

衆僧齋を喫せんことを要せば、先づ來つて君が肚を蔽く

君が肚虚空に等し、誰人か君が苦を憐まん

苦中响ゆること雷の如く、知音惟佛祖

佛祖聖賢の心、愛命今古に同じ

相資く未發の前、大なる哉小補に非ず

【華 鱖】 木を以て其の形を肖し、高懸たり、奚ぞ大だ楚なる、今衆僧齋にて喫するも、君の腹を蔽ふなり

【釋】空門の一字  
義なり、徧界皆不

談に問ふ無明の火、一消して何れの所にか歸す

歸する處知るべからず、聞く時難か佐を爲す

根塵所依無し、空出す門の言

釋尊般若の機、色色蓮華の上

是を眞佛陀と言く、諸難に堪當す

布袋和尚

獨坐の布袋、一杖天を撐ふ

眼四海を空じ、身心悄然たり

咲ふに堪へたり忙忙たる狂徒の習、幾人か未生の前に驚愕す

山を負ひ海に歸る風漢の圖

山を負ひ海を踏む、當に買賣を行ふべし

天界に踏徧して、自由自在

三千の刹境毫端に現じ、一點の靈光法界に周し

達磨の梁王に面する圖

迢迢として萬里より來り、對面如何が不識

人天の功德に食着して、氣に不識の質を忘る

果して能く相を離れ名を離るるも、妨げず端端的たることを

【大眉】諱は性善字は良者支那福建泉州府晉江縣の人、隱元に從ひて東渡、晩に黃檗の東偏の東林庵に居す、延寶元年十月十八日寂す、年五十八。

【晡】申の刻。

【端倪】本分の端倪なるべし。

大眉従の芋を結ぶに示す

江山踏遍して自ら閒忙、偶瓢居を結ぶ古樹の傍

手ること莫れ峰高うして日の出づること晚きを、人を焔す頂上愈風光

又

日用の都操那畔邊ぞ、平波の風雄愚賢を一にす

鳥啼き花咲うて機鋒俊に、閒居を贏ち得て孰と共にか傳へん

仲秋念八の晴間、明堂の外を歩す、忽ち天際の流輝、燦爛として紫繩二十四

道有り、北極を貫く、竊に吉氣の應兆と爲す。聖主賢臣の民に臨むに徳を以

てする、所感の露に垂る莫し。遂に偈を述べて之を識す

卓朔たるは黎暎眺を聞に、青天の靈彩禪祥に映す

雲霧深に收まつて千拜静かに、桂寒巖に落ちて萬壑香し

念四の紫繩北極を貫き、一林の晴氣文章を煥かにす

聖人の御世民徳を指し、廣く蒼生に被りて量るべきこと莫し

二十九日空印居士終七日期、衆禪誦經修懺、以て冥福を資く。仍つて偈を述

べて以て薦す

娘未生の時一片の地、來來去去百千番

今朝直指す無生の路、端倪を徹見せば心自ら安し

【龍鐘】鐘は光る  
照破と同じ。  
老衰。

【龍鐘】鐘は光る  
照破と同じ。  
老衰。

【龍鐘】鐘は光る  
照破と同じ。  
老衰。

【善財】觀音を  
禮す。元父を尋  
ねて南無の補陀山  
に到り、發心せし  
をいふ。

珍重す。龍鐘の空の鐘、行  
知音萬里空しく、月高半に上る玉一  
大千幻化の法を、昔人等間の右を、  
自ら佛の徳海より、龍鐘の此たしきことを、  
玉峰居士に贈る

玉峰居士に贈る

空落落として又龍鐘、何物を、  
聞土忘れず弘願の力、丈夫自ら  
願聖行つて三昧を、眼耳鼻にして十方を、  
計ること、牛井瑞雲祖和氣清庵片人

大坊は字せず久しうして、  
徳乾坤に被つて千古に重く、  
眞に靈鷲無生の果を超えて、  
七百年來法眼の裡、

自讃 越州の信童者

少小頻りに黄髮に參じ、  
多生の意氣を味さず、  
圓明一片の眞心

朝昏瞻禮他事無し、魔障頓に消して古今に徹す

九日詣禪と同じく高峯の絶頂に登る

加收つて嶽面獨り晴明、磊落として相將るて頂上に行く

環遶せる千山朝に翠を拱き、高居せる一塵坦然として一年なり

杖は累目を挑げて心膽を昭し、塵は微風を養して情を洗ふ

未だ敢て浪りに冷崖の匂を弾ぜず、恐らくは天外をして人の驚くを得しめん

又

風光の碧天に映ずる有るを喜び、軽く老倒を扶けて峰巒に上る

胸開いて裾草掃きこと洗ふが如し、黄花を菊し得、眼前に供す

重陽の後二日清水寺に遊んで大士を禮す

大士清水に現じ、湛然として妙神に入る

等遊音海を濟し、弘願迷津を度す

物を念ふに塵に、いと感るに出人無し

蒼面目を掩ひ、木來身を徹見す

共に歸途の境を證し、淨くして牛羂の塵無し

密に竄ふ大意の徒、洪崖來ふべきことを莫し

我來つて脚履を探る、瑞雪天眞に踏す

【累目】 明かなる目。

【清水寺】 京都の清水寺。

道は雲山中の主、雲は彼二格外の賓  
中虚萬物を舍る、虚空日に照らすなり  
正に清秋の景に似ひ、懐閑けて三情盡し  
法門互に帥を表し、老能仁に負かず

成就院主に贈る

扶桑の境に歴徧して、何ぞ期せん此翁に逢はふとは  
行藏皆樂地、顯密盡く圓通

淨きことは清秋の月に似、渾て二舌の風を度す  
未だ常に片語を吐かず、三昧其中に在り

天運今猶、卓爾復東

人情流水に付し、道義虚空に廓なり

特に太和の室を造り、殷殷として意倍隆なり

雲を推して老叟を迎へ、榻を下つて梵宮を淨うす

山僧の供を竭盡し、懐を聞いて已躬を潔くす

百年幻化の夢、唯此全功を下す

又別句

羨む君が好手壽に勾を抛つことを、搭着す無依の鐵鼻牛

【法華】 太閤

【法華】 清水寺  
白雲一掃

【法華】 東表と書



【獨本】諱は性源  
 安房の人、隠元の  
 法嗣、兼用、自肯  
 庵を建て、又海福  
 寺を開き、相模に  
 淨業寺を創す。元  
 徳二年八月十一日  
 没す。年七十二。  
 【藏主】經藏を司  
 する所の役名。  
 【年号】天保六年  
 年号に、河内に入

清水池邊聊か飲噉し、白雲嶺上 志に優游す

滿林の秀氣千年の瑞、大地の霜花一色の秋

芒鞋を擧斷して歸り去るや、了に踪跡の峰頭に落つら無し

徳風禪者の里に回るに示す

徳風昔草を偃し、草偃して風光好し

并せて太和の春と作す、世間何れの處にか討ねん

歸去騷騷に任す、再來須らく急早たるべし

九上と三下と、大事功も保つべし

松平對馬守に示す

正氣千群の象、回天の語漸く滂ふ

丹心日月を懸け、赤膽空虛に響く

觀破す浮雲の夢、圓明なり徹夜の珠

滄海の望に孤かず、仁者樂處ふることに無し

獨本藏主の白肯庵に寫るに示す

來來去去して忙を辭せず、瀑聲を踏斷して流遠長

始めて徹す間忙二致無きことを、脚面脚底盡く風光

萬壬寅に次る菊月十九日、本寺觀音開光に云はく、一身宇宙に廻り、遺腹周津に廓な



生死海を打瀧し、夜明珠を烟徹す  
三界輪回息み、一靈太虚を覺す  
儼然として彼岸に登る、極樂意何如

睡起の戯筆

老來暮が小神通を展べて、夜は家山に返り晝は東に在り

夢筆花開いて新に濃紅たり、一國の桃李衛春風

萬里相公參する次で、問ふは是の如く來る者は是れ什麼人ぞ、師云はく、舊面目を露聞

し、本來人を徹見せよ、進んで云はく、如何が徹見し去らん、師云はく、日用の事別無

し、相公一便ち禮拜す。師云はく、會し了つて禮拜するか、會せずして禮拜するか、進ん

で云はく、某甲道ふべき無し。師云はく、秋花點點新なり、

河村十右衛門、妣梅岸鶴林を薦せんことを求む

孝子原本を追ひ、貞臣帝京を起す

英傑の事に孤かす、豈慈恩の情に負かんや

家國雨ながら全美、功勛一に大成す

返觀猶未だ足らず、直に法王城に造る

俯を乞うて靈福を薦す。蓮花舌上に生ず

頓に三界の業を消し、淨土坦然として平なり

【法王城】 佛土。

【夢筆花開いて】  
和曆年十七、明經  
に擧げられて、京  
師に至る、忽ち人  
五色の筆一束を以  
てす云云に基づく  
なり。  
【萬里相公】 萬里  
小將兼房將也。

大道方圓無く、心に隨つて善惡を得  
山林窟窟、極樂宮宮

高僧士に示す

久しく事實を尋ねて、（中略）に在り、（中略）出でて雷鳴に見るや、（中略）  
觀摩室を、（中略）にして、（中略）海を平にして、（中略）波をかく  
一舟の霜月晴れて、（中略）に好む、（中略）江山、（中略）に趣く  
飽くまで家珍を載せて、（中略）去るや、（中略）高き、（中略）に登る、（中略）如何

西村久左衛門、考成玄、覺淨主を薦せんことを求む

法を請ふは敬を主と爲す、親に事ふるは孝を生と爲す  
孝敬兩ながら俱に足る、（中略）眞の福田と名く  
茲を以て父母を薦むば、（中略）特地に、自ら玄を成す  
再び偈を乞うて、（中略）爲す、又、（中略）に鞭を加ふ  
頗に清淨界に超えて、（中略）眞に寶花蓮に坐す

惟住孫に示す

惟れ住に所住無く、惟れ行に所行無し  
兩頭俱に踢脱して、（中略）日午正に三更  
世を擧つて、（中略）夢の如し、（中略）幾か能く此情を醒す

【雷陽】 分明の鏡

【清淨界】 佛淨土

【踢脱】 踢は急遽  
かゝる境、急遽に解  
脱するの意

【形山の寶】 色身  
形骸の中に法身の  
至寶の存在するを  
いふ。

【華嚴經】 華嚴の經  
法華の經と云ふ  
る也。

霜花道骨を堅うし、蘿月眉を啓いて明かなり、  
但情を形山の寶、豈世上の榮を貪らざるや、  
蓬萊無錫を寄せ、和氣平生を暢ぶ、  
聊か安閑の法を得て、頤に幻化の聲を消す、  
禪慧果して閻滿、乾坤掌上に平なり、  
言はずして天下信じ、沙界縱横に任じ、  
惟一侍者、華嚴經を血書す、  
千差の響を生斷して、儼然として一に用平、  
圓眼寶を踏む、岩更に虚聲を聴かんや、  
萬法皆幻の如し、一室亦空して名く、  
無名は天地の始め、無業自ら現成、  
現成の物を思得せば、人また法を無んせず、  
梵天同一體、行れの處が情に開すべき、  
華嚴二界の妙、雲亡一國に如く、  
心空間無なく、念入自心無礙、  
海直經海を成つて、華嚴界上に行く、

歌

【寶誌】支那金陵の人、羅の天竺十三年に没す、壽凡九十七

【平旦】寅の刻の異名

【日出卯】今午の六時頃

【食時辰】今午の八時頃

【禺中巳】今午の十時頃

【禺中巳】今午の十時頃

十一時辰の歌、寶誌公の語を用ふ

平旦寅、請出言人の清淨身

心境兩忘ら思じて塵垢無し、拈じまれば手に信せて是れ家珍

相に着せず迷津を啓く、觸處分明是れ塵にあらす

古に互り今に彌りて活潑潑、由來假に非ず亦眞に非ず

日出卯、一瞬圓明巧巧に非ず

爍破す關浮の八萬州、佛魔頓に盡く誰か來つて攪す

赤條條了せざる無し、直者は直く揚音は揚なり

法法頭頭自性空、原我相無し奚ぞ愛着せん

食時辰、當堂理前す妙法身

日用尋常の淡粥飯、何ぞ須ひん更に菓子を著くるを要することを

平等の見疎薄没す。切に忌む從前執人に着することを

一たび海頭を踏まれば千萬里、招回未だ免れず幾埃塵

禺中巳、亘赫圓明にして至らざる無し

【日南午】 今の午

【影山の一火】 影山の一火

【西來】 西來

【日映】 今の午

【西來】 西來

【古】 古

【分】 分

【今】 今の午

【今】 今の午

【今】 今の午

【今】 今の午

【今】 今の午

【今】 今の午

【今】 今の午

【今】 今の午

【今】 今の午

【今】 今の午

明鏡す沙を穿ふ波草の人、顔に紅暈を染じて女顔を隠る  
死生を了して一字無し、明明に觀露す是非也  
我無く人無く其来無し、大千沙界皆流と爲す  
日南午、突出す影山の一火也

智者は山に到つて雲を得て歸る、童蒙は山を穿て歸るす  
迷ふは自ら迷ひ居るは自ら居る、等閑に空を穿て歸る  
等閑に踏断す兩頭を斷、生死其一如に歸す  
日映未、虚空を穿て歸る

舌頭を咬破して鏡を穿て歸せず、縦横舒卷を穿て歸す  
口に信せて談す何の事ぞ、人間天上吾止に非ず  
縁に隨つて偶寄る青溪頭、錦を釣り得て得心に非ず  
時中、本来無物貧乏知らず  
山幾幅か暫く知已、影濃燈假眞

外に望むこと勿し自ら穿るを穿る、頭を穿て歸すに堪へたり  
咳一響か聞かず、何れを穿て歸すは何れの事か同人なるさる一  
日入酒、空流りて日長く  
朝を穿て歸るは古今を穿る、詎ぞ聞かん虚しく青山の酒を設くることを

【黄氏戌】 今の午  
後八時頃

【關山】 鳥の鳴く  
聲。

【波羅蜜】 到彼岸  
【人心支】 今の午  
後十時頃

【破砂盆】 砂を盛  
りたる破れし盆の  
意。 痛く、雑作な  
る義。  
【夜半子】 今の午  
後十二時頃。

【鷓鴣甚】 今の午  
後二時頃

未だ放蕩の事聞えず、こゝろ煩ひん、音もせば従前奚の育る所ぞ  
突出す、木はけし、庭は、無花果の園とて、

【黄昏】 一燈に昏す

坐臥空しく、所無し、身全無し、せば覺えず、直ぐ見たり

鳥關關、鳥の、一部無き、鳥の漆ぞ

動着す、しは、心も大に、心づ、未だ萌まて、一の【波羅蜜】

人定亥、夢に、夢中に、歸つて、疲怠す

名勝に、耽着して、名勝長し、無思の主翁、耳くにか在る

破砂盆誰か、替り代る、真摺、西施胡ぞ、墨、

返船すれば、偶の中無、空花影を露して、に傳す

夜半子、一燈無し、持て、死有らん

鴨す、に堪へ、夢中、夢を説く人、何ぞ言て、嘆着せん、言の字

女中の、玄格、非を去、し是を、翻、

暗闇、来、互に、真空、實相、相、あるに、堪へんや

【鷓鴣甚】 一燈時、破つて、に悠久

空色、堆頭、片、露す、並、せば、特地に、鳥、何か、有る

頭を、泣、し手、を、伸、出す、把、住、放、行、還、つ、老、朽





【拾遺】 ふはふはの義。

【五濁】 劫濁、見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁の五。【古稀の歌】 普照國師年譜寛文元年十一月の條に「是日合山の雨序齋を替んで慶を申ぶ、師古稀の歌を作つて以て答ふ。」

心にあらずに非ず、幾活機横空に入る。道順問前にして雲礙舞し、一齊四上高年の春律に依無く言事なり、抖擻す天下正宗の珍。踞附いて客等に於て高下無し、開導す地獄たる徹骨の真非常の法と準、爲す、脱落たる風光陳ぶべからず。亂交場中風口と爲る、任、教四自來賓することを

無用の歌

無用の人は大憤に任す、時に隨つて居し也時に隨つて舞。幾度か雪前假骨を鏝ち、一葉の眞月一帝新なり。幻作の景は与つて眞に非ず、造物無うして妙神に入る。娼婦夢中に隻眼を開き、百草叢中に身を活さず。飯に没却す本来の人、出沒奚ぞ行て時を惹かん。

五濁劫中非類切に、千華臺上能仁に於て、

喜ぶべき無し何の唄か育らん、微笑す本来無我的人。一天淨潔にして空有を起え、徧照の眞光假眞を融す。

古稀の歌

壽に着せず祿を干めず、太和の風在因時是る。

【五老】 世傳の五老、今之を言にせす。

【六十六】 日本國

【寄川】 金剛經の壽者池。法身は是と壽者池の如く湛れたり。

【丈室】 維摩居士の方丈の室に例へて言ふ。

無爲無事天真を樂しみ、甘つて清閑を守つて惟我獨りす

山は自ら青く水は白ら緑に、萬象森羅同一幅

條忽として天は開く五老の圃、蓬萊の峯に嶽下喃喃の祝

數樹の梅叢の竹、一味清幽巖谷に供す

重重たる瑞氣東西を流り、片草たる白雲夜共に宿す

心の欲するに従つて何東無く、時清く道泰にして一陽復る

正氣瀾漫たり四洲、果熟し香飄る六十六

松は蒼蒼たり花は簇簇たり。道は存す林下數世の屋

窮通壽夭自ら然、本來眞の面目を味さず

舊時の跡は已に覆ることを、人はして萬世於て賦せしむ

頼に寄川を空して思議せず、南北東西同一穀

丈室落成の歌

安樂の節太師の天、正に是れ人間の大福也

金剛の眞種子を寶持せば、花開を疑はば三千に廻し

草芥を眞り法鏡を開く、丈室の壽者池自然なる今

不二門中萬象を照し、法界を救済して廣きこと無邊

師子は吼る萬松の嶺、異音同音に聖賢を觀す

【無量壽菩薩】  
來は 如来の化身なり  
公。

【目連】  
目連は 神通第一の仙人なり  
公。

【宗四】  
宗四は 宗室の四なり  
公。

【梅樹】  
梅樹は 梅の樹なり  
公。

【香】  
香は 香の氣なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

道々時豊にして、國瑞く、仁風行澤林泉に動、  
般言を演じ金仙を、し、一念圓明にして後先に響く

無常の眞人赤洒洒、門頭戸底風顛を禦く

主の主玄中の玄、由來千聖相傳はず

一の因地自ら端的、瓊樓百寶のを超出し

名前に非卡香を離る。毘耶誌に於て宣ぶること能はず

請ふ君試みに感善契に問へ、必竟如何が一言を泚せん

口を開かば恐、三十林ならしめん、遠巡として首を回さば眞に鞭を打へん

聲を收め氣を鎮ふと元とに歸し、把住すれば大千椀を同らうして飄る

是の如きの擲、流傳の勳業萬斯年

牛頭摩訶羅相の歌 并に序

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

【佛】  
佛は 如来の化身なり  
公。

木なり。  
浪等應と贊す。明  
の來し、貞保元年に  
著來し、長壽樂福  
寺に住す。書を善  
くす。寛文八年七  
月十四日歿す。年  
六十七。

三平の瑞應  
の源山三平山にそ  
の閑山書の惠禪  
禪その地に瑞樹を  
植り、九年後年  
して枯る。清順治  
六年隱元の弟直  
信その瑞字を重興  
のときこ。樹を伐  
り、瑞樹三平餘像を  
測す。隱元東渡の  
儀、瑞樹の瑞字、此  
瑞像を製し、隱  
元その像を作る。  
瑞樹は臥合の瑞の  
瑞に、その瑞を題  
すと別號同。  
【也太奇也太奇】  
【とめづらしき義】  
具には、る直別に  
用ひたる。  
【五竹山】  
の景に五竹せりと

送つて老僧に上り、隨身佛せしむ。威、東西相去ること數萬里、奚の縁の感ずる所か、此  
瑞應を得たる。加ふるに妙手、莊嚴を以てし、相好善を盡し美を盡す。宋の三平の瑞樹、同波  
の相樹と、並びに三瑞應の言を作す。會然、永く萬福の家寶と爲す。唐はくは百千年後  
一樹一葉、福慧雨ながら全し、其功徳甚く思議すべき者ならんや、邊に瑞樹の歌を作り、以て  
之を讃す。

也太奇也太奇、天然の三瑞斯時に會す

東西相去すに幾萬里ぞ、威感極終里二べからず

牛血及し佛面照く、頓に煩惱を空し即ち菩提

一樹一葉三重を成す、正信に歸依す其は悟迷に徹す

老いて何の字ぞ斯期に逢は、白頭光輝す五須彌

當陽に輝出す人天の眼、算めて大和權者の基と作す

非常の相過ぎの儀、今朝現する不思議一匡し

祥海國に徴して千古を頌し、信當に候じて自ら欺かず

見無見にして狐疑を絶す、彌用多く轉る若個か知る

西渡東昇二費無く、行藏兼合更に誰にか由る

作無作爲無爲、名跡を掃除して眞理を露す

頓に黄葉の多子無きことを明めば、獨り千差也宜しきに合ふ

の義なり。

【賦逸】 隱逸高逸の義なり。

【無節】 竹の名、三律、即通者、又は柱冠せし人の門庭

羽に對する歌

人老に垂んとして天復秋、  
 白首閑に行いて晚節を歌ひ、  
 秋光好し去つて留め難きも、  
 細に看て却つて霜に傲るの志有り、  
 隱逸の最高境を尙び、  
 縦ひ兩輪をして高遠に超さしむるも、  
 名謂を置れて却つて憂無く、  
 夢境の樂事盡く其林す  
 箇個の中の清意味を得ば、  
 更に此外に於て復訂を求めん

竹を頌うる歌

其志を堅うし其心を虚しうす、  
 竹節の勇氣天澤を承け、  
 微風如雅の音を動かし、  
 三律友は楊柳の眉、  
 節霜を凌いで千古に勁く、  
 黄檗和尚太和尚終

昭和四年四月一日印刷  
昭和四年四月十日發行

新編 國譯大藏經 第六卷

宗典部

平 井 龍 製

編纂者

東京市下谷區上野櫻木町五〇番地  
三井物産株式會社編輯部  
代表者 三井 龍 史

發行者

東京市下谷區上野櫻木町五〇番地  
三井物産株式會社  
代表者 坂井 龍 一 郎

印刷者

東京市神田區表神保町十番地  
同 興 會  
代表者 井波 慎 三 郎

發行所

東京市下谷區  
上野櫻木町五〇番地

株式會社

東方書院

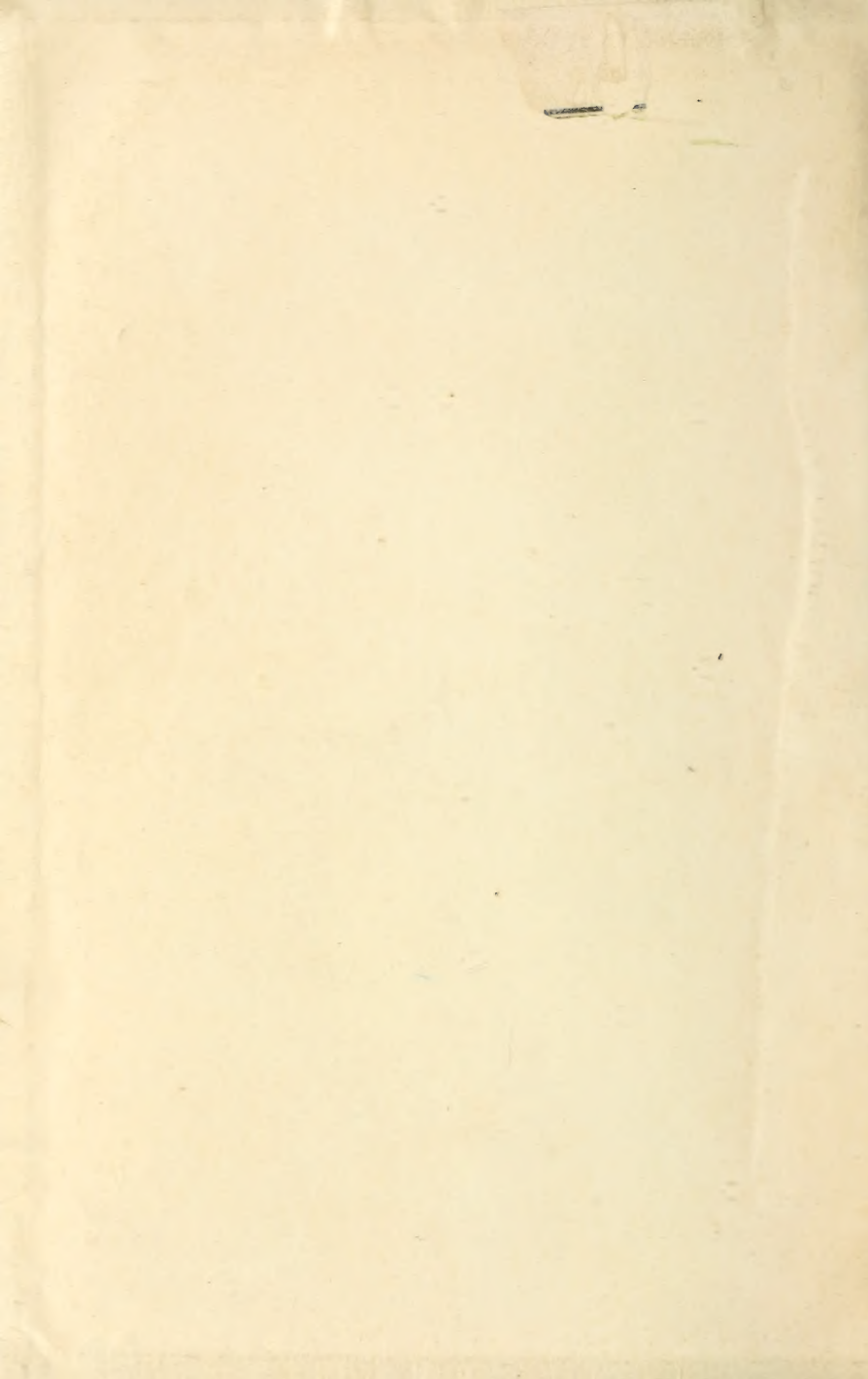
電話下谷四二五九  
東京六六一一



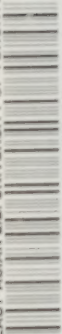








EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03023 3241